黙阿弥全集

第十一巻

黙阿弥全集

第十一巻

解説

現存せる作者の寫眞像中最も古いものである。チョンマゲをいただいてゐる寫眞はこれだけである。或は髷を落す記念の撮影だつたかも知れない。膝に持つてゐる正本の裏表紙を見せて、自然と年月を明らかに示してゐる所も無駄がないといへばいへる。「明治八年八月、」だの「作者の河竹新七」だのといふ字は明白に讀み分けられる。これによつて見ると、明治八年卽ち六十歳の夏の面影であることが證據だてられてゐる。

豊原国周筆

河竹糸女補修

河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集　第十一卷

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集 第十一卷目次

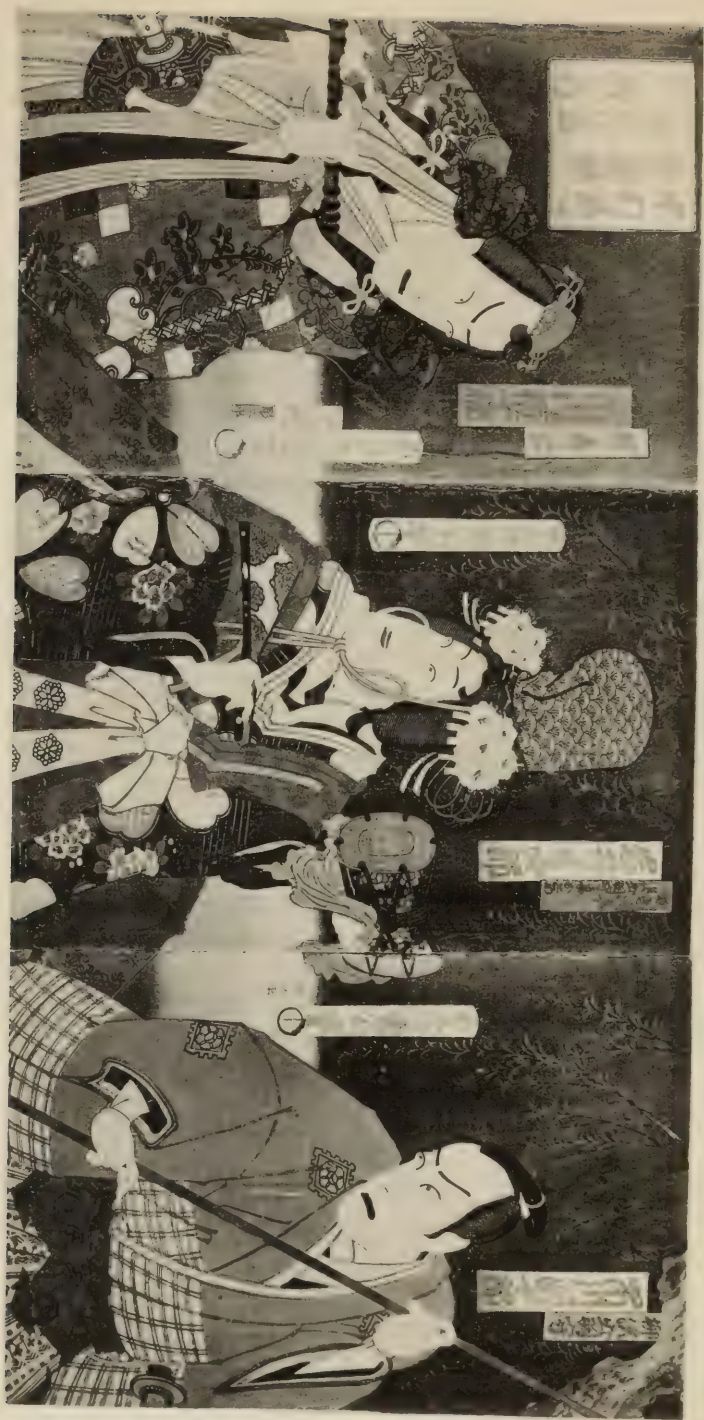
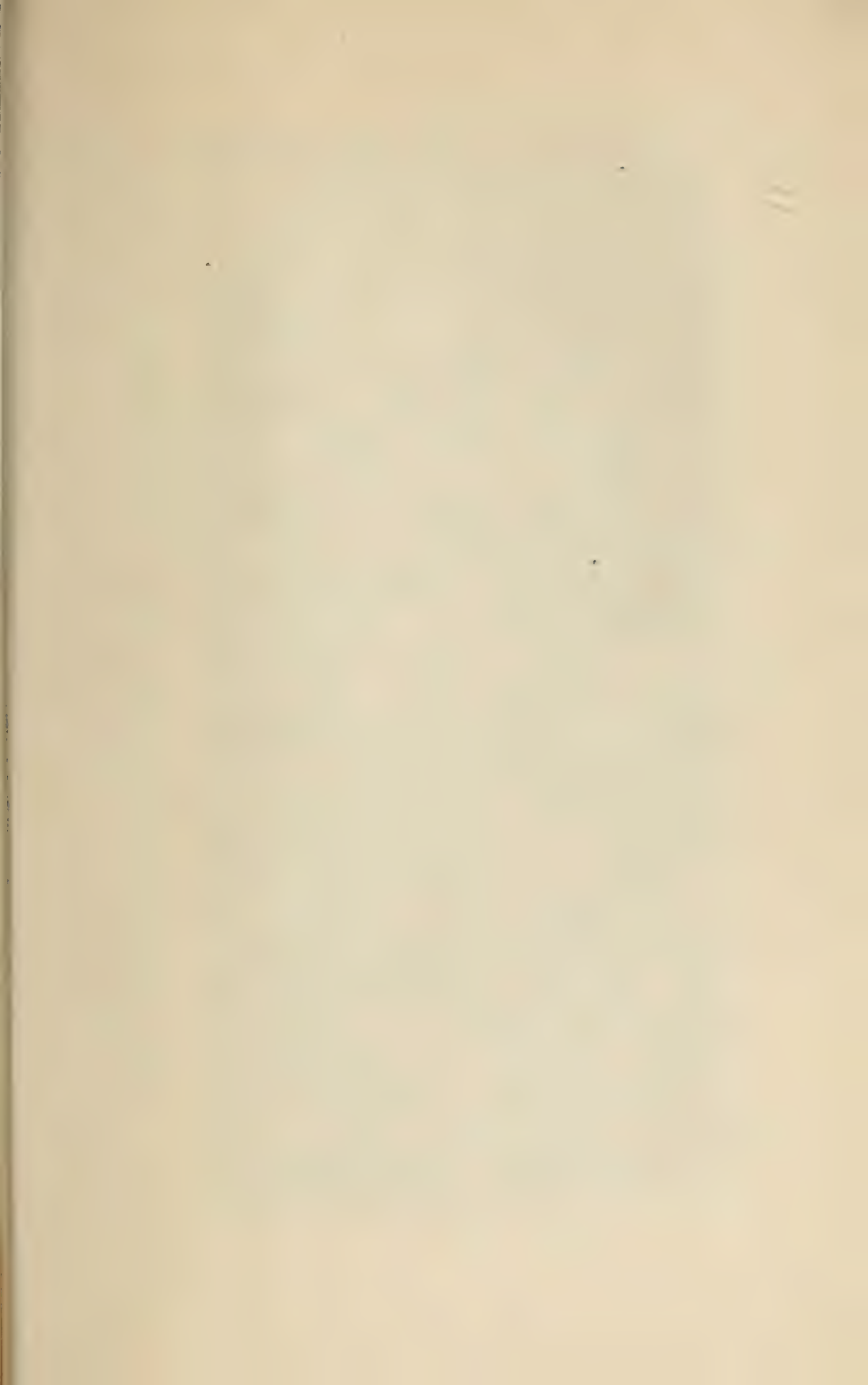
挿繪目次

講談其儘狂言脚色　則世界護國女太平記
富士寫る田子の浦わの秀逸に譽れも高く保忠が次第に登る立身も桂昌母公の御意に入り釆女お高にお手が附き女色になづむ我君を饗應おさめが廓の學び其裏がしに蚊屋の内ぴかりと差込む稲妻の光りに雷五郎藏がお柳を枷に徳兵衛へねだりかけたる百萬石町人だけに千兩の估券を貰ふ出村屋忠五郎慾に迷ひし護持院が逆を祈りし調伏の護摩の煙も黒書院明て言れぬ三間親子は命を捨て大隅へ高野の茶杓に知らせる毒殺御身の大事と根津獺太郎が縋り止るを一刀に綱豐公の御手討天晴忠死と感涙を流す老臣掃部頭が御不興受けて御臺所へ語る密事も岡本の局のほかは白雪の門出にうたふ羅生門心を鬼に死をもつて家ををさむるおせつが健氣さ末世へのこす貞女のかゞみ

裏表柳團畫

「柳澤騷動」は明治八年八月中村座に於て書卸された、作者六十歳の時である。明治期に入つて盛んに上場された御家物の一つである。が、名題の裏表が説明してゐる如く、此作は柳澤騷動を表の時代風と裏の世話風の兩面から、交互(テレコ)に仕組んで、全篇の筋を通して見せようとした所に特色がある。通常裏表といへば、全然別な筋立の時代と世話の狂言を、たゞ交互に演績するを指すのであるが、この作に至つては、同一の筋を兩樣に書分けたもので、裏の世話風の場面に於ては筋なり役名なりを暗々のうちに、地口式に時代の方のものをキカセ、相共に全篇の首尾を全からせてゐる所が違つてゐる。列へば柳澤出羽守を出羽屋忠五郎、將軍綱吉を武藏屋德兵衞、おさめの方に對する出羽屋おりうといふやうに、役名も相呼應せしめてあるもので、作者が得意とした三題噺に於ける才能による趣向の作である。「續々歌舞伎年代記」には「……武藏屋德兵衞出羽屋の女房おりうと密會し夢となつて朝妻になる件は權十郎の綱吉德兵衞とも評よく、仲藏の護持院僧正兄の五郎藏と共に是又評よし、大詰に井伊老侯御臺の御沙汰を受け竊に大奥に召さるゝ所、門之助の襠の蔭にかくれお錠口よりの出衝るよく、後御臺の決心を聞き、惡人を取挫ぎ御代の萬歲を計ると云ふ此別れは一日中の見處ろとして最も高評を受け、日日大入にて日延を重ね、終に六十七日間打通すといふ稀に見る上景氣なり云々」とある。

書卸しの時の役割は市川團十郎(柳澤彌太郎、出羽屋忠五郎、三間右近)、岩井半四郎(おさめの方、忠五郎女房おりう、御臺操御前、德兵衞女房お節)、中村仲藏(曾根權太夫、雷五郎藏　護持院大僧正、加納大隅守)、市川門之助(桂昌院、柳澤妻立田、母おせつ、老女岡本局)、市川權十郎(將軍綱吉公、武藏屋德兵衞、間部越前守、根津彌太郎)、市川女寅(小姓采女、彥右衞門妹さつき)、坂東しうか(局福井、おたか、中納言綱豐公、出羽屋下女おひで)、中村鴇藏(牧野備後守、おしづ、親五郎作)等であつた。——口繪にした着色木版は國周筆の錦繪で、九世團十郎の井伊掃部頭。插繪にしたのは國周筆淺妻船の場の錦繪である。

大正十五年一月　　校訂者

裏表柳團畫（柳澤騒動―七幕）

序幕

三の丸御庭の場
同　御殿の場
本丸御居間の場

〔役名―大樹綱吉公、柳澤彌太郎、牧野備後守、小姓山風荒藏、同夏山繁藏、同秋田豐太郎、同冬野雪之介、石島雄藏、石井六兵衞、茶道半才、鯉昇庵宗匠、中間可助、同杢平、同三藏、同勘六、御母公桂昌院、小姓北野采女實は柳澤養女采女、局福山、腰元若菜、同紅梅、同早蕨其他。〕

〔三の丸御庭の場〕―本舞臺四間通し向う奥庭の遠見、此の前へ三ツ葵の紋附し幕を一面に張りずつと上手平舞臺の端へ幕串を立て、上手よりも同じく幕を低く張り、此の間出入り、上下とも櫻の林にて見切り、是れへ同じく幕を張り、よき所へ結構なる花毛氈を掛け大床几を出し、所々に櫻の立木、總て御城内三の丸御母公桂昌院御殿お庭先きの體、爰に可助、杢平、三藏、勘六の四人中間にて水打ち手桶竹箒を持ち掃除をして居る、上手に石島雄藏、石井六兵衞上下一本ざしお庭方御家人のこしらへにて指圖をして居る、此の模様白囃子にて幕明く。

雄藏　こりや〱中間大儀々々。
六兵　火玉を落さぬやうにして一服いたせ。
四人　へい〱有難うござります。（ト調べになり、中間四人箒を横にして腰を掛ける。）
雄藏　時に石井氏、今日の御成は俄のことゆゑ、斯樣に早く掃除は行き屆くまいと思ひの外、手馴れしものとは申せど、なか〱感心なことでござる。
六兵　左樣でござる、則ち今日の御成は、五代將軍綱吉公の御母君桂昌院樣お庭の櫻を御見物旁々の御成ゆゑ、庭の掃除が肝要でござる。
可助　昨夜俄のお觸出しで、今朝ツからの急ぎの掃除、
杢平　御當番がよい旦那で、こちと等の仕合せといふものだ。
三藏　割下水の旦那や、御徒士町の大將の日にやあこつぱいだぜ。
勘六　少しの所はお目こぼしで、早く掃除があがつてしまつた。
可助　先づおらッちの、
四人　運がよいといふものだ。
雄藏　運がよいと申せば、當將軍綱吉公の御事でござる、先づ御順道なれば、甲府宰相綱重公が、五代將

軍に成らせられるところ、

六兵　常に亂酒の御身持にて終には不慮の御逝去により、館林さまが五代將軍に成らせられたるは、何と御幸運な儀ではござらぬか。

雄藏　それと申すも綱吉公には仁義を重んじ、その上儒佛神の道を守らせ給ふゆゑ、諸神の加護もござるであらう。

六兵　それに附け不思議なは、此度お建てになつたる神田橋外の護持院の住僧、未だ隨光といつて賣卜をなせし砌り、館林樣のお附牧野備後守殿、上樣の御身の上を隨光に占はせしところ、

雄藏　一天下を握り給ふこと疑ひなしと申せしに、その詞の通り將軍職に成らせられしゆゑ、早速神田橋外へ護持院といふ一字を開き、則ち天下の御祈願所と諸人も敬ふ大僧正。

六兵　人の話しに承はりしが、隨光は元京都智積院の僧と申すことでござる。然し當今護持院の勢ひは芝上野も押さるゝ程の勢ひ、何と幸運なことでござらぬか。

可助　わつちも三河町で髮結の話すをちよつと聞きましたが、その隨光坊とかいふのは元は永田の馬場で何とか言つたけ、なあ李平。

李平　その名はおれが知つて居らあ、松並善三といふ醫者の悴だといふことだ。

三藏　たしかその妹が、當時御意に入りの柳澤の御内室だ。
勘六　柳澤の御内室はめつぽふいゝ女だといふ評判だぜ。
可助　さうさ、男ぢやあるめえ。
勘六　えゝ、交ッけえすなえ。
雄藏　先達まで小普請組の柳澤、牧野備後守の執成しで、當時御近習番と出世をしたる仕合せ者。
六兵　彌太郎どのは柔和にして辯舌といひ才智といひ、衆に勝れて發明なれば出世なさるも無理ではござらぬ。
雄藏　なれども、運のよいことでござる。
可助　併しこちと等のやうな二合半でも、運さへよければ大名になれようかの。
杢平　手前が大名になりやあ、引ぱりが好きだから夜鷹小笠原とでもいふだらう。
三藏　これさ、人のことを惡くいふが、手前はこの間鰹を鳶にさらはれたから、鳶細川と言はれるぜ。
勘六　手前も年中か印で膏藥が絶えねえから、藥本多といはれるだらう。
可助　案じるな、何れそこいらの折助だ。
四人　はゝゝゝゝ。（ト此の時雄藏花道の方へ思入あつて、）

雄藏　とかう言ふうち向うから、牧野備後守が見えたが、大方御成道の檢分でござらう。

六兵　見苦しいものゝ見えぬやう、氣を附けて置きやれ。

四人　どれ、もう一遍掃かうか。

ト白囃子になり、花道より牧野備後守老けたる打扮、上下大小にて出來り、直に舞臺へ來る、中間皆皆掃除をして居る。

備後　御庭方には火急のお掃除御苦勞千萬、最早上樣御成りに間もなし、此の趣きを大奥へ申し次がれよ。

雄藏
六兵　承知仕つてござる。

ト雄藏六兵衞中間四人附いて下手へ入る、跡備後守四邊を見て、

備後　家綱公御逝去の後、桂昌院と稱し奉つる當將軍綱吉公の御母公、賢女の君にましませば、お側に隨ふ諸役人、中間小者に至るまで陰陽なき勤め方、上を見習ふ下々とは、はて爭はれぬものぢやなあ。

ト合方調べになり、上手幕の內より福山好みの鬘女中頭の打扮にて庭下駄をはき、後より若菜、紅梅、早蕨腰元にて附添ひ出來り、備後守を見て、

福山　これは〳〵牧野様、今日のお役目御苦労千萬にござりまする。
備後　どなたかと思へば局福山どの、久々にて面會なすが、何時も〳〵御精勤にてお悦び申す。
福山　これはまあ痛み入つた御挨拶、して、上様には未だお入りはござりませぬか。
備後　最早程なくお入りでござる、只今拙者御成の道筋を検分いたして參つてござる。
福山　先刻より御出仕を桂昌院さまにも、お待ち兼ねにござりまする。
備後　稀の御成に御母公様、定めてお待兼にござらうとお察し申せど、知らるゝ如く學をお好みにて、御臺様へも成らせ給はず、まして婦女子の數多ある三の丸への御成なれば、兎角時刻をお移しあるゆゑ、お側に附添ふ手前が胸中、御推察下されい。
福山　それは定めて御心配にござりませう、それにつきいつぞはお尋ね申さうと存じましたが、何ゆゑあつて上様には女子をお嫌ひ遊ばして、御小姓衆にのみお戯れ遊ばしますか、桂昌院様始めとして、
若菜　わたくし共に至るまで、いろ〳〵お取沙汰をいたしまするが、
紅梅　お逝れ遊ばされし甲府さまとは事替り、
早蕨　寛仁大度の上さま、

福山　まして御柔和の御氣質と承はつて居りますゆゑに、どうも合點が參りませぬ。

備後　その御不審は御尤も、此の牧野はいふに及ばず、右京どの始め秋元加藤折々上の御機嫌を伺ひ、御臺所へ御成りなくば女中をお相手に遊ばすやうお勸め申せど聞き入れたまはず、既にこの程御意に入りの柳澤彌太郎が出仕なし、樣々お勸め申せしところ、予は次男ゆゑ將軍職は兄綱重が相續すべきに、酒井の爲に切腹めされ、苔の下にて兄上が嘸殘念に思はれんと、察せしゆゑに嫡子たる虎千代を予が忰となし、六代將軍になす所存、それゆゑ女子に手は附けぬと御決意ありしとの御事。

福山　そりやそれゆゑ上樣には、御小姓衆のみを、

備後　如何にも、さはさりながら御舍兄へ、斯くまで義理をお立てなさるは、

福山　恐れ入つたことでござりまする。（ト兩人思入、此の時花道の揚幕にて、）

呼ビ　御成り、（トこれにて兩人心附き、花道へこなしあつて、）

備後　最早御成りとあるからは、福山どのにもお出迎ひ、

福山　致しまするでござりませう。

ト賑かなる鳴物入りの唄になり、花道より綱吉公羽織袴一本差し木履をはき、後より春川右門、梅田

主水、柳川主計、更科左門若衆鬘袴小姓のこしらへ、綱吉公の刀を袱紗にて持ち、褥、煙草盆、鼻紙臺等持ち附添ひ出る、此の後へ夏山繁藏、秋田豐太郎、冬野雪之助、山風荒藏等若衆鬘袴小姓にて出來り皆々花道へ留る、此の內備後守、福山、腰元三人よろしく出迎ふ、綱吉公思入あつて、

綱吉　誠や千回百匝逢二花傍一と、落花を惜む唐人が名詩も斯くやと思ふ頃、とりわけ今日は風雨もなく照りそふ日影も長閑にて心浮かるゝ折に臨み、臣がすゝめと母君が招きによつて久々にて爰へ步行も花の下、

右門　上野飛鳥も及びなき花の櫻川咲き初めて、

主水　けふ九重の花よりも、櫻は八重か八代洲河岸、

主計　見上げて高き三重の、花は一重か二重橋、

左門　水に櫻のうつり香も顏に照りそふ紅葉山、

繁藏　咲いた櫻につないだる、下馬馬場先きや大手前、

豐太　思ひの竹ばし打明けて、しつぽり濡るゝ花の露、

雪之　嵐に裾を吹上げのいと恥しき花の幕、

荒藏　花に浮れてそこはかと、足もいつしか千鳥足、

左門　お曲輪内の風景は、
繁藏　見事なことで、
皆々　ござりまする。
備後　見上げますれば上樣には、路次のお疲れも見えたまはず恐悅申し上げまする、斯く申す備後守お先觸れ仕り、
福山　上樣御成りを先刻より、お待ち申せし局福山、
若菜　不束ながらわたくし共も、
紅梅　御母公さまの御意に隨ひ、
早蕨　お庭先まで共々に、
備後　お出迎ひ仕つて、
五人　ござりまする。
綱吉　その方共も、出迎ひ大儀。
備後　何はともあれ、我君には、
福山　先づ、御床几まで、

皆々　お越し遊ばされませう。

綱吉　おゝ、皆參れ。

皆々　はあゝ。

ト綱吉公先きに皆々舞臺へ來り、綱吉公件の床几へ掛ける。皆々平舞臺へ控へる。綱吉公備後守へこなしあつて、

綱吉　備後守、申し附け置いた趣向は何うぢや。

備後　はッ、今日仰せ出しの如く、文武二道のお慰み、是れにて試合を御覽に入れん、それ申し附けし竹刀をこれへ、

侍　はあゝ。

ト下手より近習二人、竹刀を八本持つて出で、眞中へ二本直し置き、下手へ入る。

綱吉　用意がよくば、初めさせい。

備後　はつ、畏つてござりまする。（ト思入あつて、）扨八人のお小姓衆、かねてお話し申せし通り、今日を晴なる此の試合、心靜かに立合ひめされ。

小姓八人　畏つてござりまする。

ト白囃子になり、一組づゝ四組に別れ、八人とも赤き襷を掛け股立を取る、此の内福山腰元三人へ囁く、腰元頷いて上手へ入る、備後守指圖をなし試合の立廻りあつて、結局一方の組なる繁藏、豐太郎雪之介、荒藏等の四人打たれる、能き時分に備後守思入あつて、

備後　勝負は見えた、双方とも控へい。

八人　はあゝ。（ト上下へ控へる。綱吉公勝ちたる方の小姓へこなしあつて）

綱吉　扨其方共は若いに似合はぬよい心掛け、褒め遣はすぞ。

右衛　冥加に餘るお褒めのお詞、

四人　有難う存じ奉りまする。

繁藏　危ふい所で聲を掛けられ、思はぬ不覺を取つてござる、

豐太　拙者もお庭の飛石へ躓きしゆゑ、後れを取りしが、

雪之　ならう事なら今一度、勝負をなして思ひのまゝに、

荒藏　打つて〳〵打ち据ゑて、お褒めのお詞頂戴したいが、

四人　残念なことでござる。

綱吉　左程勝負が致したければ、此處にて今一度、

繁藏　すりや、お許しなされて、
四人　下さりまするか。
備後　あいや、其の儀はお許しあつても、又候、彼等がおくれを取りなば、御前へ出るに面目なし、違つて勝負を好むとあれば、相手を替へて然るべし。
綱吉　そちが申すもこりや尤も、然らば相手を替へて遣はす。
繁藏　して、我々へ相手とは、
四人　如何なる仁にござりまする。
綱吉　その相手は、（ト思入あつて福山へ目を附け）それに居る福山がよからう。
福山　えゝ。
繁藏　すりや、我々へ、
四人　お女中を、
綱吉　そち達の腕前には、女が丁度相應ぢや。
備後　しかし女中と申せども、三の丸にて女中頭　音に聞えし福山どのゝ御手練、こりや見物事でござる。

福山　めつさうなことおつしやりませ、わたくし風情があなた方の何とてお相手になりませうや、女子の儀なればお許しあつて、此の儀は餘人へ仰付け下さりませうなれば有難う存じます。

綱吉　いや、辭退いたすは奧床しい、是非とも相手になつて遣はせ。

福山　それぢやと申して、

繁藏　これさ〱福山どの、何も恐るゝことはござらぬ、男でこそあれ我々は女の情も心得て、

豐太　御前を勤むる小姓役、手荒い事はいたさぬゆゑ、心置きなく立合めされ。

孝之　男に負けるは女の常、決して恥辱でないほどに、遠慮いたさず附け入らつしやれ。

荒藏　その代り出しぬけに、臀を打つことはなりませぬぞ。

備後　こりや餘計なことを言はずと、支度がよくば少しも早く、

福山　左樣なれば、どうあつても、

繁藏　とく〱此の場で、

四人　立合ひめされ。（トきつと言ふ、福山是非なき思入あつて）

福山　是非に及ばぬ、お相手をいたしまするでござりませう。

綱吉　おゝ、得心ならば早くいたせ。

福山　はあゝ。（ト白囃子になり、繁藏竹刀を直し前へ出で）

繁藏　大敵と見て恐るべからず、小敵と見て侮るなの道理、男と思ひ顫へることはござらぬ、十分に打つてござれ、やは〳〵と扱うて上げまするぞ、よろしうござるか。

福山　いざ、

繁藏　いざ、

兩人　いざ〳〵〳〵。

ト上手に繁藏、下手に福山身構へして双方きつと見得、三味線入り白囃子になり兩人立廻りよろしくあつて、能き時分に四人一時にかゝり、立廻りのうち、尻を打たれまいとする可笑味あつて、とゞ皆々散々に打たれる、綱吉公この體を見て、

綱吉　流石は母君のお側を勤むる福山、聞き及びしが手練のほど、檢分なすは今日が初めて、予も感心いたせしぞ。

福山　はゝ、恐れ入つたる其の仰せ、お恥かしう存じまする。

トこの時上手より以前の腰元三人出來り、下に居て、

若葉　先刻より上樣を、お待兼ねでござりまする。

紅梅　直さまお入り遊ばすよう、
早蕨　桂昌院さまの仰せ出にござりまする。
　　トこれにて福山備後守へこなし、備後守思入あつて、
備後　はつ、桂昌院さまお待兼ねとあるからは、これより直に奥御殿へ、
綱吉　承知ぢや、直に參るぞ。
備後　はつ。
福山　桂昌院さまには、今日は將軍樣へお慰みにと、お歌合せの御催しにて、宗匠にも疾くより出仕。
綱吉　なに、宗匠が參つて居るとか、それは一段面白からう。
右衞　上樣には平生より、歌道をお好み遊ばすゆゑ、
主水　定めて今日のお催しは、好きお慰みにござりませう。
主計　早う御殿へお入り遊ばし、いつに變らぬ上樣の、
左衞　御秀詠が承はりたうござりまする。
繁藏　我々共も及ばずながら、
豐太　一首詠じて手柄をいたし、

雪之　竹刀で打たれた意趣返しに、
荒藏　三十一文字の筆先で、
繁藏　汚れた顏を、
四人　雪がにやならぬ。
福山　左樣ならば牧野さまにも、
備後　手前は後より、直樣出仕つかまつらん。
綱吉　備後守、早う參れ。
備後　はつ。
福山　上樣には先づ、
皆々　お越し遊ばされませう。

ト出の鳴物になり、綱吉先きに小姓八人附添ひ、後より福山、備後守へこなしあつて腰元三人附添ひ、上手の森の内を通り下手へ入る、備後守後を見送り思入あつて、

備後　文武兼備の將軍なれど、御逝去ありし綱重公へ義理を重んじ、御臺を始め女子にはお手を附けられぬは、虎千代君に六代の御世を讓らん思召しとはいへ、お胤のなき時は御身の血脈絶すの道理

現在の御實母たる桂昌院にも此の程よりお胤のなきを歎きたまひ、折がなあらば諫めんと思召せども天下の主、御親子なれども御遠慮勝ち、それゆゑ身共が奇計を廻らし、才に秀でし彌太郎へ何かの策を頼み置けば、よもや仕遂げぬこともあるまい、さはさりながら頑の御氣性、どうか首尾よく、（ト袴の塵を拂ふを道具替りの知らせ、）いたせばよいが。

ト思案の思入、太鼓入り早き謠にて此の道具廻る。

（三の丸御殿の場）――本舞臺常足の二重金張附、總て三の丸上段の間の體、二重眞中に以前の綱吉公住ひ、下手に小姓控へ居る、上手に桂昌院切髮後室のこしらへにて住ひ、次ぎに以前の腰元三人控へ居る、平舞臺下手に福山控へ、續いて鯉昇庵撫附け十德を着たる宗匠のこしらへにて文臺を控へ居る、上手に以前の小姓四人居並び、琴唄の合方にて道具留る。

福山　桂昌院さまには、久々にて上樣へ御對顏、

若葉　嘸御恐悅に、

福山　入らせられませう。
腰元

桂昌（思入あつて、）おゝ、皆の者よう言やつた、現在の我が子ながら將軍職に任ぜられし上は逢ふ事さ

へ儘ならぬに、よくこそ今日は成らせられしぞ、嬉しう思ひますわいの。

綱吉　こは勿體なきそのお詞、この綱吉も御母公に對面いたさんと疾より心勞せども、自由にならぬ天下の補佐職、今日は如何なる吉辰なるか、何日にかはらぬ母君の麗しき尊顔を拜し、恐悦申し上げまする。

桂昌　わらはとても將軍の健かなりし體を見て老の惱みも忘れし心地、さゝ腰元ども、將軍へ敷物を。

ト腰元はつと立たうとするを、

綱吉　あいや、其の敷物は母君お先きへ。

桂昌　いや〳〵六十餘州の總追捕使天下を握る綱吉公、浮世を捨てし自らに、何の遠慮に及ばぬこと。

綱吉　ぢやと申して、現在の母君を差しおいて、

福山　あゝいや、申し上げるも恐れあれど、御母公さまの御意なれば、少しも早うお褥をお召し遊ばし下さりませう。

綱吉　むゝ、然らば仰せに隨はん、母上御免下されい。

ト桂昌院に會釋なし、錦の褥を敷かせ綱吉公住ふ、後にて桂昌院紫の褥を敷かせ是れへ住ふ、この時上手より以前の備後守一本差しにて出來り、平舞臺へ平伏なし、

備後　はつ、桂昌院さまには御健勝に渡らせられ恐悦至極に存じ奉つりまする、則ち今日將軍の御先觸れに出仕なし、疾にも伺候つかまつるべきに延引の段、御容赦下しおかれませう。

桂昌　おゝ、備後守大儀ぢやの。

備後　はつ。

桂昌　そちも無事にて、何よりなるぞ。

備後　御懇の御意、有難う存じ奉つりまする。

右門　上樣には先刻より、

主水　お歌合せの御催しを、

主計　お待兼ねにござりますれば、

左門　少しも早う、福山どの、

福山　なるほど、こりや御尤もにござりまする、（ト桂昌院へこなしあつて、）桂昌院さまより今日の、お題を下し置かれませう。

桂昌　そんならわらはが、何ぞ題を取らせませう。

福山　それ、料紙を早う、

腰元三人　畏まりました。

トこれより合方替つて、腰元三人桂昌院の前へ蒔繪の硯箱短冊箱を出す、桂昌院筆を取り考へるこなしあつて、短冊へ「佐保姫」と書記し福山へ渡す、福山見て押し戴く。

鯉昇　してお題は、何と申しまするな。

福山　佐保姫と申すお題にござりまする。

鯉昇　はつ、畏まりました。（ト又鯉昇庵詠草へ書留める。）

綱吉　なに、題は佐保姫とな。

福山　御意にござりまする。さ、何方なりと御遠慮なう、御一首遊ばしませいな。

トこれより前に負けたる小姓四人佐保姫の歌を讀む可笑味あつて、

繁藏　乙姫なれば龍宮とか、玉手箱とかいへますが、佐保姫では相手が惡いわえ。

豐太　左樣でござる、佐保姫と、玉姫稻荷大明神、八重垣姫なら諏訪明神、

雪之　鼠を書くのが雪姫で、絲を引くのが橘姫、

荒藏　須磨にうろ〳〵玉織姫、思ひ切つて清水の上から飛ぶのが櫻姫、

繁藏　角の生えるは淸姫で、石になるのがありや佐用姫、

豐太　聲のいゝのが淨瑠璃姫、器量のいゝのが小町姫、
雪之　皆鶴姫に刈屋姫、
荒藏　中條姫に若葉姫、（ト頻りに考へるこなしあつて）
繁藏　いつたい、佐保姫とは、
四人　どんなお姫さまでござりまする。
桂昌　そち達は佐保姫を知らぬと見える。
豐太　まだ一度もお目見得、
四人　いたしませぬ。
桂昌　佐保姫の姫とはいへど戀にはあらず、春の色を染め出す神、まだ其の外にも橋姫、山姫、龍田姫
　　すべて神祇にある題ぢやわいなう。
繁藏　へえゝ、左樣でござりましたか、拙者はお姫さまかと存じました。
豐太　春の色を染出す神なら、紺屋の娘でござりますか。
雪之　えゝ、何を仰せらるゝ。（ト此の内荒藏頻りに考へて居て、）
荒藏　出來ました。（ト大きく言ふ、皆々びつくりなす、三人詰寄り、）

三人　何とでござる〳〵。
荒藏　お急きなさるな、あんまり大きな聲ゆゑ引込んでしまつた。
三人　何のことだ。
荒藏　思ひ出しました。（ト横手を打ち鯉昇庵の傍へ來て、）又引込まぬうち、詠草へお留め下され。
鯉昇　畏まつてござる、何と仰せらるゝな。
荒藏　「佐保姫が春の野に出ていたづらに、衣ほすてふ神のまに〳〵、」とは何うでござるな。
鯉昇　それでは百人一首を、五目に集めしばかりで、歌には成りませぬて。
荒藏　歌に成りませんかな。
繁藏　手前が一首いたしました、詠草へお記し下されい。
鯉昇　何とでござるな。
繁藏　「佐保姫が春の色をば染め出して、獅子鳥追に寶舟かな、」とは何うでござる。
鯉昇　これも歌になりませぬて、
雪之　然らば拙者のはどうでござる。
鯉昇　して、あなたのは何とでござる。

雪之「佐保姫が佐保姫ならぬ佐保姫の、佐保姫ならば佐保姫にけり、」とはどうでござる。
鯉昇　佐保姫づくしは、何にもなりませぬ。
豊太　素人はおよしなされ、拙者が秀詠を仕つた、多分此の歌がおくでござる。
鯉昇　して、貴殿のは、
豊太「佐保姫の扇巴や文車の、ゆるしの色も梅の春かな、」何と秀詠でござらうな。
鯉昇　これも歌ではござらぬ。
三人　清元でござる、はゝゝゝ。（ト皆々笑ふ、豊太郎むつとして、）
豊太　然らば歌で今一首仕つる。
綱吉　こりや待て〳〵。
豊太　はつ。（ト控へる。）
綱吉　予が一首浮んだれば暫く控へい、「佐保姫の引くや霞のいと筋も、」（ト鯉昇庵詠草へ記し、綱吉公思入あつて、）こりや牧野、下の句を附けい。
備後　はつ、恐入つてはござれど、拙者歌道にくらければ、此の儀は何卒餘人へ仰付け下さるべし。
綱吉　なに、暗いことのあらうぞ、是非とも附けい。

桂昌　折角將軍の御意なれば、何なりと附けやいなう。
備後　これは又、迷惑千萬な、(ト困る思入。)
繁藏　半分お上で遊ばせば、下の句ばかりゆゑまうけものでござる。
豐太　何でも十四文字になればよいと申すもの、
雪之　こりや願うてもないことでござる。
荒藏　下の句は、何と仰せらるゝ。
四人　如何でござる〳〵。

ト備後守へ詰寄る、備後守困る思入。福山、小姓等氣の毒なるこなし、綱吉公思入あつて、

綱吉　こりや備後、早く附けぬか。
備後　はつ。(トもぢ〳〵して居るゆゑ、)
綱吉　はゝあ、こりや何か予が申せし上の句に、批點のあつてか。
備後　めつさうな、まつたく以て、
綱吉　然らば、下を早く附けい。
備後　はつ。

綱吉　どうぢや〳〵。

ト頻りにせり立てる、備後守汗を拭ひて困る思入、この時ばた〳〵になり、花道より柳澤彌太郎、繼上下一本ざしにて足早に出來り、花道へ平伏する、これを皆々見て、

桂昌　誰かと思へば、上樣御意に入りの、

皆々　柳澤どの、

綱吉　おゝ、彌太郎か。

彌太　はつ。

綱吉　よく參つた、苦しうない近う參れ。

彌太　まつぴら御免下さりませう。

ト下座の謠になる、彌太郎舞臺下手へ來り平伏する、合方になり、

繁藏　柳澤どのには、お次より、

豐太　あわたゞしく此のお席へ、

雪之　お取次もなくたゞ一人、

荒藏　何御用あつて御出仕、

四人　ありしぞ。（トきつといふ。）

彌太　只今お次にて承はりし所、備後守殿佐保姫のお題にてお上の遊ばす下の句にお困りの御樣子、假令如何なる歌人たりとも、ふつと趣向に困ることはまゝござるゆゑお察し申し、愚案ながら拙者がお下を附けたう存じ、お取次をも待たずして斯かるお席へ押しての出仕、無禮の段は幾重にも御高免なし下さりませう。

備後　よい所へ柳澤、いや、これは能くこそ出仕めされた。

綱吉　おゝ、予が下の句を附けろとあれば、誰にても苦しうない、早く附けい。

彌太　すりやお許し下さりまするとな、はゝ、有難う存じ奉りまする、恐れながら、今一應上の御句を、

綱吉「佐保姫の引くや霞のいと筋も、」

彌太「ほころびて見ゆ山櫻かな。」（ト此の内鯉昇庵執筆なす、）

綱吉　その詠草、これへ持て。

鯉昇　はつ。（ト綱吉公の前へ持つて行く、綱吉公見て、）

綱吉「佐保姫の引くや霞のいと筋も、ほころびて見ゆ山櫻かな、」むゝ、彌太郎よくいたしたな。

彌太　はゝ、恐れ入り奉りまする。（ト平伏する、桂昌院こなしあつて、）
桂昌　聞き及びし柳澤が歌道の心得、まことに感心しますわいなう。
福山　柳澤どのには此の道を、お好きとは申しながら、わたくし共には及ばぬところ、
ト此の内桂昌院思入あつて短册を取り、「船山へ上る」といふ題を認め、
桂昌　こりや彌太郎、今一首これを詠ぜよ。（ト腰元取次いで彌太郎に渡す、）
彌太　はゝ、（ト短册を見て、）「船山へ上る」これは御難題でござりまするな。
繁藏　船が山へ上るとは面白い。
豐太　かやうな題は、得て興のあるものでござる。
雪之　定めて秀吟なことでござらう。
三人　承はりたいなく。
荒藏　これはしたりお靜かにめされ。あまり船頭が多いと、自然と山へ船が上りますて。
繁藏　左樣でござる。
四人　はゝゝゝ。（ト此の内彌太郎思入あつて、）
彌太　「富士うつす田子の浦わの夕凪に、船乘り上ぐる山の上まで。」（ト鯉昇庵執筆なす。）

桂昌　その歌これへ。

鯉昇　はつ。（ト桂昌院の前へ詠草を出す、桂昌院見て、）

桂昌　「富士うつす田子の浦わの夕凪に、船乗り上ぐる山の上まで、」流石は彌太郎、秀詠ぢやの。

彌太　はゝ、面目次第もござりませぬ。

備後　重ね〴〵の御秀詠、

綱吉　予も感服いたしたぞ。

彌太　恐れ入りましてござりまする。

繁藏　何といづれも、今の富士山を袂へ入れるといふ歌を、御所望申したいではござらぬか。

豐太　如何さま、これも面白うござる。

雪之　しかし何ほど歌人でも、

荒藏　この題ばかりは、

四人　出來ますまいがな。

彌太　なに、富士山を袂へ入れる、これもなるほど難題でござる、然し、もし詠じましたら如何めさるる。

繁藏　これが出來たら、（ト四人ちよつと囁き、うなづいて、）我々四人の首を貴殿へ、

四人　進上申すでござらう。

彌太　（笑みを含みて、）いや、それには決して及びませぬが、若し一首の歌によみ得し時は、（ト思入あつて、）斯樣仕りませう、各々の顏へ墨を塗りまするぞ。

繁藏　なに、われ〳〵の顏へ墨を塗るとな、

豐太　塗られて損のいかぬ顏ゆゑ、

雪之　こりや約束が面白い、

荒藏　その代り出來ぬ時は、貴殿の顏へ、

四人　塗りまするぞ。

彌太　如何にも、それは覺悟でござる。

繁藏　然らば御案は附きましたか。

彌太　富士山を袂へ入れる、

四人　何とでござるな。

彌太　（ちよつと考へて、）「旅人が駿河の繪圖を賴まれて、富士を袂へ入れて來にけり。」

綱吉　天晴なるそちが頓智、

備後　恐れ入つたものでござる。

綱吉　こりや彌太郎、約束せし小姓共の面體へ、墨を塗れ。

彌太　はゝ、畏つてござりまする。

福山　こりや、よい慰みにござりまする。

彌太　左樣ならば各方、お約束ゆゑ塗りまするぞ。

ト鯉昇庵の持ちし筆を借りて立上り、四人の小姓を捉へ墨を塗りにかゝるを塗らせまいとする、自然と附打なしの立廻りになる、よき見得より太鼓入りの謠になり、墨塗りの立廻り、此の内福山腰元にこなしありて腰元三人奥へ入る、四人の小姓銘々筆を持ち可笑味の立廻りのうち、豐太郎鯉昇庵の顏へちよつと墨を附ける。

鯉昇　やゝ、とんだお相伴に逢ふものだ。

ト言ひながら下手へ入る、結局彌太郎四人の顏へ墨をぬる、四人悔しがり下手へ逃げて入る。

桂昌　今日は圖らず彌太郎が出仕なし、よい慰みをしたわいなう。こりや福山、申し附けしお茶を將軍へ差し上げよ。

福山　畏りました。（ト下手へ向ひ、）お茶の御用意よろしくば、御前へ早う。（ト下手にて、）

采女　はあゝ。

ト浮いた合方になり、采女若衆鬘一本ざしの小姓にて、袱紗へ茶碗を載せ持ち出來り、皆々へ會釋なし綱吉公の前へ置き、下手へ下り平伏する。綱吉公采女を見て、見惚れる思入。

綱吉　して、彼のものは、

桂昌　此程召抱へし、北條采女と申す者、

采女　不束な手前、召しあがり下さりませうなれば、有難う存じ奉りまする。

綱吉　お見知り置かれ下さりませう。

綱吉　はて、男子に稀な、

采女　はゝ、（ト綱吉公思入あつて氣を替へ、）

綱吉　よいお茶でござるな。（ト茶を呑む。）

福山　それ、御酒宴の御用意、（ト下手にて、）

腰元　三人　畏りました。

ト右の合方にて、以前の腰元三人、銚子杯干肴を持ち出で二重へ並べ、下手へ下る。

桂昌　久し振のことなれば、氣鬱を拂ふ玉はゝき、

福山　一獻おすごし遊ばされませう。

綱吉　折節の饗應一獻すごさん、先づ母上より、

桂昌　そんなら、毒味仕りませうわいなう。

ト桂昌院杯をとる、腰元酌をなす、桂昌院呑んで綱吉へさす、綱吉杯をとる、腰元酌をして下手へ下る、綱吉酒を呑み思入あつて、

綱吉　こりや、采女とやら、

采女　はつ、

綱吉　今日の目見得に、何ぞ肴いたせ。

采女　はつ、有難き御意なれど不束者にござりますれば、その儀は何卒御容赦を、

備後　こりや〳〵采女どのとやら、折節の御意といひ、御酒宴の興なれば辭退めされず、何なりと、なう彌太郎どの、

彌太　如何さま、なにも御一興と申せば、仰せに随ひ一指し舞ふも、時に取つてのよい御肴、

采女　それぢやと申して、

彌太　はて、未熟ながらも、拙者が地謠、
綱吉　是非とも肴に所望いたすぞ。
釆女　はつ、
綱吉　それ、（ト持ちたる扇を出す、釆女彌太郎に取次いでくれろといふ思入、綱吉見て、）苦しうない、是れへ
　參れ〱。
釆女　左樣なれば、御免下され。
　　ト釆女辭儀をなし、扇を取りにかゝる、綱吉扇を放さず釆女をぢつと見て扇を放す、釆女こちらへ來
　り扇を頂きよろしく構へる、彌太郎謠をうたふ、よき程より下座へ取り、鳴物入りにて釆女舞ふを、
　綱吉見惚れる思入、釆女舞納めて辭儀をなし、下手へ控へる。
綱吉　はて、となりの優しきことぢやな。
桂昌　（此の樣子を見て、）心に叶はゞ進ぜませうか。
綱吉　苦しからずば、是非とも所望いたすでござる。
　　トこの時七ッの時計鳴る、備後守思ひ入あつて、
備後　最早夕景にござりますれば、御歸館あつて然るべし、

綱吉　圖らざる饗應に、時刻移れば、直樣歸館いたすであらう。
桂昌　左樣なれば、將軍には、御機嫌よろしう、（ト手を突く。）
綱吉　あいや、それでは予が迷惑いたす。
彌太　釆女どのには上樣の御所望にて、桂昌院樣の御意なれば、これより直に御本丸へ御供めされ。
釆女　畏つてござりまする。
　　　トこれにて綱吉平舞臺へ下り、酒に醉ひし思入にて、
綱吉　母上の饗應にて、予も大いに酩酊いたした。
　　　ト釆女の手を取る、釆女彌太郎の顏をちよつと見る、彌太郎目配をなす。
釆女　桂昌院樣、御機嫌よろしう。（ト又彌太郎の顏を見るを冠せて、）
彌太　あいや、御歸館、（ト大きく言ふ、と花道の揚幕にて、）
大勢　はあゝ。
綱吉　皆參れ。
　　　ト唄になり、綱吉に釆女附添ひ、小姓四人備後守附いて花道へ入る。ずつと後より彌太郎桂昌院に辭儀をなし、思入あつて花道へ入る。それまで桂昌院始終綱吉のあとを見送り居る、福山こなしあつて、

福山　御母公樣、（ト呼べども矢張り花道の方を見て居るゆゑ）御母公樣、
　　　ト大きくいふ、桂昌院心附き福山と顏見合せ、氣味合の思入、これにてしつとりとした合方になり、

桂昌　今更改め申さずとも、そちも知つて居やらうが、當將軍には甲府公の嫡子たる虎千代君へ六代の御世を讓らん思召しにて、女子を嫌ひたまふなれど、名に負ふ御臺は京都鷹司關白殿の姬にして、賢女の聞え高きゆゑ申し入れて入輿ありしが、これまでつひにたゞの一度奥へお成りもなきよしゆゑ、どうか心を和いで奥へも時々お入りあるやういたさんものと思ひしところ、牧野が手引に物馴れし柳澤へ賴み置きしが、どうか女子へ心を寄せ、跡へ血筋の殘るやういたしたいものぢやわいなう。

福山　その御心勞は御道理ながら、下世話に申す譬の通り、案じるより產むが易いと、才智すぐれし柳澤どのゝ計らひ、首尾よう成さるでござりませう、まあ御安心遊ばしませ。

桂昌　十が九つ自らも、大丈夫とは思へども、

福山　御一徹な上樣ゆゑ、

桂昌　若し計らひし一大事が、

福山　顯はれし其の時は、（ト大きく言ふな）

桂昌　あこれ、

ト押へるを道具替りの知らせ、桂昌院扇を開き福山に囁く、この模様右の合方にて道具廻る。

（御本丸寢所の場）――本舞臺三間の間平舞臺の寢所、正面一間三ツ葵の紋附き金張の御簾、上下同じ襖の出入り、ずつと上下やはり金張り御簾襖にて見切り、下手よき所へ莫大なる黒塗り蒔繪の短檠を置き、總て御本丸寢所の體。爰に以前の小姓右門、主水、主計、左門等四人控へゐる、この模様時の鐘四つの拍子木六尺棒の音にて道具留る。

右門　何と主水殿御覽なされたか、今日三の丸より差上げられし釆女殿とやらは、美しい器量ではござらぬか。

主水　いや、器量のよいばかりではござらぬ、立居振舞のしとやか、手爪先きの尋常は、女といふとも恥しからず、

主計　我々共でも惚れ〴〵といたせば、上樣の御意に叶ひし筈でござる、今に出世をなさるであらう。

左門　出世と申せば近年に稀な出世は柳澤氏でござる、尤も器量才智衆に勝れ、歌の即詠、上樣の御意に叶ふも無理ならず、

右門　今宵は歌のお話に三の丸樣よりお供にて、唯今お奥でお話し最中。

主水　承はれば柳澤氏の御内室おさめどのとやらも、歌詠みにて、

主計　三の丸のお女中衆へ歌の御指南を申すよし、

左門　目の寄る所へ玉とやら、お羨しいことでござる。

右門　我々ども〻柳澤氏にあやかつて。

主水　どうか出世を、

四人　いたしたうござる。

トこゝへ下手より茶道半才雪洞を持ち出來り、

半才　お小姓衆へ申上げます、最早上樣御寢遊ばしますれば、何れもにはお次へ御退出なされませ。

右門　すりや、もう御寢遊ばしまするか。

主水　今宵はいつもよりお早いではござらぬか。

主計　然し、果報は寐て待てと申せば、

左門　どれ、お次へまゐつて、

四人　休息といたしませう。

ト半才先に四人の小姓下手へ入る、時の鐘を打上げ下座の謠一くさりあつて獨吟の合方になり、よきほどに正面の御簾を捲上げる、內に金屛風一双を立廻し、緞子の釣夜具房附の括り枕、脇息、鼻紙臺刀掛へ刀をかけ、蒔繪の煙草盆、短檠、青表紙の本など取散し、こゝに以前の綱吉着流し前帶にて采女を引寄せゐる、やはり合方にて、

綱吉　唯今打ちしは最早亥の刻と見ゆる、今日は桂昌院へ出仕なし測らざる饗應に予も大いに酩酊いたした。その代り斯樣な土產を得しゆゑ何よりの氣鬱ばらし、こりや采女今宵は予が伽をいたせ。

采女　有難うはござりますれど、不束な身にござりますれば、

トもじ〳〵後へ下る、綱吉采女の手を取り、

綱吉　これはしたり、何れへ參るのぢや。

ト又謠になり、采女後退りになるを、綱吉引寄せ懷へ手を入れるを、采女入れさせまいと俯く、綱吉いろ〳〵してちよつと懷へ手を入れる、采女振り切つて懷を押へる、綱吉思入あつて、

その方は、女ぢやな。

采女　はい、いえ、男にござりまする。

綱吉　いや〳〵、只今予が手にさはりし乳房の樣子、采女、その方は女に違ひあるまいがな。

采女　恐れ入りましてござりまする。

ト平伏する、綱吉扨こそといふ思入あつて、

綱吉　予を僞る憎くき奴、覺悟いたせ。（ト枕刀を振上げろ、采女これまでといふ思入にて、）

采女　御意の通りわたくしは、女に違ひござりませぬ。

綱吉　えゝ、穢はしい、不屆き奴めが、（ト刀を拔き振上げろ、采女身を擦り寄せ、）

采女　勿體なくも上樣を僞りました我が身の科、千萬お詫び申しても天の御罰は免れぬわたくし、恐れ多くも上樣のお手にかゝるは此の身の本望、いざお手討に遊ばしませ。

ト後向きに綱吉を見返へろ、綱吉思入あつて、

綱吉　憎い奴めが。

ト斬らうとして斬兼ろ思入、早き謠の切れになり、又振上げろ。此の時ばた〳〵になり、下手襖の内より以前の彌太郎の聲にて、

彌太　暫く〳〵。（ト言ひながら出來り、謠の切れ一ぱいに綱吉を見得よく留めろ。）

綱吉　おゝ彌太郎か、女の身にて大膽にも男と僞り、予をたばかる不屆者ゆゑ手討ちになすを、何ゆゑあつて留め立ていたす。

彌太　これなる采女が男にやつし、今宵お伽に上りしは、桂昌院樣の仰せゆゑ、

綱吉　何と申す、

彌太　御母公の仰せなれば、先づお靜まり下さりませう。

トこれにて綱吉餘儀なく蒲團の上へあがらうとして、振返り采女を見てうぬと息込むを彌太郎これを見上げ、兩人顏見合せ氣味合よろしく、これにて本調子の合方になり、

恐れながら上樣には賢君にましますゆゑ、甲府樣の御嫡男虎千代君當今綱豐君と申し奉る、この若君へ六代の御世をお讓り遊ばすとて、お奧へお入りござりませぬを桂昌院樣には御心勞遊ばされ、人は老少不定ゆゑ若し綱豐君に御不慮あらば血脈絶ゆるは目前、何卒君のお胤をまうけ御血統の絶えざるやうにいたしたくと、諸寺諸山に御願を掛けられ、御寢なつても忘られず御心痛遊ばすも、下世話に申す初孫のお顏を御覽なされたきゆゑ、御親子の御情合は貴賤を隔つ所にあらず、まして況んや天下の御胤、金銀珠玉の寶に替んや。今宵彌太郎が言上なすは、君後年にお渡りあらば果して思ひ當らせたまはん、兎にも角にも天が下にたゞ一人の御母君、お年召されし桂昌院樣の御歎きを思召し、何卒お心飜へされ、是れなる采女を今宵のお伽になし下さりませうなれば、其のお悦びは如何ばかり、まつた某、深夜に至り押して伺候仕り言上なせしが御癇

癖に障りたまはゞ、假令お咎め蒙るとも天下のお爲になせる事、命は惜しまぬこの彌太郎、只管願ふ今宵のお伽、御聞濟み下さるやう、偏に願ひ奉る。

ト彌太郎思入にて言ふ、綱吉こなしあつて、

綱吉　すりや、その方には命を捨ても、予に伽をすゝめると申すか。

彌太　御意にござりまする。

綱吉　予も和漢の書籍を好み日夜閑室に讀書なせど、子として親に背きなば後に不孝の罰をうくるは、こりや貴賤とも同じこと、それ辨へぬにはあらざれど、女に手をつけ胤をやどし實子出生なす時は、遂に親子の情に迫り後年に至り憂ひあらん、それゆゑ女に手は附けぬのぢや。

彌太　恐れ入つたるお詞ながら、假令君の御胤やどし御實子御出生あるとても、聖賢の道を慕ひたまふ御名君にましませば何とて後の憂ひあらん、恐れ入つたる事ながら老少不定の世の中ゆゑ、萬々一西丸樣に御不慮な儀でもござりますれば御血統が絶えませう、御母公樣の御心痛、又二つには此の邊を思召し分けられまして、御聞き濟み下されまするか、但しは御不孝遊ばしまするか。

綱吉　さあ、それは、

彌太　君の御胤身にやどし、御實子御出生ましますとも、御悦びとこそなれ、後々の必ず憂ひにならざ

るやう、恐れながら某がお取計ひいたしますれば、御安堵あつて御母公様へ御孝心の其の爲に、
采女をお伽になし下さりますやう、偏に願ひ奉る。

綱吉（思入あつて、）予が胤出生なすとても、天下の亂れにならぬやう、其の方能きに計へ。
彌太　委細畏まつてござります。
綱吉　して其の者の素性は、存じ居るか。
彌太　よく存じをります。
綱吉　むゝ、して何れの者ぢや。
彌太　外でもござりませぬ、拙者が娘にござりまする。
綱吉　えゝ、すりや其の方が、おゝ左様か、柳澤が娘でありしか。
采女　幼少より京都にて生ひ育ち、堂上方へ宮仕へをいたしましてござりまする。
綱吉　おゝさうであつたか、娘は元より彌太郎まで、命を捨てゝ予に忠節、忘れは置かぬぞ。
彌太　こは有難き御懇の御意、心魂に徹し有難く存じ奉ります。（ト此の時九ツの時計鳴る、）最早子の刻
にござりますれば、御寢なつて然るべう存じまする。
綱吉　むゝ。（ト思入あつて胸を押へる、）

彌太　如何遊ばしませしぞ。（ト氣遣ふこなし）

綱吉　予が持病の痞が起つた、（ト苦しむ思入）

彌太　それ、御介抱申し上げい。

采女　はつ、（ト恐る〳〵側へ行く。）

綱吉　采女、介抱いたせ。

采女　はつ、

ト後へまはり綱吉の胸を抑へる、綱吉その手を捉へ、につこり笑ふ。是れにて御簾を下す、彌太郎につたりとこなしあつて、此の道具廻る。

（桂昌院奥御殿の場）——本舞臺上へ寄せて二間常足の二重、正面一間の床の間、續いて銀襖、屋體の下手平舞臺、高欄の手摺、この上二重と同じ欄間を取附け、是へ御簾を下しおき、上下銀襖の見切り、總て桂昌院奥御殿の體、爰に以前の桂昌院二重眞中に褥を敷き住ゐる、平舞臺下手に福山控へゐる、よき所へ短檠を出し、誂への合方にて道具留る、

福山　御母公樣には深夜まで、何故御寢遊ばしませぬ。

桂昌 柳澤の娘采女が首尾よう仕果せしか、多分女子といふが顯はれて、手討ちにでもなりはせぬかと、たゞさへ睡られぬ老の身の、夜は更渡れど目が冴えて、どうも枕につかれぬわいなう。

福山 又御心勞遊ばしまするか、左樣に御苦勞遊ばしましては、却つて御身の毒にござりまする、善惡ともに彌太郎殿より知せの便りが參る約束でござりまする故、まあ御寢遊ばしませ。

桂昌 その便りがおそい故、氣にかゝつてならぬわいなう。

福山 御尤もにござりまする、左樣なればわたくしがお廣敷までまゐりまして、樣子を見屆けてまゐりませう。

桂昌 大儀ながら注進あらば、早う知せてたもいなう。

福山 畏りました、どれ行て參じませう。（ト花道へ入る。桂昌院後を見送り）

桂昌 燒野の中に子を思ふ深き情も親子の情合、まして天下の世繼ぎぢやもの欲しうなうて何とせうぞいなう。どうぞ、首尾よう柳澤の娘に手がつきお胤をやどし、初孫の顏が早う見たいものぢや、とはいへ、一徹短慮にて采女が手討になる時は、彌太郎へ面目ない、善か惡かは生死の境、案じられてならぬゆゑ福山を遣はしたが、早う便りを聞きたいものぢやなあ。

ト思入、ばた〳〵になり、花道より福山出來り、花道にて、

福山　御母公樣へ申し上げまする。
桂昌　おゝ福山か、何うぢや〳〵。
ト言ひながら二重より思はず下るを、早蕨介抱なす、此の內福山舞臺へ來り、
福山　釆女どのが御意に叶ひ、昨夜のお伽をいたしましてござりまする。
桂昌　えゝ。（トびつくりなし、）して、女子と知つてか、
福山　御意にござりまする。
桂昌　おゝ、それで安心しましたわいなう。
ト此の時明け六ッの太鼓を打ち込み、ばた〳〵になり、花道より彌太郎出來り、花道にて、
彌太　御母公樣には、お目覺めにござりまするか。
桂昌　おゝ彌太郎か、待兼ねました、苦しうない、近う〳〵。
彌太　はつ、（ト下手へ來り控へる。）
桂昌　今福山にあらまし聞きしが、そんなら、いよ〳〵彼の釆女が、
彌太　女と知れしその時は、一旦御立腹なされしかど、段々と申上げし所御得心にて、忝なくも娘にお
手が附きましてござりまする。

桂昌　出來した彌太郎、それでわらはが胸もはれ、日ならず胤をやどしなば、

福山　それにて御家は萬々歳、

彌太　恐悦申し、（ト彌太郎肩衣を後へ引くを木の頭、）上げ奉ります。

ト彌太郎辭儀をなす、桂昌院福山嬉しき思入、この模樣烏笛へ時の太鼓を冠せ、よろしく

ひやうし幕

二幕目

柳澤邸遊興の場
柳橋出羽屋の場

〔役名――將軍綱吉、柳澤（彌太郎）出羽守、家老曾根權太夫、牧野備後守、武藏屋德兵衞、菅沼主水、出羽屋の船頭長次、柳澤家臣四人、將軍の近臣四人、茶道珍才。柳澤の室おさめ、同妾立田、同養女おたか、出羽屋女房おりう、出羽屋下女おせん、腰元六人、中小姓二人、〕

（邸內庭口の場）――本舞臺眞中に大門と見たる瓦屋根の庭口、この後一面青竹の手摺を結廻したる花菖蒲の盛りを見せ、門の上下網代塀所々に若楓の立木、門の柱に五月五日より花菖蒲と記したる張紙、總て柳澤の屋敷內庭口の模樣、後に毛氈をかけし床几二脚並べあり、爰に臺屋、諸士の鬘にて印半纏三尺帶臺屋のこしらへにて、臺の物を頭へ乘せ兩手で押へて居る。若い衆、同じく諸士の

蔓着流し若い者のこしらへにて長柄の傘を持ち、辻占賣、同じく諸士の蔓着流し尻端折りにて辻占の箱を肩へかけ、同じく諸士の蔓着流し前垂掛けにて白丁の德利を提げ、珍才坊主蔓紋附き座頭のこしらへにて足駄をはき杖と笛を持ち、皆々立ち掛り居る、この見得吉原雀の唄にて幕明く、

臺屋 何と各々難儀千萬な事が出來いたしたではござらぬか、

若衆 左樣でござる、某などは傘をさしかける若い者の役廻りゆゑ、さのみ苦勞もござらねども、

辻占 手前は戀の辻占を商ひまする役目ゆゑ、餘程呼方がむづかしうござる。

消炭 又手前ことは消炭とか唱へる、茶屋の若い者の役廻りゆゑ、笑ひますのに餘程面倒、

珍才 この珍才は按摩の役、盲目の眞似をした上で、療治も少々やらねばならず、

臺屋 第一手前は臺の物を頭へ載せる役目でござるが、うまく頭へ乘りませぬ、

若衆 それは其の筈、貴殿のお髷は人並すぐれて太ぶせゆゑ、臺が頭へ乘らぬも尤も。

辻占 實は昨晩廓へ參つて拙者臺屋を見掛けましたが、はけを散せし水髮を、横の方へぱらりと曲げ、

消炭 その上頭へ手拭を輪にいたして載せてをれば、あれでは辷る氣遣ひなし、

臺屋 いかさまこれは左もありなん、よい御教導に與つた。

珍才 さうしていつたいどういふ譯で、こんな眞似をするのでござります。

若菜　いや珍才はまだ存じまいが、當家より御本丸へお召仕ひに差上げたる采女さまといふ御愛妾が、上樣のお胤をやどし、安々御平產ありしゆゑ徳松君と申しあげて、天下の御世をもお取りなさる若君にてありし所、

辻占　先ごろ御疱瘡にて御逝去まし／＼、其の上續いてお部屋の采女さまも、產後の惱みに御病死をなされ、將軍家にはお力落し、

消炭　又候、以前の御生來の通りお居間の内へ閉籠り、御佛事のみになづみたまひ、お氣の結ぼれ解れることなく、果は大事な御壽命を縮めるやうにもならうかと、御母公樣の御心配、

橐屋　それゆゑ御母公桂昌院樣より當主人へお頼みになり、此の程よりして諸家方へ上樣にお成をすゝり、或ひは謠曲、能、狂言と、種々饗應をいたしたのち、

若菜　いよ／＼今日當屋敷へ、上樣入御になりしゆゑ、

辻占　御老職の御名案にて、先日殿がお身請ありし、

消炭　元廓にて傾城の、御愛妾たる立田どのを、お師匠番にて斯くの如く、

橐屋　廓の趣向を、

四人　なされるのぢや。

珍才　それで樣子が分りました、それならそろ〳〵始めませうか。
臺屋　いや〳〵未だ上樣が、お奧へ入御にならぬうちは、
若衆　お附きの衆への遠慮もあれば、
辻占　やはり樂屋へ引き下り、
消炭　たゞ下稽古をいたして置くのぢや。（ト此の時花道揚幕の內にて）
呼ビ　上樣入御。（ト呼ぶ、皆々花道揚幕の方へ思入あつて）
珍才　最早上樣此處へ、お出の樣子でござります。
臺屋　然らば我れ〳〵樂屋へ參り、
若衆　出のきつかけを相待ちませう。
辻占　とはいへ、此の儘引つ込むのも、
消炭　あまり風情がござらぬから、
珍才　稽古に呼んで引込みませう。
ト是れにて臺屋床几の上へおろせし臺の物を頭へ載せろ、若い衆傘をひらいてよろしく構へろ、辻占は辻占賣の思入にて、

辻占　淡路島通ふ千鳥の辻うら、
珍才　あんまー針。(ト呼ぶ、消炭茶屋の若い者の思入にて)
消炭　えへゝゝゝゝ。(ト笑ひかける)
臺屋　いや、笑ひ方は本ものでござる。
若衆　さゝ、參りませう。
ト通り神樂すが搔にて皆々正面の門の內へ入ろ、又花道揚幕の內にて、
呼ビ　入御。
ト呼ぶ、これより誂へ出の鳴物になり、花道より綱吉公羽織袴一本ざし將軍のこしらへにて庭下駄をはき出ろ、跡より備後守上下大小更けたろ近臣のこしらへにて、紫の袱紗にて綱吉の刀を持ちて附添ひ、その後より近臣四人何れも上下大小にて煙草盆、褥などを持ち附添ひ出ろ、これと一時に上手より柳澤出羽守彌太郞上下一本ざし後より家老權太夫同じく上下一本ざし家老のこしらへ、兩人とも草履にて出で、よろしく出迎ふ、綱吉皆々花道へ留ろ。
出羽　これは〳〵上樣には、かく粗末なる庭先きへ御招待申し上げしに、早速入御なし下され、
權太　主人出羽は申すに及ばず、家中一同いかばかりか、

出羽　恐悦至極に、
兩人　存じ奉りまする。（トよろしく辭儀をなす、）
綱吉　釆女が死去の其の後はこれぞと申す樂みなく、予もほとんと氣鬱なりしが、そちが勸めに此の程より諸家へ參りて種々の慰み、又今日は先刻より種々の馳走になりし上、斯く庭中の花菖蒲を一目に望む樂しみは、はて風情ある眺めぢやなあ。
備後　上意の如く出羽守が心をこめし程あつて、庭の容體間毎の普請、華美を盡せし款待は感にたえたる事のみゆゑ、君にも嘸かし御滿悦にござりませう。
出羽　はゝつ、さしてもなき儀を御賞美に預かり、
權太　當家の面目これに過ぎず、
出羽　有難く存じ、
兩人　奉ります。
備後　何は格別、上樣にはあれなる床几へ、
近臣四人　入らせられませう。
綱吉　然らば備後、

備後　先づ成らせ、

皆々　られませう。

　　　卜鳴物にて綱吉舞臺へ來る、近臣は上手床几の上へ褥を敷き、よき所へ煙草盆を置く、綱吉褥の上へかける、備後守近臣四人は下手の床几へかける、出羽守權太夫は下手下に居る、綱吉正面の門の柱に張つてある貼紙を見て、

綱吉　はて變りたるあれなる張出し、何ぞ趣向のあることなるや。

出羽　そのお尋ねに預りまして、申し上ぐるも恐れあれど、今日上樣お成りに付き、これなる老臣權太夫めが存じつきたる廓のまねび、大門口の形容をばしつらへましてござりまする。

綱吉　すりやこれなるが、大門口とな。

權太　伊達綱宗がその古遊里通ひをいたしたる廓のさまによそへまして、仲の町の花あやめを御覽に供へ奉りまする。

綱吉　すりやかねん〳〵聞き及びし仲の町のまねびなるとか、はて珍らしき趣向ぢやなあ。

備後　これまで諸家へ我が君のお供に列り立越えしが、何れも謠曲お能などにて變りし趣向もなかりしに、流石は當家の老臣だけ、君慮に叶ひし此の趣向、備後感心いたしてござる。

綱吉　して、門内へ立越えても苦しうないか、どうぢや〳〵。
權太　門より内へ成らせらるれば、聊か趣向もござりますれど、廓のことゆゑ女多く不調法勝ちにござりますれば、たゞ〳〵これより御遊覽の程願はしう存じまする。
綱吉　いや〳〵何も苦しうない、廓の内へ案内いたせ。
權太　はゝ、（ト立たうとするを、）
出羽　あいや、其の儀はよろしからず。
綱吉　入門なしては悪いとな、
出羽　貴き君を出羽づれが、奥向などへ御招待なし、後日の聞えも何とやら憚り多くござりますれば、
備後　あいや、その儀は備後身分に代へてもお請合ひ申す。
○　如何なるさまかわれ〳〵も、
△　後學の爲め、御庭内へ、
□　お供いたしてお趣向を、
◎　拜見したう、
四人　存じまする。

権太　上様始め各々方まで、左様に御所望遊ばすを、御辭退申すも何とやら、
出羽　何は格別、粗茶一服、
綱吉　然らば、これにて所望いたさん、
出羽　はつ、（ト後へ向ひ、）誰そある、お茶を持て、（ト門内にて、）
たか　はあゝ、
ト正面の門の内よりおたか高髷振袖裝にて庭下駄をはき、黒樂の茶碗を紫の袱紗にて持ち出來り、綱吉の前へ來り、下に居て、
不束な手前ながら、召上られ下さりませう。
ト出す、綱吉茶碗を取りながらおたかの顔を見る、これにておたか下手へ下り、はつと辭儀をなす、
綱吉思ひ入あつて、
綱吉　はて似たこともあるものぢや、いつぞや采女が目見得の折に、寸分違はぬ彼れが容貌、出羽その者は、
出羽　上意の如く娘采女に面體恰好似て居りますゆゑ、身許をたゞし貰ひ取り、養女にいたしてござりまする。

綱吉　すりや其の方の養女なるとか、はて、似たものもある者ぢやなあ。(トよろしくこなし、)
出羽　それ、御挨拶を申し上げい。(ト是れにておたか顔を上げ、)
たか　たかと申す不束者、お見知り置かれ下さりませ。(ト羞しさうに辭儀をなす、綱吉思入あつて、)
綱吉　薄茶の手前を今一服、奥へ參つて所望いたすぞ。
出羽　でも、女儀ばかりの奥向きへは、
綱吉　はて苦しうない、無禮講ぢや。
備後　我君さまには、庭中へ。
權太　いざ、御案内申し上げん。(ト立ち掛る、此の時花道揚幕の内にて、)
主水　あいや、其の入御暫く、(ト聲をかける、皆々花道揚幕の方を見て、)
綱吉　予が庭中へ參るのを、
備後　暫くと、聲、
近習四人　かけたるは、(トばた／＼になり、花道より菅沼主水上下大小にて出來り、)
主水　暫く／＼、暫くお待ち下さりませう。(ト花道へ平伏するを皆々見て、)
綱吉　誰かと思へば、菅沼主水、

備後　何ゆゑお留め、
近習四人　めされしぞ。
主水　はつ、お留め申すは餘の儀にあらず、天下の亂れと存ずるゆゑ。
綱吉　何と申す。
備後　天下の亂れと言はるゝは、容易ならざる一大事、
出羽　そこは端近、
權太　先づ〳〵これへ。
主水　然らば御免下さりませう。（ト主水舞臺へ來り下手に居る、綱吉思入あつて、）
綱吉　して〳〵、天下の亂れとは、
備後　如何なる仔細か、我が君へ、
○　これにて言上、
近習四人　いたされい。
主水　それぞ上樣奥向へ、みだりに入御遊ばすゆゑ、
皆々　何と、（ト合方きつばりとなり、）

圭水　かゝる御場所で若年の拙者如きが御諫言申し上ぐるは憚りあれど、先達てより上様には諸家へ入御に成らせられ、種々御遊興あそばせども、男女席を分ちたる奥向などへ入御あつて御遊興の例しなし、されば其の日の饗應も寳生、觀世のお能なるとか、又は謠曲詩歌のたぐひ表書院で御酒宴ありて御還御にならせられしに、假令如何なる御趣向ありとて、女儀のみ多き奥向きへ成らせらるゝは其の意を得ず、上御一人の御行跡より諸侯の行跡亂れなば、それぞ天下の亂れゆゑ、御不興をも顧みずお留め申して斯くの仕儀、何卒これより御遊覽を願はしう存じまする。

ト思入にて言ふ、綱吉むつとなして、

綱吉　やあ小賢しき其の諫め、天下の亂れと申すゆゑ如何なる儀かと存ぜしに、斯く出羽守が心を盡し予をもてなさんと趣向をせし遊興の場を妨ぐるは、返す〴〵も憎き奴、留めてよければ是れに居る備後守が諫言いたす、生若輩の分際で入らざる留め立て控へ居らう。(トきつと言ふ。)

圭水　はつ、御老功なる備後どのを差しおきましては憚りあれど、諺にいふ智者の一失、忠義の爲には止むを得ずお留め申せし臣下の道、如何に仰せこれあるとも上様奥向へ入御は甚だよろしからず、當家に於てお款待の趣向が御意に叶ひなば、何卒是れより御遠見然るべう存じ奉りまする。

トきつと云ふ、綱吉急き立ちし思入にて、

綱吉　やあ又しても入らざる諫言、たつて申さば若年とて容赦はならぬ、下り居らうぞ。

出羽　(思入あつて)あいや、其の儀は相成りませぬ。

綱吉　何ゆゑそちは相成らぬぞ。

出羽　實に萬卒は得易くして一將は得難き譬へ、これなる菅沼主水どの、忠臣無二のお諫めゆゑ、

綱吉　なに、菅沼が忠臣なりとは、

出羽　感服いたしました。(ト是れより合方きつぱりとなり)君へ對して言上なすは孔子に儒道を說くに似たれど、實に忠臣の輩は君の御身を大切なりと、思へば斯ぞありたき事、拙者も今日お供の中に列りをらば斯の如く御諫言も申し上げんが、それにはあらで上樣の御成りを願ひし出羽守、何が又諸家に劣らざる御款待の趣向もがなと千々に心を碎きますれど是れぞと申す案じもなく、家の老臣權太夫へ相談をいたせし所、他家と違ひて近き頃お取立の小身者ゆゑ、はれがましき儀は御許し願ひ、君の御目に珍らかなる趣向を御覽に供へなば、却つて御意に叶はゞやと勸めにもとづく廓の形容、たゞ大門の入口のみを御覽に入れて斯くの仕合せ、其の餘はさしたる趣向もなく至つて粗末にござりますれど、御所望ゆゑに是非もなく入御を進め奉つるを、御附人の見る時は如何なるみだらもあらんかとお諫め申すは臣下の道、何卒彼れが御諫言忠臣無二と思召され、お褒

めの御沙汰是れあるやう、偏に願ひ奉る。

綱吉　すりや其の方は妨げなす、主水を憎しとは思はぬか。

出羽　何ゆゑかく迄上様の、御身を思ふ主水どのを、某憎しと思ひませうぞ。

權太　たゞ此の上のお願ひには、主人を差し置き、粗忽なる趣向をいたせし拙者めが、罪をお許し下さりませう。

備後　あいや其の儀はいらぬ御配慮、若侍はいざ知らず手前が君のお供いたせば、假令男女同席たりとも、天下の亂れと相成るやうな、御不行跡はさせませぬぞ、いざ、我が君には奥向きへ。

　　　トこれにて綱吉思入あつて、

綱吉　出羽守が執成さずば此の儘容赦はいたされねど、差控へを申し付けなば迷惑いたす者もあらん、無禮の段は許しくれるぞ。

主水　すりや、どうあつても奥向きへ、

出羽　はて、御不行跡にはならざるやう、此の出羽守が警固いたす、

主水　然らば夜分にならざるやう、

出羽　それも今夕暮六つ限り、

○　左様ござらば、
四人　われ〳〵も、
綱吉　いや、よしなき主水が諫めといへど、みだらがあつては予が恥辱ぢや、備後の外は供はならぬぞ。
○　すりや、われ〳〵は奥向へ、
△　君のお供は叶ひませぬか。
□　いらぬ所へ、
四人　菅沼どのが、
主水　や、
○　いえ、承知いたして、
四人　ござりまする。
權太　いざ、上様の御案内、
綱吉　趣向を見物いたさうか。
備後　息女とやらも諸共に、
たか　でもわたくしは、（ト羞しきこなし、）

綱吉　はて、大事ないぞよ。（ト主水おたかを見て思入あつて、）

主水　それゆゑ入御は、（ト綱吉の方へ寄らうとするを、出羽守隔てゝ、）

出羽　あいや、先づ成らせられませう。

　　ト唄になり權太夫先きに立ち、案內して綱吉公備後守、あとよりおたか附添ひ、正面の門の內へ入る跡に出羽守主水近臣四人殘り、主水は綱吉の跡を見送り、

主水　早く還御になればよいが、（ト案じるこなし、彌太郞この體を見て、）

出羽　主水どの、御安堵めされい。

主水　なに、安堵せよとは。

出羽　先づ〳〵是れへお掛けなされい。（ト兩人とも有合ふ床几へ掛け、是れより合方になり、）定めし貴殿のお心にては、斯く奧向へ上樣を御招待申し上げ、猥らな儀でもあらんかと御心配もいたされんが、なか〳〵左樣な譯にあらず、仔細と申すは先達て若君逝去の其の後は、將軍家にも手に持ちし玉を失ふ御心にて、御佛間にのみ引籠り鬱々としてましますゆゑ、御母公樣には殊の外御心勞遊ばされ、此の出羽守へ御內意には何卒餘事の御遊興にお心移らせたまふやう、計らひくれとの御賴みに、是非なく此の程兩三度諸家へ御成りをすゝめし處、何れも上への饗應は謠曲お能の類

ゆゑ、君慮に叶ひし趣向もなく、我が邸へ御成りの節何がな變りし趣向もと、家來に相談いたせしところ、登庸の身とは申しながら諸家の知行に較べなばまだ小祿の手前ゆゑ、黄金を費やし饗應の趣向は力に及ばざれば、お目新らしき斯樣な儀が却つて御意に叶はんかと、たゞ大門の形容のみ御覽に入れしまでの事、入御にならば是れぞといふ別に趣向もござらぬゆゑ、程なく還御に相成らん、何れの道も上樣の御身を思ふ忠臣の心は同じ貴殿と某、必ず惡しくは計らはねば、主水どの御安堵めされい。（ト思入にて言ふ、是れにて主水安心の思入にて。）

主水　いやもう、事を分けたる其許の恐れ入つたる其の仰せ、左樣な御內意あることは今の今まで存ぜざりしが、桂昌院さまのお賴みゆゑ斯くまで御心勞なさるゝを、嘴青き身を以て上樣への御諫言小癪な奴とも思召されず、お執成し下されし上、御厚志の段承はり安堵の思ひをいたしてござる、たゞ此の上とも我が君の、御前よしなに、御執成し何卒お賴み申しまする。

出羽　その儀は委細承知いたした。

主水　左樣ござらば暮六つ限り、

出羽　きつと還御をお進め申さん。

主水　それにて安堵仕る。（ト近臣四人前へ出て、）

○ いらざる野暮が、
四人 出たばッかり、
主水 何とおいやる、
○ いえなに、野暮に、
四人 お暑うござる。
出羽 然らばこれにて主水どの、
主水 出羽守どの、
近習四人 お別れ申す。

ト唄になり、主水先きに近臣四人附いて花道へ入る。出羽守是れを見送り、につたりと思入、爰へ上手より以前の權太夫出で、

權太 御前樣、最早主水は歸りましたか。
出羽 若年ながら利發ゆゑ、忠義一途に御遊興の妨げなせば、たつた今、
權太 彼れをお返しある上は、君のお側に附添ひて、諫言なすもの一人もなし、
出羽 他家にあらざる廓のまなび、御意に叶ひし上からは、

權太　日ならず又も御加增あつて、

出羽　大老職となりし後、

權太　百萬石のお墨附、

出羽　望み叶つて頂戴なさば。

權太　天下に二軒の大々名。

出羽　我が青雲の、（ト兩人顔見合せ莞爾と思入、これを道具替りの知らせ、）時節ぢやなあ。

ト此の模樣二挺鼓の入りし合方にて道具廻る。

（揚屋酒宴の場）——本舞臺四間通し中足の二重、本緣附き大和葺の庇、後一面銀地帶入りの襖、舞臺上下に手摺附きの花菖蒲、二重上手に誂への金屛風立廻しあり、總て柳澤の屋敷を仲の町の揚屋と見たる心、平舞臺上下に毛氈のかゝりし床几を一脚づゝ並べあり、二重上手に以前の綱吉褥の上に住ひ、杯を取り上げ居る、よき所に以前のおたか銚子を持ち控へゐる、下手に以前の備後守杯を取上げ、腰元四人何れも茶屋女のこしらへにて、備後守に酌をして居る、前に結構なる酒宴の道具並べあること、此の模樣やはり二挺鼓の入りし合方にて道具留る。

綱吉　いやもう、斯樣な面白き予が遊興を妨げいたす、菅沼主水と申す奴、若年の身にて不粹な奴ぢや。

備後　上様の上意の如く、椎茸髱の女中達を斯く茶屋女に仕立てまして、お取持をいたさすなどは、目を驚かす今日の趣向、又その中に只一人人柄のよき振袖裝は一倍目立つおたかどの、心を盡す款待を、何といたして空しくいたし、御歸館がなりたまふぞ。

たか　不調法なるわたくし共がお取持の御酒宴を、その様に御意遊ばしますとは、冥加にかなつた事でございまする。

一　お心に叶ひましたら、

二　お箸をお取り遊ばしまして、

三　召し上られ下さりませうならば、

四　有難いことで、

四人　ございまする。

綱吉　予が賞翫をいたすのが其様にまで嬉しくば、心一ばい過して遣はす。こりやたかとやら、もそつとこちらへ近う進め。

たか　でも恐れ多うございますれば、

綱吉　はて、予が許す、無禮講ぢやわえ。（トこれにておたか羞しさうに前へ進み、）

たか　冥加なことでござりまする。（ト酌をすることよろしく、備後守この體を見て、）

備後　上樣にはそれなるたかゞ御心に叶ひましたら、御母公へお願ひ遊ばし、大奥へお召し遊ばせ、出羽へは斯くいふ備後が申し聞けるでござりませう。

綱吉　予も寵愛の釆女に別れ面白からで過せしが、今日測らずも出羽が宅へ參つて、世を去りし釆女に逢うたる心地いたす、こりやたかとやら、そちを手許へ召し寄せたいが、承知なるかどうぢやどうぢや。

たか　親共さへよろしくば、如何やうなりともわたくしは、

綱吉　よいと申すか、

たか　はい。（ト顏を隱す。）

綱吉　はて、うい奴ぢやなう。（ト悦ばしき思入、）

備後　いや上樣の御直談はなか〳〵お手に入つたもの、備後閉口仕りました、手前は色氣より御酒にいたさう、さゝついでくりやれ〳〵。（ト杯を出す。）

一　さあ〳〵お上り、

四人　遊ばしませ。

ト銘々銚子を持ち、備後守へ左右より酌をする、備後守頻りに酒を呑むことよろしく、此の時花道揚幕の内にて、

辻占「淡路島通ふ千鳥の戀の辻うら」

珍才「按摩――はり。」(ト呼ぶ、綱吉花道の方へ思入あつて)

綱吉　向うへ何やら參るやうぢや。

たか　あれは廓の商人にござりまする。

綱吉　なに、商人が參るとな、

備後　それは一段面白いな〳〵。

ト興に入りしこなし、これより通り神樂になり、花道より以前の臺屋先きに臺の物を頭へ載せ、跡より消炭白鳥を提げ、その後より辻占賣り手拭を吉原かぶりにして辻占賣にて出る、ずつと後より珍才按摩の思入にて杖をつき、笛を吹き呼びながら出て、直に舞臺へ來り、

臺屋　へい、お誂へが參りました。(ト臺の物を二重の緣端へおろす、綱吉これを見て)

綱吉　してこれは、如何なるものぢや。

たか　これは廓の臺屋の物にござりまする。

綱吉　はゝあ、逮夜の膳部は、魚類と見えるな。
臺屋　外にお誂へものはござりませぬか。（ト四人の腰元奥へ向ひ）
消炭　それはお上さんに聞くがいゝ。
腰元四人　お上さんく、（ト呼ぶ、後にて）
立田　あいく、今そこへ行くわいなあ。（ト合方きつぱりとなり、奥より立田茶屋の女房と見せし、奥女中にて出て來たり、綱吉公を見て下に居て）これはお客様、ようおいらつしやいました、（トちよつと挨拶をしてこちらへ向ひ）何だね、喜介どん、お客さまの前へ遠慮もなく、早く奥へ持つて行きなゝ。
消炭　これは粗相を仕つた、えへゝゝゝ。（ト笑ひながら臺の物と白鳥を持つて奥へ入る。）
綱吉　氣味の惡い奴ぢやが、あれは何ぢや。
立田　あれはわたくし共の、若い者でござります。
綱吉　して、年は何歳ぢやな。
立田　五十三だと申します。
綱吉　五十三歳では老人の筈ぢやが、
立田　いゝえ、此の廓では幾つになつても、あいらの事を若い者と申しまする。

綱吉　扨は老年に及んでも、若い者と申すとか、
立田　左樣にござりまする。
備後　大分頭が赤いゆゑ、あかい者とでも申せばよいに。
立田　これは御趣向でござりまする。
臺屋　いやなに、立田どの、
立田　えへん〳〵。
臺屋　左樣なら、（ト下手へ行き、）やれ〳〵がつかりいたした。
ト汗を拭きながら下手へ入る、辻占賣前へ出て、
辻占　辻占は如何でござります。
立田　もしお客さま、辻占をめしませぬか。
綱吉　辻占とは何の事ぢや。
立田　これは斯樣でござりまする、あなたが好いたとお思ひ遊ばす女子の心を、辻占でお試しなさるのでござりまする。
綱吉　然らば、それを求めてくりやれ。

立田　畏りましてござります。もし辻占屋さん、二筋ばかりおいておいで。（ト有合ふ盆を出す。）
辻占　承知いたしました。（ト辻占の煎餅を盆の上へ出す、立田こちらへ持つて來り、）
立田　さあ、お客さま、一つお取り遊ばせ。
綱吉　一つ取つて如何いたすぞ。
立田　そのお煎を割つて御覽遊ばすと、中に辻占がござりますぞえ。
綱吉　はゝあ斯樣いたすのかな、（ト件の煎餅を一ツ取つて割つて見て、）何やら中から書いた物が出たわえ。
立田　それを讀んで御覽遊ばすと、女子の心がわかりまする。
綱吉　然らばこれなるたかの心を、何と思うて居るか讀んで見よう、（ト辻占を開き見て、）何ぢや、「しみじみ好いたよ」といたしてある。
立田　さてはお好かれなされましたのでござりまする。（トこれにておたか顏を隱し、羞しきこなし、）
備後　どれどれ、手前も試して見ようか。
立田　あなたは誰の辻占でござりまする。
備後　されば手前は、そもじにいたさう、（ト煎餅を取り辻占を出し、）何ぢや、「色になりたい。」
腰元四人　ヨウヨウ、色男さまさま。

備後　色になりたいとは、悦ばしいな。
綱吉　うい商人ぢや、褒美を取らせい。
立田　それは有難う存じまする、(ト帶の間より金を出し紙に捻つて、)辻占屋さん、お客様より御祝儀だよ。
　ト出す、辻占賣かぶりし手拭を取り、
辻占　こは冥加なる下されもの。(ト眞面目にいふゆゑ、)
立田　えへん〳〵。(ト目まぜをする、辻占賣心附き、)
辻占　これは有難うござります。(ト戴いて懷へ入れる、)
立田　さあ〳〵、早く行かしやんせ。
辻占「淡路島通ふ千鳥の辻うら。」
　ト呼びながら上手へ入る、此の内珍才下手の床几に腰かけ居て、此の時前へ出て、
珍才　お上さん、按摩はよろしうございますか。
立田　もしお客さま、按摩は如何でございまする。
綱吉　按摩とは如何いたすのぢや。
珍才　へい、上下揉んで百文でございます。

綱吉　さては、上下の泥をおとすとか。
立川　いえ、お肩やおみ足を揉みまして、療治をいたすのでござりまする。
綱吉　何も一興ぢや、揉んで見せい。(ト是れを聞き珍才びつくりして目をあき、)
珍才　それは大變、
立川　あもし。(ト目まぜで押へろ、珍才目をふさぎ、)
珍才　あんまあ――はり。(ト呼ぶ。)
綱吉　いや氣味の惡い盲人ぢやが、そちが名は何と申す。
珍才　へい、珍才と、(ト言ひかけるを冠せて、)
立川　いえ、小さい形ゆゑ豆市と申しまする。
綱吉　これへ參つて、揉んで見せい。
珍才　どうか首尾よく行けばよいが、
　　ト珍才二重へ上り、綱吉公の後へ廻り肩を揉む、とよろしく、備後守酩酊のこなしにて、
備後　さて手前儀は、十二分に酩酊をいたしましたれば、暫時御免を蒙りまする。
綱吉　然らば次で休息いたせ。

立田　もし皆さん、あなたを奥へ御案内、

一　畏まりまして、

四人　ござりまする。

備後　どれ休息を、(ト立ち上つてひよろ〳〵とするを、腰元四人よろしくおさへ)

四人　かうおいでなされませ。

ト賑かなる鳴物にて備後守腰元四人に連れられ奥へ入る、立田こなしあつて銚子を持つて見て、

立田　どれ、お銚子を持つて參りませう。(ト奥へ入る、綱吉後を見送りて、)

綱吉　いやどれも〳〵面白い奴ぢやが、して女房になりしものは、やはり當家の召仕ひなるか。

たか　あれは此の程抱へました立田と申す召使ひ、今日の廓の趣向の、師匠番にござりまする。

綱吉　なにさま師匠といはれるだけ、物慣れて居る彼れが執成し、さては出羽が愛妾ぢやな。

たか　左樣ぢやさうにござりまする。

珍才　あれは、殿樣のお妾で、(ト言ひかけるを、)

たか　あこれ、(ト目まぜをする、珍才心附きて目をふさぎ、)

珍才　あんまあ――はり。(ト呼ぶ。綱吉扨はといふこなしにて、)

綱吉　はて、美しいものぢやわえ。
たか　ても、お氣の多い、
珍才　さては悋氣で、
たか　えゝ、
珍才　あんま――はり。（ト綱吉件の辻占煎餅を盆へ載せしまゝ取つて）
綱吉　こりや豆市とやら、これを取らせる、次へ立て、（ト出す、珍才前へ出て、）
珍才　これは有難うござりまする、（ト探りながら盆を取つて押戴き、こちらへ來り目を明いて見て、）こりやお餘りを、
綱吉　何ぢやと、（ト珍才目をふさいで、）
珍才　いえなに、あんま――はり。（ト呼びながら奥へ入る、おたか後を見送り、）
たか　ても、失禮な珍才ぢやわいなう。（ト綱吉花道の方を見て、）
綱吉　又もや何か參るやうぢや。（トおたかも花道の方を見て、）
たか　ありや傾城でござりまする。
綱吉　なに、傾城が參るとな。

たか　どれ、奥へ知せて參りませう。

トおたかは奥へ入る、これより傾城出の鳴物になり、花道の揚幕より若い衆一人丸の內に紅葉の紋附きたる臺張りの提灯を持ちて先きに立ち、おさめ下髮の傾城、夏衣裳襠裲裝にて駒下駄をはき、新造附添ひ出る、後より幕明きの若い衆長柄の傘をさし掛け、その後より女小姓の禿二人煙草盆と長煙管を持ち、その後より一人同じく新造の裝にて出る、ずつと後より更けたる局遣手のこしらへにて出で、皆々花道へ並ぶ。此の內奥より以前の立田出て、よろしく出迎へ、

立田　これはおいらん、最前からお客さまがお待兼ね、すこしも早う此の處へ、

さめ（こなしあつて、）おいらんと名乘るも恐れありやうは、知らぬ諸分のきゝ取りを、覺束なくも庭もせの、

新造　その八ツ橋のお泉水、こは〴〵渡る八文字、

若衆　在五の君のそれならで、さし掛け傘の道中も、

禿一　にせ紫の京町から、

禿二　あづま下りの仲の町、

新造　幾夜重ねてはる〴〵と、月の武藏の江戸町へ、

老女　廓のさまを拙くも、見せすがゞきのお庭内、
立田　なには兎もあれまあ〳〵これへ、
花道皆々　そんならおいらん、
さめ　子供來や、
禿二人　あい――。
ト右鳴物にて皆々舞臺へ來る、綱吉おさめをよく〳〵見て、
綱吉　やゝ、誰かと思へば、さめではないか。
さめ　はい、わたくしは、(ト言ひかけるを冠せて、)
立田　いえ、これが則ち三浦屋の、高尾太夫にござりまする。
老女　さあ〳〵おいらん、お客さまの、
新造　お側へお早く、
皆々　お越しあられませう。
ト是れにておさめ二重へ上り綱吉の側へ身をそむけてよろしく住ふ、此の内始終立田氣を揉んで仕方をして敎ふることよろしく、女小姓禿二人煙草盆をおさめの前へおき後へ並ぶ、後皆々下手の床几

へ腰を掛ける、綱吉扨はといふこなしにて、

綱吉　流石は當家の出羽守、奥を高尾に扮裝たせた容貌、常にまさりてあでやか〳〵。

立田　たゞお話しを申し上げましては、お慰みになりませぬゆゑ、正物を御覽に入れまする。

綱吉　はて、美しいものぢやなあ。（ト見惚れる思入よろしく、）

立田　もしおいらん、お客さまへ御挨拶を、（ト是れにておさめ形を崩し、）

さめ　上樣には、ようこそ、（ト言ひ掛けるゆゑ、）

立田　あもし、（ト疊を叩く、これにておさめ心附き、）

さめ　ようお出なさんしたなあ。（ト立田の方を見ながら言ひ難さうに挨拶をする。）

綱吉　いや、款待振は滿足々々。

若衆　（前へ出て、）然らば拙者は、最早役濟み、（ト言ひかけるを、）

立田　あもし、早く三浦屋へ歸らしやんせ。

若衆　三浦屋とは、何れでござつたか。

立田　あゝもし、そんな若い衆がござりますかいなあ。（ト是れにて若い衆心附きて、）

若衆　はゝあ成程、どりや三浦屋へ歸宅いたさう。（ト傘をかついで下手へ入る。）

立田　さあ〳〵、是れから御酒にいたしませう、（ト奧へ向ひ、）これ〳〵女共、お酒を持つて來なよ。
　ト手を叩く、奧にて、
腰元
四人　あい〳〵。（ト以前の臺の物を持つて出でよろしく並べる、綱吉思入あつて、）
綱吉　はて、面白いこの趣向、備後は何れに居るか、これへ呼んで、見せたいものぢや。
一　大そうな御酩酊で、
二　奧に御寢なつて、
四人　お出でござりまする。
綱吉　扨は彼れ奴は醉潰れたと見えるな。（ト此の時奧にて、）
彌太　いや面白うない、歸るぞ〳〵。
權太　まあ〳〵お待ちなされませ。
　トこれより踊地になり、奧より以前の彌太郎羽織着流しにて桃色の手拭を大盡冠りにして出る、是れを以前の權太夫羽織着流しの茶屋の亭主にて、留めながら出來る、立田この體を見て、
立田　どなたかと存じましたら、山井甚助さまでござりまするか、まあ〳〵奧へいらつしやりませ。
彌太　いや〳〵奧へ參つては居られぬ、身が揚げづめの高尾太夫を、外の客へ出されては一分が立たぬ

歸るぞ〳〵。

權太　假令揚げ詰めでござりませうとも、おいらんが外のお客へ出たいとおつしやれば、仕方がござりませぬ。

彌太　さう聞いては猶立たぬ。歸るぞ〳〵、留るな〳〵。

權太　まあ〳〵お待ちなされませ。（ト兩人爭つて居るゆゑ、綱吉此の體を見て、）

綱吉　や、そちや彌太郎に權太夫ではないか、替つた身裝で何の眞似ぢや。（ト立田こちらへ來り、）

立田　あれが、おいらんに嫌はれましたを、怒つて歸る身振でござります。

綱吉　いや、嫌はれるとは面白いな。

彌太　いや、此奴が〳〵、黑闇の恥ぢを明るみへ出して、さう吹聽されては猶立たぬ、三日月ではあるまいし、宵にちらりと顏を見せたばかり、九つになつても八つになつても高尾めが寄附ぬとは、あぶがあるに違ひない。

立田　あゝもし、間夫〳〵。（トこれを聞き彌太郎心附いて、）

彌太　おゝさうぢや、あぶではない間夫があらう。料簡ならぬ、歸るぞ〳〵。

權太　もし〳〵甚助さま、鷄の玉子ではあるまいし、かへる〳〵とおつしやつても、もう引過ぎでござ

りますから、御機嫌をお直しなされて、お床へお出なさいまし。
彌太　いや〳〵留るな、歸るぞ〳〵。
權太　まあ〳〵お待ちなさいまし。（ト留めて居る、おさめ思入あつて、）
さめ　もし親方さん、捨ておいておくんなまし、何ぞといふと揚げ詰めぢやの買切りぢやのと大盡あめ。
立田　あゝもし、おめではない風々。
さめ　おゝさうぢや大盡風、えゝもう雨でも風でもきつい嫌ひ、早く歸して下さりませいなあ。
ト言ひ難さうにいふ、これにて彌太郎態とむつとして、
彌太　こいつが〳〵、さう言へばこつちも意地づく、身請けをして連れて行くぞよ。
さめ　いえ〳〵身請けを遊ばしても、心は自由になりんせぬぞえ。
彌太　えゝ、どう云へば斯ういふと、やけそこぢや。
立田　あゝもし、やけすこ〳〵。
彌太　おゝさうぢや、やけすこに酒を吞むぞよ。
權太　あゝもし、御酒をお上りなされますなら、二階へいつてお上りなさいまし。
彌太　いや〳〵、何でも爰で吞むのぢや、こりや女共酒をもて〳〵。（ト手を叩けども返事をせぬといふ思

入にて、）ゑゝ女共まで、馬鹿にし居るか。

ト腹の立つ思入よろしく、綱吉此の内杯を取りあげ酒を呑み居て、

綱吉　酒が欲しくば、これを遣はす。（ト杯を差出すを、）

さめ　あゝもし、其のお杯はわたしが、（ト綱吉の杯を引取り、おさめ呑かけを呑むことよろしく。）

彌太　あれ〳〵あんな事をしをる。（ト腹の立つ思入にて、）こりや〳〵亭主、これへ来やれ〳〵。

權太　へい〳〵何御用でござります。（ト兩人平舞臺の下手へ來り、彌太郎下に居て、）

彌太　あれでは身共の顔が立たぬ、どうしてくれる〳〵。（ト叩き立てゝ言ふ、）

權太　いえ、こればかりは私共の力にも及びませぬ、まあ今晩はお歸りなすつて、又出直しとなされませ。

彌太　えゝ、出直して參る程なら、其の方に相談はせぬ、爰に居たいから左樣申すのぢや。

權太　それでもあなた、たつた今歸る〳〵とおつしやつたではござりませぬか。

彌太　いや、歸ると言つたは、身共の事ではない。

權太　さうして誰れのことでござります。

彌太　それはあの、おゝさうぢや、高尾の仕打が、呆れかへると申すのぢや。

權太　左樣なことをおつしやるから、あなたはおいらんに嫌はれます。
彌太　然らば何にも申さぬから、好かれるやうにしてくりやれ。
權太　そんなら何にもおつしやらず、兎も角もお歸りなされませ。
彌太　それではやつぱり歸るのか。
權太　それ、旦那のお履物だ。
彌太　はい〳〵畏りました。（ト雪踏を持つて出て、よき所へ直す、）
權太　え〻、追出すやうに仕居るわえ。
彌太　はて、振られて歸る果報者でござります。
權太　どうやら是れは、阿房ものぢやわえ。（ト雪踏をはく、）
立田　左樣ならお遠い内に、（ト彌太郎空を見て、）
彌太　今宵も高尾に振られたが、道で雨に降られねばよいが。
ト唄になり、彌太郎しを〳〵として花道へ行き、冠りし手拭を取り、ちよつと思入あつて花道へ入る、
跡浮いた合方になり
綱吉　いや、彌太郎の今の身振は、大出來であつたわえ。

老女　とてものことに、間夫狂ひのもてる所を、上様に、

新造　此の場で御覽に入れましたら、

同　又一入のお慰み、

遣手　差し詰め間夫は、（ト綱吉へ思入あつて、）

三人　でござりますわいなあ。（ト綱吉思入あつて、）

綱吉　して持てるとは、如何いたすのぢや。（ト權太夫前へ出で、）

權太　恐れながら、上樣には間夫にお成り遊ばしませ。

綱吉　でも、予は勝手を不案内ぢや。

權太　その儀は、斯くいふ權太夫めと、是れなる立田と兩人にて御傳授をいたしますれば、何でも二人がいたす通りを、それにてお眞似をなされまするると、自然と御合點が參りまする。

立田　間夫にお成り遊ばしまするると、只今のお客のやうに嫌はれますのと違ひまして、餘程面白うござりまする。

綱吉　然らば傳授いたしてくりやれ。

權太　委細承知仕つる。

遣手　左樣なれば、わたくし共は、
一　お次へ參るで、
女形皆々　ござりまする。（卜これにておさめ、言ふことを忘れしこなしにて、）
さめ　何と言うたら、（卜立田へこなし、立田傾城の思入にて、）
立田　用があれば呼ぶ程に子供を連れて次へ立ちや、（卜言ひかけて心附き、）おやまあ、私がおいらんになりました。
遣新三人　今宵はおしめり、（卜言ひかけるを、）
立田　あゝもし、おしげり、
遣新三人　おしげりなんしえ。
卜通り神樂、すがゝきになり、遣手、新造二人、禿二人下手へ入る。
腰元四人　どれ、お床にいたしませう。
卜誂への合方になり、あちこちを片附け、奥より誂への夏夜具、黑塗比翼紋房の下りし枕を二ツ持て出で、二重の眞中へ蒲團を敷き、上手の金屛風を後へ立廻す。此の內權太夫は綱吉に羽織を脫がせる、立田はおさめに裲襠を取らせることよろしく、腰元四人は枕元へ煙草盆を直し奧へ入る。

權太　先づこの上へ上樣と、

立田　おいらんも御一緒に、

綱吉　どうやら是れは婚禮のやうぢや。（ト蒲團の上へ住ふ。）

さめ　上樣、御免遊ばしませ。

ト會釋をしてやはり蒲團の上へ住ふ、これより媚いたる合方になり、權太夫立田は有合ふ煙草盆と煙管を持ち、平舞臺へ並んで住ひ、立田煙草を吸ひつけて、

立田　もし、一服お上んなんし。（ト權太夫へ出す、おさめ是れを見て居て、此の通りに眞似をして、）

さめ　一服お上んなんし。（ト綱吉へ出す、權太夫思入あつて、）

權太　いやその煙草は吞みたくねえ。

綱吉　いやその煙草は吞みたくねえ。（ト言ひにくさうに言ふ。）

立田　そりや又なぜでありんすえ。

さめ　そりや又なぜでありんすえ。

權太　氣休め煙草を吞まして置いて、枕の番は眞平だつ

綱吉　これはむづかしい、もう一遍言つてくりやれ。

權太　氣休め煙草を呑ましておいて、
綱吉　氣休め煙草を呑ましておいて、
權太　枕の番は眞平だ。
綱吉　枕の番は眞平だ。
立田　しみ〲憎い口ざますよ。（ト立田權太夫の膝を抓る）
權太　あゝ痛い、本當に抓るのか。（ト膝を擦つて居る、おさめ之れを見て）
さめ　しみ〲憎い口ざますよ。（ト綱吉の膝を抓る眞似をする）
綱吉　あゝ、痛い、本當に抓るのか。（トやはり膝をさすつて居るゆゑ、權太夫氣を揉み）
權太　いえ、左樣ではござりませぬ。
綱吉　いえ、左樣ではござりませぬ。
立田　あれ、間違ひました。
さめ　あれ、間違ひました。（ト是れにて權太夫氣を揉み）
權太　えゝ、とんだことを言つた。
綱吉　えゝ、とんだことを言つた。

權太　こりや困つたものだ。
綱吉　こりや困つたものだ。（ト同じことをいふゆゑ、）
權太　これはしたり、只今のは拙者めが申し違ひ、ただあゝ痛いと申すのでござります。
　　ト是れに綱吉呑み込み、
綱吉　ただ、あゝ痛い。
立田　おや、誰に逢ひたうざます。
さめ　おや、誰に逢ひたうざます。
權太　おぬしに、斯うして逢ひたいのよ。
綱吉　おぬしに、斯うして逢ひたいのよ。
立田　その口を忘れなますな。
綱吉　その口を忘れなますな。
權太　忘れなければどうする氣だ。
綱吉　忘れなければどうする氣だ。
立田　忘れなんすと、かうしますよ。（ト權太夫の鼻へ紙縒を入れる。）

さめ　忘れなんすと、かうしますよ。（ト綱吉の鼻へ紙縒を入れる。）

權太　ハツクシヨ、

綱吉　ハツクシヨ、これはなか〳〵、（ト鼻へ手をあてるを道具替りを知せ。）

權太　むづかしいことぢやなあ。

ト双方よろしくこなし、雷の音になり、なまめいたる合方にて道具廻る。

（柳橋出羽屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の附屋體、これに本物の葭戸を閉切りこの内に蚊帳を釣込みあること、二重正面一間大阪格子の出入り、上の方一間中仕切りのある間平戸の戸棚、下の方一面に板羽目、この前に丸物の中銅壺の竈の後を見せ、いつもの所門口、柱に出羽屋といふ掛行燈、この外一間腰張障子、これへ太字で船宿と一杯に記しあり、此の下手へ一面忍び返しのある黑塀、總て柳橋船宿見世のかゝり、爰におせん下女の打扮にて長火鉢へ鐵瓶をかけ、この下を團扇にてあふぎ居る、道具半程より雷の音を打上げ、雨車端唄の合方にて道具留る、と下手より長次長半纏船頭のこしらへにて、柳ばし出羽屋と記したる番傘をさし下駄にて出來り、門口を明けて、

長次　おせんどん、何をして居るのだ。

せん　今し方の雷さまの騷ぎで、火も何も消してしまつたから、今おこして居るのさ。

長次　扨は雷さまの取持ちで、浮氣なことでもしやあしねえか。
せん　そんな意氣なことは、人がするわね。
長次　姉御も親方も今日は留守かえ。
せん　親方さんはお午過ぎから、講釋を聞きにお出なすつたのさ。
　　　ト これにて長次内へ入り、上手の屋體を見て、
長次　見りやあ、奥に蚊帳が釣つてあるぢやあねえか。
せん　雷さまでお上さんが癪をお起しなさつたから、蚊帳を釣つてあげたのさ。
長次　何だ、姉御が癪を起した、そいつあとんだ米をこぼした。
せん　なに、お米をこぼしたとわえ。
長次　あの美しい内の姉御が癪を起すと知つたなら、おれが押してやるだつけ、雷立とは來てゐるし、ごたくさ紛れに、いえさ、友達が來てごたくしたので、見世へ來るのが遲くなつた。
せん　お前が癪をお押しだと、餘計に惡くなるだらう。
長次　そんなに安くしねえものだ、（ト門口の雪踏を見て、）こりやあ見覺えの雪踏だが、武藏屋の旦那のぢやあねえか。

せん　よくお前、知つておいでだ。
長次　年中お供をする旦那の雪踏だ、知らなくつてどうするものか。
せん　ほんに、商賣にはみゝッちいねえ。
長次　それぢやあ奥へ來て居なさるのか。
せん　さつきお湯へお上さんの傘を持て迎ひに行つた歸りに、同朋町の角に降込められて雨宿りをして
おいでになつたから、内へお連れ申したのさ。
長次　それぢやあ奥へ顏を出して來よう。（ト立ちかゝるを）
せん　あゝもし、奥へ行つては惡いわいなあ。
長次　何ぞ差合か。
せん　いえ差合はござんせぬが、よくおよつておいでなさるから。
ト是れにて長次、扨はといふ思入にて、
長次　こいつは何だか氣が揉めて來た。
ト下に居る、合方きつばりとなり、上手の葭戸を明け、おりう船宿の女房、洗ひ髪浴衣しごき裝にて
團扇を持ち出で來り

りう　長公、おいでか。（ト長次、おりうを見て、）
長次　姉御、先程はつよい雷立でございました。
りう　わたしやお前の知つての通り、何より嫌ひな雷さまゆゑ、蚊帳へはひつて顫へて居たわね。
長次　それでも木場の武藏屋の旦那が來てお出で、ようござりました。
　ト爰へ上手より武藏屋德兵衞、町人のこしらへ着流しにて出來り。
德兵　さつき一杯やつたので、ぐつすりと寐過ごした。（ト長次、德兵衞を見て、）
長次　旦那よくいらつしやいました。
德兵　おゝ長公か、今日は仕事にでも行つて居たのか。（トよろしく住ふ。）
長次　いえ、金太の野郎が間違ひをしまして、昨夜仲直りの夜明しで今しがたまで寐坊をしましたが、雷立で目が覺めまして、こちらへ出かけて參りました。
德兵　何にしろ一杯やるから、ゆつくり遊んで行くがいゝ。
長次　それは有難うござります。
德兵　おい、おせんや鮒治へいつて中位な所を、一兩ばかりさう言つて來てくれ。
りう　旦那、そんなには多うございますよ。

徳兵　なに、忠五郎も喰ふだらうから、ちつと餘計に言つてやるがいゝ。
りう　いえ、内の人はどうでもようござります。
徳兵　さうでねえから、行つて來てくれ。
せん　左樣なら行つて參りませう、（ト門口へ出掛け、）長どん、お燗を賴むよ。
長次　おつと、承知だ。
せん　どれ行つて來ませう。（ト件の番傘をさし雨車にて、おせん花道へ入る。）
長次　どれ、支度をして來ませう。（ト正面の大格子を明けて入る、跡見送つておりう小聲になり、）
りう　旦那、きつとでございますよ。
徳兵　いゝから早く床を片附けねえ。
りう　そんなにお怖がりなさらないでも、知れたつて構ひますものか。
徳兵　それだからおらァ困る、忠五郎に覺られねえやうに、
りう　いつそ亭主がなかつたら、（ト徳兵衞に寄り添ふ、此の時後にて、）
長次　新漬はなかつたか知らん。（ト聲するゆゑ、おりう立上り、）
りう　しみ〴〵じれつたうございますよ。

ト こなしあつておりう上手の屋體へ入る、爰へ正面の口より長次、夜食膳へ香物鉢杯洗燗德利などを載せ持ち出て來り。

長次 旦那、お待遠でござります。（ト鐵瓶にて燗をつける、）

德兵 いや、大きに御苦勞だの。

長次 どういたしまして、こつちの家ならわつちの家より勝手をよく知つて居ります。

德兵 なるほど、お前は自分の家より、こつちの家に餘計に居たらう。

長次 有難えことにこつちの家で、可愛がつてくれますので、長公も仕合せでござります。時に旦那、こつちの姉御は素敵者でござりますね。

德兵 おれも別品だとは思つて居るが、亭主があつちやあ仕方がねえ。

長次 何のお前さん構やあしません、こつちの家の親方は、元お前さんの家の若い者で、首尾よく勤めた其の縁で、斯うして船宿の見世まで立派に出してお貰ひ申せば、こりやあみんな旦那のお蔭、何の事はねえこの家の爲には、公方樣も同然でござりますから、假令どんな事をなさらうと、ぷ、、つりとも言やあしません。

德兵 いやさうでねえ、恩が着せてあるだけに間男なんぞをしちやあ濟まねえ、おれも女ぢやあ懲々し

たから、嘘にもそんなことを言つてくれるな。
長次　言つてくれるなとおつしやつても、旦那のお口の端へ紅がついて居りますぜ。
徳兵　えゝ、（トびつくりして浴衣の袖にて拭いて、）なあに、こりやあ蚊の血だわな。
長次　（燗を見て、）旦那、お燗がつきました。（トおりう上手より出來りて）
りう　おや長公、憚りだねえ。
長次　いえ、長公のお酌ぢやあ御不承知でございます。
徳兵　なにさ、この方が無事でいゝのよ。
りう　どうせ婆アのお酌では、お酒がおいしくございますまい。
長次　何のかんのと紅の癖に、（トこれより一寸酒盛りあつて、徳兵衞紙入より金を出して紙に包み、）
徳兵　長公ちつとばかりだ。（ト出す、長次取つて、）
長次　これは毎度有難うございます、姉御よろしくお願ひ申します。
りう　とんだ御散財をかけて濟みませんねえ。（ト長次祝儀を腹掛の隱しへ入れる。）
徳兵　時に長公、今日のことは忠五郎に默つて居てくれ。
長次　そりやあ、わつちでございます、大丈夫でございます。

りう　おや、旦那何故でござりますえ。

徳兵　はて、なんぼ雷が鳴つたといつて、亭主の留守に蚊帳の内へ、二人が入つて居たといつちやあ、おらあ構はねえが女が迷惑するから。

りう　あれ、好いぢやあございませんか、内の人の爲には大事な旦那と、蚊帳の内に居たくらゐな事でとやかう言れちやあ引合ひませんよ。

長次　そりやあ姉御のいふ通り、こつちの家は釜の下の灰までも旦那のもの、口の端に紅がついて居たつて、何の構ふことがありますものか。

ト これにておりうびつくりして自分の口の端を手拭でふいて見て、

りう　いゝ加減なことをお言ひでないよ。

徳兵　なにさ、そりやあ門違ひだ。

長次　まあ一杯いたゞきませう。（ト酒盛りよろしく。）

徳兵　長公、香々ばかりぢやあ酒が呑めねえなあ。

りう　鰻はどうしたらうねえ。

徳兵　鰻だから長いのよ。

長次　鰻の來るまで、これを肴に、(ト卵子を出す。)

りう　さすがは長公、氣が利いてゐるの。

德兵　當のないのに困つたものだ。

長次　はて、二番目がゝつた仕込故、種ごしらへをなさいましな。

　トこれにておりうこなしあつて、

りう　どれ、旦那に一つ、

　ト膳の上の小皿を取り件の卵子を膳の小縁にて、ぽんと割るを道具替りの知せ、

いゝ卵子だねえ。

　トこの模樣端唄にて道具元へ戻る。

(奥座敷の場)――本舞臺元の道具、二重眞中に屛風立廻しあり、二重の上手に以前のおたか白木の臺の上に祝儀包みを大分に載せ前に置いて住ひ、平舞臺に以前の遣手の老女腰元六人手をつかへ居る、此の模樣合方にて道具留る。

老女　わたくし共を召されましたは、

皆々　何御用でござりまする。
たか　これへ呼んだは外でもない、今日上様お成りに付き、老女をはじめ腰元共へ皆それ〴〵の役をいひつけお取持をさせし所、殊の外御意に叶ひ上様にも御機嫌ゆゑ、父上様にもお悦び、家中の者一同へ御褒美を下さる間、女子達へは、わらはよりお取次をするわいなう。
老女　それは〳〵有難い、私共へ下されもの、
一　お局さまは御老功ゆゑ、首尾よく參りし遣手の役、
二　なれぬ事ゆゑ、茶屋女や新造の役も附焼刄、
三　身の取り廻しや詞遣ひも、どうしてよいやら惡いやら、
四　お笑ひ草とは申しながら、餘り不出來でござりましたゆゑ、
五　きつとお後でお叱りの、御沙汰が上から出ようかと、
六　心配いたして居りましたを、それに引替へ御褒美とは、
老女　有難いことで、
皆々　ござりまする。
たか　さあ〳〵そちらへ請取りませうぞ。（ト件の祝儀包みを老女へ渡す、老女皆々へ一包宛渡して）

老女　有難く頂戴。

皆々　いたしまする。

たか　さあ〳〵、部屋へ引取りませうぞ。（ト是れにて皆々立上り、）

老女　もし皆さん、これと申すも廓から我君様が此の間お身請けを遊ばした、御愛妾の立田さまがお師匠番で、わたくし共へお敎へなされて下されたゆゑ、

一　ほんにそれ〳〵、立田さまのみんなお陰でござりまする。

二　これから皆さん連立つて、立田さまのお部屋へ行き、

三　お禮を申さうぢやござりませぬか。

皆々　ほんに、左樣いたしませう。

老女　左樣なれば我君さまへ、

一　よろしうお願ひ、

皆々　申しまする。

たか　合點ぢやわいなう。

皆々　さあ〳〵、參りませう、（ト皆々連立ち下手へ入る、おたか跡見送りて思入あつて、）

たか　思ひ廻せば人の身の浮き沈みある世の中に、淵瀬とかはる習ひとは、よう言うたものぢやなあ、(ト是より合方になり、) 身の不仕合に一度は町家へ交はり苦勞をせしも、此お屋敷へ貰ひうけられ養女となりしのみならず、今日上樣より冥加ない上意は嬉しいことながら、實の父上母上は如何なされしことなるか、(ト愁ひのこなしあつて氣を替へ、) 夏の雨とはいひながら、常から嫌ひな雷さまが、さつきはきつうお鳴りなされて、烈しい降りであつたれど、もう今の間に雲もはれ、好い空合になるといふは、世の俗說にも馬の背を、わけるとやらであらうわいなあ、(ト此の時暮六つの太鼓鳴るゆゑ、) ありやもう六つのお太鼓ぢやわいなあ。

ト早き合方、ばた／＼になり、花道より以前の主水出來り、あちこちを見廻すことあつておたかを見て、

主水　おたかどのとやら、これにをられしか。

たか　あなたは最前お見受け申した、主水さまではござりませぬか。

主水　如何にも菅沼主水でござるが、して上樣には何れの御座所にお渡りあるか、御存じなきや。

たか　その上樣には殊の外、御酒をお過し遊ばして御寢なつてゐらせられまする。

主水　して／＼、それは何れのお寢間に、

たか　則ち是れなるお屏風の、
主水　すりや、あの、これに、(ト思入あつて、)して〳〵お附の備後どのは、
たか　備後さまには御酩酊にて、お次にやはり御寢なつて、
主水　それゆゑ拙者が先刻も、御諫言申し上げしに、これに御息女の居らるゝからは、
たか　えゝ、
主水　して、御介抱は誰が申しあげしぞ。
たか　その御介抱は母上が、申し上げましてござりまする。
主水　すりや御當家の奥方が、(ト少し心の落着きこなしにて、)なには格別、暮六つの最早太鼓を打ち切りましたと、申し上げて下されい。
たか　畏りましてござりまする。(ト立たうとする、此の時屏風の内にて、)
綱吉　あいや參るに及ばぬ、それへ行くぞよ。(ト是れを聞き、)
主水　すりや上樣には、お目覺めなるか。

ト合方きつぱりとなり、屏風の内より將軍綱吉、羽織袴一本ざしにて出る、後よりおさめ傾城裲襠にて、紫の袱紗にて綱吉の刀を持ち附添ひ出る、主水この體を見て、

はて、奥方には媚きし、
さめ　えゝ、
主水　派手やかなことぢやなあ。（ト心得ぬこなし、）
綱吉　家中一同心を盡せし今日の款待は、綱吉身に取り過分なるぞ。
さめ　折角御入あらせられしに、これぞと申す風情もなく、恐れ入りましてござりまする。
主水　はつ、最早只今暮六つのお太鼓を打切りますれば、御歸館あつて然るべし。
綱吉　おゝ、供觸れいたせ。
主水　はつ。（ト向うへむかひ、）上樣御歸館。（ト呼ぶ、是れにて花道揚幕の内にて、
ト聲する。これにて上手より以前の出羽守彌太郎、權太夫上下一本ざしにて出來り、平舞臺上手に下に居て、
大勢　はあゝ。
彌太　はつ、幸ひ雨も小止みに相成り、歸館の路次も御都合よろしく、
權太　實にや天下の御勢ひ、
彌太　恐悦至極に、

彌太
權太　存じまする。(トよろしく辭儀をなす、綱吉兩人を見て、)

綱吉　おゝ出羽守なるか、權太夫が今日の趣向返す〲も心に叶うた、やがて褒美の沙汰に及ぶぞ。

彌太　はつ、さしてもなき儀が御意に叶ひ、

權太　有難い仕合せに存じまする。

　　ト爰へばた〱にて下手より以前の備後守出來り、平舞臺下手に下に居て

備後　はゝつ、失禮御免下さりませう。(ト綱吉備後守を見て、)

綱吉　おゝ備後か、面白いことであつたな。

備後　はつ、御意にござりまする。(ト間の惡き思入よろしく、)

さめ　何卒またのお成りの儀を、

たか　偏に願ひ奉りまする。

綱吉　予も今日は殘り多いぞ。

　　ト此の內備後守、おさめの持つてゐる綱吉の刀を受取ることよろしく、主水庭下駄をよき所へ直し、

主水　いざ〱御供、

主水
備後　仕つらん。

彌太 門外までは、
彌太 お見送り、
權太
さめ わたくし共は、
たか 女子の儀ゆゑ、
綱吉 さらばぢや。

ト二重より下りようとするを、おさめ若しと綱吉の袂を控へる、是れにて綱吉むゝと領く、主水はこれを見て南無三といふ思入、彌太郎權太夫はしめたといふこなし、双方見合せるを木のかしら、二重眞中に綱吉、上手におさめ、下手におたか、平舞臺上手に彌太郎、權太夫、下手に主水、備後守、みなみな引ばりよろしく行列三重にて、

ひやうし幕

三幕目

朝妻船遊興の場
出羽屋別宅の場
奥庭御茶屋の場

（淨瑠璃）　多賀潮湖が二枚折、建し屏風の蝶番ひ　夢結朝妻船　（常磐津連中）

〔役名――大樹綱吉公、柳澤出羽守、井伊掃部頭、出羽屋忠五郎、武藏屋德兵衞、お柳の兄五郎藏、茶道春齋、同珍才、船頭三吉、同六次、寄席下足番吉藏。柳澤内室おさめ、忠五郎女房おりう、大樹愛妾おたか、乳母おとら、出羽屋下女おせん、其他。〕

本舞臺一面の淺黄幕、上の方樹木の張物、下の方建仁寺垣、日覆より柳の釣枝、爰に船頭○△單衣三尺帶、駒下駄のこしらへ、□は單衣の上へ紺半纏、草履、寄席の下足番のこしらへ、手に卷きたるビラを持ち立掛り居る、流行唄にて幕明く。

○　かう吉公、そつちの家は此の頃めつぽふ好い席になつたが、

△　來月は誰が掛つたか、好いものが出るだらうな。

□　はい、晝は伯圓先生が報知新聞を一席に、後座は河内山でございます。

○　ありやあ先生の十八番だから、こいつアしつかり入るだらう。

△　さうして夜講は誰だえ。

□　夜は伯山先生が天一坊でございます。

○　これも川崎へ引込んだ先伯山からの名代もの。

△晝夜ともに客留めだぜ。
□有難うございます、又來月の夜は南窓先生が、掛持ちなしに伊達の立讀みでございます。
○こいつも聞きに行かにやあならねえ。
△立花屋へは誰が出るえ。
□たしか圓朝さんに圓橘さんでございます。
○梅屋敷の師匠ぐらゐ好い弟子を持つたものはねえの。
△そのうちで圓橘なぞは、丸で師匠の行き方だ。
○手に持つてゐるのは、來月のびらか。
□いえ、是れは明日明後日の、讀切りのびらでございます。
○好い顏が出るだらうの。
□先づ燕林先生に南龍先生、一々わたしが申しますより、此のびらを御覽なさいまし。
○どれ〳〵誰が出るか、讀んで見よう、（トこれを開き、）淨瑠璃名題——（ト名題を讀む、△それを取つて、）
△淨瑠璃太夫、常磐津——（ト連名を讀み、又□へ渡す。）

□　相勤めまする役人――（ト役人を讀み終つて、）

△　こりやあ、五目のびらぢやあねえか。

□　浪花町で間違つたか知らぬ。

○　てつきりこりやあ噂のあつた、燕枝が作者で、文治などが洒落に狂言をすると聞いたが、大方そんな事に使ふのだらう。

□　何にしろ浪花町まで、取替へに行かにやあならねえ。

○　そいつは大きに御苦勞だな。

□　とても事に御苦勞序に、いよ〳〵此の處淨瑠璃始まり、その爲め口上左樣。

○△　イヨ、御苦勞。

ト又流行唄になり上手へ入る、波の音になり、下手建仁寺垣を打返し、爰に常磐津連中居並び直ぐに淨瑠璃になる。

〽このねぬる朝妻船の淺からぬ、契りかはして上もなき君に近江の名所を、爰に移せし遊び女も興に入江の水馴棹、

ト波の音小鼓の入りし鳴物になり、よき程に知せに附き淺黃幕を切つて落す。

（朝妻船の場）＝本舞臺三間の間低き土手板、この後一面泉水の心にて流れの書割の布を敷き、正面奥庭の遠見、上の方樹木の張物にて見切り、よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、下の方淨瑠璃臺、右の泉水に誂への船、眞中におさめ金烏帽子水干中啓を持ち、上手に綱吉棒茶筌、紫の置き袱紗、羽織衣裳一本ざし鼓を持ちて立ち、下手に出羽守袴一本ざし船竿を持ち立身、この見得にて道具納まる。

〽仇し仇波よせては返る、こがれ寄邊のたはむれに、枕はづかし睦言もいつはり勝の烏籠の山、よしそれとても風に連れ、なびく柳の木下蔭、〽いともやさしき風情なり。

ト三人振りあつて小鼓の合方になり、

綱吉　なう〳〵船人、こゝはいづくの浦なるぞ。

出羽　爰は近江の朝妻と申す船泊りにて候。

綱吉　して又これなる遊び女が、烏帽子水干着せしは、

さめ　拙き舞の一指に、旅路の興を添へまする。

綱吉　それは一段のことなるが、われ等は當所始めてゆゑ、先づ近江路の名所古蹟を具に語りて、聞かせ候へ。

出羽　名所古蹟のお話しは、いとより易きことながら、我等よりは遊び女どのが、これは宜しうござりまする。

さめ　いえ〳〵、わらはは女子のこと、名所とても朧げなれば、やはりこれは船頭どの、

出羽　いや〳〵、これは遊び女どの、

綱吉　いらぬ爭ひいたさずと、とく〳〵此の場で語り候へ、

出羽　然らば君の仰せに隨ひ、誰れ彼れなしに二人して、

さめ　名にしあふみの名どころを、

綱吉　これにて所望いたすぞよ、

出羽　さらばお話し、

兩人　申しませう。

〽岸へおりたち携へし、鼓の拍子打ちすゝめ、

トこの内平舞臺へ出て、綱吉上手床几へかけ、出羽守下手へ控へ、おさめ前へ出て、

〽名にしあふみの八景と世に聞えしは瀟湘の景色を寫す琵琶の湖、波の粟津の朝嵐あさる鷗のむれたちて、追手に並ぶ眞帆片帆矢走へ歸る船の帆に、まばゆき瀬田の夕日影、

ト おさめ振あつて合方にて後へ下る、出羽守扇を持ち前に出て、

〽春の花には三井寺に晩るを惜しむ鐘の聲、秋の月には石山に明るを惜しむ鷄の聲、

〽其の鷄鐘の別れ路も知らで蘆間に去年今年、翼重ねてしつぼりと放れ堅田の雁金は、水に浮寐の浮御堂、

ト 出羽守振あつて、おさめ烏帽子水干を取り、綱吉と兩人前へ出て、

〽濡れて嬉しき唐崎の松に夜雨のさら〳〵と降るはみぞれか玉霰、伊吹おろしにくる〳〵と巴に廻る比良の雪、

ト 三人雪の合方にて振よろしくあつて、

〽飽かぬ眺めの八つの景、(ト三人振あつてをさまる。)

綱吉 これは中々面白かつた、とてもの事に今一度何ぞ踊りを見たいものぢや。

出羽 畏まりましてござりまするが、一ツ顔で踊りましてはお慰みになりませぬ。

さめ 幸ひ向うへ黑木賣り、續いて後へ座頭どのが、然も君が御祕藏のお犬を伴ひまゐりまする。

綱吉 それは一段のことなるぞ。

〽待つ間ほどなく向うより黑木かつぎし大原女が、

ト出の鳴物になり、花道より大原女田舍染の振袖、手甲脚絆草鞋の打扮にて、黒木を頭へ載せて出來り、花道へとまり、

〽わしが在所は比叡近き京の田舍の片邊、八瀨の里から朝まだき花の都へ深山木の作らぬ裝も厭はずに色氣白齒の褄からげ、黑木買はんせんかいな、聲面白く呼來り、

ト兩人花道で振あつて舞臺へ來り向うを招く、

〽招けば後へ氣も輕く、

ト合方になり、花道より春齋坊主鬘袴下駄がけ、座頭のこしらへに杖を突き出來る、後より珍才縫包みの犬、首へ天照皇太神宮といふ札と錢を結び附け、附添ひ出て來り、花道へ留り、

〽是れは官位をとりが鳴く東を立つて一筋の、都へ上る座頭の坊、杖をよすがに山道をがつくりそつくり、道連れは伊勢參宮のお犬どの、ちよつと立場で一杯と酒に目のなき我等ゆゑ彼奴めに肴をしてやられ、其のお拂ひはあやまはり、上下五十三次を打連れだちて來りける。

ト春齋、珍才の犬を相手によろしく振あつて舞臺へ來る。

さめ　よい所へ座頭どの、これにお出でなさるのは尊い東のお客さま、何ぞお慰みになる事を、

春齋　オツト皆までのたまふな、それは我等が生業ゆゑ、何ぞお聞きに入れませう。

綱吉　こりや座頭、その方は何れの者ぢや。
春齋　へい、わたくしは遙か遠い東の者でござりますが、官位は附けたり、有りやうは都を見物いたさうと參りましてござりまする。
出羽　座頭が都見物とは、ちと受け取りにくい話しなるが、
さめ　少しはお前、目が見えるかえ。
春齋　いや、兩眼ともに見えませぬが、子供の折から盲目ゆゑ勘のよいのが一德で、目は見えませぬが此の鼻が、どんなことでも嗅ぎ分けます。
大原　いえ、あんまり勘のよいこともござんすまい、此の先の一里塚でどつちへ行つてよいことかと、路に迷つて脇へ入り、すでのこと池の中へ落ちるところでござんしたぞえ。
春齋　それは汝に見とれた故、
綱吉　なに、見とれたとは、
春齋　いえ、嗅ぎとれたのでござります。
綱吉　して其の方が連れて參りし、それなる犬はよい犬ぢやが、それは何れの犬なるぞ。
春齋　へい、是れはやつぱり私と同じ所の江戸產れ、伊勢へ參りまするゆゑ、一人旅の道連れにいたし

ましてござりまする。

出羽　座頭に犬は大津繪で放れぬ中のよい道連れ。

さめ　幸ひそれなる犬を相手に、

綱吉　興ある事を所望いたすぞ。

春齋　はつ、畏つてござりますが、先づその前に大原女どの、何ぞ一つやつて下され。

大原　それぢやというて、田舍者のわたしなどが何をまあ、

出羽　遠慮はいらぬ、さあ〳〵早く、

春齋　それ御所望ぢや、やつたり〳〵、

大原　左樣なれば、ふつゝかながら、（ト手拭を持ち前へいで）

〽大原祭りの雜魚寢の夜さは、誰が誰やら顏さへも知らず知られぬ戀の闇、さはる手先がなんなかだちに結ぶ夜露に袖つま濡れて、黑木枕にしよんがいな。

ト手拭をつかひ振あつて納る、春齋前へ出て、

春齋　然らばこれよりわたくしが、昨夜泊りし旅籠屋で嗅ぎ分けましたざれごとを、つまんでお聞かせ申しませう。

〽宿が大津に旅籠屋の、家名も同じ大津屋に大津繪仲間の泊り客、お伊勢參りか金滿の旦那は名代の福祿壽〽お側去らずの座頭をはじめ、廻り髮結の階子剃り、取巻く辨慶、雷がわるい騷ぎの太鼓持、出入頭の船頭がういて來たさのサツサ節。

ト この內春齋振あつて、これより大原女出で、兩人とも桃色の手拭を冠り、

〽三上百足は足澤山よサツサ、俵藤太が十人張りでサツサ、ねらひ外さず大當りサツサ、ヨイコノ〱。（ト振あつて、）

〽續いてひよこ〱大黑が、（ト春齋赤い手拭を冠り、一寸法師の心にて膝を屈め振になる、）

〽筑摩祭は鍋澤山よサツサ、五枚七枚十枚重ねサツサ、鍋で男の數知れるサツサ、ヨイコノヨイコノ、（ト振あつて、）

〽廊下隔てし小座敷へ、矢の根五郎の矢屛風を建てこつそりお若衆と、由緣の色の藤娘、

〽瓢簞鯰のぬらくらと癡話りし果が、鬼の目をぬいて携ふ高飛びに、

ト 此の內春齋は若衆、大原女は藤娘にて兩人をかしみの振り、結局兩人逃げる振り宜しくあつて、

〽岡燒餠に角振り立て、荒氣の鬼と雷が鉦と太鼓を打ち叩き、〽迷子の〱藤娘やァい、どどゞん、どんちやん、どんつくな、〽寐て居た犬の尾を踏んで、踝したゝか喰ひ附かれ、

きやつきやと騒ぐ犬と猿、
ト兩人振りあつて振りの留り、春齋杖で犬を打つ、犬わんわんと啼く。

出羽　こりやこりや、なぜ犬を打つのだ。

春齋　これは狂言でござりまする。

出羽　假令狂言じあらうとも、お犬を打つては濟まざるぞ。

春齋　御免なされて下さりませ。

綱吉　予が戌の年なるゆゑ、犬を粗略にいたすなと、かねて布告を出せしに打擲なせしは憎い奴。

春齋　へいへい恐れ入りましてござりまする。

出羽　今日の所は兩人に何卒お免じ下さりまして、

さめ　お許しなされて下さりませ。

綱吉　いやいや許すこと相成らぬ。（ト綱吉一腰へ手を掛けるを、）

さめ　もし、（ト留める、これにて口説模樣になる、）
〽その御短慮が何よりか御身の障りと手にすがり、色を含みし流し目に、ぢつと寄添ひ抱き留れば、〽衣に移りし空焚の香の薫りも憎からで、そつと身にしむ春の風、〽靡く柳のいと

しさに、いつか心も和ぎて氷も解けし澤の水。
ト此の内綱吉、柄へ手を掛け春齋を斬らうとするを、おさめ留める、綱吉振り拂ひきつとなる、おさめ後からぢつと抱付き留める、綱吉振返りおさめの顏を見て媚きし思入にて寄添ふ、出羽守腹の立つ思入にて此の中へ割つて入るをおさめ留る、綱吉又立掛るをおさめ縋り留る、この模樣口說の振にてよろしくあつて納まる。

綱吉　そち達二人が詫びなすゆゑ、今日は許してくれるぞ。

出羽
さめ　それは有難うござりまする。

綱吉　許し遣はすその代り、手を突いて犬にあやまれ。

春齋　畏まりましてござりまする。へい〳〵お犬さま、眞平御免下さりませ。（ト手を突いてあやまる思入。）

綱吉　こりや〳〵頭が高い〳〵。

春齋　へい〳〵〳〵。

綱吉　もつと頭を下げ居らぬか。

春齋　もうこれより下りませぬ。（トぴつたりと頭を下げてあやまる。）

綱吉　こりや〳〵彼れが頭に喰附いてやれ、（ト犬かぶりを振る。）なぜ頭に喰ひつかぬのだ。

犬　石頭で喰附かれませぬ。
さめ　え、この犬は口をきゝます。
珍才　あゝ暑くつてなりませぬ、少々御免下さりませ。（ト犬の頭を脱ぐと、下は坊主鬘）
綱吉　や、こりやまことの犬と思ひの外、
さめ　そなたは茶道の珍才か、
珍才　へい、珍才にござります。（ト春齋目を明き）
春齋　座頭も濁りを取りますれば、同じ仲間の茶道の春齋にござりまする。
出羽　朝妻船の御趣向に、大津繪もどきの座頭と犬は、二人とも手柄であつた。
春齋
珍才　有難うござります。（ト辭儀をする、時の鐘鳴る。）
綱吉　今鳴る鐘は最早七つ、
さめ　もう暮六つに僅か一時、
出羽　おさめが手前で上樣には、
綱吉　園へ參つて一服呑まん。
さめ　左樣なれば不束ながら、

出羽　心を用ゐてお相手いたせ。

〽いざと進めに手をとりて、森の小蔭へ落つる日と共に圍ひへ入りたまふ。

ト綱吉おさめの手を取り先きに立ち、出羽守思入あつて、大原女附添ひ上手へ入る。此の內春齋珍才平伏なし、此の時顏を上げ立上りて、

春齋　やれ〳〵とんだ役目に當り、しつかり御褒美と思ひの外、

珍才　おれがお蔭でお前も叱られ、こんなつまらぬことはないな。

春齋　何にしろお上では、是れから奥のお圍ひで、どんなお茶が始まるか。

珍才　知らぬが佛、色氣よりこつちは喰氣が第一だ、おゝ喰氣といへば、さつき預けた蕎麥饅頭を貰ひたい。

春齋　もう忘れたらうと思つたに、（ト懷から紙に包みし蕎麥饅頭を出す）

珍才　どうしてそれを忘れるものか。

〽取りに掛るを、手にさし上げ、やらじと爭ふ犬に棒。

ト見世物の鳴物になり、珍才饅頭を取りにかゝろ、春齋饅頭を差し上げてじらす、此の模樣熊使ひの模樣よろしくあつて、結局春齋杖を取つて打つ、珍才は杖を引つたくりくる〳〵と廻す、春齋珍才

を突き倒し

〽逃げ行くあとをのがさじと、棒ふり廻し追うて行く、

ト春齋上手へ逃げて入る、珍才杖を片手で廻しながら追掛け入る、時の鐘を打ちこむ。

〽折しも告ぐる三井寺の鐘の響に結びたる夢は破れて、

トどろ〳〵三重にて、太夫座を建仁寺垣の張物にて消し、知せに附き道具居所替りになる。

（出羽屋別宅の場）＝本舞臺正面波の鏡板左右へ開き兩袖になり、正面一間床の間、この脇三尺下地窓のある腰張りの茶壁、下手九尺大臣の襖出入り、上の方一間折廻し障子屋體、下手のつま腰張りの茶壁、下の方建仁寺垣、いつもの所へ枝折戸を出し、此の脇へ秋草を結込みし四ツ目垣を出し、總て駒止橋邊出羽屋別宅の體、どろ〳〵にてよろしく道具留る。と端唄の合方になり、奥より下女おせん前垂掛け、煙草盆を提げ出て來り。

せん　木場の旦那はお酒をあがるとお休みになるが癖だけれど、もうさつきから二時ばかり、何時までお休みなさるのだらう、お上さんも御一緒だが好い加減にお起きなさればよいに、（ト煙草盆を下へ置き、上手屋體の際へ來て聞き耳を立て、）おや大そう魘れておいでなさる、怖い夢でも見ておいでなさるか。若し旦那さま〳〵、お上さん〳〵、魘れなさいますからお目をお覺しなさいましよ、

お上さん〳〵。（ト上手障子屋體のうちにて、）

りう　あい〳〵目が覺めたよ、若し旦那え〳〵。（トおこす。）

德兵　思ひ掛けない夢を見て、びつしよりと汗になつた。

ト合方きつぱりとなり、上手障子屋體より德兵衞浴衣着流しにて出來り、後よりおりう帶をしめながら出來る。屋體のうちに絹夜具、後に淺妻船の畫の二枚折屏風立てあり、

りう　若し旦那、とんだ夢を見ましたね。

德兵　汗にやあなつたが面白かつた。

せん　どんな夢を御覽なさいました。

德兵　一杯やつて睡氣がつき、とろ〳〵やつた其のうちに、おれがあり〳〵夢に見たのは、おゝ是れだ是れだ、（ト淺妻船の二枚折を出し、）多賀潮湖が描いた淺妻船、これをそつくり夢に見た。

りう　わたしも是れを見ましたよ。

德兵　それぢやあおぬしも夢に見たのか。

せん　お二人一緒の夢といふのは、珍らしいことでござりますね。

りう　これまで我が目に見ないことは夢に見ないと言ひますが、成程さうでございますね、不斷見てる

る淺妻船ゆゑ、これを夢に見ましたのだ。
せん　もし、此の淺妻といふのは、全體何でございますね。
德兵　これは近江の淺妻といふ船着にゐる傀儡だが、江戸で言やあ船饅頭だ。
せん　それぢやあ女郎でございますか。
德兵　いや、大きい聲ぢやあ言はれないが、この多賀潮湖が畫いた淺妻船は恐れ多いが上樣と、此頃世間で噂の高いおさめの方だといふことだ。
りう　そんなことを言ひますが、ほんたうでございますかね。
德兵　噓か實か知らないが、まんざら形のないことを人が話しにしもしまい。
せん　それぢやあ今御覽なさいました淺妻船の此の夢では、旦那樣が上樣で、お上さんがおさめの方でございましたね。
德兵　夢とはいへど馬鹿々々しい、おれが紫の置袱紗をして、立派な羽織衣裳であつた。
りう　ほんにわたしも水干烏帽子で、今樣とでもいひさうでありました。
せん　先づその夢の役割では、旦那樣が上樣にお上さんがおさめの方、家の親方は何でございませう。
德兵　今の夢に譬へて見れば、まあ柳澤の役廻りだ。

りう　丁度所も柳ばし、

徳兵　出羽屋といふも縁があるな。

せん　なるほどさうでござりますね。お丶、それはさうと旦那様、据風呂のお湯が沸きましたが、ちよつとお入りなさいませぬか。

徳兵　お丶据風呂が沸いたなら、夢の内の汗を流して來よう、おりう一緒に入らないか。

りう　今に後から參りますから、まあ先へお入りなさいまし。

せん　どれお背中でも流しませう。

樣兵　着替を一緒に持つて來てくれ。

せん　畏まりました。

ト端唄になり、徳兵衞おせん附いて奥へ入る、此の唄を借り、花道より出羽屋忠五郎着流し駒下駄船宿の亭主のこしらへにて出來り、花道にて、

忠五　昨夜ツから木場の旦那が泊り込んで居なさるが、まだ今日は歸りなさりやあしめえ、居なさる内におりうから好い鹽梅に話し込ませて二三百兩金を借りにやあ、此の物前が凌げねえが、おりうが野暮を言はにやあい丶が。（ト舞臺へ來り、門口から内を覗きこむをおりう見つけて、）

りう　そこへ來たのは、誰だえ、
忠五　誰でもねえ、おれだ。（ト門口を明けて内へ入る）
りう　おや、内の人かえ。
忠五　おりう、旦那は、
りう　今湯に入つておいでなさいます。
忠五　そいつあ丁度いゝ間だつた。（トよき所へ住ふ、おりう煙草を吸附けて出しながら）
りう　昨夜家へ歸りなさらなんださうだが、何處へお前、行きなすつたえ。
忠五　昨夜おらが歸らねえのは、旦那のお成りがあつたことを、おせんが知せてくれたから、内に居たなら何かの邪魔と、ずつと察して兄貴の所へ醉倒れて寐てしまつた。
りう　どこの兄さんの所へ寐なすつたか、知れたものぢやァありやしない。
忠五　脇へ泊りに行くやうなそんな景氣はありやあしねえ、今に兄貴も出掛けて來るから、聞いて見りやあ知れることだ。
りう　兄さんだつて獣仲間、どんな穴ッ入りをしなさるか、附いて居なけりやあ知れやあしない。
忠五　附いて居なけりやあ知れねえといふのは、そりやあ此方で言ふことだが、そんなことは後にして

急に手前に頼みがあるが、最非聞いて貰はにやあならねえ。

りう　またお金だらうね。

忠五　いや白井卜星跣足といふのだ、すつかり手前に當てられたが、此の間から相場にかゝつて二三百兩借りが出來た、久しいものだが旦那から、三百兩借りてくれねえか。

りう　なんぼお家に腐るほどお金が積んであればとて、お前が相場で取られる度に、さう〳〵わたしも言ひ難いね。

忠五　そりやあ言ひ難くもあらうけれど、寐物語にしたならば手前の腕で二百や三百出來ねえことはあるめえに。

りう　一度か二度ならいゝけれど、これまで幾度旦那からお借り申したか知れやあしない。

忠五　成程これまで旦那から、大した金を借りたけれど、これが只の旦那ぢやあなし、手前に子まで出來たことを、知らねえ顏をして居るのは、斯ういふ時に借りよう爲めだ、手前だつてもそれしきを、言ひ難いこともあるめえぢやあねえか。

りう　お前はそんなことを言ひなさるが、少しはこつちの身にもなつてお見な、あんまり言ひよいことはありやあしませんよ。

忠五　（思入あつて。）手前が旦那に言ひ難けりやあ、どうなるものか仕方がねえ、おれがぢかに旦那へ言はう。

りう　ぢかに旦那に言ふ氣かえ。

忠五　言はなくつてどうするものだ、器用に貸してくんなさりやあよし、出來ねえとでも言ひなさりやあ、きざなことまで言はにやあならねえ。

りう　旦那へそんなことを言つちやあ、それぢやあ義理が濟まないぜ。

忠五　そりや、手前が言はなくつても、以前は僅かの給金で旦那の所へ河岸揚げに住込んだのが緣となり、柳橋へ船宿を出してお貰ひ申した金から、引續いての新造卸し、後楯がいゝゆゑに新見世ながら繁昌なし、柳橋で出羽屋といやあ、誰知らねえものもねえやうに、なつたはみんな旦那のお蔭だ、其の代りにおれもまた知つて知らねえ顏をして、手前を旦那の自由にさせるも、御恩になつた恩返しと、又二つにやあ金の蔓、困る時にやあ二百三百金を借りようばつかりだ、ぢか打附けに言つたなら貸して下さらねえことはあるめえ。若し又貸せねえとでも言ひなさりやあ、きざなことを言はにやあならねえ、世間體はおれが子で育てゝゐるが德太郎は、旦那の胤といふことは誰知らねえものもねえが、然し亭主のおれが、何にも言はにやあ何處が何處まで內證だが、表

向きでいつた日にやあお定りの間男だが、これをそつくり蓋をするにやあ金でなけりやあ出來ねえことは。旦那も如在のねえお方、そこらは胸にあることだから、手前に言つてくれろといふのだが、言へねえといやあ仕方がねえ、ぢかに言ふより外はねえ。

りう　これまで旦那にどの位御恩になつたか知れないのに、わたしが浮氣な心から惡いことをしやあしまいし、相談づくでしたことを、今更そんなことを言つては、それぢやあお前濟まないよ。

忠五　濟むも濟まねえもいるものか、金が出來ねえ其の日にやあ船から家を突出して、帆でも掛けにやあならねえ體、言ふだけのことを言はにやあならねえ。

ト此の以前よき程に下手より五郎藏脊流し駒下駄、好みのこしらへにて出來り、門口に立ちこれを聞いてゐて、

五郎　そりやあ忠五郎、惡からうぜ。（ト門口を明ける、おりう見て）

りう　や、お前は兄さん。

忠五　なに、惡からうとは、（ト五郎藏内へ入り）

五郎　今お前の言草は、あらまし門口に立つてゝ聞いた。

忠五　それぢやあ、今の言草を、

五郎　假令聞いても聞かねえでも、筋はてえげえ知れた筋だが、そりやあお前が言ふよりか、おりうに言はせるはうがいゝ。
忠五　わつちも是れに言はせる氣だから、言つてくれろと賴んだが、言へねえといふから直談じに、おれが言はうといつたのだ。
五郎　そりやあこれも度々だから、なんぼ其の身を任しても旦那へさうは言ひ難からう、一番おれが作者になつて新狂言を仕組むから、まあ二人ともうんと言つて、おれに狂言を任してくんねえ。
忠五　惡いことにやあ拔目のねえ、兄貴が作者で書くことなら、こいつは筋が面白からう。
りう　さうしてお前が書きなさる、狂言とやらはどんな筋だえ。
五郎　其のあら筋は胸にあるから、まあ二人とも奧へ來ねえ。
りう　奧へ來いなら行きもせうが、どうでお前の狂言では、
五郎　所が鶴屋南北此方、こんな作者があるものか。
忠五　まあ、何にしろ奧へいつて、
五郎　おれが筋を聞いてくんねえ。
りう　えゝ、折も折とて惡い所へ、

五郎　何だと、

りう　いえ、わたしのことさ。

忠五　そんなら、兄貴、

五郎　どれ本讀みに掛らうか。

ト端唄になり、忠五郎、五郎藏、おりうは是非なき思入にて一緒に奥へ入る。引違へて奥より以前のおせん、服臺へ德兵衞の着物、紙入、煙草入の入りしを持ち出來り、

せん　旦那さまのお湯は長いから、まだお上りなさらないが、お茶の支度でもして置きませう。

ト桐の火鉢へ鐵瓶をかけ、火をあふぎ居る、花道よりおとら乳母のこしらへにて抱子を抱いて出來り直に門口へ來て、

とら　おせんどん、今歸りましたよ。

せん　おや婆やアさん、お歸りか。

とら　德ちやんが蟲氣ゆゑ、村松町の竹ノ內さまへ見てお貰ひ申しに行きましたが、當時小兒科で指折ゆゑ、大そうな病人で大きに遲くなりました。

せん　それぢやあ德ちやんは蟲氣かえ。

とら　わたしや蟲氣だと思つたら、寐冷だとおつしやつて、竹ノ内さまに叱られました。
せん　そりやあ叱られても仕方がない、お前の寐相が惡いからだ。
　ト又端唄になり、奥より德兵衛絞りの浴衣湯上りのこしらへにて出來り。
德兵　やれ〳〵好い心持だ、すつかり汗を流した。
せん　お湯がおあつくはございませなんだか。
德兵　いや、熱くなくぬるくなく、丁度はひり加減だつた。
せん　はい、お茶をおあがりなされませ。（ト湯呑を茶臺へのせて出す。）
德兵　おりうは何うした。
せん　今奥へおいでなさいました。
とら　旦那さま、此の間はお目に掛りませぬ。
德兵　おゝ、婆やァか、昨夜は家に見えなんだな。
とら　はい、柳橋へ泊りました。
德兵　德太郎は達者か。
とら　少しお蟲氣でございます。

せん　いいえ、お蟲氣ぢやあござりませぬ、婆やァさんが踏み脱いでお寐冷でございます。

とら　えゝ、餘計なことをお言ひでないよ。

せん　それでも竹ノ内さまがさうおつしやつたぢやないかね。

德兵　おせん着物をくれろ。

せん　はい。（ト服臺に載せし着物を出し、後から引つ掛ける、德兵衞捨ぜりふにて着替へ、紙入を取上げて、）

德兵　如在なからうが、これからは得て寐冷から蟲などを引出してならねえから、氣を附けてくれにやあいけねえぜ、（ト言ひながら金入から金を出し紙に包んで、）こりやあ少しばかりだが浴衣でも買ふがいゝ。（ト投げてやる、おとら取りあげて、）

とら　これは有難うござりまする。

德兵　おせん、手前も一枚着るがいゝ。（ト同じく投げてやる、おせん取り上げて、）

せん　これは、わたくしにまで有難うござります。

とら　おせんどん、お前のはいくらあるえ。

せん　そんな下司張つたことをお言ひでないよ。（ト端唄の合方になり、奥より以前のおりう出來り、）

りう　お湯はお熱うございましたか。

徳兵　丁度いゝ加減な熱さだつた、手前も一風呂入ればいゝ。
りう　わたしや今日はよしませう。
徳兵　なぜそんなことを言ふのだ、さつぱりとして好い心持だぜ。
りう　少し風氣でございますから、
徳兵　手前の風氣も久しいものだ。
とら　もしお上さん、今旦那さまから、これをお貰ひ申しました。
せん　わたくしもお貰ひ申しましたから、お禮をおつしやつて下さりませ。
りう　旦那有難うございます。
徳兵　なに、禮を言ふにやあ及ばねえ。（トおとら抱子を見て）
とら　おゝ徳ちやんが、お寐みなさいました。
りう　そこへ寐かして置いてやんな。
とら　左樣なら爰へお寐かし申しませう。（ト下手へ有合ふ小蒲團を敷き、此の上へ抱子を寐かし附る）
せん　そりやあさうと婆やァさん、まだお飯前だらうね。
とら　はい、まだお飯は喰べませんよ。

せん　それぢやあ奥へ一緒へおいでな。
りう　奥へ行くならさつき貰つた、あはびをしめて置いておくれよ。
せん　はい、畏まりました。
德兵　婆やァが飯を喰ふなら、殘つた鰻を貰ふがいゝ。
とら　それは有難うございます。
せん　さあ婆やァさん、一緒にお出で。
とら　どれ御馳走になりませうか。

ト端唄にて兩人奥へ入る、あと端唄の合方になり、おりう吐息をつき物思ひのこなし、德兵衞思入あつて、

德兵　おりう心持が惡いか。
りう　何だか鬱いでなりませぬ。
德兵　大方そりやあ血の道だらう、龍王湯でも呑むがいゝ。
りう　いえ、こりやあ藥では直りませぬ。
德兵　どんな病か知らねえが、藥で直らねえといふがあるものか、それぢやあ手前の氣任せに揉んで

も貰ふがいゝ。
りう　なに、療治にも及びませぬ。（ト煙管を杖に鬱ぎ居る、徳兵衛思入あつて、）
徳兵　何ぞ氣になることでもあるのか、今しがた爰へ誰か來たな。
りう　はい、うちの人が參りました。
徳兵　むゝ、忠五郎が來たか。（ト思入。）
りう　來なくつてもようございますに、
徳兵　あんまりさうでもあるめえぜ、心持の惡いといふのは可愛い亭主が來た所から、里心が附いたの
だらう。
りう　女の愚痴で行末を考へますと悲しくなり、つい鬱いでなりませぬ。
徳兵　なにも行末を考へたとて、鬱ぐ譯もないぢやあねえか。
りう　いえ、鬱ぐ譯がございますから、
徳兵　して其の鬱ぐ譯といふのは、（ト合方きつぱりとなり、）
りう　つい行末を考へまして、悲しくなつてなりませんのは、此の徳太郎でございます。
ト寐て居る抱子へ思入。

德兵　なに、德太郎が何うしたのだ。
りう　さあ、此の子がお家へ產れましたら、今村木屋で一といつて二のない木場のお店ゆゑ、來る人每にちやほや言はれ、人から人へお手車で育つた擧句がお家の跡取り、町人ながら大概なお大名になるよりか遙かに勝りしことなれど、產れ甲斐なき德太郎、胤はあなたのお胤なれど賤しいわたしの腹にやどり　成人しても船宿の亭主で仕舞ふこの子の不運、身の行末を考へますと子ゆゑに迷ふ親心で運のないのが不便になり、女子の愚癡に淚が先立ち氣の結ぼれの此の病、死なねば直りませぬわいな。（ト　おりう淚を拭ひぢつと思入）
德兵　そんな事をくよ〳〵と愚癡を言ふにやあ及ばねえ、表向は忠五郎の悴のつもりにしてあるが、おれの胤に違えねえから、その內女房に打ち明けて世間はれて內へ引取り。事と品に寄つたら跡をやるめえものでもねえ、愚癡を言はずと氣を長く、末の六十日を待つがいゝ。
りう　その思召しでござりますれば、此の子の案じはござりませぬが、一ツよければ又一ツ、塞がる胸にいつそのこと、わたしや死にたうござりまする。
德兵　何で今日は其のやうに、手前は取越し苦勞をして、死なうなどゝ愚癡を言ふのだ。
りう　御恩になつたあなたの仰せに、そでないことをいたしましたが、浮世の義理を考へますると、ど

うも死なねばなりませぬ。

徳兵　そりや何ゆゑに、(ト此の時後へ以前の五郎藏出で來り居て、)

五郎　こりや妹、よく言つた、死なねば手前の義理が濟むめえ。

りう　や、お前は兄さん。

徳兵　おゝ、誰かと思つたら五郎藏か、おりうが死なねば濟まねえとは、

五郎　これにやあ深い譯のあること、あなたも一旦お情をお掛けなすつた此のおりう、これを不便と思召すなら、どうかしてやつて下さいましな。

徳兵　どうかしてやつてくれといふのは、

五郎　いや外の事でもござりませぬが、忠五郎が事でござりまする、まあ一通りお耳の役お聞きなすつて下さりませ、(ト誂への合方になり、五郎藏思入あつて、)まだ河岸揚げの時分から不思議な御縁でお氣に入り、水の上が明るいので柳橋へ船宿を出しましたのも一から十まで、お世話になつた其の金は、百や二百ぢやござりませぬが、運に叶つて五本の指に折られるやうになりましたも、みんな旦那のお蔭ゆゑ御恩を思つて、あなたにやあ何にも申しやあいたしませぬが、これにやあ時折厭なことを申すさうでござります。それゆゑおりうも此の間どうしたものとわつちへ相談、あ

なたへ油を掛けるやうだが、ぞつこんおりうが惚れ込んで、どんなことでも旦那とは分れることは出來ないが、とあつて亭主の忠五郎、こいつも捨てる譯にも行かず、いつそのことに身を投げて死なうとこれが言ひますから、そんな馬鹿なことをしたら旦那のお恥になることだ、どうか話しを附けようから決して死なうなどゝいふ無分別は出さぬがいゝと、實は留めて置きました、あなたも不思議な御縁にて斯ういふことになりましたからは、どうかこれが命を捨てずに、居られるやうに旦那樣、してやつて下さりませ。（トよろしく思入にて言ふ。）

德兵　そりやあとんだことだつたが、よく五郎藏留めてくれた、そんなことでもあつた日には寢覺の惡いその上に、折角見世になつた出羽屋の、名前に疵の附くことだ、こなたも同じ船乘生業、波風立たず納まるやう取扱つてはくれねえか。

五郎　取扱へとおつしやれば、御恩を受けた旦那のこと、どうともわつちがいたしますが、實は不斷忠五郎の世話になつて居る體ゆゑ、夫婦の中の好くないのが厄介人には第一禁物、先づこの中を取扱ふには、あなたがおりうを思ひ切つてお仕舞ひなさるか、但し又、忠五郎がぶつゝりとも言はねえやうに金轡を掛けるかより外はござりませぬ。（トおりう思入あつて、）

りう　これ兄さん、なぜそんなことをお前はお言ひだ、旦那はわたしを捨てたくつてならない所でござ

んすぞえ、其の證據は此の間から、さつぱりおいでなさんせぬは、大方どこぞへお樂しみが出來たことでござんせう。（トすねる思入）

德兵　又そんなきざを言ふか、十日程來なかつたのは、問屋仲間の護摩講で成田山から鹿島をかけて信心詣りに出掛けたのだ、假令どんなことがあつても斯ういふ子まで出來た仲、生涯見捨てることぢやねえ。

五郎　それ程までに此のおりうを、あなたが見捨てぬことならば、忠五郎が兎やかうと、きざなことを言はねえやうに、口塞げをして下さりませ。

德兵　何でそんなに忠五郎が、おりうにきざなことを言ふのだ。

五郎　そりやあ旦那、あなたでもござりませぬぜ、僅か年に三兩の奉公人から大名になつたも同じこと一方ならずお取立てに預かりました旦那だから、何にも言はずにをりますが、此の御恩がねえ口にやあ言はずと知れたあなたは間男、重ねておいて四つにすると野暮なセリフを言ひませう、この御恩故旦那々々といつてゐますが、腹の中ぢやあいゝ心持はしますめえ。是れが無法なものならば刃物三昧でもいたしますが、其處は分つて居りますから、あなたも分つて忠五郎が生涯樂に暮されるやう、どうかしてやつて下さいまし。（ト五郎藏きざに脅して言ふ、德兵衞思入あつて）

徳兵　おゝおれも疾うから忠五郎に、何ぞやらずばなるめえと思つて居た所だから、生涯樂に暮されるやう元手金を遣らうから、其の代りこれからは女房といふは表向、内證はおれが妾だからきざなことは言はねえやうに、よく念を押してくんなせえ。

五郎　畏りましてござります、あなたの厚い思召しをよく忠五郎に言ひ聞かせ、この後きざは申させませぬ。

りう　それぢやあ旦那が内の人へ、お金をやつて下さいますか。

徳兵　手前が困るといふことだから、言はゞ夫婦の手切金、大した元手をやる積りだ。

五郎　それぢやお旦那は、夫婦の手切に、

りう　大した元手を下さいまするか。

五郎　妹、よくお禮を申すがいゝ。

りう　有難うござります。

ト禮を言ふ、五郎藏しめたといふ思入、端唄になり、奥より忠五郎出來り、下手に住ひ、

忠五　旦那さま、此の間は、

徳兵　おゝ、忠五郎か、

忠五　まことに御無沙汰をいたしました。
德兵　さつぱり宅へ出て來ねえな。
忠五　旦那のお蔭で年々にお得意方が殖えますので、お客の絶間がござりませんから、ついお家へも上りませぬ。
德兵　そりやあ何にしても好いことだ。（ト忠五郎寐かしてある抱子を見て、）
忠五　こう兄貴、よく旦那に似て居るぢやあねえか。
五郎　旦那が拵へたお子だから、似て居るのは當然だ。
德兵　なに、おればかりで出來もしめえ、（トおりう思入あつて德兵衞の膝をちよつとつめる、）あゝ、痛い。
忠五　旦那、どうかなさいましたか。
德兵　え、蟲でもさしたか、ちくりとしたのだ。
忠五　亭主の前も憚らず、惡い蟲でござりまする。（トおりうを尻目に掛ける、おりう德兵衞へ向ひ、）
りう　それだから死にたうござります。
德兵　又そんなことをいふか。
忠五　もし旦那、世間に亭主を尻にしく女房も多くありますが、此のおりうくらゐ亭主をば尻にしく者

はござりませぬ。
りう　何時わたしがそんなことを、
五郎　これおりう、默つて居ろよ。
りう　いえ、默つて聞いては居られないよ。
忠五　それが尻にしくといふのだ、人にこんな馬鹿々々しい話しをするもみつともねえが、亭主といふは名ばかりで、諸事女房が麾ととり、こゝらが男女同權といふ所かは知らねえが、寐所も別に寐るといふのは、あんまり敷き過ぎるぢやあござりませぬか。
德兵　女房が尻にしくならば、手前もそこは男の權で、圍ひ者でも妾でも勝手にするがいゝぢやあねえか。
忠五　それが出來る位ならこんな愚癡は申しませぬが、圍ひ者や妾を置いても懷がゆるやかでなけりやあ樂みになりませぬ、年中忙しい懷ぢやあ、却つて苦しみでござります。
五郎　寄るとさはると泣事をいふのが此の節流行だが、實のところ忠五郎などは幾ら繁昌いたしても、掛り負けがいたします。
忠五　旦那などの御身分ぢやあ僅かなことでござりますが、先づ先生方の書畫會から諸藝人の藝名披露

二季の順講、四季の浚ひ、又花會に見世開き、掛捨て無盡草鞋錢何だのかだのと持ち込まれ、溜るものは手拭ばかり、是れも浮世の義理ながら、實にうるさうござります。

德兵　世間の義理や交際で懷合の惡いのもおりうの話しで聞いて居るから、どうからどうかしてやらうとおれも思つて居たところだ。(ト思入あつて紙入から估券狀を出し、)幸ひこゝに持つて居る昨日買つた地面の估券、この證文を手前に遣らう。(ト出す、忠五郎取上げ、)

忠五　すりや昨日お買ひなすつた、地面をわしに下さいますとか。

五郎　旦那がお買ひなすつたのなら、端た金ぢやあござりますまい。(ト忠五郎開き見て、)

忠五　や、こりや千兩の地面の估券、

りう　そんならこれを旦那から、

德兵　遣るのも緣ある千兩幟、鐵ヶ嶽のせりふだが魚心あれば水心、それで言ひ分あるめえな。

忠五　なに、言ひ分がござりませう、有難うござりまする。

五郎　これといふのもおりうのお蔭、尻にしかれても仕方がねえな。

忠五　踏み倒されても仕方がねえ。

五郎　まことに旦那有難うござります、妹よくお禮を申せ。

りう　ほんにこれもわたしゆゑ、お氣の毒でござりますな。（ト德兵衞紙入から金を出し紙に包み、）

德兵　五郎藏、こりやあ少しばかりだが、小遣ひにでもするがいゝ。（ト出す五郎藏あけて見て、）

五郎　え、こりや小判で十兩、旦那有難うござります。

りう　兄さん、此の間の三兩をお返しよ。

五郎　あの三兩は、貰つたつもりだ。

りう　えゝ、蟲のいゝことをお言ひでない。

　　　トばたばたになり、丁稚長松尻端折り雪踏風呂敷包を背負ひ、出來り、直に舞臺へ來て門口から、

長松　旦那樣はいらつしやいますか。

りう　おゝ小僧さん、お出でか。

德兵　長松、何ぞ用か。

長松　はい掃部宿のお祖父さんが只今おいでなさりまして、是非お目に掛りたいとおつしやつてゞござりますから、お迎ひに上りました。

德兵　おゝ掃部宿の彥兵衞には、おれが方にも是非逢はねばならぬことがあつた。

りう　よく旦那のおいでなさるを、お前知つておいでだねえ。

長松　そこは長松でございます、旦那がめかしてお出掛けなされば、何時でもこつちでござりますから一本槍にまゐりました。
りう　なか〳〵氣の利いた小僧さんだ。
德兵　碁々打ちに行つたつもりだから、家へ歸つて言つては惡いぞ。
長松　決して言ひはしませぬから、何ぞ御褒美を下さいまし。
德兵　慾張つたことを言ふ奴だ。
長松　御褒美が少ないと、お上さんへ喋りますよ。
りう　後生だから小僧どん、お家へ默つて居ておくれ。（ト紙に包んだ金をやる。）
長松　こりやあ有難うござります、これで春の宿入りに、芝居を見に行かれます。
德兵　おりう羽織を出してくれ、掃部宿の親父には内々相談をする事があるから、直に家へ歸らにやあならねえ。
りう　それぢやあ、明日いらつしやいましよ。（ト羽織を引掛ける、德兵衞紐を結びながら。）
德兵　明日都合が惡かつたら、明後日はきつと來るから、さう思つて居てくれ。
長松　こりや、此の通りお上さんへ、

徳兵　これ、家へ歸つて言ふぢやあねえぞ。
長松　それぢやあ、何ぞ御褒美を、
忠五　長松どんも如在がねえ、否應なしに旦那から、口塞げを貰ふといふは。
五郎　今時の小僧は、油斷がならねえ。
長松　小僧も油斷がならなけりやあ、旦那も油斷がなりませぬ。（ト徳兵衞立上る、おりうも立掛り、）
りう　それぢやあどうでもお歸りなさいますか。
徳兵　相談があるから、歸らにやあならねえ。
りう　明日きつとおいでなさいよ。（トおりう徳兵衞へ寄添ふ、忠五郎は顏をそむける。）
徳兵　これ、（ト忠五郎へ惡いといふ思入。）
りう　なに、構ひますものかね。（ト猶寄り添ふ、小僧これを見て、）
長松　この通りを、おゝさうだ。（ト尻を端折り見得をする。）
徳兵　これ、口を利くときかねえぞ。（トきつといふ。）
長松　へゝい。（ト控へ、徳兵衞門口へ出る。）
忠五　左樣なら、旦那さま、

五郎　御機嫌よろしう、
徳兵　兄貴、世話であつた。
ト端唄になり、徳兵衛先きに小僧附いて花道へ入る、此の時抱子泣き出すゆゑ、おりう側へ行き叩き附ろ、忠五郎、五郎藏は跡を見送り思入あつて、
五郎　忠五郎、
忠五　兄貴、
五郎　その證文は、眞物か。
忠五　實の嘘のと本町で、二方店の角地面、
りう　思ひ掛けなく千兩の、估劵をお前が貰つたも、
五郎　ほろりと涙をこぼさせる、おりうが手管の三の切り、
忠五　その三味線を兄貴が彈き、
五郎　かたり合せた千兩の、
りう　估劵は大名衆ならば、
忠五　百萬石のお墨附を、お貰ひ申すも同じこと、

五郎　これといふのもおりうゆゑ、
りう　鼻へ掛けるぢやなけれども、
忠五　天の岩戸の昔から、
五郎　この日の本の國風で、
忠五　女でなけりやァ、（ト忠五郎證文を開くを木の頭）夜が明けねえ。
ト につたり思入、五郎藏證文をのぞき見る、おりう抱子を抱き上げる、此の見得よろしく端唄にて、
ひやうし幕

ト調べにてつなぎ、直ぐ引返す。

（吹上御茶屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、四ッ谷丸太の柱大和葺の本屋根、本緣附四方吹ぬき御茶屋の拵へ、上下網代塀にて見切り、上手大樹の松、下手大きな雪見形の燈籠、突這の手水鉢舞臺前に秋草の土手板、後泉水築山瀧などのある奥庭の遠見、日覆より紅葉の釣枝、よき所に毛氈を敷きて誂への床几、總て吹上御庭内の體。爰に腰元四人誂への煙草盆、刀掛、褥、鼻紙臺を持ち立掛り居る、この見得琴唄にて幕明く、と合方になり、

腰一　今日は上樣大奧へ久々にて入らせられ、今を盛りに咲き出しお庭內の秋草を、おたかの方樣と御一緒にお步行にての御遊覽、

腰二　上つ方と申すものは下々の事を御存じないゆゑ、片時お側をお放しなされず、人の見る目もお厭ひなく、お手を引かれてお步行遊ばす、其のお仲のお睦まじさ、

腰三　見にくいことを遊ばしても一向お構ひなされぬゆゑ、却つてお供をいたしまする、

腰四　わたくし共が脇を向き、見えぬ振りをいたしましても、思はず顏を染めますわいな、

腰一　お噂申し上げるのも恐れ多いことながら、當上樣は初めの內とんとお奧へお入りなく、お小姓衆をお愛し遊ばし、女子はきついお嫌ひなりしが、

腰二　柳澤樣のお計らひにて釆女さまへお手が附き、それからお心和いで度々御奧へ御入りになり、御臺樣にも御悅び、

腰三　その釆女さまのお逝れからお氣の結ぼれたまひしを、又もや氣轉の出羽樣が、

腰四　釆女さまに面差が、何處やら似たるおたかさまを差上げしが御意に叶ひ、一方ならぬ御寵愛、

腰一　多くお手の附きし中で、名に負ふ君のお胤なる綱千代樣をおまうけあつて、お高の方樣と申し上げ、

腰二　飛鳥落つる勢ひを見るに附けても私共は、同じ女子に生れながら生れ甲斐のないことぢやなあ、
腰三　あゝもし、めつたなことをおつしやりますな、お高の方樣をお連れなされ、
腰四　今このお茶屋へ上樣が、おいで遊ばしまするぞえ、
腰一　成程向うへいらせられるば、
腰二　これへおいでのないうちに、
腰三　お煙草盆やお褥を、
腰四　お直し申して、
四人　置きませうわいなあ。

ト誂への兩吟の唄になり、腰元二重へ褥、刀掛、鼻紙臺を置き、煙草盆は床几の上へ置く、よき程に上手より綱吉羽織着流し一本ざし庭下駄、おたか着流し庭下駄にて手を引れ出來る、跡より小姓△紫の袱紗にて綱吉の刀を持ち附添ひ出來る、續いて小姓□○の二人誂への手箱を持ち出る。

綱吉　秋とはいへど季候も遲く、未だ紅葉は色附かねど、千種は今を盛りにて草葉にすだく蟲の聲、
たか　櫻は花の王なれど、萩や桔梗のしをらしく打水なせし其の水の、乾かで色もます穗の芒、春にもまさる此の眺め、

△残る暑さも築山より、漲り落つる白瀧の、耳に涼しき水の音、

□啅き餌をあさる鯉鮒が、

○渚にきそふお泉水、

綱吉　常見し庭も四季折々、花の盛りにさま替り、

たか　幾度見ても目かれせず、

綱吉　暮れるを惜しむ眺めぢやなあ。（ト思入、下手へ腰元四人手をつかへ）

腰一　はつ、上様には、

四人　あれなるお茶屋へ、

綱吉　いや、茶屋よりもはれ〴〵しき、是れにて暫く休息いたさん。

腰二　左樣なれば御床几へ、いざお掛け。

四人　遊ばされませう。

ト又唄になり、床几へ褥を敷く、綱吉これへ掛け、この脇下手へおたか掛け、上手に小姓三人、下手に腰元四人控へる。

綱吉　これたか、最前そちが見せし畫は、是れへ持參いたせしか。

たか　はい、持參いたしましてござりまする。
綱吉　今一度予に見せやれ。
たか　お小姓衆、それなる手箱を、
小姓　畏りました。
　　ト合方きつぱりとなり、小姓手箱を持つて來る、おたか箱の中より誂への淺妻の彩色畫を出す、綱吉開き見て、
綱吉　さても是れは見事な畫、水干烏帽子を着たる女が、鼓を持つて船に乗りしは、如何なる樣を描きしものぞ。
腰一　仰せの如く其の姿は、何を寫せしものなるか、
腰二　何にもいたせ、丹精を盡しましたる見事な彩色、
腰三　水干烏帽子は古への白拍子でもござりませうか、
腰四　つひにこれまでわたくし共は、見ましたことがござりませぬ。
△　見事な姿でござりますが、畫工は誰でござりますな。
綱吉　畫銘はこの程聞き及びし、多賀潮湖と記しあるが、何を描きしものなるか。

ト綱吉公考へる思入、おたか思入あつて、

たか　憚りながら上樣には、それを御存じござりませぬか。

綱吉　何の姿か、予は存ぜぬ。

たか　これは近江の淺妻船、傀儡の姿にござります。

綱吉　すりや淺妻の傀儡なるとか、烏帽子水干着せしは、客の心を慰めんと今樣朗詠などを謳ひ、舞の手振りの姿なるか。

たか　その淺妻に擬へました、水干着たるその女子は、おさめの方でござりまする。

綱吉　此の水干を着したる、女子の姿がさめなるとか。

たか　いつぞやお庭のお泉水へ我が君樣がお連れなされ、御船遊山をあそばせし其の日のさまを描きしとやら、茂る柳に流れの澤とは柳澤といふ判じ物にて、水干烏帽子を着ましたはおさめの方でござりまする。

綱吉　して此の側に棹を持ちしは、船人なるか客人なるか。

たか　それは君のお姿ぢやと、申すことでござります。

綱吉　(思入あつて、)むゝ、すりや此の淺妻船の畫は、柳澤の庭中にて船遊をなしたるが、それにたとへ

て描きしとか。

たか　おさめの方には此の事を曾根權太夫から承はり、定めて市中で惡しざまに申すことでござりませうが、それと申すも此の畫ゆゑ潮湖とやらは憎い奴ぢやと、お恨みなされてござりまする。

綱吉　むゝ、さめが恨むも尤も至極、かゝる賤しき傀儡に擬へ天下の主の姿をば、みだりに描くは憎い奴、こりや小姓ども當番の者を呼んで參れ。

小姓　はつ、畏つてござります。（ト下手へ入る、おたか思入あつて、）

たか　これに附けても母さまが、此の程お願ひ申せしことを、お聞き濟み下さりますやう、御機嫌のよい折を見てお願ひ申せと、わたくしへ文にて申し越しました。

綱吉　その儀は承知いたし居るが、予が一存にもなし難ければ老臣共に相談なし、日ならず望みを叶へんほどに、そちからさめへ申し傳へよ。

たか　有難うござりますわいな。（ト此の時下手より小姓先きに主計、上下にて出來り、下手へ手をつかへ、）

主計　はつ、只今お召しにござりまするが、何御用にござりまする。

綱吉　おゝ主計か、近う。

主計　はつ、（ト前へ出る。）

綱吉　今その方へ用と申すは外でもない、此の畫を見やれ。（ト件の畫を出す。）

主計　はつ、（ト取りあげ開き見て、）これは此の頃世上で流行る淺妻船の潮湖の畫、これが如何いたしましてござりまする。

綱吉　只今たかに承はれば烏帽子水干着たる女子は則ちさめにて、傍に居る竿さす男子は我なる由、澤邊に柳の枝垂れしは柳澤と申す謎、これを畫きし潮湖とやらは、天下の主たる綱吉を蔑ろにする憎き奴、急ぎ召捕り詮議いたせ。

主計　はつ、畏まつてござります、此の多賀潮湖と申す者は彼の俳諧師其角、彫物師宗眠などゝ共に天下に名を揚げし、勝れし業の浮世畫師、全く左樣のことあるか、早速詮議仕らん。

綱吉　早々彼れを召捕るやう、町奉行へ通達いたせ。

主計　畏まつてござりまする。

綱吉　いそふれ主計、

主計　はあゝ。（トばた〳〵になり、袴をはしをり逸散に花道へ入る。）

綱吉　淺妻船の傀儡に擬へ、二人が姿を描きたる多賀潮湖は、召捕つて窮命さすとさめに告げい。

たか　嘸此の事を母さまへ申しましたら何程か、悦びますでござりませう。

ト ばた〳〵になり、下手より茶道出來り手をつかへ、

茶道　はつ、お女中方お取次ぎ下されい。

腰一　何事でござりまする。

茶道　只今井伊掃部頭殿、お召によつて御中門まで、出仕いたしてござりまするが、これへ案内いたしませうや、如何取計ひませうや。

腰一　我が君樣、お聞き、

四人　遊ばされましたか。

綱吉　おゝ聞いた〳〵、掃部頭へ是れへと申せ。

茶道　はあゝ。（ト引返して下手へ入る。）

綱吉　今日掃部頭を呼び寄せしは、只今そちより申したるさめが頼みの一儀をば、老臣ゆゑに相談なすが、他聞を憚かることゆゑに、密にこれにて對面なすのぢや。

たか　御密談とござりますれば、私共はこのお席を、

綱吉　掃部頭が參りなば、暫時爰を退きやれ。

皆々　畏りましてござりまする。

ト合方きつぱりとなり、下手より掃部頭白髮鬘上下、老けたるこしらへにて出來り、下に住ひ手をつかへ、

掃部　はつ、上樣にはこれにお渡り遊ばしましたか。
綱吉　おゝ掃部頭か、待兼ねしぞ。
掃部　遲刻の段は老人ゆゑ、平に御免蒙りまする。
綱吉　何は兎もあれ、これへ參れ。
掃部　はつ。
綱吉　掃部頭參りし上は、たかを始め其の方どもは、
たか　御用濟むまでわたくし共は、梅のお茶屋へ、
皆々　退きますでござりませう。
綱吉　おゝ、暫く彼處で休息いたせ。
たか　左樣なれば女中共、
腰一　先づいらせ、
皆々　られませう。

ト此の内腰元褥を二重へ敷く、小姓は刀を刀掛へかけ、唄になり、おたか先きに皆々上手へ入る。綱吉二重褥の上へ住ひ、

綱吉　密談なれば、近う〳〵。

掃部　はゝはつ。（ト誂への琴入りの合方になり、掃部頭二重へ上り下手へ住ひ）して拙者めに、御用とは。

綱吉　用と申すは家督の儀につき、ちと其の方へ密々に、相談いたしたいことがあつて、

掃部　最早耳順の關を越し老衰なせし掃部頭、上のお役に立ちませぬが、御相談と仰せられまするは、何事でござりまするな。

綱吉　相談いたすは餘の儀にあらず、先年予が家督せし折、存生なれば甲府殿五代將軍になるべきを、奸臣の爲め自殺あつて果敢なく此の世を去りたまひ、思ひがけず予が五代の家督相續なしたるゆゑ、甲府殿の遺兒綱豐を予が養子に西丸へ迎へしが、一つの迷ひを生ぜしは先頃實子出生なし扨親子の情愛にて、一旦迎へし綱豐なれど實子綱千代に六代の家督相續いたさせたけれど、譜代外樣の思惑も如何やと存ずるゆゑ、先づ老臣の掃部頭、その方へ相談いたす。

ト綱吉言雖さうに言ふ、掃部頭思入あつて、

掃部　君は御幼年より聖賢の道を學びたまひ、四代將軍御他界の折、御順なれば甲府樣五代將軍になら

せたまふべきを、不慮の事にて御逝去ゆゑ、君御世嗣と事極り五代將軍にならせられし時、甲府様の御嫡男綱豐樣を御養子にめされ、後々六代將軍になされ度き思召しにて直に西丸へお迎へありしゆゑ、流石は聖賢の道を學びたまふ程ありて、御兄弟の御仲へ義を立てたまふ御心底、臣等一統感涙を流しましてござりまする。思召し通り綱豐樣へ御世をお讓りなされなば、嘸や冥府で甲府樣の御悅びは如何ばかり、君の御賢慮誰あつて違背の者はござりますまい。

綱吉　いやなに、掃部頭、只今その方が申すのはそれは最初のことにして、綱豐に世を讓らんと一旦養子になしたれど、今實子の出生いたせしゆゑ、爰は親子の情愛にて綱千代に世を讓りたいが、其の方は如何思ふぞ。

掃部　誠に以て武士は武さへ勵めばよいと申すが、文も勵まねばなりませぬ。凡そ世界の人心、實子養子の差別ありて先づ百人のうち九十九人までは、實子に家督を讓らんと申すものでござりますが、君は聖賢の道を學びたまふゆゑ、御實子御出生遊ばしても矢張り御養子綱豐樣へ御世をお讓りなさらんとは、恐れ入つたる思召し、爰が文を勵まねばならぬ所でござりまする。

ト掃部頭態と空とぼけて言ふ、綱吉聞き違ひなしたといふ思入あつて、

綱吉　いや、それは其の方の聞き違ひ、綱豐ではない、綱千代に世を讓りたいと申すのぢや。

掃部　只今申し上げます通り、百人のうち九十九人まで實子を家督に立てんなど〻親子の情に迷ひまするが、君は聖賢の道を學びたまひ、御養子たる綱豐樣へ御世をお譲りあらんとは、實以て恐れ入りまする、これでこそ六十餘州を補佐なしたまふ將軍職、親子の情に迷ふ者の、心の曇りを晴したまふ世界の鑑でござりまする。

綱吉　いや其の方は耳が遠うなつたか、返すぐ〵も齟齬せし答へ、綱豐ではない綱千代なるぞ。

掃部　いや綱豐樣を御家督に、お立てなされん御相談、委御承知仕つる。

トきつといふ。

綱吉　(腹の立つ思入にて、)幾度言うても同じ答へ、扨は掃部頭には心あつて、予が詞を用ゐぬのぢやな。

掃部　なに、用ゐざることのござりませうや、聖賢の道を學びたまひ御親子の情に溺れたまはず、御養子綱豐樣へ御世をお譲りなされんといふ賢君の思召し、誰用ゐざるものがござりませう。

トたゞみかけて言ふ。

綱吉　む〻、(ト綱吉詰る。)

掃部　これでなければ神國の名義も立たず、四の海穩かには治りませぬ。

綱吉　む〻、

ト此の時上手柴垣の蔭よりおたか顔を出し、綱吉と顔を見合せ思入、掃部頭これを尻目にかけ、

掃部　まことに感服。（ト肩衣をくつろげ、手を突くを木の頭。）仕りまする。

ト綱吉案に相違せし思入、掃部頭は辭儀をなす、此の模様よろしく、琴入り早き合方にて、

ひやうし幕

四幕目

返し

西丸白書院の場
綱豐公御殿の場
吹上御庭先の場
護持院祈念の場

〔役名――中納言綱豐公、井伊掃部頭、間部越前守、小出山城守、護持院僧正隨光、木又土佐、堀八郎左衞門、近藤覺太郎、石谷主計、澤部主水、菅沼金彌、渡會龍泉、茶道頓才。局皐月。同松ヶ枝、奥女中夏菊、同若葉、其他。〕

（西丸新御殿廣敷の場）――本舞臺三間の間白地へ紺青にて立簑へ金にて葵の紋散らしの襖三方折廻し平舞臺にて同じ襖、欄間金張り花葵の彩色模樣、總て西の丸新御殿廣敷の體。爰に侍女夏菊、若葉振袖裝、獻上物の折の臺附きを持ち立つてをり、是れを近藤覺太郎上下にて女形兩人を支へて居

ろ、菅沼金彌同じこしらへにて宥めてゐる、茶道頓才熨斗目十德にて取押へゐる、ばた〳〵、舞ばたらきにて幕明く。

覺太　やあならぬ〳〵、假令餘人が挨拶でも、この覺太郎が詰合ふからは、通されぬ〳〵。

頓才　是れは又片意地にも程があります、聞き分のない近藤さま、（ト中の舞になり）

金彌　女儀二人は御三の丸の、桂昌院樣の御緣引で大奧勤めの身分の格式、

覺太　むゝ、すりや局達とも同席となっ

若葉　綱豐公が御所勞の御見舞の爲め、松ヶ枝のお局、

夏菊　森彦左衞門どのゝ妹御の皐月さまが差添にて、是れへおいでの先きぶれに、

兩人　參りしわたくし共、

覺太　すりや松ヶ枝の局を始めとして、森が妹皐月とやらが、

頓才　いやその皐月さまは誰やらが、日頃から逢ひたいと口癖に仰せらるゝを、近藤さまには定めて御存じ、

覺太　何と、（ト思入。）

金彌　はて兎も角もこの二人、裏方の御使者とあるからは、近藤氏には、

頓才　お控へなされい。
覺太　えゝ、つべこべといゝ、しち面倒、兎角當時は女の方が、通りがよいに困り果てる、控へろとあらば、
　控へ申さう。
　　トこなしあつて座に着く、と花道の揚幕にて、
呼ビ　お裏方よりお使者、
若葉　あのお知せは、
夏菊　お局さま、
覺太　お二人の、
頓才
金彌　御入りとな。
呼ビ　お入り。
ト是れにて三味線入り中の舞になり、花道より松ヶ枝片外し、地赤白重ね搔取り衣裳にて、手に白木の三方へ祈禱の守札を載せたるを持ち、次へ森の妹皐月縫模樣振袖衣裳、文金島田花簪、帶をやの字にしめ、手に白木の三方へ祈禱の供物箱を載せたるを持ち、後より石谷主計上下大小、老けたるこしらへにて附添ひ、次に麻上下の侍兩人附添ひ出來り、花道へ留る、舞臺の各々よろしく座

に附き出迎へる心にて控へ、こなしあつて、
覺太　綱豐公御不例の御見舞として、お越しなされし女使の方々、
お役目の程御苦勞千萬、
金彌　先づ〳〵これへ、
女中二人　お越しなされませう。
皐月　大奧よりのお使者なれば、
松枝　上座御免、
兩人　下さりませう。
皆々　先づ〳〵。
ト右の鳴物にて松ヶ枝、皐月兩人こなしあつて皆々舞臺へ來りよろしく住ふ、管絃になり、
皐月　當將軍綱吉公には綱若君と申す公達もましませども、まだ御幼稚のことなればと、御さし嗣の弟君綱豐公に六代目の將軍を一度お讓り遊すことゝ御評議極り、閣老柳澤出羽守殿の策略を以て、新に修理の、西の丸の此の御殿へお引移り遊ばすと、程なく綱豐公には俄の御病氣、日々に重らせたまふとのこと。

松枝　此程のお噂には御身も疲れ、其の上に夜な〳〵物におそはれたまふか、御物狂はしき有樣と御奧にても聞しめされ、殊の外の御案じ、
皐月　御母堂桂昌院樣をはじめ、大奧の御臺操御前樣にも、取り分けての御案じ、
松枝　御典藥衆のお藥もしるしなく、神佛の利益をもつて御本復を祈るより、外に詮方あるまじと御臺樣の仰せに任せ、所々の神社佛閣にて皆それ〴〵の御祈り、
皐月　東叡山の諸坊の内にて、行德勝れし高僧へ命ぜられ、一七日の間祈りの奉讀、
松枝　御祈念終りしこの供物を、差上げし上御病體、伺ひまゐれとの仰せを受け、當御殿へ參りしところ、
主計　綱豐公には始めより御表にのみましますゆゑ、御廣敷當番の石谷主計、女使御兩人を此の御殿へ御案内仕ッてござりまする。
金彌　御母公の仰せといひ、御臺所のお使とあるからは、早速その由御披露の仕らん。
覺太　なれども君には殊の外の御重態、大切の女使なれども御前へ御案内のほどは。
皐月　早速ながら御祈禱の札守、綱豐公の御寢所の北の柱へ打つやうにとの御指圖にござりまする。
金彌　すりや其のお札を、

覺太　お居間の柱へ、（ト思入、此時上手より小出山城守上下にて窺ひ出で、）

山城　あいや何れも、暫らくお控へなされい。

金彌　さ言ふは小出、

皆々　山城どの。

山城　本丸の大奥よりお使の女中方、お役目御苦勞に存じまする。（トこなしあつて住ふ。）

皐月　そりやわたくし共の、

兩人　參りしことを、

山城　あれにて委細承はる。

皐月　大奥よりの仰せ出にて、綱豐公の御不例御本復祈りのお札を、お居間の柱へ打つことを何ゆゑあなたがお留めなさるぞ。

山城　さればでござる、綱豐公の御不例は御幼少よりの御持病たる、癇症のお募りなれば、御典藥の面面が種々な異論を申し立て、差し上げたるお藥におろそかはなけれども、天下の跡目に立たせらるゝ御大切の御身分ゆゑに、大事を取りて仕こじらかし、夜陰に及べば御熱氣はげしく猛り狂ひたまふゆゑ、魔の障礙だの方祟りのと、此の方の御殿ですら、種々の取沙汰いたすゆゑ、本丸の

奥御殿で御案じあるは御尤も、それに附き大老の柳澤出羽守殿より綱豐公へ申し上げられ、將軍綱吉公が御歸依なさるゝ御祈願所と定められし、護持院僧正隨光殿へ命ぜられ、御病氣平癒の爲め一七日密法を修し祈願の最中、大奥より持參あるとも其の札守を、綱豐公の御居間の内へ差入ることは罷りならぬ。

松枝　すりや御先祖より格別の由緒ある、東叡山にて御祈禱ありし、女使が持參のお札守も、

皐月　護持院が御祈禱の障りになるとおつしやるか。

山城　如何にも、東叡山は御先祖より御代々の御菩提所、又護持院は御祈願所と、台命下りしことなれば、

覺太　左樣とも〳〵、護持院僧正が祈りの方が、效驗がきつと相見え申さう。

主計　そりや本丸の大奥より、差送られし品々が、

松枝　却つてこなたの御殿においては、さゝはりとなるからは、（トこなし、）

皐月　持參の奉讀供物の品々此の儘持歸り、御側頭の小出殿がまつかう〳〵と此の場の始末を逐一に、

松枝　桂昌院樣はじめ、御臺樣へ申し上げるでござりませう。

皐月　さ、參りませうか。

ト女形皆々札守供物の箱を幕明の二人に持たせ立掛るゆゑ、山城守少しぎよつとしたるこなしあつて、

山城　あゝこれ、それをあらはに言はれては、

皐月　そんなら二人を此の儘に、お奥へお通し遊ばしまするか、

山城　さあそれは、

松枝　あなたの仰せを奥御殿へ、御披露いたしませうか、

山城　さあそれは、

女二人　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

皐月　小出さま、御返答が、

女二人　承はりたい。（ト山城守詰りし思入、此の時花道の揚幕にて）

越前　あいや、其の御返答某只今申し上げん。

皐月　やあ、あのお聲は、

山城　慥に間部、

皆々　越前どの。

ト出の鳴物になり、花道より間部越前守繼上下にて出來り、花道へ留る、

山城　これは〳〵越前殿、其許には兩三日御不快にて御出仕もなかりしが、思ひの外にお早い御出仕。

越前　如何にも、兩三日出仕つかまらず今日登城いたし、本丸の御廣敷まで御用あつて出仕なせしが、卽刻相濟み立ち歸る某、あれにて此の場のあらかじめ逐一に承はる、双方共にお控へめさるがよろしうござらう。

山城　何は格別、先づ〳〵、

皆々　これへ、

越前　然らば御免。

トやはり右の鳴物にて舞臺へ來り眞中に住ふ、上手に山城守下手に皐月松ヶ枝住ひて、

皐月　先刻よりのあらかじめ、御存じあつてお留めありしか。

松枝　お心あつてか、但しまた、此の儘二人を本丸へお返し遊ばす、

兩人　御所存か。

越前　さればでござる、双方お留め申せしは、女使お二人の、お役目の相立つやうにいたす所存。

山城　とは又何ゆゑ、其許には、
越前　何ゆゑとは小出氏、よくお聞きなされい、貴殿の申さるゝも御尤も至極と存ずれど、此のまゝ女使を返しなば、本丸よりのお咎めは山城どのばかりでなく、君御平癒の後に至り何かの障りにならんも知れず、それゆゑ双方役目の立つやう、此の場の一埒お留め申した。
山城　して双方の役目の立つとは、如何召さるゝ御所存よな。
越前　無事に濟ますは今日の、女使のお役目をお立てめされい。
山城　すりや、出羽殿よりの仰せ渡しを、反故となしても。
越前　假令出羽殿の仰せなりとも、本丸よりのお使を此の儘お返し申しては、綱豐公の御爲めにならぬ。
山城　ぢやと申して、出羽殿のお詞ゆゑ。
越前　貴殿一人遮つて左程まで言はるゝなら是非に及ばぬ、お二人ともに此の趣きを大奥へ、直さま是れより進達めされ。
皐月　ほんにそれがよろしうござりまする。
松枝　そんなら直樣退出を、
兩人　いたしまするでござりませう。（ト兩人立ち掛るを山城守思入あつて、）

山城　これは如何な、女儀に似合はぬ氣の短い、只今拙者が申したはお身達が役目の立たぬやうにと依怙地で申した譯ではござらぬ、これも出羽殿より仰せ渡され、將軍御歸依の御祈願所護持院が祈りの折柄、餘所にて祈禱いたす時は外々へ心が移り、神と佛が睨めッくらでは利益の程も如何にやと存じてなれど、祈禱とあれば粗末にはいたされぬ、（ト件の札守へこなしあつて、）此の品は拙者が受取り、間を見て御披露申した上で、御居間の北でも南でも目に立つやうに打附け申さう。
覺太　これはしたり小出氏、某がたつた今、御前へ持參仕らうと申したる札守を、
金彌　御居間へは成らぬと其許が、
二人　おつしやつたではござらぬか。
山城　はて左樣申しは申したが、其の通りを大奥へ逐一言上いたされては、廻り廻つて我等が身の上、いやさ我等はともあれ、綱豐公のお爲にならぬと、間部氏に言はれて見れば、左あるべきこと、先づ何事も某がよきに計らひ申すでござらう。（ト間部越前守こなしあつて、）
越前　小出氏にも出羽殿より仰せ附けられし旨あるゆゑ、彼れ是れとの今の爭ひ、然し拙者が詞をお用ゐ下され、無事に納まり大慶至極、
皐月　お心解けし上からは、御前へ御披露下さるやう、

松枝　偏にお願ひ申し上げまする。
山城　これは〳〵御挨拶にて痛み入る、只今の一埒はまつたく拙者の出損ひ、間部氏にも局衆にも必ずお氣に掛けられな。
越前　かく打解くれば水魚も同然、手前とても失敬御容赦下されい。
皐月　それに附けても此の御殿へ上ります上からは、綱豐公が御不例の御容態、慥と御樣子伺ひまゐれと、御母公樣よりくれ〴〵も仰せを受けし此の皐月、
松枝　御重態にゐらせられ、御目見得と申しなば却つて御病氣の障りとならん、御寢所の御次より御樣子なりとも伺ひ參れとの、御臺樣よりお詞受け、出仕いたせしこの松ヶ枝、
皐月　このお執成しは間部さま、
松枝　只管あなたのお指圖を、
兩人　願はしう存じまする。
越前　平日なればお表へ女中の出入り叶はぬは、こりや申さずとも知れたこと、君御不例の折柄に大奧よりの御使者のこと、此の儀は某兎も角も仕らう、それ御兩所、女使の方々にも、附添のお女中にも、御寢所のお次まで。

頓才　いざ、御案内いたしませう。
女二人　左樣なれば何れもさま、
山城　先づ御使者には、お越しなされい。
皐月松枝　憚りさまで、
女四人　ございまする。
ト唄になり、山城守、覺太郎、金彌、主計、頓才等、皐月、松ヶ枝を眞中に挾み腰元兩人附添ひ、皆皆越前守に會釋して上手へ入る、越前守殘り思入あつて、
越前　綱豐公の御不例の元の根ざしは護持院隨光、その禍を除かん爲、今宵吹上の御庭にて掃部頭が蟇目の鳴弦、これにて御病氣平癒なすに相違なし、流石は天下の補佐の臣、あつぱれ智者の、(ト越前守上下の肩を直すを道具替りの知らせ、)家柄ぢやなあ。
ト此模樣よろしく合方にて、此の道具廻る。
(綱豐公御居間の場)――本舞臺一面日覆より金張り紺青にて葵の紋散らしの通欄間をおろし、此の内へ正面三間常足の屋體、黑塗りの蹴込み左右へ折廻し、金襖彩色畫、この左右出入り、正面金張

りの欄間、これに一面の御簾をおろし、よき所へ銀張り黒塗り縁鍍金金物を打ちたる衝立、舞臺前へ一面に薄縁を敷き、花道とも同斷、花道の揚幕へ紋散しの金襖、總て西の丸綱豐公御居間の體。爰に以前の金彌、覺太夫、主水、八郎右衞門等四人の近臣居並び、茶道頓才二重下の方に控へ、次へ渡會龍泉醫者にて住ひ、上手に山城守立掛り居る、管絃にて道具留る。

山城　これは何れも、先刻より宿直のお役目御苦勞千萬、（ト下手へ座に着きこなしあつて、）して只今、奏者の參りしは何事でござるな。

八郎　既に今日本丸の大奥より女使二人を差廻され、まだ退出もあらざるうちに、我が君の御不例お見舞の爲とあつて、井伊掃部頭殿出仕の趣き先觸れが參つてござる。

山城　なに、掃部頭が入來とな。（ト少し氣掛りなる思入。）

頓才　井伊殿には過ぎし日まで大老役を勤められ、御當家にては取り分けて武功も勝れ由緒の家柄、

金彌　然るに此の程將軍家の思召しに、年も耳順を越されたれば、嘸かし勤めも大儀ならんと、大老役を宥免あつて、心の儘の勤め向き、

覺太　御當家四天王の隨一でも、麒麟も老ゆれば駑馬の譬へ、當時出頭第一の柳澤公がござるからは、かれこれと氣を揉まれずとも、屋敷に遊んでござればよいに、

山城　これさ近藤氏、無益のことを言はれまいぞ、嗜みめされ。
覺太　はあゝ。（ト此の時下手の襖をあけ、以前の越前守出來り）
山城　これは〳〵越前どの、只今これへ掃部頭殿、
皆々　出仕のよしにござりまする。
越前　御不例伺ひの爲、掃部頭出仕いたす筈の處、急用にて本丸へ登城いたされ、拙者へ御病體お尋ねありしが、一兩日病氣にて引籠り出仕いたさぬ由お答へ申しおきしが、して御容態は如何渡らせらるゝか、當番の御醫師は誰方でござるな。
龍泉　はゝ、渡會龍泉でござりまする。
越前　御重態にあらせらるゝに彼れ一人、なぜ手替りを本丸より、呼上げめされぬ。
山城　それ存ぜぬにはござりませねど、夜に入りますれば殊の外の御發熱にて、御心猛々しく相成られ、御醫師がお側へ立寄れば、忽ち御機嫌を損じますれば、
皆々　いたし方もござりませぬ。
越前　然らば、御藥湯も召し上らぬか。
山城　仰せの通り此の四五日は、お藥も獻じませぬやうにござりまする。

越前　御膳部などは如何でござりますな。

山城　これとても召し上りませぬゆゑ、一同心を盡し進め奉れど、たゞ冷水のみ御喉を通りまするやうにござりまする。

越前　さて〳〵それは御大切、さりながら御醫師をお嫌ひ遊ばすの、御脈がとれぬの、御膳部をまゐられぬのとあるを、其の儘にいたし置くは、こりや御小姓衆一同の等閑と申すもの。

皆々　はゝあ、恐入りましてござりまする。（ト山城守思入あつて座を進め、）

山城　いや、憚りながらとても君の御病體は、草根木皮の藥力にては驗あるまじ、たゞ神佛の力を以て御平癒を祈り奉つらんと、閣老柳澤出羽守の指圖に任せ、當上樣の御歸依あつて神田橋へ御建立の御祈願所、護持院大僧正へ命ぜられ、三七日の御祈り、隨光坊が丹精をぬきんでる上からは、御本復に相違はござりませぬ。

八郎　其の隨光坊が法力と申すは、初め御館へ招きし時、壇上に燈明を照し、正面に三ツの幣束を押し立て、

金彌　身に香染の衣を着してその露を取り、刺高の珠數を押し揉んで、勢ひこんで祕文を唱へ丹精をぬきんで珠數を擦る度に、

山城　正面に立てたる幣束は左右へ動き、實に希代のその法力。
頓才　名の附け難き難病も、平癒さするは目前、
覺太　元より君の御病氣は、御持前の御病症の募りしなれば、御祈禱の滿願までには、
三人　御全快と存じまする。（ト皆々よろしく思入あつていふ）
越前　はゝゝゝ、いや各々達もお見出しに預り、恩祿を賜はりお附人となれど、泰平の化に浴し自ら武も薄く、學力の足らざるゆゑ、賣僧の爲に誑かされ終に忠義を忘るゝ道理。
山城　すりや護持院の祈禱にも、
覺太　御批判を打たるゝか
皆々　越前どの。
越前　如何にも。
皆々　して御全快の御工夫は、
越前　掃部頭殿存じ寄らるゝ旨あつて、今宵吹上の御庭に於て、怨敵退散の蟇目の鳴弦を行はるゝ由。
皆々　すりや井伊殿には、
越前　亥の刻より寅の刻までに行はるれば、御平癒あるに疑ひなし、（ト此の時御簾のうちにて）

皐月　お館様には、

松枝　どうやらお目覺め、（ト是れにて床の淨瑠璃になり）

上るり〽や丶夜も亥中に時の近づけば、忽ち兆す奇病の惱み、綱豐公は病苦に疲れ、〽臥したまひしが熱氣盛んに、むつくと起き、

ト是れにてよき時分に御簾を捲き揚げる、爰に綱豐病鉢卷、白の着附にて蒲團の上に住ひ、この前へ鼻紙臺、脇息、刀掛など並べ、後へ釣夜具を置き、御簾あがると諸士左右に分れ住ひ、越前守は綱豐の容態を見詰め思入、皐月・松ヶ枝は下手へ住ふ。

綱豐　掩ひし物をとりのけい、水を持て〱。

越前　それ、龍泉老、お藥湯。

龍泉　はあ丶。

ト龍泉下手より銀張りの茶碗を高茶臺へ載せ持つて出來り、綱豐へ出す。

〽差し出せば、その儘ぐつと呑みほしたまひ、（ト綱豐公ぐつと呑み干し、）

〽ほつと一息つくうちに、物の怪御目を遮りしや、（トどろ〱のやうな風の音になり）

綱豐　や丶、群り來る魔性ども、我に刃向ふとは奇怪至極。

〽弱りよろぼひ苦しき息、

我に逆らふ魍魎鬼神、いで綱豊が斬り裂きくれん。

ト刀を取り突立ちて、刀を抜くゆゑ、越前守思入あつて、

越前　それ、皆の衆御介抱召されい。

皆々　はあゝ、（ト近臣四人立ち掛り、）

金彌　我が君、

八郎　お心たしかに、

兩人　お持ち遊ばしませ。

綱豊　えゝ放せ〳〵。

〽放せ〳〵と綱豊公、又も邪熱の逆上り亂心の現なく、

ト此の文句のうち綱豊皆々を振拂ひ、越前守に斬つて掛る、越前守その手を捕へ扇にて刀を拂ひ、

越前　はていぶかしき、（ト道具替りの知らせ、）御病症ぢやな。

トこれにて綱豊を皆々捨ぜりふにて抱き留める、綱豊もがくを、早舞にて此の道具廻る。

（吹上御庭先の場）＝本舞臺三間の間平舞臺、正面一面に二紺三白の幕張り、此の後吹上の庭を見せたる遠見の張物、舞臺眞中へ八足の神祇机二脚並べ、此の上へ幣束、鏡附の榊土器へ青物の供物を盛りしを供へ、この四ツ角へ注連を張りし葉附の竹を立て、机の前へ荒莚を敷き、左右へ三足の篝火を照らし、下手に高麗緣の疊一疊並べて立てかけあり、總て吹上お庭内の體。風の音にて幕明く。と二絃琴笏拍子の鳴物になり、上手より掃部頭、半素袍侍烏帽子にて金剛草履をはき、手に敷皮を持ち出る、後より木又土佐同じこしらへにて蟇目の弓矢を持ち出で來り、土佐は上手へ控へる、掃部頭は上手へ敷皮を敷き、正面へ向ひ諸神へ禮拜の心よろしくあつて、敷皮の上へ戻り、蟇目の支度あつて、弓矢を持つて立上り、

〽發ツ、弦音りう〳〵と地の柱へ突立ちて鳴る鏑、矢さけび顫うてりう〳〵たり。

ト此の内掃部頭弓に矢をつがひ、件の疊へ向ひ蟇目を放すことよろしくあり、土佐は一々後見をなすこと、トゞばた〳〵になり、花道より以前の越前守出來り、直に舞臺へ來り。

越前　直孝殿それに居めされしか、今宵拙者宿直いたせしに、御物の怪退き、御惱平癒にござりまする。

掃部　すりや、御惱平癒とな、

土佐　はゝ有難し、これと申すも日光尊靈の影身に附添ひ、諸神感應まし〳〵てか、

越前　上の障礙は退くとも、其の根を斷たねば國家の禍ひ、

掃部　それに荷擔の護持院隨光、祈念に事寄せ西丸樣を、調伏なさん彼等の陰謀、
越前　御老體の御眼識通り、彼等を一々糺問なし、
土佐　罪に伏させ死刑の御處置を、
掃部　おゝ、期を延ばされぬ大事件、片時も早く取挫がん。
越前　すりや是れより直に、直純殿には、
土佐　しかし、一筋繩にはかゝらぬ賣僧、
兩人　隨分共に、
掃部　いや、御配慮御無用。（ト掃部頭花道の方へ行き掛ける）
〽西の丸へと、
ト掃部頭は花道、兩人は舞臺にて氣遣ふ思入よろしく、三重カケリにて、
ト調べにてつなぎ、道具出來次第に引返す。

幕

（護持院祈念の場）＝＝本舞臺黑塗竹に赤緣の御簾を捲揚げし通し欄間、此の眞中へ常足の二重四

枚飾り、黒塗り縁の上壇の蹴込み、此の上へ誂への高麗縁の二疊臺を据ゑ、この向う鍍金の金物を打ちし護摩壇火鉢本式の如く、此の四方へ五色の菊の造花を立て、此の廻りへ注連を張り、正面に幣束を三本立て、この眞中へ白刃を立てあり、護摩壇の廻りへ眞鍮の六器へ小鳥、小兎、蛙などの贄を飾り附け、燈明を左右へ置く、舞臺三方とも板羽目、上下杉戸の出入り口。壇の前へ金襴の水引、華鬘結びの總紐、これより下へ白の竪布の幕を下し、後に切つて落すこと。風の音にて幕明く。と鳴物打ちあげ、直に大薩摩になる、

〽それ佛法あれば世法あり、煩惱菩提善惡不二、悟れば廣き法の道、踏み迷うたる護持院隨光、

ト鈴の音、鞨鼓入りの鳴物にて白の戸張りを切つて落す、爰に隨光白の着附薄墨染の行衣の上へ呪文の梵字を逆に書きしを着、袖をしぼり揚げ、有髮の僧老けたるこしらへにて神前へ向ひ、火鉢に護摩木を焼べ、呪文を唱へゐる體。この膝の下へ紫の衣、白錦の七條の袈裟を踏み敷き、調伏祈りの體よろしく、

〽官位の法服錦の袈裟膝下に踏み敷く怪しの行法、身を荒繩に縛しめて刺高の念珠擦り立てゝ、逆呪の梵語鈴の音も一間に響き物凄く、護摩も瞋恚の黒煙りすさまじくも亦怖ろ

し〳〵。

ト右の文句の內、祝詞の合方をあしらひ、鳴物打合せ隨光壇上の四方を拜し祈る心にて、護摩の煙を見てびつくり思入あつて、前向になり、

隨光　はて心得ぬ、最前といひ今もまた火中へ投ずる供物は飛び散り、陽氣盛んと燃え立つ護摩の火、煙りは陰に燻ぼりて內外に結ぶ印相と順序の違ふは心得ず、今日まで修したる行法へ妨げなす者ありて、願主の念願空しくなれるや、や〳〵〳〵、さりながら今日まで唱へ込んだる明王天部分類の眷族我が修する魔緣に引かれて力を添へ、などか驗のあらざらんや。なにこれしきに撓むべき、只管祈りて威力を見せん。（トよろしく祈りのこなし、此の時上手杉戶の內にて、）

近習二人　やあ、其の祈り暫く待て。

隨光　何と、

ト小鼓入りの合方になり、上手より掃部頭半素袍侍烏帽子にて、手に中啓を持ち出る、後より近習二人着附繼上下の裝にて弓矢を持ち、附添ひ出來る、隨光掃部頭を見て、

我が行法を止めしは、何人なりと思ひしに掃部頭殿ならずや、何がゆゑに拙僧が、修法の最中妨げめさる。

掃部　おゝ、止めしは其の方が修する所の行法を訝しく存ずるゆゑ、最早祈禱いたすに及ばぬ。

隨光　こは以ての外の其の一言、將軍家の御歸依によりて天下の祈願所を命ぜられ、大僧正の官ある某天下の跡目の綱豐公の御奇病平癒せしめんと、柳澤出羽守殿の命を受けて修するを、三七日の行法を止め、その上に勤行に不審ありとの批難をなすは、ムゝ分つた、今出頭の出羽殿の羽振のよきを羨しく、難癖つけんと邪魔めさるか、但しは又、綱豐殿の奇病を受け、熱氣に犯されての囈言か。また本性で言つたのなら、掃部殿でも老臣でも、其分には差し置かぬぞ。

掃部　阿黨の臣等が推擧を以て、御祈願所ともつてうされ大僧正の官を受くれど、汝の行法試し見るにその意を得ざる修法ぶり、それゆゑ祈禱いたすに及ばぬ。

隨光　やあ將軍家の許可によつて大僧正に任官なし、祈禱所を司れば私も一個の天下の役人、それをかれこれ言はるゝは、將軍初め有司等の眼識が違ふと申さるゝや。

掃部　はゝあ、いしくも我を難ぜしよな、將軍家お眼識違ひ、時の有司が計らひの惡しきを末世へ遺さじと思ふがゆゑに此の對論、我今汝に不審の條々、一々糺明いたさんが速かに返答なすや。

隨光　面白し、何の不審かお尋ねあれ、申し開いてお目に掛けん。

掃部　然らば問ふぞよ。

隨光　さあ、疾く〳〵とお尋ねあれ。（ト兩人よろしく思入あつて、音樂の鳴物になり。）

掃部　その方將軍の命を奉じ、營中に壇を設け御祈禱を勤むるとて、見れば美しき袈裟法衣を無慚にも膝下に敷きその上へ端坐なすが、此の濃き紫の法服錦の袈裟は大僧正の官位なければ着用はならぬ品、それを膝下に引敷くは足下に掛くるも同じこと、これ將軍家を蔑ろにせしにはあらずや、又其の方が身に纏ふ薄墨染の麻衣へ逆に梵字を書きたるは、これまで汝が修す所正法とは思はれず、不審の二ヶ條言譯ありや。

隨光　その二ヶ條より先づ先きに、拙僧御邊に告ぐべきは綱豐殿が病の根ざし、性來虛弱にしてお附の人々老臣達、御幼少の時分より百事注意あるべきを等閑に過すゆゑ、疳火昂ぶり逆亂となり、終に天魔の障碍ありて醫療も屆かず、加持祈禱も世の常の祈りにては露程も驗なく、早や御一命も危ふきゆゑ、今となりては僧正僧都の位ありとも何かせん、それゆゑ官位の衣を捨てゝ膝下に敷き出家本來の面目も頭陀乞丐の姿となり、日夜水浴の垢離をとりて身を淨め、行法の淨衣に梵字を逆に書きたるも、時に取つての行者の氣轉。

掃部　やあ汝、我難問を掛くるに及んで、いしくも言葉を繕ひ飾り、綱豐公の御爲めに水を浴び心を碎き御全快を祈ると申せど、綱豐殿には性來暗愚虛弱と蔑なすは、正しく君を蔑するならん。

隨光　や、

掃部　それのみならず、密法祕密と辯を以て云ひ解くとも、逆に梵字を認めしは、よも正法とは申されまい、又この祈りには何の神、何の佛を以て本尊として拜するや、此の儀は如何に、

隨光　その本尊を祕する時は猶お疑ひのあらんなれば手短かに申し述べん、唯今祈り奉つるは佛も數ある其中にて、諸宗ともに渴仰する西方淨土の彌陀如來、

ト これにて掃部頭訝しきこなし。

なれども彌陀の本願は、罪深き衆生を淨土へ接受あらんが爲め、柔和忍辱の御背、されども濟度すべからざる惡逆の者共あり、それを助くる爲めに六字の明王と現じたまうて世に怖ろしき忿怒の形相、この明王を修すれば、君へ禍ひなす所の天魔邪神も退散なすゆゑ、これ此の如く生類を贄となして祀りし上、またこれを退くの法を修するも則ち祕密、逆まに書く文字なども是れまた言下に說くを得ず、斯の如きを俗人に說くことあらば、越三魔耶の罪おそるべし。

掃部　汝方便を以て祕密など〻聖めかすといへども、我に於ては信用せず、假令六字の明王たりとも元彌陀佛と申すからは、其の法を修するの壇へ贄を供する事の不審は免れず、この儀は如何に、返答ありや。

隨光　はて執念くも難ぜしよな、既に唐土前漢以來國王替りて律を定め、牛馬を斬つて天地を祀る、まして日本の將軍の跡目となるべき大將の危急を祈るに、なにこれ式の生類を殺すとも、よも妨げのござらうや、おろか〳〵。

掃部　やあ、言ふな隨光、明煌々として金色鋭く、亂れ燒刃に冷々と殺氣を含むは、世に類なき名作ながら、當武將家に害ありて神君以來嫌はせたまふ、中身の銘は村正ならんと、老眼ながらも見拔きし眼力、

隨光　や、

掃部　あざとき汝が邪法にて、是れへ點ぜし燈明の大燈三つ小燈六つ、これ天罡星三十六員、又大燈七つ小燈二つ、是れ地殺星の七十二員、則ち天地を逆まに供へ、不吉を表す村正を中央に据ゑ祈るからは、呪詛調伏に相違あるまい。

隨光　むゝ、

掃部　まだ其の上に、掃部頭が行ひし蟇目の法の鳴弦にて、障碍立ち去り綱豐公には、御惱忽ち御平癒なるわ。

隨光　なに、御平癒とな、むゝ。

掃部　最早廢れぬ賣僧の隨光、君を暗愚と申せしは、調伏なりと白狀なすか。

隨光　さあ、それは、

掃部　逆に記せし梵字にも、正法明るき返答あるや。

隨光　さあ、それは、

掃部　彌陀の利劍と唱へたる、その村正に言譯あるか。

隨光　さあ、

掃部　伏罪なして、御處置を待つか。

隨光　さあ、

掃部　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵、

掃部　賣僧、返答なゝなんと。（トきつといふ。隨光もう是れまでといふこなしにて）

隨光　掃部頭が武の德にて、呪詛調伏も消え果てしか、あゝ殘念やなあ。

掃部　邪は正に敵し難し、現在所持なす村正が君を呪詛なす緣は是れ白ゝ、斯程の陰謀企つには荷擔の輩のあるは必定、一々姓名白狀なし、死刑の御處置を相待て隨光。

トこれにて掃部頭、近習の持ちし弓を取り、兩人へそれと目くばせする、近習兩人隨光の手を取り壇上より引きおろし引きすゑる、掃部頭は件の弓にて壇上を打ち散らすと、正面の村正隨光の前へ落ちるを、隨光手早く取り、

隨光　やあ愚や直純、逆意と知つて企つ大望、露顯なすとも荷擔の者を何とて白狀なすべきや、その棟梁は斯くいふ、(ト村正を腹へ突き立て)隨光、

掃部　流石は惡僧、健氣な振舞。

隨光　いざ、介錯。

ト掃部頭刀をひらりと突出す、隨光引き廻しながら首を差延べる。双方よろしく木の頭、キザミに付き早めし時の太鼓、カケリにて、

ひやうし幕

ト幕引付けると、

掃部　えい、

ト太刀音して、跡シヤギリ。

五幕目

柳澤屋敷の場
三間邸宅の場

〔役名――三間右近、加納大隅守、曾根權太夫、百姓五郎作、植木屋次郎兵衞、同松八、同松六。三間の下女おしづ、同母おせつ、屋敷女房おくら、同おせき、其他。〕

（柳澤屋敷奥殿の場）――本舞臺三間の間中足の二重、本庇本緣附き、正面一間床の間、續いて袋戸棚、違ひ棚この下銀襖、上の方一間折廻し塗骨障子屋體、下の方後へ下げて網代塀、春日形の石燈籠、振りよき松の大樹、總て柳澤屋敷奥殿の體。爰に植木屋次郎兵衞、松八、松六三人紺の腹掛同じく股引半纏草鞋、右の松の根を鍬でならして居る、此の見得調べにて幕明く。

松八　若し親方、爰が表だと思ひますが、ちよつと見ておくんなさい。

次郎　もう少し左りの方へ廻したいやうに思ふが、然しお座敷から見たら、爰等で丁度よからうか。

松六　何にしろやかましやの曾根さまに、お座敷から見てお貰ひ申すがいゝ。

次郎　今に爰へおいでになつたら、とつくりと見てお貰ひ申さう、まあ一服やるがいゝ。

ト三人下に居て擦火打で火を打ち、煙草を呑みながら、

松八　時に親方、大きな聲では言えねえが、公方樣が戌の御年で犬を粗末にするなといふ、嚴しいお觸

が出ましたが、こんな困ることはない。

松六　いや困るの困らねえのと、先月家で可愛がる雌犬に三疋子が産れ、やれお屆けだの檢分だのと、六七日暇を費やした。

次郎　實に町方でも在方でもこんな困ることはないが、譬にもいふ泣く子と地頭、名に負ふ日本六十餘州の主といはるゝ公方樣、どんなお觸が出ようとも上と下では仕方がねえ。

松八　何にしろ馬鹿々々しいは、犬が子を産む度毎に、その産んだ子の牝牡から毛色を詳しく書面に認め、犬役所へ訴へるといふは、實に前代未聞の話しだ。

松六　この間も場末の方で、鷄を取つた犬をぶち殺して入牢になつたといふことだ、是れが後の世になつたら誰も本當にしやあしめえ。

次郎　こんなことは話し草に書き遺して置きてえものだ。

松八　それはさうと、日差しはもうかれこれ八ツ時分だが、

松六　早く御檢分を受けたいものだ。（ト八ツの時計合方になり、奧より權太夫繼上下一本ざしにて出來り。）

權太　植木屋次郎兵衛、最早松は植ゑ附けたか。（ト言ひながら二重に住ふ。）

次郎　これは曾根さまでござりますか、只今御檢分を願ひませうと存じました所でござります、先づ此

の邊では如何でござりませう。

權太　譬に申す餅は餅屋、客座から見た所が丁度松の正面にて、一段木振りが好う見える。

次郎　少し右へ廻りました方がよろしからうかと存じまするが、御座敷からは如何でござりまする。

權太　いや植所といひ木振りといひ、聊か申す所はないが、少し邪魔な枝もあれど、御前へ御覽に入れた上、一枝おろして貰はうか。

次郎　左樣なら今日は、この儘にして置きませう。

權太　最早お退りに間もあるまいから、暫時休息いたすがよい。

次郎　有難うござりまする。（ト奥より袴裝の近習出來り、）

近習　はつ、申し上げます。

權太　おゝ何事ぢや。

近習　只今三間右近殿、御入來にござりまする。

權太　それ待兼ねたり、これへと申せ。

近習　はつ。（ト引つ返して入る。）

權太　こりや次郎兵衛、只今これへ客來あれば、其の方共はお臺所で、一銚子貰ふがよい。

三人　それは有難うござりまする。
權太　身共が左樣申したと、久太夫へ申し傳へよ。
次郎　畏りましてござりまする。
松八　左樣なれば、御遠慮なしに、
松六　一杯頂戴。
三人　いたしまする。
　　ト調べになり、三人下手へ入る、合方になり、下手襖を明けて三間右近上下一本ざし、刀を提げて出來る、權太夫見て、
權太　これは〳〵三間氏、ようこそ御入來なされしぞ。
右近　先刻の御狀により、取り敢ず參上いたしましてござる。
權太　何は兎もあれ先づ〳〵これへ、（ト權太夫下手へ下る。）
右近　然らば御免下さりませう。（ト合方になり、右近會釋なし、上手へ住ひ思入あつて、）扨て此度は圖らずも、又もや御加增仰附られ家の面目此の上なし、大慶至極にござりまする。（ト辭儀をなす。）
權太　上樣はじめ北丸樣のお茶のお相手めさるので、お上通りのお首尾よろしく、遠からずして萬石取

に御昇進なさるであらう。
右近　これと申すも御當家のお引立てゆゑ思はぬ立身、お禮の申し上げやうもござりませぬ。
權太　御存じの如く手前主人も、小身よりして段々と立身出世なせしゆゑ、三間氏は衆に勝れ上のお役に立つべき御器量、どうか我等同樣に御出世おさせ申し度くと常々申し居りますれば、必ず惡いことはござりませねば、御精勤をなされませ。
右近　なか〳〵以て御當家樣とは雲泥萬里の拙者ゆゑ、何のお役にも立たざれど父が千家の茶道を好み聊か習ひ覺えたる拙き業が御意に適ひ、茶道の御指南いたしまするは、實に有難きことに存じまする。
權太　拙者などは幼少より武道にばかり心を委ね、風雅の道に疎ければ上つ方のお相手ならず、それに引替へ尊公には詩歌連俳香茶の湯萬事に秀でゝござるゆゑ、上樣のお相手に御同席召さるといふは、まことに以て藝の德、お羨ましいことでござる。
右近　御同席をいたしまするは藝の德にはござりまするが、それ以て御當家の御引立に預かるゆゑ、此の上共に御主人へ、よろしくお執成しを願ひます。
權太　如何なる御緣か、主人にも、貴殿を兄弟同樣に思召されてござるゆゑ、遠からず御養女を御內室

に差上げて、御親子の御縁をお結びあるやう、お取持ちいたしませうさ

右近　左樣相成る上からは、殿中に於て肩身も廣く、千萬有難い儀にござりまする、(ト右近庭を見て、)見ますれば御庭前に、お手入れがござりましたな。

權太　主人の好みで松を一本これへ植ゑさせましてござるが、居所はよろしうござりませうかな。

右近　お出入りの次郎兵衞は、茶事の心得がござりまするから、申し分はござりませぬが、右へ差出し一枝が、少し邪魔かと存ぜられます。(ト權太夫膝を打つて、)

權太　まことに十指の指ざすところ、拙者も左樣存じました、早速枝を切らせませう。

右近　あの一枝を取りましたら、月の夜などは葉越しにさし、又一しほでござりませう。

權太　(思入あつて、)扨今日手前主人御面會なせし上、御密談申し上げ度き仔細あつて、尊公をお迎ひに上げましたるが、先刻上より急御召しに出仕いたしてござりまする、それゆゑ仔細は拙者より詳しく申し上げるやう、申し置かれましてござりまする。

右近　物數ならぬ拙者めに、御密談とござりまするは、

權太　貴殿に限る御用あつて、お頼み申し度き儀がござるが、お聞き濟み下さりませうや。

右近　如何なる御用か存じませぬが、御當家よりのお頼みならば、假令一命召さるゝとも決して否みは

申しませぬ。

權太　しかと左樣でござるな。

右近　はて、僅か百俵の御家人が今五百石頂戴なし、御旗本に登庸されしは全く御當家のお執成しゆゑ假令何樣のことなりとも、此の身に叶ひしことならば、

權太　御承引下さりますとな。

右近　如何にも、

權太　それは千萬忝けない。

右近　して、お賴みとおつしやりますは、

權太　貴殿を見込んで出羽守が、折入つてのお賴みは、私ならぬ天下の爲め。

右近　え、天下の爲めとは、

權太　他聞を憚る一大事、御誓言が承はりたい。

右近　心得ました。（ト誂への合方になり、右近小柄を拔き脇差をぬきかけ、金打をなし、）他言いたさぬ誓ひの金打。

權太　其のお誓ひを見る上は、（ト合方きつぱりとなり、權太夫立上り上下を見廻し、元の座へ住ふ。）

右近　して、某へお頼みとは。

權太　主人出羽守がお頼みは、他聞を憚る一大事、物に譬へて申さうならこれなる庭の松の大樹、右へ差出しあの小枝が目障りゆゑに其許に、おろしてお貰ひ申したいのぢや。

右近　右へさし出しあの一枝、目障りゆゑにおろせとは、お心ありげなそのお詞、して松の小枝と仰せられるは、

權太　松は則ち松平、世界に一木の大樹は將軍、その邪魔になる小枝と申すは、甲府綱重公のお胤なる今西丸の綱豊公。

右近　え、(トびつくり思入)

權太　すべて家屋の建方から庭の飛石、樹木の植ゑ方茶にあらざれば風韻薄し、その茶を以て邪魔な小枝を、貴殿の業で人知れず落してお貰ひ申したい。

右近　むゝ、して又小枝が邪魔になるとは。

權太　西丸様は甲府宰相綱重公の御嫡子にて、當上様の甥君ゆゑ御順養子になされし所、北の丸様に上様の御實子御出生ありしゆゑ、御親子の御情愛にて、御實子を以て六代の將軍職になされ度けれど、御養子あれば差し置いて御家督相續さし難く、諺にいふ目の上の瘤は則ち綱豊公、それゆ

ゐ屢々上様より主人出羽守へ御相談、あらはにそれと仰せなければど御心中御察し申し、護持院の大僧正に呪詛調伏なさしめたれど、井伊老侯の蟇目に挫かれ、祈念の驗あらざるゆゑ、明日北の丸の御殿に於て御茶の湯のあるは幸ひ、その節貴殿の計ひにてお茶のうちへ毒を仕込み綱豐公へ差上げて、御目障りの松の小枝、おろしてお貰ひ申したい。（ト是れにて右近びつくりせし思入あつて、）

右近　すりやお頼みとおつしやるは、明日北の丸のお茶席にて、綱豐公へ毒藥をまゐらせ、お命斷てと仰せらるゝか。

權太　如何にも主人出羽守、貴殿を見込んで密事のお頼み、その源は松の大樹、幹の障りになるべき小枝を、おろすも則ち上への奉公。

右近　茶道を以て是れまでに出世なしたる某ゆゑ、否と言はれぬお頼みなれど、まさしく主君を弑することは、

權太　然らば貴殿は主人の頼みを、御得心下されぬか。

右近　この儀ばかりは只管に、御容赦願ひ奉つる。（ト右近思入あつて辭儀をなす、權太夫思入あつて、）

權太　それは近頃卑怯でござる、主人が頼みは善惡とも違背せぬとたつた今申されたではござらぬか。昔が今に國の爲め、天下の爲めに主親を討ちし例しもあること故、これが西丸附といふではなし、

元より貴殿は將軍の御家人にてはあらざるか、僅かの内に五百石まで御加増ありしは斯かる時御用に立てん思召し、亂世ならば御馬前の討死なすが忠義なれど、治世に於ては善惡とも主命もかず勤むるが、臣下の者の忠義ゆゑ、出羽守が上樣の御心中をお察し申し、貴殿へ密事の此のお賴み、お聞き入れ下されませぬか。

右近　さあ、それは、

權太　假令如何なることなりとも、決して否やは申さぬと、仰せありしは僞りなるか。

右近　全くもつて、

權太　さなくば主人の密事のお賴み、お聞き入れ下さるか。

右近　さあ、

權太　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

權太　大事を漏せし三間氏、御得心下されずば、一命お貰ひ申さにやならぬ、御覺悟あつて此の場にて否やの御返事承はりたい。（トきつと言ふ、右近ぢつと思入あつて、）

右近　是れまで出身出世なせしも全く御當家の御推擧ゆゑ、御恩を思うて、此の儀勤めまするでござり

まする。

権太 すりやお聞き入れ下さりますするか。

右近 如何にも承知仕つる。（ト右近は死ぬ覺悟の思入、權太夫は悦ぶ思入にて、）

權太 それは千萬忝ない、主人に於ても嘸滿足、斯かる企ていたすのは道にあらざることながら、此の儘置けば末々は二木の松の爭ひに、亂の基ゐと存ずるゆゑ、連なる枝をおろすのも、大樹へ盡す主人が忠義。

右近 天下の無事を思召す御心中を推察なし、御目障りの一枝を、（ト右近松の枝へ思入あつて、緣端へ出で拔打ちに松の枝を切落し、差添を納め、）まツこのやうに除きなば、

權太 それにて松の木振りも直り、芽組む綠の若君が、

右近 大樹の接木となる時は、

權太 松吹く風も穩かに、

右近 ます〳〵茂る松平、

權太 常磐御前にあらねども、

右近 操を捨てし松の色にて、

權太　やがて天下は、
右近　え、
權太　いやさ、これも天下の、
兩人　お爲めぢやなあ。（ト兩人心々の思入あつて）
右近　何れ明朝參上いたし、お打合せ仕らん。
權太　何卒主人にお逢ひ下され、
右近　御懇立から諸事萬端、
權太　他聞を憚かる鬪ひの手續き、
右近　御密談申すでござる。
權太　御入來お待ち申します。
右近　御下城ござらば、何卒よしなに、
權太　申し傳へるでござります。
ト辭儀をなす、此の時若黨太緒の草履を持ち出で、平舞臺へ直し、
若黨　お草履は、これへ持參いたしました。

右近　これは憚り、（ト言ひながら平舞臺へ下り草履をはき、以前の切落せし松の枝を取上げ思入あつて、）あゝ、同じ枝にてありながら、

權太　や、（ト右近松の枝を打ち捨て、）

右近　いや、枯れるも時の盛衰ぢやなあ。

ト唄になり、右近是非なきこなしにて花道へ行く。若黨附添ひ行くゆゑ、

　いや、お見送りには及びませぬぞ。

若黨　はつ、

ト又唄になり、右近思入、若黨附添ひ花道へ入る。權太夫後を見送り思入あつて、

權太　かねて主人の心中を某推察なせしゆゑ、奸智に長けし護持院の隨光殿を語らひて調伏なせしが、凡眼ならぬ井伊の親仁に見顯はされ、事ならざれば又候や此の密計をたくらみしが、日頃の恩義に三間氏一味同心なせし上は、事成就疑ひなし、明日北の丸のお茶の湯にて、彼の御方が御逝去あらば、御實子ゆゑに御跡目はお高の方さまのお腹にやどせし君のお胤の綱千代樣、さうなる時は百萬石の御墨附も世に出て、主人は加州同樣に天下二軒の大々名、然らば家老の某も萬石取りの大名格、はて悦ばしき、（ト頷くを道具替りの知せ、）幸先きぢやなあ。

ト唄になり、權太夫につたりと思入、よろしく道具廻る。

（三間屋敷の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面床の間、下手銀張り地袋戸棚、此の上に刀掛け眞中茶壁瓦燈口太鼓張りの襖、上の方一間折廻し腰張の茶壁、角がらの入口太鼓張りの襖、出入あり、下の方一間玄關正面雲母形の襖、此の下黑塀にて見切り、二重と玄關の間低き四つ目垣、總て三間屋敷の體。二重に白木の臺へ紙に包み水引を掛けし反物を載せて飾り、平舞臺におくら、おせき屋敷女房のこしらへにて住ひ、おしづ島田髷下女のこしらへにて控へ居る、此の見得前の唄にて道具廻る。

くら　これおしづどの、御隱居さまはお家にか、右近さまの御加增を、

せき　御悅びに上りましたと、一寸奥へさう申して下さんせ。

しづ　只今お目に掛りますから、先づお煙草でもお上りなされませ。（ト煙草盆を出す、兩人臺を見て、）

くら　これおせきさん御覽なされ、あれに飾つてある御進物は、皆反物でござんすな。

せき　何れからの御進物か、お福分けに一反づゝ頂戴したいものでござんす。

くら　又そんなことを言はしやんすか。

しづ　これは先程神田橋の柳澤樣の御奥から、旦那樣をお祝ひなされし御進物でございます。

くら　そんなら是れは上様の御意に入りの、柳澤様からの御進物でござりますか。
せき　右近様はお茶がよいので御指南をなさるゆゑ、柳澤様のお引立てゞ先達てから度々の御出世。
くら　お羨ましいことで、
兩人　ござりますわいな。
ト合方きつばりとなり、奥よりおせつ二つ髷紋付の羽織、老けたる後家のこしらへ、烟草盆を提げて出來り、
せつ　これは御隣家のお二人さま、ようおいでなされましたな。
くら　承はれば右近さまが、又々百石御加増になられましたと申すこと、
せき　誠にお目出度いことでござりますから、一寸お悦びに上りましたわいな。
せつ　御繁用でござりませうに、お悦びにおいで下さりまして有難うござりますわいな。
くら　昨年と申し又今年、引き續いての御出世は、
せき　御器量ゆゑとは申しながら、お手柄なことでござりますわいな。
せつ　未熟な茶の湯が上様の御意に叶うて、御加増ありしは冥加至極のことなれど、武士は戰場の功がなければ家の晴れにはなりませぬ、申さば茶道は遊藝ゆゑ、手柄などゝは申されませぬ。

くら　それはあなたの昔氣質、大きな聲では申されませぬが當時上樣のお覺え目出度く、空飛ぶ鳥も落ちるほどの勢ひだといふ柳澤さま、俄に御出世なされたも戰場の上のお手柄と申すやうな譯ではなく、味なことから上樣の御意に叶うて御立身、

せき　世間で何と申さうとも、名を取らうより德の世の中、實入りのよいのがわたくし共は先づ何よりでござります。

せつ　ほんにお二人のおつしやる通り、今は治世のことなれば、いくら手柄が仕たうても御馬前にての手柄は出來ぬ、遊藝にても御意に叶ひ親に勝りし身の上に、なりしは忰が身の譽、

くら　譽れ所ではござりませぬ、先づわたくし共を初めとして以前御同勤をいたしたお仲間衆がおいでになり、如何なるよい月日の下でお生れなされたことなるかと、寄るとさはるとお噂いたし羨ぬものはござりませぬわいな。

せき　それといふのも右近さまは、お茶といふ結構な藝をお持ちなされるゆゑ、それに引替へ私共の愚傳次どのは不器用にて藝といふは酒ばかり、内で寐酒は一合か僅か五勺でござりますが、御馳走酒でござりますれば、一升でも二升でもおあしが出ねば、どちらへでも直にさんじよう(三升)いたしまして、四升五升だ、最う呑めぬと申すやうになりますには六七升も呑みませうが、斯う

わたくしが噂を申せば、大方家で八九升（ハックショ）と嚔をいたして居りませう。

せき　又わたくし共の二八郎は蕎麥を喰べるが一の藝、尤も小な形ではあれど、我が背丈より蒸籠を高く積むのが自慢にて、よく人様と賭をなし、手柄を度々いたします。

くら　どうか此の邊の藝道でお取立てになりますやう、お羽振りのよい柳澤さまへ、

せき　御推擧なされて下さりますやう、

兩人　お願ひ申しますわいな。

せつ　伜が歸りましたなら、お二人さまのお頼みを、申し傳へるでござりませう。

くら　實の所は當暮が極必迫でござりますゆゑ、玉落ち前に少しでも御加增になりますやう、お執成しを願ひます。

せき　手前勝手な事ばかり申しまして、御隱居さまには嘸御迷惑でござりませう。

せつ　丁度徒然の所ゆゑ、よい折柄でござりますわいな。（トおしづ茶を汲み來り、）

しづ　お茶をお上りなされませ。（ト茶を出す。）

くら　あんまり喋べつて呑みたいところ、

せき　これは有難うござりますわいな。

ト兩人茶を呑む、おせつ菓子簞笥から有合ふ干菓子を紙へ取り、

せつ　粗末なお菓子にござりますが、召上つて下さりませ。(ト出す。)

くら　これはまあ結構なお菓子を、有難うござりますわいな。

せき　定めて御到來でござりませうが、どちらからお貰ひなされました。

しづ　いえ〳〵それはお出入りの、越後屋からお取りなされましたわいな。

せき　これは粗相を申しました、大方柳澤さまからでも御到來かと存じました、御免なされて下さりませ。

くら　何にいたせ此のお菓子は、お貰ひ申して參りませう。(ト紙へ包む。)

せき　あゝもし、半分は私が、

くら　家へ歸つて分けませうわいな、(ト袂へ入れ、)それはさうと御隱居さま、御仕事でもござりますなら、御遠慮なくお遣はし下されませ。

せき　私共の裏の井戸は近邊にない好い水ゆゑ、汚れ物でもござりますなら、洗濯をして上げませう。

せつ　どういたしまして勿體ない、お前さま方に其樣なことが、

くら　いえ〳〵それは昔のこと、今は御出世なされまして、わたくしどもとは段違ひ、

せき　譬へていはゞ泥鼈とお月さまほど違ひますれば、そんなことをおつしやらずと、
兩人　お遣はしなされて下さりませ。
せつ　そのうちお願ひ申しませうわいな。
兩人　左樣ならばおしづどの、
しづ　もうお歸りでござりまするか。（ト合方にて兩人門口へ出で）
くら　慾張りましたやうなれど、玉落ち前に出世なすやう、
せき　彼の方さまへお取持を、お願ひ申し、
兩人　ますわいな。（ト稽古唄になり、兩人花道へ入る、跡おせつ思入あつて、）
せつ　人心ほど世の中に替り易いものはない、此の間までわたしなどを下目に見なせし二人の衆が、伜の出世を羨みて柳澤さまへ取持ちくれの、仕事があればしませうの、水が好いゆゑ洗濯せうのと心の知れた追從輕薄、見下げ果てたことぢやの。
しづ　旦那さまのお詞添へで早う出世が出來るやう、それゆゑあなたへ追從輕薄、今日此の頃は私にさへ、ようちやほやと言ひますわいな。
せつ　これといふのも一方ならず柳澤さまのお引立てゆゑ、あゝ有難いことぢやわいの。

ト矢張り稽古唄にて花道より五郎作脚絆草鞋尻端折り、老けたる打扮にて絲立へ蓮根を三本包み、これを背負ひ出來り花道にて、

五郎　久しく娘の便りがないから今日は尋ねに出て來たが、おれの娘にあのやうな慾のない者がどうして出來たか、親に似ぬ子は鬼子といふが、その癖器量は十人並に勝れ、心立ても佛のやう、旦那さまも御獨身ゆゑ、お膳を据ゑてこの親に樂でもさせてくれゝばよいに、はてさて困つた奴だなあ、（ト舞臺へ來り思入あつて、）お〻お臺所へ行くのであつたを、うつかりしてお玄關へ來た、お庭口から御免を蒙りませう。はい御免下さりませ、二合半の五郎作でございます。

しづ　お〻、父さんでござんしたか。（ト枝折戸を明ける、）

五郎　お〻娘、達者で居たか、おりや死んだかと思うた。

しづ　わたしの顏を見るやいな、死んだかとは、もし父さん、何をお前言はしやんすぞいな。

五郎　さあ先々月から便りのないのに、此の二三日の夢見の惡さ、こりやてつきり煩らうてか、それとも死にでもしはせぬかと、案じられてならぬから、今日態々尋ねて來たのだ。

せつ　（これを見て、）お〻五郎作、來やつたか。

五郎　これは御隱居さまでござりますか、まことに御無沙汰をいたしました。

ト内へ入らうとするをおしづ留めて、

しづ　あゝもし、お臺所へ廻らしやんせいな。

せつ　あ、いや〳〵、庭口からで苦しうない、早く内へ入りやいの。

五郎　左樣なら御免下さりませ。（ト蓮根をおろして草鞋をぬぎ、捨ゼリフにて下手へ住ふ。）

せつ　いつも元氣よく、健かなことぢやの。

五郎　いえ〳〵健かどころではござりませぬ、後の月大煩ひをいたしまして、新亡者になる所、やうやくのことで生返りましたが、もう取る年ゆゑわたくしも長いことはござりませぬ。

しづ　これ父さん、たしなみなさんせ、旦那さまが御加增にてお目出度いお祝ひに、參り早々死んだの何のと忌はしいことを言はしやんすな。

五郎　それは惡いことを言つたが、あんまり便りがないゆゑに、若し死にでもしはせぬかと思つて、うつかり死んだというたのぢや。

しづ　もうそんな事を言はしやんすな。

五郎　もう〳〵決して言ひはせぬ、旦那さまが御加增なされたお目出度には、丁度幸ひお土產に背負つて來た、阿彌陀寺の池に出來た蓮、どうでお強飯が出來ませう、お煮染になとお使ひ下さりませ。

ト絲立から蓮根を出す、おせつ心にかゝる思入。

しづ　もし旦那さまへのお土産なら、こんな物より利根川の鯉でも持つてござんせいな。
五郎　持つて來るも知つて居るが、爰まで提げて來たことなら、忽ち鯉は死んでしまはう。
しづ　え〻、又死ぬと言はしやんすか。
五郎　ほい、うつかり言うた、南無阿彌陀佛。（トおせつ話を餘所になし）
せつ　さうして今日は、何處へ行きやつたのぢや。
五郎　はい、今日は親類の寺詣りに朝から歩きましたが、先づ最初が青山の六道の辻から極樂水、賽の河原の小石川、地藏の顏の三枚橋、蓮の臺の不忍からとゞの仕舞が佛店、
しづ　これ〳〵父さん、もう好い加減にしなさんせいな。
五郎　はて、何處へ行つたと御隱居さまがおつしやるゆゑ、道筋を細かにお話し申すのぢや。
しづ　お前は心づくまいが、六道の辻ぢやの極樂水ぢやのと、なぜ其のやうな事を言はしやんすぞいな。
五郎　御加増でお目出度いのに濟まぬことを言ひました、武士なら腹でも切らねばならぬ。
しづ　え〻も、默つて居やしやんせいな。（トおしづ氣を揉む、おせつ見て）
せつ　これしづや、奥に貰うた肴もあれば、親父に一口呑ましてやりや。

しづ　いえ〳〵、此の上お酒をたべましたら、何を申すか知れませぬわいな。
五郎　これ、折角お酒を下さるといふに、手前が留めるはいらぬ辭儀だ。
せつ　これ、早う奥へ連れて行きやいの。
しづ　お前にお酒は上げられぬけれど、あのやうにおつしやりますから、お臺所へござんせいな。
五郎　それは何より有難い。
しづ　その替り今のやうな、忌はしいことは言はしやんすな。
五郎　酒さへ呑めば何にも言はぬ。
しづ　きつと言はしやんせぬな。
五郎　おゝ、死んだ積りで居ようわいの。
しづ　えゝ、まだかいな。

ト五郎作をこづく、唄になり五郎作蓮根を持ち、おしづ附いて奥へ入る、跡おせつ思入あつて、

せつ　いつにない五郎作が、酒に醉つてか知らねども、目出度い中へ忌はしい、心に掛ることばかり、今上様の御意に叶うて日に増し立身出世はなせど、ひよつと人の嫉みにて無實の難を受けねばよいと、心に絶えぬ其の處へ武士なら腹を切る所と何の氣もなく言うたのは、若し前表ではあるま

いかと案じられるは親心、あゝ苦の絶えぬ浮世ぢやなあ。（ト思入、時の鐘、床の淨瑠璃になり、）
〽人影の長きに似ざる冬の日の、日足短かき八ツ下り、屠所の歩みの未の刻、三間右近は忠孝の思案に吐息つく〴〵と、
ト花道より以前の右近思案の思入にて出來る、跡より若黨袴股立大小にて附添ひ出來り、花道に立留り、
右近　こりや傳助、その方は加納樣へ、只今主人歸りましたと、家來衆まで申して參れ。
若黨　はツ、畏りましてござります。
右近　格別道の廻りでなければ、序に菩提所心光院の墓所の掃除をいたして參れ。
若黨　はツ、
〽はつと心得傳助は、玄關前へかけ拔けて、（ト是れにて若黨舞臺へ先に來て、）
お歸りでござります。（ト此の内右近舞臺へ來り、）
右近　早う參れ。
若黨　はあゝ。（ト辭儀をなし、）
〽元來し道へ引返す、

ト若黨逸散に花道へ入る。此の内右近玄關より二重へ出る。

せつ　おゝ、右近戻りしか。

右近　只今歸りましてござりまする。（ト合方になり、二重下手へ住ふ。）

せつ　傳助はどうしました。

右近　加納氏へ用事あつて、今直に遣はしました。

せつ　おゝ、さうであつたかいの。（ト右近白木の臺進物を見て、）

右近　母上、それなる臺の品々は、何れより到來でござりまする。

せつ　最前そなたの加增を祝し、柳澤さまの御奧から此の品々を下さりました。

右近　すりや、此の品も柳澤より、（ト右近思入。）

せつ　昨年といひ又今年引續いての御加增は、柳澤さまのお執成しゆゑ、深き御恩になりますわいの。

右近　その御恩ゆゑに、

せつ　え、（ト思入。）

右近　させる功なき某が、思はぬ立身いたしてござる。

へ物思ひげに打ち鬱ぐ、折しも下女が奧の間より着替の衣服携へ出で、

ト右近鬱ぐ思入、奥よりおしづ服臺へ着替を載せ、これを持ち出來り手をつかへ、

しづ　只今お退りにござりまするか。いざお召替へ遊ばしませ。

ト合方きつぱりとなり、右近頷き上下を脱ぎ小袖を着替へ、縞の袴をはき元の所へ住ふ。

せつ　見れば濟まぬ顔附きぢやが、何ぞ心に掛ることでもあつてか。

右近　いえ、心に掛ることもござりませぬが、少しく氣分が惡うござりまする。

せつ　氣分が惡くば養元さまへ、さう申して上げようかいの。

右近　左程のこともござりませぬ。

せつ　そんなら何時も持藥に呑む、消毒丸でも呑んだがよい。

右近　藥よりは茶にいたしませう、これしづや、薄く一服立てゝくりやれ。

しづ　畏りました。

〽はつと答へて服臺を、携へ奥へ入りにけり。

トおしづ服臺へ上下衣類を載せ奥へ持つて入る。

せつ　明日北の丸のお數寄屋にて寒梅のお茶があると、お茶道の春齋どのがわしに話して行きましたが
さういふ御沙汰があつたかいの。

右近　その儀は先刻柳澤どのにて、承はりましてござりますが、御正客が西の丸樣、お相伴が上樣と申すことでござりまする。

せつ　して亭主役はどなたさまぢや。

右近　いやどなたでもござりませぬ、亭主はわたくしにござります。

せつ　え。御正客が西の丸樣、御相伴が上樣にてお茶を立てるなどゝいふは、藝の徳とはいひながら冥加に餘るそなたの仕合せ、嬉し淚がこぼれるわいの。

〽悅ぶ母と裏うへに右近が切なき胸の内、あけて言はれぬ奥の間より薄茶たづさへ立ち出るおしづが差し出す樂茶碗、手に取りあげて打ち見やり、樣子ありげに見えければ、

ト此の内おせつ淚を拭ひ嬉しき思入。右近は切なき思入。奥よりおしづ緋の袱紗に茶碗を載せ持ち出で右近の前へ出す。右近取上げ茶碗の中へ目を附けぢつと思入。おせつ合點の行かぬこなしにて、

せつ　これ右近、茶碗の中を不思議さうに繰返して見やるのは、

しづ　何ぞ入つてゞも居りましたか。

右近　むゝ、（ト思入あつて、）立て替へてくりやれ。

〽出す茶碗を手に取上げ、中を見やりて打ちおどろき、

ト右近茶碗を出す、おしづ取上げ中を見てびつくりなし、

しづ　や、こりやお茶の中に蠅が一疋、
せつ　なに、蠅が入つて居つたとか。
しづ　何時の間に入りましたか、心附ぬことをいたしましたわいな。
せつ　何故とつくりと茶碗の中を、改めて出さぬのぢや。
しづ　ついうつかりと差上げまして、申譯のないことをいたしました、お許しなされて下さりませ。

ト手を突き詫びる。合方になり、

せつ　ついうつかりと差上げたとは、そりや何を申すのぢや、右近が蠅の入りしを心附きたればこそよけれ、そなたのやうにうつかりと蠅のあるをも知らずして今の茶を吞んだなら、命を失ふまいものでもない、蟲の內でも取りわけて蠅は毒のあるものゆゑ、もし其の毒に悴があたり死に至りなば何といたす、ついうつかり差上げましたと、言うて濟まうと思ふかいの。
しづ　申譯もないことをいたしましわいな。
せつ　そなたの母は悴の乳母ゆゑ、常の女子と一つにせず諸事に目を掛け遣はすのに、夫の俗にいふ乳兄弟の諺ゆゑに粗略にするか。

しづ　あゝ勿體ないことおつしやりませ、なか〱以て御主人さまを粗略にいたすことなどは、更々ござりませぬわいな。

〽はつとばかりに泣き伏せば、

トおしづはハツと泣く、右近見兼ねて、

右近　蠅の入りしを心附ぬは全く粗相にござりますれば、お許しなされて下さりませ。

せつ　いや、外のことなら許しもせうが、粗相といへど大切なそなたの命に拘はることゆゑ、きつと言はねばなりませぬ。これしづ、今改めて言はずとも定めて辨へ居やらうが、七ツの年に母に別れ、父親の手で育てられず困るといふゆゑこちへ引取り、今そのやうに背丈の延びしは誰が蔭と思ふぞよ、暑さ寒さの衣類などの世話はわしがするけれど、三度の食はお上から忰が賜はる御扶持の餘り、その大恩のある主へ蠅の入りたる茶をすゝめ、若しその毒で死んだなら毒殺なすも同じこと、粗相も事によるわいの。

しづ　大恩のあるお主さまを粗略にいたす心はなけれど、蠅の入りしを心附ぬは今更かへらぬ不調法、申譯には此の場にて、

〽側なる刀に手を掛けて、既に自害と見えければ、右近は其の手をしつかと捉へ、

ト　おしづ思入あつて右近の差添へ手を掛け死なうとするを、右近その手を捉へ、

右近　こりや狼狽へて何をいたす。

しづ　さあ、七ツの年から御恩を受けしお主さまへ毒を差上げ、命を捨てねばわたくしの申し譯が立ちませぬ。

右近　只今の茶を我呑んで毒に中つて死したるなら、命を捨てるも道理なれど、蠅の入りしを心附き我呑まざれば死ぬるに及ばぬ。

しづ　ではございますが、死なねばどうも、

右近　まだ〳〵左樣なことを申して、主人の詞を用ゐぬか。

しづ　さあ、

右近　幼年より育てられし恩を思はゞ、粗忽いたすな。

しづ　はい。

右近　この以後粗相のないやうに、心を用ゐて奉公ゐたせ。

しづ　有難うございまする。（ト手を放す、右近おせつに向ひ、）

右近　全く粗相にございますれば、今日の所はわたくしに何卒お免じ下さりまして、お許しなされて下

さりませ。
せつ　外ならぬそなたの挨拶、以後を慎むことならば此の儘許してやりませうわいの。
右近　利發のやうでもまだ年若、無分別を出さぬやう御教諭なされて遣はされませ。
せつ　おゝわしが後でとつくりと言ひ聞かして遣りませう、この後又も粗相をせうとも決して死なうなどゝいふ惡い心を出さぬがよいぞ、奥へ來てゐる五郎作が賴みに思ふはそなたばかり、若しも死にでもしたならば、其の歎きはどのやうぞ、親の歎きを思ひなば、必ず無分別を出すまいぞ。
しづ　足らはぬ身をば其のやうに、おつしやりまして下さりますお主さまのお情は、死んでも忘れはいたしませぬ。
右近　まだ其の方は死ぬ心か。
しづ　いえも、決して死にはいたしませぬ。（トおせつ肩を押へ痞へし思入）
右近　母上、如何なされました。
せつ　時候のせゐか此のごろは、肩が痞へてならぬわいの。
右近　しづにちとお叩かせなされませ。
しづ　お擦りをして差上げませう。

せつ　そんなら少しほごしてくりや。
しづ　畏りましてござります。
右近　左樣なれば母上。
せつ　そなたも休息しやいの。
〽何心なく母親が下女を作ひ奥へ入る、跡に右近は言の葉の、我が身に當ることのみに、歎息なして手を拱き、
トおせつおしづを連れ奥へ入る、跡に右近思入あつて、
右近　只今しづが立てし茶に蠅の入りしを母上が、毒ある蟲にこれを呑み、若し命にも拘はる時は毒殺なすも同じことゝ、しづへ御異見なされし所、七ツの年より母上の御恩になりしといひながら、お主へ毒をすゝめては濟まざることゝ一途に迫り、我が差添へ手をかけて身の言譯に死ぬ心、僅か年季の奉公人さへ、命を捨つる覺悟の健氣さ、まして武士たる身の上にて、
〽兎やせん角やと我が胸に餘る思案の折戸口、家來を歸し大隅が咳きなして門へ立ち、
ト右近思案の思入、花道より加納大隅守羽織袴大小草履、中間附添ひ出來り、舞臺にて、
大隅　その方は、後刻迎ひに參れ。

中間　はつ、畏りましてござります。（ト下手へ走り入る、大隅守切戸口に立ち、）

大隅　頼まう〳〵。

右近　はつ、何方でござりまする。

大隅　加納大隅でござる。

右近　これは〳〵ようこその御入來、（ト切戸口をあけ、）先づ〳〵是れへ、

大隅　然らば許しめされ、（ト誂への合方になり、大隅守上手へ通り住ふ、）扨先刻はお使ひ下され、忝なう存じまする。

右近　何か拙者にお問合せがござりますと申すことゆゑ、歸宅をお知らせ申してござる。

大隅　少々承はりたい儀がござるが、それはさておき此の度は、又々百石御加増に相成り恐悦至極の儀でござる。

右近　何の功なき某に、思ひがけなき御加増は、まことに恐縮仕つる。

大隅　これと申すも御當家は御先代より茶道を好まれ、其許なども十歳代から千家流の奥義を極め、勝れし業ゆゑ上樣の御意に叶うて御立身、斯く御懇意にいたす上はまことに以て悅ばしい事でござる、それに附いて承はりたいは明日北の丸のお數寄屋にて、寒梅の咲出しを御賞翫あらせられ御

茶の湯があるとのこと、此の儀を承はりに參つたが、いよ〳〵相違ござらぬかな。

右近　いかにも明日北の丸にて、お催しがござりまする。

大隅　定めて御正客は上樣でござらうな。

右近　いえ御正客は西丸樣にて、上樣にはお相伴、お詰は柳澤殿にござりまする。

大隅　すりや御正客は西丸樣とな、(ト大隅守思入あつて、)して御亭主はどなたなるぞ。

右近　則ち拙者へ命ぜられましてござる。

大隅　御亭主役は貴殿とな、それはお仕合なことでござる、風雅な道とはいひながら、お圍内で上樣と御同席をなされるといふはお羨ましいことでござる。斯く追々に御加增あつては、今に柳澤殿同樣に、萬石取りにならるゝでござらう。

右近　左樣に仰せ下されてはまことに汗顏の至りでござる、武士たるものは武藝のみ心掛くればよいことを、父が好者に幼年より見よう見眞似に學びたる、茶道ゆゑに立身出世、一向存ぜぬことならば斯くお見出しにも預かるまいに、よしなき業を學びました。

大隅　これは又右近殿には異なことを申されるが、立身出世は我れ人共に願はぬものはあらざるに、よしなき業を學びしとは、如何なる貴殿は御所存なるぞ。

右近　されば御馬前の武功によるか、又は文武兩道の技藝によつての御加增なれば、家の面目この身の手柄後世へ名を殘しまするが、亂舞香茶は遊藝にて驕奢に長ぜし東山義政公のもてあそび、それより世々に傳はれど武士のなすべき業にあらず、されば拙者におきまして遊藝を以ての立身は、武士の好まぬところでござる。

〽何か心に一物あつて、出世を好まぬ右近が詞、大隅守感心なし、
ト此の内右近思入あつて言ふ、大隅守感心の思入にて、

大隅　流石は賢者の三間氏、感心いたす貴殿の心中、人悅べば共に悅び人悲しめば共に悲しむ、それは昔の人にして當世浮薄の人情では、人が立身出世なせば悅びはせで誹謗なし、人が零落いたす時は憐みはせでそれを悅ぶ、賴み少なき世の中ゆゑ、人の誹りをおもんぱかり遊藝を以ての立身を悅ばれぬはまことの武士、人は斯くこそありたきもの、さはさりながら今の世に武道を以ての手柄はし難し、假令遊藝なればとて斯くまで上の御意に叶ひ、立身出世なされしは餘人の及ばぬことでござるぞ。

右近　ではござれども、他家の誹りを思ひますれば後が見られ、冥加に餘ることながら立身いたさぬ其の前が、心易うござりました。

大隅　拙者に於ては貴殿の御所存實に感心仕るが、然し只今も申す如く柳澤殿の立身を誰れ羨まぬものなく、皆々願ふ所なれば、よしや蔭にて誹謗なすとも人の噂も七十五日、長いことはござらぬから、それらは心に掛けめさるな。

右近　全く拙者が立身は茶道が御意に叶ひしゆゑ、又もや此の上思召しにて出世なさんもはかられねば向後茶道を捨てます所存、これまで貴殿と年久しく互ひに好む茶事により水魚の交り結びしかどこれより茶杓を手にとらぬ所存にござれば今日限り、貴殿のお目に掛らぬやうに相成りませうも知れませぬ。

大隅　假令茶道が廢されても一旦斷琴の交りなせば、拙者命のあらん限り御懇意結ぶ所存でござる。

右近　拙者に於ても其許と同じ所存にござれども、老少不定の世の中に明日をも知れぬ武士の身の上、

〽心の内に餘所ながら暇乞ひなす右近が詞、不審ながらも打ち消して、

ト右近ぢつと思入、大隅守心得ぬこなしにて。

大隅　いや〳〵老少不定と申せども拙者は百まで生きる心、先づ老が先立つ順道なれば、まだ四五十年は相變らずお附合ひ申されませう。

右近　どうか貴殿と末永く、お附合がいたしけれど、

大隅　まだ〳〵貴殿はそのやうな、愚癡なことを言はるゝか。
右近　でも、明日をも知れぬ身の上ゆゑ。
大隅　えゝ不緣起なことを言はるゝな、人生五十年が境なれど、拙者は百年も生き延びて生涯茶事を樂しむ所存、されば明日のお茶などに出席ならぬが殘念至極、せめて御當日の銘器類、御獻立の樣子など明晩參つて承はらん。
右近　御當日の器物類は、筆記いたして御覽に入れん。
大隅　それは何より忝ないが、それに附いて其許へお願ひ申すは、西丸樣いまだ茶道のお稽古も至つて未熟にゐらせらるれば、諸事のあつかひ萬事の手續き、殊には奸臣多き時節、お正客を恙なく何卒お勤めなさるゝやう、偏に御配慮お願ひ申す。
〽茶事に事寄せ大隅が、明日の大事を餘所ながら賴む詞にいとゞ猶、右近が切なき胸の內、
ト大隅守よろしく思入にて言ふ、右近切なき思入あつて、
右近　その儀は承知仕る、及ばずながら某がお側に居れば其の邊は、必ず御案じなさるゝな。
大隅　それは千萬忝ない、賢者といはるゝ其許にそれ承はつて安心いたせばこそ、最早拙者はお暇いたす。

右近　すりや、お歸りでござりまするか。
大隅　何れ明晩推參いたさん。
右近　其の節拙者が胸中を、
大隅　え、
右近　いや、茶事のお話しいたすでござらう。
大隅　然らば、三間氏、（ト立ち上る、）
右近　加納氏、
大隅　お別れ申す。
〽常は水魚の交りも禮儀正しく一禮なし、門を放れて立ち留り、
ト大隅守門口へ出る、右近送るをそれには及ばぬといふ思入あつて、枝折戸をしめ花道へ行く、大隅守思入あつて、
三間氏が立身は茶道が御意に叶ひしゆゑ、申さば出世の種なる業を、捨つるといふは如何なる譯か何か仔細のあることならん、はて心得ぬことぢやなあ。
〽跡へ心は殘れども勤仕に是非なく立ち歸る。（ト大隅守よろしく思入あつて花道へ入る。）

〽右近が跡にとつおいつ、思案に暮るゝ灯ともし頃、行燈携へ立出るおしづ、物思はしげなる體を見て、

ト右近跡を見送り思入、時の鐘、奥より以前のおしづ誂への行燈を提げ出來り右近の體を見て思入、少しなまめきし合方になり、

しづ　旦那さま、ちとお肩でもお擦り申しませうか。

右近　おゝ、母上も時候のせゐで肩が張るとおつしやつたが、おれも肩が張つてならぬ、少しばかり叩いてくりやれ。

しづ　畏まりました。（トおしづ右近の後へ廻り肩を叩く、右近思入あつて、）

右近　久しく叩いて貰はなんだが、中々手つきが巧者になつた。

しづ　御隱居さまのお擦りを毎晩いたしまするので、少しは上りましてござりませう。

右近　いや上つたどころか、うまいものぢや。

しづ　いいえ、旦那さまには利きますまいわいな。（ト右近思入あつて言ひ難さうに、）

右近　これ、しづ、

しづ　はい、何ぞ御用でござりますか。

右近　そちや聟を取るのか、嫁に行くのか。
しづ　はい家は姉が聟を取り、家を繼いで居りますれば、餘所へ參りますのでござります。
右近　餘所へ嫁に行くのなら、おれの妻になつてくれぬか。
しづ　え〻。（トびつくりして手を放す。）
右近　なぜ、肩を叩かぬのだ。
しづ　いつにない旦那さまの、御常談をおつしやりますゆゑ。
右近　なに、常談を申さうぞ、知つての通り獨身なれば諸家より緣談申し入るれど、われは兎もあれ母上の御意に叶ふが專一ゆゑ、未だ相談取極めぬが、誰よりそちが母上の御意に叶うて居るこそ幸ひ、妻にいたさば跡々の、（ト右近思入あつて、）家内の事も馴れてあれば、是非とも妻にしたいのだ。
しづ　常々お堅い旦那さまが、世界に女子のないやうに、素性も賤しいわたくしへ、左樣なことをおつしやりますは、
右近　はて、そこが譬の思案の外、戀に上下の隔てはない。
〽手を取りおしづを引寄せる、後に立聞く五郎作が思ふ笑壺にぬつと出で、

ト右近思ひ切つておしづの手を取り引寄せろ、此の時後へ五郎作出で、

五郎　旦那さま、そりや御本心でござりますか。

右近　や、そちは親の五郎作か、とんだところを見られたわえ。(ト手を放す。)

五郎　いえ疾うから願つて居る所、然しお僞りではござりますまいな。

右近　なに、僞りを申すものぢや。

五郎　それはまあ有難いことでござります、娘が奧さまになりますれば、わたくしはあなたの舅ゆゑ、明日から肥桶擔がずに左り團扇の隱居さま、こんな有難いことはない、娘早く御返事をいたさぬか。

しづ　いえ、此の御返事はいたしませぬわいな。

五郎　なぜ御返事をいたさぬのぢや。

しづ　假令出世になればとて、素性賤しい下女の身で、どう御返事がいたされませう。

五郎　そりやおぬしの料簡違ひ、慾を知らぬといふものだ、内へ歸つておれが手で百姓仲間へ嫁に行けば、晝は田畑の仕事をなし、夜は夜延に絲を取り、手織木綿が一張羅、それに引替へ奧さまに出世をすればお絹布ぐるみ、こんな結構なことはない。

右近　それを返事のならぬといふは、武家の妻になるのがいやか、但しは身共が氣に入らぬか。

〽言ふにおしづは前へ出で、せきたつ胸を押し鎮め、

しづ　あゝ勿體ないことおつしやりませ、爰等近所のお組屋敷でお孃さま方がお寄りなされると、どうぞあなたの奥さまになりたいものとお噂ばかり、左程に思ふあなたから妻になれとの一言は、この身に過ぎたことなれば飛び立つ程にわたくしも、心に嬉しうござりまするが、世界に女子もないやうに、賤しい下女へ手を附けて妻にお持ちなされたら旦那さまのお恥ゆゑ、それで御返事いたしませぬ。

五郎　それはおぬしがいらぬ遠慮、下女を女房になさるのは、世間にいくらもあることだ。

しづ　そりやあることではござりまするが、それを人が褒めまするか、必ず蔭で襤褸ッ買と悪いお名を附けませう、下女が賤しい身を恥ぢて旦那さまのお心に隨ひさへいたしませねば、悪いお名も立ちますまい、それゆゑ嬉しいお詞をもどきまするは七ツから御恩になつた旦那さまの、お恥を厭ひまするゆゑ、此の御返事はどうあつてもいたしませねば旦那さま、お許しなされて下さりませいな。

〽詫びる戀路の言譯に涙に袖は濡らせども、濡らさぬ操の心根を右近は聞いて感じ入り、

ト此の内おしづよろしく思入にて言ふ、右近感心せしこなしあつて、

右近　凡そ人は出世を好めば、道ならざると知りながら我が身に迷ふが世のならひ、それに引替へしづが心底、常に替つて某が妻に望むも跡々を頼まんものと思ひしが、（ト思入あつて、）一言といはれぬ今の一言、かゝる心が世の人にあらば天下も穏かに、右近が苦勞もあるまじきに、あゝ思ふに任せぬ、戀の路、

〽口と心の二筋を知らぬ親父は一筋に、慾の皮をば引張つて、（ト右近よろしく思入。）

五郎　これ〳〵娘どうしたものだ、善惡共にお主さまのおつしやることを聞かぬのは、家來の身にて第一不忠、色よい御返事早くせぬか。

しづ　いえ〳〵御返事いたしませぬ、上々さまにも道ならぬ事を遊ばすお方もあれど、わたしが賤しい下女なれど旦那さまへ御返事せぬは、受けし御恩を忘れぬ心。

五郎　いや〳〵それは料簡違ひ、お主さまへの不忠ばかりか、親が樂な身になるを、させぬは子として不孝なるぞ。

しづ　不孝になるかは知らねども、内へ歸らば田畑の仕事、夜は絲繰り機を織り、お前に樂をさせますわいな。

五郎　そりやもうそちが内へ歸り、樂もさせてくれようが、高の知れた水呑み百姓、榮耀榮華が出來ぬわい。

しづ　道に缺けたることをして、榮耀榮華をしようといふは、そりや心得違ひでござんすぞえ。

五郎　おぬしはそんなことをいふが、百五十俵から百萬石のお墨附を貰ふのも、女でなければ出來ぬことだ。

しづ　假令何と言はしやんしても、わたしや御返事しませぬわいな。（トきつと言ふ、右近此内思入あつて、）

右近　すりや、どうあつても、

しづ　お許しなされて下さりませ。

右近　はて、見上げた、

五郎　え、

右近　緣なき衆生は度し難し、

しづ　左樣なればわたくしは、

右近　思ひ切つた、安心いたせ。

ト唄になり、右近感心の思入にて奥へ入る。跡合方になり、五郎作おしづを捉へ、

五郎　これ〳〵娘、手前は呆れ返つた奴だぞよ、旦那さまに従へば手前ばかりの出世ぢやない、この親父まで浮みあがるに、何で御返事をしないのだ。

しづ　そりや父さん何を言はしやんす、娘にそでないことをさせ、榮耀榮華をしようといふは、親の道ではござんせぬぞえ。

五郎　道であらうがあるまいが、娘を持てば中から下は器量次第で、お妾か又は藝者か圍ひ者、甚だしいのは御法度の地獄にさへ出すではないか、手前の器量がよいゆゑに旦那さまのお手が附き、早くお子でも出來ればよいと、待ちに待つて居た所、旦那さまのお詞を背くといふがあるものか。

しづ　まだそんな事を言はしやんすか、わたしや出世は望みませぬわいな。

五郎　えゝ立派な嫁御になられるを、さりとは〳〵馬鹿な奴、のほよほ〳〵あらうかいな、こんな慾氣のないものが、さんな又あらうかいな、

トあり合ふ掛物かけの竹にて叩き立て、猿廻しの合方になり、おしづを追廻してト、おしづ五郎作を突退け、奧へ逃げて入る、五郎作起き上り、

あんな親に不孝な奴が、さんなまたあらうかいな、（ト此の時指金の赤猫飛び付く五郎作びつくりして飛びのく、指金の猫立上るを見て、）おにやにやご〳〵〳〵、さんな又あらうかいな。

ト竹で猫を猿になし、右の合方猿廻しの見得にてよろしく道具廻る。

(三間奥座敷の場)――本舞臺常足の二重、大和葺の屋根、はぎ板の土緣、向う上手洞床上下を着たる畫像の掛物、古銅の置花活に水仙を活け、續いて一間地袋戸棚、銀地墨畫の襖、此の下雲母形の襖出入り、上手一間後へ下げて低き障子口欄間、下地窓、屋體の前に御影石と見える踏段、下の方枝折門、左右建仁寺垣、この前に御影の角燈籠松の立木蹲ひの手水鉢、總て三間奥座敷の體、屋體前側へ伊豫簾をおろし、道具半程より床の淨瑠璃三重にて道具留る。

〽冬の夜の鐘の音沈む雨催ひ、松吹く風もさら〳〵と降るはみぞれか霰釜、閑を樂しむ風韻の爐邊に右近がたつる茶の、泡と消え行く身をかこち、

ト此の内本釣鐘を打ち込み、よき程に屋體の伊豫簾を捲き上げる、二重床脇に誂への爐これへ釜を掛け、茶道具よろしく並べ、竹燈臺を置き右近茶を立つて居る見得茶碗を畫像へ供へちつと思入、笙の入りし床の合方になり、

右近　法譽千山萬海大居士、寫せし畫像に靈あらば、三間右近が今生の名殘の一服召し上られ、一命を斷つ其の仔細、お聞きなされて下さりませ。

〽俤寫す亡き父へ在すが如く手をつかへ、

幼年よりして父上の御傳授受けし千家の茶の湯、測ず同勤の推擧によつて柳澤殿へ指南なせしに間もなく百石加增なし、恐れ多くも上樣のお相手いたすやうになり、引續いて再度の加增、冥加に餘る登庸は全く覺えし藝の德、開運いたす時至れりと悅び勇みし甲斐もなや、立身なせし掛橋の其の茶道ゆゑ又今日、我が身に迫る一大事に、茶道と共に一命を捨てねばならぬ今宵の仕儀、たゞ殘念なは某が只今切腹いたしなば、必ず家名は斷絕なさん。

〽數代續きし三間の家、我が代になり退轉さす其の苦しさは此の胸を、刃をもつて貫くより遙かに勝る我が切なさ、

返す〴〵も茶道にて一旦出世なしたるも、又候今日茶道にて、一命捨つるも前世の宿業、是非なきことゝ父上にもお諦め下されて、家名を絕す身の不孝、お許しなされて下さりませ。

〽床に掛けたる亡き父へ家名を絕す身の詫も、たれ白張りと思ひの外、襖を明けて立ち出る母親、

ト此の內右近床の掛物へ向ひよろしく思入、時の鐘、襖を明け、おせつ靜々と出來り、

せつ　悴、獨樂なるか。

右近　これは母上でござりますか、先づ〳〵これへ。

〽席を譲れば母親は、よろめく足を踏みしめてやう〳〵にして座に直り、

ト右近下手へ下る、おせつ苦痛を隠す思入あつて上手へ住ふ、

せつ　これ悴、そなたに聞きたいことがあるが、父上ばかりが親にして、母は親ではあらざるか。

右近　何とおつしやりまする。（ト誂への竹笛入りの合方になり、）

せつ　今日に迫りし一大事を、なぜ此の母には言はざるぞ。

右近　別に今日母上へ、申し上げることがござりませねば。

せつ　なに、ないことがあるものぞ、今父上のその畫像へ在すが如く申せしを、襖越しに聞きました。命を捨つる一大事を、母へも明して聞かしやいの。（ト右近思入あつて、）

右近　只今申せし繰言を襖越しに母上が、お聞きなされし上からは、仔細をお明し申したけれど、天下の大事にござりますれば、迂濶に申し上げられませぬ。

せつ　迂濶に仔細が言へぬといふは、母が口外いたさうかと、それを危ぶみ言はぬのか。

右近　さあ、それは、

せつ　いやそれならば、他言をせぬ誓ひをそなたに見せませう。

右近　なに、誓ひをお見せなされますとは。

せつ　悴これを見よ。

〽諸肌脱げば母親が、疵口結ぶ白布をもれてにじみし血潮の紅、右近は見るよりびつくりなし、

ト　おせつ肌を脱ぐ、下着の上を白布にて結び居る、これへ血汐にじみ居るを右近見てびつくりなし、

右近　やゝ、こりや母上には、何ゆゑに。

せつ　そなたが切腹なすことを聞いたるゆゑに魁に、自害をなせし此の母が冥土の土産に一大事の、仔細を言うて聞かしやいなう。

〽言ふも苦しき息づかひ、右近は是非も涙を押拭ひ、

右近　はゝッ、恐れ入つたる御生害、わたくしゆゑにお命を捨てさせまする身の不孝、今は何をかお隠し申さん。

〽右近は四邊を窺ひて、

かねて御存じ知られし如く、柳澤殿の執成しにて立身出世なせし某、又もや此度御加増に、先刻右の禮旁々柳澤殿へ參りし所、御出仕ありてお留守ゆゑ、則ち家老權太夫へ右の禮を申せし時、羽州殿の賴みとて竊に語る一大事、その事柄は上樣に御實子御出生遊ばせしゆゑ、當六代の御世

嗣に西丸樣を差し置いて、御實子綱千代樣へお讓りあらせたき御心中に候へば、西丸樣を亡き者になさねば天下穩かならず、恐れ多きことながら明日北の丸のお茶の湯に、お茶の內へ毒を仕込み差上げくれと竊の賴み、

〽茶道によつて立身なせし、正しき天下の御連枝樣へ、何とてお茶を差上げられう。五常を守る羽州殿、かゝる企みはよもあるまじ、正しく曾根か奸計と推察なせど、大恩ある柳澤殿の賴みなりと退引ならぬ詞詰め、是非なく其の場で承引なせしは立歸つて死す覺悟、天下の大事に此の事を老中方へ進達なさば、是まで大恩蒙りし柳澤殿の家名の瑕瑾、如何なる御處置にならんも知れず、とあつて役目を勤むるときは毒害いたさにやならぬゆゑ、忠と義理とに切腹なし、

〽魂魄此の土に止まつて、西丸樣の御危難を影身に附添ひ奉り御守護いたす我が所存、他聞を憚かる仔細と申すは、斯くの通りでござります。

〽母の自害に我が包む所存を打明け物語れば、手負ひは苦しさ打ち忘れ、

ト此の內右近よろしく思入にて言ふ、おせつも思入あつて、

せつ　ほゝお、包み隱す一大事を、よくぞ打明け申せしぞ、母が冥土へよき土産。

右近　まつた先刻下女しづへ戲れごとを申せしも、かゝる事とは知らざるゆゑ、我がなき後に母上の御介抱をいたさせんと、妻になさんと言掛けしも、主人の恥と我が心に隨はざりし彼れが心底。

せつ　おゝ、襖越しに聞きましたが、賤しき下女の身を恥ぢてそなたの心に隨はぬは、天晴健氣な志し夫の御方に此の心が、あらばそなたや此のわしが、命を捨つることもあるまじ、

右近　これと申すも武士の身で、なまじ茶道を學びしゆゑ、

せつ　思はぬ立身出世なし、

右近　茶碗の樂を極めしも、

せつ　今また土にかへる身は、

右近　緣も薄茶の親子中、

せつ　茶筌に立ちし泡よりも、

右近　消ゆる間近き、

せつ　知死期時、

右近　思へば果敢ない、

兩人　身の上ぢやなあ。

〽親子手に手を取交す、涙にこぼしの水溢れ、茶巾の切やしぼるらん。
ト兩人よろしく愁ひの思入。

せつ　そなたの大事を聞く上は、少しも早く冥土へ行き、夫へこの事物語らん。

〽腹帶解くを押しとゞめ、

右近　母上暫くお待ち下され、只今死出の御供いたす。

〽肌おし脫いで差添を逆手に取りし其の處へ、一間をかけ出る下女おしづ、
ト右近肌をぬぎ差添を腹へ突立てようとする所へ、ばた〳〵になり奥よりおしづ走り出で、

しづ　ヤ、こりや旦那さまには、何ゆゑに、

〽詞せはしく留むるを、振り拂へば又縋り、（トおしづ右近を留め、おせつを見て）

やゝ、御隱居さまには御生害、えゝゝゝ。

〽おどろく隙を突退けて、ぐつと突込む左手の脇腹。
トおしづを右近突退ける、おしづたぢ〳〵と二重より落ちる、右近腹へ突込む。

こりや御切腹を、なされましたか。

〽言ふ聲聞いて庭口より、窺ふ親父はびつくりなし、

ト以前の五郎作出來り、此體を見てびつくりなし、

五郎　やあ、こりやお二人とも血だらけにて、何ゆゑあつて、チヽちなしやるのだ。

〽血を見て驚く五郎作が、齒の根も合はず顫ヘ居る、（ト五郎作顫へて物の言へぬこなし、）

しづ　こりや何ゆゑにお二人さまとも、御生害をなさりましたぞ。

右近　おゝ、死なねばならぬ仕儀あつて、母上までも御生害。

せつ　仔細は後で分るぞよ。

五郎　仔細をお聞き申したとて、わたくし共へ其の譯を所詮おつしやりますまいから、

しづ　お後へ何ぞおつしやり置くことがござりますならば、おつしやり置いて下さりませ。

右近　この期に及んで後々へ、申し殘すことはない。

せつ　そちへ賴みは二人がなき後、香花手向けてくりやいの。

しづ　そりやおつしやるまでもござりませぬ。

〽今更何と詮方も泣きの涙の其の處へ、馳せ來る加納が庭口より、

ト ばた〳〵になり、下手より以前の加納大隅守、馬上の弓張提灯を持ち出來り、

大隅　右近殿は何れにござる。やゝ、こりや何ゆゑに切腹ありしぞ。（ト二重へ上る）

右近　加納氏でござつたか、よくこそ御入來下された。
大隅　見れば母御も自害の樣子、して〳〵何等の仔細あつて、
右近　仔細は打明け申さねど、忠義の名義が立てたいゆゑ。
大隅　明日のお茶、氣遣はしく、又もや貴殿を頼まんと參つて見れば此の始末、打明け難き儀でござらうが、水魚の交りいたす某、仔細を打明け下されい。
右近　それを明さぬ其の替り、形見に上げる品がござる。
〽傍の棚より箱入の茶杓を取つて差し出し、
ト右近後の棚より誂へ箱入りの茶杓を取つて出し、
これは拙者が祕藏の品、貴殿へお讓り申したい。（ト大隅守これを見て、）
大隅　こりや秀次公が高野山にて、御自作ありし名高き茶杓。
右近　銘は高野と申しまするぞ。
大隅　いかにも、茶杓の銘は高野、
右近　「忘れても汲みやしつらん旅人の、」
せつ　「高野の奥の玉川の水。」

五郎　そりや弘法さまが旅人へ、
しづ　毒を知らせる歌とやら、（ト大隅守思入あつて、）
大隅　むゝ、すりや此の茶杓を讓られしは、
右近　汲みやしつらん旅人の、
大隅　高野の奥の、
右近　玉川の水。（ト兩人氣味合の思入、大隅守毒とさとり、）
大隅　むゝ、承知いたした。（ト胸を叩く、本釣鐘。）
右近　最早近附く、
せつ　知死期時、
しづ　そんならこれが、
右近　この世の別れ、（ト右近引き廻す、おせつ白布を解き、兩人がつくりとなる。）
〽あはれ果敢なや。
ト本釣鐘、おせつ落入ろ、おしづ縋り泣く、右近大隅守名殘りを惜しむ思入よろしく。本釣鐘三重にて、
幕

六幕目

城内大廣間の場
同　御座敷の場
同　奥御殿の場

〔役名――將軍綱吉公、井伊掃部頭、本多中務大輔、榊原式部大輔、廣敷番久内、近臣。綱吉公御臺、老女岡本局、奥女中あざみ、同若松、同吳竹、同紅梅、同青柳、小姓二人。〕

（城内大廣間の場）＝本舞臺三間の間常足の二重、黑塗上段の框、正面葵の紋散しの金襖、上下折廻し、同じく紋散しの金襖、二重一面に緣附の御簾をおろし、花道の揚幕の所杉戶出入り、舞臺花道とも高麗緣の薄緣を敷詰め。總て城内大廣間の模樣よろしく、○□△◎の詰番四人著附、袴裝にて佳ひ、此の見得管絃にて幕明く。

○何と各々、當春くらゐ我々共が世話のやけぬ、よい正月はござるまい。
□左樣でござる、元日のお儀式をはじめ、明十一日のお具足開きまで、何れも假のお儀式にて、御三家御家門の御同席もなく、御老若の御役人方三奉行の御登城もなく、
△たゞ上樣と西丸樣のみにて、將軍家にはお手づからお茶をお立て遊ばして、西丸樣へおすゝめあるとは、

○御親子中も睦じく、春を迎へる御式日、
□これと申すも御大老美濃守殿の計らひとやら、
△兎角當時は堅くるしい儀式を止めて色と酒、
◎お鬚の塵を取習ひ、立身出世が肝要でござる。
○上を學ぶ下と申せば、柳澤殿を信仰いたすがようござる。
□それゆゑ老中若年寄、過半は柳澤殿へ隨身いたして居る樣子。
△たゞ御譜代のその内で古禮を守つて居らるゝは、江州彦根の老體一人。
◎それに隨身いたし居るは、榊原と本多の兩侯、さて〳〵野暮な儀でござる。
○あれが所謂世の中に出合はぬ武士の昔氣質。
□又榊原や本多どのも若い身そらでありながら、
△三角な目を剝き出して四角張つて居らるゝとは、
○丸いものをば目掛けぬ片意地、慾を知らぬは、
四人　白癡でござる。（トこの時うしろにて、）
呼ビ　上樣の出御。（ト呼ぶ。）

○　なに、上様の、
四人　出御とな、（ト此の時御簾の内にて、）
綱吉　誰そあるか、御簾をあげい。（トうしろにて、）
大勢　はあゝ。
ト聲して管絃きつばりとなり、正面の御簾を捲きあげる、二重眞中に綱吉公将軍好みのこしらへにて褥の上に住ひ、脇息にもたれ居る、後に小役の袴小姓二人控へ、一人は誂への刀を紫の袱紗にて持ち控へ居る、これにて四人は左右に別れ平伏する、綱吉思入あつて、
綱吉　春鶯囀を弄して心動き梅花笑うて興を添ゆると、實に面白き春の日も酒肴がなくては何とやら、はて興のなきことゞもぢやなあ。
○　上意の如くお表にては、たゞ頑なるお話しのみにて、
□　風雅を知らぬ我々が、鼻を揃へて居るばかり、
△　御意に叶ひし別品が、お側につらなる御酒宴の、
◎　御遊興とは事違ひ、嘸御氣鬱に、
四人　ゐらせられませう。

綱吉　して柳澤美濃守は、未だ出仕いたさぬか。

○　はッ、御大老には今以て、

□　御登城は、

四人　ござりませぬ。

綱吉　明日の儀について申し附けたき仔細あれば、早速登城を申し附けい。

○　はッ、委細承知仕つりました。（と立たうとする、此の時花道の揚幕にて）

掃部　あいや、其の御用事は掃部頭、それへ參つて承はらん。

○　やゝ、あのお聲は、

四人　直純殿。

ト是れより序の舞になり、花道より掃部頭白髪好みの鬘、上下大小にて出で、花道よき所へ大小を置きはツと平伏する。綱吉公是れを見て、

綱吉　珍らしや掃部頭、まだ春ながら舊臘の寒氣も去らである折柄、齡も積る老體の何時にかはらぬ健かさ、予も滿足に思ふぞよ。

掃部　こは有難き御懇の御意、仰せの如く直純めも年罷り寄つて一年增し達者に相成る憎れ親仁、いつ

に變らぬ我が君の御尊顏を拜しまして、恐悅至極に存じまする。

綱吉　して、今日は何用あつて、不意に登城をいたせしぞ。

掃部　はッ、君の上意も待たずして今日登城いたしましたは、願ひ上げ度き儀がござりまして押して推參いたせし折柄、何か大老美濃守へ至急の御用これある由お次に於て承はり　老年の身に相應なる御用向にて候へば、聊か親仁が御奉公振り、仰せ聞けられ下さるやう偏に願ひ奉つる。

綱吉　それは格別、そこは手遠ぢや、苦しうない是れへ進め。

○　君の御上意、

四人　いざ〳〵これへ、

掃部　然らば御免下さりませう。（下掃部頭大小を花道へ置いて舞臺へ來り、下手へ平伏する。）

綱吉　して、改まつて其の方が、願ひと申すは何事ぢや。

掃部　はッ、餘の儀ではござりませぬが、承はれば當年は明日のお具足開き、假お儀式との仰せ出され殊に上樣お手づからお茶の湯の御催し、神君以來これまでに例なき儀と存じますれば、老年の思ひ出に末座に於てお手前拜見の儀が願ひたく、罷り出ましてござりまする。

綱吉（これにて思入あつて、）こは何事かと思ひしに事々しき其の願ひ、餘人と違ひ先祖より勳功のある

其の方ゆゑ、聞き濟んで遣はしたいが、三家をはじめ家門ですら同席の儀を斷る上は、そち一人を其の席へ招く譯にも相成らぬ、その儀ばかりは叶はぬぞ。

掃部　ではござりますれど猶純めも、最早昨年七十七の賀を壽きし老年にて、是れまで一度もお儀式のお席に漏れしことなく、早や今年が御祝儀の申し納めと存じますれば、何卒末座で拜見の儀を只管願ひ奉つる。

綱吉　そりやはや、そちが氣質にては左樣思ふは尤もぢやが、只今も申す如く、三家家門に至るまで皆斷りを申したれば、同席の儀は叶はぬぞ。

掃部　いえなか〳〵以て上樣と同席などゝは勿體なし、麒麟も老ゆれば駑馬とやらにて、斯く老衰に及びまして額に波のしわがれ親仁、頭に霜をいたゞきますれば、若し上樣のお目障りで汚穢しいと思召さば、お次の間よりお儀式を拜見願ひ奉つる。

綱吉　いや〳〵何も老衰せしとて見苦しいとは思はぬが、老年ゆゑに目もかすみ定めて耳も不自由ならん、次の間などにて見聞せしとて老人の身の詮なきことぢや、それよりそちが屋敷にて寛々休息いたすがよい。

掃部　老年の身をお庇ひ下され有難き御諚なれど、憚りながら掃部頭七十八には相成りますれど、耳は

至つて健かにて、齒は鬼神のきこえをとり、兩眼なぞは人並勝れ大きい上に明かにて、いまだ眼鏡を用ゐしことなく、足腰ともに息災なれば、假令お次ぎで拜見なすとも聊かたりとも差支へなく、御用のお間は缺きませぬ。

綱吉（これにて思入あつて、）むゝ左程に耳の慥なものが、先年家督の相談せし折、なぜ不都合なる挨拶なせしぞ。

掃部　なに、不都合を言上せしとは、

綱吉　そちや失念をいたせしか。

掃部　何と仰せられまする、（ト是れより誂への合方になり、）

綱吉　既に先年綱千代を我が實子ゆゑ家督に立てんとそちへ相談いたせし折、老衰いたして予が詞、そちが耳へは聞き取れぬと取つても附かぬ挨拶せしゆゑ、奇怪なりとは存ぜしが當家へ對し先祖より勳功のある家と申し、老年なりと勘辨なし、其の儘許しおいたるが、勝手の折はそちが耳健かなりと申すのは、此の綱吉を嘲弄なすか、但しは虛言を構へるか、返答いたせ、どゞどうぢや。

トきつと言ふ、これにて掃部頭思入あつて、

掃部　あいや全くこの親仁、上を嘲弄仕らず。

綱吉　然らば何ゆゑ折に觸れ、空耳はしらせ予を欺むく。

掃部　この直純の耳こそは、仁義忠孝禮智信の教へを守る希代の耳。

綱吉　何と。

掃部　我が君、お聞き遊ばせ、（ト合方きつばりとなり、）御諚の如く、さいつ頃御家督の儀を仰せ出され君の爲めには兄君なる甲府公の御實子たる綱豐樣をさし置かれ、綱千代君を御世に立てんと愚臣へ仰せ聞けられしは、これ御親子の情に迷ひ、御當家五代を知し召さるゝ將軍家には似合はしからぬ御戯れと存ぜしゆゑ、態と餘談にまぎらせしは老の一徳、忠義の空耳、それに引替へ今年は御親子の御仲睦じく、御三家御家門お省きあるとも西丸樣と上樣には、年賀を壽く御茶の湯、これぞ老いたる功しに、假令お次で拜見なすとも身の面目に候へば、耳も健か目も明らか、仁義忠孝禮智信の道に缺けねば聞えるこの耳、御賢慮願ひ奉つる。

綱吉　左程禮儀を存ぜしものが、三家家門を省きし席へ、なぜ差越して列席を願ふ、臣下の身にて無禮であらう。

掃部　あいや無禮と申すにはあらず、拜見願ふは古例を守る臣たるもの、則ち忠義。

綱吉　すりや予が詞に背いても、そちは忠義と思ひ居るか。

掃部　假令上意に背くとも、假のお儀式心得ませぬ。

綱吉　何と、

掃部　なぜ御先例をお缺き遊ばす、（トきつと言ふ、これにて綱吉公ぐつと詰る、合方きつぱりとなり、）神君の御遺言にも御儉約を旨として費えを惜しみ理を辨へ、奢の沙汰を戒しめあるに、佞臣共が進めを用ゐ御遊興には千金の黄金を費し耽りたまひ、僅か年賀のお儀式を費えなりとて御嘉例を崩したまふは心得ず、君も天下の御家督を知し召されぬ其の前は、館林にて諸學に入り、儒佛の道に暗からぬ秀才叡智にましませば、これ等の事は直純が申さずとても御合點ならんが、これと申すもお側に附添ふ佞臣共が計ひゆゑ、（ト皆々へちよつと思入あつて氣を替へ、）只々天下安全の御賢慮願ひ奉る。（ト思入にていふ、これにて綱吉きつとなり、）

綱吉　やあ返す〴〵も予へ對し、無禮過言の不屆き奴、目通り叶はぬ、次へ立て。

掃部　あいや、如何ほど仰せござるとも、愚臣が願ひを我が君の、御聞き濟みのあるまでは、いつかな此の座は下りませぬ。（トぢつと思入、これにて近臣四人前へ出で、）

○　お家柄ゆゑ先刻より我々共も差し控へ、君の上意を相待ち居りしが餘りと申せば無禮の一言。

□　お側に附添ふ我々を佞人讒者といはぬばかり、善惡ともに臣たる者、上意を守るが忠義なるに、

△ それを逆ひ我が君へ、諫めをいれる直純どの、まだ其の上にお茶の湯を、拜見などゝは叶はぬ願ひ、

◎ 長座あつては其許の却つてお爲めに相成らぬ、君の御前は我々が、後にて執成しいたさうから、

○ 疾く〱お次へ、

四人 お下りなされい。

掃部 えゝ喧しい胡麻摺ども、汝等達の執成しを如何で直純賴まんや、下つてよければ勝手に下る、入らぬ口出し控へさつしやい。

綱吉 やあ、又しても我儘無禮、達つてと申さば手は見せぬぞ。

掃部 それぞ直純望む所、お手討あらば冥府へ參り此の御行跡を御先祖へ言上いたす分のこと、いざ御存分に遊ばしませ。(ト綱吉の前へ進み體を差し附けぢつと思入。)

綱吉 いで、其の儀ならば覺悟いたせ。

ト小姓に持たせし刀を取り、きつとなつて立ち上る、此の時上下の襖をあけ、上手より本多中務大輔下手より榊原式部小輔、いづれも上下衣裳にて出で、

中務 我が君、しばらく、

式部　暫く〳〵、

中務　暫くお待ち、

兩人　下さりませう。（ト上下に下に居て綱吉を留る、皆々兩人を見て、）

○　君をお留めめされしは、何人なるかと思ひしに、

△　やはり御當家御譜代たる、中務どのに式部どの、

□　御前に於て過言を吐き、我儘無禮の直純どの、

◎　御成敗ある我が君を、何ゆゑあつて暫くと、

○　御兩侯には、

四人　おかばひめさる。

中務　お留め申す我々は、忠義を守る臣下の道、

式部　お側に附添ひありながら、君をお諫め申さぬは、

中務　各方が、

兩人　不忠でござる。

四人　何と、（トきつとなる、これにて中務大輔式部少輔氣を替へて、綱吉に向ひ、）

中務　はッ、我が君へ申し上げまする、其の御立腹はさることながら、御當家樣へ對しては舊功のある直純ゆゑ、
式部　何卒御賢慮廻らさせられ、寬仁大度の御上意を、仰せ聞けられ下さるやう、
中務　偏に願ひ、
兩人　奉つる。（ト　これにて綱吉思入あつて）
綱吉　今兩人が留めずば捨ておく奴にはあらざるが、老耄なせし掃部頭、手討は許し遣はすぞ。
中務　すりやお聞き濟み下さるとな。
式部　有難く存じ、
兩人　奉りまする。
掃部　（これにて思入あつて）いで、此の上は切腹なし、冥土の鬼と相成りても、お茶のお席を拜見なさん。
中務　すりや、其許には、
兩人　切腹とな。
掃部　君へ過言を申し上ぐれば、豫て覺悟はいたして居る。（ト　宜しく思入、綱吉感心の思入あつて）

綱吉　はて大丈夫なその魂、（ト言ひ掛けて氣を替へ、）國許蟄居を申し付けるぞ。（トきつと言ふ、）
掃部　何卒愚臣に、切腹を、
綱吉　その切腹は相成らぬ。
○　すりや、我君へ、
四人　諫めを入れしを。
綱吉　憎い奴とは思へども、切腹させなば後日の聞えが、いやさ勳功のある直純ゆゑ、此の安綱は暇の印汝へ取らせ遣はすぞ。（ト件の短刀を差出す、これにて掃部頭びつくりして、）
掃部　すりや、切腹は叶ひませぬか。
綱吉　あたら命を全うなし、國へ歸つて蟄居いたせ。（トこれにて掃部頭餘儀なくはツと平伏する。）
中務　寛仁大度のお計ひ。
式部　有難く頂戴めされ。
ト件の短刀を取次ぎ、掃部頭の方へ持行く、掃部頭短刀を取つて、ほろりと思入あつて、
掃部　あゝ、斯くまで仁ある我君も、（ト思入あつて氣を替へ、）有難く頂戴いたします。
ト短刀をおし戴く。

中部
式部 我君には、先づお入り、

皆々 あらせられませう。

ト唄になり、綱吉後向になる、これにて二重正面の御簾をおろし、中務大輔式部少輔先きに近臣四人附いて上手へ入る、此の内掃部頭差俯いて居る、この留り時計の音になり、これより床の淨瑠璃になる。

〽あとに直純默然と覺悟の命助かりて、心の撓み拍子拔け、しばし詞もなかりしが、四邊見廻し獨言。（ト掃部頭よろしくあつて、）

掃部 死すべき時に死せざれば、死に勝りたる恥ありとは此の直純が身の上ならん、既に昨年七十七の賀を壽きし甲斐もなく、圖らず今日蟄居を蒙り穩かならぬ此の時節、上には大老美濃守が世にも勝れし才智に泥み、天下の政事も疎かに淫酒の二ツに溺れたまへば、諸大名も安堵せず眉を顰むる者ばかり、然るに明日お具足開きに例年出仕の諸侯を省き、西丸樣のみお招きあるは何とも以て合點行かず、お側に附添ふ佞人讒者に如何なる企みのあらんも知れねば、枉げて末座を願ひしも御聞き濟みのあらざるは、いよ〳〵以て心得ず、諫めを入れて一命を捨つるは冥府へ申譯と、覺悟極めし切腹も、

〽命を繋ぐ拜領の、此の安綱の安からぬ天下の大事身一ッに、納めかねたる國の亂、この短刀の長からぬ命を全ういたせよと、御仁情なるお詞に死ぬに死なれぬ薄命は武運の末か老後の恥、あるに甲斐なき身の上ぢやなあ。

〽生くるを悔む老の身の賢者の歎きぞ哀れなる。（ト此内掃部頭よろしく思入あつて、）

あゝ我ながら過つたり、國許蟄居を仰せつかり長座をいたすは上への恐れ、どりや退出をいたさうか。

〽長居は恐れと直純が涙拂うて立上り、運ぶ足さへ捗らで間毎々々を打見遣り、

ト此の内掃部頭立ち上り四邊を見廻すことよろしくあつて、

申すも愚癡のことながら、五代の天下六代に續く間が危ふしと仰せ置かれし神君の御遺言こそ圖に當り、治亂の境御當家の天下も最早これまでと思へば足も運びかね、五十年來登城せし此の殿中の見納めなるか。

〽これが名殘りと夕告の時計も過ぎてお襖の、模樣もそれと見え分かぬ涙にくれて直純が、無情を悟る青疊、運びかねたる足許にさはる其の身の腰の物、流石に老のぬかりなく心附いたる奥御殿、

ト此の内掃部頭愁ひの思入にて花道へかゝり、以前の大小足に障り心附いて腰にさす、この時舞臺は知せなしに廻る。

（大奥御廣敷の場）＝本舞臺正面一面白地中形大間の襖長押附、上の方に九尺の膝隱しの板、此の上に鈴の紐の心にて紫の紐を取り付け、上手大盡柱の所へ三尺の板羽目の張物を出し、此の間長局へ行く出はひりの心、總て大奥御廣敷の模樣よろしく、能き所に金網の行燈を照らし、風の音にて道具留る。

ト右文句の留りにて掃部頭舞臺を見返り思入あつて、

掃部　今まで心附かざりしが、吹き來る風にお廊下を、傳うて運ぶ奥御殿、とても退身いたすなら、御臺所へお逢ひを願ひ、天下の大事を申し上げ、御思慮を願ふが上分別、どうぞお逢ひがあればよいが、

〽我にこたへて我が胸に、通り過せし大奥の隔ての關へ立戻り、

ト掃部頭舞臺へ歸り、四邊へ思入あつて、

幸ひ番衆も居らぬ樣子、よい取次ぎに逢ひたいものぢや。

〽首尾を案じて鈴の緒を、引けば答ふる局の聲、

ト此の内掃部頭上手に取付けある鈴の紐を引く、これにて鈴の音して上手にて、

岡本　何方でござりまする。

掃部　扨は局に通ぜしか、

〽悦ぶ間毎押し明けて奥より出る岡本の局は衣服改めて、誰ぞやと四邊見廻せば、

ト此の内掃部頭は下手へ來り四邊を窺ひ居る、爰へ上手より岡本の局掻取裝にて出來り、四邊を見廻す、掃部頭岡本の局を見て小聲になり、

岡本どの、拙者でござる。

岡本　や、思ひ掛けなき直純さま、何御用にて此の處へ。

掃部　その御不審はさることながら、一大事の儀につきて是非今晩御臺樣へお逢ひの儀が願ひたく、竊に參りし掃部頭、何卒お取次ぎ下されい。

〽仔細ありげに見えければ、（ト掃部頭四邊へ思入あつていふ、岡本局もこなしあつて、）

岡本　餘人にあらぬ直純さま、何かは知らねど一大事の、御用とあれば御臺樣へお取次ぎもいたしませうが、豫々御存じ知らるゝ通りお奥を勤める御用人か、番衆の外は大奥へ男體せしものとてはお

通し申さぬ掟ゆゑ、御用の筋をわたくしへ仰せ聞けられ下さりませ。

掃部　さ、其のお斷りは御尤も、手前も掟は存じ居れど、何分密事の御内談ゆゑ、御臺所へ直々に申し上げねばならざる一儀、何卒御身のお計ひにて、お逢ひ下されますやうお願ひ申す。

岡本　でも、此の關より大奧へ、男をお通し申しましては、局の役が濟みませぬ。

掃部　すりやどうあつても御臺さまへ、お目通りは叶はぬとな。

岡本　さあお取次ぎなら知らぬこと、御臺さまへの御對顏は、御法度ゆゑに相成りませぬ。

掃部　とあつて容易ならざれば、迂濶に仔細は申されず、

岡本　そんなら何卒御紙面にて、お送りなされて下さりませ。

掃部　それも火急の場合ゆゑ、

岡本　但しは仔細をお聞かせあるか。

掃部　さあ、それは、

岡本　又は御紙面下さるか。

掃部　さあ、

岡本　さあ。

兩人　さあ〳〵。

岡本　如何なる密事か存じませぬが、他聞を憚る一大事を、迂濶に口外いたしませうか、それを御疑念遊ばすとは、ちとお恨みでござりまする。

〽忠義一途に突詰めし局が恨み直純も今は憚るよすがなく、

ト此の内掃部頭思入あつて、

掃部　佐野の渡りで時頼が常世の妻に出合ひしも斯くやと思ふ其の理り、男女の隔てあるとても世に老朽ちし直純ゆゑ、心許せし我が過り、それに引替へ局には役目の表正しくも其の返答は頼しゝ、何をか包まん明日の、お具足開きの儀について、西丸樣の御身の上まことに危ふく候ゆゑ、御臺所のお逢ひを願ひ、お談じ申す儀がござつて、竊に罷り越してござる。

岡本　むゝ、すりやそれゆゑに今宵の內。

掃部　霎時の猶豫もならぬと申すは、實は斯くいふ直純は君へ强諫なしたれど御不興蒙むり、國許へ蟄居を仰せ附かつてござる。

岡本　えゝゝゝ。（トびつくりなす。）

掃部　あ、これ、（ト押へ、兩人四邊へ思入。これより床の合方になり。）

岡本　して明日のお茶の湯は、やはり御三家御家門を、お省きあつてゞござりまするか。

掃部　どうしてそれを御身には。

岡本　さあ存じませいでなりませうか、其の取沙汰に御臺さまも殊の外なる御心配、もし西丸の上樣の御身に凶變ある時は、天下の亂れとわたくしへ御相談を遊ばしますれど、假令お附の女中でも、おさめの方より廻し者入込み居るを知つたるゆゑ、少しも心は許されず、又爰に居る番人も慾に迷ひて佞人の内意を受ける輩ゆゑ、態とすげなく申したも、大事を漏らさぬ爲めばかり、してしてお家の納りはどうしたものでござりませう。

掃部　さ、其の納りを附けんにも蟄居の身分となりしゆゑ、外に手段の仕樣もなく、たゞこの上は大奥へ竊に立越え御臺さまの、御分別を伺ふのみと忍び參りし掃部頭、して御番衆の侍は、これに見えぬが何れへ行きしな。

岡本　只今お奥へ召されしゆゑ、折よく爰に居りませぬは、まだしも御運の盡きざる幸先き。

掃部　然らば障りのなき内に、何卒お奥へ御案内を。

岡本　お連れ申すでござりまするが、其のお裝では何とやら。

掃部　とあつて、親仁が女中衆に變化の術もござらねば、

岡本　失禮ながらわたくしの、この搔取を其の上へお羽織りなされてこつそりと
掃部　いやもう七十八の老人が、錦の縫の搔取も氣恥かしけれど忠義の爲め、
岡本　そりやわたくしとて同じこと、局の身にて大奧へ、男を手引きいたしまするも、
掃部　餘所目にそれと見られなば、
岡本　何れ色ある搔取の、
掃部　心に錦は着て居れど、
岡本　模樣紅葉のはづかしき、
掃部　縫の袂も、
岡本　忠義の綾絲、
掃部　ほつれぬやうに、
岡本　失禮ながら、
〽脱ぎて手早く搔取の、姿繕ふ折柄に、
ト此の内岡本の局搔取を脱ぎ掃部頭に着せる、この時上手にて、
久内　お局さまはどれへござつた。お局さま〳〵。（ト呼ぶ。）

掃部　や、あの聲は慥に御番衆、

岡本　見咎められぬ其の内に、

掃部　然らばよしなに、岡本どの、

岡本　さあ、斯うお越しなされませ、

〽局の影へ直繍が身をそむけ行く向うより、

ト此の内掃部頭搔取を羽織り岡本の局の後へ附いて上手へ行きかゝる、爰へ上手よりお廣敷番久内袴裝の親仁にて出來る、岡本の局これを見てびつくりして金行燈の明りを吹消す、久内思入あつて、

久内　や、こりやお局には、何で燈火を、

岡本　さあ、お庭口から吹込む風が、

久内　はゝあ風で消えましたか。（ト此の内掃部頭件の搔取を頭よりすつぽりと冠り上手へ入る、これを久内見咎め、）どうやら連れのお女中は、（ト行かうとするを岡本の局隔てゝ、）

岡本　ありや獅子舞をお好みゆゑ、

久内　扨は十日の御祝儀に、

岡本　女中同志の思ひ附き、

久内　然らば拙者が囃子方に、(ト又上手へ行かうとするを隔て、)

岡本　はて、御番を大事に、(ト久内を無理に下に居させるを、道具替りの知せ、)なされませ。

トよろしくこなし、獅子の鳴物にて道具廻ろ。

(奥御殿の場)――本舞臺一面の平舞臺正面銀地の御簾襖、上下折廻し同じく銀地の御簾襖、所々に銀燭を照し、總て城内大奥の模樣よろしく眞中に須賀川奥女中兩肌脱ぎ、向う鉢卷にて蒔繪の廣蓋の上へ大きなる鏡餅を載せ開かうとして居ろ。左右に若松、吳竹、紅梅、靑柳いづれも奥女中の裝にて居並び、此の見得一ッとやの唄にて道具留ろ。

若松　何と須賀川さん、其のお鏡餅は、

四人　開けますまいかいなあ。

ト須賀川力をいれて鏡餅を開かうといふこなしいろ〳〵あつて、トゞあぐれたろ思入にて、

須賀　ほんにお表のお鏡開きは上供が五斗取り、下供が五斗取り合せて一石のお鏡餅ゆゑ、お小姓頭が二人して斧を打込む眞似をして、それから開くと申すこと、こんな小なお鏡餅は私一人で開けませうと思ひ込んで請合ひましたが、こりやもう降參でござりますわいなあ。

青柳　それでもあなたが請合うて開いて見せるとおつしやつたゆゑ、若し又それが開けましたら、わたくし共が一品づゝ頭の物をあげる約束。
呉竹　又お鏡餅が開けぬ時は、あなたのお首をわたくし共が、お貰ひ申すお約束ゆゑ、それではお首をわたくし共がお貰ひ申さねばなりませぬ。
紅梅　いえ〳〵そんな粗末なお首をお貰ひ申しても、首ばかりではお賽日にも飾れませぬ、外の物になされませ。
若松　ほんにそれより須賀川さんの、鞠唄といふお隠し藝を今宵拜見いたしまして、それで和睦にいたした方がよろしいではござりませぬか。
須賀　おやまあ、そんなにわたしの首を安くなされますな、これでも役者の巴二右衛門が思ひ附いて居りますぞえ。
青柳　さうおつしやれば去年の春、宿下りに參つた時、芝居を見物いたしましたが、
呉竹　あの巴二右衛門といふ役者は、お閻魔さまに似て居りましたわいなあ。
紅梅　たとへにもいふ似たもの夫婦と、それで大方須賀川さんを、
若松　思ひ附いて居りますのは、ほんに不思議な御ゑんまでござりまする。

須賀　おやまあ、とんだお茶番でござります。
青柳　さあ〳〵、早う鞠唄を、
吳竹　やつてお見せ、
四人　なされませいなあ。
須賀　此の鞠唄はわたくしが在所に居る時子守たちが、子供をおぶつて守りをしながら、鞠をついた身振の藝當、どなたも其の氣で御覽なされい。
若松　さあ〳〵、拜見、
四人　いたしませうわいなあ。（卜これより須賀川持前の藝當よろしくあつて納まろ。）
若松　ほんにをかしい、
四人　お人ぢやわいなあ。
須賀　この藝當をいたした代り、このお鏡餅は頂戴いたしますぞえ。
青柳　でも、慾の深い須賀川さん、
吳竹　それを頂藏なされても、
紅梅　其の儘にては藏かれず、

若柳　どうしてお開きなされますえ。
須賀　はい、お廣敷へ持つて行き、久内どのに割つて貰ひます。
吳竹　でも、あのやうなお爺さんでは、
紅梅　力がなうて、
四人　割れますまい。
若松　まあそのやうに見くびつて、
吳竹　お止しなされ、
四人　ませいなあ。
須賀　どれ頂戴鏡もちといたしませう。（ト須賀川件の鏡餅を抱へて下手へ入る。）
若松　若し皆さん、何時ものやうに、むべ山を取りませうではござりませぬか。
三人　それがよろしうござりまする。
〽かるた合せの折柄に天津局が案内に、つれて入込む直純が雲の通ひ路それならで、乙女の
姿搔取なしばし留めて奥の間の様子うかゞひ立歸り、
ト此の內舞臺の皆々かるたを出してむべ山を取つて居る、よき程に花道より以前の岡本の局先きに掠

部頭やはり掻取を冠り出來り、岡本の局掃部頭を花道へ待たせおき、さし足にて舞臺へ來り樣子な
見て立歸り、

岡本　心許せぬ女中衆と疾より見拔きし廻し者も、お奥に見えぬ樣子ゆゑ、先づ御安心遊ばしませ。

掃部　然らば最早獅子舞の、眞似をせいでもよろしうござるか。

岡本　さぞ御窮屈でござりませう、さゝお脫ぎ捨て下さりませ。

掃部　慥にそれへ御返濟いたす。

〽安堵の思ひ掻取を局に渡し肩衣の、衣紋繕ひたゞずめば、

ト此の內掃部頭掻取をぬいで岡本の局に返す、兩人よろしく身繕ひをして、

岡本　さあ、斯うお越しなされませ。

〽御殿へこそは打ち通る、（ト兩人舞臺へ來り、）

お腰元衆、これにござつたか。

〽局の姿見るよりも散しのかるた取り片付け、

ト此の內岡本の局上手へ通る、掃部頭は下手に控へ居る、腰元四人かるたを取片附け、

若松　お局さまにはお廣敷へ、先刻おいで遊ばしましたが、

青柳 見受けますれば、どなたさまか、お伴ひ遊ばしまして、
吳竹 御用ありげなこの御樣子。
紅梅 お次ぎへ御遠慮、
四人 いたしませう。（ト立たうとするを、）
岡本 あゝいや〳〵其の遠慮には及ばぬ、して新參の須賀川どのは。
青柳 須賀川どのには、御臺さまよりわたくし共へ下されし、
吳竹 お鏡餅を一人して、開かうとなされましても、
紅梅 女子の手際には參らぬゆゑ、
若松 人手を賴みにお廣敷へ、參りまして、
四人 ござりまする。
岡本 先づそれにて差合なし。さ、直純さまにはどうぞこちらへ。
掃部 然らばお女中、御免下され。
〽わが大小を差しおいて、君の賜物手に携へ挨拶なして座に直れば、
ト此の內掃部頭大小を下手へ置き、短刀を持ち上手へ通りよろしく住ふ、腰元四人掃部頭を見て、

若松　して御入來の、
四人　あなたさまは。
岡本　同じお城に居ながらも奧お表と隔たれば、こなさん方の知らぬも道理、これへお越しの御老體は井伊掃部頭直純さま。
四人　えゝゝゝ。
〽聞いて驚く腰元が、座をへりくだり敬へば、（ト腰元四人下手へ下り、はツと辭儀をなす。）
掃部　あゝいや〱腰元衆、かくお女中の其の中へ掟に背き參りし老人、會釋は却つて迷惑いたす、遠慮に及ばぬ、さゝこれへ〱。
〽打解けてこそ見えにける、局はあたり見廻して、
岡本　御臺さまには今の間に、何れへお越し遊ばせしぞ。
青柳　御臺さまには御佛間へ、
吳竹　只今おいで遊ばしました。
紅梅　何ぞ御用でござりますなら、
若松　申し上げるで、

四人　ござりませう。

岡本　それなら此の由御臺さまへ、申し上げて下さりませ。

四人　畏まりましてござりまする。（ト立ち上り、奥へ行かうとするを）

岡本　あゝこれ、必ず共に穩便に、

四人　はッ、

〽心得奥へ入りにける。（ト腰元四人上手の襖をあけ奥へ入る。）

〽跡に直純打ち案じ、（ト掃部頭思入あつて、）

掃部　いやなに、岡本どの、定めて如在はござるまいが、婦女子は口のさがなきものゆゑ、これに居合す女中衆に、若しや間者のある時は。

岡本　その御心配もさることながら、あれなる四人は御臺さまの御意に叶ひし腹心ゆゑ、お氣遣ひには及びませぬ、外に一人須賀川と申す今參りの腰元は、何共以て心得ず、正しく讒者の廻し者と推察いたして居りまする。

掃部　油斷のならぬ此の時節、少しも心は許せませぬ。

岡本　まことに左樣でござりまする。

〽始終に心おくの間に、春つけ鳥の御聲にて、（ト此の時うしろにて、）

御臺　なに、直純が參りしとや。

掃部　やゝ、あのお聲は御臺さま。

岡本　これへお越しと見えまする。

〽席を下りて兩人が出座を松の御操、たゞしき君も鶯の經讀みかけて谷の戸を立出でたまふ御風情、四邊を拂ふばかりなり。

ト此の內掃部頭下手へ來り、はッと平伏なす、よき程に正面の御簾襖を左右へ明け、御臺所好みのこしらへにて以前の腰元四人附添ひ出で、呉竹よき所へ紫の褥を敷く、御臺所この上に住ひ、紅梅この側へ脇息を置く、若松、紅梅紙置臺、煙草盆などよろしく御臺所の前へ並べ、四人共御臺所の後へ居並ぶ。これにて御臺所こなしあつて、

御臺　思ひ掛けなう直純には、夜分に至り此の奥へ參りしは心得ず、何ぞ變りしことでもあつてか、餘人にあらぬ老職ゆゑ、遠慮に及ばぬ、近う〳〵。

〽御懇の御意ぞ有難き、直純猶も謹んで、

トこれより誂への合方になり、掃部頭思入あつて前へ進み、

掃部　仰せの如く此の直純、かゝる夜分に及びましてお奥へ推参いたしまするは、掟を犯し二つには御臺所の御心慮を驚かし奉る段恐れ入りたることながら、今日拙者上樣より國詰めを仰せ付けられ江州彦根へ引取りますれば、最早七十七の賀も祝ひ生先きとても限りあれば、再びかゝる御目見得も測り難なく、御臺樣へ今生のお暇乞に、罷り出ましてござりまする。

御臺　なに、上樣より其の方に、國詰め仰せ付けられしとや。

掃部　御意にござりまする。

〽樣子ありげに直純は凋れて居れど傍なる、黃金造りの輝きて夜目にもきらめく腰の物、

ト御臺所掃部頭の脇にある件の短刀へ目を附け、こなしあつて、

御臺　はて心得ぬ、其の方には何ゆゑあつて目通りへ、刀を携へ出でたるぞ。

掃部　はゝツ、其のお尋ねに預りまして恐れ入つたる事ながら、直純これまで數年の間君へ仕へて聊かの舊功を盡せしとて、今日退身いたす際に御祕藏のお刀を拜領いたしてござりまする。

御臺　扨はそれゆゑ携へしか。

掃部　これを賜はるばつかりに、死ぬに死なれず國許へ。

御臺　え、（ト聞き咎める。掃部頭氣を替へて、）

掃部　國許へ引取りまするも、身の面目と悦ばしく、御禮の爲めにお目通りへ持參いたしてござりまする。

〽口に勇めど心には、愁ひを含む有樣に、御臺所は打ち案じ、
ト此の内掃部頭愁ひの思入にて差俯き居る、御臺所こなしあつて、

御臺　君よりお刀賜はりて國詰め仰せ付かりしは、不首尾にあらぬ其の身の晴れ、申さば目出度き退出なるに、何故その方は勇まぬぞ。

掃部　なかく以て掃部頭勇まぬことはござりませぬが、斯く老衰に及びまして物の數にもならぬ身をこれ程までに上樣がお勞り下さりまするかと、思ひ廻せば勿體なく、有難涙がこぼれまする。

〽大事を餘所に言ひなして、落涙なせばはれやらぬ、御臺の心汲み取る局、
ト此の内掃部頭やはり打ち凋れてゐる、御臺所合點の行かぬこなし、岡本の局思入あつて、

岡本　これにも深き譯ありて、實は天下の大事ゆゑ、（ト言ひかけるを、）

御臺　あゝこれ、

〽扨はと心附きそひし、あたりの遠慮見返りて、（ト御臺所こなしあつて、）
何は格別、直純が暇乞に參りしとは、わらはに於ても悅ばしい、腰元共は次ぎへ立ち、酒肴の用

意いたしてよからう。

四人　はッ。

〽はッと答へて立ち上るを、

御臺　必ず餘人に漏れぬやう、

四人　畏まりましてござりまする。

〽皆々次ぎへ立ちて行く、あとに御臺は岡本にそれと悟らせ建て切りし襖と共に御褥拂うて
こそは坐したまひ、

ト此の内腰元四人下手へ入る、御臺所岡本の局に目くばせをする、岡本の局心得、上下の襖を明け拂ふ、是れにて正面の襖引きぬき、後一面御殿の遠見になる、御臺所褥を下りてよろしく住ふ、掃部頭この體を見て思入あつて、

掃部　扨は敏くも御臺樣には、愚臣が胸中お悟りありしか。

御臺　直純近う。

掃部　はッ、（ト前へ進む、是れより誂へ床の合方になり）

御臺　この程よりの種々の取沙汰、將軍家にはその以前の御行跡とは打つて替り、佞臣どもの進めにて

晝夜婬酒に耽りたまひ、まだ其の上に我が君のお胤といへど疑はしき綱千代に世を讓らんと、西丸殿を明日のお茶に事寄せ失ふ御所存、そちを其の儘おく時は何かの邪魔と思召し、御祕藏ありしお刀を拜領させて國許へ隱居を仰せ付けられしか、それに相違はあるまいがや。

掃部　はツ、驚き入りし御明察、如何にも明日例年のお具足開きのお茶の湯も假お儀式との仰せ出だされ、是れ皆大老美濃守が君へお進め申し上げ、御三家御家門老若の列座を省き、上樣と西丸樣のみ御同席にて假お儀式のお茶の湯と承はりし臣等が驚き、扨は明日お立前のお茶の內こそ一大事、とさあ、萬一左樣な儀がござらば忠義に凝りし面々は駿府表へ立籠り、猶も大阪城內を根城となして西國の諸侯を語らひ惡人を、征伐なさん手筈ゆゑ、これぞ四海の大亂と徒黨を鎭め登城なし、お具足開きの末席を願ひ出でゝの御諫言、お用ゐなくば其の場にて切腹なさんと存ぜしも、臣下を惜しむ我が君の御慈愛なるか拜領の、お刀ゆゑに死を止まり、國許蟄居仰せ付けられ餘儀なく退出いたさんとお玄關近く退きしが、せめてこの儀を御臺樣へ申し上げんと存ぜしゆゑ御法を犯し大奧へ推參なせし掃部頭、御賢慮願ひ奉る。

〽天下を思ふ老の身の歎息なして述べければ、御臺所は直純の忠義を感じ兩眼に餘りて落る御淚、局も共に落淚のしばし袖をぞ絞りける。（ト此の內三人よろしく愁ひの思入あつて、）

御臺 〽御臺は涙おし拭ひ、（ト御臺所顔をあげ、）まこと天下の礎とも、呼ばれし其の方なればこそ、斯く身命を抛ちてよくぞお諫め申せしぞ、言うて返らぬことながら、悋氣嫉妬を愼しむが女子の道と思ふゆゑ、我が君樣の御行跡合點行かずと知るものゝ、是れまで諫めを入れしことなく、空に過せしあやまりも、〽薄き妹背はみづからの足らはぬゆゑと身を悔み、假令賤しきものにもせよ、お手の附いたる腰元を勞り使ひし仁心が害となりたる其の上に、齡を積るそちまでに斯かる苦心をさせるとは、〽いたはしさよとばかりにて又も涙にくれたまふ、側に局はお心を汲むも涙の果しなく、

ト此の内御臺所愁ひのこなし、岡本の局思入あつて顔をあげ、

岡本 いえ〳〵何の御臺樣に御あやまちのござりませう、御器量といひお里柄結構過ぎた御臺さま、御貞節なるお心ゆゑまことの道をお立て遊ばし、假にも御悋氣御嫉妬の御樣子さへも見せたまはず我が君樣の御意に叶ひお手の附いたるお女中は誰れ彼れとなくお愛しみ、その御慈愛をよい事に如死に等しきやうな奴が、色を以て媚び諂らひ遂には天下の一大事を、引き出すやうになつたるか。思ひ廻せば廻すほど御臺さまを蔑ろにいたしまするが口惜しく、夜の目も碌々合ひませぬ。

〽君を思ひ御家を思ひ悔し涙ぞ道理なる、直純態と氣を勵まし、
ト此の内岡本の局よろしくこなし、掃部頭思入あつて態と氣を替へ、

掃部　局の歎きはさることながら今更悔む場合でなし、たゞ此の上は明日の安危を待つて掃部頭鎧兜に身を固め、西三十三ヶ國の旗頭となり麾串握り、七十八を一期となし、修維の巷で屑よく當の敵と差違へ、討死なすが本懷と覺悟を極めて居りますれば、御臺樣にも戰爭のお覺悟あつて然るべし。

岡本　未前を悟る直純さま、お覺悟ありし上からは十のものなら九分九厘、天下の大事目のあたり、納る工夫はなきことか。

〽歎きを餘所に直純が、勇ましげなる一言に、御臺も心取り直し、

御臺　（此の内思入あつて、）國の爲には親兄の因みを捨てゝ理を爭ひ、

岡本　假令主君にあるとても、忠義の二字には代へられず、

掃部　討ちし例も有明の、月の都は西の空、

御臺　東にのぼる光りさへ、失せて空しき雨催ひ、

岡本　涙にくもる御沙汰となるか、

掃部　又は旭の晴れ渡り、

御臺　目出たう祝ひ納まるか、

岡木　明日は天下の御安危に、

掃部　實に風前の燈火の、

御臺　消ゆるを厭ふ、

三人　思ひぢやなあ。

へうすき氷も春の夜の頼み少なき折柄に、

ト此の内三人よろしくこなし、爰へ下手より以前の腰元四人若松は三ッ組の杯を載せし朱塗りの三方

呉竹は喰積の三方、紅梅は屠蘇の銚子、青柳は蒔繪の組重を廣蓋へ載せ持ち出て來り、御臺所の前へ

よろしく並べ下手へ下り、

若松　はッ、仰せ付けられましたる酒肴の用意、

呉竹　幸ひお床のお喰積みを、

紅梅　取りそへましてお銚子を、

青柳　持參いたして、

四人　ございまする。（ト辭儀をなす、これにて三人氣を替へ）

御臺　さ、目出度い門出、杯いたすぞ。

掃部　お流れ頂戴いたしまする。

岡本　どれ、お酌を取りませう。

〽すゝめ參らす御酒も常に似げなく、杯へ、滿々うけて干したまひ、

ト岡本の局　酌をなす、御臺所　杯を取り上げ滿々とつがせ、思入よろしくあつて、ぐつと呑み、

御臺　掃部頭遣はすぞ。

掃部　はツ、頂戴いたすでございまする。

トこれより誂へ横笛の入りし合方になり、岡本の局　杯を載せし三方を掃部頭の前へ持ち行く、掃部頭　杯を取り上げ、ぐつと呑み咽る思入よろしく、御臺所この體を見て思入あつて、

御臺　掃部頭、定めてそちは心勞にて、酒もおち〳〵過せまいが、もう心配には及ばぬぞ。

掃部　何と御意遊ばしまする。

御臺　料紙をこれへ。

岡本　はツ。

ト これにて岡本の局蒔繪の硯箱と料紙を持ち御臺所の側へ置く、御臺所箱の内より短册を出し、歌を認めることよろしくあつて、

御臺 肴代りぢや、これを遣はす。

ト件の短册を出す、岡本の局取次いで掃部頭請取り、押し戴いて讀み下し、

掃部 「ちりてこそ櫻はいとゞ目出たけれ、ありて此世に限りなければ、」（ト岡本の局是れを聞き居て、）

岡本 お心ありげなそのお歌、（ト掃部頭さてこそといふ思入あつて、）

掃部 さては、大樹を、

御臺 あ、これ、（ト抑へて、有合ふ喰積の松を扇にて切る眞似をして、）安心いたせ。

掃部 はゝ、はッ。

ト平伏する、此の時下手の屋體の蔭へ以前の須賀川出で、是れを窺ふ、岡本の局思入あつて、

岡本 えい、

ト釵を手裏劍に打つ、これにて須賀川肩先きを貫かれ、

須賀 あいたゝゝゝゝ。（ト前へよろぼひ出て、掃部頭の傍へ倒れる、掃部頭これを引附けて、）

掃部 やゝ、鬼に等しき此奴の面體、

若松　ほんにこなたは、
四人　須賀川どの、
岡本　それぞ奸婦の廻しもの、
須賀　それ知られては、(ト逃げに掛るを掃部頭引戻してぐつと引付る、御臺所思入あつて、)
御臺　こりや直純、目出度う祝して、舞うて立ちやれ。
掃部　はッ。

ト是れをキツカケに下座にて羅生門の謠になり、掃部頭扇を持ち立上り、須賀川を鬼につかひ小舞の立廻りよろしくあつて、トゞ須賀川をぽんと轉しよろしく納る、此の時花道の揚幕にて、

呼ビ　上樣のお入り、(ト呼ぶ、皆々向うを見て、)
岡本　なに、上樣の、
腰元四人　お入りとや。
御臺　それぞ幸ひ、今宵を過さず、(ト向うへ思入、)
掃部　あいや、拙者はこれにて、(ト肩衣の衣紋を直すを木の頭、)お暇仕りまする。

ト皆々氣味合の思入よろしく、時計の音にて、

ひやうし幕

木場武藏屋の場

一ッ目石置場の場

七幕目大切

〔役名――出羽屋忠五郎、お柳兄雷五郎藏、家主與九兵衞、船頭長次、武藏屋番頭喜右衞門、同手代太七、同與八。忠五郎女房おりう、其他。〕

（材木屋見世先の場）――本舞臺四間通し常足の二重、鐵網を張りし蹴込み、正面紺暖簾、上の方杉戸の戸棚、下の方茶壁、諸帳面の書割、兩棲障子にて見切り、いつもの所門口、この外材木書割の張物にて見切り、此の前に武藏屋と記せし用水桶、總て木場材木屋見世先きの體、爰に獅子舞の一紺の股引尻端折りにて獅子を冠り舞つて居る、これを△○紺の腹掛け股引武藏屋の紺半纏河岸揚げのこしらへにて留て居る、二重に太七與八着流し、紺の前垂手代にて控へ、門口の外に、獅子舞の二は首へ太鼓を掛け獅子舞の三摺鉦、同じく四は笛、いづれも股引尻端折り草履にて立掛り居る、此の見得獅子の囃子にて賑やかに幕明くと、一獅子を冠り奥へ行かうとするを、△○留めること宜しくあつて、

○　こう〳〵、何で手前達はづか〳〵と、見世へ獅子を舞込むのだ。

△　さつきから留るのに、いけ騷々しい、出て行かねえか。

一　（獅子をぬいで、）今日は正月の十一日、お藏開きの御祝儀に、惡魔を拂ひに來ましたのだ。

〇　誰も頼みもしねえのに、斷りなしに人の家へ舞ひ込むといふがあるものか。

△　大神樂なら知らねえこと、一文獅子はみつともねえ、きり〳〵外へ出ねえのか。

一　出ろといふなら外へ出ますが、何も今年始めてお家へ獅子は舞ひこみませぬ。

二　年々木場の問屋衆は、神樂獅子のお得意ゆゑ、

三　門並みお見世へ舞ひこんで、今年の惡魔を拂ふのだ。

四　一文獅子といひなさるが、物貰ひぢやあござりませぬ。

一　宿なしや菰ッ冠りと一つにされちやあ外聞がわるい。

〇　一文二文貰つて歩きやあ、菰ッ冠りと同じことだ。

△　外聞が惡いも氣が強い。

一　強からうが弱からうが舞ふだけ舞はにやあ、出ては行かねえ。

三人　さあ〳〵遣ッつけろ〳〵。

ト獅子の囃子になり、一獅子を冠り〇△を追ひ廻す、太七、與八立ちかゝり一を留め、

太七　これ〳〵お前方も靜かにして下さい、年々春は砂村から獅子舞に來なさるのは、誰知らないもの

もないが、此の二人は新參だから、お前方を知らないのだ。

與八　殊には家に昨夜から、一方ならぬ取込みがあるゆゑ二人も斷つたのだ、腹も立たうが春のこと機嫌を直して行つて下さい。

一　いゝえお前方のやうに言ひなさりやあ、何しに腹を立てますものか、いはゞ毎年上りますお得意さまのこちらのお店、お取込みがござりますれば、門から直に歸ります。

太七　それぢやあどうか今年の所は、此のまゝ直に歸つて下さい。

與八　その代りに又來年は、二年振り舞つて貰ひませう。

一　さういふことなら歸りますが、これが二合半か平井から出て來たものならいゝけれど、

二　爰から近い砂村で、もやし胡瓜と同じやうに、

三　何處の祭へ出掛けても幅をきかせる囃子方、

四　土地の外聞になりますから、菰ッ冠りとわつち等に、

一　けちを附けた彼の衆にちよつとあやまらしておくんなせえ。

太七　賣詞に買詞だが、菰ッ冠りと言つたはわりい。

與八　二人の者にあやまらせませう。

○　もし〳〵太七さん打捨つて置いておくんなせい、一文二文貰つて歩きやあ孤ッ冠りも同じことだ。
△　向うも土地の外聞なら、こつちも木場の外聞だ、何であいつ等にあやまりませう。
太七　はて口に物はいらねえから、
與八　ちよつとあやまつてしまひなせえ。
○　萌し胡瓜は江戸へ出て、幅が利くか知らねえが、
△　一籠いくらのへゝぼくた野郎に、
一　なに、へゝぼくた野郎とは誰がことだ。
○△　誰でもねえ、うぬがことだ。
四人　うぬ、さう吐かしやあ此の儘に、（ト獅子の四人立ち掛るを○△留めて）
太七　これさ〳〵靜かにして下せえ。
與八　隣近所へ濟まないから、
一　えゝ、濟むも濟まぬも、
四人　構ふものか。
　ト獅子の鳴物になり、四人○△に立掛る、太七與八捨ぜりふにてこれを留める、下手より與九兵衞羽

織、ふんごみ、古風な家主のこしらへにて出來り、直に内へ入り、
與九　これ〳〵こなた衆は靜かにしねえか、此の取込みのある中で、何をそんなに騷ぐのだ。
太七　これは大屋さまでござりますか、好い所へ來て下さりました。
與八　どうかお前さまの御威光で、取り鎭めて下さりませ。（ト與九兵衞此の内双方を留める、）
與九　いつたいこれはどうした譯だ。
○　この獅子舞の百姓めらが、無暗に内へ舞込むゆゑ、出て行けと言ひましたら、
△　出て行かねえと言ひますから、それでごた〳〵言ひましたのだ。
一　いえ、それといふも此の衆が菰ッ冠りも同じことだと、わつちらのことを言ひますから、兎やかうも言ひましたのだ。
與九　そりやあ言はれたッて仕方がねえ、一文二文貰つて歩けば、菰ッ冠りも同じことだ。
二　そりや大屋さんまで同じやうに、
三　菰ッ冠りと言はれちやあ、
四　猶々こゝは出られねえ。
與九　なに、猶々こゝは出られねえ、出られずば何時までも居ろ、町法を以て手前達を召連れ訴へをし

てやらう。

一　え、召連れ訴へを、

四人　しなさるえ。

與九　おゝ、しなくつてどうするものだ、喧嘩の樣子は材木の蔭であらかた聞いて居た、取込みがあるから行けといふに、行かねえといふは强情だ、この始末がらを玄關へ言上げ、突出して遣るからさう思へ。

二　おゝ面白え、こんなことで突出されるなら、

三人　さあ突出してくれ〳〵。（ト立ち掛るを一留めて、）

一　これ〳〵靜かにしろ〳〵、こんな詰らねえ端た喧嘩で、玄關へ出ちやあ、ましやくに合はねえ。

三　それだといつて此の儘に、指を銜へて歸つた日にやあ、

四　第一砂村の土地の恥だ。

一　その恥の雪ぎやうは、後でいくらも仕樣があるから、今日のところはおれに任せろ。

太七　春早々お前方も、間違ひをしては緣起が惡い。

與八　腹も立たうがこれぎりに、笑つてしまつてくんなせえ。

一　えゝようございます、今日の所は此の儘に、料簡をして歸ります。
與九　二度と再びこの木場へ、足踏みをするときかねえぞ。
二　おら達もこれから來ねえが、
三　疝氣持の兀天窓、
四　稻荷さまへ來るときかねえぞ。
與九　きかねえもないものだ。おらあ疝氣持ちぢやあねえぞ。
一　ねえことがあるものか、
四人　大睾丸め。
與九　どうしたと。
四人　狸親仁ヤア。（ト獅子の囃子になり、四人下手へ入る、與九兵衞立ちかゝり）
與九　うぬ、言はして置けば、（ト行かうとするを皆々留めて）
太七　逃げて行つたらいゝにして、
與八　もう打捨つて置きなせえ。
與九　忌々しい一文獅子だ。

〇以前と違つて近頃は、どこの家へもづか〳〵入り、

△小言をいやあ、兎やかうと、惡い風になりました。

與九　これから町内言合せ、來ねえやうにしてやらう。

ト合方になり、奧より喜右衛門羽織着流し番頭のこしらへにて出來り、

喜右　おゝ與九兵衛どのか、待つて居ました。

與九　これは番頭の喜右衛門どの、嘸昨夕からお疲れでござりませう、一人でさへも騷ぎだのに旦那さまが俄の吐血で、果敢なくおなりなされた所、引續いて御新造さまが、扨とんだ事でござりました。

喜右　內外の者にも口留めして、なるたけ世間へ漏れぬやう包んではあるけれど、隱すことほど顯はれ易く、最早パツといたしたやうだ。

與九　浮世の噂の寄合所、湯屋髮結床で尾に尾をつけ、御新造さまが御家の爲めに旦那さまを刺殺したと、跡方もないことを、種々取沙汰をいたします。

喜右　それといふのも柳橋の出羽屋のことがあるゆゑに、人も兎や斯う言ひまする、惡い噂のないやうに、掃部宿の彥兵衛さまが一方ならぬ御心配で、御親類方と相談の上、御養子綱太郎さまを直に

御家督になされるお積り、委しいことは太七から聞かしッたでござらうが、名主どのへ其の事を届けて下すつたらうの。

與九　いえ、まだ届けに參りませぬ。

喜右　御家督が濟んだ上、旦那さまや御新造さまの御死去を世間へ觸れる積り、なぜ届けに行つて下さらぬのだ。

與九　名主へ届けに參りますのは御妾腹ではござりますが、德太郎さまといふきつとした御實子がござりますのに、それを差し置き御養子へ御家督とは、些と筋違ひかと存じます。

喜右　筋が違ふが違ふまいが、御親類方や彥兵衞や御相談の上で極つた御養子、こなた衆の知つたことではない。

與九　いえ、外の事は兎も角も私も御地面の支配をいたし居りますれば、これぱかりは一不審申さねばなりませぬ。

喜右　綱太郎さまの御家督は、旦那さまの御遺言だが、こなたは御遺言を背くのか。

與九　決して背きはいたしませぬが、

喜右　御遺言に背かぬなら玄關へ早く出るがいゝ、それともこなたが言はれずば、組合から言はせよう

か。

與九　そりやあ御遺言とあるならば行くまいものでもないけれど、綱太郎さまへ御家督を讓るといふは合點が行かぬ。

喜右　なに、合點の行かぬことがあるものか、御遺言狀に御家督から御親類方への御遺物、我々にまでそれ〴〵にお形見分が記してある。

與九　それでは旦那の御遺言狀に、お形見までが記してあるとか、御存生の内第一のお氣に入りのこの家主、定めてわたくしへもお形見分けが、

喜右　おゝあるとも〳〵、結構な下されものだ。

太七　いや結構な下されものとは、氣の惡い大屋さん。

與八　柳橋の出羽屋の家で、千兩の估券を貰つたから、

〇　第一番のお氣に入り、

△　三千兩は大丈夫だ。

與九　多くの中で結構な下されものゝある家主、旦那へ對し一番頭どの粗略にしては濟みませぬぞ。

喜右　いやその下されものがあるゆゑに、こなたをわしは何とも思はぬ。

與九　そりや又何で。
喜右　さあ、結構な下されものゆゑ。
與九　して下さつた其の品は。
喜右　お暇を下すつたのだ。
與九　それは何より有難い、流石は御最屓の旦那さまだ。（ト小躍りして悦ぶ。）
○　これ〳〵大屋さん、お暇を下すつたのが、
△　お前はそんなに有難いかえ。
與九　え、それではわしに下すつたのは、（ト喜右衛門懐から遺言狀を出し。）
喜右　「年來勤め方宜しからず候ゆゑ、悴の代になり候はゞ長の暇遣はすべく候。」これ見さつしやい。
御遺言狀に記してあるわ。
與九　えゝ、さりとは旦那も情ない、とんだものを下すつた。
喜右　四十九日が過ぎた上、故なく暇と思つたが綱太郎さまの御家督を、兎や斯ういふゆゑ暇をやるのだ。
與九　それは大變、まことのことなら四十九日はまだなこと、どうか是れから百ケ日、相成るべくは來

年の一周忌まで無事で居るやう、これ番頭どの、お頼み申す〳〵。(ト手を合して拜む。)
喜右　いや御遺言ゆゑ、お詫は出來ぬ。
與九　これ太七どの、與八どの、どうぞ執成しをして下さい。
太七　此の前二人が一晩明け、しくじつたとき詫言を、してくれもせぬ因業大屋。
與八　何で執成しをするものか。
與九　それでは河岸揚げの長次に傳吉、こなた衆を賴む〳〵。
○　いくら賴むと言ひなすつても、暇と聞いて有難いと、
△　言つたからは仕方がねえ、往生して貰ひなせえ。
與九　あれはうつかり、つい言つたのだ。
喜右　假令誰が詫びをせうとも、御遺言は反故にはならぬ。
與九　それではどうでも退役か。
皆々　知れたことだ。
與九　え丶丶丶丶。(トびつくりしてへたろ、此の以前下手より以前の獅子丶の人數出で、門口に窺ひ居て、)
一　大屋でなければ、

四人 さつきの返報、

ト獅子の鳴物になり一獅子を冠り、與九兵衞を追廻す、皆々ごつちやになり、トヾ獅子の口をあけて與九兵衞の頭を銜へる、此の見得よろしく右の鳴物にて道具廻る。

（一ッ日石置場の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う所々に石を積みし張物、この前に腰を掛ける程な葛籠石を並べ、上の方尺角の石を積みし張物にて見切り、下の方柵矢來柳の立木、後黑幕、總て一ッ日石置場夜の體。時の鐘波の音にて道具留る。と時の鐘端唄の合方、通り神樂になり、花道より三幕目の五郎藏頰冠り紺の腹掛着流し三尺帶草履にて出來る、後より三幕目の忠五郎着流し草履下駄にて出來り花道に留り、

五郎 今の間に曇つて來たが、まだ雪があるやうだな。

忠五 北風が東風にかはつたから、明日あたりは降るだらう。

五郎 何にしろ河岸ッ端で横ッ面を吹ッ切られるやうだ。

忠五 蕎麥でも來たら一杯やつてあつたまらうと思つたが、まだ春だから出ねえか知らぬ。

五郎 さつき家で呑んだ酒がすつかり醒めてしまつた。あゝ寒い〳〵。（ト言ひながら右の鳴物で舞臺へ來

り）これ忠五郎、どこへおれを連れて行くのだ。

忠五　おゝとつくりお前と話しをするにやあ、隣近所のねえ所でなけりやあ話しが出來ねえから、それで爰まで連れて來たのだ。

五郎　こんな所へ連れて來ずとも、家で鍋でも突つきあつて呑みながら言つても分ることだ、何でそんなに隣近所へおれが話しを憚かるのだ。

忠五　一杯やると二言めにやあ大きな聲をお前がするから、家ぢやあとつくり話しは出來ねえ。

五郎　それで爰まで連れて來たのか。

忠五　川ツ縁で寒からうが、ちつとの内だ爰へ掛けねえ。

ト忠五郎手拭で石の上を拂ふ、五郎藏思入あつて尻を端折り身拵へをする。時の鐘、日覆より霞附き灯入の月をおろす、忠五郎五郎藏を見て、

五郎　おれが尻を端折るのか、こりやあ逃げ支度をするのだ。かう兄貴、何で尻を端折るのだ。

忠五　何で逃げ支度をしなさるのだ。

五郎　おゝ仕なくつてどうするものだ。（ト時の鐘、木遣崩しの合方へ通り神樂を冠せ、五郎藏石へ腰を掛け手

拭を取つて、）今更言はずと知れたことだが、いつぞやおれが筋立てゞ首尾よく行つて旦那から手前が貰つた角地面、千兩といふ估劵だから二つに割りやあ五百兩、一割にしても百兩は俺にくれにやあならねえ所、思ひ掛けなく千兩の估劵を旦那がくれたのは、言はず語らず德太郎に讓る心に違ひねえから、こいつはうつかり遣えねえとおつな所へ道理をつけて、廿五兩おれにくれたが五分の禮にもならねえから癇に障つて小胸がわるく叩き返さうと思つたが、そこはおれも年の功太く短かく取るよりやあ、細く長く取つてやらうと、それからこつちへ五兩三兩いやがれるのを合點で三日に揚げず借りに行き、今日は一番大袈裟に五十兩とふッかけたら、入るなら金も貸してやらうが、家で話しが仕難いから近所まで行つてくれと、無理におれを連れ出したは、寒さは寒し軍鷄屋へでも引張りこんで一杯呑まし、五兩位で叩きなぐる了簡だらうと出て來たが、爰までござれに石置場まで、連れて來たのは外ぢやアあるめえ。よく芝居にもある筋だが再び無心を言はねえやうに、おれを爰で殺す氣だらう。（ト思入にて言ふ。忠五郎思入あつて、）

忠五　これ兄貴、詰らねえことをいひねえな、何でそんなことをおれがするものだ。

五郎　しねえものが何でまた、家を出る時匕首を懷へ入れて來たのだ。

忠五　え、（ト思入。）

五郎　用簞笥の引出しから、おれに隱して懷へそつと入れたは白鞘物、こいつアをかしな素振だとちらりと見たゆゑ油斷はしねえ、小便に行く振をして、臺所からあげて來た手前の所の出刄庖刀、（ト懷から鬱金木綿の財布に包んだ出刄庖刀を出し、）出水でとられた竈同樣、どうで殺されると極つたら、卑怯に逃げはしねえ替り、たゞはおれも死なねえから血塗れ仕事をするつもりで、爰で殺して邪魔を拂へ。

忠五　惡いことにやあ先きから先き、二面の札ぢやあ引手のねえなめまで見拔くお前だが、そいつあちつと勘が違つた、芝居にあるか知らねえが、おれも出羽屋忠五郎、少しは人にも知られたからはそんな淺慮なことはしねえ、內で言つてもいゝことだが近所の口が鬱陶しいから、往來のねえ石置場へ寒ッさらしに長い橋を渡つて來たは今夜ぎり、お前が無心を言はねえやうに、遣つ切りを附けに來たのだ。

五郎　其の遣つ切りを附けるといふは、言はずとおれを殺す氣だらう、（ト時の鐘合方きつぱりとなり、）昔話しも野暮なことだが、十四五からして野天をぶち、質屋の押借りぶつたくりで突出されたも幾度か、廿五までは持つめえと言はれた體も運がよく、僅か五十か一百のたゝきで再び娑婆へ歸り脇艪といふはほんの名ばかり、年中賭場の梶取りに、巣どりの早手に出合つてもかうべを早く帆

をかけて危ふい灘を脱れて來た命冥加な五郎藏だが、今夜ばかりは乘ッ切れねえ、しもると覺悟をしたからはすつぱり爰でばらしてしまへ、然し義理あるおらあ兄だぞ、水竿で河岸をつくやうに、忠五郎、われがどてッ腹へ、穴があくから承知で殺せ。（ト忠五郎思入あつて）

忠五　兄貴、よつぽどお前もゆるんだぜ、そんなけちな料簡の、おれだとお前は思つて居るのか。

五郎　えゝ、御大そうなことを言やあがるな。

ト五郎藏庖刀の財布を取りきつと思入、時の鐘誂への合方になり、忠五郎これを見てにつこり笑ひ、

忠五　これまで度々五兩十兩お前がおれに無心を言ふのは、いつぞや貰つた千兩の估劵があるから言ふのだらうが、彼れを質にぶち込んで遣つた日にやあ只の人、爰は一番盆をはなれて旦那の胤の德太郎へ悉皆讓れば兎やかうと人に言はれる所もねえと、ふつと心に浮んだから酒に目のねえお前の所へ、氣に入らねえのを合點で切餠一つ遣つたが不足で、それから此方へ五兩十兩耳鬱陶しい厭がらせも、繫がる緣に仕方なく五兩といやあ三兩貸し、三兩といやあ二兩貸し素手で歸したことはねえが、酒の癖とは言ひながら、やれ相對姦通だの、美人局で取つたのと、大きな聲で言はれちやあ隣近所へみつともなく、遂にやあ家を疊んでしまひ、田舍へでも行かにやあならねえ。それゆゑ今夜橋を越して此の石置場へ連れて來たのは、これまでおれに氣障を言つて無心をいふ

のも估券があるゆゑ、（ト懐から竪に卷いた估券狀を出し、）さつきお前が白鞘と見違へたは外ぢやあねえ此の千兩の估券狀、これをお前に上げるから、此の後おれに一分でも無心を言つてくんなさんな、（ト五郎藏の前へ估券を出す、五郎藏びつくりなし默つてゐるゆゑ、）それともお柳を引揚げて、旦那で金にする氣なら親なき後は兄は親、お前にお柳を返さうから煮るとも燒くとも勝手にして何千兩でも取るがいゝ、飽きもあかれもせぬ仲だが、きざを聞くのが厭だから三行半を書いて來た、（ト紙入から離緣狀を出し、）さあ捨賣りにしても七八百兩、直に手に入る估券狀、又は千と二千になるお柳が體の離緣狀、よく考へてどつちでも、氣に濟んだ方を取んなせえ。

ト五郎藏の前へ二通の書附を差出す、此の内五郎藏は腕を組み考へる思入あつて、トヾ感心せしこなしにて、

五郎　いや忠五郎堪忍してくんねえ、おれがけちな根性から、手前が貰つた千兩の估券狀がむやくしくきざをいつちやあ度々無心、五十兩と言つたらば、二十五兩も貸してくれるか少なくも、十兩は手に入れる氣で借りに來たが、如何におれがうるせえとつて、千兩といふ估券狀、又これまでの金の蔓お柳を去つて返さうとは、切れ放れのいゝ江戸ッ子料簡、實におらあびつくりした、年は上だがどうしてく、なかく手前にやあ及ばねえ、斯う決心をするまでは嘸おれが厭だつたら

う。向後ふッつり心を入替へ堅氣になつて稼ぐから、どうぞ堪忍してくんねえ、なんぼおれが慾張りでも是ればかりは取られねえから、估券狀も去狀もそつちへ仕舞つて末長くお柳と中よく添つてくんねえ。（ト五郎藏估券と去狀を忠五郎の前へ出しよろしく思入。）

忠五　お前の心を入替るも幾度だか知れやあしねえ、そりやあおらあ受取り難い。

五郎　成程これまで度々だから、受取り難いといふのも尤も、然し今度は嘘でねえ證據を爰で今見せよう、（ト以前の出刃庖刀で髮を切る、仕掛にて髷だけ落ちるを取り上げ、）これが何より慥な證據だ。

ト忠五郎の前へ出す。

忠五　まこと心を改めるなら、髮を切るにやあ及ばねえのに、無駄なことをするぢやあねえか。

ト忠五郎髷を取上げ思入、五郎藏髮をかき上げ手拭を冠る、波の音端唄の合方通り神樂、ばたばたにて下手より三幕目の船頭長次尻端折りにて、出羽屋といふ吊提灯を提げて先きに立ち、跡より三幕目のおりう盥結びの鬘、世話裝、吾妻下駄にて出來り、

長次　もしお上さん、親方が居なさいましたよ。

りう　おゝ忠五郎さん、そこに居なさんしたか。

忠五　思ひ掛けねえ、どうして爰へ。

長次　さつきわつちが安宅から、歸りがけに石置場へ、曲りなすつたのを見かけたから、一本槍に來ましたのだ。
五郎　見りやあ二人とも息を切つて、何ぞ急な用でもあつてか。
長次　急な用の何のと、大變な事が出來たのだ。
忠五　なに、大變なことゝは。
りう　もし木場の旦那が吐血とやらで、昨夜おなくなりなさいました。(ト忠五郎びつくりして、)
忠五　え、木場の旦那がなくなつた。
五郎　そりやあ大變なことだなあ。
長次　まだそればかりぢやあござりませぬ、御新造さんも御一緒に、おなくなりなすつたさうだ。
忠五　そりやあまあどういふ譯で。
りう　委しい事は聞かぬけれど、旦那は昨夜吐血をなすつて果敢なくおなりなすつたので、御新造さまもハツと思つて、其の場で旦那と御一緒に、お亡なりなされましたとのこと。
五郎　二人一緒に死ぬといふは、何か世間へパッと言はれぬ、變な事でもありやアしねえか。
忠五　(思入あつて、)あの御新造は利發な生れ、男勝りと日頃から噂のあつた上からは、こいつあ兄貴の

言ふ通り、吐血といふは合點が行かねえ。

長次　そんなこともありますめえが、今しがた深川から河岸へ來た若い者がお客を待つてる其のうちにこつちの者へ話して居たにやあ、昨夜木場の武藏屋に大騷動があつたさうだが、どういふ譯か旦那があつてはお家の爲にならねえとかで、昨夜こつそりやつてしまひ、其の場を去らず御新造が自害をして死んだとやらいひましたが、嘘か實か知れないが、とんだ噂を聞きました。

ト忠五郎身ごしらへをして行かうとするを、おりう留めて、

りう　いえ〳〵お前は行かれぬわいなあ。

忠五　なに、行かれねえとは。

りう　さあ、お前が木場へ行かれぬは、御新造さまからわたしの所へ、參つたお文がござりますゆゑ。

忠五　して其の文は何時來たのだ。

りう　今しがた使ひにて屆いたゆゑにお前の跡を、追つかけて來ましたわいな。

忠五　そこにあるなら、早く見せろ。

りう　とつくり讀んで見やしやんせいな。（ト懷から文を出す、忠五郎開き見る、長次提灯を差出す、）

忠五「いまはの際に一筆書殘し候。忠五郎そなた兩人へは積る恨みも候へども、其の以前の忠義に免

じ何事も申さず候、僞りにもせよ旦那どのゝ胤なりと申し候へば、徳太郎こと大切に育て、先達て旦那どのより遣はされ候千兩の估券狀は徳太郎へ相讓り、出羽屋の家名相續いたさせ申すべく候、まつたそなた衆兩人は一家親類の手前もあれば暫く出入差留め候間、左樣心得申すべく候まだ〳〵申し度こと候へども心忙しく候まゝ、これのみ書殘し申し候、あら〳〵かしく、りうどのへ、みさより。」（ト讀終りびつくりなし、）すりや御新造さまにはわれ〳〵ゆゑ、今更いつても返らぬが、濟まねえことであつたなあ。

五郎　斯うなるからは仕方がねえ、一旦貰つた千兩の、估券を木場へお返し申し、

忠五　この身のお詫びをするのが第一。

りう　いえ〳〵お前が行かしやんしても、御新造さまの御遺言、誰れ逢ふものもございますまい。

忠五　それだといつて、此の儘には。

りう　いえ〳〵お前はやられぬわいなあ。

忠五　えゝ、いらぬ留め立て、放せといふに。

（トおりう留めるを忠五郎突き放す、このはずみに仕掛にておりうの髷落ちる。）

長次　やあ、こりやお上さんには、（トびつくりする。）

忠五　何で手前は髪を切つた。

りう　さあ、わたしやお前に暇を貰ひ、身の言譯に尼となり、旦那さまや御新造さまのお跡を弔ふ心でござんす。

五郎　おゝ妹出來した、よく切つた、この五郎藏も心を入替へ、髪を切つて坊主になる氣だ。

ト手拭を取る。

りう　そんなら兄さん、お前も今日から、

五郎　眞人間になつたのだ。

忠五　さういふ二人が心なら、反故にならねえ此の去狀、（ト以前の去狀をおりうに渡す。）

りう　えゝ嬉しうござんす。

忠五　叶はぬまでも估券を持つて、これから木場へこの身のお詫びを。

トきつとなる、獅子の囃子波の音になり、後の黑幕を切つて落し、向う大川、灯入の屋根船のある遠見になり、これと同時に紺の腹掛、股引、武藏屋の半纏を着たる筏乘り四人出て、

〇　うぬは出羽屋忠五郎、

四人　覺悟しろ、（ト右の鳴物にて打つて掛る、ちよつと立廻り、五郎藏左右へ投げ、）

五郎　こゝ構はずと、

忠五　合點だ。

ト引張りの見得よろしく、先づ今日は是れぎり。

ト目出度く打出し

柳澤騷動（終り）

挿扇妓王妓女朗詠一奏大相國榮花宴

盛衰記
圖會模

其樂さも我もとて望みは高き大文字山思を焦す緋櫻は鹿谷の宴會新亞相が催しに酒酣の師光が心の駒も狂ひし議論破し陶器に凶を示す是ぞ瓶子が斃ると賀祝す行綱が變心を悟りし主僧都が卽智父の機嫌を伺に嫁御臺を饗應の琴にかけ引かれ者の小唄とは捕縛を受し西光が驕奢を罵る怒に堪えず入道が難波に命じ共に呵責の成親卿兄をいたはる千歲の前夫へ告る水莖は駒に鞭つ柵が注進宗盛父とも甲冑かため院の御所へ皇を幽せん暴擧の幸先冠裝束悠然と入來る內府重盛公尊王忠義の道を說き直衣の袖も淚にぬれ命に替て父を諫むる孝に恥入る淸盛が鎧の胸を墨染の衣にかくす折を得て死刑をなだむる小松の仁心硫黃島に俊寬と共に憂苦の成經康賴二人を迎ひに基安瀨尾ゆるがせならぬ君命の大赦にもれし俊寬が今は孤島に獨妻子を慕ひ歸洛を羨み足ずりし腸斷るゝ悲しみを淚と共に島長甕が鬼界ケ島に鬼は無磯に音を啼島衛小松の大臣が諫より日本外史に趣向を得し新十八番歌舞伎の榮

今我國賢人稱世

牡丹平家譚

「平家物語」は明治九年五月、作者六十一歳の時、中村座に書卸された。此の内小松重盛諫言の場は歌舞伎十八番の一とされてゐる。活歷なる熟語の生れたのは、この作の出來たよりも二年ほど後のこと、即ち明治十一年十月「二張弓千種重籐」の上場された時假名書魯文がその漫評中に始めて用ひたのであるが、此の作も亦活歷なるものゝ一つであつたことはいふまでもない。兒島高德を演じ吉備大臣を演じた九世團十郎が、その類型的作物としての重盛諫言を演出したものといつてよい。然し書卸しの時には重盛も好評であつたが同優の扮した島の俊寛がそれ以上に評判がよかつたといふ。兎に角團十郎の創造した重盛なる人物は、歷史書以上の小松内府らしい典雅莊重なものであつたことは特筆に値ひする。「續々歌舞伎年代記」によれば「……此諫言場は平家物語に倣ひ河竹が筆を取り、況んや、就中などゝ、雅俗混交のセリフを用ひ、見物を煙にまきたるものなり、是に就きて特筆すべきは鶴助の新大納言成親なり、優は大阪より上り以來取立て好評を得し事もなかりしが此成親は大出來にて珍らしくも評よかりし。」とある。

書卸しの時の役割は、市川團十郎（法勝寺の執行俊寛僧都、小松内府重盛）、岩井半四郎（重盛御臺千歳の前）、中村仲藏（平相國淸盛入道淨海、島長四郎太夫）、片岡我童（小松中將惟盛）、中村鶴助（新大納言成親卿）、中村時藏（藤原師光入道西光、平判官康賴）、坂東しうか（白拍子祇女）、市川姉藏（多田藏人行綱、鎌田兵部之介、丹左衞門尉基安）、中村相藏（瀨尾太郎兼康）、岩井小紫（盛國妻しがらみ）、岩井繁松（輕遠妻吳羽）、市川新藏（丹吾兵衞悴太郎）等であつた。挿繪にしたのは、九世團十郎の扮した小松重盛の舞臺寫眞である。

大正十五年一月　　　　校訂者

牡丹平家譚（新歌舞伎十八番の內、重盛諫言――三幕）

序幕　　鹿ヶ谷山莊會議の場

〔役名――法勝寺の執行俊寛、新大納言成親卿、藤原成經卿、師光入道西光、平判官康賴、多田藏人行綱、舍人梅丸、諸士四人、雜掌、仕丁。白拍子扇蝶、其他。〕

（山莊塀外の場）――本舞臺三間の間、後一面築地、上手へ寄せて九尺瓦庇のある供待の腰掛け、下の方に櫻の立木、ずつと上手山組の張物にて見切り、日覆より櫻の釣枝、總て鹿ヶ谷の山莊塀外の體。爰に△○の雜掌上手の緣に腰を掛け、下手に□◎の仕丁長柄の傘を持ち立ち掛り居る、この見得樂太鼓の管絃へ山おろしを冠せ幕明く。

△　いやなに、右源太どの、今日是れなる山莊へ歷々方のお寄合は、詩歌連俳のお催しか、又は管絃のお催しでござらうか。

○　やはり櫻を眺めながら白拍子に舞を舞はせて酒宴をめぐらし、今日一日命の洗濯いたさうといふ愉快のお催しでござらうわえ。

□何にしろ、御主人方は女を側へ引き附けて飲んだり喰つたりなさるから、今日は定めて面白からうが、
◎供待をして居るものは、退屈をして大きな難儀、もう大概に歸ればいゝに。
△何さまそちが言ふ如く、假令櫻が滿開いたし、どれ程景色がよいとても、
○只見て居つては興にならぬ、花より團子と申すのは、爰等のことであらうわえ。
　ト此の時下手にて轡の音するゆゑ、
□あれ〳〵、あすこに繋いである、馬も退屈したと見えて、
◎手綱を解いて貰ひたさうに、嘶きをして居りまする。
△いや人間も退屈だから、馬も退屈いたすであらう。
○まだ我々は櫻の木に繋がれて居ぬのが仕合せぢや。
△何と供待のその間に、一鞍せめて見ようではござらぬか。
□乘り心も知らないくせに、
◎險難なことはよしになさい。
△知らぬとは失敬千萬、斯う見えても馬の方では、隨分譽れを取つたものぢや。

○然らば御身のお嗜みを、是れにて見物いたしませう。

□いや、よせばいゝのに、

◎險難なものだ。

△どれ、一鞍せめてくれん。

ト下手へ行きに掛る、爰へ上手より梅丸兒髷舍人のこしらへにて出で、△を支へ、

梅丸　いや、乘ることは叶ひますまい。

△誰かと思へば、舍人の梅丸、

○なぜ乘ることは叶はぬのだ。

梅丸　御主人樣の乘る馬へ賤しい身で乘る時は、お馬を穢すその上に、畜生ながらも腹をたち、暴れ出された其の時は、怪我をするのは知れたこと、又御主人に知れる時はお前さんも大きなお咎め、それゆゑ馬へ乘ることは、叶ひますまいと申しました。

□成程、こりやあ梅丸の、

◎言ふのが一々尤もだ、

△いや〳〵それはいらぬ留め立て、賤しい身ゆゑ乘られぬと手前達に見下げられては、猶々もつて

殘念だ、是非とも一鞍せめて見せう。

梅丸　お馬の掛りはこの梅丸、手籠めに乗るとお言ひなさりやあ、力づくでも留めねばならぬ。

△　こりやあ面白い、見事われが、

梅丸　おんでも無いこと、

△　何を小癪な、（ト△下手へ行き掛る、梅丸支へてちよつと立廻る　此の留り後にて、）

呼ビ　今様の始まり、（トよぶ、皆々是れを聞き、）

○　や、そんならこれから今様が、

□　又はじまると、

◎　見えるわえ。

△　この間に、さうだ。

梅丸　いや、やらぬ〳〵。

ト是れより宮神樂になり、長柄の傘を遣ひ皆々車引と見える立廻りよろしくあつて、とゞ件の傘を開き車と見せ△◎に肩車をして時平の見得、上手に○、下手に□、眞中に梅丸車引の見得、この模様よろしく道具廻る。

(俊寛山荘の場)——本舞臺四間通し高足の二重、本椽附眞中書院附子檜皮葺の庇銀張の欄間、是れへ唐花の紋を附し幕を張り、正面銀地墨畫の山水の襖、二重の上手山組の張物、同じく下手庭の中門の裏を見せ扉出入りあり、よき所に櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て俊寛山荘の體。二重の前面一面に銀地の御簾屛風を立廻し、平舞臺眞中に扇蝶白拍子のこしらへにて舞扇を持ち控へ居る、上下に諸士四人何れも烏帽子素袍小さ刀にて居並び、此の見得管絃にて道具留る。

一　俊寛僧都の御所望なれば、

二　成親卿への御饗應に、

三　舞の手振りを此の處で、

四　一指舞うて御簾内へ、

一　御上覽に、

四人　供へられよ。

扇蝶　不束なる扇の手振りお笑ひ草にはござりますれど、御所望ゆゑに是非もなう、御覽に入れるでござりませう。

一　いざ〳〵一指、

四人　お舞ひなされい。
扇蝶　はッ、（ト是れより下座の唄になり、扇蝶今様の振りよろしくあつて納まる、）
四人　やんや〳〵。
扇蝶　これにて御免下さりませ。（ト下手へ下り辭儀をする、此の時正面の御簾屛風の內にて、）
成親　舞の手振り感服いたす。
一　あの、お聲は、
四人　成親卿。
俊寛　今一指、所望いたさん。
扇蝶　すりや、今一指御所望とな。
成親　最早隔てに及ぶまじ、
康賴　仰せに任せ、
行綱　それ、お屛風を取りのけい。
稚兒二人　はッ。
ト是れより又管絃になり、稚兒兩人屛風の蔭より出で、件の御簾屛風を取りのける、眞中に俊寛好みの

こしらへ、上手に成親更けたるこしらへにて中啓を持ちて住ひ、下手に西光坊主鬘好みのこしらへ、此の次に行綱烏帽子素袍小さ刀にて住ひ、この見得右の鳴物にて納まる、是れにて平舞臺の皆々はツと平伏なし、

一　成親卿の御座近く、

二　席を進むる我々は、

三　憚り多き身の面目、

四　恐れ入りまして、

四人　ござりまする。

俊寛　今日の集會は位官を論ぜず味方の合體、猶も盟約固むる爲め、神酒を是れにて囘らさん、誰そある瓶子土器持て。

ト奥にてはツと答へて下げ髪の侍女二人、白木の三方へあつらへの瓶子土器を載せ干肴を取添へ持つて出で、上手成親の前へ直す。

成親　然らば成親拜領いたせば、俊寛殿より順杯に、

俊寛　如何にも左樣仕らん。

西光　御神酒頂戴のその間、
行綱　白拍子には今一指、
一　いざ〳〵舞を、
皆々　始められよ。
扇蝶　心得ましてござりまする。

ト是れより又下座の唄になり、扇蝶舞にかゝる、此の内成親より始めて皆々へ順に土器を廻し、侍女二人瓶子にて酌をすること、トゞ平舞臺下手諸士の四の所にて土器を呑み納め、舞はこれと一ばいに切れて、扇蝶はッと平伏する。

俊寛　おゝ大儀であつた、次ぎへ立て〳〵。
扇蝶　ハアヽ。（ト扇蝶先きに腰元兩人附いて二重へ上り奥へ入る、是れと一緒に稚兒兩人も奥へ入る。）
一　はッ、御神酒のお流れ有難し〳〵。
二　一同頂戴、
四人　いたしてござりまする。
成親　他聞を憚り餘の者は遠ざけたれば、申し談ずる一儀あり。

俊寛　おの〳〵これへ進まれよ。

四人　はツ、

ト是れより音樂になり、正面の襖を引拔き岩山を見たる奥庭の遠見、皆々四邊へ思入あつて、諸士四人は二重へ上り、上下の緣先きへよろしく居並ぶ。

成親　それ、僧都より發言めされ。

俊寛　はツ。

一　してお談じの、

四人　その一儀は、（ト是れより合方になり、）

俊寛　密事と申すは餘の儀にあらず、各方も知らるゝ如く保元平治の亂れより我が日の本も穩かならず下萬民はいふも更なり、上御一人の君といへども惡逆無道の淨海に普天の下をば狹められ、今この儘に捨ておかば武家に政務の權を奪はれ、月卿雲客遠からず廢さること目のあたり、故に此度成親卿を大總督と相賴み、斯くいふ俊寛西光との行綱どのを同志に語らひ一大革の儀を令し平家を追討なさんと欲す、なれども世に連れ時に隨ひ威勢盛んの淸盛に諂ふ所存の輩は、徒黨を漏れて隨意たるべし、一味合體めされんと御決定ある方々には誓ひの神文御覽に入れ、是れに

て血判受け取らん、密事と申すは斯くの次第。さ、御返答が承はりたい。

一　はゝツ、仰せの如く清盛淨海、惡逆無道増長なし、

二　主上をはじめ堂上方を、蔑ろにする我がまゝ無禮、

三　我々共も豫てより憎しと思ふ平相國、

四　望む所の御企て、いかで異變がござらうや。

一　これにて血判。

四人　いたすでござらう。

西光　それにて先づは西光も、安堵いたすと申すもの。（ト成親懐より連判の一卷を出し、）

成親　然らばこれなる神文へ、（ト俊寛受取り、）

俊寛　何れも姓名お記しあつて、誓ひの血判いたされよ。

一　委細承知。

四人　仕つる。

ト合方きつばりとなり、俊寛件の一卷を開く、此の内西光有合ふ文臺へ蒔繪の硯箱を載せて持ち出で、よき所へ控へる、皆々連判の姓名を讀むことあつて、

一　こりやこれ成經卿、
四人　康賴殿も。
俊寛　豫て同意の兩卿なれど、今日主上の御用にて院の御所へ參內いたせば、此の會合に漏れてござる。
西光　神文御承知ある上は、御姓名を記し申さん。
一　何卒御記入、
四人　下されい。（ト件の連判狀を西光に渡す、西光文臺の上にて皆々の姓名を記し居る。）
一　成親卿が今般の大總督を司られ、
二　俊寛僧都が後見の、副總督を勤められ、
三　西光殿が懸引の大元帥をめさるれば、
四　成經卿と康賴殿は、右と左りに立別れ、
一　軍務のほども大丈夫、
二　龍に翼を得たるも同然、
三　必定勝利に疑ひなし。

四　いでく血判仕つらん。（ト此の内西光姓名を記してしまひ、）
西光　然らばこれへ血判めされ。
一　委細承知、
四人　仕つる。

ト四人作の連判状へ血判なすることよろしく、此の内行綱は默然として差俯き居るゆゑ、俊寛これへ目を附け思入あつて、

俊寛　行綱殿、如何めされた。（トきつと言ふ、是れにて行綱びつくりして氣を替へ、）
行綱　折惡しく腹痛にて、甚だ難儀仕つる、暫時御容赦下され。（ト立たうとする。）
西光　あいや暫く行綱殿、御休息がめされたくば、此の連判狀へ血判めされい。
行綱　はッ、（トもぢくして居るゆゑ、）
西光　何ゆゑ御猶豫めさるゝな。
行綱　さ、其の儀は、
西光　御同意の儀は御不承知か。
行綱　あいや、全くもつて、

一　御不承知なら、

四人　此の場にて、（トきつとなるを留めて、）

成親　あいや各先づ待たれよ、疾より同意の行綱殿、異變あるべき筈はなし。

俊寛　よしなきものを、

行綱　や、

俊寛　あいや、よしなき病のお惱みながら、誓ひの血判いたされよ。

ト是れにて行綱是非なき思入にて、

行綱　委細承知仕つる。

ト件の一卷へ血判する、此の時に轡の音して下手の門の扉を押明け、以前の○□◎逃げて出る、此の機に下手にある三方を過つて打返し、仕掛にて素燒の瓶子の口がとれる、皆々この體を見てびつくり思入、俊寛は一卷を手早く卷いて懷中なし、

一　成親卿の御座近く、

二　地下人共が是れへ立入り、

三　尾籠の振舞、

四　控へ居らう。（ト西光行綱思入。）

西光　やゝ、神酒の瓶子を打返し、

行綱　口を缺きしは不吉の第一。

一　こりや、此の分では、

四人　濟まぬわえ。（トきつと言ふ、此の時下手門の内にて、）

梅丸　その科人、只今それへ。（ト以前の△を引立て來り下手に平伏なす、成親梅丸を見て、）

成親　汝は舍人梅丸ならずや、して左源太が科人なるとは。

梅丸　はッ、お供待の其の間に、君の乘馬を引出し左源太どのが乘りしゆゑ、忽ち乘馬が暴れ出し、落馬いたして御乘馬は、お庭の内へ駈入りまして留める者を踏み散し思ひ掛けなき不調法、舍人の越度になりますれば乘馬は櫻へ繋ぎ留め、左源太どのを申譯に召連れましてござりまする。

△　いやもう生中馬術の心得が少しあるのを鼻に掛け、一鞍攻めて見ようと思ひ却つて馬にせめられまして、とんだ粗相をいたしました、脊骨と共にこの左源太、まことに痛み入りまする。

一　やあ地下人の身で成親卿の、

二　御乘馬を穢すなどゝは、

二　身の程知らぬ憎い奴、

三　きつと折檻、

四人　いたしてくれん。(ト立ちかゝるを)

俊寛　あいや　各　お待ち下され。

一　何ゆゑお留め、

四人　なさるゝな。

俊寛　君の御乘馬穢せしは如何にも下人が不屆きながら、是れ過ちの功名にて只今瓶子の割れたるは、味方に取つてよき幸先き。

成親　なに、幸先きが、

皆々　よろしいとは。(ト合方きつばりとなり)

俊寛　されば、瓶子の濁りを轉じ音をかへて讀む時は、取りも直さず則ち平氏、晝夜婬酒に耽りたる夫の淨海が腹中こそ酒の器に異ならず、白木に比する白綾を着せし侍女にかしづかれ、娛樂を極むる三方の固めも薄きのり放れ、破れ易きを押し量り、今下人等が門外へ亂れ入りしを手かゞみに不意に迫つてあの如くへいいへいじの首を打ち取りしは、是れぞ入道淨海を押倒したる味方の幸先き、

何と左樣ぢやござらぬか。

皆々　むゝ、(ト思入、俊寬成親に向ひ、)

俊寬　はゝツ、何卒彼等の不調法手柄に愛でゝ御許容あるやう、只管願ひ奉つる。

トこれにて成親悦ばしき思入にて、

成親　何さまこれはよき吉瑞、然らば粗忽は許しくれう、以後を愼しみ供待ちいたせ。

△　はツ、有難き其のお許し、是れと申すも俊寬樣がお執成しをして下されしゆゑ、

○　惡い事でも善いやうに祝ひ直して御主人樣の、御立腹をお留めありしは、

□　成程大そうな御器量人だと、噂に聞いたが違ひなし、

◎　當意即妙頓智頓才、誠に恐れ入りました。

梅丸　これで舍人の梅丸も、大安心をいたしました。

俊寬　餘事を申さず供待ちいたせ。

五人　はあゝ。(ト供廻り皆々下手の內へ入る。)

西光　只今下人の粗忽にて神酒の瓶子を打ち割りしは、不吉と存じ心痛なせしが、

一　俊寬僧都の御判斷にて、

二　轉じ替へたる味方の吉瑞、
三　この上ともに軍慮の懸引、
四　お指圖願ひ奉つる。
俊寛　さしてもなき儀を其のやうに、仰せられては面目ござらぬ。
成親　殊に是れより院の御所へ、服改めて參内なし、味方の吉瑞逐一に奏問遂げん。
俊寛　まつた味方へ各方御加入ありし此の連判、御披露願ひ奉つる。（ト件の一卷を成親に渡す。）
成親　その議も成親承知せり。
西光　左樣ござらば我々も、
一　成親卿と、
四人　御一緒に、
西光　然らば左樣、
五人　いたすでござらう。（ト成親行綱の樣子を見てこなしあつて、）
成親　我が身なほ我が思ふにも叶はぬに、人の心を任すべきやは。
ト言ひ捨てゝ立ち上る、俊寛この歌を聞き思入あつて、

俊寛　計り難きは、(ト行綱へこなしあつて氣を替へ)いや、又も軍議を仕つらん。

成親　何分よしなに頼むは僧都、

俊寛　左樣ござらば成親卿、

皆々　先づ〳〵、

ト唄になり、成親先きに西光附いて奥へ入る。跡諸士一人々々俊寛行綱へ辭儀をして奥へ入る。跡に俊寛行綱殘り、行綱は態と腹痛のこなしにて、

行綱　先刻も申す如く、折惡しく腹痛いたせば、是れにて御免下されい。(ト立たうとするを)

俊寛　あいや行綱殿、暫くお待ち下されい。

行綱　でも腹痛にて惱みますれば、

俊寛　はて御腹痛にござるなら、俊寛所持の積心丹只今取り寄せ差上げん、先づ〳〵暫くお待ちなされい。

ト是れにて行綱是非なきこなしにて、

行綱　して又手前に何ぞ御用が、

俊寛　お留め申すは別儀にあらず、今般企つこの大望成就いたすと思はるゝや、又は隱謀露顯なし事成

らざると思はるゝや、御身の胸中密々に心得の爲め承はりたい。

　トきつと言ふ、是れにて行綱薄氣味わるき思入にて、

行綱　これは〳〵改めて手前を是れへ引留められ、何事のお尋ねかと思ひの外なる其の仰せ、そりやはや天理に背きましたる叛逆謀叛のお企てなら、成就いたさず、裏切りあつて露顯に及ぶ儀もあらんが、惡逆無道の淸盛を誅罰のため御旗揚げ、殊更もつてそこ許が副總督を勤められ、軍議を令しめさるれば、成就いたさぬことあらんや、手前にそれをお尋ねあるは、俊寛僧都のお詞とも近頃以て覺えませぬ。

俊寛　すりや、あの、いよ〳〵其許には此の大望が成就いたすと、お見込みあつての御同意かな。

行綱　御念に及ばぬ、何ゆゑに疑惑ござつて多田の藏人、このお味方をいたさうや。

俊寛　然らば問はんが何ゆゑに、御腹痛と仰せられ、今血判の際に臨み、かれこれ御猶豫めされしぞ。

行綱　やあ、（トぎつくり思入。）

俊寛　何と、御疑心がござらうがな、（トきつと言ふ、是れにて行綱ぢつと思入、誂への合方になり、）天眼通は得ざれども人の觀相喜怒哀樂一目に悟るこの俊寛、それとは知れど大事の前一人たりともお味方の欲しき時節に一將を失ふことの口惜しく、西光はじめ同意の面々斬つて捨てんと迫りしを

成親卿が左にあらずとお留めありしを幸ひに期を延ばせしは、御身の胸中後にて篤と承はりたく、御腹痛といはるゝをまげて引留め申してござる、尤も惡逆無道といへども武門に榮ゆる淸盛を、不意に迫つて誅戮なすは容易ならざることゆゑに、必定勝利と目的の附きし譯にもござらねば、萬一武運拙くして事成らざれば潔よく討死いたす覺悟の俊寛、所詮成就は覺束なしと御身に疑心ござるなら御腹藏なく仰せられい、さすれば味方へ内分にて誓紙の血判お戾し申し後日の無事を計らはん、如何でござる行綱殿、詞を飾らず此の場にて底意をお明かし下されい。

ト思入にて言ふ、行綱驚きしこなしあつて態と氣を替へ、

行綱　はゝツ驚き入つたる御賢察、實は先刻手前に於ても危ぶむ心がござつたゆゑ血判の儀を猶豫なせしが、成親卿も仁者といひ僧都が賢き御軍慮に又も心を取直し、血判いたす上からは如何で二心のござらうや、然し手前が虛病を構へ此の場を脫れ平家方へ内通にてもいたすかと御疑念がござるなら、これにて一命お斷ち下されし、味方となりて戰場に討死なすも今此の場で、副總督たる僧都殿に討たれて死すも同じ一命、いざ速かにお討ち下されい。

ト態と覺悟の思入よろしく、俊寛もこなしあつて、

俊寛　すりや眞以て、其許には、あの御疑念はござらぬとな。

行綱　北面ながら手前も武士、血判なして違變せんや。

俊寛　むゝ、それにて俊寛安堵いたした。

行綱　然らば手前を、此のまゝに、

俊寛　はて、御心底を見る上は、如何で味方を失ひ申さん。

行綱　左樣ござらば俊寛僧都、

俊寛　多田の藏人行綱殿、

行綱　これにてお暇申すでござらう。

ト唄になり行綱腹痛の思入にて花道へかゝり、よき所まで行き跡を振返りちよつと思入あつて足早に花道へ入る。俊寛これを見送りムヽとこなし、是れより誂への合方になり、二重より下りて舞臺前へ出で花道の方を見て案じるこなしあつて、

俊寛　多田の藏人行綱が不平の樣子悟りしゆゑ、歸宅を留め底意を探り、若し變心の兆しあらば討つて捨てんと思ひしも、實を明し罪を詫び一命まで差出せしは改心なせしと思ひしゆゑ、其の儘歸しやつたるが、此の山莊を出ると其のまゝ腹痛の樣子もなく、虎口を脫れし狐の如く身顫ひなして逃げ行きしは、正しく二心の彼れが胸中、こりやあの儘に行綱を歸しやるではなかりしが、はて

残念な事をいたした。

ト ちつと思入、爰へ二重の上手より成經好みのこしらへにて、續いて康頼出來り、

成經　僧都には、是れに居られしか。

康頼　今日の會議に出座いたす筈なれど、

成經　父卿の命に依り、康頼を引率し、他事にて遲刻いたせし段、

康頼　平に御容赦、

兩人　たまはるべし。（ト是れにて俊寛氣を替へ、）

俊寛　御兩卿にはよくぞ御入來、先づ〳〵あれへお出で下され。

ト 此の内兩人下手に落散りある瓶子のかけを拾ひ、

成經　こりやこれ神酒の瓶子なるが、

康頼　如何いたして損じましたな。

俊寛　瓶子の割れしを平氏になぞらへ、味方の勇氣は繕ひしが、それぞ大望露顯の小口、

成經　なに、大望が、

成經康頼　露顯とは、（ト大きく言ふを冠せて、）

俊寛　あこれ、最早味方が、（ト件の瓶子を取つて捨てるを木の頭。）割れてござる。

ト歎息の思入にて三人引つばりの見得、此の模様山おろし音樂にて、

ひやうし幕

二幕目

西八條館の場
重盛諫言の場

〔役名――小松内府重盛、平相國淸盛入道淨海、右大將宗盛、新大納言成親卿、多田藏人行綱、難波次郎經遠、主馬左衛門盛國、妹尾太郎兼康、藤原師光入道西光、藤太、軍次、景友、盛次、貞國、重能、雜掌、郎黨。重盛御臺千代の方、盛國妻梱、侍女、小姓、其他。〕

（淸盛別館の場）――本舞臺一面の平舞臺上の方に檜皮葺屋根附の門、彫物書割の扉、網代塀にて見切り、正面奧庭泉水築山石燈籠御茶屋、杜若皐月など盛りの書割り、下手同じく網代塀にて見切り舞臺眞中へ一間に九尺位の腰掛け網代の蹴込み、奧の方へ高欄を附け是れへ毛氈を掛け、下の方に同じ腰掛けを並べ、舞臺前流れの浪板に杜若をあしらひ、下手に楓の立木、總て西八條淸盛別館の模樣。爰に貞國、景友袴股立足輕裝にて竹箒水打手桶を持ち立掛り居る、此の見得白囃子にて幕明く、

貞國　いやなに景友どの、先達より清盛公には攝州福原の御所に御逗留ましませしが、鹿ケ谷にて會合せし謀叛の族を糺明なさんと、この西八條のお館へ夜前俄かに君の御歸館、

景友　それと申すも成親卿の謀叛へ與なす多田の藏人、未然を察し黨を漏れ、君へ注進いたせしゆゑ、則ち今日徒黨なる西光法師を搦め捕り、一味の族を悉く白狀させて斬首なさんと、

貞國　頻りに謀計を回らせしが、名に負ふ一味の棟梁たる成親卿は、我が君の正しく嫡男小松の内府重盛公の御臺たる千代の方の御舍兄なれば、緣に繫がる新大納言、

景友　まつた荷擔の其の内にも軍事に敏き俊寛が一味の指揮をいたすといひ、西光法師を始めとして成經、康賴その外に勇士が頗る多人數にて一味合體いたすよし、

貞國　さすれば今日の御詮議は、

景友　容易ならざる、

兩人　事件でござる。（ト時計の音合方調べになり、重能上手門の内より出來り、）

重能　御兩所には、今日ツた久々にて我君が此のお館へお入りゆゑ、お詰番の今日のお役目、御苦勞至極に存じまする。

貞國　これは〳〵重能どのにも、今日のお役目近頃御苦勞千萬、

景友　最早お入りの時刻なれば、經遠どのへ申し上げん。
重能　その儀は御兩所、お頼み申す。
兩人　委細承知いたしてござる。（ト調べにて四人下手へ入る、花道揚幕の内にて、）
呼ビ　我が君の御入り、
重能　最早我が君御入りなるか。（ト門の内にて、）
經遠　御入りとあらば難波の次郎、お出迎ひいたすであらう。
　　　ト管絃になり、門の内より經遠素袍大小にて出來る。
重能　これは〱難波氏には、御苦勞千萬、
經遠　我が君この程御保養に攝州福原のお下館に御逗留あられしところ、政務によつて俄の御歸館、承はれば重盛公の御簾中たる千代の方様御同道にて御入りのよし。
重能　既に先刻お表よりお先觸れがありしゆゑ、拙者もこれへお出迎ひに罷り出ましてござります。
經遠　貴殿もお役目御苦勞でござる。
重能　左様ござらば難波氏、
經遠　いざ、お出迎ひ、

兩人 仕らん。（ト又花道の揚幕にて、）

呼ビ 御入り。

ト音樂の入りし出の唄になり、花道より清盛白綾の着附差貫金紋紗の道服小さ刀のこしらへ、誂への庭下駄、これへ半素袍の雜掌、朱の端折傘をさし掛け、小姓二人、一人は清盛の太刀を持ち一人は脇息を持ち、次へ千代の方花櫛下げ髮、續いて○△□◎何れも腰元裝にて香爐臺、鼻紙臺、褥などを持ち、千人禿四人清盛の刀掛け煙草盆褥などを持ち出來り、花道へ留り、

清盛 一天の安危言下に依り、萬機の治亂も淨海が掌の内にありて、攝家華族も門前に牛車を列ぬる平氏の功、

千代 草木心なしとはいへど、父上さまのお歸りを待ち設けたる庭もせに、今を盛りの菖蒲草、

栅 由縁の色の紫に躑躅皐月の朱を奪ひ、一際目立つ花の色、

○ 春は過ぎてもまだ空は、

△ 殘る霞のうらゝかに、

□ 笑ひし山も青々と、

◎ 秋を待たるゝ若紅葉、

○　又築山より泉水へ、
△　落ち來る瀧の水清く、
□　流れに群れる鯉鮒や、
◎　龜のこどもの私共まで、
四人　今日のお供は、
禿四人　身の冥加、
經遠　我が君御入りに計らずも、小松公の御簾中千代の方樣俄の御入り、則ち難波次郎經遠、
重能　民部大郎重能、これまでお出迎ひ、
兩人　仕ツてござりまする。（ト辭儀をする。）
淸盛　難波、民部、出迎ひ大儀。
兩人　はツ、
經遠　何はしかれ、我が君には、是れにしつらふ、
兩人　設けのお席へ。
淸盛　然らば、そちも。

千代　お供いたすでござりまする。

柵　左様なれば我が君さま。

清盛　皆もとも〴〵、

柵　先づお越し、

皆々　遊ばしませう。

ト右の鳴物にて皆々舞臺へ來り、腰元床几へ褥を敷く、清盛千代の方腰を掛け、上下　毛氈を敷きこれへ皆々よろしく居並び、傘持は下手へ入る。

經遠　我が君には福原より、昨夜俄に御歸館ありしが、

重能　御機嫌よろしき體を拜し、恐悅至極に、

兩人　存じ奉つりまする。

清盛　追々年は重ぬれど、以前に替らず健かなるぞ。（ト誂への合方になり清盛思入あつて、）それはともあれ、小松より千代が入來は思ひも寄らず、そちが心で參りしか、但しは悴重盛が、申し附にて參りしか。

千代　全く今日參りましたは夫の指圖ではござりませぬが、常々から重盛には父上さまへ孝行ゆゑ、過

ぎし頃より福原へ御逗留あらせられまするを、都と違ひ福原は海邊に近く波風あらく、御身の障りに成りもやせんと、小松の館で父上樣の御身の上を日毎に御案じ、そこへ昨夜のお歸りは若し御不例ではあるまいかと仰せありしを承はり、私とても心ならず御案じ申し上げますゆゑ、

柵　重盛公へはお忍びにて、祇園の社へ御參詣と申し上げてこつそりと、此の柵がお供を申し、お館へゐらせられましたは、

千代　父上さまの御機嫌を、如何と御案じ申しますゆゑ、先觸れもなう押し附けに、

兩人　上りましてござりまする。

清盛　忰ながら重盛は、日頃經書に眼をさらし、些と固過ぎる仁者ゆゑ、孝行もまた格別、それに連添ふ程あつて案じてくれるそちが心底、清盛嬉しく思ふぞよ。

千代　ても有難いそのお詞、此の身ばかりか柵まで、

柵　お供に參りし甲斐あつて、お悦ばしう、

兩人　存じまする。

清盛　案じてくれるは忝ないが、最早耳順を過ぐれどもいつかなめげぬ此の清盛、今二三十年も生き延びて榮燿榮華を盡さねば、これまで千辛萬苦せしその入埋が附かぬわえ、はゝゝゝ。（ト笑ふ。）

重能　日頃烈しきお心に、御壯健は實以て、我々共の及ばぬほど、
經遠　勇氣滿々とましませばこそ、福原御所へお抱へのまだうら若き白拍子を、お寐間の花の御寵愛、
腰元衆にもお手が附くとか、辨天さまでも信心さつしやい。
○　これはしたり難波さま、あなたは何をおつしやります。
△　御常談も時によります、四邊を御覽、
四人　遊ばしませいなあ。
㭭　腰元衆のいはるゝ通り、是れにお出でなされまする千代の方樣と淸盛樣は、嫁舅君のお間柄、そこらの御遠慮なさらずに、差合ひのある戯口は、以後はお嗜みなされませ。
經遠　是れは思はぬ不調法、お連合の盛國殿へは必ず共に御內分、御沙汰なしにお賴み申す。
㭭　決して申しはいたしませぬ。
經遠　千代の方樣にも粗忽の一言、眞平御免下さりませ。（ト辭儀をする。）
千代　その挨拶には及ばぬわいの。
禿一　やあ、鬼にも負けぬ難波さまが、
禿二　女子に負けたは、

四人 をかしいわいの。(ト手を打つて笑ふ。)

清盛 えゝ、靜かにせぬか騷がしい。

千代 (思入あつて、)いや申し父上樣、騷がしいと申しますれば最前これへ參る道々、着込腹卷いたしました、家臣の者を見掛けましたが、何事でござりませうなあ。

清盛 むゝ、着込腹卷いたせしは、おゝそれ、此頃山法師共が例の御輿を振立て院の御所へ强訴せしゆゑ、其の亂暴を防がん爲め、非常の手當に固めの武士、何も案じるやうなことでもないわい。

栅 左樣なれば非常を守る固めの衆でござりますか、それ承はつて私も安堵いたしてござります。

千代 とは言へ、市中も物騷がしく、殊には祇園の御社へ參詣なすと申せし上は、事ないうちに少しも早う、お暇いたしませうわいなあ。

栅 それが宜しうござりまする。

清盛 いや此の清盛が無事を計らんと、心に掛けて參りし嫁女、この儘歸すは餘り本意なし、未だ時刻も早ければ休息いたして歸るがよい。

千代 有難う存じまする。

清盛　こりや重能、膳番の者へ申し附け、款待の用意いたせ。
重能　畏まつてござります。
清盛　又女子共は何なりと、これが心に叶ふやう、申し合せて慰めよ。
○　畏まりましてはござりまするが、白拍子と事替り、
△　舞今様の一指も、心得ませぬ不器用もの、
重能　その不束が却つて一興、君の仰せ辭退いたさず、
○　左様なれば不束ながら、
△　笛や鼓の間拍子の、
□　揃はぬ勝ちの調べにて、
◎　お慰め、
四人　申し上げませうわいなあ。
梛　少も早う御歸館と、存じますれど斯程まで、厚い仰せを蒙むる上は、
千代　仰せに任せ霎時のうち、
清盛　ゆるりと休息いたすがよい。

千代　左樣なれば父上樣、

清盛　後に逢ふぞよ。

經遠　いざ、御臺樣には奥殿へ、

千代　皆も一緒に、

柵　先づお入り、

皆々　あられませう。

ト長き唄になり、千代の方先きに柵腰元四人子役四人後より重能附いて上手門の内へ入る、跡清盛經遠殘り、四邊へ思入あつて、

經遠　幸ひ他聞の憚りなければ君へ伺ひ奉つるは、昨夜多田の藏人が、一大事を我が君へ直々申し上げ度しと當館へ參りし所、福原御所にましますと承はつて馬に鞭打ち、驀地に參りましたが、如何なる大事を言上なせしか、委しき事を恐れながら、仰せ聞けられ下さりませう。

清盛　汝には未だその事を具に申し聞けざりしが、昨日行綱福原へ早馬にて馳せ參り、竊に我へ訴へしは、此の度院の御所に於て卿家武家の隔てなく有志の輩集めらるゝを御存じあるやと申すゆゑ、むゝ、それこそ定めて先達て亂爭せし山法師等を、討攻めん爲めの謀議ならんと申せしに、いやい

や左樣の事にあらず、平氏を討たんと徒黨を結ぶと彼れが訴へ。

經遠　謀叛の企てあることは、先刻仄かに承はりしが、して又謀叛の棟梁は。

淸盛　院の御所の執事職、新大納言成親なるわ。

經遠　すりや、只今奧においでなされまする、重盛公の御簾中たる、

淸盛　千代の方は直の妹、又成親が娘をば重盛の悴惟盛の妻に娶りし上からは、我が平氏とは重なる緣脫れぬ中でありながら、法勝寺の執行俊寛僧都が鹿ヶ谷の山莊へ酒宴と號して會合なし、平氏を滅ぼす彼等が密談、多田行綱は源氏の武士ゆゑ其の大將に賴むといふを、體よく其の場を言ひなして我れへ具に注進なしたり、まつた萬事の指揮は成親と院の御所にて威を揮ふ西光法師と聞きたるゆゑ、彼れを召捕り詮議なさんと、瀨尾へ言附け置きたれば、押附け召捕り參るであらう。

經遠　いや、左程の大事を我が君の御心一つに納められ、自若とましまます御思慮の程、經遠恐れ入つてござる。（トばた／＼になり、下手より素袍大小の侍出來り）

侍　はツ、申し上げまする。

經遠　何事なるぞ。

侍　嚴命蒙る瀨尾の太郎、西光法師を生捕りしと、先走りの注進が只今參つてござりまする。

清盛　むゝ、如何と思ひし西光を、召捕りしは重疊々々。

經遠　引連れ參るに程もあるまじ、先づ我が君にはお表へ。

清盛　引連れ來らば清盛が、直き〳〵詮議いたしてくれう。

經遠　然らば我が君、

清盛　經遠參れ。

ト管絃になり清盛先きに經遠上手門の内へ入り、注進の侍は下手へ入る、少しおいて門の内より以前の柵出來り、四邊へ思入あつて、

柵　最前是れへ參りし折、鎧腹卷籠手臑當凛々しき出立をなせし者が、此處や彼處に寄り集ひ、心得難く思ひしが、竊に樣子を立聞けば鹿ケ谷の山莊へ平家を討たんと會合せし謀叛の輩を討取る手配り、ても怖しいことぢやなあ、（ト四邊へこなしあつて、）その企ての棟梁は、御臺樣の御兄君たる成親さまとあるからは、こりや斯うしては居られぬところ、お庭傳ひにお奧へ行き、御臺さまへ此の由をお知らせ申さん、さうぢや〳〵。（ト上手へ行きに掛る、爰へ以前の重能出で、）

重能　柵どの、暫くお待ちなされい。

柵　あなたは民部重能さま、してわたくしへ御用とは。

重能　さあ其の御用事は、（ト四邊へ思入あつて、）斯樣でござる。（ト柵へ寄る、）

柵　えゝ、夫ある身を、（ト振り拂つて突きのけるを道具替りの知らせ、）慮外者めが。

トきつと思入、重能起たつて怖しい力だと呆れるこなし、此の模樣早舞にて道具廻る。

（評定所の場）――本舞臺四間通し高二重、本緣附欄間釘隱し附、正面襖欄間共金地蝶の紋散し眞中に白洲階子、上下の褄塗骨障子、上の方白木の冠木門襷の入りし扉明け立てあり、この脇網代塀下の方後へ下げて同じく網代塀、柴垣、總て西八條評定所の體。二重眞中に淸盛錦の直綴、指貫小さ刀にて褥の上に住ひ、後に茶筅袴裝の小姓二人、淸盛の太刀を持ちて控へ、平舞臺上手に經遠半素袍附太刀にて床几に掛り、下手に景友、貞國、半素袍大小にて控へ居る、此の見得時の太鼓にて道具留る。（ト床の淨瑠璃になり、）

〽源家亡びて日に增しに威勢盛んの平家方、我意に募りし淸盛が叛逆詮議の西八條、廣緣近く座を占めて、

淸盛　（四邊へ思入あつて、）先刻瀨尾の太郎より、叛逆人西光法師召捕つたりと注進ありしが、未だこれへ召連れざるか。

景友　只今瀨尾が從者の兵士、これへ引連れ參りしと、

貞國　注進なしてござりまする。

清盛　すりや兼康には西光を、これへ引連れ參りしとか。

經遠　君の仰せを蒙りて、某瀨尾と諸共に彼れが詮議をなしませうや、但し是れへ引き出しませうや、此の儀は如何計らひませう。

清盛　平家を討たんと一味を語らひ、謀叛を企つ憎き西光、予が面前で糺明なさん、この庭先きへ召連れよと、瀨尾の太郎へ申し次ぎやれ。

景友　はツ。（ト揚幕へ向ひ、）それに控へし瀨尾どの、君の御諚に候へば、囚人西光引連れめされ。

兼康　畏まつてござりまする。

〽はつと答へて引立つる西光法師は高手小手、見るもいぶせき荒繩の身の縛めも屈せずに、清盛目掛け進み寄る。

ト是れへ時の太鼓を冠せ、花道より前幕の西光、緞子無地緋着附錦の前帶金剛草履、繩に掛り、軍兵二人繩を取り、跡より兼康着込鎧下膝甲、籠手、臑當、馬手差、附太刀にて鐵扇を持ち、續いて軍兵二人槍を構へて附添ひ出來り、西光花道にて清盛を見て、きつと思入あつて舞臺へ來る、

それ、引き据ゑい。

軍兵　下に居らう。

〽繩を手繰つて引き据ゆれば瀨尾は御前へ手をつかへ、
ト軍兵引きずゐろ、西光清盛を見返り思入あつて下に居る、兼康手をつかへ、

兼康　今朝未明捕手の者に下知を傳へて西光が、宿所の四方を取卷けば、密謀露顯を悟りしや何れへ逃げしか居らざるゆゑ、隱れ所を探索なし搦め捕らんと込入りしに、組子を投げ退け斬りかけて松浦太郎へ深手を負はせ、必死を極めし働きに、手に餘りしを某が手段を以て捕縛なし、召連れましてござります。

〽手柄顏して訴ふれば、

淸盛　今に始めぬ汝が手柄、よくも捕縛なしたるぞ。

經遠　かねて噂に聞き及ぶ劍道勝れし西光入道、取り逃しなば平家の耻辱、

景友　まことに以て貴殿のお手柄、

貞國　お羨ましい、

兩人　ことでござる。

兼康　西光如きを捕縛せしとて、左樣にお褒め下すつては、近頃恐縮仕つる。

清盛　いや〳〵憎き西光を、即刻搦め捕りたるは、汝が手柄。

〽言ひつゝ清盛縁先きへ立出でたまひ、きつと睨めつけ、

ト跳への合方になり清盛前へ出て、

ヤオレ西光、其の方は薙髪なし法師といはるゝ身でありながら、日頃朝恩に誇るゆゑ、おのれが類族加賀守師高、師經が亂暴を咎めず、却つて彼等が腰を押し何過りなき天台座主明雲僧正を讒奏し終に流罪となし奉つり、それのみならず此の程より鹿ケ谷の山荘へ會合なして味方を語らひ我が平氏を亡ぼさんず謀叛を企つ憎き奴、成親始め俊寛等が何やう智謀を廻らすとも、時めく平氏に及ばんや、今眼前法體にて縄目の恥辱を受くるも、これ山王の冥罰なるぞ、返す〴〵も下郎の身で、分に過ぎたる日頃の所行、言はうやうなき大罪人めが。

〽兩眼見開き清盛が、大音聲にて罵れど、元より不敵の西光入道事とも恐れず睨め返し、

ト清盛きつと言ふ、西光せゝら笑ひ清盛を見返りて、

西光　鹿ケ谷の山荘へ會合なして平氏を討つ企てなせしなんぞとは、元より覺えあらざれど疑ひ受けしは我が不運、縄目の恥辱を受くるのも是非なき事とあきらめれど、此の西光を下郎と罵り分に過ぎしと言はるゝは、この儘に聞き捨て難し、

清盛　おゝ、まつたくもつて其の方が分に過ぎたる所行ゆゑ、分に過ぎると申せしがそれを聞き捨て難しとは、

經遠　近頃以てかたはら痛し、

兼康　仔細があらば、

皆々　疾く〳〵いやれ。

ト疾く〳〵言やれと詰め寄れば、西光莞爾と打ち笑ひ、（ト合方になり西光思入あつて、）

西光　望みとあらば申し聞かさん、凡そ天下に侍たる者、忠勤によつて立身なし、檢非違使に至らんこと此の西光ばかりでなく、誰が身にもあることなり、斯く宣ふ和入道は王孫なりと名乗りたまへど、昔の事は見ねば知らず、近き御身の父忠盛は殿上人の交りを忌み嫌はれし人ぞかし、その嫡子にて繼母に憎まれ世に過ぎ難く中御門藤の中納言家成卿が播磨守にておはせし時、しかも受領の鞭をとり、朝夕褐の直垂に繩緒の足駄で通はれしを、京童は是れを見て高平太と笑ひしを深く恥らひ、扇にて顔を隱して骨の間より鼻を出して通はれしを、又童が先きをきり高平太どのが扇にて鼻を挾みて通るぞよと喚き囃して、後々には、鼻平太といはれしをよもや忘れはいたされまい、然るに其の後御身もまた、忠盛殿が近江の國船木の奥にて海賊二十人餘搦め捕り、其の

賞に依り平太殿が四位の兵衛亮になられし時さへ早き出世と申せしに、今太政大臣と昇進せしは分に過ぎしといはざるか、おのが體に心附ず此の西光が立身せしを過分なりと咎むるは、以前を忘れし清盛殿、どちらが過分か此の場にて過分競べをいたさうか、さあ返答あらば承はらん、何とでござる入道どの。

〽何と〳〵と聲振立て物狂しく罵つたり、聞く清盛は怒りにたへかね、

ト此の内西光思入にてきつと言ふ、清盛無念の思入あつて、

清盛　譬にもいふ引かれ者の小唄と、聞き流せばよきことゝ心得、我に向つて其の惡言返す〴〵も憎き奴。

〽緣の上にて地蹈鞴踏み、清盛庭へ飛び下りて、

ト清盛つか〳〵と平舞臺へ下り、西光を引き附け、

何うして腹を癒てくれん。

〽怒りの餘り西光が肩骨背骨踏躪れば、（ト清盛西光を蹴る、西光は猶清盛に詰寄り）

西光　理を非に曲げるこなたでも、過分競べの返答は、よもや言譯ござるまい。

經遠　やあ又しても〳〵、空飛鳥も羽を縮め地上へ落つる勢ひの、君へ對して無禮の過言、

景友　身の程知らぬ西光法師、

貞國　いで我々が、斯うしてくれん。

〽鞭おッ取つて左右より續け打ちに打ちければ、西光はッたと見返りて、

ト鞭を取り左右より續け打ちに打つ、西光よろしく思入あつて、

西光　やあ、過分の主人に仕ふるからは、汝等も過分の知行盜人、取るに足らざるうじ蟲めら。

景友　えゝ、うじ蟲とは奇怪至極。

貞國　うぬ、どうするか覺えてをれ。

〽又も手酷く打つ杖も、恐れぬ剛氣の西光法師、

西光　主が主なら家來まで道を知らざる無道な奴等、小松殿があるゆゑに今日まで平家は榮えしが、斯かる非道の行ひなさば、遠からずして淸盛が滅亡なさんは目前、何とて永き榮えがあらうぞ。

〽いふに淸盛怺へ兼ね、又立ち掛つて西光が面を足下に踏躪り、

ト淸盛西光を蹴倒し、足下に掛けて踏みにじり腹の立つ思入にて、

淸盛　並居る臣下の面前にて、最前より我れに向ひ種々雜多な雜言過言、よくも恥辱を取らしたな、どうして腹を癒てくれうぞ。

西光　おゝ、どうなりとも勝手にせい、邪非道な責に遭ひ命を捨つる此の西光、まだ〳〵此の上汝の悪行、息のある内言はずにおかうか。

清盛　えゝ、返す〴〵も憎き奴、その頤を引き裂きくれん。〽憎き坊主と引起し、頤裂かんと立ち掛るを、瀬尾太郎押止め、

ト清盛西光を引起し、口へ手を掛け引き裂かんとするを兼康これを押し止め、

兼康　あいや我が君お待ちなされい、此奴が頤引裂かば謀叛の根ざしを吐かすべき詮議の蔓を失ひますれば、此の儀は御猶豫下さりませ。

清盛　むゝ、何さま汝が申す如く謀叛の根ざしを吐かす西光、頤裂くは許してくれん。

ト清盛西光を突放し、睨みつける。

兼康　とはいへしぶとき西光坊、一筋縄では吐きますまい、これより庭へ連行きて、某手酷き拷問なし謀叛の同類白狀させん。

清盛　先刻謀叛の棟梁たる新大納言成親へ、何氣なき體にもてなし、迎ひの使者を立てたれば、程なくこれへ參るは必定、それまで彼處の庭へ連行き、西光を拷問なし、謀叛の實否を吐かしめよ。

兼康　畏まつてござりまする。

西光　何やう汝等が拷問なすとも、所詮命のないからは火水の責めは愚なこと、切身に鹽の拷問でも言はじと思へばいつかな言はぬぞ。
兼康　言はぬと言つても其の儘に、瀨尾の太郎がいたし置かうか。
西光　見事われが白狀さすか。
兼康　言ふにや及ぶ。
西光　はて覺束ない、（トせゝら笑ふ。）
清盛　えゝ、憎き西光引つ立てい。
軍兵　はゝ。
清盛　どれ、火水の責めに苦しむを、見物なして腹を癒ようか。
へ立蹴にはつたと蹴倒せば、無念と見返る西光法師、
ト清盛　西　光を蹴倒す、西光きつと清盛を見詰める。
西光　むゝ、馬鹿な奴めが。（ト立掛るを、緘取り引き附け。）
軍兵　きり〳〵歩め。

〽引立てられて行く顔を、心地好げにぞ淨海は、見返り奥へ入りにける。

ト これへ時の太鼓を冠せ、西光は繩取りに引立てられ、兼康附いて上手へ入る、清盛は思入あつて皆皆附添ひ奥へ入る。

〽折柄小陰に忍び居て、終始を聞きし柵が伴ひ申す千代の方、胸に時打つ思ひにて、

ト 此の内下手網代塀の蔭より、以前の千代の方 柵 出來り、

柵 御臺さま。

千代 これ、

〽四邊を憚り見返りて、(ト 誂の合方になり)

柵 今清盛さまの仰せをば、あなたはお聞き遊ばしましたか。

千代 おゝ西光法師を召捕りて、平家を討たんと企てし謀叛の詮議をなされる内、父君樣のお詞にわらはが兄上成親樣を何げなく、爰へ招きて謀叛の詮議をなさるとやら、よもやと思へど兄上が西光法師と諸共に御荷擔ありしことならば、あらしこ共の手に掛り憂目にお逢ひなされませう、こりや何うしたらよからうぞいの。

柵 その御案じは御尤、假令お覺えないにもせよ、お疑ひの掛りしからは、手酷い御詮議なされませ

う、よしや其の折清盛さまへあなたがお詫びを遊ばしても所詮お聞き入れはござりますまい、少しも早く重盛さまのお耳に入れなば其の儘に、お置き遊ばすことではない、直にこれへおいで遊ばし、お止めなさるに違ひはない、少くも早うお館へお歸り遊ばしませいなあ。

千代　館へ歸つて我が夫へ此の由申し上げたけれど、手段に乘つて兄上が、今にも爰へおいで遊ばし、西光法師同樣に、縄目の恥を受けたまふか、測り知られぬ今日の仕儀、

〽若しやと流石女氣に案じ過してとつおいつ、跡へ心の引かるゝもお道理さまと主從が胸に轟くかしこの物音、西光法師を拷問に掛けるぶり〳〵車木の軋る間に〳〵笞の響き。

ト此の內兩人四邊を憚り思案に暮れて愁ひの思入、よき程に上手門の內にて車の軋る音するゆゑ、兩人びつくりこなし、是れより粒々と竹べらの音床の合方をあしらひ、兩人拔足にて門の際へ行き樣子を窺ひ、扉のすきより內を覗くことよろしく。

〽打たるゝ苦痛に叫ぶ聲、（ト門の內にて西光苦しむ聲にて、）

西光　えゝ、分に過ぎたる清盛の下知を受けたる無道人め、責めなば責めよ西光は、いつかな白狀いたさぬぞ。

兼康　白狀せぬとて其の儘に瀨尾の太郎が置くべきか、火水の拷問受けぬうち、きり〳〵白狀いたして

しまへ。

皆々　さあ、白狀いたせ〳〵。

〽八大地獄の呵責の體、一目見るより胸迫り氣も魂も身に添はず、

ト此の內兩人門の內を覗きよろしくこなしあつて、

千代　これ柵、西光どのが苦痛にたへかね、若し白狀をする時は兄上のお身の上、こりや斯うしては居られぬわいの。

柵　聞けば聞くほど恐しい、あの拷問に遭ふときは、假令氣強き西光さまでも何とてお怺へなされませう、少しも早う內府さまへ、

千代　申し上げなば西光法師、又兄上にも事なきやう、お計らひを遊ばすとも、我が夫この儘にはお聞き捨には遊ばしますまい。

柵　とは言へ是れから餘程の道、女子の足ではついそれと、

千代　行かれぬ所もみづからが、兄上さまの御難儀をお救ひ申す女の一心、

柵　さすがは公の御臺さま、この柵も一生懸命、

千代　わらはと共に小松の館へ、

柵　少しも早う御臺さま、

千代　柵用意をしやいなう。

柵　心得ました。

〽甲斐々々しくも主從が身ごしらへする其の折柄、又もかしこに呵責の音、

ト此の內兩人二重より下り、下手へ行きかけ思入、

大勢　白狀いたせ〳〵。

千代　でも情ない、あの拷問、

柵　如何に主命なればとて、

千代　思へば無慈悲な、（ト上手へ思入あるを、）

柵　はてまあお越し、（ト隔てる木の頭、）遊ばしませ。

〽心殘して出でゝ行く、

ト三重にて幕になり、道具出來次第に引返す。

（重盛諫言の場）――本舞臺四間通し高二重本緣附、正面金鍍金の金物附の高欄、正面金襖兩褄

塗骨緞子張り障子、上下後へ下げて筋塀の張物にて見切り、日覆より紅葉の釣枝、總て西八條御殿の體。管絃にて幕明く、と花道の揚幕にて、

呼ビ　成親卿御入り。

ト管絃にて奥より重能、盛次素袍大小にて出來り、

重能　先刻使者を立てられしが、はや成親卿の御入りの知せ、先づ一應は事なき體にて御出迎ひを申し上げた上、

盛次　鹿ヶ谷へ會合なし謀叛の企てあつたることは、清盛公が直々に御糺明あるとのこと。

重能　何はともあれ出迎ひ、

兩人　申さん。（ト又花道の揚幕にて、）

呼ビ　御入り。

へおとなふ聲と諸共に、沓音高く成親卿衣冠正しく悠然と、廣庭傳ひに入りたまひ、

ト是れへ下り葉を冠せ、花道より成親卿冠裝束附太刀沓にて出來る、跡より雜掌二人侍烏帽子半素袍大小にて、仕丁一人沓臺を持ちて附き添ひ出來り、花道へ留り舞臺を見て、

成親　今日測らずも入道殿より、火急の招きに何事なるか樣子知れねば氣遣はしく、成親是れへ參つた

り。

重能　火急の使者に取敢ず、成親卿には早速これへ、御入來ありし段、

盛次　上人淨海入道にも、大慶至極にござりませう。

成親　重能盛次、出迎ひ大儀。

重能　成親卿には、

兩人　先づ〳〵是れへ、

成親　設けの席へ通るであらう。

〽やがて御身に禍の掛ることをも知りたまはず、設けの席へ坐したまふ。

ト矢張り下り葉にて成親平舞臺へ來り、二重へ上り眞中より少し下寄りに住ふ、仕丁は沓を臺に載せて持ち、辭儀をなし下手へ入る、重能盛次平舞臺下手へ控へる。

〽折から出來る難波次郎、物の具固め嚴しき姿を不審と打ち見遣り、

ト此の內以前の經遠先きに景友貞國何れも陣立のこしらへにて出來り、上手へ床几に掛る、成親これを見て、

成親　早速に問ふべきは、今この館へ參る途中、三四町の辻々へよろひし武者が詰めしといひ、此の門

內にも嚴しき士卒が固め居る上に、難波園原兩人が甲冑着けしは心得ず、察する所此の程より都の內を騷がせし山法師等を討たんずらん、院の御所にて軍議ありしが其の儘に打ち過ぎしゆゑ、入道殿には彼等を討たんと、かゝる用意をめされしか。

〽言はせも果てず兩人が、

經遠　いや我々六具に身を固むるは、山法師等を討つにあらず、さいふ貴卿に御不審あつて、機變に備ふる此の出立ち。

成親　や。

景友　主人清盛直々に、

貞國　貴卿を糺明めさるゝと、

兩人　承はつてござります。

成親　これは思ひも寄らぬこと、何ゆゑあつて淨海殿には、此の成親を糺明せんとや。

〽折しも一間に聲あつて、（ト此の時奥にて、）

清盛　その儀は淨海申し聞かさう。

成親　何と。

〽襖左右に押開き、搖ぎ出でたる清盛入道、四邊睨んで座に附けば、ト奥より以前の清盛好みの鎧、籠手、臑當、馬手差、陣立のこしらへ、上へ法衣を着し出來り、跡より陣立の小姓二人附太刀を持ち附添ひ出來り、清盛床几に掛る、成親思入あつて、

清盛　して又我等に、御不審とは、

成親　不審といふは外ならず、御身は平治の合戰に死に至るべき所なりしを、内府重盛の請ひに任せ其の儘許し置き、今官位といひ所領といひ不足なき身と榮ふるは、是れ皆平家の恩澤ならずや、其の恩義を忘却なし、何恨みあつて徒黨を語らひ、謀叛の企ていたされしぞ。

清盛　入道殿が直々に此の成親へお尋ねとは、如何なる事と存ぜしに、徒黨を語らひ謀叛とは事珍らしきお尋ねごと、何を證據にのたまふぞ。

成親　ヤアしら〴〵しき其の詞、既に汝は院の御所の執事たるゆゑ、法皇の御寵愛を笠に着て、謂れなきに徒黨を語らひ、此の程洛東鹿ケ谷の山莊へ會合なし、御身を始め俊寛等が我が平家を滅すべき軍の評定いたせしこと、注進あつて慥に聞く。

〽言はれてはつと的中せしが、（ト成親ぎつくり思入あつて、）

清盛　如何にも鹿ケ谷の山莊へ親友の者打ち寄りて酒宴を設けし事ありしが、平家を滅す軍議などゝは

そは跡方もなきことなり、察する所遺恨あるもの我れを罪に落さんと、讒言なせしに疑ひなし、
この身に嘗て覺えござらぬ。

清盛　え丶慥な證據あるゆゑに、今日御身を糺明いたすが、それでも知らぬと言はるゝか。

成親　元より存ぜぬことなれば知らぬといふより外になし。

清盛　むゝ、知らぬとあらば證據を見せん、やあ／＼行綱はや參れ。

行綱　はあゝ、

〽はつと答へて此方より立出る多田の藏人行綱、南無三露顯なしたりと、成親吐息をつくば
かり、

ト下手より行綱陣立のこしらへにて出る、成親見てぎつくり思入ある、清盛こなしあつて、

清盛　其の日山莊へ會合なし、遁れ難なく其の場にて一味には加はつたれど、及ばぬ事と知るがゆゑ、
我れへ注進なしたる行綱。

行綱　當時旭の登るが如き勢ひ盛んの平家方、それを討んなんどゝは、龍車に向ふ蟷螂の及ばぬ企て知
つたるゆゑ、貴卿を始め俊寛西光會合なせし一伍一什、逐一注進なしたれば、最早遁れぬ成
親卿、包まず明しておしまひなされい。

成親　こは行綱には何と申すぞ、鹿ヶ谷の山莊は都の内にて優れたる僧坊ゆゑに親友が、保養の爲に酒宴の集ひ、それを軍議をなせしなどゝは、我に何等の遺恨あつて、左樣な僞り申せしぞ。

行綱　いや僞りとは何が僞り、此の行綱は源氏ゆゑ、大將となり恨みある平氏を討てと言はれたを、よもや忘れはなさるまい。

景友　一旦一味合體せし、多田の藏人行綱どのが、變心なして清盛公へ注進ありし上からは、

貞國　何やう陳じめさるとも、謀叛の企せぬといふ、身の言譯は立ちますまい。

成親　よしなき事を行綱が申せしゆゑに思はざる、身に疑ひを受くれども、此の成親が妹は小松殿の妻なれば因みも深き兄妹中、何ゆゑに平家を討たん企てなさうや、これにて多田の行綱が僞りなるを淨海殿、よう御賢慮下されい。

〽詞を盡して陳ずれば、入道くわつと眼をいからし、

清盛　ヤアまざ〳〵しき陳じ立て、悴重盛に緣あるゆゑ詞を和らげ尋ぬる內、其の身の罪を後悔なし我れへ詫びなば穩便に計らふべしと思ひしに、かゝる慥な證據あつても知らぬと言ひ張る上からは拷問なして白狀さす。こりや者共、叛逆人の長たる成親、此の場に於て繩かけい。

重能　はツ、君の御諚に候へど、成親公は大納言の官位にまします御方なれば、

盛次　武士の身の我々が例知らざる縄目の拷問、後難の程も計りがたし、此の儀は御容赦、

兩人　下さりませう。

清盛　やあ、太政大臣の清盛が申し附くるに何憚り、こりや經遠、彼れに縄かけ拷問いたせ。

〽烈しき上意に經遠も、暫し默して居たりしが、遙こなたに聲あつて、

ト　この時上手の門の内にて、

宗盛　やあ／＼者共氣遣ひいたすな、謀叛の長たる成親卿、宗盛直に捕縛なさん。

成親　何と、

〽見やるあなたの門内より右大將平の宗盛、今日の事件に甲冑の一際目立つ籠手脛當輝く父の七光り流石に將と知られけり、淨海見るに打ち笑みて、

ト宗盛陣立の裝にて出來り床几へ掛る、清盛 思ひ入あつて、

清盛　おゝ待ち兼ねし悴宗盛、よき所へ參りしぞ。して其の方には法住寺の御所へ奏達いたせしか。

宗盛　はツ、父上の仰せの如く今般野心ある者共が、我が平氏を亡さんと鹿ヶ谷へ會合なし、軍議を計る棟梁は院の御所の執政たる新大納言成親、まつた西光、俊寛を始めとして、其の外一味徒黨の者多人數のよし承はる、一々彼等を召捕つて、詮議を遂げし上、委細奏聞し奉つると、檢非

違使阿部の資成を以て、奏達いたしてござりまする。（ト是れを聞き成親思入あつて、）

成親　すりや此の事を右大將より、御所へ奏聞あつたるとか。

〽えゝ、しなしたり一大事と、我れを忘れて立上るを、（ト成親思はず立上るを、）

景友　身動きめさるな、

兩人　成親卿、お下にござれ。（ト引き据ゑる、）

清盛　して奏聞を遂げし後、御受けはなかりしか。

宗盛　資成が申すには、奏達の趣き聞しめされ、暫し御應へもあらざりしが、兎に角よきに計ふべしと仰せられしと承はる。

清盛　むゝ、左もあらん／＼、平氏を討たん會合は、全く君の御心より出でし事に疑ひなし、此上は猶豫いたさず、重能盛次鎧うてまゐれ。

重能　すりや、我々も甲冑を、

清盛　自然の用意、早くいたせ。

重能
盛次　はツ、畏まつてござりまする。

〽仰せに其の儘立つて行く、（ト重能盛次下手へ入る。）

清盛　いざ、此の上は、宗盛早く。

宗盛　はッ。（ト宗盛立ち掛り、）執奏濟めば科ある其許、右大將たる宗盛が直々捕縛仕らん、お覺悟めされ成親卿。

〽取繩持つて立ち掛るを、成親きつと押し留め、

ト宗盛立ち掛り、成親の裝束を脱せんとするを留めて、

成親　こは無體なり右大將、入道殿へも申す如く僕謀叛の企てありとは、跡方もなき讒者の舌頭、元より成親平家とは因みを結びし仲といひ、聊か仇も恨みもなし、さら／＼討たんなぞといふ志しのあらざるぞ。

行綱　まだ／＼知らぬと言はるゝか、其の場に列なる行綱が注進なせし上からは、所詮脱れぬ成親卿、陳じ立てをめされずと、早く白狀いたしめされ。

成親　やあ人でなしの多田の藏人、いらぬ口出し控へ居らう。

宗盛　いや御身が平家を恨むことは、疾くより聞いて居ることだ。

成親　なに、麿が平家を恨むとは。

宗盛　恨むは御身大將の職をかね／＼望みし所、重盛左近衞の大將より內大臣の長官に進み、某右近

衞の大將に轉じたるが羨ましく、狹き心に妬みを生じ、法皇へ勸め奉つり平氏を討たん棟梁と、御身なること行綱が注進に依つて慥に聞く、何と相違はあるまいが。

成親　むゝ、

〽我が心腹を成親はさゝれて陳ずる詞もなく、悔し涙に袖しぼり、さしうつむくを、うち見やり、

ト此の內成親無念の思入、宗盛思入あつて、

宗盛　平家を討たん望み叶はず、嘸や殘念至極であらうが、これも時節とあきらめ召され、いで大將に任官した、此の宗盛が捕縛なさん。

〽手づから掛くる縛めに、成親卿は歎息なし、

成親　この成親は忠義を勵み、天下の無事を計れども、神の冥助もあらざるは、はて、是非もなき時代ぢやなあ。

ト成親ぢつと思入、宗盛は成親の裝束を抱へて二重へ上り、清盛の前へ置き、床几へ掛る、清盛いましきこなしあつて、

清盛　こりや經遠、成親を鞭つて、謀叛の實事を白狀させよ。

經遠　はッ、

ヘはッと答へて傍より笞取り出し立ち掛れば、

ト經遠誂への竹べらを持つて成親に立ち掛り、

君の上意だ成親卿、平家を討たんと會合なし謀叛の企てなしたる事、包み隱さず白狀めされ。

成親　又しても／＼、此の身に知らぬ謀叛呼はり、白狀いたす覺えはない。

行綱　この行綱が證人なるに、まだ其のやうに陳じめさるか。

清盛　疾く／＼打つて白狀させい。

經遠　はッ。

ヘ又も笞を取り直し、りう／＼はつしと打ち据うれば、苦痛を怺ふる成親卿無念泪に暮れたまふ、かゝれる所へ瀨尾が立ち出で、

ト又經遠成親を續け打ちに打つ、成親苦しき思入、此の時下手より以前の兼康、陣立にて出で血に染みし白無垢へ首を包みしを抱へ出來り、跡より軍兵二人附添ひ出來る、これにて經遠笞を止める。

宗盛　やあ、それへ參りしは瀨尾の太郎、

清盛　汝へ申し附け置いたる西光は如何いたした。

兼康　はッ、御諚に任せ獄屋へ曳き、彼めを拷問なせし所、飽くまでしぶとき根性にて、いつかな白状せぬのみか、苦しむ隙には大音にて君の御事を悪口なし、臣等が聞くも忌々しく、殊に他聞を憚りますれば、いつそのこと責め殺さんと、手酷き拷問なせし上火責めになさんといたせしを、彼れも是れには恐れしやら、斯くまで相國清盛を辱しめたる上からは、所詮命は助からぬ、今ぞ白状いたす程に筆紙を貸せと申すゆゑ、望みの通りあてがひしに努れ果てたる身を以て、自身に書きたる此の口書、いざ御覧下さりませう。

〽懐中なせし立文を差出せば、手に取りて入道篤と打ち見やり、

ト兼康鎧の引合せより立文を出し清盛に渡す、清盛開き見て、

清盛　流石は剛氣の西光法師、この期に至り字性も亂れず、敵ながらも天晴なり。

宗盛　して、西光は如何せしぞ。

兼康　謀叛の企て白状せしゆゑ、仰せに任せ西光は、斬首いたしてござりまする。

〽血に染む首級の包みを出せば、（ト首を包みしまゝ出す。）

清盛　おゝ出來す〳〵、よく西光に白状させた。宗盛この口書を讀み上げい。

宗盛　はッ、（ト口書を取り成親に向ひ、）西光法師が罪に服し、自ら書きし此の口書、心を定めて篤と聞か

れよ。

〽口書を開き高らかに、(ト宗盛口書を開き、)

「此の程法勝寺の御所に於て新大納言成親卿、院宣なりと諸士に申し軍の評議ありしゆゑ、凡そ院中に使はるゝ者誰か違背申すべき、豫て天の道に背く平家の一門討滅し根を斷つて葉を枯す思ひ立ゆゑ一味の輩盟約せしめ候也、依て西光も徒黨に與したり、院宣の趣き斯くの通り、」(ト讀み清盛に渡す。)かゝる慥な證據あつても、御身は知らぬと言張るか、有無の返事は、如何なるぞ。

〽口書を目先きへ差し附けられ、何と答へんやうもなく、涙あふるゝ目を閉ぢて、さしうつむけば瀨尾太郎、

ト成親目を閉ぢつと思入、兼康白衣を取り誂への西光の首を出す、清盛快き思入、兼康切首を成親に見せ、

兼康　清盛公を罵りし罪は忽ち身に報い、火水の拷問受けし上錆びたる刃で切つたる此の首、眼を開いて是れを見られよ。

〽さし出す首は血に塗れ、口は耳まで劈く有様いはん方なき怖しさ、身の毛もよだつばかり

なり。

ト此の内兼康首を成親へ差出す、成親これを見て無念の思入、兼康は首を衣に包む、行綱思入あつて、

行綱　西光法師が白狀にて、成親卿が叛逆の謀叛たること知れたる上は、最早拙者にお暇を何卒下し置かれませう。

清盛　おゝ、行綱ことは昨夜より嘸かし勞れしことならん、屋敷へ歸つて休息いたせ。

行綱　左樣ござれば御意に隨ひ、

清盛　追つて恩賞いたすであらう。

行綱　はゝ、有難う存じ奉つりまする。

〽三拜なして行綱はおのが屋敷へ立ち歸る。（ト行綱皆々へ辭儀をなし、下手へ入る。）

成親　言ひ甲斐なくも西光が白狀なせし上からは、是非なきことゝ覺悟をなせば、命を取られよ淨海殿。

清盛　むゝ、さりとてはよい覺悟、叛逆の罪極まる上は臣下の者へ申し附け、首を刎ぬべき所なれど、一旦緣組む因みもあれば、此の入道が刃を以て手づから引導渡してくれん。

成親　すりや、御身が手づから我が命を、

清盛　おゝ、言ふにや及ぶ、やあ〳〵民部太郎、予が長刀早く持て。（ト奥にて、）

皆々　はあゝ。

〽はつと答へて民部太郎君の長刀携へて、立出る跡に恩顧の面々豫ての下知に鎧を着し、さも勇しき出立にて、廣庭狹しと居並んだり。

トこれへ螺の音を冠せ、以前の重能鎧陣立裝にて誂への清盛の長刀を持ち、盛次外に四人何れも鎧裝にて出る、續いて軍兵大勢蝶の旗、馬印、などを持ち出來り、皆々下手へ控へる。

重能　先刻君の御諚に任せ、某はじめ恩顧の者、

盛次　火急のことゝ承はり、

一　早速鎧を着用なし、

二　軍の用意仕つり、

三　君の御下知を承はり、

四　直に出陣仕らんと、

重能　參着いたして、

六人　ござります。

宗盛　お〻早速の着到、大儀々々。

〽成親卿は打ちおどろき、

成親　見れば諸臣が甲冑なし、得物を携へ厳しき此の出立ちは何事なるぞ。

宗盛　何事とは事をかしや、平家を討たんと徒黨せし謀叛に與なす族をば、片端から討取る手配り。

清盛　仕儀によりなば院の御所へも。

成親　やゝ、すりや院の御所まで。

清盛　やがて四海を併呑なす、平家の武威を顯はす所存。

成親　その所存をば知つたるゆゑ、會議なせしも水の泡、斯くまで我意に募れるに天の御罰はあらざるか。

清盛　いで、軍神の血祭に、御身が首を刎ねてくれん。

〽清盛庭へ下り立ちて、長刀の鞘拂ひ除け、

ト清盛平舞臺へ下り、金剛草履をはき、長刀を取り鞘を拂ひ、成親の目先きへ突き出す。

これこそ其のかみ嚴島明神の應護に依り授つたる長刀にて、今清盛の手に掛り命を落すは末期の仕合せ、誅に伏せし西光が首は朱雀大路へ晒し、今この長刀で搔き落す御身の首は、法住寺の

成親　御所へ持ち行き、謀叛の實否を糺さにゃ置かぬ。すりやそれゆゑに此の如く、甲冑を以て身を固め、我が首持つて院參なし、武威に脅して法皇を擒になさん心よな。

清盛　おゝ、知れた事だわ。

成親　我一命は惜しまねど、君の御身の一大事。

〽我れを忘れてよろぼひ立つを、（ト思はず立ち掛るを引き据ゑる、）

清盛　その幸先きに、成親御身を、

宗盛　斬首なすのが、

皆々　則ち血祭り。

清盛　今が最期ぞ、覺悟せよ。

〽既に切らんず其の折柄、

ト清盛長刀を構へ成親へ立ち掛る、ばた〳〵になり雜掌出來り、

雜掌　はッ、申し上げまする、小松内府大臣重盛公、我が君へ申し上げ度き事ござつて、只今火急の御參館にござりまする。（ト言ひ捨て、引返して入る。）

清盛　なに、重盛が入來とな。（ト清盛長刀を引き思入）

宗盛　兄の入來とあるからは、斬首は暫くお待ちなされい。

清盛　むゝ、

宗盛　拙者は兄を出迎ひ申さん。

〽舍兄の入來に宗盛が出迎ふ姿甲冑を、脫ぐに脫がれぬ淨海が素絹の衣早速にも、鎧ひし上へ袈裟打ちかけ、いらだつ心和ぎて念誦してこそ在しけれ。〽程もあらせず、甲冑にきめく兵士の其の中へ重盛公は官服の、烏帽子直垂姿にて悠然として入りたまへば、宗盛兄より袖を控へ、

トこれへ小鼓をあしらひ花道より重盛烏帽子素袍のこしらへにて出來り、跡より小姓烏帽子素袍小さ刀にて重盛の太刀を持ち附き添ひ出て來る、宗盛花道まで出迎ひ辭儀をなし、重盛と入替り、思入あつて宗盛重盛の袖を控へ、

宗盛　あいや兄上、暫く。

重盛　何事なるぞ。

宗盛　平家を討たんと成親卿が、謀叛の企てあつたる事聞き及ばれての御入來なるか、かゝる大事に父

上には既に鎧を着用めさる、それに御身は常の服、餘りといへば似合しからず。

〽いへども聞かぬ面色に行き過ぎたまふを又引き留め、

ト重盛聞かぬ顔をして行くゆゑ、宗盛袖を控へ、

せめて腹巻小具足に召替へられて然るべし。

〽重盛につこと打ち笑みたまひ、（ト重盛宗盛を見返り、）

重盛　君へ對し逆勅の逆臣、叡慮を惱まし奉つるを大事とこそは申すなれ、私事に物々しきかゝる出立ちなしたるか、謀叛の者は何れにあるぞ、何小具足に及ばうぞ。

〽袖を拂うて悠々と廣縁近く入りたまへば、並居る兵士も辭儀をなし、恐れ入つてぞ見えにける。

ト重盛思入あつて小姓附添ひ舞臺へ來る、皆々顔見合せ思入、此の内淸盛二重へ上る。

鹿ヶ谷にて軍議を計りし西光法師を生捕つて、斬首なしたる其の上に、此の亜相をも失なはんとは以ての外のことなるぞ、よもや父上の仰せにてはあるまじ宗盛汝が計らひなるか。

宗盛　全く以て左にあらず。

重盛　こりや經遠、兼康、忌はしき其の繩目を、早く解け。

經遠 兼康　でも、此の繩目は、
重盛　四海の政務を預かる重盛、予が詞を用ゐぬか。
經遠 兼康　さあ、それは、
重盛　えゝ、解けと申すに、（トきつと言ふ。）
經遠 兼康　へゝい。
〽鶴の一聲主從が顔見合せて是非なくも、縛めの繩解きにける。
ト經遠兼康如何せんと清盛を見る、清盛解けといふ思入をする、これにて成親の繩を解く。
重盛　公卿の御身にて例なき拷問の責、正しくこれは經遠兼康、汝等が仕業ぢやな。
經遠　いや、これもやつぱり、
兼康　我が君の、
重盛　いや、假令仰せがあらうとも道に背きし事柄は諫めを入れるが臣下の道、刑の疑はしきは輕くせよ、功の疑はしきは重くせよとの本文、など重盛を憚らざりし、田舍人とはいひながら、返す返すも無骨千萬。
經遠 兼康　恐れ入つてござりまする。

重盛　こりや重能、盛次

重能盛次　はツ、

重盛　この卿は平家に深き因みあれど、それは內證私事、今日謀叛の棟梁ゆゑ、厚く藥用の手當をなし、別間に於て勞り申せ。

重能盛次　畏まつてござりまする。

重能　重盛公の仰せにござれば、

盛次　成親卿には御保養あつて、

重能盛次　然るべう存じまする。

〽敬ひ申せば嬉しげに、（ト成親嬉しき思入あつて）

成親　今淨海入道の刃の下に死すべき成親、しばし助かる玉の緒も繋がる緣の內府の情、

重盛　笞を加へし無道の計らひ、さりながらお命までのことはよもあらじ、何卒御容赦下されい。

成親　此の身は如何なる呵責に遭ふとも、更々それは厭ひはせぬ、只我が君の御身の上、よきに計らひたまはれよ。

重盛　その儀は貴卿の仰せなくとも、重盛承知仕つる。

成親　それにて麿が一つの安堵、

〽よきに頼むといふひまも、涙の雨にしを〱と、

ト成親重盛へ頼む思入よろしくあつて、

重能 盛次　いざ、お立ちなされませ。

〽伴はれてぞ入りにける。（ト成親立上り、兩人介抱して上手へ伴ひ入る。）

〽跡に内府は衣紋を正し、

重盛　こりや宗盛、右近衛の大將が武具を帶すは容易からず、既に西光法師を始めとして叛逆の者は一一に捕縛なせしと聞きつるが、何ゆゑ汝等甲冑を着し、斯く騷動に及びしぞ、思慮なきものゝ振舞ぢやなあ。

〽甲冑なせし者共を尻目に掛けて階子を登りたまへば入道は、我が子ながらも物の具着し對面なすも恥かしく、素絹の衣に甲冑を覆へど胸板自然と外れ、金物あらはれ輝くに引違へてぞ在しける。

ト此の内重盛左右を見返る、皆々はツと俯向き辭儀をなす、重盛思入あつて段を上る、清盛この内種々思入あつて誂への直綴を引つ掛け前を合せ、鎧の金物の出るを隱さうといふ思入、重盛思入

あつて二重へ上る、清盛思入あつて、

清盛　おゝ待兼ねし、内府には只今是れへ參りしか。

重盛　臣下の者の知せにより、直に參上いたしてござる。

清盛　その方只今も舍弟宗盛へ、誰が指圖と尋ねしが、抑々この度平家を討たんと鹿ヶ谷へ會合なし、謀叛を企つ成親、元を糺せば法皇の叡慮より出でたる事は既に先刻西光坊が白狀に依つて明白なり、此の事打ち捨て置く時は國家の亂になるは必定、天下の煩ひ當家の大事、片時も猶豫なりがたく、それゆゑ暫く法皇を片邊へ移しまゐらせ、謀叛に與なす者共を悉く召捕つて、嚴しく處刑なす所存、この評議なさん爲め、先刻武藏右衛門を內府へ使者に遣はせしが、途中に於て違ひしか、能くも早く參りしぞ。

〽詞を飾り述べたまふ始終を聞く間も重盛公、興も醒め果て双眼より落つる淚のはら〳〵と、暫し物をも宣はねば入道もまた物言はで、四邊しらけて見えにける、內府は淚おし拭ひ、

トこの內清盛重盛よろしく思入あつて、重盛懷紙を出し淚を拭ひ、

重盛　はや御運も末になりぬと覺え候、人の運の傾かんときは必ず惡事を思ひ立ち候なり、又御有樣を見奉つるに更に現とも覺え候はず、そも我が朝はおゝん神の御子孫、國の主として天津兒屋根の

御末政を執りたまひしより、太政大臣の官に至る人甲冑を帶すること禮儀に背けり、殊更父上には出家の尊體、三世の諸佛解脫同相の法衣を脫ぎ捨て、御身に鎧ひし劍を携へたまふこと、內には佛の戒行を破り、外には仁義の禮讓に背けり、恐れ多き申し狀ながら此の重盛が申すこと具に聞しめさるべし。

清盛　む丶、

重盛　世に四恩といふことあり、一に天地の恩、二に國土の恩、三に父母の恩、四に衆生の恩と心地觀經に說かれたり、最も重きは朝恩なり、普天の下率土の濱王土にあらずといふことなし、抑我が平氏は桓武葛原の苗裔なれど中頃微にして人臣となり、曾祖刑部卿將軍の功ありといへども國守に過ぎず、祖父忠盛禁中の內昇殿を許さる丶に萬人脣を反してこれを嘲ける、今父上の世に至りては太政大臣を極められ、重盛不肖の身ながらも蓮府槐門の官を穢す、殊更日本半國は皆一門の所領たり、これ莫大の朝恩ならずや、假令一門代々の朝敵を滅し其の功し如何ほどあるにもせよ賞に誇るは傍若無人、聖德太子の憲法にも人皆心あり心各執あり、彼を是とし我を非とし、我を是とし彼を非とす、是非の理誰か定めん。成親已に顯れて、爰に召し置きたまふ上は法住寺殿いかゞ思し召し立たる丶共、臣たるの道なれば、只幾重にも忠勤を盡したまひ、民には哀憐

を施して上を敬ひ下を撫で御身を愼みたまへかし、重盛叙爵の始めより今大臣に昇れるまでの君の御恩の重きを思へば、千顆萬顆の玉にも超ゆ、悲しいかな、君へ忠を盡さんとすれば、須彌八萬の頂きより高き父の恩を立所に忘る、不孝の罪を脱れんとすれば君に不忠の逆臣たり、進退すでに谷りぬ、斯かる時こそ重盛が首をば召され候へかし、左すれば院中の守護も仕つらず院參の御供もいたさず、君にも背かず父にも違はず、誰にてもあれ一人に命ぜられ、御坪に引出されて、重盛の首討たれんに、何の難き事あらん。

〽命を惜しまぬ赤心は四恩を臺に盛衰をおもんぱかりし内府が金言、猛き勇士も感涙に鎧の袖を濡らしける。

トこの内重盛よろしく思入、皆々感にたへしこなし、重盛また清盛に向ひ、

只今申し上げたる一條、朝恩の儀思召され御承引下さりまするか、但しは法住寺殿へ院參あつて御存意を遂げたまふか、如何に御決定あられしか、御返答が承はりたい。

〽詞を盡して諫むる誠心、忠孝二つの眥にもるゝ涙は裝束の露ひきしぼるばかりなり、始終を聞き居る清盛は、猶々怒りの眼に角立て、

ト重盛思入、清盛は腹の立つ思入にて、

清盛　我が子の首は切るまじと先を見拔いて親への難題、何やう汝が諫言なすとも一旦思ひ立つたることと再び變じたことはない、斯く甲冑を着せしからは院の御所へ押寄せて、謀叛の根ざしを聞き糺さねば、此の清盛の腹が癒ぬ。

重盛　すりや斯程まで某が御諫言申し上げても、御聞濟みはございませぬか。

清盛　望みとあらば汝が首を、切つても是れより院參なし、我が思ひを晴らさにや置かぬ、百萬だら申すとも、いつかな諫言聞き届けぬぞ。

〽衣脫ぎ捨て入道が、今にも出ん勢ひに重盛公は詰寄りて、

ト清盛衣を脫ぎ捨てきつとなる、重盛思ひ入あつて、

重盛　御聞濟みなき上からは是非に及ばぬ、身不肖なれども重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍共も候はめ、されば過ぎにし保元に左典廏義朝が六條廷尉を弑せし例、父へ敵たひ奉つらん。

宗盛　すりや兄上には、父上へ敵たひめさるゝ御所存なるか。

重盛　重き朝恩を忘れたまひ、院參めさるゝとあるからは、父とて同體いたさうや。

經遠　さてはいよ〱、内府公には、

兼康　君へ敵たひめさるゝか。

重盛　言ふにや及ぶ。

〽並居る諸武士を見返りて、

只今是れにて申す事ども、汝等よツく聞きつらん、父の命に随ひて朝敵となる所存なるか、また我が詞を守り院の御所へ馳せ參じ、忠勤を盡すべきか、天下の大事を思ひなば重盛が意に随ひ君のお味方仕つるが、これ臣たる者の義務なるぞ。

〽道を立てぬく重盛が、詞に一同ひれ伏して、

景友　重盛公の仰せに随ひ、

貞國　君に仕ふる、

皆々　所存でござる。

重盛　然らば院の御所へ參り、中門の警固いたせ。

皆々　はツ、畏まつてござりまする。

〽仁者の詞に押寄せし兵士は潮の引く如く、漣打つて走り行く。

トどん／＼ばた／＼にて軍兵殘らず花道へ走り入る、跡清盛、宗盛、經遠、兼康思ひ入あつて、

宗盛　こりや一同に父を捨て、我が兄の詞に随ひ、

經遠　院の御所の警衞に、
兼康　殘らず出張。
三人　なしたるか。
重盛　これぞ誠の人たる道、（ト誂への合方になり重盛思入あつて、）我意に募りて法皇の御所へ押寄せめさるとも、宗盛の外隨ふ者は經遠兼康兩人のみ、一人悔悟なす時は忽ち味方の破れとなる、昔が今に至るまで逆の榮えし例なし、再び三度重盛が御諫言申し上ぐるも、家の爲め御身の爲め、何卒御心飜へされ、思ひ止りたまふべし。
〽國家の爲めに重盛が條理を盡す諫言に、宗盛難波瀨尾等も實に尤と得心なし、
ト宗盛經遠兼康顏見合せ思入あつて、
宗盛　兄上かほどに詞を盡し、お諫め申せば父上にも、兎にも角にも止まりたまひ、
經遠　宗盛公の仰せの如く、
兼康　御諫言をお用ゐあつて、
兩人　然るべう存じ奉つる。
〽清盛なほも聲振り立て、

清盛　やゝ宗盛はじめ經遠兼康、言ひ甲斐なきことを申すな、爰に居つたる者共が御所へ警固に參るとも、高の知れたる僅の人數、味方はなくとも事は缺かじ、今清盛命を下し此の近郷の兵士を招かば千や二千は瞬く間、難波瀬尾兩人は、直に參つて近郷の諸軍勢を催促なせ。

經遠　畏まつてござりまするが、此の儀は内府重盛公の、お諫言をお用ゐあつて、

兼康　軍勢催促あることは思ひ止まり、

兩人　たまはるべし。

清盛　やあ昔が今に清盛が、一旦斷うと言出せし、事を引きたる例なし。

兩人　ではござりませうが、

清盛　えゝ、行けといふに、疾く〳〵行かぬか。（トきつと言ふ。）

〽大音聲に罵る折しも、向うへ馳せ來る主馬の盛國、

トどんちやんばた〳〵になり、花道より盛國素袍股立大小にて走り出來り、花道にて舞臺を見て、

盛國　小松の内府重盛公には、これにお渡り遊ばせしか。

重盛　ホオ、待兼ねし主馬盛國、かねての手筈は如何なるぞ。

盛國　はッ、かねて内府のお指圖通り申の下刻の合圖を違へず、何れも帝都の御大事と一致なしたる忠

義の面々、其の外洛外白川、北山、醍醐、小栗栖、宇治、山科、おろそかには騷ぎたまはぬ御大將の召しに應ぜぬは武門の恥と、追々に人夫の數は限りなく着到いたして候へば、此の趣きを内府公へ急ぎ御注進申し上げまする。

重盛　火急の注進大儀々々、直に重盛歸館なさん。

盛國　左樣ござらば、

重盛　參れ盛國、

盛國　はッ、

〽はッとばかりに盛國は、かしこを指して走り行く、

トばた／＼にて盛國花道へ走り入る。清盛きつとなり、

清盛　今盛國が注進といひ、軍勢集むる内府が心底、

宗盛　さては兄重盛にも、

經遠　御企てが、

皆々　ござるよな。

重盛　おゝ、其の企ては重盛へ、恐れ多くも宣命を。

清盛　えゝ、（トびつくりなす、重盛書物を捧げ跳への合方になり、）

重盛　その方が父清盛こと、既に先例に秀でたる朝恩を受けながら忘却なして暴戻募り、やゝもすれば天下の亂ともなるべき事を仕出す條、これ朝敵とも謂つべし、打ち捨てがたき者なれど平治以來の功にめで、則ち内府重盛へ其の存亡を任すなり、よく〳〵父を諫め諭し嚴しく謹愼せしむべしと、此の重盛へ御内勅は、その上親人叔父君たる忠正公を討ちたまひ、又源の義朝は親爲義を殺したる例に任せん則ち宣命。

宗盛　すりや兄には父上へ、

經遠　敵對めさるゝ、

皆々　御所存よな。

重盛　いゝや、其の儀は思ひも寄らざること、何とて父を弑すなんどゝ重盛いかで思はんや、よしや宣命あるとても命に代へて無事を計り、幾度となくお諫め申せど聞き入れたまはぬ父が氣質、目前臣等が父を捨て法住寺殿へ參りしはこれ一天の君のいさをし、富貴と榮華と任職と朝恩と相兼ねて極めたまへば、御運の盡きんことも難きにあらず、父祖の善惡は必ず子孫に及ぶと申す、左るがゆゑに重盛が父へ對して逆らひ申す無禮の段は、幾重にも御容赦なされ下されい。

へ涙と共に重盛公手を突き父へ詫びたまふ、心の内の芳しきを宗盛はじめ並居る諸武士感ぜぬ者ぞなかりける。

ト重盛思入あつて言ふ、淸盛忌々しいといふ思入、宗盛始め皆々理に服せしこなしあつて、

宗盛　斯くまで兄命に代へ、父の御身を思召す、其の心中を汲み分けられ、
經遠　最早是れより法住寺の、
兼康　御所へ推參めさること、
宗盛　御止まりあつて然るべう、
皆々　存じ奉つりまする。（ト淸盛思入あつて、）
淸盛　むゝ宗盛はじめ汝等まで、詞を揃へて止むるからは、兎に角老いては子に從へ、院參思ひ止まるであらう。
宗盛　すりや父上には兄の、再度の御異見お用ゐあつて、
皆々　思ひ止まりたまふとか。
淸盛　おゝ、元より出家なしたる淨海、今日よりしては念佛三昧、彌陀の唱名一念に、罪業障滅、南無阿彌陀佛。

〽俄に念ずる空念佛。（ト淸盛珠數を爪ぐる、重盛思入あつて、）

重盛　父上御得心ある上は、諸軍を解いて退散なさん。

宗盛　左樣ござらば兄には、

經遠　これより御歸舘、

皆々　遊ばしまするか。

重盛　一先づ歸舘いたすであらう。

〽歸舘なさんと立上れば流石大木の淸盛公、風雨に折れし面色して繫がる小枝宗盛や、難波瀨尾も顏見合せ、暑さに弱る今年葉の滋りこがるゝ其の風情、內府はさつと夕立や小松のかげのそれならで、胸の淚に雨宿り晴るゝも待たで階段をやう〳〵下りかなたに向ひ、

ト重盛思入あつて、

こりや宗盛、最早この上父上にも、法住寺へ推參めさる仰せ出されはあるまいが、萬一あらば我が舘へ早速に注進いたせ。

宗盛　委細承知仕つる。

重盛　經遠、兼康、其の方どもゝよいな。

皆々　はッ、（ト辭儀をなす。）

重盛　注進あらば某が、早速參つて父上へ、（ト扇で首を切る思入あつて、）我が首進上申すであらう。

清盛　氣遣ひいたすな、武門を捨て珠數爪繰つて、南無阿彌陀佛。

重盛　しかと左樣でござるよな。

清盛　念には及ばぬ。南無阿彌陀佛。（ト淸盛殊勝に珠數を爪繰る、重盛見て、）

重盛　これにて安堵。（ト立上り、）いたしてござる。

〽諫むる智仁の小松殿、譽れは世々に、

ト重盛平舞臺へ下り見返る、清盛きつとなるを宗盛留める、皆々よろしく引張りの見得、三重カケリにて、

幕

大詰　鬼界ヶ島の場

〔役名――流人俊寛僧都、島長四郎太夫、丹波少將成經、平判官康賴、丹左衞門尉基康、島長作太郎、船頭灘藏、島人〇△□。〕

（鬼界ヶ島の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中より上寄りに、一間丸太柱昆布を竹にて押へし屋根、三方島筵にて圍ひ、下に木の葉、同じく筵を敷き、此の外竹を藤蔓にて結びし閼伽桶、この上に缺椀・土鍋など載せ、右傍に振りよき松の臺幹、枝へ自在竹を掛け、この側に粗朶の薪・附木、火箸などよろしく、正面下手より斜に打ち寄せの海の遠見・上下岩組の張物にて見切り、よき所に松の立木・總て鬼界ヶ島の體。爰に○△□繩にて結びし昆布を擔ぎ來たる心にて是れへ腰を掛け休み居る、波の音濱唄にて幕明く。

○　今に雁の來る時分は風が吹いてならねえが、此の間からの長時化がやう〳〵日和になつたが、吹き續くので沖が荒れ、漁といつちやあ少しもねえ。

△　爰も日本の内なれど世界に遠い離れ島、年中山では硫黄が燃え砂地の多い其のせゐか、五穀といつちやあ何にも出來ず、三度の食は海藻ばつかり。

□　昆布でもたんと取れた時は、薩摩へ送つて麥と換へ、それを喰ふのが何より樂しみ、只ふんだんなのは魚だが、それさへ荒れて四五日この方、鰯ツ子さへとれねえから骨放れがしたやうだ。

○　愚痴を言ふのは無駄なことだが、都の人が此の島へ流罪になつて難儀をするのは、科があるから仕方がねえが、何の科もねえ體で、人も恐れる鬼界ヶ島で生涯終るは因果なことだ。

△そりや手前の言ふ通り、生甲斐のねえ體だがその代りにやあ氣が安い、都に産れた其の人は、目に面白い物をも見て口に旨い物を喰ふだけ、やゝともすると戰があつて命を捨てることがあらう。

□去年爰へ流罪になつた成經、康頼、俊寛といふ、あの三人も都に居るうち榮耀榮華をしたであらうが、謀叛とやらをたくらんだ其の科に依り此の島へ、流罪にされてみじめなことだ。

○薩摩の國から海上は左のみ遠くもねえけれど、流人の居るので此の島へ御用の外は渡海がならねば、幾ら都に親類があつても、何一品流人の所へ送つて寄越すことは出來ねえ。

△ほんに爰へ來た時は立派な裝をして居たが、明け暮れ荒い汐風に吹き晒されて荒布のやうに、裾も袂も切れ果て、見るも哀れな裝になつた。

□然し爰の島長は慈悲深い人だから、こんな家でもこしらへて遣り、海藻ばかりは喰ひ難からうと時折麥の粥でも喰はせ、よく世話をして遣らつしやる。

○世話するのは惡くはねえが、全體いふと三人は都に居る時謀叛をたくらみ、當時盛んな清盛樣を滅さうとしたばかり、爰へ來たのは懲らしめゆゑ、流人はみじめを見せてやるが、お上へ對していゝ譯だ。

△成程言やあそんなもの、情をかけるはよくねえことだ。

□これから流人の三人にみじめを見せて懲らしてやらう。
○それだからおれなどは沙魚子一疋やりやあしねえ、みじめを見れば懲り〳〵して、赦免になつて歸つた時は、必ず惡いことはしねえ。
△こりやあ手前の言ふのが尤も、流人は手酷くしてやるのが、却つて向うの身の爲めだ。
□只せえこちとら三人は、情を知らねえ産れだから、思入れ酷くしてやらう。
○爰は俊寛の居る小屋だが、何處へ行つたか影が見えねえ。
△流人も段々業染みて漁場へ魚を貰ひに來たり、
□海へ荒布を拾ひに來るから、大方稼ぎに出掛けたのだらう。
○稼ぎといやあ、こちとらも浮々せずと、此の昆布を早く納屋へ運んでしまはう。
△久しく酒を呑まねえので、喉がくび〳〵するやうだ。
□此間造つた麥酒が、なれたら馳走になりてえものだ。
○もう大概なれたから、晩に家へ來るがいゝ。
△それぢやあ何ぞ肴をもつて、
□晩に呑みに行きやせう。

○それを樂しみに運んでくれ。

△□合點だ。

ト波の音濱唄にて、三人昆布を擔ぎ上手へ入る、波の音打ち上げ、上手出語り臺の霞幕を切つて落し爰に竹本連中居並び、淨瑠璃になる。

〽そも〱鬼界ヶ島といへるは、東は漫々たる蒼海にして、白浪天と共に高く、西は峨々たる巖石聳え峰に黑煙立昇り、南はうゐまの國かとよ、北は渺々として跡もなし、俊寛僧都は此の島に左遷の身の哀れにも、衣類もいつか破れ果てゝつゞれさせてふ蟲の音も、枯木の枝にすがり來て、

ト波の音こだまをあしらひ、花道より俊寛好みの鬘、古き綸子の裾の切れし着附、腰に荒布を纏ひ、誂への枯木の杖を突き出來り、花道へ留り、

俊寛　まことに光陰は矢の如く、去年の秋この島へ成經康賴と諸共に流罪になりし此の俊寛、惜しからざりし命なれど憂きを忍びてながらへしも、いつかは都の赦免を受け、故鄕へ殘せし妻や子に再び廻り逢ふことのありもやせんと小夜衞、ないて明石や須磨で見し月は昔に變らねど變り果てたる我が面影、

〽憔悴枯槁と痩せ衰へ、剃らねば髪は肩に垂れ、彼の凌雲の額を書き一夜の内に千字文を選みし苦心に猶勝る、我が身をなくか山烏、頭眞白になりぬれど歸る日ぞなき沖つ波、思へば果敢なき身の上ぢやなあ。

〽我が身をかこちよろ〳〵とよろめき來つる磯端に、幾度となく腰をのべ、おのが庵へたどり附き、

ト波の音砌にて俊寛本舞臺へ來り、合方にて自在の傍にある薪を見て、

見ればこれに薪があるが、是れはおほかた四郎太夫から、惠んでくれたものであらう。(ト筵の上へ住ひ、)斯かる孤島の者なれど天然と五常を辨へ人を憐れむ心深く、この俊寛を痛はりて雨露凌ぐその爲めに、かゝる小屋をも營みくれ、鹽木の薪三度の食事惠みてくれる志し、せめては何ぞ恩返しと太郎に文字を教へしに、生れついて智慧敏く都にあらば天晴な博識ともならんずもの、生涯この地に果てさすは、はて殘念なことぢやなあ。

〽埋みに殘る螢火を掻きさがして焚附くれば、濱風あらく忽ちに燃えたつ火影に汐たれし衣は干せども袖袂、涙に干る間ぞなかりける。折から爰へ島長の悴は蘆で漁りし鯛をば提げていそ〳〵と、

ト波の音を冠せ、この内俊寛自在の所へ粗朶を入れ附木にて焚き附ける、よき程に花道より太郎散切かづら縞の短き着附前帶、鳥蘆で鯛を通し是を提げて出來り、花道にて、

太郎　さつき粗朶を持つて來た時、お師匠さまにはお留守だつたが、もうお歸りになつたと見える、久しく魚を上げぬから早く持つて行つて上げませう。

〽小屋を目當に走り來て、（ト太郎平舞臺へ來り、）

お師匠さま、お歸りなされましたか。

俊寛　おゝ太郎か、まだ今日は逢はなんだなあ。

太郎　さつき一遍粗朶を持つて、お目に掛りに參りましたが、お留守ゆゑ歸りました。

俊寛　さうであつたか、家へ歸らば四郎太夫殿に、よう禮言うてくりやれ。

太郎　何のお禮に及びませう、おいらが濱で拾つて來たのだ、これも父さんが漁に出て今取つて來たのだから、お師匠さまへ上げまする。（ト鯛を出す、俊寛見て、）

俊寛　ほゝお、是れは見事な鯛ぢやが、わしが口には過ぎるゆゑ、家で干鯛にしたらよからう。

太郎　いえ〳〵今日は思ひの外餘計に漁がございましたから、御遠慮なされず此の鯛を、どうぞあがつて下さりませ。

俊寛　それは何より忝けない、實は久しう海藻ばかりで生魚を食せぬゆゑ、力が拔けたやうであつた
嘸や好味なことであらう、今に成經殿や康賴殿が見えられたら、三人でこれを燒いて賞翫しませう。

太郎　それではお二人のお出まで、爰へ掛けて置きませう。

〽傍の松へ鯛をかけ、太郎は磯に跪づき、

ト件の鯛を大幹の松の枝へ掛け、俊寛の前へ手を突き、

昨日教へて下さいました國盡しが出來ましたから、御覽なされて下さいまし。

〽砂かき馴らし紙となし、雜木の枝を筆に代へ、墨はなけれど墨つぎの法も心得すら〳〵と書く筆法の見事さを、俊寛篤と打ち見遣り、

ト文句の如く太郎粗朶の枝にて國盡しを書く思入、俊寛これを見て感心せし思入にて、

俊寛　ほゝお、是れは見事々々、僅か二三度教へしに師も及ばざる此の筆法、まことの筆にて紙へ書けば一段見事なことであらう。

太郎　是れから毎日精出して昆布をたんと取溜めて、薩摩へ便りのある時に筆や紙に換へて貰ひ、ほんまの清書をかきませう。

俊寛 今二三年學びなば、天晴能書になるであらう。

太郎 この國盡しにござりまする五畿内といふ所は、よい所でござりまするか。

俊寛 その五畿内といふ所は先づ日本の中央にて、山城の國に京都ありて、恐れ多くも朝廷の在します所なるぞ。

太郎 それではこれまで御師匠さまも、其處においでなされましたか。

俊寛 おゝ、俊寛も去年までは、其の山城にをつたのぢや。

太郎 嘸よい所でござりませうな。

俊寛 今もいふ朝廷の在する所ゆゑ、神社佛閣も他國に勝り、名所古蹟も數多く、凡そ日本の其の内で先づ第一の所なるぞ。

太郎 お師匠さまがお赦になつてお歸りなさる其の時に、おらもどうかお供をして、都が見たうござりまする。

俊寛 赦免にならば其の時は、都へ一緒に連れて行き、是れまで汝が親達に情を受けし恩返しに、名所古蹟を見せてやるぞ。

太郎 それは嬉しうござりますが、何時頃お赦がござりませうか。

俊寛　今にも大赦があつたらば、赦免に逢はうと明暮に、都の便りを待つては居れど、何時あることやらそれも分らず、約束はするものゝ生涯赦免の沙汰もなく、波濤隔てし此の島の土となるかも知れぬわいなう。（トぢつと思入）

太郎　いえ〳〵近く大赦があつて、流人衆がお赦になると、昨日父さんが便りを聞き家で話しをして居やしやつたから、お赦があるに違ひない。

俊寛　惜しからざりし命をながらへ、斯うして居るも今一度故郷の空へ歸りたいゆゑ、それがまことであるならば、早く御沙汰を聞きたいものだ。

〽伏沈みたる俊寛が氣を取直せし其處へ、戻り掛りし島人が世間知らずのとんきよ聲、

ト上手より以前の島人三人出來り、

○　俊寛どの、

三人　歸らしやつたか。（ト合方になり、）

俊寛　おゝ、これは〳〵島の衆、どこへ今日は行かしやつたのぢや。

○　昆布を納屋へ積みに行つた歸りがけに今爰で、俊寛どのゝ話しを聞いたが、太郎を都へ連れて行くと言はしつたが、どうして〳〵連れて行く所か、お前は生涯歸られねえ。

△ 隱岐や伊豆へ流される流人と逢つて此の島へ、流されて來る其の人は、よつぽど罪が重いかして遂に是れまで赦免になつて、故郷へ歸つた人がねえ。

□ 聞けばこなた衆三人は、當時世界に威勢の強い清盛さまを亡ぼさうと、謀叛を企てさつしやつて既に首を切られるところ、危ふい命が助かつて爰へ流罪になつたとやら。

○ 都で殺す所をば遙かに遠い鬼界ケ島へ、流罪にしたは難儀をさせ、爰で命を取る積り、所詮赦免はないことだから、必ず都へ歸らうなどゝ愚癡なことを言はつしやるな。

△ どうで此方もこの島でわし等と一緒に死ぬ體、三年このかた馴染んだゆゑ死んだら死骸をどんぶりと、水葬禮にしてやりませう。

□ 所詮都へ赦免になつて、歸ることは出來ねえから、早く死んで水の上を流れ〳〵て行つたらば、都へ行けねえこともあるめえ。

太郎 何でそんな意地の惡いことをいふのだ、今にお赦のあることは昨日父さんも聞いて來たから、慥にあるに相違ない。

○ 何意地の惡いことをいふものか、今もわし等がいふ通り、

△ たゞの一人も昔から、

□ 赦免になつた者がねえ。

＼赦免のなきと島人が、詞に俊寛吐息をつき、（ト俊寛よろしく思入）

俊寛 すりや昔から此の島へ、流罪になりしその者にて、赦免に逢ひし者なきとか。

○ 所詮赦免の御沙汰はねえから、

＾ 爰が命の捨て所と、

□ こなたも覺悟を、

三人 したがよい。

俊寛 さては歸洛を待つ甲斐なく、鬼界ヶ島の土となるのか。

＼あら情なき身の上と、鬱に涙の汐頭、歎息なして伏し沈む、哀れを餘所に三人が、

ト此の内俊寛ぢつと思入。太郎もよろしくこなし、三人はこれを見て笑ひながら、

○ 俊寛どのが胸ぐので、鬼にも負けねえこちと等まで、何だか厭な氣になつた。

＾ 愁ひを拂ふ何とやら、斯ういふ時は酒に限るな、

□ 麥酒があるといふことだが、早くそれを呑みたいものだ。

○ 酒は呑ませるつもりだが、肴は何も當がねえ。

△　おツとある〳〵、いゝ肴が爰にある。

○　なに、肴があるとは。

□　この松に吊してある、此の鯛を貰つて行かう。

○　成程こいつはいゝ肴だ。

〽取りに掛るを太郎は引留め、（ト△□鯛を取らうとするを太郎留めて）

太郎　あこれ〳〵、それは今父さんがお師匠さまへ上げたのだ。

○　それぢやあ是れは島長から、俊寛どのへくれたのか。

△　何にしろ、流人などにこんな魚は勿體ねえ。

□　明日雜魚でもとつたらば、替りに持つて來てやらう。

○　こりやあおいらが貰つて行かう。

太郎　いえ〳〵是れは遣られぬ〳〵。

△　えゝ邪魔せずと、

三人　放さねえか。

〽傍若無人に三人か留める太郎を突退けて、鯛を引提け行く所へ、折よく來掛る島長が、斯

くと見るより走り寄り、突きのけ蹴のけ仁王立ち、

ト三人留める太郎を手酷くするゆゑ、俊寛留めるを突きのけ鋼を持つて行かうとする、此の時波の音はげしく花道より四郎太夫島長好みのこしらへにて出來り、花道にてこの體を見て、つか〳〵と舞臺へ來り、此の中へ割つて入り、三人を投げ退けきつとなる、

○　あゝ、痛い〳〵、うぬ流人の身を以て、

△　よくも島人を、

三人　投げやあがつたな。

四郎　投げてもいゝ、踏んでもいゝ。

□　やゝ、さういふ此方は、

三人　四郎太夫どんか。

俊寛　思ひがけない島長どの、

太郎　よい所へ來て下すつた。

○　なに、いゝことがあるものか、麥酒の肴にしてやらうと、

△　思つた所へ島長どん、

□　悪い所へござつたの。
四郎　よくもおれが俊寛さまへ、上げた鯛をうぬ等は肴に、持つて行かうとしをつたな。
○　いえ〳〵そんなことはしませぬ、俊寛どのは獨りもの。
△　雜魚と違つてこの鯛を、こしらへるのはむづかしいから、
□　わし等がこしらへて上げようと、それで是れへ手を掛けたのだ。
太郎　いえ〳〵噓でござりまする、麥酒の肴にすると言つて、持つて行つたのでござりまする。
○　これはしたり太郎どん、そんなことを、
三人　言はつしやるな。
四郎　去年の秋この島へ流罪になつてござつてから、都の話しをお聞き申し、少しは人の道を覺え、人間らしくなつたのは俊寛樣の皆お蔭、どんなにお禮もしたいけれど、五穀の出來ねえ放れ島、海藻ばかりが常食ゆゑせめて魚でも上げたいと、折角上げたこの鯛を汝等に取られてなるものか、片ツ端から痛え棒を背負はしてやるぞ。（ト四郎太夫祖朶の太いのを取つてきつとなる。）
○　あゝこれ〳〵親分、向後惡戲はしませぬから、
三人　どうぞ堪忍して下さりませ。

四郎　只は堪忍ならねえ奴等、どうするか、うぬ覺えて居れ。

へ棒振りあぐれば僧都は押し留め、（ト四郎太夫立掛るを、俊寛これを留めて、）

俊寛　これ、腹も立たうが四郎太夫どの、今日の所はわしに免じて。

四郎　いえ〳〵懲らさにやあいけませぬ、必ずお留めなされますな。

俊寛　さうでもあらうが此の鯛を、持つて行つたといふではなし、不斷世話になる衆達、如何にもわしが氣の毒ゆゑ、どうぞ許してやつて下され。

四郎　許してやれとおつしやるなら、今日の所はあなたに免じ、此の儘許してやりませう。

俊寛　どうぞ、さうして下されいの。

四郎　あなたがお留めなさるゆゑ、今日は許してやる代り、この後こんなことをすると、其の分にはして置かねえぞ。

○　いえ〳〵これに懲りまして、此の後は決して、

三人　いたしませぬ。

四郎　よく爰へ來てお詫びを申せ。（ト是れにて三人手を突き、）

○　へい〳〵、まことにほんの出來心、

△　この後決していたしませぬから、

□　まつぴら御免、

三人　下りませ。（ト天窓を下げる。）

太郎
四郎　もつと天窓を下げねえか。

三人　へい〳〵、御免下さりませ。（ト舞臺へ天窓を付けてあやまる。）

四郎　お詫びをしたら用はねえ、手前達は早く歸れ。

三人　えゝ、歸りますとも〳〵。（ト三人下手へ來て、）

○　いつたい事の始まりは、酒の肴にくひたいと、

△　むたいに歸つて行く所を、鬼界ヶ島のたい（隊）長に、

□　見られていたいめに逢うて、

○　無事に歸るは、

三人　お目出たい。

〽口から出任せ出放題、口合交りに歸り行く、

ト三人よろしく思入あつて花道へ入る。四郎太夫跡を見送り、

四郎　島育ちとはいひながら、物の情も知り居らず、さて〱憎い奴等だなあ。

太郎　もつと父さん酷い目に逢はしてやればよかつたに。

四郎　懲らしめの爲め筋骨を拔いてやらうと思つたが、あなたがお留めなさるゆゑ、今日はあの儘許してやつた。

俊寛　よく許してやつて下すつた、かゝる濱邊に只一人住居をなせば世話になり勝ち、これも後日の爲でござるわいなう。

〽我が身の爲めと俊寛が、いふに島長打ちうなづき、ト替つた合方になり、四郎太夫思入あつて、

四郎　今の奴等を見るに附け、此の四郎太夫もあの如く、仁義も知らずに居りましたが、あなたのお蔭で去年から少しは人の道も知り、有難いのが知れましたから、どうか忰は人間の數に入れたくお願ひ申し、濱邊の砂を草紙となし、木の枝もつて書く事を敎へてお貰ひ申しまして、先づいろはから習ひはじめ、今國盡しとやらまでなりました、忰のお蔭でこの親も、七といふ字は十の字の棒を右へ曲げることを、覺えましてござりまする。

太郎　お師匠さまが此の島へおいでなされぬことならば、なあ父さん、

四郎　おゝ手前ばかりか、おれも一生、いろはも知らずにしまふところ、

太郎　どうぞこゝに何時までもおいでなされて讀物でも、教へて下さいますやうに仕度いものでござりまする。

四郎　えゝ、手前勝手な事を言ふな、われはそれでよからうが、俊寛さまは一日も早く赦免の御沙汰があつて、お歸りなさらにやいけぬわい。

太郎　そりやさうでもあらうけれど、今お師匠さまにお分れ申すと、もう手習が出來ぬから、お赦になるのは嬉しいが、お別れ申すが悲しいわいの。

〽悲しいわいのと涙ぐみ、慕ふ心を不便に思ひ、（ト太郎愁ひの思入。俊寛も思入あつて、）

俊寛　それは氣遣ひせぬがよい、今爰にゐた三人が隱岐や伊豆の流罪と違ひ、鬼界ケ島へ來た者は決して赦免がないといへば、我が命數のあらん限り、爰でそなたに教へてやるぞ。

四郎　いや今の奴等がそんなことを、あなたに申しましたのは、皆嘘でござりまする、此の島へ流罪になつた人も昔から幾等もありましたが、赦免になつたといふ事も親父の話しに聞きましたから、生涯都へお歸りが出來ぬといふでもござりませねば、必ずきな〳〵お案じなされますな。

俊寛　その志しは忝ないが、都へ歸らば清盛の下知を受けねばならぬゆゑ、却つて爰に居る方が、

結句心が安からう。

四郎　そりやあさうでもござりませうが、都においでなさる御子様方や奥様が、嘸お待兼ねでござりませう、其のお心をお察しあつて、早くお赦がありますやう、神信心をなされませ、何にいたせ四郎太夫がお祝ひ申した此の鯛を、焼いて上げたいものなれど、焚火で焼いては旨くない、これは家へ持つて歸り炭火で焼いて後までに、太郎に持たしてよこしませう。

俊寛　それは猶更忝けない、面倒ながら頼みます。

四郎　なに面倒なことがござりませう、何の造作もござりませぬ。

太郎　それでは父さん、この鯛を、

四郎　家へ持つて行つてくれ。

太郎　あい〳〵。（ト鯛を取つて）左様なればお師匠さま、

俊寛　又後に逢ひませう。

四郎　どりや拵へて上げませうか。

〽海より深き師の恩に、まめ〳〵しくも親と子が濱邊をさして歸り行く、二人が影を見送りて、

ト四郎太夫俊寛へ辭儀をなし、太郎鯛を提げ波の音を冠せ花道へ入る、俊寛跡を見送り、思入あつて、

俊寛　あゝ世に人鬼はなきものぢやなあ。彼等親子がなかりせば今日まで命保つまじきに、かゝる孤島へ流人となり、深き因みを結ぶのも、これも宿世の奇縁ならん、これに附けてもあの太郎、砂に殘りしこの文字、

〽見るに附けても恩愛に、又もや胸の濕り勝ち、〽さし來る汐の磯端傳ひ、歩む素足も濱風にさそはれ來る成經康頼兩人が、僧都の小家を指さして、

ト是れへ波の音を冠せ、俊寛よろしくこなし、花道より成經康頼兩人總髪やつれたる鬘、好みのこしらへにて出來り、花道へ留り、

成經　あれ見られよ康頼殿、俊寛殿には茅屋に一人、閑居めされてござる樣子。

康頼　幸ひ今日は凪なれば、あれへ參つて打ちくつろぎ、

成經　あたり憚る家もなければ、

康頼　過ぎ越し方を語り合ひ、

成經　互ひに憂さを、

兩人　晴し申さん。

〽軒を目的に寄る波の、打ちつれ來たる友衞、

ト波の音を冠せ、兩人平舞臺へ來る、此の内俊寬火を焚き居る、

成經　俊寬殿には折よくも、

康賴　今日は庵に、

兩人　在せしか。

〽おとなふ聲にこなたを見返り、

俊寬　おゝ、これは成經殿康賴殿、逢ひたう思うて居しところ、よくこそ尋ねて下された。

成經　この程よりの霖雨に笠の用意のあらざれば、是非なく小屋に降籠められ、空しく月日を過してござる。

康賴　今日は快晴いたせしゆゑ、僧都は如何めされしか、兎にも角にもおとづれんと、打ち連れ立ちて參つてござる。

俊寬　われ等も尋ねて參らうと思うて居れど、此の程の病後より、身體弱りて心に任せず、不參の段はお許し下さい。穢くろしうとも、先づ〳〵是れへ住はれよ。

〽破れし筵も今日の身に、心ばかりの客設け、

ト俊寛小屋の内より島筵を出し、舞臺眞中へ敷く、

成經　これは〳〵僧都には、お手づから筵を敷きたまひ、我々共の款待なら、必ずお構ひ下さるな。

康頼　流人となりては乞食同然、木の葉を集めて蒲團となし、寒夜を凌ぐ今の身の上。

成經　なに、敷物に、

兩人　及びませうや。

〽會釋をなして兩人が、設けの筵に坐しければ、僧都はほた〳〵打ち悦び、

ト成經康頼筵の上へ住ふ。俊寛思入、合方になり、

俊寛　かゝる孤島へ流人となり、便りに思ふは御兩所のみ、されば三日逢はざれば三月も逢はぬ程に思ひ、いと懷しく覺えまする。

成經　それは僧都のみならず、此の成經も康頼殿も西を見ても東を見ても、皆この島で產れたる漁業の島人ゆゑ、詞敵になる者なし。

康頼　都の者は三人のみゆゑ、此の程よりの霖雨に、僧都は如何に在すかと噂を致さぬ日とてはなく、快晴なすを待兼ねて連立ちこれへ參つてござる。

成經　斯うして三人打ち寄りて、昔語りをいたすのが、

康賴　詩歌管絃の團居より、遙かに勝りし今の樂しみ。

俊寬　何時寄合うても越方の話しは盡きぬ濱の眞砂、思へば去年の秋の末初めて此處へ來た時は、岩打つ波の音烈しく枕につけど寐られざりしが、月日のたつに隨ひて遂には馴れて忘れしが、たゞ夢の間も忘れられぬは、妻子を殘せし都の事、流人へ便りを止むれば如何なせしか安否も分らず、是れのみ心に掛つてござる。

成經　俊寬どのなりわれ〲なり、させる罪もあらざるに、淸盛おのか權威に誇り、流罪にさせしも、都より遙かに遠き薩摩潟、假にも鬼の住むといふ、鬼界ケ島へ流せしは、手をおろさずに殺す所存。

康賴　源氏が今に榮えなばかゝる非道はあるまじきに、義朝は內海に亡び、忽ち源氏は衰へて平家盛んに成り行くも、世の盛衰とはいひながら、思へば殘念至極でござる。

俊寬　五穀は元より草木もあらざる邊土の鬼界ケ島、かゝる孤島へ流されて艱難辛苦に及ぶのも、是れも其の身の爲せる業、今更言ふも詮もなし。

成經　なに、今更いふも、

兩人　詮なしとは。

俊寛　夫の佛説に言ふ因果應報、榮枯得失は世の習ひ、今我々が憂き目に逢ふを、只此の世の事とのみ思ふは、それぞ凡夫の至りなり、罪を天に得る時は言ひ解くとも其の甲斐なし、平家の一門日に増して悪運増長なせしゆゑ、打ち捨て置かれず滅ぼさんと、成親卿が企てに同意なしたる者共は幾何なるや數を知らず、時到りて事成らば天下に其の名をあらはさん、又事成らずして露顯なさば、罪せられんは元より覺悟。

成經　既に其の折清盛が我意に募りて、我が父へ與せし同意の者共、西光法師同樣に斬首の刑に逢ふところ、内府公の諫言にて危ふき命助かりて、一同流罪になつたるは、これ神明の冥助であらうか。

康頼　それゆゑ我々兩人は、鬼界ヶ島へ去年の秋流罪になりて來りし時より、熊野權現を勸請なし、歸洛の御沙汰あるやうに日夜祈願を掛るのに、僧都は出家にありながら何とて祈りたまはぬぞ。

〽いふに俊寛打うなづき、

俊寛　人自から其の恥を知らば只其の過りを改むるにしかず、僧都が熊野を祈らぬは恐るゝ事のあればなり、人の成せる禍は脱るべきことあれど、自ら成せる禍は必ず脱れがたし、されば北野の神の御歌にも、心だにまことの道に叶ひなば祈らずとても神や守らん、夫の菅家の大賢すら無實の罪

脫れがたく筑紫へ左遷になりたまふ、僧の身を以て名利の其の爲めに成親卿の義兵に與なし、其の職にもあらずして兵士と共に肩を並べ、世を亂さんと計りしは、これ自ら成せる禍ゆゑか、る憂き日に今生で、逢ふは前世の惡報なり、その盡くる期に至りなば、必ず赦免があるでござらう。

成經　成程僧都の言はるゝ如く自ら成せる禍ゆゑ、まことに是非なきことながら、左いふ御身は先帝の御寵愛深くして、しかも勅願の大御寺、

康頼　法勝寺の執行にて官位は重き權僧都、白川の御坊京極の宿所、鹿ケ谷の山莊は綺麗壯觀いふばかりなし、

俊寛　殊に十八ケ所の莊園たまはり何不足なき身なりしも、去年より鬼界ケ島へ流され、早や二歳の星霜經れど、たゞの一夜も樂々と枕につきしこともなく、

成經　艱難辛苦したまふゆゑか、未だ年さへ四十路の上を、多くも過しめされぬに、

康頼　剃らねば髮も長く延び、雪を欺く白髮となり、腰に荒布を引き纏ひ、

俊寛　問ふ人とても荒磯に、差出し岩を小楯となし、

成經　竹の柱に松を軒、屋根は藻屑で覆へども、

康頼　雨は更なり漏る月の、影もいぶせき此の小屋に、

俊寛　梢を落す松風や、
成經　磯の千鳥を友となし、
康頼　肱を枕に、
俊寛　夢も結ばず越方を、
成經　思へば袖に時雨して、
康頼　かわく間ぞなき流人の身。
俊寛　これ皆前世の、
三人　宿業ぢやなあ。
〽手に手を取りて三人が憂きを語りて袖絞る、時しも風のまに〳〵に遙かに聞ゆる螺の音、
俊寛耳を欹てゝ。（ト三人よろしく思入。風の音竹螺の音、俊寛思入あつて、）
俊寛　はて、俄に聞ゆる螺の音は。
〽傍の沖を打ち見やり、
成經　あれ見られよ俊寛殿、汐の曇りにはきとは知れねど、幕張りなせし大船は、漁る船にはよもあらじ。

康頼　何さま、正しく都の船ならん、さすれば又もや流人なるか、若し又我々三人が、赦免の船にもあるべきか。

成經　着岸なすを彼處で待ち受け、

康頼　船の實否を見屆け申さん。

俊寛　御苦勞ながら御兩所には。

兩人　心得申した。

〽よろめく足を踏みしめ〳〵彼方の岸へ走り行く、引違へて島長四郎太夫、太郎も共に走り寄り、

ト俊寛向うへ思入、波の音ばた〳〵になり、花道より以前の四郎太夫、後より太郎鯛を籠に入れて持ち出來り、

四郎　俊寛さま、お悅びなされませ。

俊寛　なに、悅べとは。

四郎　お赦がござりました。

俊寛　え、それは實のことなるか。

四郎　今方沖へ大船が碇をおろして繫りましたは、何處の船かと見て居る内、艀の傳馬で乘込みました船頭どのに聞きましたら、去年爰へ流罪になつた其の人達の赦免だと、申しましてござりまする。

〽聞くに僧都は飛び立つ思ひ、（ト俊寛うれしき思入にて、）

俊寛　さてはいよ〳〵、赦免なるとか。

四郎　去年爰へ流罪になつたは、あなた方三人ぎりにござりますれば、あなたもお赦に違ひない。

俊寛　ちえゝ忝ない。

〽天を拜し地を拜し、悅び勇むぞ道理なる、師弟の別れに子は悲しみ、

ト四郎太夫嬉しき思入、太郎はぢつと思入、誂への合方になり、

太郎　それではこれからお師匠さまは、都へお歸りなされまするか。

四郎　おゝ、お赦になればお目出度く、直にお歸りなされるのだ。

太郎　直にお歸りなされるとは、父さん悲しいことだなあ。

四郎　えゝ、何の悲しいことがあるものだ、流罪になつた其の人が、お赦になつて故鄕へ歸るは、此の上もない目出度いことだ、なんだそれに泣顏をして、何が手前は悲しいのだ。（トきつと言ふ。）

〽叱りつくれば、

太郎　今お師匠さまにお別れ申すと、習ひ掛けた國盡しの後を教へてくれ手がないから習ふことが出來ませぬ、此の日本に產れた者が六十餘州の國の名を知らずに居るは恥ゆゑに、お師匠さまにお別れ申すが、おいらは悲しうござります。

四郎　成程そこへは氣が附なんだが、折角手前が覺えかゝつた文字をこれから捨てゝしまへば、やつぱりおれを見るやうに何にも知らずにしまはにやならぬ、悲しいといふは尤もだから、お師匠さまがお赦になつて、都へお歸りなさる時一緒にお供をして行つて、一人前になられるやう文字を敎へてお貰ひ申すがいゝ。

俊寬　僅か去年より二歲の馴染なれどもそのやうに、別れを惜しむ太郎が心、如何にも不便に思ふゆゑ、赦免にならば役人へ僧都が賴うで共々に汝を都へ伴うて、文字は元より學びの道、あつぱれ識者と云はれるやうに、此の俊寬が敎へてやるぞ。

四郎　それでは太郎をお連れ下され、お敎へなすつて下さりますとか。えゝ有難うござります、えゝ、手前もお禮を申さぬか。

〽いふに太郎は手をつかへ。（ト太郎ちつと思入あつて）

太郎　今し方までお師匠さまがお赦になつたらお供して、爰へ書いた山城の都を見物したいものと思ひ

ましたが考へますと、何の頼りもない年とつた父さん一人をこの島へ、どうも殘して行かれませぬから、行きたいことは山々なれど都へ行くのは思ひ切り、常々諭して下すつた親に孝行しますから、便りがあつたらお師匠さま、手本を送つて下さりませ。

〽お願ひ申すと健氣なる、詞に俊寛感心なし、（ト俊寛思入あつて、）

俊寛　おゝ、送つてやるとも〳〵、常に親に孝行せいと我が諭せしを忘れずに、行きたい都を思ひ止り親に孝行なす程に、便りがあらば手本をば送りくれとはよく言うた、俊寛感心いたせしぞ。

太郎　有難うござります。

四郎　親を親とも思はぬが鬼界ケ島の慣ひなれど、親に孝行したいといふこんなことを悴が言ふも、みんなあなたのお蔭ゆゑ、何とお禮を申しませうか、とてものことにもう二三年あなたがおいでなされたら、鬼に等しき島人も少しは開けて末々は人交りが出來ませうから、お留め申して置きたけれど、目出たいお赦を一日でも、どうまあお留め申されませう、あゝお名殘惜しうござります。

太郎　そんなら父さん、お前も御師匠さまにお別れ申すが、悲しいか。

四郎　鬼といはれる島人でも、こんな悲しいことはねえ。

太郎　それぢやあ、おいらが泣いてもいゝか。

四郎　おゝ泣いてもいゝが、お目出たいお赦になるのに涙は不吉だから、悲しからうが我慢をしろ。

へ瞼に餘る涙をば、こらふる親子が心根を、不便と僧都も汐風に濕る袖をぞ濡らしける、かかる所へ成經康賴、心も空に馳せ來り、

ト此の內俊寬四郎太夫太郎よろしく思入、波の音になり、下手より以前の成經康賴出來り、

成經　俊寬殿お悅びあれ、磯邊へ參つて承はりしが、いよ〳〵船は都より、

康賴　赦免の船と申すこと、慥に聞いて參りました。

俊寬　今その事は島長の知せに依つて承はりしが、扨はいよ〳〵赦免になりしか。

成經　僅か二歲たゝぬうち、かゝる御沙汰を蒙りしは、

康賴　日頃信心なし奉つる、熊野三社の加護なりしか。

四郎　これまで五年か十年たゝねば、赦免のことはあらざるに、

俊寬　これぞ賢者の聞えある、重盛公の情ならん。

成經　思へば春は雁金の、

康賴　故鄕へ歸るを羨まし〳〵、

四郎　思召したるあなた方が、
俊寛　赦免に逢うて此の秋は、
成經　故郷へ歸る、
康頼　身の仕合せ、
俊寛　昨日に替る、
四人　悦びぢやなあ。
〽悦び勇む其の處へ、（トばた〳〵になり島人二人出來り、直に舞臺へ來て）
一　これ〳〵島長どの、今度流人の御赦免に、
二　都よりお役人さまが、此の島へお着きになつて、
兩人　今此處へござらつしやるぞ。
四郎　なに、爰へお出でなさる。
兩人　あれ〳〵、向うへお出だ〳〵。
四郎　お役人さまが爰へおいでなさるとは、それは大變だ〳〵、お出迎ひをしざあなるまい。
〽いふ間あらせず向うより赦免の檢使丹左衛門、家來引き連れたゝずめば島長は手を支へ、

ト此の内四郎太夫島人二人花道へ行く、花道より丹左衞門、跡より半纏股引の供兩人して床几を持ち出來る、花道にて四郎太夫こなしあつて、

これは〳〵お役人さま、遠路の所、御苦勞千萬にござりまする。

丹左　こりや島人、昨年流罪にいたしたる、都の者は何れに居るぞ。

四郎　へい、成經始め俊寛、康賴、あれなる磯邊に居りまする。

丹左　案內いたせ、

四郎　はツ。

〽案內につれて靜々と松の小蔭へ立ち休らふ。

へい、三人ともこれに居ります。

丹左　すりやあの、これが流人なるか。

〽顏は黑みて見紛ふ姿、不審たつれば三人は、

ト丹左衞門三人を見て斯くまで替りしかといふ思入、三人前へ出て、

成經　只今お尋に預かりし、去年九月當島へ流罪となりし某は、丹波の少將成經、

俊寛　法勝寺の執行俊寛僧都、

康頼　平判官康頼、
三人　これに控へて居りまする。
丹左　僅か二年經たざるに、以前に替るその姿、いかい苦勞をいたされしよな。
俊寛　まことに以て都人に、お目に掛るも面伏せ、
成經　かゝるいぶせき小屋に住ひ、乞食非人に劣りたる、
康頼　姿となりし我々三人、艱難苦勞いたせしを、
俊寛　御賢察、
三人　下さりませ。
丹左　これまで孤島に長々の艱難辛苦察し入る、然しながら悦ばれよ、此の度中宮御産の祈りに非常の大赦行はれ、流罪赦免の御沙汰なるぞ。
俊寛　すりや、いよ〳〵御産の祈りに、
成經　非常の、大赦行はれ、
康頼　流罪の者は御赦免とな。
四郎　嘸お悦ばしうござりませう。

俊寛 是れに越したる、

三人 悦びあらうや。

へ悦び勇むぞ道理なる。

丹左 只今免状読み聞かさん。

三人 はッ、

へはッと三人手をつかうれば、丹左衛門は威儀を正し、

ト丹左衛門懐より赦免状を出し思入あつて、

丹左 丹波の少將成經、平判官康頼赦免の趣き拜聽あれ。

成經 康頼 はッ、

へ免状開き高らかに、（ト丹左衛門赦免状を開き、）

丹左「中宮御産の御祈りに依つて、非常の大赦行はれ、鬼界ヶ島の流人丹波の少將成經、平判官康頼二人、赦免申し付け候、急ぎ歸洛せしむべきものなり。」

成經 康頼 は、、有難う存じ奉つる。

へ砂にひれ伏し兩人が有難涙に暮れにける、何ゆゑ我れのみあらざるかと、俊寛不審晴れや

らねば、聞く島長は怺へかね、
ト成經康賴平伏なす、俊寛は不審の思入、四郎太夫せき込むこなしあつて、
四郎　あゝもし〳〵お役人樣、今お讀みなされた赦免狀に、俊寛樣がござりませぬが、もしお讀み落しではござりませぬか。
丹左　大切なる赦免狀、何ゆゑあつて讀み落さうぞ。
俊寛　すりや、俊寛はござりませぬか。
丹左　此の免狀に記せしは、成經康賴二人のみ、疑はしくばこれを見られよ。
へ免狀開き見せければ、俊寛這ひ寄り篤と見て、
ト丹左衞門赦免狀を開き見せる、俊寛前へ出でこれを見て、
俊寛　まことにこれは兩人のみ、此の免狀に漏れたるか。
へはツとばかりにどうと坐し、賴みの綱も切れ果てゝ、とかう詞もなかりける。
ト俊寛どうと下に居て、ほつと思入、成經康賴氣の毒なる思入あつて、
成經　赦免は我々二人のみ、俊寛殿のあらざるは、
康賴　入道殿の物忘れか、但しは筆者の過りなるか。

四郎　こんな分らねえことはねえ、同じ科でこの島へ三人一緒に流されたら同じ様に許さにやならぬを、一人跡へ殘すといふはそりや依怙贔屓といふものだ、義理も仁義も辨へぬ鬼同然な島人でも、善いと悪いは知つて居ます、若い奴等が喧嘩をせうとも兩成敗に依怙贔屓をしたことのねえ四郎太夫、都はこれで濟むかも知らぬが、島では誰も承知しませぬ、近い所なら淸盛さまへおれが理窟を言ひてえのだ、こんな分らぬことはねえ、それとも俊寛一人は、

ト四郎太夫腹の立つ思入にて言ふを俊寛留めて、

俊寛　あゝこれ〳〵島長先づ待たれよ、僧都が心を察し遣り、依怙の御沙汰と恨むのは忝けないが、是れにござる丹左衞門殿へ失禮至極、二人が許され俊寛のみ一人赦免に漏れたのは、我が身は同じ罪と思へど、上には我れに許し難き重き罪のあることゆゑ、一人殘せしことならん。

四郎　さういふ譯なら斯く〳〵いふ罪があるゆゑ殘すといふ、先きへ譯を言ふがいゝ、假令重い罪があるとも中宮樣とやら何とやらの、御産の祈りに許さつしやるなら、重い輕いの隔てなく、なぜ一緒に許さつしやらぬ。こんな依怙なことをしては、何の祈禱になるものか。

俊寛　まだ〳〵そんな益なきことを、僧都が迷惑する程に、何も言はずに居て下されい。

四郎　いえ〳〵、留めさつしやりますな、言ふだけ言はねば腹が癒ぬ。

太郎　これ〳〵父さん、お師匠さまの御迷惑になつては濟まぬその上に、禮儀を知らぬ島人とお役人様に笑はれますから、もう好い加減に言はつしやれ。

四郎　えゝ、業の煮えたことだ。

〽我が子に留められ是非なくも拳を握り控へれば、僧都は上使へ打ち向ひ、

ト此の內太郎留めるゆゑ、四郎太夫是非なきこなしにて控へる、俊寛思入あつて、

俊寛　丹左衞門殿に承はりたきが、小松の內府重盛公には天下の政事を行ひめさるか。

丹左　やはり以前に替りなく天下の政事をめさるゝが、名に負ふ賢者の重盛公、仁義を以て六十餘州撫育めさるゝ功顯はれ、まことに四海靜謐なり。

俊寛　然らば大赦を行はるゝも、內府公の御沙汰なるか。

丹左　如何にも、公の御沙汰でござる。

俊寛　むゝ、はて是非もなきことぢやなあ。

〽情も深き重盛の、赦免に漏れし上からは、最早願ひは叶はじと口に言はねど俊寛が、迫る心を成經康賴見るに忍びず氣を慰め、

ト此の內俊寛ぢつと思入、成經康賴も思入あつて、

成經　同じ罪なる僧都のみ鬼界ヶ島へ殘されしは、内府に深き思召しの、あつてのことかと思はるゝ、
康賴　我々これより歸洛なさば、小松殿へ參殿なし、赦免の御沙汰あるやうに歎願なさば仁者の君。
成經　御聞き入れのなき事あらんや、必ず御沙汰があらうほどに、
康賴　都の吉左右、
兩人　お待ち下され。
俊寛　はゝ御兩所の御芳志なれど、かゝる孤島に我れ一人憂きを語らふ友もなく、何樂みに存らへん、御身等歸洛したまはゞ、氣力も弱り起居もならず、
〽言ひ甲斐なくも俊寛は、鬼界ヶ島の鬼とならん。
折角歎願下すつて、赦免の御沙汰に及ぶとも、それまで命保たねば打ち捨て置いて下されい。
〽世を見限りて俊寛が果敢なく死する覺悟をば、それと覺りて兩人が沖に漂ふ捨小舟、兎やせん角と躇ひしが打ち頷いて詞を揃へ、
ト此の內俊寛よろしく思入、成經康賴はどうせうかといふ思入あつて、
成經　父成親に與なして、一味合體せし時に事成らずして捕はれなば、死を諸共にいたさんと誓ひし中の我々兩人、

康頼　赦免の命を蒙るとも、御身一人の死するを見捨て、吾等ばかりが歸られようか、此の儘島に留まつて御身と共に死を遂げん。
俊寛　その志しは忝けないが、まことに得難き非常の大赦、片時も早く歸洛あつて先非を悔いて忠勤な、必ず共に勵まれよ、よしなき僧都に義を立てゝ、島に留まり死を遂ぐるは、近頃以て心得違ひ。
成經　ではござらうが御身の覺悟を、かくと知りつゝ餘所に見て、何とて歸洛いたされうぞ。
康頼　是非とも島に留まつて、生死を僧都と共になし、義を結びたる同盟の、
成經　名義を盡す、
康頼　所存でござる。
〽義を立て通す親友の、爭ふ中へ島長が涙を拭ひ割つて入り、
ト此の内四郎太夫感心の思入にて、兩人の中へ出で、
四郎　あゝお二人樣の今のお詞、赦免になつても義によつて故郷へ歸らずこの島で、生死を一つになさるゝとは、僧都さまからお聞き申した妥等がまことの大和魂、道理に暗き島人のわしさへ感心いたしました、僧都さまもお二人さまが都へ歸つて御沙汰のあるまで、死ぬるなどゝそんな弱い心

をお出しなされず、氣を長くお待ちなされておいでなされませ、及ばずながら是れまでに輪を掛けてわしがお世話をします、氣を取直して下さりませ。

成經　島長どのゝ言ふ通り、我々歸洛いたしなば、此の身に代へても僧都が赦免、

康賴　重盛公へ歎願なし、再び都で三人が面を合はす所存ゆゑ、お待ちなされて下されい。

四郎　あなたが待つとおつしやらねば、折角赦免になつたお二人、この儘島にござつては上へも濟まず、あなたも亦、それでは義理が濟みますまい。

〽事を分けたる島長が、道理も否と言ひかぬれば、丹左衞門も詞を添へ、

ト此の内皆々よろしく思入、丹左衞門もこれを聞き思入あつて、

丹左　いやなに、俊寛殿、三人一緒に此の島へ流罪になりしに御身一人、赦免に漏れて殘さるゝは依怙の御處置と思はれんが、平相國の仰せならず重盛公の仰せなれば、何とて依怙の御沙汰あらん仁惠厚き君なれば深き思召しなくては叶はず、必ず後日に吉左右の御沙汰あるに疑ひなし、今人の詞に附き、死を止まりて相待たれよ。

〽流石内府の家臣とて、仁情厚き丹左衞門が、詞に俊寛承諾なし、（ト俊寛思入あつて、）

俊寛　斯くまで厚き人々の、說諭をいかで無になさん、後日の御沙汰ござるまで、島に殘りて待ち申さ

ん。

丹左　すりや僧都には此の島に、御沙汰のあるまで待たるゝとか。

成經　さすれば我々兩人も、

康頼　歸洛をなして歎願なさん。

四郎　これで此の場も浪風なく、

丹左　海上無事に都まで、

俊寛　目出度く歸洛いたされよ。

〽岩打つ波も穩かにをさまる海の磯端を、息せき駈來る船長が、

ト波の音ばたくになり、花道より灘藏船頭の裝にて出來り、直に舞臺へ來て、

灘藏　はツ、お役人さまへ申し上げまする。

丹左　その方は船頭灘藏、何ぞ火急の用事なるか。

灘藏　俄に風が東南に變り、空に雨を持つて居る上、暴れにならうも知れませぬから、早く御出帆なされませ。

丹左　むゝ、暴れ氣とあれば油斷はならぬが、今宵は當所へ止宿なし、明朝未明に出帆なさん。

灘藏　いえ〳〵猶豫は出來ませぬ、今夜のうちに追風を受け、下の關まで乘込めば、無事に兵庫へ行かれます、是非とも今日暮合までに、御乘船下さりませ。

四郞　如何さまこれは船頭どのゝ、言はるゝ通り暴れ氣があれば、早いがよろしうござりまする。

丹左　然らば猶豫いたさずに、是れより乘船いたすであらう。

成經
康賴　左樣ござらば、是れより直に、

丹左　只今聞かるゝ通りなれば、夕方までに出帆いたさん。

成經　立つ鳥も跡を濁すなの譬もあれば、小屋を片附けて參りたし。

康賴　暫時の內の御猶豫を、何卒お許し下されい。

丹左　夕方まではまだ一時、心置きなく支度めされ。

成經
康賴　忝けなうござりまする。

俊寬　繋ひの船のある所まで、僧都も共々見送り申さん。

成經　決してそれには、

兩人　及びませぬに。

俊寬　いや〳〵、是非とも島の別れに、

成經　左樣ござらば俊寛殿、
康賴　いざ、御同道仕らん。
俊寛　いや、歩行心に任せねば、
四郎　あとよりお連れ申しませう。
丹左　然らば二人は身共と一緒に、
成經　御同道。
兩人　仕らん。
灘藏　さあ、ござりませ。

〽さあ〳〵早くと船頭に、せり立てられて丹左衞門、跡に成經康賴も名殘り惜しげに見返り見返り、濱邊をさして急ぎ行く、

ト波の音をあしらひ、丹左衞門先きに成經康賴名殘り惜しき思入にて花道へ行く、これを灘藏せり立て花道へはひる。

〽跡に俊寛たど〳〵と、杖にすがりて立上りしが、岩に躓き伏し轉ぶを、島長親子介抱なし、

ト波の音をあしらひ俊寛杖に縋り立上り、花道の方へ行きかけ躓きばつたり轉ぶ、四郎太夫太郎介
抱なし、

四郎　ゑゝ危ないことでござりました。

太郎　どこぞお怪我はござりませぬか。

俊寛　いや／＼どこも怪我はせぬが、船場へ早く行かうと思ひ、心は急けど足腰きかず、あゝ殘念なことぢやわい。

四郎　日の暮れまではまだ一時、お急ぎなさるには及びませぬ。

俊寛　一時あれど秋の日の釣瓶落しに暮れ易し、折角見送る心でも出帆しては詮ないこと、四郎太夫殿には御苦勞ながら、暫しの間待たれるやう、船を留めては下さるまいか。

四郎　それは何より易いこと、一走り先きへ行き船を留めて置きませう。

太郎　お師匠さまは、此の太郎が、

四郎　おゝ、お怪我のないやうお供しろ。

太郎　合點でござりまする。

四郎　どれ、出帆を留めて置かうか。

〽砂を蹴立てゝ急ぎ行く。（ト波の音にて四郎太夫逸散に花道へ走りはひる。）

太郎　さあ、手を引いて上げませう。

俊寛　只さへ歩行の自由ならぬに、心も心ならざれば、猶々歩行がならぬわいなう。

太郎　氣をお急きなさらずと、お靜においでなされませ。

〽手を取り勞る折しもあれ、

ト太郎手を取り俊寛立上る、此の時花道の揚幕にて、竹螺の音する。

俊寛　や、あの螺の音は。

太郎　ありや出帆を知らせの竹螺。

俊寛　え、そんなら最早出帆なるか。

〽こりや斯うしてはと行き掛けしが、又もや岩に躓きて轉ぶを太郎が抱き起し、

ト俊寛心の急く思入にて杖を突き、つか〳〵と花道の方へ行き掛け、ばつたり轉ぶ、太郎抱き起し、

太郎　急かずにおいでなされませ。

俊寛　はて、これが急かずに居られうか。

〽太郎に縋りてよろ〳〵と汐に追はるゝ鷺ならで、心は先きへ杖は後、たどり〳〵て、

ト浪の音を冠せ俊寛よろしく思入、太郎に縋りよろ〳〵と花道へ入る。三重波の音にて道具廻る。

（鬼界ヶ島磯端の場）――本舞臺眞中より上手に五尺程の誂への岩臺、これに振好き臺幹の松、上り段の足掛り、向う禿山の遠見、上下欠張り岩組の張物、下手に松の立木、日覆より松の釣枝、舞臺前一面の浪手摺、兩桟敷向う正面三方共水引を打返し浪になり、總て鬼界ヶ島磯端の體。下手丸物の傳馬船に、以前の成經康賴丹左衛門乘り、櫂を突立て、四郎太夫艫綱を捉へ船を留めて居る見得、波の音三重にて道具留る、

〽行空の追手に急ぐ出帆を、止むる島長船頭が爭ふ聲のかまびすしく、

四郎　今僧都殿がござるから、待てといつたら待つてくれぬか。

灘藏　この追風をまじ〳〵と、何時まで待つて居られるものか、きり〳〵艫綱放さねえか。

四郎　いや〳〵是れは放さぬ〳〵。

灘藏　うぬ、さう吐かしやあ。（ト櫂をとつて立ち掛る。）

丹左　こりや〳〵灘藏控へぬか。

灘藏　それだといつて、

丹左　はて控へいと申さば、控へ居らぬか。

灘藏　へゝい、(ト控へる。)

丹左　こりや島長、私用ならば其の方が頼みに任せ猶豫なさんが、赦免は即ち公用ゆゑ、此の丹左衞門が私に相待ち申すことならぬぞ。

四郎　それでは猶豫はなりませぬか。

成經　俊寛どのに逢はざるも殘り惜しくはござれども、これにて逢へば未練が殘り、

康頼　互ひに別れともなきことに成り至らんも計り難し、逢はぬが却つて增しならん。

成經　この儘逢はずに出帆なせば、俊寛どのへは島長より、

康頼　よしなに申し、

兩人　傳へてくりやれ。

四郎　逢はぬが增しでもござりませうが、今この儘にお二人が出帆なされば僧都には、力も拔けて其の儘に、直に死んでしまはれませう、とてものことに今暫しお待ちなされて島の別れに、お逢ひなされて下さりませ。(ト風の音になり。)

灘藏　えゝ段々風が惡くなる、早く出さねばおれが難儀、きり／＼纜放さぬか。

四郎　何と言つても爰は放さぬ。

丹左　強て留めれば是非に及ばぬ、艫綱切つて出船せん。

〽刀の柄へ手を掛けるを、

成經　あいや、暫くお待ち下され。

丹左　なに、暫く待てとは。

成經　あれ〳〵向うへ俊寛どのが、

康頼　杖に縋つて參らるれば、暫くお待ち、

兩人　下さりませ。

丹左　僧都が參るとあるからは、暫く猶豫いたしくれん。

四郎　いや、これでわしも安心だ。（ト この時上手にて、）

太郎　その船待つてくれ〳〵。

俊寛　なう〳〵其の船待つて下され。

〽聲もかれ〴〵俊寛が、こけつ轉びつ馳せ來り、

ト波の音を冠せ、上手より以前の俊寛太郎に縋り出來り、兩人を見て嬉しき思入、どうと下に居て、

成經
康賴　おゝ成經どの、康賴どの。
　　　俊寛どの、ござられしか。

〽船より二人は飛んで出て、よう逢ひに來て下されしと、三人手に手を取交し、嬉し淚に暮れにける。

ト三人手を取り愁ひの思入、よろしくあつて、

成經　折角見送り下されたれど、最早夕陽近ければ、長居のならぬ二人の身の上、

康賴　俊寛どのにも奥方や、息女に言傳ござるなら、何なりとも仰せられよ。

俊寛　御親切の段忝けないが、別に妻子へ俊寛が、申し送ることはござらぬ。

成經　何なき事がござらうぞ。二年この方別れし妻子、雨の夜雪の日は猶更、松吹く風も穩かに枕を高く寐てさへも、夢に忘れぬ都の事、

康賴　斯くまで我々思ふに附け、俊寛どのとて同じ人、恩愛のなきことあらんや、我が身にたくらべお察し申せば、何なりとも仰せられよ。

俊寛　各方が歸洛となり、俊寛一人赦免に洩れ、鬼界ケ島へ殘されしと、聞かば此の地へ殘されしこの俊寛が悲しみより、遙かにまさつて妻や子が歎きはさこそと思はるゝ、只俊寛は無事な

りと、一言お傳へ下されい。

〽言ふ聲さへも汐ぐもり、袖に涙の雨やさめ、丹左衞門も不便と思ひ猶豫いたせば船頭が、

情容赦もあらけなく、

ト俊寛成經康頼三人愁ひの思入、四郎太夫丹左衞門も愁ひのこなし、

灘藏　さあ〳〵夕日は山へ入つた、早く船へ乘らつしやりませ。

丹左　時刻でござれば、疾く〳〵これへ、

成經　只今乘船、

成經康頼　いたすでござる。

俊寛　然らば最早出船めさるか。

成經　まことにお名殘り、

三人　惜しうござる。

〽惜しむ名殘りに三人が、物も得言はず涙に暮れ、果てしなければ丹左衞門、

ト三人よろしく名殘を惜しむ思入、丹左衞門思入あつて、

丹左　何時まで言うても名殘りは盡きじ、

灘藏　さあ〳〵早く乘らつしやい。

〽せり立てられて兩人は、袖に淚を包み兼ね、是非もなく〳〵乘り移れば、又もや艫綱引き留めて、

ト灘藏にせき立てられ、成經康賴是非なく船に乘る、四郞太夫又綱を取り引き留める。

四郞　あゝこれ、今暫く待つて下せえ。

灘藏　又島長が艫綱を、

丹左　邪魔立ていたさば、

〽拔く手も見せず一刀に纜はツしと切り捨つれば、船は忽ち十反ばかり、

ト丹左衞門拔打ちに艫綱を切る、灘藏櫂を突立てる、これにて船は花道へ行く、四郞太夫は綱を持つたまゝ後へ倒れる、俊寛は思はず舞臺端へつか〳〵と行き、

俊寛　最早これが今生の、

成經
康賴　え、

俊寛　いやさ、無難にござれ。

三人　さらば。

〽互ひに見送り見返りて、聲を掛け合ふ憂き別れ、側の見る目の哀れにも跡白浪と漕ぎ行きぬ。

ト此の内浪の音を冠せ、三人別れの愁ひよろしく、船は段々向うへ行く、三人聲を掛け合ひ花道へはひろ、俊寛どうとなる。

〽僧都はほつと吐息をつき、

俊寛　南無三、今の兩人に頼むべきことありしに、

四郎　そりや何事でござります。

俊寛　この俊寛が今日までも、肌身を離さず所持なしたる閻浮提金の觀世音、これを娘に送らんと思ひしことを打忘れ、殘念なことをいたしたり。

四郎　まだ元船まで行かざれば、後より船で追駈けたら、

太郎　父さん行かれぬことはない。

四郎　さうだ〳〵、お届け申して上げませう。

俊寛　それは何より忝ない、然らば是れを届けて下され。

〽肌に附けたる守より、一つの厨子を取り出せば、島長しつかと受取りて、

ト俊寛肌に附けし錦の守より、誂への小さき廚子入の觀音を出し四郎太夫へ渡す。

四郎　二梃艪立てゝ行つたらば、元船までは瞬くうち、

太郎　父さんおれも脇艪に行かうか。

四郎　おゝ、悴來い。

〽歎きを餘所に島長が、勢ひこんで、

ト浪の音烈しくばた〳〵にて、四郎太夫太郎上手へはひる。

〽跡に俊寛茫然と、

俊寛　思へば同じ罪科にて、同じ鬼界ケ此島へ流人となり、二人は許され我一人赦免の狀に洩れたるは神明佛陀も見捨てたまふか。

〽えゝ淺ましの命やと、身を掻きむしり無念泣き、

斯かる事とも知らざれば、赦免となつて妻や子に再び逢はんと煩惱の、絆に迷ひ存らへしは出家の身にて愚なり。

〽あら恥かしの我が身ぞと、又も涙に時うつる、矢聲をかけて島長が乘出す船を見送りて、僅の間と思ひしに、早や四五町は隔ツたり。

〽見送る船は島隠れ、見えつ隠れつ汐曇り、思ひ切つても凡夫心、岸の岩間へ駈け上り、

ト此の内俊寛延上つても見えぬ思入あつて、上手誂への舞臺へ攀ぢ登り、松に取り附きよろしく向うを見て、

〽松にすがりて打ち見やり、

黄昏時に見えわかぬか。

〽泣き叫びても哀れをば、問ふ人とても鳴く千鳥、幾重の袖や、

ト俊寛よろしく思入あつて岩臺より落ち、起上つて向うをきつと見る、浪の音カケリ千鳥笛、相引にて千鳥を大分日覆へ引上げる、此の見得よろしく三重にて、

幕

重盛諫言（終り）

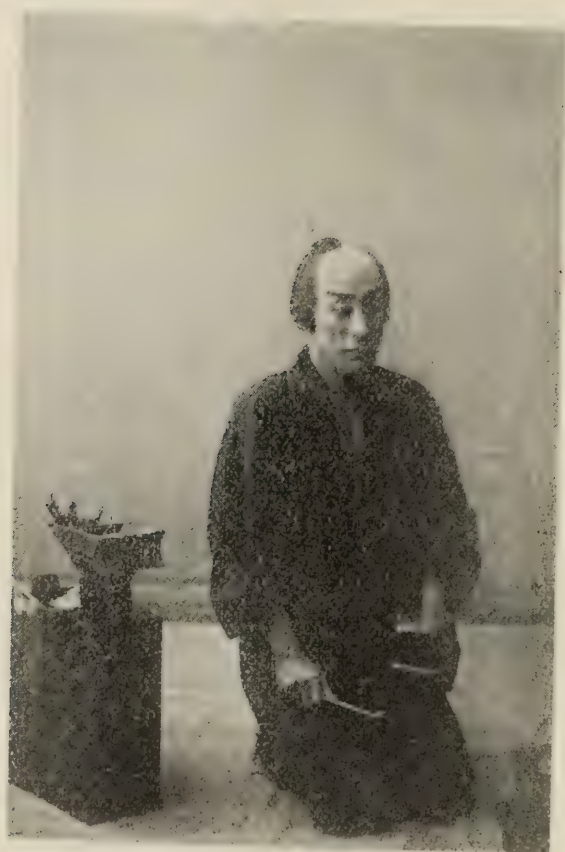
梅雨小袖昔八丈

享保時代の政談を歌舞伎に寫す新材木町たれ白子屋の名代娘が見世の手代の忠七と忍びいでたる時鳥啼く音血を吐くいましめの繩より太き髮結の新三が内へ彌太五郎が貰ひに來たる顏づくも恥辱を受て物別れ負けぬ鰹を家主が半分わけた扱ひのかねて遺恨も深川へ夜網と妻を僞つて再び川合閻魔堂橋心を鬼に源七が身の佐賀町の居酒屋夫婦が意見話も菅簔の證據に隱れぬ人殺し最一つからむ亭主殺しも下女のお菊が自殺して我身に負ひし罪科を人に讓らぬお熊がけなげさ天晴明智の越前侯がさばきに分る善惡邪正

「髪結新三」は明治六年六月、作者五十八歳の時の作で、中村座に書下された。五世菊五郎の得意とした世話物中出色の作として定評がある。はなし家の春錦亭柳橋が得意とした白子屋政談を脚色したものである。新三内の場に於けるすつきりとした江戸情調ともいふべき場面や、家主長兵衛を勤めた仲藏が、實にぴつたりと柄と役とが適合して至妙の藝を見せたとか、今の松助である尾上梅五郎が、下剃勝奴として技を揮つたことなどが、逸話として殘されてゐる。大詰に大岡の裁決を附したのは、菊五郎が閻魔堂橋で殺されたきりでは心持が惡いといふので、加へられたものであるといふ。

書下しの時の役割は尾上菊五郎（髪結新三）、岩井半四郎（白子屋の娘おくま）、中村仲藏（彌太五郎源七、家主長兵衛）、坂東家橘（手代忠七）、中村壽三郎（車力善八、佐賀町の居酒屋三右衛門）、瀨川路之助（白子屋の下女お菊）、中村鶴藏（長兵衛女房お角）、尾上梅五郎（下剃勝奴）、中村荒次郎（夜そば賣り仁八）、坂東薪左衛門（合長屋權兵衛）、中村成藏（加賀屋藤兵衛）、岩井しげ松（白子屋の後家お常）、尾上尾登五郎（魚賣り新吉）等であつた。

挿繪にしたのは先代菊五郎の扮した新三の舞臺寫眞、及び初演當時の繪草紙の一部である。

大正十五年一月　　　　　　　　　　　校訂者

梅雨小袖昔八丈（髪結新三―四幕）

序幕

白子屋見世の場
材木町河岸の場
永代橋川端の場

〔役名〕―髪結新三、車力善八、加賀屋藤兵衛、下剃勝奴、白子屋若い者千助、同萬藏、金貸高崎利兵衛、白子屋手代忠七、彌太五郎源七。白子屋娘お熊、同後家お常、同下女お菊、其他。〕

〔白子屋見世の場〕―本舞臺三間の間常足の二重、上の方一間障子屋體、正面白子屋といふ紺の暖簾口、上手一間間平戸の戸棚、下手茶壁、これへ狀差し、もろ〳〵の帳面など宜しく書割り、例の所門口、此の外一面材木を立掛けし書割りの張物、總て新材木町白子屋見世先きの體。門口に千助、萬藏着流し前垂掛けの若い者にて立掛り、紺半纏の〇□の大工二人、買物買ひにて立掛り居る、此の見得角兵衛獅子の鳴物にて幕明く。

〇　木口が揃はねえぢやあ仕方がねえ。

□　外の家で買つて行かう。

千助　これはお生憎でございました。
萬藏　斯うして門並材木屋も軒を並べた材木町、外の家へ買に行かずに此方の見世へ買ひに來るのも、
○　白子屋といふ此方の暖簾に、愛嬌があるからだが、
□　家のおむすは三十二相、縹緻が揃つて居るけれど、
○　いつでも木口が揃はぬとは、何にしろ困つたものだ。
□　毎度御贔屓にして下さりまして有難うございますが、生憎品が切れましてお氣の毒でございます。
千助　まあ彼方へお入りなさいまして、一服あがつておいでなさりませ。
萬藏　それぢやあ、一服やつて行かうか。
○　これさ、急ぎの仕事だ、早く來やれ。
□　せめて娘の顏を見て、
○　えゝ、助兵衛根性を出すなといふに、（ト大工兩人は下手へ入る、千助萬藏内へ入り、）
□　みす〳〵儲かる商ひも、品がないゆゑ口をつぼめ客を逃してしまふとは、こんな馬鹿々々しいことはない。
千助

萬藏　身上が廻つて來ると、見世の者までとんまに見えるが、それはさうとお熊さんの所へ、いよ〳〵聟さんが來るさうだね。
千助　お菊どんの伯父の、車力の善八が橋渡しで、御町内の加賀屋さんが媒人をするさうだ。
萬藏　どんな聟さんか知らないが、家のお熊さんの亭主になるとは、いや氣の悪いはなしだなあ。
千助　段々聞けば、大傳馬町の桑名屋の三番々頭で、又四郎といふ人ださうだが、五百兩の持參金で聟に來るといふはなし。
萬藏　はゝあ、それぢやあやつぱり金づくで聟さんを取る積りか、何でも當時は金の世界、どんな醜い男でも、金さへあれば色男だ。
千助　なんぼ金づくとはいひながら、家のお熊さんは可哀さうだ。
萬藏　さうして聟さんは、どんな男だらう。
千助　しかし南瓜の當り年で、あのお熊さんの聟になるとは、
兩人　仕合せものだ。
ト花道より利兵衞羽織着流しにて出來り。直に門口へ來て、
利兵　御免なせえ。（ト内へ入る、千助、萬藏、利兵衞を見て）

千助　これは高崎屋利兵衛樣、

萬藏　何ぞ御用でございますか。

利兵（上手へ住ひ。）用といふは外でもない、後家のお常どのにお目にかゝりたいから、奧へさう言つて下せえ。

千助　へい〳〵、畏まりました。（ト立ち掛る、此の時奧にて。）

お常　高崎屋さんがおいでとあれば、それへ行つて逢ひませう。（ト奧よりお常着流し前帶、後家のこしらへにて出來り、よろしく住ひ。）これ萬藏、お茶を上げぬか。

萬藏　へい〳〵、畏まりました。（ト奧へ入る。）

お常　これは〳〵利兵衛樣、ようおいでなされました。

利兵　あんまりよくも參りませぬ、昨日までのお約束ゆゑお待ち申して居りましたが、何の御沙汰もござらぬから、それでわざ〳〵來ましたのぢや。

お常　それは〳〵お前樣に御足勞を掛けまして、申し譯もござりませぬ、昨日までとは申しましたが少少手筈が違ひましたゆゑ、申し譯にあがりませうと存じて居つた其の所へ、わざ〳〵との此のお運び、段々延び〳〵になつてお氣の毒ではござりますが、今四五日のその中には、きつと金子も

調ひますれば、どうぞこれまでのお待ちついでに、もう四五日の所をば、お待ちなされて下さりませ。

利兵　あゝこれ〳〵お常どの、其の四五日も此間から度々のことゆゑ聞飽きました、庄三郎殿が死なれて後女主人の此方の家、木口の仕入に差支へ、困ると聞いてお貸し申した金も大枚五百兩、その河岸揚げの期月が來ても何も白木の顏をして、返す日限の杉丸太を節だらけも構はずに、人をいゝためにしたみ板で、しぶ〳〵として居られては癪に障つて尺板に、此方も赤身のいゝたけ高、もう松板にはなりませぬと足場丸太の足を運び、四角四面の催促も五分か六分の禮金で、一寸脫れに延されては氣をもみ板のわしが心、これけやきではござらぬぞや。(ト叩き立てゝ言ふ。)

お常　さゝ、そのやうにおつしやりますは御尤もではござりまするが、今度ばかりはお約束を違へぬと申すその譯は、何をお隱し申しませう、近々に娘の熊へ聟を迎へる積りゆゑ、持參の金子にて借財の濟し方をいたしますれば、永うとは申しませぬ、どうぞ四五日の所をお待ちなされて下さりませ。

利兵　(これを聞き思入あつて、)そんなら何と言はつしやる、あの娘御お熊どのへ聟を近々取らつしやるとか、成程それはよい思ひ付きぢや、又あのやうな器量では持參の金を澤山に持つて來るとも恥

かしからず、そんなら其の持參の金で、きつと御返濟をなされるかな。
お常　きつと埒をば明けますれば、今四五日の所をばお待ちなされて下さりませ。
利兵　さういふ慥な見當があれば、待たれぬ所を勘辨して、四五日待つて上げませう。
お常　何分お願ひ申しまする。
利兵　先づ斯う話しが極つたら、お暇いたしませう。（ト茲へ奥より萬藏茶を汲んで持つて出で）
萬藏　お茶をおあがりなされませ。
利兵　もう歸るから構はつしやるな。
お常　まあ御ゆるりとなされませ。
利兵　いや、茶ゝようにしても居られませぬ。（ト茶をぐつと飲んでむせるゆゑ）
お常　あゝもし、惜しみはいたしませぬ。
利兵　茶てく、咽るといふは、切ないものでござるわえ。
お常　（思入あつて）その切ないより金ゆゑに、娘に聟をとらせる切なさ。
利兵　それも出ばなの山吹に、惚れた茶筌の後家御どの、
お常　左樣なれば利兵衞樣、

利兵 お茶らばでござる。

ト やはり角兵衛の鳴物にて利兵衛下手へ入る。千助、萬藏後を見送り、

千助 利兵衛さんといふ人は、眞面目な事をいふかと思へば、譯もわからぬ材木盡しを、列べたてたる金の催促、

萬藏 茶に浮された寢言のやうな詰らぬことを言つて行くとは、やつぱり人を茶にすると見える。

ト 兩人そこらを片付る、やはり右鳴物にて花道より善八、ぼつと鬘木綿やつし裝にて結納の目錄書を持ち出來り、直に舞臺へ來り、内へ入り、

善八 お袋さま、これにおいでなされまするか。

お常 此方は善八どの、見れば何やら書いた物を、そりや何でござる。

善八 唯今私宅へ御結納の目錄書が屆きましたゆゑ、持つて參りましてござりまする。

お常 ほんに今日は日柄が好いゆゑ、結納の取極めをすると、お媒人から昨日のお使ひ、さうして加賀屋藤兵衛樣も、

善八 唯今後からお出でござりまする。

千助 そんならいよ〳〵御結納が參りまするか、

萬藏　それはお目出度うござりまする。
お常　これ萬藏、此の通りを請取りにして、ちよつと耳をかしや、（ト萬藏に囁く。）
萬藏　承知いたしました。
　ト件の目錄書を持ち奧へ入る。と花道より加賀屋藤兵衛羽織袴一本差しにて先きへ立ち、後より若い衆二人油單を掛けし結納の釣臺を擔ぎ出來り、花道にて、
○　左樣なら、向うのお家まで、
□　擔いで參るのでござりますか。
藤兵　もう少しだから、急いでくれ。
○□　畏まりました。（ト舞臺へ來り、若い衆釣臺を門口へおろす、藤兵衛門口へ入り、）
藤兵　御免下さりませ。
善八　さあ〳〵藤兵衛樣、お袋さまもお待ち兼ね、
お常　先づ〳〵此方へお通りなされませ。
藤兵　御免下さい、（ト上手へ住ひ、）其の品を是れへ、
○□　畏まりました。

ト釣臺より鰹節臺、角樽など取出し内へ入れる、善八、千助よろしく二重へ列べる、此のうち奥より萬歳祝儀包みを盆に載せて持つて出る。

千助　何方も大きに御苦勞でござりました。

○□　左樣ならばわたくし共は、(ト行きにかゝるを、)

お常　あゝもし、暫らくお待ち下さりませ、(ト祝儀の包みを取つて、)これ千助、これをお供のお二人へ、

千助　畏りました、(ト祝儀包みを受取り、門口の方へ來り、)是れはわざツと御祝儀でござります。

ト出す、若い衆兩人これを貰ひ、

○　もし旦那樣、御祝儀をいたゞきました。

□　よろしくお禮を、お願ひ申します。

藤兵　これは〳〵御丁寧に供の者へ、御心配下すつて有難うござりまする。

お常　いえもう、ほんのしるしばかり、お恥かしうござります。

○□　左樣ならお先きへ歸り、(ト言ひかけるを、)

藤兵　えへん〳〵。(ト咳拂ひをするゆゑ、若い衆兩人心付き、)

○□　お開き申します。(ト兩人釣臺を擔ぎ下手へ入る。)

藤兵　扨今日は日柄もよろしく、かね〴〵のお約束ゆゑ、結納のしるしお送り申しまする、幾久しく御受納下さりませ。

お常　御丁寧なるお贈り物、目出度う受納いたしまする、（ト請取を出し、）則ちこれはお請取り、そちらへお納め下さりませ。

藤兵　慥に受納いたしまする。（ト請取を懐中する。）

善八　お袋さま、嘸御安心でござりませうな。

お常　いやもう善八どのゝお世話にて、好い聟どのが極りまして、結納までをこのやうに、取極めなした上からは、何より安心でござるわいなう。

藤兵　お娘御のお熊どのにはお氣に入らぬか知らねども、大店向きの桑名屋で三番番頭までに勤めあげた聟どのは辛抱人、殊に又五百兩といふ持參金を持つて參れば、好い聟がねといふものぢや。

善八　口不調法な私が橋渡しをいたしまするも、一人の姪が此方様で五ツの年からお世話になり御恩を受けたお禮と思ひ、走り廻りをいたしましたも、斯う御相談が調ひますれば、お世話をした甲斐もあり、こんなお目出度いことはござりませぬ。

お常　僅かな恩義を其のやうに、思うて下さる志し忝なう思ひます。

藤兵　又婚姻の取結びは、何れ近々吉日を選んで御沙汰いたしませう。

お常　何分ともに藤兵衛様、よろしうお願ひ申しまする。

ト爰へ奥よりお菊、島田鬘、前垂がけ、やつし裝の下女にて茶を汲んで出來り、

お菊　あなた、お茶をおあがりなされませ。（ト藤兵衛へ出す、）

藤兵　必ずお構ひ下さるな、（ト茶碗をとりながら、お菊を見てこなしあつて、）扨は此のお女中が、善八どのの姪でござるか。

善八　左樣でござります、此のやうお目出度い所で申すも如何でござりますが、兩親ともに死別れ後に殘つた借財の抵當に、既に苦界へ沈む身を、お情深い此方樣の御夫婦樣に助けられ、お世話になつて居りまする。

藤兵　さうでござるか、水仕奉公してござれど尋常なつまはづれ、年頃といひ器量といひ今に好い所へ緣附いて、善八どのも樂が出來よう、好いお樂しみでござるなう。

お菊　不束なわたくしを、そのやうにおつしやりましてはお恥かしうござります。

お常　五ツの年より内へ引取り、娘の熊と姉妹同樣育てましてござりますが、まことに素直な生れにてよく働いてくれますゆゑ、わたくしも世話甲斐がござりまする。

善八　それといふもお袋さまのお躾がらが宜しいゆゑ、一人の姪を拾ひまして、こんな有難いことはござりませぬ。
藤兵　左樣なら婚姻の當日の御相談には、又改めて上りませう、先づ今日は結納のみ、是れにて目出度く開きませう。
お常　まあ御ゆるりとなされませ、何はなくとも娘が身祝ひ、一口あげたうござりますれば、
藤兵　その思召しは有難いが、ちと免れぬ用事もあれば、今日はお預けに致します。
お常　左樣でもござりませうが、決してお手間は取らせませねば、
藤兵　いえ、其の儀は平に御無用に下さい。
お常　そのやうにおつしやるをお留め申すも御迷惑、左樣ならお詞に任せ、今日はお預りにいたします。
藤兵　どうぞさうして下さりませ、左樣ならお常どの、
お常　お媒人の藤兵衞樣、
藤兵　目出度くこれにて開きまする。（トやはり角兵衞の鳴物にて藤兵衞花道へ入る、）
善八　どれ、わたくしもお開きに、（ト立ちかゝるを、）
お常　あゝこれ善八どの、ちよつと待つて下され。

善八　何ぞ御用でござりまするか。
お常　(思入あつて、)千助萬藏二人の者は、此の結納の品々を奧へ運んでたもいなう。
千助萬藏　へい〳〵畏まりました。(ト兩人にて件の結納物を持つて奧へ入る。)
お常　これ善八どの、兄世の者の手前もあれば、高い聲では言はれぬが此方の蔭で白子屋の行き立ち難い身代も、又立てなほるやうになり、過ぎ行かれたる連合も嘸冥土で悦びませう、何れ萬端調へば又改めて禮をしますが、これはほんの娘が身祝ひ、納めて置いて下さりませ。

ト祝儀包みを善八の前へ出すを、善八押し戻して、

善八　どういたしまして、とんでもない、此のやうな御心配をお貰ひ申しては濟みませぬ、只今も申す通り五つの年からお菊めが御恩になりし此方樣、度々のお物入りに嘸御不都合でござりませうと思へどかひなき貧乏暮し、金錢づくの御恩返しは一生涯出來ませぬが、彼方此方と駈廻り、身體で御恩を返しまするも仕合せと達者なおかげ、かやうな物を頂きましてはどうも心が濟みませぬ。
お常　さうであらうが娘の身祝ひ、納めて置いて下さりませ。
善八　いえ〳〵、それでは濟みませぬ。(トよろしく爭ふ。)
お菊　もし伯父さん、折角の思召しゆゑお貰ひ申して置かしやんせ。

善八　そんなら貴方のお詞に任せ、お貰ひ申しておくとしませう。

ト爰へ暖簾口より、お熊振袖娘にて出來り、

お熊　善八どの、ようおいでなさんしたなあ。

善八　これはお孃樣、御機嫌ようございますか。

お常　形ばかり大きくても、まだ年端が行かぬゆゑ、氣隨で困りますわいなう。

お熊　（よろしく仕ひこなしあつて）もし母さん、今見世の者が結納ぢやと、奥へ持つて參りましたが、ありや誰のでございますえ。

お常　はて、誰のとはどうしたものぢや、其方へ聟を迎へまするしるしに貰うたあの結納。

お菊　御婚禮のあることを、未だ御存じではございませぬか。

お熊　さあ、此の間一丁目の芝居へ行つた其の折に、向うの棧敷に居たお方を聟に迎へる氣はないかと母さまがおつしやれど、わたしや好いとも惡いともまだ御返事はしませぬのに、結納まで取交し、お取極めをなされますとは、そりやお胴慾でございますわいなあ。

お常　さゝ、其の恨みは無理ではない。定めて氣には濟むまいが、あのお人をこの家へ聟に入れねば白子屋の、身代が立たぬわいなう。

お熊　そりや何ゆゑでござりまする。

お常　詳しいことを話さねば、つれない母と思ふであらう、まア一通り聞いてたも、（ト合方になり、）改め言ふではなけれども、亡くなられた連合は堅い氣質のお人にて、此の身代が大切と夜の目も寐ずに稼がれしが、度々の類燒や不慮な事のみ打ち續き、何時か身代しもつれて一年增しに材木の仕入れも出來ぬやうになり、殖えるものは借財ばかり、既に戸でも下さうかと思ふ所へ氣病にて連合には病氣づき、それが元にて終には病死、代々續くこの家を潰すは如何にも殘念ゆゑ、主人の出來るそれまでと借財方へ言譯して去年までは凌ぎしが、何をいふにも女の甲斐なさ、今五百兩といふ金がなければ家は分散して、身代限りをせねばならぬ、どうしたものと思ふ矢先き、善八どのが親切に五百兩の持參をば持つて來る聟どのを橋渡しして下されしは、彼世にござる連合の導きなるかと思ふゆゑ、無理を承知で其方にも得心させず結納まで、取り交したる今日の仕儀、

善八　お孃さまのお心ではお氣に入らぬ聟さまの橋渡しをした善八ゆゑ、憎い奴と蔭ながらお恨みなさるでござりませうが、姪のお菊が永年のお世話になる此方のお家、御身上が廻つたと聞くにつけてもお傷しく、どうがなしてと思ふうち、斯う〳〵いふ聟がある、不斷出入の其方ゆゑ內聞きをしてくれまいかと賴まれたが幸ひと、先きの身許を段々聞けば大傳馬町の桑名屋で番頭にまで出

世をして、至つて堅いお人ゆゑ、お世話いたしたこの善八、

お菊　お氣に濟まぬといふことはわたしがよう存じて居れど、お家のお爲め、二つにはあの世へお出でなされました旦那樣への御孝行と思ひますゆゑ、共々にお勸め申すお孃さま、なにも御縁と思召して御得心をなされませ。（ト此のうちお熊うつむいて居て、この時顏をあげ、）

お熊　そんならどうでもあのお人を、聟に取らねばなりませぬかいなあ。

お常　否であらうが家の爲め、親への孝行を思ふなら聞分けて得心してたも、これ、手を合せて拜むわいなう。（トお常手を合せてよろしくこなし、これにてお熊はハア、と泣き伏す。）

善八　お袋さまがあのやうに、手を合せてお頼みゆゑ、

お菊　もしお孃さま、ちやつとお返事をなされませ。

お熊　それぢやというて、どうもわたしや、

善八　はて、結納までを取交し、あなたが得心なされぬと、媒人衆へ濟みませぬ。

お菊　お袋さまの御難儀をお救ひなさるお心なら、ちやつと御返事なさりませ。

ト言へどもお熊、頭を振つて泣いて居るゆゑ、

善八　これはしたり、お孃さま、泣いてござつては分りませぬ、御返事をなさりませ。

ト善八お菊いろ〳〵に勸めても、お熊はやはり泣いて頭を振つて居る、お常思入あつて

お常　あゝこれ善八どの、菊ももう捨てゝおきや、これ程言うても聞きいれぬは、どうでも得心しやらぬのか、これといふも此の母が當人にも言ひ聞かさず緣を組みしが過りゆゑ、媒人衆へ言譯に、淵川へなと身を投げて、（ト立ち上るをお熊留めて）

お熊　あゝもし母さま、誰も否とは申しませぬ。

善八　そんなら、得心なされまするか。

お熊　さあ、それはな、

お菊　親御をお殺しなされますか、

お熊　さあ、それは、

善八
お菊　さあ、

お熊　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

お常　無理なことぢやが、これ娘、家の爲めゆゑ得心して、

善八　聟をお迎へなされまして、親御さまへ御孝行、

お菊　お盡しなされて、

善八　下さりませ。（ト兩人にて勸める、これにてお熊餘儀なきこなしにて）

お熊　そんならどうなとよいやうに、

善八　あの御得心、

善八
お菊　なされまするか。

お熊　おいなう。（トよろしく泣き伏す。）

お常　もう年頃の娘ぢやもの、心に好いたものもあらうに、それ程までに厭がるを無理に勸めて得心さす母が心を善八どの、推量して下さりませ。

善八　親御さまのお心では、御當人の氣に入つたお聟さまを持たせたいのは山々でござりませうが、餘儀ない譯ゆゑお孃樣は、あなたもお諦めなされませ。

お菊　その代りにはお聟さまと、御婚禮が濟みましたら、お袋さまへお願ひなされて一丁目の替り目を見せてお貰ひなされませ。

お熊　えゝもう、菊としたことが、芝居所ぢやないわいなう。

ト愁ひの思入。お常も不便だといふこなし、善八思入あつて、

善八　何はともあれお孃さんが、御得心をなされたからは、藤兵衛さんへも此の事を、ちよつと知らせてやりませう。

お常　そんなら此方、御苦勞ながら、

善八　橋渡しはこれが役目、何の苦勞になりませう。

お菊　そんなら伯父さん、少しも早く、

善八　左樣ならお袋さま、

お常　何分ともに善八どの、

善八　どれ、此の事を知せようか。

トやはり角兵衛の鳴物にて善八は花道へ入る。このうちお熊はやはり俯いて泣いて居るゆゑ、お常思入あつて、

お常　これ娘、よう得心してたもつたぞ、其方の心一つにて潰れかゝりし白子屋の此の身代を立直し家の榮えとなる時は、嘸や草葉のかげにても旦那どのがお悦び、どりや佛前でお話し申し、夫にも安心させませうか。

トこれより獨吟樣の唄になり、お常上手の障子屋體へ入る。お熊やはり泣いて居る、お菊あたりを見

廻し、上手の屋體をのぞくことなどよろしくあつて此方へ來る、唄いつぱいに納り、

お菊　もしお孃樣、其のやうにお泣きなさるは、お見世の手代忠七どのへ濟まぬゆゑでござりますか。

ト是れにてお熊びつくりして顏をあげ、

お熊　え〻、どうしてそれを、あの、其方が、

お菊　はて、お隱しなされましても、五つの年よりお側に居て一つに育ちしわたくしゆゑ、疾うから存じて居りますが、見て見ぬ振りをいたしまして、遂にこれまでお袋さまのお耳へなどは入れませぬ。

お熊　知つて居やるとあるからは、もう隱しても詮ないゆゑ打明けて言ひますが、男振りなら氣立てなら、すつきりとした忠七ゆゑ、身のいたづらと知りながら、夫婦の約束したれども母さまに知れたなら、あの忠七に暇が出て逢はれぬこと〻思ふゆゑ、其方にまでも隱したが、實は疾うから忠七と、わしや言交して居るわいなう。

お菊　それゆゑあなたが御婚禮を、お嫌ひなさると知りながら、無理にお勸め申しまするも、お家のお爲めと存じますゆゑ、お厭ではござりませうがお聟さまをお取りなされて、お袋さまへ御安心をさせてお上げなされませ。

お熊　さあ得心をせぬ時は、淵川へ身を投げて死んでしまふとおつしやるゆゑ、餘儀なく得心したれども、あの忠七を取りおいて外の夫と添ふことは、わたしやどうでも否ぢやわいなう。

お菊　わたくしも此の間芝居へお供で參つた時、向ひ合せのお棧敷でお聟さまを見ましたが、忠七どんとは雪と墨、お氣に入らう筈はないが、あなたがお否とおつしやればお家が立たぬ其の上に、お袋さまを見殺しになされねばならぬゆゑ、どうぞ御得心なされまして、お聟をお取りなされませ。

お熊　それではどうも言交した、忠七へ濟まぬわいなう。

お菊　その濟まぬのは知れてをれど、忠七どんも子飼から御恩になつた此方のお家、お袋さまのお頼みを打明けておつしやつたら、これも得心いたしませう。

お熊　そりやもう、あゝいふ氣立ゆゑ譯をいうたら忠七は、得心するであらうけれど、

お菊　左樣なればなんどりと譯をお話しなされませ、あなたからおつしやり難くばわたくしから申しませう。

お熊　親切にその樣にいうてたもるは嬉しいが、あの忠七はどうあつても、

お菊　えゝ、

お熊　わたしや思ひ切られぬわいなう、

卜恥かしさうに言ふ、お菊も當惑のこなし、此の以前よきほどに下手より忠七羽織着流し、手代の打扮にて出來り、門口へ佇すみ、内を窺つて居て、此の時わざと咳拂ひをしながら内へ入る。これにて、お熊、お菊びつくりして、

おゝ忠七、戻りやつたか。

お菊　だいぶおそうござんしたなあ

忠七　お袋さまのお賴みゆゑ、古い掛金をば取りに出たが、何處でも用が辨じませず、氣を揉んで步きまして、大きに遲うなりました。

お熊　さういふことゝは知らぬゆゑ、戻りの遲いはどうしたことゝ、わたしや案じて居たわいなう。

忠七　そのお案じよりわたくしは、お家にござる貴女のことが、

お熊　そんなら、もしや婚禮の、

忠七　あゝもし、（卜押へてあたりへ氣を兼ねる思入。お菊こなしあつて、）

お菊　ほんに今日は追焚ゆゑ、御飯の仕掛をせねばならぬ、もしお孃さま、忠七どんへお話しを、

忠七　なに、お孃さまがお話しとは、

お菊　はて、後で彼女に聞かしやんせ。（卜こなしあつてお菊暖簾口へ入る。跡お熊こなしあつて、）

お熊　これ忠七、ひよんな事が出來たわいなう。（ト忠七に寄添ふ、これより媚いた合方になり、）

忠七　只今ちよつと門口で、御婚禮のことを承はりましたが、嘸お嬉しうござりませう。

お熊　え丶もう、そんな憎らしい、なんの嬉しいものかいなう、門で樣子を聞いたとあれば改め言ふには及ばねど得心せねば母さまが死ぬると迄におつしやるゆゑ、何ぢややら譯も分らず得心はしたもの丶、わしやどうあつても其方とは、切れる心はない程に、いつそのことに何れへなと連れて退いてたもいなう。

忠七　いえ〳〵それでは濟みませぬ、人と違うてわたくしは、西も東も存じませぬ子供の折から此のお家へ御奉公に參りまして御恩になりし此方のお家、それ程までにお前さまがおつしやつて下さりまするは何より嬉しうござりまするが、あなたを連れて逃げましては、御恩を受けたお袋さまやお果てなされた旦那樣へわたくしが濟みませぬ、お氣に入らぬか知らねども聟さまをお迎へなされて、親御樣へ御孝行を盡しておあげなされませ、この忠七は家來の身ゆゑ、決して否やは申しませぬ。

お熊　そのやうに言やるほど、わたしや猶更思ひが增し、切れる心はないわいなう。

忠七　それでもお切れなされませねば、親御へ不孝になりまするぞ。

お熊　さあ親に不孝と知れては居れど、どうでも聟は取られぬゆゑ、よい思案をしてたもいなう。

忠七　思案と申してわたくしは、別に仕樣がござりませぬ。

お熊　こりやどうしたら好からうなあ。

トお熊、忠七の膝へ縋つて泣く。忠七ぢつと思入。花道より新三好みの鬘、紺の股引、腹掛け、單衣着流し、尻端折り、下駄がけ、髮結の打扮にて、鬢盥を提げて出來り、花道にて、

新三　横町の鼈甲屋で角大師の小僧の天窓を二つ續けて結つたので、番狂せの仕事をしたが、あんな虱たかりだから坊主にでもすればいゝのに、商賣が鼈甲屋だけ小僧まで、角大師に髷を澤山つけて置くとは髮結泣かせといふ頭だ、どれ白子屋へ寄つて見ようか。

ト舞臺へ來り門口から内を覗く。忠七お熊是れに心附かず、膝に縋つて泣いて居るを、新三見てびつくりして後へ戻り、

誰も見世に居ねえと思つて、暮れぬうち癡話つて居るとは、氣を揉むやうに出來て居る、何と言ふか聞いてやらう。（ト門口へ來り、聞き耳たてゝ内をうかゞふ。お熊顏をあげ、）

お熊　これ忠七、どうでも聟は取らぬほどに、連れて逃げてたもいなう。

忠七　あなたを連れて逃げましては、お袋さまへ濟みませぬ、わたくしのことはさつぱりと思ひ切つて

下さりませ。

お熊　いえ〳〵わたしや、どうあつても思ひ切る氣はないゆゑに、連れて逃げてもらねば死んでしまふ心ぢやわいなう。

忠七　これはしたり、其の樣な短氣をお出しなされますと、親御へ不孝になりまするぞ。

お熊　假令不孝にならうとも、どうでも聟は取られぬわいなう。

忠七　此の樣に申してもお聞入れなされぬとは、はてさて困つたものぢやなあ。

ト當惑の思入、このうち新三門口に聞いて居て扱はといふ思入よろしく。爰へ奥より以前のお菊出來り、

お菊　もしお孃さま、お袋さまがお呼びなされまする、ちよつとおいでなされませ。

お熊　いえ〳〵わたしや、爰に話しが、

お菊　はてまあ、お出でなされませ、（ト無理に手を取つてお菊お熊を連れて暖簾口へ入る。忠七後を見送り、）

忠七　不義とは知れどあのやうな優しい心につい ほだされ、主人のお目を掠めしが、今の話しを聞く上はお熊さんに得心させ、聟を取つておあげ申さにや、爰のお家が立行かず、とはいへ今もあのやうに厭がつておいでゆゑ、めつたな事では得心せまい、こりや困つたことになつたなあ。

ト よろしく思入。これにて新三拔足にて花道の方へかへり、わざと跫音をさせて門口へ來り、門をあけて、

新三　もし忠七さん、おやりなさいませんか。

忠七　おゝ新三さんか、今日結日ではあるけれど、今少し取込んでゐれば、明日にして貰ひませう。

新三　明日は伊勢五の家の折れ口で一日帳場を休みますから、お結ひなさるが面倒なら、ちよいと撫附けて上げませう。

忠七　さういふことなら結ひなほさず、此のまゝざつと撫附けて置いて下さい。

新三　畏りました。（ト内へ入る。新三暖簾口より奥を窺つて居るゆゑ、）

忠七　新三さん、何をのぞいて居さつしやる。

新三　もしこりやあ斯うでございます、お前さんの料簡を内々聞いた其の上で、品に寄つたら御相談の相手になつて上げませうと、それで奥を覗きましたのさ。

忠七　なに、わしが料簡を聞いた上とは、

新三　もし忠七さん、お隱しなさることはございません。

忠七　何をわしが隱しました。（ト これより新三忠七の後へ廻り、髮を撫附けながら、）

新三　何をといつてお前さん、お熊さんをどうなさいます。
忠七　はて、お熊さんはお家の娘御、わしがどうしませうぞ。
新三　そのお家の娘御の所へ聟さんが來るとのこと、こりやァいつそ、お熊さんを連れて逃げた方がようございますぜ。
忠七　えゝ、（トびつくりして首を振るゆゑ新三手を放す、忠七あたりへこなしあつて、）めつたなことを言はつしやるな。（トこれより新三小聲になり、又頭を撫附けながら、）
新三　はてお隱しなすつてもいけません、蛇の道は蛇といつて疾うから知つて居りますが、男でせえ惚れ惚とするお前さんのことだもの、お熊さんには猫に鰹節惚れなすつたも無理はねえと世間の口がやかましいから、見ぬ顏をしてをりましたが、聞けば近々こちらの家へ聟さんが來るとの噂、爰は一番男の意地で、お熊さんを連出して夫婦になつておやんなさいな。
　　　ト此のうち頭を撫附けることよろしく、忠七是非なきこなしあつて、
忠七　さう知られたら隱しはせぬが、實は今もお熊さんが連れて逃げてとおつしやるけれど、それでは主人へ濟まぬゆゑ、わしも途方に暮れて居ます。
新三　それ御覽なせえその通りだ、お前さんは主人へ濟まぬと知らぬ顏をなさる氣でも、女の方ではさ

うは行かねえ、一旦斯うと思ひ詰めた男に捨てられ、なんのつけに厭な聟が取れませう。若し短氣でも出しなすつて身でも投げて死んだ日にやあ、遠慮が無沙汰になるやうなもので、忠義を思つたお前さんが、却つて不忠になりますぜ。

忠七　成程お前のいふ通り、そんなことでもあられては、猶々主人へ濟みませぬが、さうかといつてお熊さんを、どうまあ連れて逃げられませう。

新三　そこがお前さんの料簡一つだ、先づお熊さんの心ゆかしに一旦連れて逃げなすつて、世間見ずのお熊さんに他人の中も見せた上で、これでは親へ濟まぬと心のついた其の所で、意見をして家へ返せば、雨降つて地かたまると、不忠が却つて忠義となり、いきな男になりますぜ。

忠七　さうも思つてをりますが、子供の折に親父に別れ伯父の世話になつて居ますが、昔堅氣のお人ゆゑ主人の娘を連れ出して、家へとては所詮行かれず、身の置き所がございませぬ。

新三　そりやァお案じなされますな、若し行く先きにお困りなら、わしの家へおいでなせえ。

忠七　さうして、こなたのお家わえ。

新三　家は深川富吉町で裏店ぢやあございますが、駈落者が隠れて居るには誂へ向きの靜な長屋、主人といふはわつち一人、明けでも追に行かねえ晩に勝の野郎が泊るばかり、晝は彼奴と二人とも帳

場を廻つて歩きますから、年中家は明店同樣誰に遠慮もごさいませんから、まあ何にしろ日が暮れたら下檢分においでなせえ。

忠七　ことに寄つたら此方の家で、お世話にならうも知れぬゆゑ、何分お賴み申します。

新三　ことに寄つたらと言はねえで連れて逃げるとお極めなせえ、惡いことは言ひませぬ。

ト此のうち新三忠七の頭をくづしては撫附けして、いぢつて居るゆゑ、

忠七　もし新三さん、まだ頭は明きませぬか。

新三　違えねえ、つい話しに實がいつて、結直すより手間がかゝつた。

ト此の時ばた〳〵になり、下手より丁稚の長松出來り、

長松　どうぞ髮結さんを目ッけてえものだ、(ト言ひながら門口を明け新三を見て、)新三め見附けた、そこ動くな。(ト不器用に見得をする。)

新三　えゝ、誰だと思つたら、紙屋の長松、ゝゝゝきまりで芝居の眞似をするか。

長松　旦那がさつきから待つて居るから、おいらと一緒に行つたり〳〵。

新三　今行くと、さう言つてくんな。

長松　いや〳〵斯うして搜し當てたら一緒に連れて行かにやあならねえ。(ト聲色のやうに言ふ。)

忠七　長松どんも芝居が好きかの。
長松　今においらは役者になるのだ。
新三　一生涯ぺい〳〵役者だ。
長松　何でもいゝから、おいらと一緒に、
新三　はて忙しねえ、今行くよ。（ト鬢盥を提げ門口へ出る。）
忠七　新三さん、お世話でござりました。
新三　もし、今の事が極りましたら、和國橋の虎床まで、ちよつと知らせておくんなさい。
忠七　極れば、直に知らせまする。
長松　何を言つて居るのだ、早くおいで、
新三　えゝ、忙しねえ斜眼だ。
ト稽古唄角兵衞の鳴物にて引張られ、新三下手へ入る。爰へ奥より以前のお熊出て、
お熊　これ忠七、そんならどうぞ今宵のうち、連れて逃げてたもいなう。
忠七　扨は、今の様子をば、
お熊　殘らず聞いて居ましたが、髪結の新三どのがあのやうに親切に言うてくれる詞につき、深川とや

らへわたしをば連れて退いてたもいなう。
忠七　いえ〳〵、それでは忠七かお袋さまへ濟みませぬ。
お熊　それとも逃げてたもらぬなら、わしや身を投げて死ぬわいなう。
忠七　えゝ、めつさうな、其のやうな短氣は、必ずなりませぬぞ。
お熊　そんなら逃げてたもるかいなう。
忠七　ぢやと申してお袋さまへ、
お熊　濟まずばやつぱり身を投げて、
忠七　あもし、お待ちなされませ。
お熊　そんなら一緒に逃げてたもるか。
忠七　さあ、それは、
お熊　但しは死なうか、
忠七　さあ、それは、
お熊　さあ、
忠七　さあ、

兩人　さあ〳〵。

お熊　否でもあらうがこれ忠七、どうぞ不便と思ふなら、連れて退いてたもいなう。

　ト忠七に取り縋る、これにて忠七ぢつと思入あつて、

忠七　こりやもういつそ義理を捨て、思案を替へねばならぬわえ。

お熊　そんならいよ〳〵、得心して、

忠七　今日までお家の白鼠と人に言はれし忠七も、忠義を捨てゝ明日からは、いたづら者に、（トお熊の顏をぢつと見て立ち上るを、道具替りの知せ、）なりませうわえ。

　ト兩人よろしく思入。時の鐘にて道具廻る。

（材木町河岸の場）＝本舞臺三間の間、正面一面板や丸太を立て掛けたる材木の置場、此の間より向う河岸を見せたる書割よろしく、上下同じく材木の張物、總て材木町河岸の模樣、やはり時の鐘にて道具留る。ト上手より番太郎提灯を腰にさし、拍子木を打ちながら出來り、

番太　此の節は夜が短く、日の暮れぬうちに六ツを打つから、夜に入ると直に六ツ半、それから五ツの廻りだから、番太郎はせはしない、どれ一廻り廻つて來よう。

ト五ツの時を打ちながら花道へ入る、爰へ下手より勝奴着流し、三尺、下駄がけにて髪結の下剃のこしらへにて出來り、

勝奴　夜の短えのに遊びに行くのは割事にならねえから、伊勢町河岸を一廻り素見して歸らうと、ぶらぶらする中もう五ツだ、喉の所に穴があつたりふが〳〵は眞平だが、どうかして毛並の好い掘出し者をしてえものだ。

ト此の時人音するゆゑ、勝奴下手の材木の蔭へ隱れる、上手より以前のお菊ぶら提灯を提げて出來り、

お菊　お袋さんが伯父さんをば呼んで來いとおつしやるゆゑ、お使ひには行くものゝ、お熊さんがそはそはと宵からをかしな素振ゆゑ氣になつてならぬわいなあ。わたしも年が行かぬけれど、親のない身に苦勞をして他人の中で育つたゆゑ、少しは後先きを考へれど何をいふにも懷育ち、御身上こそ廻つても以前が以前に不自由もなく御苦勞なしのお熊さん、深い樣子を知つて居るゆゑ、ひよんな事でもなければよいと、案じられてならぬわいなあ、(ト下手へ行きかける、此の時提灯のあかり消えるゆゑ、)えゝもう後へ心が引かれる所へ、風も吹かぬに蠟燭の燈火が消えしは氣がゝりな、殊に宵から雨氣づき泣出しさうな空合ゆゑ、こりやもういつそ家へ戻り、伯父さんの所へ參りま

したが生憎留守でござりましたと、お袋さまへ言うて置かうか、いや〳〵假にも其のやうな嘘を言つてはお主へ濟まぬ、つい一走り、さうぢや〳〵。
ト思ひ切つて下手へ行掛ける此時材木の陰より勝奴出て、

勝奴　おい〳〵そこへおいでのは、白子屋のお菊どんかえ。（トお菊勝奴を透し見て、）

お菊　誰かと思へばお前は勝さん、まだ仕事でござんすかえ。

勝奴　なにさ、仕事は暮方にしまつたが、去年髮剃をした因縁で乾物屋の娘ッ子の一周忌で夜食によばれ、御馳走になつたので、家へ歸るのが遲くなつたのさ。（トこれを聞きお菊心にかゝる思入にて、）

お菊　ほんに今夜は、乾物屋の娘さんの一周忌、早いものでござんすなあ。

勝奴　いや、今日のやうに方々で佛事によばれたことはねえ、先晝間が横町の花屋の婆さんの初七日だといつて呼込まれて御馳走になり、八ッの茶請けが穴藏屋の百萬遍で團子の振舞ひ、これからざぶ〳〵んぶり湯に飛込み、地獄めぐりでもして、明日の朝まで死んだやうに寐てえものだ。

お菊　あれ又、そんな緣起でもない、わたしや聞きたくござんせぬ。（ト耳を塞ぐ。）

勝奴　聞きたくなけりやァ聞きなさんなだが、おいお菊どん、實はおいらは不斷からお前に迷つて、蔭ながら、心中を立てゝ居るぜ。

お菊　えゝ、其のやうな事は知らぬわいなあ。

勝奴　なに知らねえことがあるものか、朝晩出入るその度に、目顏で知らせて置くぢやあねえか。

ト お菊の袖を引く。

お菊　えゝもう、きざな、（ト手強く振切り、）止しなさんせいなあ。

ト早い合方になり、お菊逸散に花道へ入る、勝奴後を見送り、

勝奴　丁度四邊に人目もなく、小當りに當つて見たが、あの權幕ぢやァ覺束ねえ、やつぱりこりやァ四百出して、遊んだ方が早手廻しだ。

ト 爰へ上手より以前の新三着流し、下駄がけにて出來り、

新三　そこに居るのは、勝ぢやァねえか。

勝奴　おゝお前は親方、今歸んなさるのかえ。

新三　ちつと待合せる人があつて、さつきからぶらついて居るのだ、勝、ちよつと耳を貸せ。

勝奴　あいく、（トこれにて新三勝奴に囁く、）そんなら角の辻駕籠を、

新三　老爺でねえ、しつかりした若い奴がいゝぜ。

勝奴　どれ、それぢやあ呼んで來よう。（ト勝奴は下手へ入る。新三空を見て、）

新三　どうか今夜はばれいさうだが、此方の仕事のばれねえやうに、旨く手筈をしてえものだ。
ト爰へ上手より以前の忠七頬冠りをなし、お熊同じく手拭を吹流しに冠り、手を引かれて出來り、忠七新三をすかし見て、
忠七　もし、新三さんぢやァござりませぬか。
新三　お丶忠七さん、待つて居ました。
忠七　定めてお待ち遠でござりましたらう。
新三　さうして、お熊さんわえ。
お熊　はい、爰にをりますわいなあ。
新三　お丶お熊さん、よく家が脱けられましたねえ。
お熊　今母さんは御佛前でお看經をしてござるし、菊も使ひに行つて留守ゆゑ、そつと裏から脱けて來たわいなあ。
新三　それはい丶間でござりました。もし忠七さん、支度はようござりますか。
忠七　わしはよいが、お熊さんを駕籠にでも乘せずばなるまい。
新三　おつと皆までおつしやるな、駕籠の手當もしてあります。

お熊　そんなら、貴方がなにもかも、
新三　ずつと呑込んで居りますのさ。（ト爰へ下手より、勝奴先きに若い衆の駕籠屋、駕籠を舁いで出來り）
勝奴　もし親方、呼んで來ました。
新三　そりやア御苦勞だ、さあお乘んなせえ。
お熊　何から何まで、
新三　あもし、口數利かずと、早く〳〵。（トこれにてお熊、駕籠に乘る。）
忠七　そんならわしは、駕籠に附いて、
新三　いや大勢連れでは人目に立つから、勝を一人駕籠に附け、お前とわたしは一足跡から、
勝奴　そんなら親方、
新三　氣を附けて行け。
勝奴　あい〳〵。さあ、駕籠をやつて下せえ。
ト早い合方、時の鐘にて、駕籠を先きに勝奴附いて足早に花道へ入る。跡雨車になり、
忠七　もし新三さん、ぽつ〳〵落ちて來ました。
新三　なにさ、降つた所がまだ四ツ前、何處ぞで傘や下駄を買へば案じることはございません。

忠七　きつい降りもあるまいから、ちつとも早く出掛けませう。

新三　そんなら忠七さん、

忠七　新三さん、

新三　さあ行きませう。

ト雨車烈しく新三手拭を出し頬冠りをして兩人連立ち花道へかゝる。早い合方ばた〳〵になり、花道より以前のお菊前垂を冠り走り出て來り、花道にて兩人と行違ひ、お菊若しやといふこなしよろしく、兩人は足早に花道へ入る、お菊舞臺へ來り花道を見送り、

お菊　今そこで擦違うたは忠七どんに違ひないが、それとも人が違うたか、何にしろ提灯の燈火が消えてしまつたゆゑ、眞闇で分らぬわいなあ。

ト又ばた〳〵になり、上手より白子屋の若い者千助弓張提灯を持ち走り出て來り、お菊に行き當り、兩人びつくりして顔見合せ、

千助　お前はお菊どん、大變だ〳〵。

お菊　おゝ千助どん、大變ぢやとは何事でござんす。

千助　お前が使ひに出た後で、お熊さんが居なくなり、何處へ行つたか行方が知れぬが、心當りはある

まいか。(トこれを聞きお菊思入あつて、)

お菊　そんならわたしも蟲が知らせ、心にかゝつてならなんだが、さうしてお見世の忠七どんは、

千助　これも湯へでも行つたと見えて、宵から家に見えないから、さういふこともあるまいが、忠七どんがお熊さんを連出したのではあるまいかと、お袋さんが御心配、

お菊　(これを聞き扨はといふ思入あつて、) はゝあ、そんなら今のが、

千助　えゝ、

ト聞きとがめる。お菊花道の方へこなしあつて、帯の結びをぐつと締るを道具替りの知せ、

お菊　困つたものぢやなあ。

ト思入よろしく、早き合方、雨車にてこの道具廻る。

(永代橋川端の場)——本舞臺三間、上手より丸物の橋を押出し、正面橋の袂の駒寄せ、下手に屋根をおろせし床見世、後一面佐賀町河岸を見せたる灯入の遠見、よき所に柳の釣枝、總て永代橋夜の模樣。浪の音佃の合方にて道具留る。とやはり雨車烈しく上下より、思ひ〳〵の雨に逢ひし仕出し○□△◎の四人走り出で、双方行き當り尻餅を搗き、

○　あゝ痛い〳〵、おそろしい石頭だ。
□　えゝ、此方のはうから突當つて、石頭もないものだ。
△　これさ〳〵、互ひに弱身の降られ仲間、勘辨さつしやい〳〵。
◎　さうだ〳〵、斯ういふ時にかさのないのは、錢のないのも同じことだ。
○　そのくせ、わしやア骨がらみといふ立派なかさを持つて居ます。
□　道理で今突き當つた時、臭い息だと思ひました。
△　ぶく〳〵脹れた頭だから、人一倍に痛かつたらう。
◎　所も丁度永代に、永代頭のさうどくはと、氣も鬮兵衞の鉢合せ、
○　花にも優るといひたいが、鼻にもかゝる形容、
□　こゝらが雨の俄ぢや〳〵。（トまた雨車烈しくなるゆゑ）
四人　これは大變だ。
　　ト上下へ別れて入る、跡端唄の合方になり、花道より以前の新三忠七白張りの番傘を相々にさして出來り、花道にて、
新三　おい忠七さん、手を放しなせえ、相々傘といふやつは、二人で持つと重くつていかねえ。

忠七　成程、二人で持つよりも代り〴〵に持ちますが、却つて持ち重りがしますまい。

ト忠七手を放す。

新三　あんまり側へくツつきなさんな、足が搦んで歩きにくい。

忠七　それでも放れて歩きますと、身體が濡れてなりませぬ。

新三　贅澤な事を言ひなさんな、

ト新三傘を持つて先に立ち舞臺へ來る、忠七身體の濡れる思入にて傘の下へ入らうと追駈けながら舞臺へ來る、これにて忠七石に躓き轉ぶ機に、下駄の鼻緒切れる。

どうした〳〵。

忠七　吉原下駄の安ものゆゑ、買つたばかりで鼻緒が切れました。

新三　安もの買ひの錢失ひとは、そこらのことを言つたものだ。

ト傘をさして上手へ行きにかゝるゆゑ、忠七新三の袂を控へ、

忠七　もし、新三さん、ちよつと待つて下さい。

新三　何ぞ用かえ。

忠七　鼻緒をたてゝ參りますから、ちよつと待つて下さい。

新三　立てるなら勝手に立てねえ、おらア一足先きへ行くから。（ト行きかけるを留めて、）

忠七　はて、さう言はずと、何も附合、ちつとの間待つて下さい。

新三　えゝ、小うるせえ、放さねえか、（ト袂を振拂つて行きかゝるを又留めて、）

忠七　これ新三さん、そりやア此方不人情といふものだ。

新三　何でおれが不人情だ。

忠七　はて、たゞでもあるか此のやうに、雨もばら／＼降つて居るし、鼻緒が切れて困つてゐるを見捨て、如何に自身が濡れぬから雨が降つても困らぬとて、わしが買つた其の傘を一人でさして行かうとは、不人情ではござりませぬか。

新三　なんだ、わしが買つた傘だ、馬鹿なことを言やアがれ、雨に降られて困るといふからおれが下駄まで買つてやつて、爰まで一緒に入れて來たのは、此の新三の達引だ、庇を貸せば母屋を取ると入れて貰つた此の傘を、わしが買つたと言ひがゝり、取上げようとは太え奴だ。

忠七　（これにてむつとせし思入あつて、心附いて氣をかへ、）もし新三さん、こりやアわしが惡かつた、今夜からこなたの家で厄介になるくせとして、僅傘の一本ばかりをわしが買つたの買はぬのと爭ひしは此方のあやまり、お前の氣に障つたらうが、どうぞ堪忍して下さい。

新三　あやまるなら料簡してやる、此の後ともに氣をつけやァがれ。（ト又行きかけるを留めて、）

忠七　あゝもし、ちよつと待つて下さい。

新三　又留めるか、煩せえ奴だ。

忠七　定めてこなたも煩からうが、これが家でも知れてゐれば、跡からなりと行きませうが、どんなとこやら勝手は知らず、提灯はなし雨は降るし、お前に先へ行かれては何のことはない盲が杖に放れたやうなもの、どうぞ後生だから一緒に行つて下さい。

新三　こう〳〵忠七どん、お前、おれの家へ來るといふが、何の用があるのだ。

忠七　何でとは新三さん、お前の勸めで連出した女が先きへ行つてゐるゆゑ、御迷惑でも今夜から御厄介になる約束。

新三　こう忠七どん、お前寐ぼけてゞも居やァしねえか、よく川の水で顏でも洗ひなせえ。おらそんな覺えはねえ。

忠七　（これにて扨はといふ思入あつて、）はゝァわかつた、そんなら何ぢやの、わしを誑かり、お熊さんを體よくこなたは連出したのぢやな。

新三　えゝ默りやァがれ、此の野郎はとんだ事を言やあがる、そんなら言つて聞かせるが、あのお熊は

おれが情人だから引ッ攫つて逃げたのだ、手前に用があるものか。

忠七（これにてむきになり、）これ〳〵新三どん、お前それは何をいふのだ、先刻あれほど見世先きであのお熊さんを連出したら、わたしの家へ二人とも置いてやらうと言つたゆゑ、そでない事とは知りながら主人の娘を連出してお前の家へ先へやり、爰まで二人相々傘で連立つて來た此の忠七、それをお前の情人だなんぞと、ふて勝手を言ひなさるとは、ても怖しいお人ぢやなう。

新三　なんだ、おつなことを言ふな、あのお熊を連出したら一緒に家へ置いてやらうと、此の新三がいつたなどゝは、當事もねえ言ひがゝりだ。

ト此の内新三雨が止んだといふ思入にて、傘をつぼめて、

忠七　なんでわしが言ひがゝりを、

新三　えゝ、默りやァがれ、これよう聞けよ、このせちがれえ世の中に何のつけに人の情人をば男と二人引取つて世話をする奴があるものか。はゝア、讀めた。それぢやァ何だな、おれがお熊を引ッ攫つて女房にするのが羨ましく後をつけて來やァがつて、情人だなんぞと言ひがゝり取返さうといふのだな。

忠七　わしが情人に違ひないから、情人だと言つたがどうしました。

新三　ゑゝ、自惚れたことをぬかしやあがるな。(ト持つたる傘にて忠七をくらはす、忠七きつとなり、)

忠七　こりや、忠七を傘で、

新三　打つたがどうした、なんとした。

忠七　こりやもう、どうも、(と下駄の片々を持ち、兩人きつとなる、これより合方替つて、)

新三　これよく聞けよ、不斷は得意場を廻りの髪結、いはゞ得意のことだからうぬがやうな間拔な奴にも忠七さんとか番頭さんとか上手をつかつて出入りをするも、一錢職と昔から下つた稼業の世渡りに、にこ〳〵笑つた大黒の口をつぼめた傘も列んでさして來たからは、相々傘の五分と五分、轆轤のやうな首をしてお熊が待つて居ようと思ひ、雨の由縁でしつぽりと濡れる心で歸るのを、そつちが娘に振りつけられ彈きにされた悔しんぼに、柄のねえ所へ柄をすげて油ッ紙へ火がつくやうにべら〳〵御託をぬかしやァがりやァ、此方も男の意地づくに破れかぶれとなるまでも、覺えはねえと白張りのしらをきつたる番傘で、筋骨拔くから覺悟しろ。

トきつと見得、忠七無念の思入にて、

忠七　ちえゝ、さういふおのれの心とは今の今まで知らぬゆゑ、親切ごかしの詞につき安請合とは知りながら、戀路の闇に迷ふ身に求めて悔む此の下駄も、念がはひらぬ過りに齒ぎしりを嚙む悔しさ

も、ぬかつた道へむざ〳〵と嵌められたるか口惜しい。
新三　え〻、しやらくせえことを吐かしやアがるな。(ト持ちたる番傘にて忠七をくらはす、忠七其手に縋り、)
忠七　たとへおのれに歯はたゝずとも、やみ〳〵女を渡さうか。
新三　何を吐かしやアがる。
と浪の音になり兩人ちよつと立廻り、新三番傘にて忠七を散々打ちすゑる、これにて忠七着附破れてずた〳〵になり、結局忠七ぶたれながら新三にむしやぶりつくを、新三よろしく突廻して忠七の顏を下駄にて蹴る。
忠七　あいたゝゝゝゝ。(ト額を抑へしまゝどうとなる、新三これを見て、)
新三　ざまア見やアがれ。
トせゝら笑ふ、浪の音佃になり、新三橋を渡つて上手へ入る、忠七起上り、
忠七　おのれ、逃げるとて逃がさうか。
トよろぼひながら上手へ行き、額の痛むこなしにて手をあてゝ見て、血汐附くゆゑびつくりしてどうとなる、此の時本釣鐘を打込み、かすめて浪の音。
え〻これ、跡を追駈け行かうにも、所の名さへ深川と聞いたばかりで先は知らず、殊には宵の大

雨にてぬかる道さへ知れ難き、黒白もわかぬ眞の闇、こりやどうしたらよからうなあ、

ト ぢつと思入、この時下座の端唄になり、

端唄 〽書き送る文もしどなき神奈川で、抱いて寐よとの沖越えて、

ト 此の内忠七よろしく思入あつて、

上手をおろす風につれ、誰が唄ふやら屋根舟でうたふ文句も身に當る、今は開化の世の中に女子供に至るまで、文に明るく物の理を辨へて居るその中で、お主樣のお目を掠め色に溺れて書き送る文もしどなくこれまでに、不埒の事をした罰か、抱いて寐よとの沖越えし其の白浪も同然なあの新三めにたばかられ、お主の娘を誘拐され、どう此のまゝに歸られう、こりやもういつそどんぶりと此の川へ身を沈め、死んでしまふが身の言譯、とはいへお家のお袋さま、斯ういふこととも御存じなく、此の忠七がお熊さまを連れて逃げたと思召し、嘸やお憎みなさるであらう、いつそのこと餘所ながら主人へお知せ申した上、命を捨てゝお詫をしようか、何れにしても忠七は、もう此の世には居られぬわえ、

端唄 〽岩にせかれて散る浪の雪か霙か、霙か雪か解けて浪路の二つ文字、

ト 此の内忠七行きつ戻りつ思入よろしくあつて、結局思案を極め石を拾ひ、袂へ入れることなどあ

って、

いや〳〵、假令此の事をお袋さまへ知せたとて雪や霙と事替り、罪が消ゆるといふではなし、こりやもういつそ一思ひに岩にせかれて散る浪の藻屑となりて身の言譯、心にかゝるお熊さま、嘸今頃は新三めに手籠に逢うてござらうが、行くに行かれぬ仕儀ゆゑに、見捨てゝ死ぬる腑甲斐なさ、どうぞ許して下さりませ、

端唄〽つまを戀しと慕うて暮すえ、

ト此の内忠七は上手の橋の上へ行く、此の以前下手より彌太五郎源七派手なる縞物の着附、尻端折り下駄がけにて、魚新の貸提灯を提げて出來り、此の體を見て下手の床見世の蔭へ小隱れして窺ひ居る、忠七これを知らず、

南無阿彌陀佛、

ト橋の上より飛込まうとする、此の時彌太五郎源七つか〳〵と出て、提灯を疊んで舞臺へ置き、忠七を後より抱き留め、

源七　これ、若えの、待ちなせえ。

忠七　何方かは存じませぬが、どうぞ放して下さりませ。

源七　いや、おれの目にかゝつたからは、めつたに殺すことぢやあねえ。
忠七　左樣でもござりませうが、どうぞ助けると思召して、お殺しなされて下さりませ。
源七　馬鹿なことを言ひねえ、助けると思つて殺す奴がどこの國にあるものか、待てといつたらまア待ちなせえ、（ト無理に橋の上より連れて來て、提灯の灯影で忠七の顏を見て、）こう、お前は白子屋の番頭ぢやアねえか。
忠七　さうおつしやるは、乘物町の親分さんではござりませぬか。
源七　如何にも己ア乘物町の、彌太五郞源七だ。
忠七　思ひがけない、どうして爰へ、
源七　仲町まで用があつて、口の暮合から出かけた所、俄の降りに傘もなく稻荷堀の魚新で一杯やつて雨を止め通り掛つた永代橋、眞黑闇にたつた一人若い男の立つて居るのは、てつきり身投げと思ふから、あの床見世の蔭に隱れてあらましの樣子を聞いて見れば、高の知れた女出入り、詳しいことは知らねえが通り掛つて助けるも、これもなんぞの因緣ゆゑ、まア死ぬことは止にしなせえ。
忠七　お留めなされて下さります、其の御親切は有難いが、どうでも生きては居られませぬ。
源七　身を投げようといふくれえだから、生きて居られぬ譯もあらうが、おれも彌太五郞源七だ、一旦

斯うして抱き留めて命を助けた上からは、假令どんな譯があらうとお前を殺すことぢやアねえ、まあ落着いて居るがいゝ。

忠七　そのお詞にあまえまして、お話し申す一通りを、(ト言ひかけるを、)

源七　おつと待ちねえ、詳しい譯も一通りどの道聞かにやアならねえが、何をいふにも爰は往來、まア魚新の二階まで、おれと一緒に來るがいゝ。

忠七　左樣なら仰せに隨ひ、御一緒に參りませう。

ト此の時下手より、首ッ玉へ木札を附けし縫包みの犬出て吠える。

源七　えゝ畜生め、吠えやアがるな。

忠七　(自分の體を見て、)あの新三めに打ちたゝかれ、顏も身體も泥塗れし、犬が吠えるも無理ではない。

源七　(提灯で忠七の顏を見て、)お前の額から血が流れるが、何ぞ藥を持つて居ねえか。

忠七　慥守りに奇功紙が、

ト腹卷きの守袋より奇功紙を出す、此の時守袋の中より成田の木札落ちるゆゑ、忠七手に取上げて見て、不審の思入あつて、

肌につけたる此の木札が、水にも入らぬにずつぷり濡れしは、

ト此の時犬又吠えるゆゑ、源七思入あつて、

源七　犬さへ木札が附いて居れば、命を助かる世の中に、

忠七　木札を持つて居たゆゑに、危ない命が助りしか。

ト此の時花道の揚幕にて、掛念佛になり、鈴の音聞える、兩人花道を見て、

源七　ありやア成田の開帳へ、講中揃つて信者の夜參り、

忠七　此の忠七も不斷から信心したるお蔭にて、

源七　すんでにどんぶりやる所を、

忠七　危ふい命助かりしは、

源七　それも成田の、(ト兩人一時に立つを木の頭)利益であらう。

ト揚幕の方を見込む。やはり向うにて掛念佛、鈴の音、舞臺は浪の音佃の合方にてよろしく、

ひやうし幕

二幕目

乘物町源七内の場
富吉町新三内の場
同長屋家主内の場

〔役名――髪結新三、車力善八、合長屋權兵衛、下剃勝奴、肴賣新吉、源七子分天麩羅銀次、彌太五郎源七、家主長兵衛、白子屋の娘お熊、源七女房お仲、家主女房お角、合長屋の女房お蝶等。〕

（乘物町源七宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面暖簾口、上手一間間平戸の押入戸棚、下手鼠壁三尺立派な神棚、榊神酒德利など飾り、上の方折廻して障子屋體、例の所門口下の所臺所口源の字の腰障子、總て乘物町彌太五郎源七宅の體。本舞臺にお仲世話女房のこしらへにて、煙草盆を控へ煙草をのんで居る、お蝶長屋の女房のこしらへにて側に住ひ、天ぷら銀次子分のこしらへにて掃除をして居る、此の見得端唄にて幕明く。

お蝶　もし、あの端唄は何處でござりますね。
お仲　あれは隣の藝者屋で、下地ッ女に教へるのでござんす。
お蝶　とんだ好い聲でござりますが、幾歳ぐらゐでござりますね。
お仲　まだ十三四でござんすが、どこか目附が半四郎に似て居る所がござんして、調子のいゝ子でござ

んすから、今に好い藝妓になるでござんせう。

お蝶　おゝ半四郎に似てゐるといへば、新材木町の半四郎娘、白子屋の話をお聞きなさいましたか。

お仲　今朝銀次が聞いて來て、そんな話をしましたが、これが言ふ事だからさつぱり筋が分りません。

銀次　何が分らねえ事がありますものか、白子屋の家の評判娘を家の手代の忠七といふ生白い二才野郎が、昨夜家を連出して今以て二人とも行方が知れねえといふ話、なんと筋が分りやしたらう。

お仲　さう云へば分るけれど、お前は不斷せつこむと後や先きに話をするから、それで筋が分らないのさ。

銀次　なに、姉さんの聞きやうが惡いからだ。

お仲　何にしろそんな事も、世間にいくらもある事だのに、逃げ隱れをしなくつてもどうか仕様があらうのに、年の若いといふものは、たつた一人のおつかさんに、とんだ苦勞をかけなさんすな。

銀次　それといふのも娘ッ子が、惚れた男があるならば聟にすりやあいゝことを、親が野暮なことを言ふから、こんなことについなるのさ。

お蝶　わたしの隣は、御存じの白子屋の家へ出入をする車力の善八さんでござりますが、あの人の話で聞くと、さういふわけのあるとも知らずに、加賀藤さんが媒人で傳馬町の桑名屋から又四郎とい

ふ番頭さんが、近々聟に來るつもりで結納が來た所から、昨夜逃げたといふことでござんす。
お仲　さういふことなら結納の來ない先きに、其の譯をおつかさんに打明けて言つたらどうかなつたらうに、人騷がせでござんすな。
銀次　所が、誰れしもさういふが、其の身になるとさうは行かねえ、二人一緒に添はれずばちよつと淸元の淨瑠璃で、對の衣裳で向島へ手に手を取つて心中でもする氣になるのが色の道、こりやあ自分でして見にやあ此の味はわからねえ。
お仲　これ銀公、何をお前おごる氣だ、自分でして見ねば分らないの、向島へいつて心中するのと顏に似合はないことを言ひなさんな。
銀次　そんな事をお前言ひなさるが、顏や形で情事はしねえ、わつちなどのは心意氣とちよつと小錢の立ちまはるので、其處へ女が喰ひ込むのさ。
お蝶　それぢやあ今のお上さんも、お前に惚れてござんしたのか。
銀次　あれでも以前は新町で一分を賣つた女だが、わつちで苦勞をするものだから、すつかり女の相場が下つた。
お蝶　此の節の兎のやうだね。

銀次　違えねえ、大だれこみさ。
お仲　もう好い加減にのろけたら早く歸つて、お鐵さんの仕掛でもしてやるがいゝ。
銀次　誰が米を磨いでやるのを、姉さんに言ッつけやした。
お仲　誰も言やあしないけれど、どうかそんな人だから、
銀次　そんなにのろく見えやすかね。
お蝶　おゝ、仕掛けといへばわたしも、今日はおひるに炊くをさつぱり忘れた。
銀次　他人のことを言はないで、早く行つて炊きなせえ。
お蝶　ほんにさうしませうよ。左樣なら姉さん。
お仲　又おいでなさいよ。
銀次　どれ、わつちも其處まで一緒に行かう。
お蝶　銀さん、お前と道行きかね、
銀次　もうお蝶さんが惚れこむから、
お蝶　きつい自惚だね。
ト端唄になり、お蝶銀次下手へ入ろ。奥より彌太五郎源七派手なる好みの打扮、煙草入を持ち出で來り、

源七　お仲、銀次はもう歸つたか。
お仲　あい、今歸りました。
源七　あんな騷々しい奴はねえ、何處へ行つても喋るので急な用の足りねえ男だ。（ト上手よき所に住ふ。）
お仲　今お蝶さんの話したのを、お前奥で聞きなさんしたか。
源七　おゝおれも奥で聞いて居たが、たつた一人の娘ッ子をとんだ者に引つさらはれて、お袋さんが氣の毒だ。
お仲　とんだ者と言ひなさんすが、連れて逃げたは若い衆の、忠七さんぢやござんせぬか。
源七　家から昨夜連出したは若い衆の忠七さんだが、途中から娘ッ子を惡い奴に引つさらはれたのだ。
お仲　惡い奴とは、誰でござんす。
源七　手前も知つて居るだらう、新材木町の河岸を廻る新三といふ髮結だ。
お仲　あの大いなせの髮結でござんすか。
源七　上總の國で惡事をして墨の入つた身體だが、中の樣子を見て來た所から、いやに牢法などを言やあがつて、あんな好かねえ奴はねえ。
お仲　どうして新三が引つさらつたのを、お前知つて居なさんす。

源七　（思入あつて、）實は昨夜深川へ行きがけに、永代橋で若い男が欄干から飛込まうとした所を後から抱留めて見れば白子屋の忠七さん、こりやあ必定掛先きでも遣ひこんで、節句前の帳尻が合はねえので死なうといふ覺悟と見込み、金で命が助かるなら助けてやらうと死ぬ譯を聞いて見たら大違ひ、家の娘と情人になり聟になる氣で居た所へ、急に外から聟が極り、新三を頼んで娘を連出し永代橋まで行つた所、娘を新三が引上げて忠七さんを踏倒し、闇に紛れて逃げられたが、ただ深川と聞いたばかりで、何處が家だか知れぬ所から死ぬ氣になつたと詳しい話、聞いて見りやあ殺されねえから昨夜新堀へ預けて來たが、手前に話をしねえのはひよつと白子屋へ知れた日には、おれが腰でも押したやうに思はれるのが厭だから、今まで言はずに隱して居たのだ。

お仲　そりやあよう助けてやんなすつた、お前の話を聞いて見ると、忠七さんが白子屋の家の娘を連出したも、新三が仕事でござんせう。

源七　何にしろ白子屋でも惡い奴に引掛り、娘に疵をつけられるか但しは金を取られるか、どつちにしても氣の毒だ。

お仲　あそこの家も女世帶、嘸昨夜からお袋さんが、苦勞をしてござんせう。

源七　これを思ふと世の中に、子のねえ人がましか知らぬ。

ト又誂への端唄になり、花道から善八序幕の裝にて荒粉落雁の笹折を持ち出來り、花道にて、

善八　人の世話はうつかり出來ぬ、姪のお菊がお世話になるから御恩送りに白子屋さまへ、聟のお世話をした所、家の娘御お熊さまが忠七どのと譯があつて昨夜二人逃げた所、途中で新三に連れ行かれ、わしに行つて連れて來いと、お袋さまがおつしやれど、なか〳〵おれが行つたところで人の悪い新三ゆゑ、素直には返しをるまい、どうしたものと女房に相談したら、お前ぢや行かぬ、これは彌太五郎源七さんを賴んで行つて貰へといふから賴みに來たが、思ふやうに賴みを聞いてくれゝばよいが、(ト思入あつて舞臺へ來り、門口からのぞいて見て、)おゝ、丁度夫婦とも家に居てぢや。

ト又門口を少しあけてのぞく。

源七　そこから覗くのは、誰だ。

お仲　屑屋さんなら溜りませんよ。(トやはり覗いて居る。)

源七　何を言つても默つてるるか、履物泥坊ぢやねえか。

善八　(門口を明け、)いいえ、私でござりまする。(トおづ〳〵内へ入る。)

源七　おゝ、車力の善八さんか。

お仲　早く入りなされればようござんすに。
善八　まことに御無沙汰をいたしました。
源七　今日は商賣は休みかえ。
善八　へい、取込みがあつて休みました。
お仲　まあ一服おあがりなさんせ。（ト煙草盆を出す。善八四邊を見て、）
善八　いえ、お構ひなされて下さりますな、もしお上さん、お小いのはどうなされました。
お仲　遊び半分此間お師匠さんへあげたゆゑ、まだ手習ひから歸りませぬ。
善八　これは荒粉落雁でござりますが、お小いのが手習ひからお歸りなさつたら、上げて下さりませ。
ト箞折を出す。お仲取つて、
お仲　およしなされればよいに、有難うござります、もし、善八さんが、（ト源七に見せる、）
源七　何のお土産などがいるものか、むだなことをしなさんな。
善八　いえ〳〵人に物を賴むには、何ぞ持つて行くものだと、女房が申しましたから、貰つてあつた、いえ、買つて參つた荒粉落雁、決して貰ひものではござりませぬ。
源七　誰も貰ひ物だと言やあしねえ。

善八　買つたものと見えませうな。

源七　さうしてつひぞ來なさらねえお前が、わざ〱來なすつたは、何ぞ用でもあつてかえ。

善八　はい、ちとお頼み申したい事がござりまして、

源七　なに、おれに頼みたい事とは、

善八　外の事でもござりませぬが、わたくしが出入場の白子屋の娘ッ子が昨夜見世の若い者の忠七と駈落をしましたところ、手引きに頼んだ髮結の新三が娘ッ子を引つさらひ、家へ連れて歸つたのを新三の長屋の行事から内々知してくれたので、取返しに行つてくれとわたくしが頼まれましたが所詮わたくしではいけませぬゆゑ、どうしたものと女房に相談をいたしましたら、あなた樣へお頼み申すがよいと申すゆゑ上りました。人樣に物を頼むには何ぞ持つて行くものだと女房が申しますゆゑ此の貰ひ物の、いえ、貰ひものではない買立ての荒粉落雁、此の折をお小いさまへ上げますから、どうぞわたくしが頼みをば、お聞きなされて下さりませ。

源七　その話は今朝ッから人の噂に聞いて居たゆゑ、頼みにでも來にやあいゝと、實は思つて居たところだ。

善八　左樣なら、此の事をもう人が話しますか。

お仲　悪いこと程知れ易く、方々で噂をしてゐますわいなあ。

善八　御存じの上からは、御苦勞ながら深川までどうかおいで下さりまして、お取返しなされて下さりませ。

源七　お氣の毒だが善八さん、こりやあ堪忍して下さりませ。

善八　いえ、わたくしばかりでお頼み申さず、お袋さまも同道してお頼み申すのでござりますが、眼を泣き腫してござりますゆゑ、何れ後からお袋さまがお禮に上りますでござりますから、どうぞ行つて下さりませ。

源七　なに、お禮も何もいらねえが、先きの相手が悪いから、こればかりはお斷りだ。

善八　（思入あつて、）へゝえ、それではあなたにもわたくし同樣、新三が怖うござりますか。

源七　何のあんな小僧ッ子あがり、怖いこともなけりやあ恐ろしいこともねえが、相手にするのが厭だから。

善八　そりや、何ゆゑでござります。

源七　向うが何の何某と顏を賣る男なら直にもおれが行つて上げるが、高が小皿のかすり取り、遊人の交際もろくに知らねえごろつきあがり、おれがわざ／＼深川まで足を運んで貰ひに行つても、器

用にあいつが渡しやあいゝが、無法なことでも言やあがれば人の喧嘩も買はにやあならねえ、そんなことでもあつた日にやあ、新三を相手に源七もゆるんだとか廻つたとか、人に言はれにやあならねえから、お氣の毒だが善八さん、こりやあおれより町内の頭を頼んでくんなせえな。

善八　わたしも頭と思ひましたが、内の女房が申しますに、向うが太い新三だから、此方も太い源七さんに、お頼み申せと女房が申しますゆゑ參りました。

源七　此方も太い源七さんとは、御念の入つた御挨拶だ。

善八　（びつくりして）これは申すのではござりませなんだ、お氣に障つたら源七さん、御免なされて下さりませ。どうぞ聞かない分になされて、後生でござりますから、娘ッ子を取返しに行つて下さりませ。

源七　折角のお頼みだが、彼奴がうんと言はねえ時には、今もおれが言ふ通り、其の儘ぢやあ歸られねえ、血の氣の多い時分なら頼まれなくつても出かけるが、向うが見えちやあ行かれねえ。

善八　今わたくしが申したのがお氣に障つてゞござりますなら、どのやうにも詫りますからどうぞ行つて下さりませ、（ト思ひ出せしこなしあつて、）おゝさうだ、雌鳥すゝめて雄鳥時をつくると女房の言つたのをさつぱり忘れた、雌鳥に頼まなくてはいけぬ。もしお上さん、親分が行つて下さりませ

ぬと、白子屋の家でも一人娘を疵者にせねばなりませぬ、どうぞお前さんから、親分が深川へ行つて下さいますやうお頼みなされて下さりませ。もし、お慈悲でござりますく。

ト手を合せて頼む、お仲思入あつて、

お仲　善八さんも心底から困りなさる樣子ゆゑ行つて上げて下さんせぬか、お前は近附きでござんせぬが、わたしや白子屋のお上さんとは湯屋で度々落合つて久しいお馴染でござんすから、お斷り申すもお氣の毒、行つてよくば新三の所から、取返して來て上げて下さんせぬか。

源七　そりやあ行くのは造作もねえが、元より彼奴が引上げたのは金にする氣でした仕事、おれが貰ひに行つた所が、十と十五は遣らにやあならねえ、あんな奴に手切の金を取られるのが忌えましいから、それでおらあ行き度くねえのだ。

善八　いえもう、どうであんな者に掛り合ひを附けられたら、金を出さねば濟みませぬ。如何ほど金を出しましても少しも早くお熊さんを、家へ連れて參りませねば、この善八が口入した傳馬町の聟樣へ言譯がござりませぬ、其の聟樣が破談になると持參金が手に入らず、白子屋の家が立ちませぬ、お上さんがお袋さんとお心安いとあるからは、どうぞ家の立ちますやう、取返しに行つて下さりませ。

お仲　聞けば聞くほど白子屋のお上さんの御心配、否でもあらうが新三の所へ行つて上げて下さんせいな。

源七（思入あつて、）手前がさうして心安くすると聞いちやあ捨ても置けめえ、それぢやあ貰ひに行つてやらうか。

お仲　どうぞさうして下さんせいな。

善八　そりやこそ雄鳥が時をつくつた。

源七　なに、時をつくるとは、

善八　それ雌鳥すゝめて雄鳥時をつくる、女房が言つた通りだ。

源七　何にしろ相手が悪い、金にする氣でした事ゆゑ、手切といつたら三十も金を取る氣で居るだらうが、そこはおれが顔づくで、十兩ぐらゐであげる氣だが、そこの所は好からうね。

善八　そりやもう二十が三十でも、金に絲目は附けませぬ。

源七　先づ十兩と思つてゐるが、いゝうんと言はにやあもう五兩も足してやらにやあなるめえから、家へ歸つてお袋さんに其の事をよく話して下せえ、仕事と知りつゝ十兩でも彼奴に金を取られるのは、最中でとられると同じことだ。

善八　いえ〳〵、先刻あげましたのは最中ではござりませぬ、荒粉落雁でござりまする。
源七　ほんにお前は、目出度い人だ。
お仲　そんな事はどうでもよいから、少しも早くお袋さんへ、お話し申して下さんせ。
善八　はい、直に行つて參ります。
源七　それぢあお家に待つて居るから、金を持つて來て下せえ。
善八　畏りましてござります、もしお上さん、全くお前さんのお勸めで時をつくつて下さいまして、有難うござります。（ト善八、お仲へ禮をいふ。）
お仲　そのお禮には及ばないから、早く行つて來て下さんせ。
善八　はい〳〵、直行つて參ります。
お仲　金太の所へ有難うござんす。
善八　なに、お前さん、貰ひ物を、（トロを押へ、）どれ行つて參りませう。
ト端唄にて善八下手へ入る。源七思入あつて、
源七　昨夜話しを聞いた時から、おれが所へどこからか持ち込まにやあいゝと思つたが、到頭善八どんに頼まれた。

お仲　昨夜お前が永代橋で忠七さんを助けたも、これもやつぱり何ぞの緣、外と違つて白子屋のお袋さんがお氣の毒、否でもあらうがこれから行つて、取返してあげて下さんせ。

源七　こんな事も若え時から珠數の數ほど賴まれたが、先の相手が誰といふ親玉なれば顏づくで、圓く話しも出來るけれど、角の取れねえ新三の野郎、まだごろつきの數取りにも足りねえ奴だが、貰ひに行きやあ、彼奴が七もく題目を有難さうに聞かにやあならねえ、こんな厭なことはねえ。

お仲　嘸厭でござんせうが、所詮堅氣の人達では術よく渡してよこすまいから、氣を長房に癇を起さず掛合つてあげて下さんせ。

源七　そりやあおれも取る年だから、めつたに珠數は切らねえが、智嚴院樣の說法もどきで舌をふるつて說きつけても、彼奴がきかねえ其の時は、（トきつと思入）

お仲　その生得もお祖師さまへ、お參り申した心になつて、

源七　まだ九月にもならねえのに、とんだ御難を。

お仲　え、（ト源七烟管で灰吹を叩くを、道具替りの知せ、）

源七　背負こんだな。

ト端唄になり、兩人よろしく思入あつて道具廻る。

（富吉町新三宅の場）＝本舞臺三間の間常足の二重四枚飾り、正面上手一間押入戸棚、上三尺佛檀、下錠前附の間半戸、續いて鼠壁、下手一間鼠入らず米櫃、膳棚の書割り、此の前に一つ竈、置流し、手桶など臺所道具よろしく、上の方後へ下げて竹格子の中窓、下鼠壁いつもの所門口、下の方路地口、此の向う裏長屋の片遠見、總て髮結新三内の體。爰に勝奴序幕の下剃にて箱火鉢へ帳場藥罐をかけ、火をおこし居る、門口に合長屋の權兵衞やつし裝にて立ちかゝり居る、此の見得四つ竹節にて道具留る。

權兵　勝さん、親分は留守かえ。

勝奴　あい、今湯へ行きました。

權兵　昨夜夜通しこつちの家で女の泣聲が聞えたから、今朝隣りの家で聞いたらば、廻り場所の新材木町から、娘を連れて來たさうだの。

勝奴　いゝ所の娘ッ子だから、疾うから親方にくッ附いて居て連れて逃げてくれといふので、昨夜家へ連れて來たが、心細くでもなつたのかぐつ〳〵泣いて困りました、嘸おやかましうござりましたらう。

權兵　たゞでせえ年のせえで目が覺めてならぬのに、ふつと泣聲が耳につき、とんだ昨夜はお通夜をしたのさ。

勝奴　そりやあお氣の毒でござりました。
權兵　なに、お氣の毒のこともないが、さうして其の娘ッ子は家へでも返したのか。
勝奴　いえ、御近所へやかましいから、戸棚の内へ入れてあります。
權兵　どこの娘か知らないが、嘸家で案じて居ませう、親に對して不孝なことだ。
勝奴　この道ばかりは別なものさ。（ト時鳥笛になる。）
權兵　だいぶ時鳥の聲を聞くが、まだ鰹の聲はきかねえやうだ。（ト此の時揚幕にて。）
新吉　鰹、鰹。（ト呼ぶ。）
勝奴　おゝ噂をすりやあ影とやら、鰹の聲が聞えますぜ。

ト誂への端唄になり、花道より新三好みの鬘、房楊枝を頭へ挿し、單衣、三尺帶、下駄がけ濡手拭を提げ、湯上りの打扮にて出來り、後より魚屋の新吉、單衣三尺帶、草鞋、尻端折りにて盤臺へ鰹を入れ、天秤棒にて擔ぎ出來り、花道にて、

新三　新公、鰹はいくらだ。
新吉　一節かえ。
新三　なんぼ廻りの髪結だつて、見くびつた聞きやうだの。

新吉　それだつて、大勢ぢやあなし、奴さんと二人だから一節ありやあ澤山だ。

新三　家でばかり喰やあしねえ、人にも喰はせらあ、一本いくらだ。

新吉　親方お前のことだから掛直は言はねえ。三分一朱おくんなせえ。

新三　なんで一朱瘤を出すのだ、器用に三分で置いて行きねえ。

新吉　一朱ばかりどうでもようござります。

ト右の端唄にて舞臺へ來り、新吉下の方へ荷をおろす、新三内へ入り、

新三　勝や、當り鉢を出してくれ。

勝奴　何を買ひなすつた。（ト摺鉢を出す。）

新三　鰹を一本買つた。

新吉　丸で置かうか、おろしやせうか。

新三　刺身は家でつくるから、片身おろして置いてくんねえ。

權兵　新さん、鰹はいくらだね。

新三　初鰹も安くなりやした、一本三分さ。

權兵　え、お前三分で買ひなすつたのか。

新三　昨夜ちつと呑み過ぎたから、大作りで一杯やる氣さ。
權兵　よく思ひ切つて買ひなすつたね、わたしなどは三分あると單衣の一枚も買ひます。
新吉　お前さんのやうな人ばかりあると魚賣りはあがつたりだ、三分でも一兩でも高い金を出して買ふのは、初といふ所を買ひなさるのだ。

ト此の内新吉仕掛物の丸物の鰹をこしらへ、頭を取り片身おろし摺鉢へ入れて出す、勝奴取つて、

勝奴　此奴は滅法新めえだ、中落を煮て早く喰ひてえ。
新三　こう、いゝあらばかり喰せやあしねえ、人聞きのわるい事を言ふなえ。
權兵　もし魚屋さん、その頭はどうなさるのだ。
新吉　こりやあ犬にやるのだ。
權兵　犬にやるは勿體ねえ、捨てるならわたしに下さい。
新吉　さあ持つて行きなせえ。(ト頭を出す。)
權兵　こりやあ有難い、初鰹にありついた。(ト合方にて權兵衞鰹の頭を提げて下手路地口へ入る。)
勝奴　いゝしみつたれな親仁だ。
新三　その代り節句には羽織を着て禮に廻らあ。

新吉　親方、置いて行きやせうか。

新三　おゝ金をやるのをさつぱり忘れた、（ト財布の中から二分金を一つ出して、）それ二分金が二つだよ。

ト出す新吉受取り、

新吉　生憎お釣か、

新三　なに、釣にやあ及ばねえ、借の内へ入れて置いてくんねえ。

新吉　そりやあ有難うござります。かつを〱。（ト荷を擔ぎ、呼びながら下手へ入る。）

勝奴　親方がうぎに手を擴げなさるね。

新三　今に白子屋から人が來りやあ、包み金に有りつくから、前祝ひに呑んで待つのだ。

勝奴　お前が玉を引きあげたを、忠七の野郎が知つてゐるから、もう誰か來さうなものだ。

新三　どうだおれが湯へ行つてゐるうち、ぐづ〱言やあしなかつたか。

勝奴　言つた所か、戸棚から出してくれ〱と、泣聲でいふものだから、向うや隣りの上さんに覗かれるのでまことに困つた。

新三　覗かれたつて構ふものか、御はつせきの事でもしやあしめえし、相對づくで連出したのだ、誰に見られたつて構ふものか。（トわざと隣へ聞えるやうに大きく言ふ。）

勝奴　構やあしねえが、此の長屋にも鐵棒引が多いから、言ひ附けられでもするといけねえ。
新三　そんなことでもしやあがりやあ、一緒に連れて行つてやらあ。
勝奴　これさ、大きな聲をしなさんな、大屋に聞かれると面倒だ。
新三　長屋の奴はなんでもねえが、太えことにやあ拔目のねえ、大屋はおれが敵藥だ。
　　ト木遣崩しの端唄になり、花道より以前の源七羽織着流し雪駄、善八附添ひ出來り、花道にて、
源七　善八さん、新三の家は向うかえ。
善八　大屋さまで聞いて來ましたが、向うの家でござります。
源七　新三が家に居るか居ねえか、門からちよつと見て下せえ。
善八　いえ、家に居るに違ひござりませぬ。（ト顫へる。）
源七　なぜそんなに顫へるのだ。
善八　新三が怖うござります。
源七　え丶、臆病な人だな。
　　ト舞臺へ來り、善八門口より覗き見て、
善八　もし親分、家に居りますく。（ト源七靜にしろといふ思入あつて、門口にて、）

源七　御免なせえ、新三さんは家かね。
勝奴　あい、家に居ります、（ト新三に向ひ、）親方、乗物町の親分がおいでになりました。
新三　（前へ出て、）こりやあ親分、何と思つてわたくし共へ、まあ此方へお上りなされませ。これ蓙を早く敷いてくれ。
勝奴　あい〳〵、（ト勝奴上手へ花蓙を敷き、）親分、これへおいでなされませ。
源七　なに、蓙を敷きなさるにやお及ばねえ。
新三　いえ、男鰥に何とやらで、穢なくつていけません、どうぞこれへ来て下さいまし。
源七　それぢやあ御免なせへまし。（ト上手蓙の上へ住ふ、勝奴茶碗を盆の上へ載せ、）
勝奴　へい親分、お茶をお上りなさい。
新三　これ、そんな茶が上られるものか、早く湯を沸して一ぱい入れろ。
勝奴　ほんに、あんまり古ばなだつた。
善八　もし喉が乾いてなりませぬから、わたくしがお貰ひ申しませう、
勝奴　お丶車力の善八さんか、お前にやあ相應だ。
善八　なんでござりますと。

勝奴　なに、こつちのことさ、（ト茶を出すを善八取つて呑む。）

新三　もし親分、今日は何處へおいでなさいました、お開帳でございますか。

源七　いやお前にちつと用があつて、わざ〳〵こつちへ出掛けて來たのだ。

新三　何の御用か知りませぬが、ちよつとお人をおくんなされば此方で出掛けて參りますもの、こんな穢ねえ所へおいでなすつて、誠に面目次第もございませぬ。さうして御用とおつしやりますは。

源七　今日わざ〳〵出て來たのは外の事でもねえ、新三さん、白子屋の事で來ました。

勝奴　それぢやあ親分のお出でなすつたのは、白子屋の事でございますか。

善八　おゝ、此の善八が、お頼み申して爰へお連れ申したのだ。

新三　（思入あつて、）大方この荷は親分の所へ下りるだらうと、先刻から勝と話しなして居りましたが、どうぞ親分此の事ばかりは、口を出さずにおくんなせえ、お前さんに口を利かれるとどんな事でも顏負けで、わつちがうんと言はにやあならねえ、どうぞ口を利かずにおくんなせえ。

源七　いくら口を利くなといつても、おれも男と見掛けられ、據ろなく頼まれて、斯うして出掛けて來たからは、そんならさうかと此のまゝにいゝ年をして歸られるものか、おれも彌太五郎源七だ、利くだけの口は利かにやあならねえ。

ト　これを聞き新三、癇に障りし思入。此の時戸棚の内にてばたばたと音する、新三大きな聲をして、

新三　えゝ靜にしやあがらねえか、連れて逃げてくれろといふから昨夜家へ連れて來たのだ、じたばたするにやあ及ばねえ、

トきつといふ、此の内善八びつくりして下手へ逃出す、新三氣を替へて、源七へ辭儀をなし、

親分眞平御免なせいまし。勝や、まだ茶は出來ねえか。

勝奴　あい、今入れる所でござりまする。（ト茶を入れる。）

源七　おれなら構つてくんなさんな、今永代で呑んで來たのだ。

新三　なにもわつちが家だつて、毒を入れちやあ上げねえから、出來たら呑んでおくんなせえ。

勝奴　親分御免なせえ。（と茶碗を盆へ載せて出す。源七取つて一口呑み、）

源七　ときに新三さん、長く言ふにも及ばねえが、昨夜こつちに用があつて稻荷堀まで來たところ、俄雨で傘を借り、通りかゝつた永代橋、時刻もかれこれ九つ前、橋からどんぶり身を投げて死なうとするを抱き留めて、顏を見れば白子屋の若い者の忠七どん、

新三　え、（ト思入。）

源七　どうした譯と樣子を聞けば、これから先きは言はずともお前の胸にある事だが、此の御政事の破

しいのに、人をお先きに娘ッ子をお前の家へ引き込んだのも、斯ういふ譯でしたことゝ先きから先きの讀めるのは、こんな事の貰ひ引きも四十年來して來た源七、お前も長い橋を越しておれが近所を廻るからは、口を利かれて迷惑だらうが、おれに任してくんなせえ。

新三　もし親分、四十年來こんな事は手掛けて居るとおつしやるが、こいつは讀みが違ひました、何もわつちやァあの娘を、かどはかしちやあ連れて來ませぬ。不斷仕事に行く白子屋、初めは胡麻に顏や襟剃つてやつたが緣となり、白銀町の觀音樣へ夜參りに行つた歸りがけ、和國橋の髮結床へ引摺り込んだが始まりで、藥研堀や西河岸の御緣日を當てこんで逢引をして居やしたが、今度聟が來るにつき是非連れて逃げてくれと、附けつ廻しつ言はれるゆゑ、わつちも帳場を捨てる氣で昨夜家を連れ出したのさ。(ト戸棚の内でばた〳〵するゆゑ。)又騷ぎやあがるか、靜にしろえ。それから家へ連れて來たら、藏もねえこんな家に居るのは厭だとじぶくつて、家へ返してくれと言ふから、なんぼ世間を知らねえといつて、家藏を持つて深川から帳場仕事に行くものか、爰の家が厭ならば吉原へでも品川へでも、立派な家へやつてやると、あんまり分らねえ事を言ひやすからふん縛つて戸棚の内へぶち込んで置きました、連れて逃げてくれといふから、帳場を捨てゝあの娘を爰の家へ連れて來たのだ、人をお先きに連出して引ッさらつちやあ來ませぬから、親分、さ

う思つておくんなせえ。

源七　詳しい譯は忠七どんから聞いて居るが、どうでもいゝ、くどく言つても落つる所はやつぱり同じ谷川で水掛論をするだけ無駄だ、お前方の生業ぢやあ腕せえありやあ何處へ行つても出來る生業とはいひながら、帳場を捨てたといふからは、なんぼおれが頼まれたとてたゞ連れて行かうとは言はねえ、今勝公が入れてくれた新茶の色で話しをしよう。家藏のある白子屋の一人娘のことだから、お前の氣ぢやあ肴代の百兩も取る氣だらうが、爰は彌太五郎源七だ不承だらうが新三さんおれに負けてくんなせえ、(ト言ひながら懐から紙に包みし十兩を出し、)此の十兩を百兩と思つて娘を返してくんねえ。(ト新三の前へ金を出す。新三取上げ見て、)

新三　それぢやあ親分、此の金で、連れて逃げたあのお熊を、返してくれと言ひなさるのか。

源七　定めし氣にも入るめえが、それで不承してくんねえ。

新三　十兩の、此の金でかえ。

源七　知れたことさ。

新三　えゝ、てえげえにしやあがれ。(ト彌太五郎源七の顔へ金を叩き附ける。)

源七　何をしやあがる。(ト源七立ちかゝらうとするを善八あわてゝ留める。)

新三　何をするものか、叩き返したのだ。

源七　どうしたと。（トきつとなる。）

善八　あゝこれ親分、月がわりい〱。（ト留める。）

新三　これ、十兩といふ相場は何處で立てゝ來たのだ、手切足切を貰はうといつて、娘を連れて逃げやあしねえ。急に聟が家へ來るから連れて逃げてくれねえけりやあ身を投げて死ぬといふから、殺した日にやあ白子屋の血筋の絶える事だからおれが連れて逃げたのだ。不理窟を言やあ命の親だが、高が廻りの髪結ゆゑ家藏のある材木屋の一人娘で呉れられざあ、返してやるめえものでもねえが、貰ひに來たその人が乘物町から葭町かけ、圍者や藝者屋を年中籠めて幅をきかせる二つ名のある彌太五郎源七、親分風か氣に喰はねえ。これが車力の善八さんが譯を言つて貰ひに來りやあ、たゞでも娘は返してやるが強い人だから返されねえ、不斷帳場を廻つてをりやあ愛嬌を賣る生業だから、厭な奴にも頭を下げるが、帳場を捨てれば五分と五分、一寸でも後へ引くものか、おれを白癡と思やあがつて、彌太五郎源七だから負けてくれ、肩書があるから負けられねえ、こんな事も言ひたくねえが言はにやあどぢにやあ分からねえから、假名で書いて言つて聞かせよう、産れは上總の木更津だが炮碌を剃る時分から旅から旅を渡つて歩き、ちよつくら持ちや押借りで

とう〳〵しまひは喰ひこみ、身體へ疵のついた新三だ、お前達に脅されてさらつた娘を返すやうな、そんなどぢだと思やあがるか。勝や、見りやあ見るほど、いやな奴だな。

勝奴　ほんに好かねえ小父さんさねえ。

ト兩人せゝら笑ひ、源七をはぐらかす思入。源七口惜しき思入。此のうち善八は打ち附けし十兩の金を拾ひ紙に包む。

源七　これ新三、上總といへど江戸優り器用に口を利くけれど、水の違つた產れといつて遊び人の義理も知らず、よくおれに恥をかゝせたな、御大層なことを言ふやうだが芝の果から淺草かけて誰れ知らねえものもねえ乘物町の彌太五郎源七、手前と違つて向脛の疵は喧嘩で切られた疵、もう二十年若けりやあ命の遣り取りするけれど、五十を越して後前を考へた日にやあ馬鹿々々しく、無法な事も出來ねえから、今日は此の儘歸つてやるぞ。

新三　恩にきせて歸らずとも、何時までも居なせえな、五十を越して後前の考へがついたなら、娘を貰ひになぜ來たのだ、旋毛の曲つた此の新三が、くれようと思ふが白惚だ。

勝奴　そこが燒の廻つたのだ、產れた土地に乘物町ぢやあ無理な理窟も通らうが、大きな川を隔てちやあ誰が何と思ふものだ。

新三　喧嘩ッ早いと話しに聞いたが、後前を見なさるだけ、勘辨強い小父さんだ。
源七　（腹の立つ思入あつて）い丶年をして手前達にこんな事を言はれるも、事の大きくなるを厭つて、ぢつと我慢はするもの丶、持つて生れた癇癪に、（ト源七きつとなるを善八留めて、）
善八　あ丶これ源七さん、必ず早まつて下さりますな、爰の家でお前さんが短氣を出して下さりますと内證の事も表沙汰、どんな事になりませうか先きが知れねばこのま丶に、どうぞ歸つて下さりませ。
源七　これだから善八さん、先きに厭だと言つたのだ、おれが男を立てようと爰で喧嘩をする時は一に難儀の掛るは白子屋、頼まれて來た源七から事を起すも氣の毒ゆゑ、蟲を怺へて歸らにやならねえ。
善八　いえもう、わしもよしない事をお前さんにお頼み申し、お氣の毒でなりませぬが、どうぞ御料簡なされて下さりませ。
源七　假令どんな恥をかいても、今日は無事に歸るから、必ず心配しなさんな。
善八　それで安堵いたしました。（ト善八胸を摩る。）
新三　喧嘩は留め手のあるのが花、今日に限つたことでもねえ、何時でも意趣を返しに來ねえ。

源七　む〻、此の一件が濟んだらば、今日の禮を言ひに來やせう。
新三　わざ〳〵來るにやあ及ばねえ、此方の方から出て行くから、留守をつかつてくんなさんな。
源七　高の知れたる手前達に、何でおれが逃げるものか。
新三　その口を忘れなさんな。
源七　そんなら新三、
勝奴　箍のゆるんだ小父さんか、
新三　これ、二つ名のある親分だ、失禮なことを言ふな。（トわざと勝奴を叱る。）
源七　どれ、指を銜へて歸らうか。

ト源七善八門口へ出る。勝奴鹽花をふり門口をしめる、此の以前下手路地口より、お角やつし裝家主の女房にて出來り、此の時思入あつて、

お角　もし乘物町の親分、ちよつと待つて下さりませ。
源七　つひぞ見ねえ、お前さんは、
善八　先刻あがつた大屋さんの、お上さんでございます。
源七　あ〻、さうでございましたか。

お角　扨々店子でござりますが呆れかへつた太い奴、さつき家の親父どのもお前さんの事を承はり、源七さんがござつたら内濟になるであらうが、若し言ふ事をきかなくば又家主の威光を以て、言ひきかしてやりませうと申しましてござりますから、ちよつとお立寄り下さりませ。

源七　有難うござりますが、ちつと差しかゝつた事がござりますれば、わたくしはお暇いたしますから一緒に參つた善八どのから、委細の樣子をお聞きなすつて、何分お賴み申します。

お角　それぢやあ親分は、お歸りなさいますか。

源七　向うや隣の長屋の衆に顏を見られますも面目ない、失禮ながら御免下さりませ。

善八　さういふ事なら、わしが殘つて、大屋さまへ參りませう。

源七　よく行つて、お願ひ申すがいゝ。

お角　左樣なら源七さん、

源七　よろしくおつしやつて下さりませ。

ト源七は花道、お角善八は下手路地口へ入る。源七花道で今に見ろといふこなしあつて花道へ入る、

勝奴門口を明けて向うを見て、

勝奴　親方、燒廻りは歸りやしたぜ。

新三　金を横ッ面へたゝきつけ、手出しでもしやあがつたら、二度と再び世の中へ出られねえやうにしてやらうと、固唾を呑んで待つて居たが、手出しもせずに悄々歸つて行つたは意氣地がねえが、實はこつちも仕合せだ。

勝奴　喧嘩になつたら向脛をやすませてやらうと、臺所の揚板の側に居ましたが、口ほどにもねえ奴だねえ。

新三　若え時にやあ喧嘩ツぱやく、あの居廻りの八町ぢやあ繡賣りが來ようが、錢貰ひが來ようが、彌太五郎と言やあ名に恐れて、大きな聲もしねえくらゐ幅の利いた男だつた。

勝奴　そのくれえな男なら、もう少し尻腰がありさうなものだねっ。

新三　そこがやつぱり年の功だ、おれが彼奴と喧嘩をして腦天でも叩ッこはしやあ、新三もがうぎなことをしたと此方の體に箔が附くから、爰は一番割事で彼奴の鼻を彈いてやつたが、向うも年を取つてるから其處へ心が附いたので、手出しをせずに歸つたのだ。

勝奴　そこへ心が附くといふのが、やつぱり燒が廻つたのだね。

新三　その燒よりやあ日ざしが廻つた、早く鰹を喰はうぢやねえか。

勝奴　とんだ小父さんでさつぱり忘れた、わつちが刺身に作りやせうか。

新三　腹皮を大ばなしに、芝作りにやつてくれ。
勝奴　一番手際を見せやせう。（ト刺身庖刀と砥を出す。）
新三　手前の刺身の出來るうち、戸棚の内からお熊を出して、もう一遍口說いて見よう。
勝奴　止しねえ、又めそ〳〵泣かれると、近所の者が面倒だ。
新三　それでもこれぎりぢやあ、詰らねえ。
勝奴　どうせ無駄だから、止しねえといふのだ、側で聞くのはどつとしねえ。
新三　晚にやあ小新地へやつてやらう。
勝奴　阿魔の面ぢやあさえねえな。（ト新三あたりを捜す思入にて、）
新三　勝や、鍵を知らねえか。
勝奴　止しねえといふに、わつちやァ鍵は知りやせん。
新三　えゝ意地の惡い、（ト煙管で錠を叩くを道具替りの知せ、）野郎だなあ。
ト新三は錠を叩き勝奴は剃刀を研ぐやうに刺身庖刀を研ぐ、此の模樣よろしく四ツ竹節にて道具廻る。

（家主宅の場）——本舞臺三間の間常足の二重、正面上手一間上半襖、下桐四ツ引出しの簞笥、此の

脇後へ下げて地代、店賃、押切帳など掛け、眞中更紗の暖簾口、下手茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所門口、下の方黒塀、總て家主宅の體。爰に以前のお角箱火鉢の側にて茶を入れて居る。善八下手に煙草を呑んで居る。此の見得四ツ竹節にて道具留る。

善八　お上さん、お構ひなされて下さりますな。

お角　決してお構ひ申しはいたしませぬ。

善八　さつき旦那様がおつしやいますにも、源七さんで若しいかずば、口を利いてやらうとおつしやいましたから、お詞にあまえましてお願ひに上りました。

お角　家の人もさう言つて居ました、源七さんの顏に免じてうんと言ふか知らないが、よつほど旋毛が曲つて居るから、一通りでは得心して娘ッ子は返すまいとお噂をして居りました。

善八　いえもう、大屋様のお察しの通り無法な事ばかり申しまして、少しも言ふ事はきゝませぬ。

お角　實の事は店子の事ゆゑ、間違ひでもなければよいと、隣の家から壁越しに殘らず樣子は聞きました。よく源七さんも蟲を怺へて、何事もなく歸りなすつた。

善八　まことにわたくしも案じました、時にお宅の旦那様はまだお歸りなされませぬか。

お角　今自身番まで行きましたから、一服あがつてもう少し待つて居て下さりませ。

善八　何時までゞも待つてをりますから、旦那樣のお力で娘ッ子を返しますやう、お、それ〳〵、雌鳥すゝめて雄鳥の旦那樣に、いゝとけつかうと時をつくらせて下さりませ。
お角　歸つて來たら共々に、わたしも賴んで上げませう。
　　ト下手路地口より長兵衞、家主羽織着流し駒下駄にて出來る、善八見て、
善八　おゝ、旦那樣がお歸りなすつた。
長兵　お前は先刻來なすつた、新材木町の善八さんか。（ト言ひながら二重へ上る。）
善八　どうも源七さんでいけませぬから、お歸りをお待ち申して居りました。
長兵　初手からわしもむづかしからうと、婆あどんを見せにやつたが、なか〳〵太え野郎だから、てえげえなことぢやあ言ふことをきかねえ。
善八　大屋樣のお掛合で、どうか娘を返しますやう、よろしくお賴み申しまする。
お角　此のお人もさつきから困りきつて居なさる樣子、所詮お前でも行かなくつては言ふ事は聞きはしねえ、先のお家もよいことだから口を利いてお上げなせえな、骨を折つたら折つたやうに、正直なお話しだが何事もそれづくさね、ほゝゝゝゝ。（トそら笑ひをする、）
善八　いえも、お禮はどの樣にも白子屋から致させますから、どうぞお願ひ申します。

長兵　其のやうに賴みなさるなら、わしが取返して上げようが、然し十兩といふ相場はちと源七さんでもなかつた。どうであんな太え奴に掛り合をつけられたのが白子屋さんの災難だ、尤もでんどへ持ち出せば三文出すにも及ばないが、其代りぱつとして娘ッ子にも疵が附き、聟を取るにも邪魔になるゆゑ、こつそり內證で濟ますには、仕方がねえ、ちつと餘計に金をやらにやあ早く濟まねえ、長く留めて置くうちには可哀さうに娘ッ子がどんな目に逢ふも知れねえ。

お角　ほんにあゝいふ無法者だから、腹さん〴〵仕度いことをして、宿場へでも賣つてしまひ、隨德寺をしまいものでもない。

長兵　なんでもこんな事は早いがいゝが、百と二百取る氣で居るから、十兩ぢやあ承知しねえ、三十兩出しなさるなら、わしが口を利いてあげよう。

善八　三十兩で濟みますなら、どうぞお願ひ申します。

お角　もしお前さん、あの新三が三十兩で得心しますかえ。

長兵　得心しねえければしねえやうに、彼奴におれが仕置をしてやる、然しお前の一料簡でも取計ひ憎からうから、相談して又來なせえ。

善八　いえ、相談するにや及びませぬ、實はさつき源七さんも十兩で得心せずば、五兩と七兩出す積り

で、金はわしが三十兩爰に持つて居りますから、これでお願ひ申しまする。

ト懐の財布から三十兩紙に包みしを出す、長兵衞取つて、

長兵　三十兩なら、否應なしに取返してあげよう。

善八　それは有難うござります。

長兵　婆あさん、お前は横町の駕籠屋へ一挺言附けて置いて下せえ。

お角　今ッからいひ附けて、無駄になりやあしませぬか。

長兵　年はとつても長兵衞だ、どぢなことをするものか。

お角　それだといつて無駄になると、

長兵　そんなけちなことを言ふな、この一件が首尾よく濟めば、（ト思入にていふ。）

お角　成程立派なお家だから、お禮がしつかり、

長兵　えゝ、下司ばつたことを言ふな。

お角　爰が家主根性さ。

長兵　それぢやあ善八さん、行きませうか。

善八　へい、お供をいたしませう。

長兵　婆あどん、駕籠を忘れさつしやるな。（ト四ッ竹節にて長兵衞先に善八附き下手へ入る。お角思入あつて、）

お角　兎角世間に事なかれと、よく人は言ふことだが、家主などは長屋内に事勿れでは錢にならぬ、思入れ長屋に事があつて、こんな事に掛り合ねば禮を貰ふことがない、先づこれが濟んだらば先きが立派な家だから、五兩位はよこすだらう、五兩取つたら浴衣を着て殘りで芝居を一日見ようか、いやこんな事を言つて居て、又駕籠屋を忘れるとやかまし親父が大叱言だ、いつそう口を拭いて置かう、（ト下手へ向ひ、）隣のおッかあ家になら、駕籠屋まで行つて來るから入口を見て居てくんな、此の頃は晝日中でも物騷だから油斷がならない、おッかあきつと頼んだよ、あゝ早く禮を貰ひたいものだ。

ト四ッ竹節にてお角下手へ入る。これにて此の道具元へ戻る。

（新三宅の場）――本舞臺、元の新三内の道具、膳の上へ刺身皿を載せ酒道具よろしく、新三勝奴を相手に酒を呑み居る、門口にて長兵衞善八囁き居る、此の見得新内の合方にて道具留る。と善八後へ下つて窺ひゐる、長兵衞内へ入り、

長兵　新三どの、今日は休みか。

新三　大屋さんでござりますか。ちつと風を引きましたから、手間を入れて休みました。
長兵　だいぶ風が流行るさうだ。
勝奴　わつち共の親方は、流行物はのがしませぬ。
長兵　膳の上のは鰹の刺身か、皮作りは氣がわりいな。
新三　片身ありますが、上げませうか。
長兵　そいつは何より有難い、まだ今年は初鰹だ、片身貰ふも氣の毒だが、然し羅宇のすげかへの權兵衞や甘酒屋の仁兵衞と違つて、貴樣の錢は惡錢だから、遠慮せずに貰つて置かう。
新三　世間體の惡いことをおつしやりますな、膏汗をしぼる髮結の錢が、何で惡錢なことがありませう。
長兵　そんな事は外へ行つて言へ、おれに言ふのは無駄な事だ。
新三　もし大屋さん、店賃の催促なら、もう二三日待つておくんなせえ、ちつと金の入る事がありますから。
長兵　いや今日は店賃の催促ぢやアねえ、手前に話しがあつて來たのだ。
新三　なんぞ儲かることでござりますか。
長兵　おゝ、金になる話しだ。

勝奴　まあ大屋さん、こつちへおいでなさい。

長兵　邪魔になるならそつちへ行かうか、（ト長兵衞上手へ住ふ。善八は路地口へ入る。）ときに新三、おれが來たのは、昨夜手前が連れて來た、白子屋の娘のことだが、

新三　もし大屋さん、お話しの中でございますが、白子屋の娘なら太え阿魔でございますから、うつちやつておいて下さいまし。

長兵　太えか細いか知らねえが昨夜からのあらましは、壁隣の五兵衞が來ておれに話して聞かせたから筋はたいがい知つて居る、何にしろ向うからあの店廻りで口利の彌太五郎源七が來たさうだが、よく鼻を彈いてやつた、今婆あどんから聞いたが、おらあ陰ながら悦んで居た、なんでも人は賣出すには名高い奴を一本いかにやあ好い男にはなられねえ、それに又扱ひも苦勞人のやうでもねえ、十兩といふのはしみつたれだ、向うは幾干で請合つたか、あんまり源七が儲け過ぎるな。

新三　大屋さんのおつしやる通り、それ相應の掛合ひなら、厭な奴でもあの土地で肩書のある源七だから顏を立つてやりますが、こつちをたゞの髮結だと思つて、十兩ばかりの端た金を、大きな事を言やあがつて、わつちが前へ出したから横ッ面へ叩き附けて、金を返してやりやした。

長兵　おゝ、よく叩きつけて返してやつた、それでなくッちやあ賣出せねえ、近頃にねえ手前の手柄だ

家主まで鼻が高い、おれは世間の人と違つて店子は太え奴がいゝ、堅氣な奴は話せねえ。

新三　お前さんのやうな大屋さんは、八丁堀にもござりませぬ、不斷友達の所へ行つてもお前さんの事ぢやあ惚けます。

勝奴　それだからわつちなども、大屋さんは極く贔屓さ。

長兵　そりやあ何にしろ有難いが、それについて新三、手前に改めて頼みがある。

新三　その頼みとおつしやるのは、今いつた白子屋の娘の事でござりませうが、どうぞこりやあ構はずに、うつちやつて置いて下さいまし。

長兵　いや／＼構はずには置かれねえ、手前の筋がいゝ事なら長く引ッ張るもいゝけれど、連れて逃げたといふけれど種を明かせば勾引だ、表沙汰にされて見ろ三文にもなりやあしねえ、内證で早く濟ましてえと向うでいふが此方の附目だ、惡いやうにあしねえから、おれに任して娘ッ子を早く向うへ返してやれ。

新三　そりやあどうで白子屋の一人娘のことだから、女房にくれねえ曉は、お定りの手切と轉んで金にする氣でした情事だから、扱え次第で返しますのさ。

長兵　その筋道は分つて居るから、長い短かい言はねえで、此の家主に任してくれ、源七のやうに十兩

と下から刻んで相場は立てねえ、年を取つて氣が短えから、出してよし取つてよしといふ中を取つて、三十兩手前に金を取つてやるから、それで默つて返してやれ。

新三　思召しは有難うござりますが、顎が三軒附いてゐる帳場を捨てゝ掛つた仕事、少なくも百兩と纏つた金を貰はにやあ、大屋さんのおつしやることだが、どうも娘は返されませぬ。

長兵　そりやあ手前と關係があつて連れて逃げた娘なら百兩でも二百兩でも、取れるだけ取るがいゝけれど、いはゞ勾引同樣なよくねえ筋のことだから、三十兩で料簡しろ、

新三　不斷お世話になりますから、お前さんの言ふことは、何でもわつちやあ聞きますが、こればかりは大屋さん、三十兩ぢやあ聞かれません。

長兵　それぢやあ、おれが言ふことは、聞かれねえといふのだな。

新三　どうぞ堪忍しておくんなせえ。(ト長兵衞きつとなり、)

長兵　むゝ、聞かれざあ止しにしろ、おれが言ふことをきかねえけりやあ、その分ぢやあ置きやあしねえ、此の趣きを言ひ立つて召連れ訴へをするからさう思へ、兩御番所は言ふに及ばず、御勘定から寺社奉行、火附盜賊改めの加役へ出ても深川の、長兵衞といやあ腰掛で誰知らねえものもねえ金箔附の家主だ、此の長兵衞が舌三寸で四尺に足らねえ手前の體へ、繩をかけるのは造作もねえ

が、店子といへば我が子も同然、親が掛けてえことはねえ。悪い事は言はねえから三十兩取つて置け。

新三　そりやお悪いこともおつしやるまいが、わつちも堅氣の髪結ならお禮を申してお貰ひ申すが、きざなことだが獄中へも行き物相飯も喰つて來た上總無宿の入墨新三だ、今お前さんに突出されて再び行つても羽目通りで、干物の頭を拾つて喰ふしがねえ日にも逢はねえが、

長兵（これへ冠せて、）これ〳〵いゝ加減に喋らねえか、耳に障つて聞き度くねえ、默つて居りやあいゝかと思つて、再び行つても羽目通りで干物の頭は喰はねえなどゝ、生利なことをいふうちに、上總無宿の何とか言つたな、

新三　上總無宿の入墨新三さ。

長兵　そんな事を大きな聲で言ふ奴があるものか、入墨といふものを手前は何と心得てる、人交りの出來ねえ證だ、假令手前に墨があらうが知らねえ積りで店を貸すのだ、表向き聞いた日には一日でも店は貸せねえ、形を見ると氣がきいて居るが、よつぽど間抜けな野郎だなあ。

新三　もし大屋さん、なんぼお前の店子だつて、間抜けといふのはあんまり酷い。

長兵　間抜野郎に違えねえ、何處の國にか家主の前で、隱すべき入墨を、自慢に言ふ奴があるものか。

新三　こりやアわつちが惡かつた。
長兵　それが惡いと氣が附いたら、三十兩で料簡しろ。
新三　それだといつて三十兩ぢやあ、
長兵　厭なら止せ、達てとは言はねえ、手前の惡事を言立つて、召連れ訴へをするからさう思へ。
　　ト立ちかゝらうとするを新三留めて、
新三　まあ大屋さん、お待ちなさい。
長兵　えゝ、ぐづ〳〵したことはおらあ嫌えだ。
勝奴　わつちが側から口を出すも生利な話しだが、三十兩ぢやあ親方も料簡し難うございませうから、五十兩にして下さいましな。
長兵　手前などがいらねえ事を、口を出すにやあ及ばねえ、おれが下から附けるものか、三十兩なら言分なしだが、料簡が出來ねえなら直に玄關へ訴へようか。
新三　まあ待つて下さいまし。
長兵　それぢやあ、それで得心するか、
新三　さあ、

長兵　但しは玄關へ訴へようか。
新三　むゝ、お前さんのおつしやることだ、それで料簡いたしませう。
長兵　早くいへばいゝことを、餘計な口をきかせやあがる。
勝奴　まあ、お茶でもお上りなされませ。
　　ト盆へ茶碗を載せて出す、この以前善八路地口より出て、門口に窺ひ居て、
善八　いや、大屋樣、有難うござりまする。
長兵　おゝ善八どのか、やうやく新三が得心しました。
善八　いやも、お前樣の勢ひはがうぎなものでござります、名に負ふ彌太五郎源七さんが恐れて歸つた新三さんも、猫に逢つた鼠のやう、
新三　えゝ、無駄な胡麻をすりやあがるな。
善八　大屋さまにはかなはぬくせに、
新三　どうしたと、（ト長兵衛善八に向ひ、）
長兵　これ、餘計な口を利かないで、駕籠を早く持つて來いと、婆あどんにさう言つて下せえ。
善八　駕籠はもう參つて居ります、（ト下手へ向ひ、）おい駕籠屋さん〳〵。

ト手招きをする、やはり四ツ竹節にて下手より駕舁、四ツ手駕籠を擔ぎ出て來る。

駕舁　はい、參りましてござりまする。

長兵　さあ、金はおれが持つて居るから、娘を早く爰へ出せ。

新三　へい、今出します。

勝奴　どれ、戸棚を明けやせうか。

ト勝奴烟管で錠をたゝき明け、戸棚の内からお熊前幕の裝にて縛られたまゝ出るを、

新三　えゝ、きり〳〵と出やあがれ。（ト縛つた繩をとつて引倒す。）

長兵　これ手荒いことをするな。（ト長兵衛お熊を介抱して繩を解き、）やれ〳〵可愛さうに、嘸お前切なかつたらう、悪い奴に引ツかゝつて、とんだ目に逢ひなすつた。

善八　もしお熊さん、あなたのお蔭でお前さんがお家へ歸られるやうになりました、よくお禮をおつしやりませ。

お熊　何かのことは戸棚の内にて、承はりましてござります、此の儘家へ歸られますも全くあなたのお蔭ゆゑ、何とお禮を申しませうか、有難うござります。（ト手を突いて禮を言ふ。）

長兵　いや、其の禮には及ばない、お家で案じて居なさらう、ちつとも早くお歸りなさい。

お熊　はい、嘸昨夜から母さまがお案じなされてござんせう、不孝な事をしましたわいな。
善八　いえもう、お案じなされたどころではござりませぬ、昨夜からお袋さまはまんじりともなされませぬ。
長兵　さあ〱、餘計な事を言はないで、ちつとも早くおいでなさい。
お熊　左樣なら、お暇いたします。
新三　おれに心が殘るなら、いつでも又駈出して來ねえ。
長兵　やかましい、默つて居ろえ。
善八　いづれ又白子屋から、改めてお禮に上ります。
長兵　決してお禮などには及びませぬよ。
勝奴　大屋さま、噓ばかり。
長兵　何を、（ト勝奴を睨み、）さあ〱早くおいでなさい。
お熊　御免なされませ。（トお熊駕籠へ乘る。）
長兵　駕舁さん急いで下さい。
駕舁　畏りました。

善八　さあ、行きませう。

ト善八駒下駄と草履を穿き、駕籠に附添ひ、四ツ竹節にて花道へ入る。長兵衛後を見送りうなづいて、

長兵　えゝあの男もそゝつかしい、履物を間違へて行つた。

勝奴　取りけえして來ませうか。

長兵　なに、どうで禮に來るだらうから追駈けるには及ばねえ。ときに新三、鰹は半分貰つたぜ。

新三　えゝ、そりやあ半分上げましたのだ。

勝奴　お宅へわつちが持つて行きませうか。

長兵　なに、おれが歸りに持つて行くから、それには及ばねえ。

新三　もし大屋さん、お扱ひの金をお貰ひ申しませうか。

長兵　おゝ、手前にやるのを忘れてしまつた。

新三　それを忘れられちやあ大變だ。

長兵　（思入あつて、）これ新三、手前がうぎなことをしたな、昨夜あの娘を自由にしたらうな。

新三　いゝえ、そんなことはしませぬ。

長兵　なに、しねえことがあるものか、いゝ年をしたおれでせえ氣のわりいあの娘、夜半にがうぎに泣

いたさうだが、手荒いことでもしたのだらう。

新三　見かけに似合はぬ強情な奴で、言ふことをきゝませんから、ふん縛つてやりました。

長兵　縛つて置いてもあの娘を手前の自由にした上で、手切の金が三十兩、こんな旨い話しはねえ。

勝奴　此の一件ぢやあ昨夜から提灯持ちをしやしたから、小あらい飛白の薩摩でも一枚買つて貰はにやあならねえ。

長兵　おゝ、何でも買つて貰ふがいゝ。

新三　大屋さん、早くおくんなさらねえか。

長兵　せはしねえ、今やるわ、（ト懐から紙に包みし小判を出し、）それ、金は小判だ、一イ二ウ三イ四ウ五ツ六七八九十、それ十兩、一イ二ウ三イ四ウ五ツ、それ五兩、（ト一枚づゝ小判を並べ、）數を改めて受取るがいゝ。

新三　（思入あつて、）もし大屋さん、こりやあちつと違やあしませぬか。

長兵　いや、違やあしねえ筈だが、

新三　お前さんがわつちにおつしやるにやあ、三十兩取つてやるとおつしやつたぢやあござりませぬか。

長兵　さうよ、三十兩取つてやると言つたから、三十兩取つてやつたのだ。

新三　それでもこりやあ、十兩に五兩、十五兩ぢやあございませぬか。

長兵　えゝ分からねえ奴だな、手前も爰等の遊び人ぢやあ、いゝかすり取りだといふことだが、よくそんなどぢなことで盆の上が見えるな。それ、十兩に五兩で十五兩よ、鰹は半分貰つたのだ。

新三　鰹は半分上げたのだが、三十兩が十五兩ぢやあ、半分金が足りませぬ。

長兵　まだそんなことを言ふか、昨夜からの手際ぢやあ話せる奴と思つたが、あんまり手前もわからぬ奴だ。

新三　それだといつて大屋さん、三十兩のものを十五兩ぢやあ、お前さんが分らねえのだ。

長兵　いやはや、呆れきつた分らぬ奴だ、それ、十兩に五兩十五兩だ、分つたか。鰹は半分おれが貰つた。

新三　まだわつちにやあ分りません。

長兵　なに、まだ手前にやあ分らねえ、よく水で顏を洗つて來い、三十兩の約束だから十五兩やつて、鰹は半分貰つたといふのだ、こんな分つた話しはねえ。

新三　（合點の行かぬ思入にて、）勝や、手前分つたか。

勝奴　大屋さんも町内ぢやあ評判の取り手だから、さつきから二言目にやあ鰹は半分貰つたと、口續け

に言ひなさるから、三十兩の內を半分貰ふ氣ぢやァありませんか。

長兵（につたり思入あつて、）勝公手前の方が分りがいゝ。

新三　え、それぢやあ三十兩の內を、半分お前が取んなさる氣か。

長兵　知れたことよ、骨折賃に十五兩、半分おれが貰ふのだ。

新三（びつくりなし、）これが三兩か五兩ならお禮に上げめえものでもねえが、面白くもねえ、三十兩の內を半分貰はれて詰るものか、わつちァそれぢやあ止しやせう、十五兩はお返し申します。

ト新三長兵衛の前へ金を投出す。

長兵　おゝ、入らざあおれが方へ返してしまへ、地切のきれるといふ商賣ぢやあなし、してえ事をしやあがつて十五兩でもたゞ取る金だ、有難いことだと頂いて禮を言つて取るならよし、不足な面をするなら止すがいゝ、手前の惡事を言立つて召連れ訴へをしてやらう。

新三　それをされられてたまるものか。

長兵　されられて堪らずば、默つて十五兩取つて置くか、

新三　それだといつて、半分ぢやあ、

長兵　不足なら訴へようか、

新三　さあ、
長兵　さあ、
兩人　さあ〳〵。
長兵　達つてやらうとは言はねえから、早く返事をしてしまへ。（トきつと言ふ。新三呆れし思入にて、）
新三　おれもよつぽど太い氣だが、大屋さんにはかなはねえ。
勝奴　これが死太く太えといふのだ。
長兵　おれが太えのを今知つたか、斯ういふ時にたんまりと金を取らうばつかりに、入墨者を合點で店を貸して置く家主だ、年を取ると氣が短え、いつまでぐづ〳〵して居るのだ、厭ならいやで早く言え、直に繩を掛けてやるから。
新三　あゝ鶴龜々々、（ト身顫ひして、）大屋さん、わつちが惡うござりました、堪忍しておくんなせえ。
長兵　それぢやあ、十五兩でいゝか、
新三　いゝこともござりませんが、まあようござります。
長兵　まだそんな未練をいふか、（ト金を出し、）それ、十
ト此の以前下手よりお角出來り、門口に窺ひ居て、

お角　あもし、金を渡すなら待つて下さんせ。（トずつと内へ入る。）
長兵　おゝ婆アどんか、何だ。
お角　店賃の滯りが、二兩ありますよ。
長兵　ほんに、二兩貸しがあつたを、さつぱり忘れて居た。
お角　こんな時に引かないと、取る時がありません。
勝奴　おや〳〵目の寄る所へ玉といふのだ。
長兵　それ、店賃を二兩引いて、十三兩あるぞ。（ト長兵衞二兩とつて新三の前へ出す。）
新三　店賃まで引きなさるのかえ。
長兵　早く手前が取りやあいゝに、ぐづ〳〵して居たばかりに、又二兩引かれたのだ。
新三　あんまり酷うござりますね。
長兵　酷くて惡けりやあ止すがいゝ。（ト金を取りにかゝるを新三あわてゝ押へ。）
新三　誰も惡いとは、言やあしませぬ。
長兵　それぢやあ默つて取るがいゝ。
お角　（鰹を見て。）さつき鰹が來たと思つたが、いゝ鰹が爰にあるね。

長兵　そりやあ半分貰つたのだ、婆アさん提げていつて下せえ。
勝奴　鰹まで持つて行きなさるかえ。
長兵　貰つたものだ、持つて行かねえで、どうするものだ。
お角　おゝ、こりや中落があつて徳用だ。
新三　（金を取り思入あつて、）とはいふものゝ大屋さんに、大きに御苦勞を掛けました、これから心を入替へて、こんな事は決してしませぬ。
長兵　おれが御苦勞は構はねえから、これに懲りずとたんとしろ。
新三　それぢやあ、してもようござりますか。
長兵　いゝどころか極よしだ、なんでもおれが掛り合つて、金になりさうな事ならば何をしても構はねえ、どうで筋のいゝ事ぢやあ金になることはねえものだ、入墨者の手前などに承知で店を貸して置くのは、こんな事をさせようばかりだ。
お角　ほんに世間の家主は、何とやらが狹いからよくやかましく言ふけれど、火附と泥坊せえしないけりやあ、跡の事は何をしてもいゝ。
新三　三十兩とつた金を、店賃まで差引かれ半分から取られたが、こんな大屋さんは外にはねえな。

勝奴　遊人の住つて居るにやあ、此の上なしの大屋さんだ。（ト法螺と太皷の音になり、）
長兵　今日は試合が始まつたと見えるな、勝公、手前遊んで居るならちよつと束ねてくれねえか。
勝奴　又髪結錢をかするのかね。
長兵　こりやあ家主の役徳だ。
　　ト ばた〳〵になり、下手より以前の權兵衞、走り出來り。
權兵　わし大屋さん、大變でござります。
長兵　何だ大變とは、金儲けになることか。
權兵　どうして〳〵金儲けどころか、お前さんの所へ晝日中明巣をねらつてたつた今泥坊が入りました。
長兵　えゝ、泥坊が入つた。（トびつくりする、）
お角　なんぞ置いて行つたかえ。
權兵　何を置いて行きますものか、箪笥のものを四ツ抽出しとも、悉皆持つて行きました。
お角　うむゝゝゝ。（トお角びつくりして目をまはす、）
長兵　いや、太え奴もあるものだ。
勝奴　大家さん、十五兩ぢやあうまりませんね。

長兵　十五両や二十両で四ツ抽出しがうまるものか、こりや斯うしては居られぬわえ。
ト尻を端折るを権兵衛留めて、
権兵　もし、お上さんが目をまはして、
長兵　えゝ婆あに構つて居られるものか。（ト権兵衛を振切り花道へ逸散に入る。）
権兵　勝さん、此の婆あさんはどうしませう。
勝奴　どうもかうもあるものか、お前が泥坊の話しをして目をまはした婆さんだ、背負つて家へ連れて行きなせえ。（トお角を引き立て権兵衛に背負はせる、）
権兵　それぢやあ、おれが背負つて行くのか。
勝奴　知れたことだ。（トぐつたりするお角を背負はす、）
権兵　とんだ親孝行だ。
ト権兵衛お角を背負ひ下手へ入る、時の鐘、新三立上り思入あつて、
新三　慾張り大屋の長兵衛が、人を籠めて拵へ溜めた箪笥の内の着類をば、悉皆持へて行かれたら
勝奴　一抽出しを十両と、安く踏んでも四十両、
新三　十五両を差引いて、大家の損は二十五両、

勝奴　店賃までも取りあげられ、
新三　忌えましいと思つたが、
勝奴　親方、これでお前の胸も、
新三　えゝい、（ト曖をするを木の頭。）溜飲が下つた。
ト新三胸を撫でおろし笑ふ。勝奴よろしく思入。時の鐘。船の佃にて、

ひやうし幕

三幕目

材木町白子屋の場
深川閻魔堂橋の場
佐賀町居酒屋の場

〔役名――髮結新三、車力善八、居酒屋三右衛門、夜番人李兵衛、加賀屋藤兵衛、下剃勝奴、白子屋若い者千助、同萬藏、按摩こぶ市、夜蕎麥賣仁八、白子屋又四郎、彌太五郎源七。白子屋娘お熊、下女お菊、後家お常、三右衛門女房おさが等。〕

（材木町白子屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面白子屋といふ紺の暖簾口、上手一間間

平戸の戸棚、下の方茶壁、これに狀差し、帳面の書割り、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所門口、下の方一面材木の張物、總て序幕白子屋夜の體。よき所に見世行燈を灯し上手に若い者千助帳箱を控へ帳を附けて居る、此の傍に若い者萬藏算盤を彈いて居る。下手に善八釜の火入の煙草盆を控へ煙草を喫んで居る、此の模樣題目太鼓にて幕明く。

善八　もし萬藏さん、あの太鼓はどこでござります。

萬藏　あれは隣裏の家主の家で女房が大病だといつて、長屋中が打揃つて暮ると間もなく叩き立て、お題目を上げて居るのさ。

善八　それは親切な店子の衆だ、よくそんなに氣が揃ひますな。

千助　それといふのもあの家主は、元上總から出た人で法華宗の大の固まり、表店から裏をかけ十七軒長屋があるが、法華宗でない者には店を貸さぬといふことだ。

善八　成程、それでは長屋中が惣出でお題目を上げる筈だ。

千助　いや長屋中といへば、裏長屋から聟さんの所へ祝つて來たが、あの聟さんの又四郎さんは長持ちがあらうかね。

善八　むゝ、あります共〳〵、そこは辛抱した人ゆゑ、而も簞笥が二重ねに長持が一棹ござります。

萬藏　なに、長持といふのは道具ではない、あの聟さんが爰の家に長持ちがあらうかといふのだ。

善八　いや、そこの所は橋渡しの、此の善八にも請合へませぬ。

千助　お熊さんが厭がつて逃げ隱れをしなすつたを、やう〳〵のことで家へ返し、聟入とまではこぎつけたれど、未だ一所寐がないといふこと。

萬藏　何ぼ惚れて來た聟さんでも、あんなにお熊さんに振附けられては、辛抱して居られまい。

善八　それゆゑ今夜お媒人の加賀屋さんをお呼び申して、否やの埓を明けるつもり、折角お世話はしたものゝ、斯う御夫婦合が惡くつては離縁になるかも知れませぬ。

千助　困つたものとはいふものゝ、お熊さんが厭がるのも滿更無理なこともない、

萬藏　なんぼ持參金があればといつて、あの美しいお熊さんの所へ聟に來るのが押しが強い。

善八　お家のお爲めによからうと橋渡しはいたしましたが、見れば見るほど聟さんは好くない男でござりまする。

千助　よくない所かまるで化物、人間三分で化物七分、人三化七といふ顔だ。

萬藏　(算盤を彈きながら、)人三化引いて二殘ると、人間らしい所は二分ばかりもあるかなしだ。

善八　成程、言へばそんなものぢや。

ト三人笑つて居る、爰へ暖簾口より又四郎羽織着流し、聟の打扮にて出來り、

又四　これ、化物とは誰がことぢや。（トきつと言ふ、三人びつくりなし、）

善八　や、あなたはお聟の、

三人　又四郎さま。

又四（腹の立つ思入にて、）こりや善八、それへ出い、いやさ、つゝつツとそれへ出い、（トよき所へ住ひ可笑みがゝりし合方になり、）こりやよく聞きやれ、千助や萬藏は取るにも足らぬ若い者ゆゑ又勘辨の仕樣もあるが、橋渡しをした貴樣までが一緒になつて、わしの事を化物とは何のことぢや、世の譬へにも媒人口とて醜い男も好いやうに言ふのが世間の當り前、それ相應貴樣にも橋渡しの禮をしたが、禮が不足で惡くいふのか、もうこの家には片時も居られぬ、出て行くからさう思はつしやい、（トきつとなつて立掛るを、善八留めて、）

善八　まあ／＼待つて下さりませ、何もあなたを化物だと申した譯ではござりませぬ、こりや人違ひでござります、なあ申し、お二人さん。

千助　善八さんの言ふ通り、化物といつたは、向う河岸へ夜な／＼出る引張りのことでござります。

萬藏　向うと聟の聞き違ひでお腹をお立てなされては、わたくし共が迷惑いたします。

又四　いや／＼さうは脫けさせぬ、わしが事に違ひない、出て行くから留めてくれるな。

善八　左樣でもございませうが、まあ／＼お待ち下さりませ。

　　ト門口へ出ようとするを善八留める、此のうち題目太鼓にて、下手より序幕の加賀屋藤兵衞羽織着流しにて出來り、內へ入つて又四郎を留め、

藤兵　又四郎どの、まあ待たつしやれ。（ト皆々藤兵衞を見て、）

又四　あなたは、加賀屋藤兵衞樣、

善八　よい所へおいで下さりました。

千助
萬藏　まあ／＼お靜になされませ。（ト皆々留める、又四郎思ひ入あつて、）

又四　もし藤兵衞樣、わしや悔しうて／＼なりませぬ。（ト又四郎聲をあげて泣く、）

藤兵　その悔しいと言はつしやるも、大概それとお察し申せど、いづれ今夜は極りをつけてわしが埒を明けますから、まあ何事も媒人の、わしに任せて下さりませ。

又四　此の間からお前さまが力を附けて下さるゆゑ、そればかりを樂しみに今日まで我慢をしましたが今も今とて見世先で橋渡しをした善八までが、若い者と一緒になり、わしの事を化物だと口々に言ひますゆゑ、猶々お熊がわしを嫌ひ一所寢もしませぬから、五百兩の持參金をわしが方へ取戾

し、離縁がしたうござります。

藤兵　こりや腹の立つは尤もぢや、これ善八どの、貴様も好い年をして、なぜそんなことを言はつしやつた。

善八　いえ〳〵わたくしは申しませぬが、爰にござる二人の衆が申したのでござります。

千助　さあ、其の化物と申しましたは、芝居の話しを萬藏といたしてをつたのでござります。

萬藏　しかも此間、一丁目で、菊五郎がした岩藤のお化のことでござります。

藤兵　はゝあ、それでは化物と二人の衆がいつたのは、菊五郎のことでござつたか。

善八　(此内成程といふ思入あつて、)二人の衆のいふ通り、又四郎さんが菊五郎に似て居るといふ話しをいたしましたのでござります。

藤兵　大方そんな事であらう、それでなければ又四郎どのを化物といふ謂れがない。

又四　ちと菊五郎には太つてゐるが、顔付でも似てゐるか知らぬ。

千助　あれ、さうおつしやる口許が、まるで菊五郎でござります。

萬藏　斯うも岩藤の怪談に、よう似ておいでなされるものか。

藤兵　菊五郎との間違ひゆゑ、腹も立たうが料簡さつしやい。

又四　さういふことなら料簡しますが、たゞ料簡のなり難いは其の菊五郎の心意氣で五百兩の持參を持つて、半四郎娘と評判のお熊を女房にしようと思ひ、聟には來たが其晩から一つ寐をしたこともなく、段々聞けば此間まで見世で使つた忠七と念頃をして居たとのこと、それゆゑ猶々腹が立つて、出て行く心になりました。

藤兵　いやそれは全く世間の惡口、さういふことでありますれば同町に居る加賀屋藤兵衞、何しにお世話しませうぞ、内氣な娘に持病が起り、一つ寐せぬを兎や角と世間でいふのでございます。

善八　お袋さまも其の事を御心配なされまして、加賀屋さまをお招き申し、是非とも今夜はお熊さまと御一緒にするつもりゆゑ、たゞ何事もお媒人の藤兵衞さまへお任せなされて、出ゐの引くのといふことは必ずおつしやりますな。

又四　（これにて心の解けし思入にて、）わしも斯うして縁あつて、爰の内へ來たことなれば、出たいことは少しもない、加賀屋さまがさうおつしやるなら、あなたへお任せ申しませう。

藤兵　どうぞさうして下さりませ。（ト奥より序幕のお常出來り、）

お常　これは〳〵加賀屋さま、ようこそおいで下さりました。（トよき所に住ふ、）

藤兵　先刻お人を下すつたゆゑ、早速參る筈なれど、折惡しく客來で、大きに遲刻いたしました。

お常　嘸御用多でござりませうに、お呼立て申しまして、お氣の毒にござりまする。

善八　もしお袋さま、お媒人の加賀屋樣から、お熊さまへ御意見をお願ひ申さうぢやござりませぬか。

お常　加賀屋樣をお招き申し、お立合の其の上で、娘に得心させませうと、御足勞をかけましたが、藤兵衞さまや善八どのがおいでと聞いて、やう〳〵娘が得心いたしましたれば、御安心なされて下さりませ。

藤兵　すりや、御得心がまゐつたとか。

又四　それではいよ〳〵今夜はお熊と、

お常　さあ聟どのへ氣の毒と思へど、こなたがござつた晩から念の入つた風を引き、譬にもいふ百病の長といふゆゑ大事を取り、つい延び〳〵になりましたも子に引かさるゝ親心、甘い姑と又四郎どの、必ず笑うて下さるな。

又四　何でそれを笑ひませう、眞實の病氣とあるなれば假令百日二百日一所寐をせぬとても、そこは名代の辛抱人、どんな事でも我慢をしますが、わしも傳馬町の桑名屋で三番々頭にまで出世して多くの人を使つた身分、五百兩といふ持參にて聟に來て家の娘に嫌はれたと言はれては、世間の手前はいふに及ばず、朋輩どもへ外聞がわるい。

善八　辛抱強い聟さまゆゑ、お待ちなされた甲斐あつて、あの美しいお孃さまといよ〳〵一緒にお臥るとは、お目出度いことでござります、嘸お嬉しうござりませう。

千助　かう又話しが極つて見ると、太つた體も福々しく、

萬藏　低い鼻も高く見え、お聟さんに威が附きました。

又四　いやも、こんな嬉しいことはない、藤兵衞さま御免下さい。（ト立たうとするを、）

藤兵　又四郎どの、何處へ行かつしやる。

又四　もう一風呂はひつて來まする。（ト早き唄にて又四郎奧へ入る。）

千助　晝間あんなに長湯をなされ、又夜に行つてござるとは、ても湯の好きなお聟さま。

萬藏　幾度お磨きなされても、地金の惡いは仕方がないのに、

善八　又そんな事を言はつしやつて、聞えてはなりませぬぞ。

お常　おゝ風呂といへば見世のものも、風呂へ行つて來るがよい。

千助　左樣なら、今のうち一風呂はひつて參りませう。

萬藏　加賀屋さま、御免なされませ。

ト兩人は手拭を持ち下手へ入る。

お常　御用多の所をば御足勞を掛けまして、申し譯もござりませぬ。

藤兵　媒人をいたしたからは足を運ぶは厭ひませぬが、事なくどうか濟ますやうにと心配いたして居りましたが、お熊どのが得心なされ、共々安心いたしました。

お常　お話し申すも申し難いは親の目褄を忍びまして、見世の手代の忠七と娘が疾うからいたづら事二人連立ち逃げまして、親に苦勞を掛けましたも、乘物町の親分や善八どの丶骨折でやう〳〵家へ戻りましたが、親の心子知らずと聟を嫌うて困りましたも、段々異見を加へまして今宵まことの夫婦となせば、何分ともに藤兵衞さま、又四郎には左樣な事は內々にして下さりませ。

藤兵　實はわしも其の事を聞いた時にはびつくりし、さういふ事のあるのを隱して、聟を取るとは分らぬ親御と立腹もしたれど、樣子を聞けば全く親御は知らぬ事ゆゑ、聟どのへは內々でわしも共々氣を揉みましたが、娘御さへ得心して夫婦にさへしてしまへば、後はどうなとなりますから、必ず心配さつしやりますな。

善八　藤兵衞さまのおつしやる通り、お熊さまが得心なければ、お世話なされたお媒人や橋渡しのわたくしが聟さまへ濟みませず、とりわけ持參の五百兩をお償ひなされねば、先方へ濟まぬと申すもの。

お常　その五百兩の持參金も切羽詰りし催促に、借財の方へ返しまして償ふ金もござりませねば、それやこれやを言聞かせ、やう／＼得心いたさせました。

藤兵　さてかう話しが極りますれば、媒人は宵の内、すこしも早く開きませう。

お常　先づお待ちなされて下さりませ、今宵は一口あげませうと支度いたしてござりますれば、

善八　成程これまで色々と藤兵衞さまのお骨折、しつかり御馳走なされませ。

藤兵　その思召しは有難いが、わしは少しも呑めぬゆゑ、

お常　いえ、御酒ばかりでなく、まだ外にお願ひ申す事もあれば、

藤兵　さういふことならお詞に、隨ひますでござりませう。

お常　どうぞ左樣なされて下さりませ、（ト奥へ向ひ、）これ、菊や／＼。（ト呼ぶと、奥よりお菊出來り、）

お菊　はい、何ぞ御用でござりますか。

お常　見世二階へ御酒の支度を、して置いてくれたであらうの。

お菊　はい、ちやんと致して置きました。

お常　さうして娘は、何をして居ります。

お菊　お藏の前の六疊にお書物をなされてござります。

お常　もう何事もおるまいが、外へ出してはなりませぬぞ。
お菊　それはお案じなされますな。
お常（藤兵衞に向ひ、）左樣なれば見世二階へ、おいでなされて下さりませ。
藤兵　善八どの、こなたも一緒に、
善八　いえ、わたくしは不調法ゆゑ、
藤兵　はて、酒外れはせぬものだ。
お常　お相手でもしに來て下され。
善八　只今、おあとから上ります。
藤兵　そんなら後家御、
お常　さあおいで下さりませ、（トお常藤兵衞奥へ入る、跡合方になり、）
善八　これお菊、お熊さんの御樣子は、お家へ歸つてどうぢやな。
お菊　奥のお居間へ入つたきり鬱いでばかりござんすゆゑ、不斷お好みの芝居ばなしを致しましても、うるさいから止してくれとおつしやつて、泣いてばかりござんすわいな。
善八　はてさてそれは困つたものぢや、さうして鬱いでござるのは忠七どんが忘られず、きなく思つ

てござるげなぢや、お袋さまの御異見で得心したとおつしやれど、まだ〳〵それでは安心ならぬ。

お菊　なか〳〵安心はなりませぬ、隙があつたらいつぞのやうにお家をお脱けなされうかと、お案じ申しますゆゑに、夜晝となくお熊さんの、なるたけお側を離れぬやうに、お附き申してをりますわいな。

善八　おゝさうぢや〳〵、よう氣をつけねばならぬぞ、といふは外の衆とそなたは違つて五つの年に、そなたの親おれが爲めには實の兄孫兵衞どのゝ死んだあと、取片附けに困つたゆゑ僅か五兩に吉原へ禿に賣つてしまふ所、お袋さまがお聞きなされ、不便の事ぢや其の金で家へ呼んでやりませうと、それからそなたはお熊さんのお相手半分小間使ひ、知つての通りのおれが貧乏浴衣一枚着せられねば、暑さ寒さの着類から下駄履物に至るまで厚いお世話になつたお家、一方ならぬ事なれば爰等が御恩のおくり所ゆゑ、よく氣を附けて奉公しやれ。

お菊　そりや叔父さんのおつしやる通り、五つの年から此の年まで厚い御恩になつたことゆゑ、お熊さんのお身の上に何ぞ事でもあつた時は、命を捨てる心でござんす。

善八　命までも捨てる氣とはさりとは感心のことぢや、そなたの親父はおれ同樣百の内が拔けた人、お袋とても同じこと六十四文位であつたが、どうしてこんな利口ものが、あんな腹から產れたか、

斯うして見ると兎なども、高金出して更紗やかきと交尾させるは無駄なことだ。

お菊　えゝも、何を言はしやんすぞいな。それはさうとお袋さまが、お待ちなされてござんせうぞえ。

善八　おゝ、おれもさう思へども、お相手するは難儀なことぢや。

お菊　これも常からお世話になる、

善八　如何さま、爰が御恩おくり、

お菊　そんなら、叔父さん、

善八　どれ、お肴でも荒して來ようか。（ト奥へ入る。）

お菊　隣裏のお家主で大病人があると言うて、店子の衆があのやうにお題目を上げてゐるゆゑ、心にかかるはお孃さん、厭と言はれぬ義理詰めで御得心はなさるとも、若しもの事でもありはせぬかと案じられてならぬわいな。

ト心にかゝる思入。やはり題目太鼓にて下手より以前の又四郎、大きな糠袋と手拭を持ち、足早に出來りあわてゝ内へ入る。

又四郎さま、お湯からお歸りでござりまするか。

又四　これお菊、姑どのは、何處に居られる。

お菊　お袋さまは藤兵衛さまへ、御酒を上げるとおつしやつて、お見世二階でござりまする。
又四　それでは急に病が起つて、目を引附けたといふは嘘か。
お菊　めつさうな、誰がまあ其のやうなことを申しました。
又四　今わしが風呂にゐると、千助と萬藏が來て、姑どのが血の道で目をまはしたゆゑ歸つてくれと、口を揃へて言つたゆゑ、ろく〳〵洗はず飛んで戻つたが、そんなら彼等に擔がれたか。
お菊　嘘もたいがいにすればよいに、あなた、見世をお頼み申します。（ト奥へ行かうとする。）
又四　これお菊、奥へ行くなら手水盥へ、湯を一杯持つて來てくれ。
お菊　あなた何になされます。
又四　洗ひ殘した所があるから、見世番をしながら洗ふのぢや。
お菊　銅壺が湧いてをりませぬゆゑ、生憎お湯がござりませぬ。
又四　そんなら水でもだいじない。
お菊　畏りましてござります。（ト奥へ入る。）
又四　風呂へけひつて極製に、男振りを上げようと思へば彼等に誑られ、おち〳〵湯にも入られぬとはこれもやつぱり人の嫉みか、思ひ廻せば世の中に、戀をする身は辛いものぢや。

お菊（奥より手水盥へ本水を入れて持つて出で、）これでよろしうございますか。

又四　おゝ、これでよい〳〵。用はないから奥へ行きやれ。

お菊　はい〳〵、畏りました。

ト奥へ入る。跡可笑し味の合方になり、又四郎兩肌を脫ぎ、糠袋で顏を洗ふことあつて、

又四　斯ういふ事なら晝間の中髮でも結つて置けばよかつた。どれ、今の間に鬚でも拔いて置かうか、（ト紙入より懷中鏡と毛拔を出し、行燈の灯りをかきたて鬚をぬきながら顏を見て、）さつき見世の若い者や善八が、わしの事を菊五郎に似て居るゆゑ化物だと噂したが、鏡で見れば菊五郎にさのみ似て居る所もないが、さう言つて半四郎や壽三郎に似ても居ず、ふつくりとした鹽梅は芝翫、訥升に似て居るやうだが、同じふつくりとして居ても荒次郎や万作にはどうか似たと言はれたくない、（トいろ〳〵顏を見ることあつて、）いや、おのが慾目か知らねども、美男といふ程でもないが、むつくりとしてぽちや〳〵と、女惚れのする顏だに、なぜ今まであのお熊が一所寐をせなんだか。ハツクシヨ。（ト嚔をして肩を叩き、）奥でお熊や下女のお菊が、噂をすると見えるわえ（ト此のうち鬚をぬき、）さあ〳〵大變、いつの間にやら小鬢の所へ白髮が一本見えるぞ、（ト毛拔で白髮を拔くことあつて、）これが福白髮といふのであらうか、何にしろ此の鹽梅では後の方にもあるかも知れぬ、

（ト盥の水へ顔をうつし、鏡を後へやつて合せ鏡をすることあつて、）合せ鏡が小いから、さつぱり後の方が見えぬ。

ト鏡を下へ置き手水盥を後へやらうとして天窓からざつぶり水をあびる、此の以前下手より千助、萬藏濡れ手拭を持ち出來り、門口より覗いて居て、此の時内へ入り、

千助　もし、又四郎樣、

兩人　お目出度うござります。

又四　えゝ、何でこれが目出度いものか。

千助　今夜しつぽりお熊さんと、おぬれなさるといふ前表。

萬藏　お聟さんの水祝ひに、もつと浴びせて上げませうか。

又四　えゝ、さういふわい等に浴せてやるわ。（ト盥へ殘つた水をかける、兩人びつくりなし、）

兩人　こりや、何でわたしどもに、

又四　姑が目をば廻したなどゝ、わしを擔いだ返報ぢや。

兩人　さういふこなたを、（ト握り拳で打つてかゝるを、又四郎きつと捉へ、）

又四　わい等は聟を馬鹿にしをるな。

千助　おゝ、馬鹿げた顏ゆゑ、
兩人　馬鹿にするのだ。
又四　何を此奴が、
ト題目太鼓になり、三人摑み合ひにてをかしみの立廻りよろしくあつて、引張りの見得にて此の道具廻る。

(白子屋奥の間の場)――本舞臺三間の間平舞臺、正面一間床の間、眞中地袋戸棚、下の方月影の襖、上の方一間折廻し障子屋體、例の所枝折戸、下の方一面忍び返しを内から見たる黑塀、總て白子屋奥の間の體。爰に前幕のお熊行燈の側にて硯箱を引き寄せ書置きを書きかけて居る、此の模樣時の鐘にて道具留まる。と時の鐘打ち上げ、床の淨瑠璃になる。

〽雨もちし空に往き來も夏の夜や、材木河岸を彈き流す、身過ぎ世過ぎの門附も、我が身に迫る三の切、〽お熊は硯たづさへて一間をそつと忍び出で、
ト此の内奥よりお熊振袖好みのこしらへにて、書置を載せし硯箱を持ち出來り、淨瑠璃の切れ、床の合方思入あつて、
お熊　今日母さまより段々と、事を分けての御異見受け、

〽いやと言はれぬ義理詰めに、よいお返事はしたけれどもあの忠七が此間緣を切らうと言うたのを、無理にわたしが賴みしゆゑ、一緒に逃げて互ひの難儀、

聞けば今では忠七も身を愼んで、伯父の所に世話になつて居やるとやら、それを見捨てゝ此の家へ聟を入れたと言はれては、世間の手前とりわけてあの忠七へ濟まぬゆゑ、死なうと覺悟を極めたれば、人目を忍びやう〳〵と母さまへの此の書置、

〽小さい折より母さまに一方ならず御恩になり、それを送らず御苦勞かけ、先立ちまする此の身の不孝、

お許しなされて下さりませ、

〽書置く文に繰返す我が身の上の言譯も、硯の海のそこはかと、淚に墨のにじみ勝ち、筆の命毛切れがてに紙より薄き二世の緣、

ト此の內お熊、書置をよろしく書くことあつて、

夫婦は二世とあるからは、いまはの別れに忠七に一目なりと逢うた上、あの世の緣を賴みたいが何處にどうして居やるやら、家へ戻つてそれからは一人で遠出もならぬゆゑ、逢ひたう思ふ忠七に逢ふことならず此の儘に、死なねばならぬ我が身の上、思へば本意ないことぢやなあ、

〽無常を告ぐる鐘の音も、胸にとゞろく知死期時、

ト時の鐘、お熊地袋の戸棚より脇差を出し、眞中へ來て思入あつて、脇差を拔き、

人の目褄にかゝらぬ内、少しも早う、南無阿彌陀佛。

〽既に斯うよと見えたる所へ、一間を駈け出る又四郎、それと見るより抱き留め、

ト白刃を喉へ突き立てようとする、爰へ上手の屋體より以前の又四郎出で、お熊をあわてゝ留め、

又四　これお熊、なんでそなたは死なうとするのぢや。

お熊　(又四郎を見て、)や、又四郎さんでござりますか、どうぞ放して下さりませ。

又四　いや〳〵めつたに放しはせぬ、内々樣子を聞きたゞせば、忠七といふ手代めに連れ出されたそなたゆゑ聟のわしへ濟まぬと思ひ死なうといふに違ひないが、其の忠七と別れてしまひ家へ戻つた上からはわしも知つて知らぬ顏で、女房に持つてやらうから必ず短氣を出すまいぞ。

お熊　いえ〳〵なんと言はしやんしても、わたしや死なねばなりませぬ、どうぞ許して下さりませ。

又四　いや〳〵、めつたに殺さぬ〳〵。

〽いえ〳〵放して下されと、爭ふはずみ過つて、思はず白刃を脇腹へぐつと突込みびつくりなし、

ト兩人白刃にて爭ふ、此のはずみにお熊過つて又四郎の脇腹を突く、これにて又四郎あつと言つてどうとなる、お熊これを見てびつくりなし、

お熊　や、こりや過つて又四郎さんを、えゝゝゝ。

ト どうとなる、時の鐘、誂へ凄味の合方になり、又四郎苦しきこなしにてお熊の髻を掴みぐつと引付け、

又四　扨はおのれは忠七に、心が殘つて此のおれが、邪魔になるゆゑ殺すのぢやな。

お熊　いえ〳〵、何でそのやうな惡い心がござりませう。

又四　いや〳〵それに違ひない、言はうやうないおのれはなあ。（トお熊をにぢる。）

お熊　白刃を爭ふ其の機に思はず突いた怪我過ち、殺す心ぢやござりませぬが、疑ひはれずば又四郎どの、わたしを殺して下さりませ。

又四　殺してくれとはよく言つた、かよわき女といひながら助かり難き深手の突疵、とても死ぬならおのれも共に、

お熊　早う殺して下さりませ。

又四　おゝ、殺さいで置くものか。

〽手負はお熊を殺さんと白刄をぐつと突きかくろ、いとも危き其の折柄、立ち出る下女が縋り留め、

ト白刄を取りあげお熊の喉を突きに掛る、爰へ上手よりお菊出で此の體を見てびつくりなし、又四郎の手に縋り附き、

お菊　まあ〳〵待つて下さりませ。

又四　そなたはお菊、留めだてするな、

お熊　どうぞ留めずにたもいなう。

お菊　いえ〳〵何とおつしやつても、どうまあ留めずに、

又四　えゝ留めだてせずと退いて居ろ、亭主殺しのお熊ゆゑ、此の又四郎が殺すのぢや。

お菊　（これを聞き、思入あつて、）お熊さまを殺すとあれば、こりや此の儘にして置かれぬ。

〽お主思ひに身を捨てゝ、手負の白刄もぎ取りて、肩先すつぱと切附くれば、

ト お菊又四郎の白刄を捥ぎ取り、肩先きへ切附けろ、又四郎血汐になり、

又四　扨はおのれも一つになり、此の又四郎を殺す氣ぢやな。

お菊　お主の大事には代へられませぬ。

お熊　まあ〳〵待つてたもいなう。

〽止むるお熊を拂ひ退け、又も切り込む女の一心、聟は深手によろぼひながら、

トお熊の留めるを拂ひのけ、立上つてまた又四郎を切ろ、又四郎よろぼひながら、

又四　亭主殺しぢや、主殺しぢや〳〵。

〽苦しき聲を振り立てゝ、呼はる口をしつかと押へ、

ト大きく言ふゆゑ、お菊後から口を押へきつとなり、

お菊　所詮深手を負ひたれば、助かりがたない又四郎さま、命をどうぞ下さりませ。

又四　なにをおのれに、

〽振解いて又四郎がむしやぶり附くをめつた切り、ぐつと突き込む一刀に虚空を摑んで息絶えたり。

ト立廻りよろしくあつて、又四郎の脇腹へ突込む、これにて又四郎苦しみばつたり倒れる、お熊これを見て、

お熊　こりやまあどうせう、どうせうぞいなあ。

〽おど〳〵なせば押し止め、

お菊 決してお案じなされますな、その申譯はわたくしが、

〳〵いふよく早く我が喉へ白刃を逆手に突立つれば、おどろくお熊、一間より立ち出る母親善八が、それと見るより駈寄りて、

ト止めの白刃を拔き、我が喉へ突立てろ。ばた〳〵になり、上手より以前のお常善八出來り、此の體を見て、

お常 やゝ、こりや聟どのといひ、お菊まで、

善八 何ゆゑあつて此の自害、

お熊 わたしの事よりお菊にまで自害させては濟まぬゆゑ、わたしも此の場で共々に、

〳〵お熊が白刃に手をかければ、

お菊 (手負のまゝお熊を留めて) ま、短氣な事をなさりますな。

お熊 でも、此の身より起りし事ゆゑ、

お菊 いえ〳〵さうぢやござりませぬ。

善八 何であらうとお熊さま、まあ〳〵お待ちなされませ。(ト善八もお熊を留める)

お常 さうして、これはどういふ譯、

善八　樣子を聞かせてくれいやい。

お菊　さあ、其の譯と申しまするは、

〽手負は苦しき息をつき、

ト言ひかけ苦しき思入、竹笛入りの合方になり、

お袋さまの仰せゆゑお臺所に居りましても、幾度となくお熊さまのお側放れず窺ふわたくし、今もお部屋へ參つて見れば、又四郎さまがお熊さまを刃物をもつて手籠になし殺さうとする樣子ゆゑ、お主の大事とわたくしが其の刃物を捥ぎ取りて又四郎さまを殺せしゆゑ、身の言譯にわたくしも自殺いたしてござりまする。

お熊　いえ〳〵さうぢやござりませぬ、切ない譯にて母さまへ不孝と知りつゝ自害して、死ぬる覺悟の白刃をば、留める機に又四郎殿を思はず突きし深手の疵は、わたしが粗相でござりまする。

お菊　いえ〳〵あなたは知らぬ事、又四郎さまを殺しましたは此の菊でござりまする、何御存じもないお前さまが、めつたなことをおつしやりますと、亭主殺しになりますぞ。

〽留むるお菊が詞のあや、さてはさうかと善八が、心に察し横手を打ち、

善八　(是れを聞き思入あつて、)お、お菊出來した、よう死んだ、常は愚鈍なおれなれど健氣なそなたの

心が知れた、五つの年より永の年月御恩になつたお主樣、よう成代つて命を捨てた、われ〳〵風情の娘には惜しいそなたの志し、死んだ親父に聞かせたいわい。

お菊　さあ、五つの年に廓へ賣られ苦界に沈む此の身をば、お金を出してお助け下され、これまで永の御養育、

〽産みの親にもまさりたるお袋さまの御恩をば、いつかお返し申さんと明暮心に思ふ折、お熊さまの御難儀ゆゑ、爰ぞ御恩のおくり所と、

又四郎さまを殺害なし、

〽その言譯に死にますと、言ふも苦しき四苦八苦、聞く善八も母親も不便のものと泣く目を拭ひ、

お常　そんなら娘が聟どのを、怪我過ちで殺せしを、其の身に科を引受けて、覺悟極めし自害なるか。

お熊　その志しは嬉しいが、そなたに命捨てさせては、どうも此の身が濟まぬゆゑ。

お菊　あなたを殺すくらゐなら、菊が自害はいたしませぬ。

お熊　それぢやというて此の儘には、

善八　思召しは有難いが、折角命を捨てました、此女を不便と思召さば犬死にさせて下さりますな。

お熊　そんなら死ぬにも死なれぬかいなう。

〽我身をかこち身をもだえ、はつとばかりに泣伏せば、母はやう〳〵顔を上げ、

ト お熊泣き伏す。

お常　僅かの恩をそのやうに、厚く思うて命まで捨てるは健氣なことながら、生先き長いそなたをば殺すといふも、此の母が厭がる者を無理やりに、娘に勸めて此の家へ聟に取りしが身のあやまり、

善八　それもお家の成行きに持參の金を目當にて、お貰ひなされし聟さまゆゑ、かゝる難儀に成行くもこれも定まる因緣づく。

ト 此の時かすめて題目太鼓になり。

お菊　斯ういふことのあるはしか、心にかゝりしあの太鼓も、今は此の身が冥土へ行く、野邊の送りのお題目、

お熊　その立石の鈴ケ森、亭主殺しのお仕置にならねばならぬ此の身をば、

お常　救うてくれしも情なや、主人の爲めとはいひながら、假にも聟と名が附けば、

善八　假令その身は主殺しの悪名受けて死ぬるとも、祖師は見通し罪障消滅。

お菊　南無と頼みし御利益に、

お熊　功力尊き妙法の、
お常　蓮華も風に散り行きて、
善八　けふを限りの、
三人　命ぢやなあ。
〽庭の楓も紅葉する秋をも待たで小夜風に、
ト時の鐘、お菊白刃を拔き、がつくりとなる。
〽散りて果敢なく、
ト皆々愁ひの思入、お菊落入る、此の模樣時の鐘、合方かすめて題目太鼓にて道具廻る。

（深川閻魔堂橋の場）＝本舞臺三間の間正面に眞向に橋を見せ、左右欄干、上の方開帳の立札、柳の立木、下の方寺町の練塀、後一面川を隔てゝ向川岸を見たる夜の遠見、總て深川閻魔堂橋の體、時の鐘雨車にて道具留る。と上手より仁八、夜蕎麥賣のこしらへにて、いつもの荷を擔いで出來り、下手より按摩安傘をさし、杖をつき、呼びながら出來り、舞臺にて行き合ひ、

按摩　もし蕎麥屋さん、何時だね。
仁八　今入江町の四ツを打つたが、按摩が蕎麥屋に時を聞くのは、あんまに古風なせりふだね。

按摩　どういふことか、昔から時を聞くのが蕎麥屋さんで、幽靈が柳の下と紋切形が極つて居るのさ。
仁八　紋切形で極るといへば、此の頃の空くせで今時分になると降つて來るぜ。
按摩　辻駕籠などは降り出すと、足許を見て直をあげるから、好いおしめりだといふかも知れぬがわたし共には禁物だ。
仁八　成程こりやあさうだらう、よく花合の言草にも雨は坊主を消すといふから、嘸降られたら困るであらう。
按摩　困るの困らねえのと、斯う每晩降られては療治はさつぱり上つたりだ、いやあがるといへば蕎麥屋さん、雨は切上りさうかね。
仁八　どうして〳〵切上る所か、長時化にでもならにやあいゝ。
按摩　長時化にでもなられては、ぴい〳〵鳴らす笛よりも、
仁八　懐がぴい〳〵だらうね。
按摩　それゆゑ雨は、あやまはりの療治、（ト呼びながら上手へ入る。仁八よき所へ荷をおろし。）
仁八　天氣が好いと惡いとでは、蕎麥屋には雁木に鑪だ、雨に降られて濕りが來ると鐵砲の火がさつぱりおこらねえ。

ト荷の中より提灯のかはを出して鐵砲を煽いで居る、木魚入りの合方になり、花道より前幕の源七尻端折り一本差し下駄がけにて、誂への加賀蓑を著、白張りの番傘をさし出て來り、花道にて、

源七 寺町通りも雨が降つては深川へ行く人もなく、大橋から爰まで來るうち駕籠に一挺逢つたばかり人ッ子一人出合ねえのは、此方の爲めにやあ勿怪の幸ひ、(ト舞臺を見て、)丁度向うに蕎麥屋が居るから、聞いたら大概分るだらう、(ト舞臺へ來り、)おい蕎麥屋さん、いつぺいくんな。

仁八 はい〳〵畏りました。(ト拵へにかゝる、)

源七 おゝ雲切れで雨が止んだ、(ト傘をすぼめて、)時に蕎麥屋さん、お前は毎晩こゝ等近所を方々廻つて歩くだらうの。

仁八 左樣でございます、家は本所でございますが、此の界隈は得意場ゆゑ大概廻つて歩きます。はい出來ました。(ト蕎麥を出す。)

源七 おい來た、(ト丼を取り蕎麥を喰ひながら、)それぢやあ聞いたら知つて居ようが、元馬の師匠をして居た池月といふ人の家を、何處だかお前知つて居ねえか。

仁八 池月さんでございますか、そりやあ此の寺町の後で、よく四ッ過ぎに蕎麥屋を呼ぶ、大のお得意でございます。

源七（思入あつて、）四ツ過ぎのお得意ぢやあ、毎晩家へ出來ると見えるな。
仁八　どうでござりますか、そこン所はわたくしには分りませぬ。
源七　これさ、さう隱すにやあ及ばねえ、實はおれも遊人だがいゝのが毎晩出來るから遊びに來いと、友達が人をよこしたから出かけて來たが、晝と違つて四ツ過ぎゆゑ、叩き起して聞かれもせず、さつきから爰等近所を當なしに搜して居たのよ。
仁八　へゝえ左樣でござりますか、わたくしもあすこのお家はそんなお家と存じました、池月さんへお出なさるなら、此の橋の河岸通りから右へついてお曲りなさると、つい取附きの門構へでございます。
源七　お前に逢はねえと知れねえ所だ、（ト此の内蕎麥を喰つてしまひ懷の財布からいゝ加減に錢を出し、）大きに世話だつた、爰へ置くよ。（ト丼と錢を荷の前へ置く。）
仁八　へい〳〵有難うござります、（ト錢をとつて、）こりやあ大そう多うござります。
源七　勘定するのも面倒だから、いゝ加減においたのだ。
仁八　左樣ならお代りを、（ト言ひかけるを、）
源七　蕎麥はもう澤山だから、雨止みのうち早く行きねえ。

仁八 それでも、こんなにお貰ひ申しましては、
源七 はてちつとばかりだ、取つて置きねえ。
仁八 さうおつしやいますならお貰ひ申しますが、後で木の葉になりはせぬか。
源七 え、
仁八 いえなに、此の橋から二ツ目が正覺寺橋でござります。
源七 おい〳〵承知だ。
仁八 左樣なら親方さん、
源七 降らねえうちに行きなせえ。
仁八 これでお別れ申します。（ト仁八荷を擔ぎ呼びながら花道へ入る。源七思入。合方になり）
源七 さつき子分の銀次が來て、新三が子分の勝奴に四ツ目の佐吉が所で出合ひ、盆の上の遣取りから喧嘩になつた其の時に、うぬの親分の源七は新三にけちを附けられて、仕返しもせず指を咬へ、引込み思案で居る奴を親分に持つ汝だから相手にするは不足だと、滿座の中で恥をかゝされ、擧句の果に新三の子分が二三人で打ちのめし袋叩きにした所を、壺振りの權次が留めて家へ歸してよこしたと、我慢強い銀次だが涙をこぼして悔しがり、仕返しをしに出て行くと云ふのを留めて

二階へ寐かし、雨を幸ひ大川へ夜網を打ちに行くといつて、こつそり家を脱け出したは蕎麥屋に聞いた池月の賭場から新三の歸りを待ち受け、日頃の遺恨をはらさにやならねえ、（ト此の時人音するゆゑ、源七上手を見て、）今河岸通りから出て來る人影、形恰好は似て居るが、何にしろ小蔭に忍んでさうだ。

ト源七は下手練塀の蔭へ隱れる、上手より前幕の新三尻端折り下駄がけ、蛇の目の傘をすぼめて持ち、勝奴尻端折り下駄がけ大黒傘を擔ぎ、小田原提灯を提げて先きに立ち出來り、

勝奴　親方、歸る時分に雨が止むとは、ます〳〵今夜は目と出やしたね。

新三　然し雲切れがちつともねえから、又今に降るかも知れねえ。

勝奴　雨接待ぢやあ此の間、吉の二階で懲々しやした。

新三　おゝ吉といやあ兩國で、今日は三河町の吉親方から頼まれて居た無盡の當日、百兩取りの初會だつけ、さつぱりと忘れて居た。

勝奴　どうで初會の事だから親取りに極つて居れば、明日の朝でようごぜえませう。

新三　いゝや、さうでねえ、五兩ばかりの掛金が出來ねえやうで見つともねえ、手前御苦勞だが行つて來てくれ。

勝奴　もう今夜は四ツ過ぎだから、連中が引けましたらうぜ。

新三　いや初會でしつかり馳走があるから、九ツでなけりやあ引けねえ、よく言譯を言つて屆けてくれ。

ト財布から金を出し、紙に包み勝奴に渡す。

勝奴　もし親方、明日の朝でもいゝぢやござえませんか。

新三　手前行くのが厭なのか。

勝奴　なに、行くのは造作もねえけれど、別れるといふのはどつとしやせん。

トもじ〳〵するゆゑ、新三思入あつて、

新三　あゝそれぢやあ何だな、今日彌太五郎が子分の奴と、喧嘩をしたといふことだが、一人で行くのが怖えのだな。

勝奴　何の彼奴等の一人や二人、親分の源七でせえ面へ金を叩きつけられ、仕返しにでも來るかと思やあ、今日が日までもぐづ〳〵で手出しもしねえ意氣地なし、高の知れた彼奴の子分、何の怖えことがあるものか。

新三　ほんに手前のいふ通り、これが堅氣な商人なら指を銜へて引ッ込むのも、おとなしくッていゝけれど遊び交際をするものが、籠められぎりぢやあ顏が立たねえ、おれなら命を捨てるまでも意趣

を返さにやあ置かねえが、如何に燒が廻つたとて意氣地のねえ親仁だな。

勝奴　どうして〳〵、名は彌太五郎源七などゝ二人前の名前を附けて、ごてえさうな面をしてもしみつたれなかすり取り、藝者や閻魔を脅しつけて親分風を吹すけれど、遊び人を向うへ廻して命がけのことは出來ねえ。

新三　かう、詰らねえ事を言つて居るうち、遲くなるといけねえから、ちつとも早く行つて來てくれ。

勝奴　それぢやあ親方行つて來ますから、提灯をあげやせう。

新三　おれはいらねえから、手前持つて行け。

勝奴　なに、わつちやあ提灯などはねえ方がようごぜえます。

新三　中村屋の二階へ行くのに、無提灯ぢやあみつともねえ、そんな事を言はずと持つて行け。

勝奴　成程それもそんなものだ、それぢやあ親方行つて來ます。

新三　道がわりいから氣を附けて行け。

勝奴　あい〳〵承知しました。（ト勝奴は引返して上手へ入る。新三後を見送り）

新三　今夜わざ〳〵屆けねえでも、明日の朝でもいゝことだが、おれもこれから頭を持ち上げ段々賣出す體だから、人にけちだと言はれねえやうめりは器用に出さにやあならねえ、（ト此の時雨車になり）

又ばら〳〵やつて來た、大降りにならねえ内、ちつとも早く出かけよう。

ト傘をさして下手へ行きかけろ、此の時下手の練塀の蔭より以前の源七傘をすぼめてさし出來り、わざと新三に行當る。新三後へ退り、

えゝ、按摩でもねえくせに、よく目をあいて歩きやあがれ。

と花道の方へ行き掛る。これにて源七傘を開いてさし、

源七　新三、待て。

新三（この聲を聞き、）さういふ聲は、

源七　おゝ、彌太五郎源七だ。

新三　なに源七だ。（ト新三ぎつくり思入。時の鐘凄き合方になり、）

源七　今夜手前がこの先きの、池月といふ伯樂の賭場に遊んでゐると聞いたゆゑ、家へ歸るをさつきから橋の袂で待つて居た。

新三　おれが歸りを待つて居たとは、お前も此の頃都合が惡く、燻つて居ると聞いたが、錢でもくれると言ひなさるのかえ。

源七　なんぼ燒が廻つたとて、手前達の袖に縋り、無心合力いふやうな、未だ耄祿はしねえつもりだ。

新三　そんなら何で此の新三が、賭場から歸りを此の河岸で、

源七　待つて居たのは手前から、外に貰ひてえものがある、

新三　なに、外に貰ひてえものがあるとは、

源七　手前の命が貰ひてえのだ。

新三　どうしたと。（ト合方きつぱりとなり。）

源七　まだ駈出しの遊人、盆の見えねえ手前だから、斯うばかりぢやあ讀めなからうが、いつぞやおれが白子屋から據ろなく頼まれて娘を貰ひに行つた時拔ひ金を顏へ打附け、恥をかゝせた意趣返し其の時いつそ一思ひと二三度家は出かけたが、いゝ年をして大人氣なく、小僧ッ子あがりの手前を相手に組んで落ちるも智慧がなく、賣つた喧嘩を買はねえのも此方の盆が高いゆゑ、今日まで我慢をして居たが、臭えもの身知らずと取合はねえのをいゝかと思つて、世間へ出ちやあおれが事を意氣地がねえの腰拔のと、言觸して歩くとやら、人の噂を聞く度に癪に障つて今日此處で、燒の廻つた源七の刃鐵が切れるか切れねえか、命を賭けての遣取りだ、受けられるなら受けて見ろ。

トきつと思入、新三もこなしあつて、

新三　その仕返しは今日來るか、明日來るかとあの時から毎日待つて居た所、幾日たつても來ねえから尻腰のねえ親仁だと手前の子分に逢ふ度每、言傳同樣惡く言つた、聾近え其の耳へやうやくそれが聞えたか、雨の降るのに深川までぼく／＼足を運んで來たは、耄たやうでも流石は源七、命を捨てによく出て來た。

源七　なんと、

新三　丁度所も寺町に娑婆と冥土の別れ道、其の身の罪も深川に橋の名さへも閻魔堂、鬼といはれた源七が爰で命を捨るのも、餓鬼より弱い生業の地獄のかすりを取つた報いだ、手前もおれも遊人、一ッ釜とはいひながら黑闇地獄のくらやみでも亡者の中の二番役、業の秤にかけたらば貫目の違ふ入墨新三、こんな出合もその內にてつきりあらうと淨玻璃の、鏡にかけて懷に隱しておいた此の匕首、刃物があれば鬼に鐵棒、どれ血塗れ仕事にかゝらうか。

源七　如何に所が寺町とて、まだ新盆も來ねえのに、聞き度くもねえ地獄の言立て、無常を告ぐる八幡の死出の山鐘三途の川端、あたりに見る目嗅ぐ鼻の人の來ぬ間にちつとも早く、冥土の魁さしてやらう。

新三　えゝ耄碌親仁め、覺悟しろ。

ト持つたる傘で打つて來る、源七身をかはし脇差を拔き、波の音になり兩人ちよつと立廻りあつて、新三傘を擔ぎ源七脇差を差附けきつと見得、これより双盤の入りし誂への唄になり、立廻つて傘を打ち落す、新三匕首を拔き兩人立廻りよろしくあつて、新三一刀切られ糊紅になり、又立廻つて結局新三を切倒し、のつかゝり止めを刺す。此の時仕掛にて源七の胸へ血烟りかゝること、源七刀を拔き血を拭ひ、

源七　小な形だが膽ッ玉が、大きいだけに手剛えやつだ。

ト脇差を鞘へ納め、四邊をうかゞひ傘を搜す、爰へ下手より以前の仁八荷をかつぎ出來り、新三の死骸に躓きびつくりしてあたりを見て、

仁八　こりや夥しい、

ト大きく言ふ。源七此の聲に心附き、びつくりして拾ひし傘をぽんと開くを、道具替りの知せ、

ちゝゝゝゝ。

と顫へながら下に居る、源七傘を横にして顏を隱す、此の見得佃にて道具廻る。

（佐賀町居酒屋の場）――本舞臺三間の間いつもの居所より二尺程後へ下げて二間常足の二重、上の方一間釣酒と記せし腰障子を閉切り、下手一間の落間、爰に土竈を築き、此の側に三尺の出し臺、上

に小皿物の肴を並べ、門口の柱に居酒と記せし行燈を掛け、正面上手一間中仕切のある押入戸棚、下手一間鼠壁、落間の正面に酒樽の書割り、下手の棲竹格子の半窓、下座の所一面の黒塀、舞臺よき所に太鼓樽を並べ、總て佐賀町居酒屋見世先の體。三右衛門白髪鬘やつし裝、前垂掛け居酒屋の亭主にて錢勘定をして居る、下手落間の所に女房おさが白髪鬘やつし裝、襷がけにて小桶の中で石皿を洗ひ居る、駕籠舁一人明き駕籠をおろし、樽に腰を掛け煙草を喫んで居る、此の見得、四ツ竹節にて道具留る。

駕舁　おい三右衛門さん、まだ見世をしまひなさらねえか。

三右　雨は降るし、四ツを打つたから今しまはうといふ所さ。

さが　(洗物をしまひ、) 長次さん、仕事の歸りかえ。

駕舁　二ツ目まで仕事に行つたが、今聞きやあ閻魔堂橋で人殺しがあつたさうだから、早く見世をしまひなせえ。

三右　何ぢや、人殺しがあつたえ。

さが　そりや氣味の惡い話しぢやな。

駕舁　こつちの家なんぞも金はあるし、年寄り二人差向ひだから、早く見世をしまひなせえ。

三右　長次さんとしたことが、年寄り夫婦掛向ひで、やうやく暮す居酒屋商賣、何で金が有ませうぞ。

さが　お鐵漿壺の出し金さへも、今では家にござらぬわいの。
駕舁　有ると見えてもないのは金だが、無いと見せてもあるが金だ、何にしろ物騒だから早く見世をしまひなせえ。
三右　そんなら金のある積りで、早く見世をしまひませう。
駕舁　どれ、おれも早くしまつて歸らう。（ト駕籠をかつぎ立ちかゝる。）
さが　もし長次さん、早くしまつて歸るとは、お前もあると見えますの。
駕舁　なにさ、金はないが駕籠があるのさ。（ト駕舁は下手へ入る、三右衞門思入あつて、）
三右　御政事向が嚴いので、此の頃は世間も穩か、とんと人の切られた話しも忘れたやうに思つたが、物取りか意趣切りか、何にしろ厭な話しぢや。
さが　雨は降るし四ツ過ぎゆゑ、早くしまつて寐ようではないか。どれ、行燈を引きませうか。

トやはり四ツ竹節の合方にて、三右衞門二重から下りて門の行燈を下しにかゝる。爰へ上手より以前の源七傘をさして出來り、三右衞門を見てわざと傘を横にして見世の前を通り、花道の方へ行きかゝる三右衞門源七の後姿を見て、

もし、そこへおいでなさるのは、源七親分ではござりませぬか。

トこれにて、源七見附けられたといふ思入あつて振返り、

源七　おゝとつさん、いゝお濕りだつたの。

三右　もし、直通りをなされませずと、まあお寄り下さりませ。

源七　見世をしまふ樣子だから、それで素通りをしたのだ。

三右　いえ行燈は引きましても、まだ仕舞ではござりませぬ。

さが　もし親分さん、まあお掛け下さいまし。

源七　今日はちと急な用で、こつちの方へ來たのだから、又その中ゆつくり來よう。

三右　左樣でもござりませうが、まあお掛け下さりませ、昨日一本附きましたが、まだ利酒をいたしませんから、利いてお貰ひ申したうござります。

さが　それに又、夕河岸に生きてゐるやうな鰯がまゐりましたゆゑ、親分さんがお好きゆゑひよつとおいでもあらうかと、ぬたを拵へて置きました。

源七　そりやあ何より有難いが、今夜は寄つて居られねえ。

三右　左樣でもござりませうが、決してお手間は取らしませぬ。

さが　お寄附のお客さまが、寄らずにおいでなされますと氣にかゝつてなりませぬ。

兩人　まあ〳〵お掛け下さりませ。（ト兩人して無理に引留める。）

源七　それぢやあちよつと寄つて行かうか。

ト迷惑なるこなしにて床几に腰を掛ける。此の内三右衞門盆へ猪口を載せ、ちろりを持つて出る。おさがぬたを入れたる小皿を盆に載せて持つて出で、

三右　これが今日着きました、切味といふ酒でござります。

源七　なに、切味、はて珍らしい酒の銘だの。

三右　正宗から思ひついて、附けた名でござります。

さが　鰯も今までぴん〳〵と、生きてをつたやうでござります。

三右　まあ上つて見て下さりませ。（ト床几の上へ置く、源七ちよつと心にかゝる思入あつて、氣を替へ）

源七　どれ、それぢやあ一杯利いて見ようか、（ト手酌で一口呑んで）なるほど、こりやあ一本生だ。

三右　まだ玉川を割りませぬから、きつ過ぎるかも知れませぬ。

源七　そのきついのが、おれの望みだ。

さが　ぬたは如何でございます。（ト源七一口喰つて）

源七　心に掛けてくれたゞけ、又肴も格別だ。

ト此の内三右衛門件のちろりを釜の中へ突込み燗をする。

さが　詰らぬものでも其のやうにお褒めなされて下さりますゆゑ、ついお引留め申しては、旨くもないものをお上げ申して、お氣の毒でござります。

源七　どうして〳〵氣の毒どころか、こんな好い酒を安く賣つては、お前の方が引合ふめえと、却つてこつちで氣の毒だ。

三右　いえ〳〵引合はぬことはござりませぬ、元わたくしが新川に勤めてをつた其の縁で、お店から元直限りで酒を送つて下さるゆゑ、好いのを安く商ひましても隨分利合がござりまする。

さが　その代りお肴は皺だらけの婆の手料理、親分さんのお口などには所詮合ふことではござりませぬ。

源七　所が、斯うして此方の家へ久しく馴染になつて來るのも、先づ第一酒がいゝのに、肴は所の名物で、深川もので新らしいから手數の掛らぬ摑み料理が、會席茶屋の料理より又格別に賞翫だ。

三右　(件のちろりを持ち出で、)もし親分さん、お燗がつきました、お酌をいたしませう。

源七　こりやあ憚りだ。

ト猪口を出す。三右衛門酌をしながら源七の胸へかゝりし血を見て、

三右　もし親分さん、あなた胸をどうなすつた。

源七　え、（ト胸を見て心附き、）これは、（トびつくりして猪口の酒をこぼす。）

さが　ほんに、大そう血がかゝつて、

源七　なにさ、こりやあ血ではねえ。（ト酒を拭くやうにして胸の血を手拭で拭く、）

三右　血でないことがござりませう、お拭きなされた手拭へも、それ、其の通り血が附きました。

さが　さういへば親分さんの、お顔の色もいつもと違つて、（ト言ひかけるを源七冠せて、）

源七　なにさ、こりやあ斯ういふ譯だ、今油堀を通りかゝると、無提灯だと思つたか、犬に大そう取卷かれいくら追つても逃げねえから、據ろなく先きへ進んだ大犬を切拂つたが、其の時の血がはねたと見える。

三右　へゝえ左様でござりますか、犬の血なら好いけれど、もしや話しの、

源七　え、（ト思入、）

三右　いえなに、落語家や講釋師が、よく博奕場の話しをしますが、勝負事の間違ひから遺恨になつて、歸りを待ち受け人でもお殺しなされはせぬかと、實はびつくりいたしました。

源七　（これを聞き思入あつて、）案じてくれるはありがてえが、若い時分と事替り、おれも段々取る年に女房や子供を持つて居れば、後先き見ずの事も出來ねえ、取卷かれて仕方なしに脅しに拔いた切

尖か、さはつて思はず犬は切つたが、喧嘩をするの人を切るのと、そんな短氣は出さねえから、必ずともに案じなさんな。

さがそのお詞を聞きまして、婆も安心いたしました。（トこの内三右衛門源七の様子を見て案じる思入。）

三右もし親分さま、酸いも甘いも御存じのお前さまへ對しまして、御異見ではござりませぬが、まあお聞きなされて下さりませ、（トこれより替つた合方になり、）久しい馴染とおつしやつて、こんな穢ない居酒見世へ立派なお顏の親分がちよく／＼お寄り下さつて、酒や肴の勘定もいつでも釣りをお持ちなされず餘計にお貰ひ申すゆゑ、有難いとはいひながら、よく／＼思へば此の樣に器用な事をなさるのも荒い稼業をなさるゆゑ、昔を今に博奕は天下の法度といひながら、以前は隨分お目こぼしで長脇差で世を渡り、やれ勢力の國定のと上州などには名の高い博奕打もござりましたが、今はなか／＼そのやうな道に缺けた稼業では世の中は渡られませぬ、あなたも若い身ではなし最早人間お定りの五十の坂をお越しなされば、好い加減になされませ。もしもの事でもあつた時にはお上さんやお子さんがどんな難儀をなされませうか、其の御苦勞を思召し、事ない内に切上げて、何ぞ御商賣なされませ、世間へ賣れたお顏ゆゑ待合茶屋か但しは寄席か、そんな事でもなされましたら、五人や七人のお暮しの出來ぬことはござりますまい、堅氣になつて一生涯樂に

お過しなされませ。

さが　親仁どのが此のやうにあなたをお案じ申しますのも、わたくし共二人の中に一人の忰がござりましたが、やはりこれも博奕好きで、夜の目もろくに寐られぬ程親に苦勞をかけました、擧句の果が勘當同樣家を出まして十何年、とんと便りもいたしませなんだが、段々年を取るにつけ濟まぬ事と思うてか、去年の春から便りをしましたが、今では相模の厚木に居り目明しとやらをいたしまして、好い顏になつたとやら申すこと、捨てた者でも實の我が子に便りをされて見まするど、少しも早く逢ひ度くなり、此の春こちらへ出て來るやう迎ひの手紙を遣りましたら、五月の末か六月半おそくも七月差入までに是非まゐると申すゆゑ、いやもう、明暮待つてをりまする。

三右　忰もやはりあなたのやうに兎角博奕ばかりいたし、親に苦勞をさせましたが、假令目明しにしろ何にしろ、物の頭になる程の器量のあるのが親の樂しみ、此方へ參りましたことならお近附にいたさせますから、お心安うわたくし同樣お引立てなされて下さりませ。

源七　（これを聞き思入あつて、）むう、それぢやあとつさんお前の息子は目明しをして居なさるとか、名は何といひなさるえ。

三右　はい、名は市藏と申しますが、額に痣がござりますので、痣の市といひまする。

源七　それぢやあ話しに聞いて居た厚木宿の目明しで人も知つた慈市は、とゝさんお前の息子であつたか。

三右　はい、左樣でござります。

源七　大方おれより若からうが、さうして役でも勤めて居れば、もう人間になつたのだから、お前方も安心だ、人の話しを聞くにつけ、おれもとゝさんの異見に附いて向後博奕は思ひ切らう、世界の寶を弄びに怠けて暮す遊人は、今の時節に合はねえから、おそまきながら止めに仕ようよ。

三右　（これを聞き嬉しき思入にて、）左樣ならわたくしが、今の異見をお用ゐなされて、さが堅氣におなりなされますか。

源七　時代な事を言ふやうだが、お前の詞を誓ひに立て、すつかり思ひ切る積りだ。

さが　實はこれまで親父どのとあなたのお身をお案じ申し、折があつたら御異見を申さうと存じましたに、御聞き屆け下さりますとは、こんな嬉しいことはござりませぬ。

三右　おゝそなたも嬉しいか、おれも嬉しい。（ト兩人悅ぶ。源七酒を呑みしまひ、）

源七　時にとゝさん、爰は幾干になる。

三右　どういたしまして、御勘定は澤山お預りがござりまするから、今晩のはよろしうござります。

源七　何のいゝことがあるものか、それぢやあこれを取つてくんねえ。

　　　ト二朱銀を出す、三右衛門これを取つて、

三右　左様なら、二百五十文お貰ひ申します。

源七　とつさん釣りには及ばねえよ。

三右　それではやつぱりお前様は、博奕はお止めなされませぬか。

源七　なに、止めぬとは、

三右　はて僅か二百五十の所へ二朱を一つお出しなされ、釣りはいらぬとおつしやいますは、まだ博奕打の癖がお失せなされませぬ。

源七　いや、こいつはおれが悪かつた、そんなら釣りは預けて行かう。

三右　今度は代を取りませぬぞ。

源七　いや、正直なとつさんだ。（ト空をのぞいて、）おつかあ雨は止んだかの。

さが　又ばら〳〵降つて参りました。

源七　それぢやあ大降りにならねえ中、ちつとも早く出掛けよう。（ト立ち上る。）

三右　お引留め申しましてござりまする。

さが　もし、お傘はこれにござりまする。（ト傘を取つて出す、）

源七　おゝ、（ト傘をとり蓑を忘れしを思ひ出せしこなしにて、）おらあ蓑は着て來なんだの。

三右　いえ、着てはお出でなされませぬ。

源七　（南無三といふ思入あつて、）こいつあとんだ事をした。

三右　え、（ト顔を見る、源七氣を替へ、）

源七　いや、とんだ世話になりました。

ト四ツ竹節になり、源七思入あつて花道へ入る、跡兩人後を見送り、

さが　これ親父どの、源七さんは油堀で犬を切つたと言はつしやれど、あれは犬ではあるまいぞえ。

三右　おゝ、おれもさう思つて居る、顔の色から脣の色まで變つてござつたからは、先刻駕籠舁の長次から話しに聞いた人殺し、閻魔堂橋であつたといふは源七さんではあるまいかと、胸にぎつくり當つて居るのぢや。

さが　若しもそれに違ひなく、お召捕りにでもなつたらば、助かり難うござりませうな。

三右　人を殺せば下手人に、所詮命はあるまいわいの。

さが　一方ならず源七さんの、お世話になれば心にかゝり、

三右　たゞさへ寐られぬ年寄り夫婦、

さが　今夜はおち〳〵寐られますまい。

三右　苦勞の絕えぬ、(ト床几へ掛けるを道具替りの知せ、)世の中ぢやなあ。

ト兩人案じる思入よろしく、四ツ竹節にて道具廻る。

(佐賀町河岸の場)――本舞臺上下貸藏にて見切り、眞中斜に永代橋から向う河岸を見たる夜の遠見、總て佐賀町河岸通りの體。時の鐘雨車にて道具留る。ト時の鐘、誂への端唄になり、上手より源七傘をさし出來り、四邊へ思入あつて、

源七　今居酒屋の三右衛門が胸へかゝつた血を見附け、人でも切りやあしねえかと親身も及ばぬおれへの異見、犬を切つたとごまかしたが目と鼻の先の閻魔堂橋、明日は直に世間の噂、蓑は忘れて來たけれど、これぞといふ證據もなければ外の者は知るめえが、それと覺つた三右衛門はおれが仕業と思ふは必定、然し久しい馴染の上律義な爺さん婆さんゆゑ、滅多に人に言ひはしめえが、心にかゝるは厚木から五月の末か六月か七月までには目明しの悴がこつちへ來る樣子、親子の仲にこの事をひよつと言ふめえものでもねえ、さうした時にやあ生業ゆゑ、おれを此のまゝ置きやあ

しめえ、こいつは後へ取つて返し、殺した事を打明けて、口留めをして置いたがいゝか、言はずに歸つた方がいゝか、（ト思入あつて、）いや後は野となれ山となれ、此の儘家へ歸らうわえ、（ト端唄になり、思案の思入にて花道の方へ行きかけ、又あとへ立戻り、）あれが惡い人達なら取つて返して一思ひに遣つてしまふが上分別だが、此の身の命が惜しいといつて、如何な鬼でも佛のやうな三右衞門夫婦が殺されようか、とはいへ、此の儘歸るも氣がゝり、あゝ行くにも行かれず、歸るにも歸られず、どうしたものであらうなあ。

ト端唄になり思入、此の時上手より以前の駕舁○△相棒の生醉を引摺り出來り、

○ これさ、錢もねえくせに、明けを追はずと今夜は早く家へ歸れ。

△ べらぼうめ、錢がねえといつたつて着替の一枚位家にあらあ、そいつを殺しやあ譯はねえ。

○ 女房や子供が難儀をするから、殺すことは止しにしろ。

△ いゝや殺さにやあならねえ。

○ えゝ止しにして歸れといふに、（ト無理に引張つて花道へ入る、源七思入あつて、）

源七 時に取つての辻占も、此の身の異見に惡心が忽ち晴れし、（ト霞附の月をおろし、）雲間の月、

ト合方にて、上手より以前の三右衞門出で來り、

三右　もし、そこにおいでなされまするは、親分さんではござりませぬか。
源七　おゝ、とつさんか。（ト顏を見て思入。）
三右　お手拭がござりました。（ト懷から血の染みたる手拭を出す。）
源七　あゝ持つて來なくつてもよかつたに、
　　　ト三右衞門四邊へ思入あつて、小聲にて、
三右　いえ、血が附いてをりますゆゑ、（ト源七取つて、）
源七　とつさん如在もなからうが、今夜の事は、
三右　けして人には申しませぬ。
源七　たゞ何事も、（ト手拭を二ツに結ぶを木の頭。）流してくんねえ。
　　　ト後の川へ手拭を打込む、三右衞門頷く、此の模樣時の鐘、佃、波の音にてよろしく、
　　　ひやうし幕

四幕目

御堀士手の場
町奉行所の場

〔役名──大岡越前守、車力善八、夜蕎麥賣仁八、荒川彌源次、石垣伴作、足輕專平、同典藏、家主太郎兵衞、白子屋手代忠七、彌太五郎源七。白子屋お熊、後家お常、其他。〕

〔御堀土手の場〕──本舞臺三間の間正面石垣の上草土手、松の立木、後浅黄幕、上の方練塀、下の方見附の石垣にて見切り、總て丸の内土手際の體。こゝに太郎兵衞羽織袴家主のこしらへ、定番久七着流しにて、兩人立掛り居る、時の太鼓にて幕明く、

太郎　これ〳〵久七どん、未だ五人組の四郎兵衞どのは見えぬかな。

久七　お前さんがお待ち兼ねゆゑ、お堀外の三河屋まで今行つて參りましたが、まだお見えなされませぬ。

太郎　はて困つた男だな、あれまで早くと言つたのに、何處で道草を喰つて居るか、もうお下りがあつたから、今にお白洲が始まるのに、四郎兵衞どのが來ねえ日には、誰ぞ一人頼まねばならぬ。

久七　今朝自身番を出なさる時、今日は御勘定に寺社と加役、此の節の落語家同樣三四軒の掛持だと、わしに言つて行きなすつたから、外へ廻つたかも知れませぬ。

太郎　それぢやあそんなことかも知れぬ、辨當錢ばかりほしがつて、そんなに三軒の四軒のと方々を請合つて、どうそれが間に合ふものだ。もし四郎兵衞どのが來なかつたら、貴樣代りに出て下さい。

久七　畏りましてございります、四郎兵衞さんが參りませずば五人組に出ませうが、辨當錢は下さりませうな。
太郎　貴樣もやつぱり取りたがるのか。
久七　五人組の代りをすれば、お貰ひ申さにやなりませぬ。
太郎　皆慾張つた奴ばかりだ。
久七　大屋さん、お前さんに似てさ。
太郎　おれがのは家主根性慾張るのが當り前だ、何にしろ隣町の白子屋も今日呼出しだが、どう身上が廻つて居ても材木屋の事だから、跡で禮にもなるだらうが、おれが方の源七どのは派手にはするが遊人、今日入牢でもした日には跡の禮にもならぬ譯だ。
久七　それでは今日は源七どのは、むづかしうございりませうか。
太郎　さあ、むづかしからうと思ふのは、何か慥な證據があつて人殺しの目串が拔けねば、多分今日は留められるだらう。
久七　さう聞いては辨當代も、直にお貰ひ申したい。
太郎　えゝ、しみつたれな、三百ばかり、

久七　ばかりならお前さん、立替へて下さりませ。
太郎　今、取らずともよいことを、
久七　いえ〱後では否でござります。
太郎　えゝ、どうでもするから來さつしやい。
ト兩人上手へ入る、跡合方になり、上手よりり善八やつゝし裝にて出來り、思入あつて、
善八　今大屋さんの話しといひ、源七さんも苦勞人ゆゑ、今日は家へ歸られぬと覺悟をしてか、家を出る時餘所ながらの暇乞ひ、尤も新三は後の月わしが賴んで、白子屋のお熊さんを取返しに源七さんが行つた時、扱ひ金を顏へぶッ附け恥をかゝせた遺恨があるゆゑ、てつきり殺したに違ひはない、（ト四邊へ思入あつて、）覺えないと昨日まで言張つては居らるゝが、越前樣の御詮議では所詮隱しても隱されまい、今日留められでもしたことなら、跡へ殘つたお上さんや子供衆が可愛さうだ、氣の毒なことになつて來たなあ。
ト捨石に腰を掛け腕を組み思入、合方にて花道より序幕の忠七着流しにて出來り、花道にて、
忠七　今日は恩ある源七さんが人殺しの一條で越前樣へお呼出し、大方今日は留められようと新堀での噂ゆゑ、お見舞ながら腰掛けへ今行つて見たところ、白子屋の衆に出會し早々後へ立戻り、爰等

をうろ〳〵して居るが、どうか途中で源七さんにお目にかゝつて行きたいものぢや、（ト言ひながら舞臺へ來り、善八を見て、）そこに居なさるは、善八どんぢやあないか。

善八　おゝお前はお店の忠七さん、久し振でお目にかゝりましたが、先づお替りもござりませず、

忠七　體に替りはないけれど、以前に替る今の身の上、そなたに逢ふのも面目ない。

善八　不斷お世話になつたゆゑ、ちよつとお尋ね申さうと明暮思つてをりますが、何處においでなされまする。

忠七　宿の伯父が腹立ゆゑ、人の世話であの折から新堀邊に隱れて居ます。

善八　實はわしも伯父さんの所へ早速尋ねて行つた所、物堅い氣質ゆゑ不奉公した忠七は家へは一切寄せ付けませぬとけんもほろゝな挨拶に、何處へお前が行つたことやら、さつぱり樣子が知れなんだが、此の間銀次といふ源七さんの子分の話しに、世話になつて居なさることをちよつと聞いたが、どういふ譯で世話になつて居なさるのだ。（ト兩人石へ腰を掛け、）

忠七　委しく話せば長いことだが、お熊さんを連れ出したも新三の勸めにうつかりと、乘つたがわしが過りなれど、此方は企みと知らずして永代橋まで行つた所、お熊さんを先きへやり、おのれが連れて逃げたのを、わしが追駈け行つたやうに言掛けなして打擲なし、擧句の果てに逃げられ

たれど、たゞ深川と聞いたのみ家も知れねば仕方なく、途方に暮れて永代橋から飛込まうとした所を源七さまが通りかゝり、わしを抱き留め顔を見て、おゝ白子屋の若い衆か、どういふ譯で身を投げて死なうとするとお尋ねゆゑ、斯う〳〵いふ譯あつてと委細をお話し申したら、さういふ事なら死ぬには及ばぬ、どうともおれがしてやらうと御親切におつしやいます、其のお詞を力となし、今新堀の吉さんといふお人の、世話になつて居ります。

善八　それは危ないことであつたが、源七さんに留められたのはお前の命のあつたのだ、さうして今日は源七さんの見舞にでも來なすつたのか。

忠七　さあ、見知り人があるとやらで、所詮今度の一件は脱れられまいといふ事ゆゑ、見舞に爰へ來ましたが、今日白子屋もお呼出しで、お熊さんを始めとして家主方や近所の衆、顔を合すことがならねば、途中で逢はうと、先刻から爰等をうろ〳〵して居ます。

善八　それは折角來なすつたが、源七さんは隅の茶屋へ早く來て居なすつたが、もう今頃は呼込みでお白洲へ出たであらう。

忠七　そんならとうに腰掛へ源七さんは來なすつたとか、それは残念なことをしました、さうして人殺しの一件は脱れさうでござりますか。

善八　さあ、これが人のした事なら脱れることもありませうが、大きな聲では言へぬけれど、人は知らずわしなどは閻魔堂橋の人殺しは、遺恨ある新三ゆゑ、源七さんかと思ひます。

忠七　誰言ふとなく新堀の家でも話しがあつたので、わたしも心ならぬゆゑ見舞ながら來ましたのだ。

善八　脱れられぬはお上でも源七さんと目が附いて、此の間からその詮議、源七さんも覺えがあるに殊によつたら歸られまいと、入牢する氣で新しい褌を締め支度して、今朝家を出られた様子。

忠七　そんなら今日は入牢する氣で、支度をして行かれしとか、それは氣の毒なことでござりますな。

ト忠七俯向きぢつと思入。善八もこなしあつて、

善八　いや氣の毒なのは、それよりも源七さんのお上さん、お前は家へ行かぬゆゑ委しい事は知るまいが、新三の事は此の善八がお頼み申しに行つたが始まり、それゆゑ今朝も見舞に行つて、胸が一杯になりました。

忠七　そりやどういふ譯あつて、

善八　お熊さんを貰ひに行き新三に恥をかゝせられ、それが其の身のけちとなり、世間の受けが以前と替り、日に増し都合が惡い所へ人殺しの今度の一件、脱れられぬ事あつてか所詮今日は歸られまいと、今も言ふ支度してお上さんへ其の事を言うたものゆゑ泣きの涙、搗て加へて氣の毒なのは

今年六ツになる、金太といふ愛らし盛りの小いのが、此の頃流行の麻疹を煩ひ昨夜から氣むづかしく、あれのこれのと泣いてばつかり、事によつたら彼方のものにならうも知れぬ峠まへ、殘して行くが不便さに源七さんも餘所ながら暇乞をした所、蟲が知らすか起きかへり、腫れ塞がつた目を明いて、父さん坊が切ないから早く歸つて來てくれと言はれた時は兩親より、わしが先きへ泣き出しました、流石鬼にも負けぬ氣の源七さんも涙をこぼせば、お上さんは正體なし、それも首尾よく言譯立ち晩に歸つてござればよいが、留められでもしたことなれば、親を慕つて金太さんが嘸や泣いてせがむであらう、跡に殘つてお上さんが賴みに思ふ亭主は入牢、子は麻疹にて泣き立てられ、どんなに切ないことであらう、それを思ふと男でさへ、わしや悲しうなりまする。

ト善八顏へ手拭を當てゝ泣く、忠七思入あつて、

忠七　そんなら家の小いのは麻疹を病んでござりますか、嘸お上さんがお困りなされう、疾うにもそれと聞いたならお見舞でも上げませうもの、何にしろわしが爲には命の親の源七さん、どうか人殺しにならぬやう、助かる仕樣はござりますまいか。

善八　さあ、わしもお世話になつた事ゆゑ、人殺しを脫れるやう不動さまへお百度上げお願ひ申せど、何分にも新三に遺恨のある事を、弟子の勝が言つたゆゑ源七さんに疑ひかゝり、お呼び出しにな

つたれば、外に殺した者でもあつて名乘つて出たらば知らぬこと、さもないことでは助かりますまい。

忠七　あゝ道樂者とはいひながら、情心もある人が斯ういふ事になるといふは、情ない事でござりまする。

善八　まだ〳〵それに情ないは白子屋のお熊さま、利口なやうでも懷子、後前の考へなく聟を取ては言交したお前に義理が濟まぬとて、自害して死なうとしたを聟に來た又四郎が、それと見るより飛びかゝつて留める機についあやまつて、脇腹へぐつと突き込む急所の深手、怪我とは言へど亭主殺しに、お前も知つてゐるわしが姪、年は行かぬが利口な奴で、五ツの年から御恩になつたお主の大事にかへられぬと、其の身に科を引受けて自害して死んだゆゑ、一旦事は濟んだれど、お熊さまが義理堅く我が殺せしとおつしやるので、これも又候お呼び出し、今日お白洲で越前樣が直々御吟味なされるとやら、いよ〳〵それに極れば亭主殺しのお仕置にお熊さまがならねばならぬ、何と情ないことぢやござりませぬか。

忠七　（これを聞きぢつと思入あつて、）あゝ、其のお熊さまが聟に來た又四郎どのをあやまつて突殺せしも其の元は、此の忠七がお主樣のお目を掠めて不義せしゆゑ、子飼の折から一方ならず御恩にな

つたお袋さまへ、御恩もおくらずお熊さまへ亭主殺しの悪名附け、非業な御最期おさせ申さば生きて此の世に居られぬ忠七、とても死ぬなら此の身に引受け、

善八　え、

忠七　いやさ、其のお白洲の引けるまで此の土手際に身を忍び、源七さんにお目にかゝり、お見舞を言つて歸りませう。

善八　さういふことなら暮方まで、爰に待つてござるがよいが、御前が首尾よく濟めばよいが、多分家へは歸られまい。

忠七　お家の歎きを聞いて見れば、そんなことにならぬやう、どうか仕樣はあるまいか。

善八　何にしろどんな樣子か、家主衆に聞いて來れば、爰に待つて居なさるなら、今に安否を知せて上げよう。

忠七　どうぞさうして下さりませ。

善八　直行つて來るほどに、外へ行かずと石垣の陰に隱れて居さつしやい。

忠七　決して外へは參りませぬ、爰に待つてをりまする。

善八　そんなら、忠七さん、

忠七　善八どの、

善八　どれ、様子を聞いて來ませうか。（ト合方にて善八足早に上手へ入る。跡やはり合方、忠七思入あつて）

忠七　今善八どのゝ話しで聞けば、お熊さまがわしゆゑに死なうとしたを聟どのが、留める機に深手を負ひ終に非業な最期せしを、下女のお菊がお主をかばひ自害なして死んだのも、お熊さまが義理堅く又もや今日の再吟味、いよ／＼今日のお調べにて亭主殺しになる時は、たつた一人の娘御ゆゑお袋さまのお歎きはどのやうな事であらう、丁稚の折から十何年厚い御恩になつたのを仇で返す不忠者、お菊でさへもお主の爲には命を捨てしとあるからは、どの顔提げて忠七がのめ／＼生きて居られうぞ、とても死ぬなら命の親の源七さんの罪を背負ひ、人殺しの刑を受け死ぬが此の身の罪滅し、こりや御番所へ駈込んで、一部始終を申し上げん。

ト忠七きつとなる、上手より善八出かゝり、これを聞いて、

善八　おゝ忠七さん、出來しなすつた、あつぱれ見上げたお前の心底、

忠七　すりや、善八どのには此の場の樣子を、

善八　小陰で聞いて居りましたが、それでこそまことの人、お主さまへ義理を立て死ぬると覺悟さつしやつたら、罪を被つて死なつしやい、源七さんの人殺しも元の起りは白子屋ゆゑ、

忠七　それを思うて忠七も、死なうと覺悟いたしました。
善八　さういふことなら少しも早く、今呼び込みになつたゆゑ、それを知せに來ましたのだ。
忠七　そんなら最早お白洲へ、
善八　まだ呼び込んだばかりゆゑ、
忠七　罪に落ちざる其の中に、
善八　少しも早く、
忠七　おゝ、さうだ、（ト早き合方ばたばたにて、忠七上手へ走り入る。）
善八　こりや、斯うしては居られぬわえ。
　　トうろうろする、爰へ時の太鼓を打込むに、びつくりして、上手へ走り入る、これにて道具廻る。
（町奉行所の場）＝本舞臺三間の間高足の二重、本庇本緣附、軒口に誂へ紋附の幕を張り、緣側に白洲梯子、正面紗綾形の襖、上の方あとへ下げて障子屋體、下の方あとへ下げて潛り附の板羽目、捕繩手錠などを掛け、總て奉行所白洲の體。平舞臺上下に足輕專平、同典藏絹羽織、袴股立、脇差、前へ十手をさし控へ居る、時の太鼓にて道具留る。
專平　今日のお白洲は此の程深川閻魔堂橋に於て、同所富吉町長兵衛店髪結新三を殺害に及びし一件、

典藏　翌日髪結新三が弟子勝四郎が訴へに依り、豫々新三に遺恨ある乘物町源七を一應御詮議あつたる所、一向覺えこれなきよし、堅く陳じ申すにより、

專平　密かに探索なせし所、追々證據の事あつて、又もや今日再度の御詮議、

典藏　只今打ちしは八ツのお太鼓、最早殿中より御退出あつて、

專平　御出席に、

兩人　間もあるまじ。

ト下手襖より荒川彌源次、石垣伴作、上下一本差しにて書物入りの箱、料紙硯箱を持ち出で、左右へ別れ住ひ、差出しの名前書きを前に置き思入あつて、

彌源　今日御前御出席にて御直に御裁斷召さるゝは、申し渡し置いたる通り、深川閻魔堂橋人殺し一條。

伴作　まつた、新材木町亭主殺し一件、當人共は申すに及ばず、双方掛り合ひの者共、

彌源　則ち差出し名前書の通り、

伴作　一同相揃ひしか。

專平　はつ、お達しの通り、一同差控へさせ、

兩人　置きましてござりまする。

彌源　然らば、先づ人殺し一條、乘物町彌太五郎事源七、
伴作　町役人共一同、呼出しめされ。
兩人　はつ、（ト下手へ向ひ、）
典藏　一同これへ出ませい。（ト下手にて、）
源七　はゝ、
ト誂への合方になり、下手より源七誂への着附着流し、以前の家主太郎兵衞五人組附添ひ出で來り、舞臺前よき所へ住ひ、家主五人組後に控へ辭儀をする。
彌源　乘物町喜兵衞店彌太五郎事源七、
源七　はつ、
伴作　其の外町役人共一同出たな。
家主
皆々　はつ、御意にござります。
彌源　先達てお調べありしが、又もや今日御直の御吟味、
伴作　神妙にお受け申し上げろ。
源七　はつ、

專平　只今御出席召さるゝ間、

典藏　差控へ罷り居らう。

皆々　はあゝ。

ト辭儀をなす、時計の音になり正面の襖を左右に開き、大岡越前守上下一本差し好みのこしらへ小姓袴一本差しにて、一人は刀を持ち、一人は手文庫を持ち出で、越前守眞中へ住ふ、小姓後に控へ、皆々はつと辭儀をなす。彌源次差出しの名前書を、越前守の前へ置き手をつかへ、

彌源　右一件の者共、殘らず召出しましてござります。

越前　おゝ、(ト思入あつて差出しを見て、)乘物町喜兵衞店彌太五郎事源七、

源七　はつ。

越前　こりや源七、其方深川閻魔堂橋に於て結髮新三を殺害せしは、豫々遺恨ある趣き新三が弟子勝四郎逐一訴へ出しにより、今日再度の吟味に及ぶ、有體に申せ、どうぢや。

源七　恐れながら此の間御前へ申し上げし如く、白子屋娘一條に就き新三に遺恨ござりますれば、其の夜にも罷り越し殺害にも及びまするが、十九や二十の者と違ひ當年五十二歲に相成り、人に異見もなす年にて後先の考へなく、何しに人を害しませうや、御賢察下さりませ。

越前　その方五十二歳に相成り人に異見をなす年ゆゑ、後前の考へなく人を害さぬと申すは一通り尤もなれど、左程考へある身なれば何故これぞといふ稼業をいたさぬ、世に遊人とか申し、博奕を稼業となし今日を過ぎ行くは考へあるとは思はれぬ、假令五十六十になりても思案分別もなき者ゆゑ、人を害さぬとは申されまじ。

源七　その儀は恐れ入りますれど、人を害せば下手人に此の身の命を失ふことは、愚昧ながらも心得ますれば、妻子に難儀のかゝるを存じながら致しませうや、獨身ならぬ源七ゆゑ命が惜しうござりまする。

越前　凡そ世界の人たる者、妻子の行末思ふのは人情の常なるゆゑ、妻子に難儀のかゝるを思ひ、人を殺害いたさぬと利口らしく申せども、妻子が行末思ひなば何故今日の稼業をいたさぬ、最早人間一生の五十の坂を越したる其方、今日にも相果てなば妻子は何を稼業といたす、是れを見ても難儀を思ふ所存ありとは申されぬ、其方思慮なく遺恨によつて、殺害なしたであらうな。

源七　はつ。

彌源　御前再度の御吟味なるぞ。

作作　有體に申し上げい。

源七（思入あつて、）何やう仰せござりますとも、其の砌わたくしは風邪にて打臥し居り一向他出いたしませねば、我が住居の乘物町より十數町の道を隔てし閻魔堂橋におきまして、髮結新三をわたくしが殺さうやうがござりませぬ。

越前　其の砌風邪にて他出せぬと申せども、正しく其の夜深川にて汝に出逢ひし者あるが、それでも他出せぬと申すか。

源七　それは大方人違ひ、わたくしにおき聊かも他出の覺えござりませぬ、若し疑はしく思召さば妻仲をお呼び出し下され、右をお尋ね下さりませう。

彌源　やあ、妻を呼び出し尋ねよとは、近頃もつて卑怯なり。

作作　所謂緣者の證據ゆゑ、申譯には相成らぬぞ。

源七　はつ、

越前　其方他出いたさぬと申すが、慥に其の夜出逢うたる、此方には證人あるぞ。

源七　して、其の證人と申しまするは、

越前　只今呼出し突合さん。

彌源　それ、蕎麥賣仁八を呼出せ。

專平　はつ、（ト下手へ向ひ、）本所相生町四丁目九助店仁八出ませい。（ト下手にて、）

仁八　はあゝ。

ト下手より仁八やつしい裝、羽織袴の家主差添ひ出る、源七見てぎつくり思入。

越前　夜蕎麥賣仁八、

仁八　はつ、（ト辭儀をなす。）

越前　其方當月十三日の夜、深川閻魔堂橋にて、これなる源七に出逢ひしとな。

仁八　へい、出逢ましたとも〳〵、宵から二度出逢ひました。しかも四ツ少し過ぎに橋の袂へ荷をおろし、火をおこして居ります所へ一杯くれと言はれますゆゑ、直にこしらへて出しましたが、池月といふ伯樂の家は何處だと聞かれますから、此の裏町の斯ういふ所と、委しく教へてわたしくは其處等近所を一廻りまはつて、かれこれ四ツ半時分、又もや橋の參りますと其處等こゝ等が血だらけゆゑ、びつくりして四邊を見れば人が切られて居りましたが、死骸の側にござつたのは、此のお人でござります。

越前　然らば其の夜出逢ひしは、此の源七に相違ないか。

仁八　いゑもう相違ござりませぬとも、一晩に三度まで怖いと思つて見ました影、慥に覺えて居ります

る。
越前　して其の夜源七は、如何やうな裝をいたしをつたぞ。
仁八　はい、着物はしいかと存じませぬが、足駄がけで一本差し、よい蓑を着て居られました。
越前　こりや源七、斯ほど慥な證人あつても、他出せぬと其方申すか。
源七　これは全く人違ひ、廣い世界にござりますれば、顏容の似た者は、幾人となくござりませう。
仁八　もし〳〵、似た者と言はつしやるが、お前に似たは役者の仲藏、舞臺で人は殺しませうが、眞實に人を殺しませうか。
源七（仁八をきつと見て、）こりや夜蕎麥賣の仁八とやら、誰に手前は頼まれて、そんな言掛をおれにするのだ。
仁八　誰にわしが頼まれませう、お前ゆゑに呼出され、今夜で幾日生業を休んで居るか知れませぬ。
源七（これに構はず、）恐れながら、これなる仁八は、如何なる遺恨あつてのことか、申掛けをいたしますゆゑ、何卒御詮議下さりませ。
仁八　えゝ、何でわしが言掛けしませう。
專平　こりや〳〵仁八、爰を何と心得居る。

典藏　大岡侯の御前なるぞ。
家主　源七どのも控へさつしやれ。
專平典藏　仁八もぢつと控へ居れ。
仁八　でも、言掛けと申しますゆゑ。
彌源　其方言掛けならざるは、明白なれば爭はず、
伴作　溜りへ參つて控へ居よ。
仁八　はつ。（ト辭儀をなして下手へ入る。）
越前　こりや源七、何やう其方申すとも言譯は立たざるぞ、恐れ多くも台命を蒙り奉行職を勤むる越前、物に例はゞ汝が衣類、心直なる竪縞なるか、又邪なる横縞なるか、其の竪横が見分からでは善惡邪正は糺されぬぞ。
源七　はつ。
越前　いや、竪縞と申せば、そちが衣類、目馴れざる縞なるが、其方好んで織らせしか。
源七　これは、異なものがお目に止り、お尋ねでござりますが、これは則ち川越在に伯母が一人ござりますが、此の源七が着料にせよと手織になせし川越結城、それゆゑ縞も違ひ居りまする。

越前　然らば、そちが其の衣類は賣買にはあらざるな。
源七　手織のことゆゑ呉服店の賣物にはござりますまい。
越前　如何さま、これは外にあるまい。それ、かの品これへ。
作作　はつ、（卜下手襖の内より、直に誂への蓑を持ちいで來る。）
越前　その品見せい。
作作　こりや源七、これなる蓑に覺えあるか。
源七　え、（卜蓑を見て思入。）
越前　殺害なせし其の場所に脱ぎ捨てありし此の加賀蓑、こりや其方の所持であらうな。
源七　仰せではござりますが、左樣の蓑を所持せし覺え、わたくし毛頭ござりませぬ。
越前　默れ源七、汝如何ほど僞るとも、今着用の其の衣類と同じ布なる蓑の肩當。
　　卜肩當の布を見せる。
源七　や、
越前　これでも所持でないと申すか。
源七　さあ、それは、

越前　賣買になき手織縞、これなる蓑の肩當と同じ縞なる其の衣類、今日着用いたせしは、これぞ脱れぬ天の網、閻魔堂橋に於て髮結新三を、殺害なせしは汝であらうが、恐れ入つたか。

源七　むゝ、

越前　いやさ、恐れ入つたであらうがな。（トきつと云ふ、源七思入あつて）

源七　いえ、恐れ入りませぬ。

越前　何と申す。

源七　それなる蓑の肩當は、手織木綿に丈もあり、仕立屋よりのろくぎれを求めし者が附けましたか、わたくし蓑を所持いたさねば、附し覺えはござりませぬ。

越前　こりや源七、其方事は近年にて喧嘩口論へ立入り、男を硏くものと聞きしが、さりとては卑怯な奴、斯かる慥かな證據あるに、存ぜぬ知らぬと申すに於ては、拷問なして白狀さゝうか。

源七　はつ。

專平　そちも男を賣るものなれば、

典藏　潔よく白狀いたせ、

源七　何やう仰せござりますとも、身に覺えなき人殺し、申し上げやうがござりませぬ。

越前　やあ憎い奴、繩打て、
兩人　はつ、
　　　ト兩人立ちかゝる。とばた〳〵になり、花道より絹羽織袴股立ち一本差しの侍走り出來り、
〇　はつ、申し上げます。
越前　何事ぢや。
〇　はつ、深川閻魔堂橋人殺し一件に就き、忠七と申すもの申し上げ度きことありと、訴へ所へ駈込みて、達つて願ひ居りまするが、如何取計ひませう。
越前　むゝ、人殺し一件とあらば、直樣これへ、
〇　はつ、（ト侍は引返して入る。）
越前　源七が繩、しばらく待て。
典藏　はつ、（ト花道の方へ向ひ。）訴へ人忠七、これへ出ませい。（ト花道の揚幕にて、）
忠七　はあゝ。（ト合方になり、花道の揚幕より忠七、以前の侍附添ひ出來り、直に舞臺へ來り。）
〇　下に居らう。（ト引すゑろ、源七忠七と顏を見合せ。）
源七　や、こなたは、

忠七　あこれ、(ト手を突き辭儀をなし、)訴へ人忠七、罷り出ましてござりまする。

彌源　深川閻魔堂橋人殺し一件に就き、

伴作　御訴への筋これあるよしにて忠七とは、其方なるか。

忠七　はつ、左樣にござりまする。

越前　(思入あつて、)こりや忠七、面を上げい。

忠七　はつ、(ト忠七顏を上げる。)

越前　其方は、何處の者ぢや。

忠七　へい、わたくし事は、(ト言ひ兼ねる、)

專平　御前なるぞ、

典藏　有體に申せ。

忠七　元わたくし事は、新材木町白子屋庄三郎後家つね方に奉公いたせし、忠七と申す者、

越前　すりや、白子屋の手代の者か、して訴への趣きは、

忠七　御訴への趣きは、閻魔堂橋にて新三を殺しましたは、此の忠七にござりまする。

皆々　や、(ト心得ぬ思入。)

忠七　源七どのではござりませぬ、此の忠七にござりますから、人殺しの御刑罪にどうぞなされて下さりませ。
越前　自ら訴へ出たるは神妙なることながら、なんの遺恨で白子屋の手代のそちが殺害せしぞ。
忠七　新三を殺害いたしました遺恨と申すは私が、若氣のいたりに主人の娘お熊どのと密通なし、末は女夫と存ぜしに、俄に聟の來ると聞き如何はせんと思ふ折から、新三の勸めをまことゝ思ひ、兩人納得に家出なし彼を頼みに參りし所、永代橋にて娘を奪ひ、おのが密通なせしやうに言掛けなしてうち打擲、つひに其の場を逃失せたれど家をばしいかと知らざるゆゑ、永代橋から身を投げて死なうと覺悟いたせしを、（ト源七へ思入あつて、）さるお人に助けられ、厚いお世話になつたるはさあ、あつい涙のこぼれる程、打たれた時の悔しさが寐ても覺めても忘られず、閻魔堂橋におきまして、新三を殺しましてござります。
越前　むゝ、新三はお熊が遺恨によつて、殺害せしと申すか。
忠七　はつ、御意の通りにござりまする。
越前　して忠七には、其の折に蓑を着用いたせしか。
忠七　いえ〳〵蓑を持ちませねば、着て參りはいたしませぬ。

越前　閻魔堂橋にて髪結新三を殺害なせし其の處に、脱ぎ捨てありし證據の加賀蓑、着用せぬとあるからは、殺害せしは僞りなるぞ。

忠七　いえ〳〵、僞りではござりませぬ。

越前　（思入あつて、）かねて白子屋一件に就き、娘熊と密通せし其方ゆゑに先達てより竊に身分を探索せしに、娘熊を連れ出せし同夜新三に永代橋にて打擲に逢ひ、取逆上せ入水なさんと致せしをこれなる源七に助けられ、其の後彼が世話になり北新堀吉五郎方に當時同居いたす由、然るに今日其方が當役所へ駈込みしは、一旦命を助けられし恩義を思ひ、源七が人殺しの罪を負ひ訴へ出しに相違あるまい。

忠七　いや、全くさうでは、

越前　恩義を忘れず罪を負ひしは神妙とは申しながら、人殺しと僞るは上へ對して不屆きなれば、達てと申さば其方も、其の分にはいたさぬぞ。（トきつと言ふ。）

忠七　はつ、恐れ入つたる其の仰せ、斯く御探索のある上は申し上げやうもござりませぬ、新三に遺恨ござりますゆゑ、源七どのへ疑ひのかゝりまするも、わたくしがお熊どのと密通せしゆゑ元の起りは皆忠七、何卒わたくしを人殺しの御刑罪になし下され、源七どのゝ身の上をお許しなされて

下さりませ。

越前　假令何やう願ふとも人代りにて其の罪を許すことなり難し、拷問なしても白狀させ、源七を其の刑に行はねば天下の政治は立難し、又其方も一命を助けられたる恩を思はゞ、後に殘りし妻子の者の力となつて恩を返せ。

忠七　すりや、どうあつても身代りの、

彌源　願ひは叶はぬ、

專平
典藏　立ちませい。

忠七　はあゝ。（ト本意なき思入。源七こなしあつて）

源七　恩を忘れぬ志し、忠七どの、忝けない。

忠七　何ぞ家へ言傳でも、

源七　心にかゝるは忰のみ、（ト思入あつて）別に用はござりませぬ。

忠七　そんなら、このまゝ、

皆々　立ちませい。（トきつと言ふ。）

忠七　はつ、

ト辭儀をなす、訛への合方になり、忠七思入あつて以前の侍附き花道へ入る、源七後を見送りちつ
と思入。

越前　こりや源七、そちが罪を身に引受け訴へ出でし忠七は、未だ廿三四の若者、年に似合ぬ健氣な心底、それに引替へ其方は五十餘歳の身を以て、斯かる證據のあることを存ぜぬ知らぬと申し切るは其の及ばぬを知らぬ愚さ、なぜ有體に申さぬのだ。

源七　恐れながら有體に申せば、知らぬといふよりほか、申し上げやうがござりませぬ。

越前　返す〴〵も憎き返答、恐れ入つたと申すまで、吟味中入牢申し附くるぞ。

源七　はつ、承知いたしてござりまする。

彌源　それ源七に繩掛けめされ。

專平 典藏　はつ、（ト兩人立ち掛り源七に繩を掛る。）

越前　暫く溜りへ引すゑおけ。

典藏　はつ、畏つてござりまする。

專平　町役人共は、勝手に引き取れ。

三人　はあゝ。

源七（思入あつて、）此の世の地獄といふけれど、金づくよりも顔づくに足を伸してゆつくりと、どれ物相の馳走にならうか。

專平
典藏　それ、立ちませい。

ト時の太鼓になり、源七先きに侍繩を取り、上手濳りの内へ入る。家主五人組は下手へ入る、件作差出しを見て、

件作　新材木町白子屋一件のもの、呼び出しめされ。

典藏　はつ、（ト下手へ向ひ、）新材木町家持庄三郎後家常、娘熊、同町杢右衞門店善八、一同出ませい。

ト下手にて、

皆々　はあゝ。

ト誂への合方になり、下手よりお常着流し前帶、お熊振袖、以前の善八、家主羽織袴にて附添ひ出來り、下手へ控へ、手を突き辭儀をなす。

彌源　新材木町家持庄三郎後家常、

お常　はつ、

彌源　同じく娘熊、

お熊　はつ、
作作　同所杢右衛門店善八、
善八　はつ、
作作　その外町役人共一同揃ひしか。
皆々　はつ、（ト皆々辭儀をなす。越前守思入あつて、）
越前　こりや庄三郎後家常、
お常　はつ、
越前　その方娘熊へ聟入なせし又四郎を、殺害に及びしは、下女菊が仕業ぢやな。
お常　はつ、仰せの通り又四郎を怪我とはいへど殺害せしは、下女菊にござりまする。
越前　菊の伯父善八、それに相違ないな。
善八　仔細あつて入聟の又四郎どのがお熊さまを殺さうといたせしゆゑ、大事のお主を殺させまいと姪のお菊が留めるはずみ、ついあやまつて又四郎殿の脇腹へぐつと突込み、急所の深手に敢ない最期、怪我とはいへど主殺しの申し譯に、其の場を去らず自害いたしてござりまする。
越前　先達て檢使の者、右の趣き取調べ言上に及びしゆゑ、正しく主人の爲めとはいへど殺害せしも主

人ゆゑ、菊が死骸落着まで假埋申し附けたるが、今日再び取調べ、前條申し口に相違なくば、それ〳〵處置を申し附けん。
お常　又四郎殿が娘をば殺害せんと致せしも、まつたくこれも酒興の上、
善八　又姪のお菊が、留めるはずみ聟殿を殺しましたも、お主を大事と思ふゆゑ、
お常　何卒お慈悲の御沙汰をば、
善八　お願ひ申し。
兩人　上げまする。
越前　娘熊を助けんと聟又四郎を害せしは、女の事ゆゑ尤もなれど、主に男女の差別はない、其の身も共に死するとも主殺しの名は脱れぬぞ。
お常　すりや、菊は自害いたしましても、主殺しになりますとか。
善八　そりや情ないお上の御沙汰、双方死んだら五分と五分、損得もありますまいに。
彌源　默れ善八、御前へ向つて失敬至極、
伴作　上のお慈悲を知らずして、詞を返さば許さぬぞ。（トきつと言ふ。善八びつくりして、）
善八　へい〳〵まつぴら御免下さりませ。（ト手を突きあやまる。）

越前　愚昧なる料簡に左様思ふは無理ならねど、存命ならば菊事は磔の刑に行はねばならぬ、其の儘に
いたしおくは自殺いたせしゆゑなるぞ。

善八　そんなら達者でをりますれば、

專平　申さずとても、

典藏　磔なるわ。

善八　主殺しの名は脱れませぬか。

ト善八涙を拭ふ、お熊ぢつと思入あつて、越前守に向ひ、

お熊　憚りながら申し上げまする。

越前　おゝ、何事ぢや、

お熊　聟又四郎殿を殺しましたは、菊が業ではござりませぬ。

越前　して、何者が殺せしぞ。

お熊　はい、私でござりまする。

善八　あゝこれ申し、お熊さま、めつたな事をおつしやりますな。（ト善八留める。）

お熊　いえ〳〵、わたくしが殺しました。菊が科ではござりませぬ。

お當　これ〳〵お熊、それでは折角命を捨てた、

善八　姪が心も水の泡、犬死になりまするぞ。

お熊（思入あつて、）假令犬死になればとて、主殺しの名をきせられうぞ。（ト合方きつぱりとなり、）此の身の不義をわたくしから申し上ぐるも恥かしけれど、二世を契りし忠七と添はれぬ義理に自害して死なうとせしを又四郎殿が、止むる刃をあやまつて思はず知らず脇腹へ突込みましたは私にて菊が仕業ぢやござりませぬ、五ツの年より母樣が手しほに掛けてお育てなされし、恩を思うて自害なし、我が身の罪を引受けて死んでくれたは嬉しいけれど、何科もない菊が身に主殺しの名を取らせなば、冥土の親が母さまや善八どのを恨みませう、それゆゑ犬死さすとても主殺しの名は附けられませぬ、菊と替つて私は不義をいたせし科ある身の上、親に背けば誰にでも斯ういふ事に成行くと、後々人の手本になるやう、亭主殺しのお仕置に、どうぞなされて下さりませ。

トお熊よろしく思入あつて言ふ。此の內越前守は扇を突き居睡りせし思入あつて、

越前　今朝未明の出仕にて七ツ起きをいたせしゆゑか、思はず睡りを催して、熊が申す事さへも現のやうに聞きたるゆゑ、朧々に前後を分たず聞き違へか知れざれど、聟又四郎を害せしやうに我が耳へは入つたるが、亭主を害せば主人同樣、やはり磔の刑罪なるぞ、年端も行かぬ其方ゆゑうろた

お熊　へた事申すな。(ト思入にて言ふ。)

お熊　假令如何なるお仕置になりませうとも、科もない菊に罪は被せられませぬ、亭主殺しにわたくしをどうぞなされて下さりませ、又私を助けようと命を捨てし菊が親切、これも人の手本ゆゑ譽めてやつて下さりませ。

越前　扨は現に聞きたるが、聟又四郎を其方が、まこと殺害いたせしとか。

お熊　何僞りを申しませう、それに相違ござりませぬ。

お常　そんなら、そなたは覺悟して、

善八　お仕置になるお心なるか。

お熊　何の御恩も送らずに、先立ちまする不孝の罪、母さまへは濟みませぬがお許しなされて下さりませ。

お常　ても、情ないことぢやなあ、(トお常泣伏す。)

越前　一旦親の目を掠め、不義を致せし先非を悔い死刑を願ふ志し、脇につるゝ蓬とて五歳よりして白子屋の養育受けし恩を忘れず、主人の罪を身に引受け自殺なしたる菊が忠節、然るに科なき其の者に主殺しの名を負はせては、冥土の親に濟まざるとて人に其の身の罪を讓らず、我と我が手に

亭主殺しの仕置を願ふは健氣なり、菊といひ熊といひ男子も及ばぬ二人の心底　實に勸懲　の端ともなれば、此の趣きを進達なし、寛仁の御沙汰願うてやるぞ。

お常　すりや、娘と菊が健氣なる心を不便と思召し、

善八　お慈悲を願うて下さりますとか、

お熊　冥加に餘る御情、

三人　えゝ、有難うござりまする。

ト三人よろしく思入、此の時上手の潛りより以前の源七に侍附き出來り、前へ出て、

源七　恐れながら申し上げます。

越前　おゝ、何事なるぞ。

源七　只今溜りになりましてお熊どのゝ申し口、二十歳を越さぬ者さへも斯かる心のあるものを、五十を越せし源七が上へ御苦勞掛し段、恥入りましてござりまする。

越前　すりや其方も先非を悔い、殺害なせしと白狀なすか。

源七　はつ、脱れるだけはと僞つて命を惜しみし此の源七、面目次第もござりませぬ、如何にも御前のお眼識通り遺恨によつて新三めは、閻魔堂橋に於てわたくしが殺害いたしてござりまする。

越前　すりや髪結新三は、其方が殺害なせしに相違ないか。

源七　證據に殘りし加賀簑に、横にはならぬ竪縞の、直なる御吟味もどきしは源七めが身の大罪、恐れ入つてござりまする。

善八　源七どのゝ人殺しも元はといへば善八が、お熊さまの取戻しをお賴み申したばつかりに、あたら命を捨てさせまして、申し譯もござりませぬ。

お常　その代りには跡々は家にかへてもわたくしが、お上さんや子供衆のお世話はきつといたしまする。

源七　女房は兎もあれ、頑是ない金太が身の上賴みます。

お常　必ず氣遣ひなされまするな。

越前　（きつとなり、）斷く白狀に及びし上は、源七は入牢申し附くるぞ。

源七　はつ、

越前　まつた、熊事は殊の外取り逆上居る樣子、養生の爲め來る二月まで、母常へ預け遣はす。

お熊　すりや、わたくしを母さまへ、

お常　お預けなされて下さりまするか。

善八　して二月までとおつしやりますは、

越前　来る正月廿四日は御年回の大法會、たとへ如何なる罪科たりとも非常の大赦行はれ、罪一等御赦免なるぞ。
善八　さうなる時には、
お常　娘も無事に、
お熊　えゝ有難うござりまする。
源七　流石は名代の大岡侯、
善八　イヨ、日本一の御奉行さま、（ト立ち上り手を叩いて踊る。）
彌源作　無禮者めが、
善八　はつ、（ト下に居る。）
越前　双方共に、（トずつと立つを木の頭。）立ちませい。
四人　はあゝ。
ト時の太鼓になり、お熊、お常、善八手を合せて拜む、源七は是非なき思入。皆々引張りよろしく、
ひやうし幕

髪結新三（終り）

御贔屓之投書基
初狂言之世界則

享保年間聞書草紙

抑々事の發端はお三婆の身の素性聞て忽ち心も替り降積む雪と墨附短刀盗み取たる法澤がお霜が戀に踏迷ふ感應院を毒害なし加田の浦にて犬の血を衣類に塗りて我跡を隱せし四國の大難も運よく助かる美濃の國赤川藤井を初として常學院に一味の會合計り果せし御落胤も黑白分くる奉行職川鳥に掛る閉門を拔る妙手に水府公の助言に御免の再吟味は是山内が網代問答思はぬ不覺に平石吉田が紀州調べも名主が記憶に屆きし事も白木の小四方奥右殿も諸共に今日忠佐が切腹と覺悟極めし主命に退れ刀も拔兼し介錯人の大助があせる所へ兩士のかけつけ天網遁れぬ蜘の巢絞りの繻袢と下男の久助に賊徒を伏罪させたるは越前侯が一世のほまれ二世に續きし伯山子の講釋

眞魁立讀天一坊

扇音々大岡政談

「大岡政談天一坊」は明治八年一月、新富座に稿下された、作者六十歳の時である。この作に關しては「續々歌舞伎年代記」に種々の消息が傳へられてゐる。「神田伯山が得意の讀物天一坊を實錄體に書きおろしたる近來の好狂言、薪水（彦三郎）の大岡ははまり役にて少しの申し分もなく、菊五郎の天一、治右衞門も間然なく、取分け左團次の伊賀之亮大岡と例の網代問答は非常の大受けなりき、不淨門も大好評。翫雀の綱條出來よく、純子の釣夜着を用ゐたるを見て見物大いに驚きしといふ。」と。又彦三郎が兎角翫雀を引上げようとして、作者が菊五郎を意中において執筆した池田大助を翫雀に讓らしめ、又彦三郎が左團次の伊賀之亮のセリフを省略せしめんとした橫暴を見て、作者が大いに立腹し其主張を取消さしたことも傳へられてゐる。

書きおろしの時の役割は坂東彦三郎 大岡越前守、名主平野甚右衞門）、尾上菊五郎（法澤、天一坊、平石治右衞門）、市川左團次（山内伊賀之亮、吉田三五郎）、中村翫雀（下男久助、水府綱條公、池田大助）、中村仲太郎（感應院、お三婆、赤川大膳、嵐大三郎（大岡の奧方小澤、甚右衞門妻おつね）、坂東しう調（下女お霜）、市川子團次（藤井左京、山野邊主稅）、中村喜世三郎（伊賀之亮妻おさみ）、坂東喜知六（田舍後家お民）、大谷門藏（常樂院天忠）、尾上菊四郎（お霜親作兵衞）等であつた。

挿繪にしたのは、守川周重筆の錦繪である。

大正十五年一月　　校訂者

序幕

平野村感應院の場
平野村お三殺の場

〔役名――感應院弟子法澤、名主平野甚右衞門、下男久助、修験者感應院、百姓田吾作、同久根八、一お霜親作兵衛、百姓畑六。隣家の後家お民、同下女お霜、平澤村お三婆あ。〕

（感應院の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面に中敷居の戸棚、眞中納戸口、上手一間の小高き床の間、是れに注連を張り、眞中に御幣を立て、御鏡、榊、その外いろ〳〵の供物を供へ、上手一間の障子屋體、いつもの所門口、感應院と記したる札を掛け、此の下手一間の屋根附の物置、總て平野村感應院住居の體、爰に○△□の百姓三人着流し百姓のなり、お民半纏前掛け、後家のこしらへ、めいめい膳に向ひ酒盛りをした居る見得、さんげ〳〵に大拍子を冠せ、賑かに幕明く。

○　ときにお民さん、是れはお前に思ひざしとしませうよ。（ト猪口をさす。）

お民　おやまあ、嬉しいねえ。

△　もし畑七さん、今朝から聞えるが、

□　あの囃子は何處だらう。

お民　あれかえ。ありやあ後の妙見樣で、今日お神樂があるのさ。

△　それぢやあ今日は妙見樣の、

△□　御緣日かね。

お民　なあに、今日は冬至で、星祭りに御祈禱をする神樂さ。

○　道理でさつき内の表へ一文獅子が來たと思つた、丁度今日は幸ひだ、來年の星は白いか黑いか、歸りに參つて行きませう。

お民　こちらの内でも、村の衆をお呼びなされてお强飯を御馳走なさるのも、やつぱり冬至のお祝ひだらう。

△　いや〳〵今日はさうでない、今日にいゝ、しが所へ話しには内弟子の法澤どのゝ今日は慥に誕生日ゆゑ赤飯を炊いて、此のやうに村の衆へ振舞をさつしやるのさ。

□　よく世間でいふことだが、師匠といへば親も同然、又弟子といへば子も同然と、譬には言ふものの、爰の感應院樣ぐらゐ法澤どのゝ世話を、萬事さつしやるお方は外にはあるまい。

お民　そりやあお前の言ふ通り、まるで自分の子のやうだが、さうして法澤どのは、何處の子でございますえ。

○　さあ、わしも委しい事は知らぬが、此間も話しに聞きやあ、法澤どのゝ親御といふは、元長州の浪人で原田嘉傳治といふ人が、僅かな知邊に感應院に厄介になられて居た所、つい片町の醫者の娘が兩親に死に別れ一人で暮らすと聞き、定めて困るであらうと、根が世話好きな感應院さま、嘉傳治どのを聟に遣り夫婦中も睦じく、いつの間にか子が出來て、然も生れた其時は、あゝ、何とかいふ年であつた。

△　それ〳〵忘れもせぬ、寶永二年十一月十一日卯の刻の誕生で、玉のやうな男の子ゆゑ玉之助と名を附けての悦び、その甲斐もなく醫者の娘は、産後の惱みに此世を去り、嘉傳治が貰ひ乳で七つまで育てたところ、是れも傷寒で目出度くなり、それから跡は身寄りもなく、

□　感應院さまが内へ引取り、法澤と名を替へて御弟子となされて育てるうちも、誕生日には毎年斯うして祝つて遣らしやります。

○　何とまあ、御親切なことでは、

三人　ござらぬかいなう。

お民　それで樣子が分りました。あゝまゝにならぬ浮世の習ひ、わたしも今年で六年あと、連合に別れた後は、いつそ浮世を樂々と暮した方がよからうと、斯うして後家では居るものゝ、法澤さまを見るに附け、いつそ亭主のある時に、せめて一人も子があつたら、あゝいふいゝ子の出來ようとそれを思ふとわしの田地は、餘程地面が惡いか知らん。

○　地面が惡いでお仕合せ、首尾よく子種が留つた時は、やつぱり親の讓り物、お物に似たらしいいゝ種だね。

△　それよりいつそ田地を荒して、子供の苦勞をせぬが、却つて其身の、

三人　爲でござるわえ。（ト是れにてお民むつとこなしあつて、）

お民　そりやあ大きに憚りさまでござります。二言目には顏の讒奏、それよりお前は御馳走の赤の飯と睨めくらをするがいゝわね。

○　いや、際どい所で敵を取られた。

皆々　はゝゝゝゝ。（ト皆々捨ぜりふにて酒盛りをする。やはり右の鳴物にて、飛脚一人出來り門口にて、）

飛脚　へい、御免なされませ、平野村感應院さまの御宅は、こちらでござりまするか。

お民　はい、こちらでござります、何御用でござりますな。（ト言ひながら下手門口へ來る。）

飛脚　左様でござりまするか、御宅に久助どのといふ、奉公人の方がござりまするか。
お民　はい、久助どのは、こちらに居りまするが。
飛脚　左様なら、此の手紙を上げて下さりませ。
お民　今使ひに行きましたから、歸つたら屆けませう。
飛脚　どうぞお賴み申します。

ト飛脚下手へはひる、奥より修驗者感應院、散髮着流し、法印のなりにて、煙草盆を提げ出來り、

感應　これは〳〵皆の衆、今日はようこそ來て下された、何はなくともゆるりと祝つて下され。

ト皆々よろしく居並ぶ。

お民　まだ旦那さんへ、碌々御挨拶もいたしませぬが、お霜どんのお世話さまで、
○　先程から御遠慮なしに、
△　澤山頂戴いたしました。
□　こんな目出度いことはござりませぬ。（ト皆々禮をいふ。）それはさうと先程から、法澤どのが見えませぬが、産神へでも參られましたか。
感應　いや、日頃法澤が世話になる、隣村のお三婆あの所へ、今日誕生にこしらへた酒と肴を持たして

遣りました。

お民　あの婆さんは酒好きゆゑ、嘸悦ぶでござりませう。それに使ひに行つた法澤どのを、我子のやうに可愛がるゆゑ、あなたのお志しは何よりでござります。

感應　それに今日は、朝から雪が大分積つて居るから、寒さが格別強いゆゑ、酒でなければ凌がれませぬ。

ト言ひながら感應院徳利を持つて、

お、酒の燗がぬるくなつた。これお霜や、お燗のいゝのを持つて來な。（ト此時奥にて

お霜　はい〳〵。（トやはり右の鳴物にて、奥よりお霜着流し前掛け、下女のなりにて徳利を持ち出で、）どなたも、お燗が直りました。お熱い所をお一つお上りなされませ。

○　これはお霜どの、今日はいろ〳〵お骨折で、お前の御酌では又格別に呑めまする。（ト杯を取る、お霜酌をする、呑干して、）お民さん、一つさし上げませう。

お民　これは頂戴、若い者中とは、どうでござります。

□　いや、祭の幸先に、頂戴若い者中とは、なか〳〵話せるわえ。

△　何ぞ祝ひに、目出度い洒落を頼みます。

○ いや、お祝ひといへば、がらりと忘れてしまつた、法澤どのゝ誕生のお祝ひに、心ばかりの送り物、お民さんさつきの包みを。

お民　あい〳〵。(ト後より風呂敷包みを出し、)これは粗相な物なれど、わざと今日のお祝ひに、法澤どのに進ぜようと、畑七どのともやひで持つて參りました。

ト風呂敷を明けて、蜘蛛の巣絞りの襦袢を出す、感應院見て、

感應　是れは何よりの品、殊に珍らしい柄ぢやが、たしか此事を蜘蛛の巣絞りと申すのぢやな。

お霜　ほんに珍らしい襦袢の形、法澤どのが歸られましたら、嘸悦ぶでござりませう。

△ わしも何ぞと思うたが何を買ふにも村のことゆゑ、丁度内に有合せの富士講の土産に貰うた濱松染の小風呂敷、心ばかりに法澤どのへ、どうぞ是れを遣つて下され。

ト百姓△懐より誂への小風呂敷を出す。

□ わしも此春江戸へ行つた時、國へ土産に買つて來た、江戸染の此の手拭、これを進ぜて下さりませ。

ト百姓□同じく誂への手拭を出す。感應院取つて、

感應　いや決して御心配下さるな、斯う皆の衆に世話になつては、却つてお氣の毒でござりまする、然

し折角の志し、これは納めておきませう。(ト感應院脇へ片付ける。)

お霜　さあお燗のよい所を、最うお一つお上りなされませ。(トお霜〇に猪口をさす。)

〇　もう先程から、大分頂戴し

お民　おつと、若い者はいけないよ。

〇　いや、こいつァ困つた。あゝ頂戴元くらしとはどうでござります。

感應　いや、なか〳〵これは秀逸でござる。

ト皆々酒盛りになる、お霜の親作兵衞、袖なし半纏寠しなり、少し更けたるこしらへにて出來り、花道にて、

作兵　考へ事をしながら來たら、何時の間にやらもう爰は平野村、向うの家は娘のお世話になる、感應院様のお家だが、是れから行つて旦那さまに、委しい話しをせねばならぬ。あゝ言ひ出しにくい事ぢやなあ。(ト思入あつて舞臺へ來り、)眞平、御免下さりませ。(ト門口を明ける、感應院見て、)

感應　おゝ誰かと思つたら、お霜の親の作兵衞どの、よい所へ來なされた、まあこつちへ。

作兵　へい、有難う存じますが、あんまり善い事で上りもいたしませぬ。

お霜　もしとゝさん、さうして何しにござんしたえ。

作兵　さあ、ちと折入つて旦那さまへ、お願ひがあつて出掛けて來たのぢや。

感應　まあ、こつちへはひつたがよい。

作兵　左樣なれば、御免なされませ。

ト作兵衞内へはひり、下手へ住ふ。此のうちお民殘りの肴を丼へ入れる。三人顏見合せ思入あつて、）

○　いや、先程から、大層御馳走になりました。

△　こちらは滿腹いたしました。

□　何れ又お禮に上ります。

お民　もう是れで、お暇いたしませう。

感應　まあゆつくりして行かつしやれ、丁度燗のよい所で、最う一杯呑んで行かつしやれ。

○　どうして〳〵、此の上に呑んだ日にやあ、

△　表へ出ても、

三人　歩かれませぬ。（ト四人門口へ出て、）

お民　お霜さん、わたしは殘りのお煮染をお貰ひ申して參りますから、此の丼を貸して下さい、今夜は内でしつぽりとお芋の煮ころがしと差向ひ、ほんにこちらの旦那さんは、行屆いたお方だねえ。

（ト以前の手紙を出し。）此の手紙が屆いたから、歸つたら渡して下さんせ。
お霜　それはお世話さまでござりました。（トお霜受取りて帶の間へ挾む。）
お民　左樣なれば。
四人　感應院さま。
感應　おゝ、皆の衆、
○　大きに馳走に、
四人　なりました。（ト捨ぜりふにて皆々下手へはひる。感應院思入あつて、）
感應　やれ〳〵騷々しい人達だ、まるで大風の吹いた跡のやうぢや、いやなに作兵衞どの、大きに失禮いたしました、さあ〳〵こちらへ。
作兵　へい〳〵、有難うござります、疾から娘がお世話になりまする、御禮に上ります筈なれど、何を申すも其日に追はれ、思はぬ御無沙汰いたしました、どうぞ御免下さりませ。
感應　いや〳〵決して其心配には及ばぬこと、男世帶の家ゆゑ、臺所から縫仕事、何から何までお霜の世話、禮はこつちから言はねばならぬ、必ず案じさつしやるな。
お霜　とゝさん、旦那さまへ御願ひがあると言はしやんすが、何でござんすえ。

ト作兵衞これにて思入あつて、

作兵　さあ外の事でもなけれど、折入つて旦那さまに助けてお貰ひ申し度く、態々お願ひに上りました。

感應　そりやもうお前の事ゆゑに、わしが力に及ぶ事なら、何なりとも聞いて進ぜませう。

作兵　すりやあの、お聞届け下さりますとか。あゝ有難うござりまする。

感應　然し話しは跡にして、今日は法澤の誕生日ゆゑ、親父に赤の飯でも上げぬかえ。

お霜　はい。（ト言ひかけるを、）

作兵　あいや、有難うはござりますけれど、御膳も喉へは通りませぬ。

感應　なに、飯も喉へは通らぬとは。

お霜　そりや何故でござんすぞえ。

作兵　さあ、其譯と申すは、旦那さま、斯うでござりまする。（ト誂への合方になり、）あなた様の御存じの通り、先祖代々から私まで續いて來た百姓で、以前は田地も四五反あつて何不自由なく暮しましたが、女房が死んで引續き不仕合せが重なりまして、來る年毎に一反づゝ田地も切賣りに賣代なして、今では僅か一反ばかり、それさへ質に入れまして二人の口が暮しかね、譬に申す水呑百姓、詮方なく〳〵娘をばあなた様へ上げまして、一人で骨を折りましても、なか〳〵當時の世の

中は容易な事では渡り兼ね、質入した利息は溜り、此間も質屋から田地を渡すか金を渡すか、どちらなりと極りを附けろと、度々參る催促も今日の明日のと延べておきましたが、もうさう〳〵は待たれぬゆゑ、今日中に金を入れねば代官所へ願つて出ると今朝から嚴しい催促、お恥しい事でござりますが、家にある物とては鍋釜に鍬鎌があるばかり、最早春に間もなく、お忙しい年の暮、心ないやうでござりまするが、どうか娘にお暇をお願ひ申したうござります。

ト作兵衞思入あつていふ、お霜はうつ向いて居る、感應院此うち思入あつて、

感應　そりやもう暇をくれろといふ事なら、遣るまいものでもなけれども、今もおぬしが言ふ通り、一人でさへも喰ひ兼る貧乏暮しの其中へ、口が殖えたら困るだらうに。

お霜　もしとゝさん、何で俄にお暇を願ひ、わたしを内へ呼ばしやんすえ。

作兵　さあ、先祖からの位牌所を潰すのが殘念ゆゑ、背に腹は替られず、幸ひわしが懇意にした大阪に知邊があれば、遊女町へそなたを預け金を借り、質に入れた田地をば一先片を附けぬ時は、年來居馴れた此國に住居して居ること出來ず、年取つた此親が路頭に迷はにやならぬゆゑ、いやであらうがこれお霜、そちに暇が出た事なら、暫く大阪へ行つてくれ。これ娘、現在親が此の通り、手を合せて頼むわやい。（ト作兵衞愁ひのこなし、お霜術なき思入あつて、）

お霜　勿體ない其お詞、假令此身はどのやうな辛い勤めも厭はねど、御恩になつた御主人の、お家を下るが、わたしや辛うござんすわいなあ。（ト泣伏す。感應院聞いてこなしあつて、）

感應　成程段々樣子を聞けば、假令わしが困ればとて、暇を遣らずにもおかれぬが、世間知らずの此のお霜、遊女町へ遣るは不便。して其の金は、どの位あれば濟むのぢや。

作兵　へい、もと質に入れましたは三十兩、利息が段々溜りまして只今では丁度五十兩、年來懇意にいたしたゆゑ四十兩なら負けて遣らうと言つてくれるを幸ひに、四十兩で受戻し、又三十兩脇で借り、差し當つて十兩の金さへあれば、どうなり斯うなり、いつかのがれにのがれますが、十兩の金は扨置いて、一分の金も出來ぬ身の上、それゆゑ一人の娘をば遊女町へ遣らねばなりませぬ。

ト此時感應院不便だといふ思入あつて、

感應　さういふ事なら其の金を、わしが貸してやりませうから、先を濟ましてお霜をば、此儘奉公させて置くがよい。

作兵　えゝ、何とおつしやります、あの四十兩お貸しなされて下さりまするか。

兩人　えゝ、有難うござります。

ト兩人悦び禮をいふ、感應院戸棚より手文庫を取出し、其中より四十兩出して、

感應　作兵衛どの、四十兩を渡すから、少しも早く請戻し、安心をしたがよい。

作兵　あゝ思ひがけない此のお金で、路頭に迷はず助かります。又娘も遊女町の苦界の勤めをのがれまして、まことに親子二人とも、生き返つた心持でござります。

お霜　是れと申すも旦那樣の皆お情、お蔭でお家に居られまして、こんな有難い事はござりませぬ。

作兵　少しも早く此金を貸主へ渡しまして、御先祖さまに悅ばせませう。（ト下手へ行き、お霜に向ひ、）御恩返しには旦那さまの、御機嫌を損ねぬやうに、御奉公大切にせねばならぬぞ。

お霜　そりやあよう合點して居りますわいなあ。（ト此うち感應院門口へ思入あつて、）

感應　どうやら空の樣子では、晩には雪になりさうだ。暮れぬうちに作兵衛どの、早く歸るがよい。

作兵　有難うござりまする、お詞に隨ひまして、是れでお暇いたします。（ト辭儀をして門口へ出る。）

お霜　そんならとゝさん、體を大事に。

作兵　われも氣を附けて奉公しや。

お霜　わたしは安心しなんせ。

作兵　左樣なれば、旦那樣。

感應　隨分氣を附けて行かつしやれ。

作兵　有難うござりまする。（ト右の鳴物にて作兵衛花道へはひる。お霜跡を見送り、）

お霜　怪我せぬやうに行かしやんせ。あのまあ、嬉しさうに行くことわいなあ。

感應　親父は急いで行かれたか。

お霜　はい、嬉しさうにそは〳〵と、轉びでもせねばよいに。（トこちらへ來て兩手を突き、）親父が悦んで歸りましたも、皆旦那さまのお情、有難う存じまする。

感應　親父どのも不便、またそなたとて、金の代りに遊女町へ質にはひり、請戻しの出來ぬ其時は、否應なしに廓の勤め、多くの客を取らねばならぬ、それが如何にも不便ゆゑ、金を貸して遣つたのよ。

お霜　あなた樣のお蔭にて、親子の者が助かりまして、こんな有難い事はござりませぬ。

ト此時感應院思入あつて、

感應　そちや、それ程に嬉しいか。

お霜　嬉しうなうて何としませう。

感應　その恩返しを仕ようと思はゞ、これお霜、わしの言ふ事聞いてくれ。（ト寄り添ふ。）

お霜　えゝ。（トびつくりして飛びのき、）いつにない旦那さまの、御常談をなされまするな。

感應　いや、常談ではない、大眞實。

お霜　すりや、御常談ではござりませぬか。（ト呆れたるこなし。）

感應　はてまあ、こちらへ寄るがよいわえ。（トお霜を引附けなまめきし合方になり。）そのびつくりは尤もながら、去年おぬしが我が家へ奉公に來た其時から、一目見るより思ひを掛け、えゝもう二十年も若ければ、女房に貰はうと思つたなれど、年に恥ぢて今まで我慢をして居たが、今日といふ今日こらえ兼ね、斯う言ひ出した上からは、是非とも叶へて貰はねばならぬ。これお霜、言ふことを聞いてくれ、どうだ〳〵。

お霜　さあ賤しい此身を其様に、おつしやつて下さりまするは、有難うござりますれど、此事ばかりは旦那さま、御免なされて下さりませ。

感應　そりやもう年も半分違ふゆゑ、いやでもあらうが、そちもまた義理を思うて見たがよい、四十兩といふ金を、緣も由緣もない者に貸してやつたもそなたが目當、おれの詞に從へばまだ此上に何程でも、貢いでやるは心次第、嘘は決してつかぬ證據は、六根清淨に高間ケ原と神は見通し、親父が歸る其時に、御恩になつた御主人の、お心に背かぬやう奉公しろと言つたのは、こりや一心あつての事。さあ、久助や法澤の歸らぬうちに、言ふ事を早く聞いてくれといふに。

お霜　さあ其路頭に迷ふ父さまを、お助けなされて下さりまする、大恩のある旦那さま、そりやもうあなたに從ふことゝて、決して厭ひはいたしませぬが、明けてそれとは申されませぬ仔細があつて。

ト跡を言ひ兼るこなし、感應院こなしあつて、

感應　いや〳〵、たゞさうばかりでは思ひ切られぬ、かう〳〵いふ事があつて、從はれぬといふ事ならさつぱりと思ひ切らうが、其譯を話して聞かしや。

お霜　さあ、其譯と申しますは、どうも、是ればかりは、申されませぬ。

感應　言はずば、わしに從ふか。

お霜　さあそれは。

感應　其譯を話して聞かすか。

お霜　さあ、

感應　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

感應　これお霜、二つに一つの返事をしやれ。(トきつと言ふ、お霜ちつと思入あつて、)

お霜　何をお隱し申しませう、わたくしには言交した男がござります。
感應　え〻、なに、外に言交した男があるとか。
お霜　はい。(ト是れにて感應院せき込み、)
感應　して其男は、何處の誰ぢや。
お霜　さあ、其男は。
感應　む〻、其男は。
お霜　久助でござります。(ト顏を隱す。)
感應　なに久助、む〻。(トびつくりなし、よろしく悔しき思入にて、)え〻主人の目を拔き、憎い奴。お〻
よし〳〵、今から直に暇を出すゆゑ、彼がことは心に掛けず、わしが心に從やれ。
お霜　いえ〳〵、さうはなりませぬ。
感應　なに、ならぬとは。
お霜　さあ、不圖した事から言交し、末々夫婦にならうとまで約束をいたしましたれば、今更別れられ
ぬと申しまする譯は、旦那樣に從うて、奉公人の身の上ゆゑ今更緣を切りましては、どうも義理
が濟みませぬ、爰の道理を思召し、どうぞ御免なされて下さりませ。(ト感應院むつとして、)

感應　いよ〳〵そちが從はずば、親作兵衞に貸した金、是れから直に取戻し、親子共路頭に迷はしくれる。

ト立ちかゝるをお霜留めて、

お霜　お申し旦那さま、さうなつたらわたくしは、どうでも生きては居られませぬ、それぱかりはどうぞ御勘辨なされて下さりませ。

感應　そんなら、おれの言ふことを。

お霜　さあそれは。

感應　いやなら金を、取戻さうか。

お霜　さあ、

感應　さあ、

二人　さあ〳〵〳〵。

感應　おぬしの心一つで、親が路頭へ迷ふぞよ。

お霜　えゝ。

感應　さあ、それを不便に思ふなら、色よい返事をいたしてくりやれ。

お霜　はあゝゝゝ。（ト泣伏す。感應院思入あつて、）

感應　お霜返事をせぬか。これ程おれが譯をいふに、返事をせぬ上からは、可愛さ餘つて憎さが百倍、これから直に作兵衞に追附いて、今の金を取戻す。

ト つかつかと門口へ行くを、お霜すかさず留めるを振拂ふ、はずみにお霜脾腹を打ち、どうとなる感應院きつとなつて逸散に花道へはひる。お霜やうやうに起上り、四邊へ思入あつて、

お霜　今のお金を取戻されては、とゝさんが嘸お困りなされう、久助どのと二世までの約束をした上からは、御恩はあれど從はれず、とあつて苦界の勤めに出る時は、夜毎に替る客の數、女子の操を破らにやならず、とあつてとゝさんを、旦那樣に逢はしては親子の難儀、それそれ。（ト行かうとして脾腹の痛むこなし、）こりや、どうしたらよからうなあ。

ト泣伏す。さんげさんげに雪おろしをあしらひ、花道より久助、着流し股引尻からげ、札箱を提げ出來り、花道にて、

久助　今朝から催して居たが、とうとうちらちらやつて來た。かういふ日には朝から炬燵と相談する日だが、主と病にや勝たれぬと譬に言ふ通りだ。此雪が降るせるか、指の先が切れるやうだ。今夜はしつかり積るだらう。（ト舞臺へ來り門口から、）お霜どん、今歸つた。

ト此聲を聞き、お霜門を見て、

お霜　おゝ久助さん、歸らしやんしたか。(トあわてゝ久助に縋る。)

久助　あゝこれ。(ト押へて拇指を出し、)これは。

お霜　わたしの家まで、お出でなされました。

久助　それで落着いた。(トこなしあつて、)いや、留守を附込んでいふではないが、以前と違つて此頃は人遣ひが惡くなつて、此寒いのに今日に限り、お札配りに歩かせるとはあんまり察しがないといふもの。(ト此うちお霜うつ向いて、泣いて居るに久助目を附け、)これお霜どん、何を其のやうに泣いて居るのだ。

お霜　さあ、悲しい事が出來たゆゑ、それで泣くのでござんすわいなあ。

久助　なに、悲しい事とは。(ト合方になり、お霜こなしあつて、)

お霜　悲しいといふ譯は、最前とゝさんがござんして、旦那さまへ話しには、段々重なる不仕合せ所持の田地を質入して、今にも住居に困る程暮し兼ねたる身貧ゆゑ、わたしに苦界の勤めをさせ、田地を質受けいたしますから、暇をくれと達ての賴み、それは不便と旦那さまが、お金を貸してわたしの體を救つて下さる有難さ、嬉し悅びとゝさんは暇乞して歸つた後、わたしを捉へて旦那さ

まがお金を貸したる義理詰に、とやかうとおつしやるを、言ふ事聞かぬを無念に思ひ、今から行つて貸した金を取戻して、親子とも路頭に迷はせ困らせると、留めるも聞かず振拂ひ、急いでお出でなされたが、こりやどうしたらようござんせう。

ト愁ひのこなしにて言ふ、久助こなしあつて、

久助　ふとした縁で言交し、末々夫婦にならうとまで約束はしたものゝ、以前は武士の果てながら、今日暇になる時は、明日から何を仕ようといふ、元手の金の當もなく、又外々で奉公をするより外に仕樣もなく、いつその事緣のない昔と、是れまでの事は今日限り、旦那さまに從うて御新造さまになるがよい、さうさへおぬしがした事なら、親御も助かり又そなたも、苦界の勤めをせぬ事ゆゑ、双方無事に納まれば、こりやもういつそ思ひ切つたが、おぬしの爲になるであらう。

お霜　そりや情なうござんす、お前はわたしがいやになり、折がなあらばと思ふ所へ、これ幸ひに緣を切る料簡でござんせう。假令苦界の勤めをなし、親の難儀を救ふともお前と夫婦になりたいゆゑ、それが叶はぬ事ならば、いつその事に身を投げて、さうぢや。

ト門口へつか〳〵と行くを、久助留めて、

久助　あゝこれ、早まつたことをせまいぞや。

お霜　それぢやといふて。

久助　はてまあ、待てといふに。（トよろしく留めて宥める、此時お霜以前の手紙を落す。）

お霜　假令何と言はしやんしても、お前に縁を切られて見れば。

久助　さあ、切る心はさら〳〵なけれど、二人の身の爲思ふゆゑ、必ず短氣を出すまいぞ。（ト此時久助手紙に心附き、）やあ、此の手紙は。

お霜　そりや最前お前の所へ、飛脚屋さんが持つて來たを、隣りの内のお民さんが受取つて、わたしに屆けて行かしやんした。（ト久助上書を見て、）

久助　こりや國許から屆いた手紙、なに、急用としてあるからは。

お霜　大方情婦の所から、來た手紙でござんせう。

久助　なか〳〵そんな浮氣な。（ト言ひながら封を切り、讀下し、）扨は國に殘せしお袋が、大病ゆゑに暇を貰ひ、是非戾つて來てくれと、身寄りの者から委しい文通。

お霜　そんならお前の、母さんが。（ト手紙を取つて見て、）それではお前は、これから美濃へ。

久助　そなたとかういふ譯ある事を、旦那が御存じの上からは、暇の出るは知れたこと、かうなつたを幸ひに、國へ一遍行つて來よう。

お霜　お前が國へ行かしやんすなら、どうぞわたしもお前と一緒に、連れて行つて下さんせ。

久助　さあ常なら一緒に連れても行かうが、親御の難儀を知りながら、のめ〳〵連れて行かれもせまい。

お霜　そりやさうでもござんせうが、お前に爰で別れるなら、生きて居る氣はござんせぬ。

久助　それ程までに思ふもの、連れて行かぬも涙の種、丁度誰も居ぬこそ幸ひ、爰から直におぬしを連れて、國許へ出立するから、少しも早く支度しや。

お霜　そんなら連れて行つて下さんすか、えゝ嬉しうござんす。（ト此時久助考へることなしにて、）

久助　とはいふもののこれまでに、御恩になつた旦那樣。

お霜　濟まぬことゝはいひながら、互ひに切れぬ惡緣に、

久助　不孝の心は附きながら、

お霜　戀は思案の外とやら、

久助　互ひに積る胸のうち、

お霜　やがて心も白雪の、

久助　解けて流れて、

お霜　する〳〵は、
久助　昔語りに、
お霜　したいものぢやなあ。（トよろしく思入、此時雪おろし烈しく、久助門口を見て思入）
久助　あゝ、この大雪。
お霜　えゝ。（トお霜顔見合せ、以前の手紙を持つて、立ち上るを、道具替りの知せ、）
久助　行かねばならぬ。（トよろしく思入、雪おろし合方にて、此道具廻る。）

（お三婆ア住居の場）――本舞臺三間の間常足の二重、竹簀の本緣附、正面三尺の佛檀、下手膳棚、燗德利を載せ、所々破れかゝりし鼠壁、上手の棲半窓、前側くず屋根の欄間、よき所に澁紙包みを結び附けあり、二重眞中に圍爐裡、自在を掛け、これに罐子を掛け、下手一ツ竈、釜、臺所道具、薪割臺板を置き、上手屋根裏へ突張りにせし心にて、丸太を建て、はなぎれをかつてあり、いつもの所にくず屋根の竹簀戶、此脇に切破りの藪疊、舞臺花道とも雪布、總て平澤村お三婆ア住居の體。爰にお三婆ア袖なしのやつしなり、白髮鬘にて、圍爐裡の側に繩をなつて居る、門口に百姓一二、蓑笠、脚絆、草鞋、袖なし、やつし、百姓のなりにて鍬をかつぎ立ち掛り居る見得、雪おろし、隣柿の木の唄

にて道具留る。

一　婆アさん、雪の降るのに精が出ますなう。

お三　お〻新田の左十どんに、作兵衞どんか。

二　この寒いに仕事をせずと、好きな酒でも呑まつしやればよいに。

お三　其酒もこの雪で、又六の所まで買ひにも行かれず、ぢつとして居れば猶寒いゆゑ、干葉さす繩をなつて居ます。

兩人　いつもながら、達者な事ぢやなう。

お三　してこなた衆は、畑へでも行かつしやるのか。

一　いや〱わしらは仕事ではござらぬ、昨夜隣りの權左衞門親仁が死んで、今夜葬ひを出すといふゆゑ、たんと雪の降らぬ内、幸傳寺へ穴掘りに行くのさ。

お三　それは御苦勞でござる、まあ内へはひつて、一あたりあたつて行かつしやれ。

二　いや〱今ぬくまると、行くのがいやになりますから、歸りに寄つて馳走になりませう。

お三　そんなら、早く行つて來さつしやれ。

一　兎角近所に年寄は御免だ、今月になつてから、新家の後家に權左衞門親仁。

二　この次は婆アさんお前だ。
お三　此衆とした事が、今から死んでなるものか、鶴龜々々。
二　はゝゝ、婆アさんはかつぎ人だ、はゝゝゝ。
お三　いや擔ぎもせぬが、死んでしまつたら、好きな酒が呑まれぬわいなう。
一　そんなら婆アさん、歸りに一升提げて來ませう。
お三　おゝ早く行つてござれ、待つて居ますぞ。
兩人　どれ、小降りのうちに行つて來ませう。（ト右の鳴物にて兩人花道へはひる。お三跡を見送り、）
お三　あゝ若い者といふものは、この寒さも厭はず、雪の中をざく〳〵と踏んで行くが、年寄つては役に立たぬ。今夜感應院樣へ行けば、好きな酒な御馳走になられるが、此雪を見てはとても出られぬ。どれ〳〵酒の代りに、粗朶でもくべてあたゝまりませう。
ト圍爐裡へ粗朶をくべる、右の合方にて、花道より法澤、坊主鬘鼠の着附、下駄がけにて、風呂敷包みに德利を持ち、菅笠を冠り出來り、花道にて、
法澤　段々降りが強くなつて來た。もう下駄の齒が立たぬやうになつて來た、此雪ではお三婆アも嘸酒が呑みたからう、早く持つて行つて、悅ばしてやりませう。（ト門口へ來り、）婆アさん、内にござ

ろか。
お三　おい、誰だか明けてはひらつしやれ。
法澤　兩手がふさがつて居るから、明けて下され。
お三　さういふ聲は、法澤どのゝやうぢや。どれ〱、今明けてやりませう。（ト言ひながら下手へおり、門口の戸を明けて、）おゝ法澤どのか、此雪に嘸寒からう、よくござらしやつた。
法澤　婆アさん。まあ是れを取つて下され。
お三　あい〱。（ト德利と重箱の包みを受取り、）さあ〱、圍爐裡の側へ來てあたらしやれ。
法澤　あい〱。
ト法澤笠の雪を拂つたり、いろ〱雪を拂ふことあつて、二重へ上り火にあたる、お三德利を見て嬉しき思入。
お三　さあ〱、あたらつしやれ。こりや大分包みが濡れた。（ト捨ぜりふにて、風呂敷を解き、重箱を出し、）是れは爰に干しておきませう。（ト居爐裡の側へおく、）さあ〱、たんとあたらつしやれ。
法澤　やれ〱、焚火の御馳走で、やうやく人心地になつたやうだ。
お三　遠慮なしに澤山くべてあたらつしやい。それはさうと法澤どの、此の德利や重箱は何んでござる。

法澤　さあ、今日はわしが誕生で、御師匠様が相變らず赤の飯を炊いて村の衆へ振舞つて下すつた、それぢやによつて不斷から、洗濯物や綻びのお世話になるゆゑ、御前の所へ酒や肴を持つて行けと御師匠様の言ひ附け、殘りの肴を重へ詰め、酒も口きりついで來ました、さあ寒さ凌ぎに少しも早く、燗をして呑まつしやれ。

お三　それは〳〵雪の降るのに、よう持つて來て下された、さつきにから呑みたうて〳〵ならぬ所、感應院様のお志しで、呑みたい念を晴らしまする。（ト重箱を明けて見て、）おゝ、是れは見事な煮染物、少しづゝ樂みに、暖めて喰べませう。（ト棚より鍋を出し、重箱の煮染をあけ、圍爐裡へかける、此うち法澤燗徳利へ酒を分け、罐子へ入れるをお三見て、）おゝ、肝腎の燗をつけるを忘れて居た。てもまあ心の利いた法澤どのぢや。（ト此時法澤徳利を出して見て、）

法澤　罐子の湯が沸いて居るゆゑ、丁度燗もよさゝうだ、さあ〳〵、早く呑まつしやれ。

お三　おゝ、どれ、大きな物で御馳走になりませう。（ト有合ふ茶碗を出し法澤ついでやる、お三一口呑んで、）あゝ甘露々々、こりやもう一つ、重ねずばなるまい。（ト又呑んで、）法澤どの、一つ呑まつしやらぬか。

法澤　いや、わしは少しも呑めぬから、たんと呑まつしやれ。

お三　それではもう一つ重ねませう。あゝ今夜ばかりは、好きな酒も呑まれまいと思うたに、感應院樣のお情で、雪の寒さを忘れます、これといふのもこなたの親切、よう持つて來て下されたなう。

法澤　何の其禮には及ばぬぞえ、不斷から何かに附けお世話になるお前の事ゆゑ、雪が降らうと少しも苦にはしませぬわいなう。

お三　ほんにこなた、可愛い事を言ふわいなう。

ト此うち始終酒を呑んで居る、法澤ふと上手の丸太に心附き、

法澤　これ婆アさん。家の内にみつともない、何で丸太を建てたのぢや。

お三　さあ、それは家根裏が腐つたゆゑ、此大雪でこはれうかと、隣村の大工どのから丸太を借りて、用心に突つ張りをしておいたのぢやわいなあ。

法澤　成程、轉ばぬ先きの、杖とやらぢやなう。

お三　さうぢやわいなあ。（ト法澤屋根裏を見て、）

法澤　あゝ、ひどい蜘蛛の巣ぢやなう。

お三　さあ聞かつしやれ、知つての通り男手はなし、親類とても別になければ、村の衆へ賴むも氣の毒、それゆゑわしが爰へ來てから、一度煤を掃いたばかりでござるわいなう。

法澤　おゝ、さうかいなう。（ト欄間の紙包を見て、）あれ〳〵、こちらの方の欄間に結び附けてある紙包み、ありや何でござるな。

お三　なに、紙包とは。

法澤　あれ、あすこにある。（ト指ざしをして見せる、お三すかし見て、）

お三　おゝ、あれかいなう、あれには深い様子のあること。（トお三愁ひの思入あつて、）あの紙包みを問はれるにつけ、思ひ出すは娘のこと、生きて居たらこなたの年配、して法澤どの、こなたは何れの生れでござる。

法澤　さあ、わしの生れは不斷から、お師匠様の話しには、生れ落ちると母に別れ行先きのない孤兒ゆゑ、それから師匠の養育うけ、父親の手で七つまで、育てられたる甲斐もなく、七つの時に父親に別れ、人と成つたる果敢ない身の上、産みの親の形見といふは、守りに入れし産毛の包みに、月日が記してあるばかり。

お三　それは定めし法澤どのも、便り少ない事であらう。して、年は幾つにならるゝ。

法澤　寶永二年の産れとて、今年十七歳になりまする。

お三　それでは孫と同じ年、して〳〵産れし月日といふは。

法澤　さあ、産れし月日は今日が誕生。(ト守りの中より包みを出し)これ、此の産毛の包みに記せし通り寶永二年十一月十五日、卯の刻の誕生、原田嘉傳治悴玉之助と、是れに記してある通り、然も朝日の昇ると共に、産れたといふ事ぢやわいなう。

お三　むゝ、そんならこなたの産れた月日は、霜月十五日とか。

法澤　して、お前の孫の生れしは。

お三　やつぱり霜月十五日。

法澤　そんならわしと同じ生れぢや。

お三　法澤どのを我子のやうに、

法澤　何かの世話になるといふも、

お三　思へば是れも前世から、

法澤　何ぞの縁があつてのこと、

お三　生れし月も、

法澤　日も一つ。

お三　はて、よう似た事も。

兩人　あるものぢやなあ。(ト兩人よろしく思入あつて、)

お三　是れにつけても孫が事、思ひ出すも涙の種、お前と同じ寶永二年、戌の霜月十五日、生きて居たらば法澤どのと同じ孫も年恰好、運のないといふものは、仕方のないものぢやなあ。

ト愁ひの思入、法澤思入あつて、

法澤　これといふのもあの包みを、わしが尋ねたゆゑ、默つて居ればよかつたに、とんだ歎きを思ひ出させ、氣の毒な事をしましたなあ。

お三　いや〱、心配さつしやるな。丁度話しの出たこそ幸ひ、人には包み隱せしが、孫と思うて今爰で、包みを明けて見せませう。(ト雪おろし、合方になり、お三薪割臺を踏みつぎになし、欄間の紙包みをおろし明けて、中より袱紗包みの墨附を出し、短刀を脇に置き、)さあ法澤どの、これを見て下され。

ト墨附と葵の紋散しの短刀を見せる。法澤取上げ見て、

法澤　在所育ちのわしらには、見ても分らぬ此の二品、さうして是れを所持するは、どういふ譯だか話して下され。

お三　其のいはれは長いこと、まあ一通り聞いて下され。(ト合方になり、)何を隱さうわしが身は、年來此平澤村にお三といひし取揚婆、數へて見れば二十年跡、わしの娘のお澤をば、紀州の御家老加

納將監樣の吳服の間へ御奉公に上げた所、御意に叶つて名を改め、澤の井といつて勤めて居るうち、當時八代將軍樣、世間の人が口癖に紀州公方樣といふは、元紀州の御三男で、德太郎樣とおつしやつたが、四十二の二つ子で、據なく大奥で御評議の上、御城内の八千代の馬場へお捨てなされたを、御家老の將監樣が直さまお拾ひ申し上げ、丹精してお育て申し、丁度御十六の時であつたが、娘の澤の井へお手が附き、遂にお胤を宿せし所、段々に月日を重ねて五月の折、御本家に御世繼ぎなくて、御家督をお繼ぎ遊ばすやうになり、娘に別るゝ其時に假令手許に居ぬとても、此の二品を其方へ後の證據に遣はすと、下されたは此の墨附、また一品は此の短刀。

ト二品を持ちよろしく思入。

法澤　それで樣子が分つたが、えらい物を貰はつしやつたなう。

お三　それからわしも一心籠め、娘を宿へ引取つて、どうぞ男を產せたく神信心やら加持祈禱、とかくするうち十月も立ち、願ひ叶うて御男子を安々產みし甲斐もなく、藁の上にて果敢なくも一聲上げし產聲を、此の世の名殘りにお果てなされ、娘も其場で血が上り、續いて臨終しましたわいなう。

法澤　そりやあ、氣の毒なことをしました。

お三　兩の手を一度にもがれたわしが心の苦しさ、折がなあらば此の二品、御上へお返し申さうと思うて居るうち年も經ち、今では寶の持腐れ、果報拙ない親子の身の上、推量して下されいなう。

トお三泣伏す、法澤お三の背中をさすりながら、

法澤　おゝ尤もぢや〳〵、斯ういふ證據のある上は、其子が達者で居た事なら、言はずと知れた將軍家こなたも樂をさつしやらうに、儘ならぬが浮世の中、同じ月日に生れても、氏素性もないわしは達者で、系圖正しいこなたの孫が、死ぬるといふも皆約束ごと、あきらめたがよいわいなう。やや。(トお三めそ〳〵泣いて居るゆゑ、)そのやうに泣いたとて、十七年も跡のこと、どうも仕樣がないわいなう。

トこれにてお三婆涙を拭ひ、

お三　譬にもいふ死んだ子の年、返らぬ事ゆゑ言はなんだが、産れ月日も替らずして、孫と思ふこなたに引され、昔語りの愚癡を並べ、よしない涙をこぼしました。

法澤　それもわしが此の包みを聞いたから起つたこと、然し折角おろして下されたゆゑ一寸中を見たうござるが、明けても大事ござらぬか。

お三　大事ないとも〳〵、外の者なら見せねど孫と思ふこなさんゆゑ、とつくり其處で見たがよい。

ト雪おろしの合方にて法澤開き、

法澤　婆アさん、是れが當時の公方樣が、お書きなされたお墨附とかいふものでござるか。

お三　おゝ、御直筆でござるわいなう。（ト是れにて法澤墨附を元の通りにして、短刀を手に取り、よく見て、）

法澤　緣頭から鐺まで、殘らず葵の紋散らし、大層立派なこしらへ、定めて中身は結構でござらう。

お三　中身は慥聞き覺えに、志津三郎とかいふ作ぢやとの事。（ト法澤ぢつとこなしあつて、）

法澤　むゝ、中身は志津三郎とは、えらい物を。（ト思入あつて氣を替へ、）貰はつしやつたなう。（ト此時、ばつたり音して、天井より腹の膨れし鼠落ちる、兩人びつくり飛びのき、）や、此鼠は。

お三　いや、何も心配さつしやるな、あんまり毎晩鼠が出て、惡戯をしてならぬゆゑ、此間御城下へ行つたついでに、生藥屋で鼠取りの藥を買ひ、飯へ混ぜて喰したゆゑ、腹が膨れて死んだのぢや。

法澤　そんならよいが突然に、話し半へ落ちたので、わしはびつくりしました。（ト鼠を見て、）大層腹が膨れて居るが、成程毒といふものは、恐ろしい効驗のものぢやなう。

ト此時お三小箱の中より紙包みを出し、

お三　これ、此の藥でござる、何でも人の話しには、鼠ばかりぢやござらぬ、人間にもきくといふ事ぢや、何とまあ怖しい事ぢやなう。

法澤　それなら是れが、人間にもきゝますかや。
お三　おゝ、きくといなう。
法澤　あの、人間にも、むゝ、さうかい。（ト此うちお三李桶の中へしまふ。）
お三　いや、益ない話しで肝腎の、酒を水にしてしまうた。（ト呑みかけし酒を呑む。）
法澤　どれ、わしが燗をして遣りませう。
お三　胸のもや〳〵を拂ひませう。（ト法澤徳利に酒を移し、罐子へ入れる、お三品を元のやうに紙に包む。）
法澤　然し婆アさん、わしはよけれど此事を、必ず人に話さつしやるな。
お三　そりや、又なぜに。
法澤　さればいなう、こんな物を見た人はよけれども、何にも知らぬ世間の人が聞いたらば、何を言ふやらあの婆アは、大層な事を言ひ歩く、あいつはえらい氣違ぢやと、お前を人が笑ひますぞえ。
お三　どうして〳〵、孫と思ふそなたゆゑ話しこそすれ、他の人へ何で大事を話さうかいなう。
法澤　そんなら今まで此事を、誰にも話さつしやらぬか。
お三　十七年がその間今話したが、初めてゞござるわいなう。
法澤　すりや、誰にも此のはなしは。

お三　何の話してよいものか。
法澤　あの、いよ〳〵せぬかや。
お三　おいなう。（ト法澤思入あつて、）
法澤　むゝ、さうかえ。（ト氣を替へ、）さあ〳〵、婆アさん、わしは下戸ゆゑこなた一人で、大きなもので呑まつしやれ。（トどんぶりを出す。）
お三　丼鉢とは、嬉しい。（ト法澤酌をして、お三がぶ〳〵呑み、）あゝいゝ心持だ。
法澤　もう一つ呑まつしやれ。（トよろしく酒をすゝめ、無理に呑ませる。）
お三　いやもう、いけぬ〳〵、今の一杯で先の醉ひを引出し、あゝ、いゝ心持に醉つた、何よりこれが樂しみぢやわいなう。おゝ樂しみといへば、わしがよい物を見せてやりませう。
法澤　なに、よい物とは、どんな物ぢや。
お三　定めしあれを見せたれば、又欲しがるであらう、こりや遣るのではない、見せるばかりぢや。（ト立て佛檀より、誰袖なぞを奉書に包みしを出し、）さあ〳〵、是れぢや、これはの、わしが話した娘のお澤が御屋敷から持つて戻つたお細工物、これは御殿であれが手細工、それゆゑわしが形見と思ひ、大事に持つて居ますわいなう、まだ其外に此の打敷き。（ト佛檀の打敷を取つて來り、）此の草深

い田舎では、見た事もない古金襴、これも娘の帶の切、朝夕是れを見るに附け、何で娘は先へ死んだか、年寄をば跡へ殘し、逆まごとを見るといふは、如何なる因果の報いやら、阿彌陀樣も聞えませぬわえ。

ト始終生酔のこなしにて、トゞ法澤の膝を枕に寐る、法澤思入あつて、

法澤 まだ愚癡をいふのかいなあ、あゝ、こりや泣き上戸ぢやなう、こんな事なら、すゝめて酒を呑ませるのではなかつた、さあ〳〵もう泣き止まつしやれ〳〵。(ト搖ぶつて見て思入あつて、)もう泣き寐入りに寐たさうだ。(ト時の鐘、凄き合方、雪おろしになり、四邊を見廻し思入あつて、上手の丸太を足にてのけ、端ぐれの木を取つて、)さあ婆あさん、枕を遣るぞえ。

ト枕をさせ、上手の柱へ丸太を引つかけて結び附け、丸太をお三の首へ掛け、思入あつて丸太の端へ腰を掛け、其身の重みにてきつと見得、お三わつと、藻搔き苦しむ法澤腰を掛けたまゝこづく、トゞお三落入る、鼻息を考へ、しめたといふ思入あつて、丸太を元の所へ突張り、死骸を居爐裡の中へ首を入れ、紙包みより二品を出し、墨附を懐へ入れ、短刀を重箱の風呂敷に包み腰にさし、苧桶の中の鼠取藥を出し、懐中して下へおり思入あつて、

丸太でぐつとしめたれば、喉へくびれた疵はなし、斯うしておけば喰ひ醉ひ、居爐裡へのめつて

燒死んだと、誰が見ても思ふは必定。はて、我身ながらいゝ智慧も、出れば出るものだなあ。（ト居爐裡へ松葉をくべる、仕掛にて煙りを上げる。）益なく其身の素性を明かし、出世の種になる品をおれにちろよりと見せたばかり、命を捨てしお三婆ア。然し坊主のおれに殺されて、直に其場で火葬とは、餘程後生のいゝ婆アさんだ。（トつかくと門口へ出る、ばたくと人音する。）南無三、向うに。

ト思入あつて、下手の藪疊のうちへはひる。雪おろし、合方になり、花道より以前の百姓一、二、升德利と竹の皮包みを提げ出來り、門口にて、

一　婆アさん、約束通り一升さげて來ましたぞや。

二　さあ、早う燗をして吞まつしやれ。（ト兩人門の內へはひり、お三を見て、）

一　やあ、こりや婆アさんが、居爐裡の中へのめり込んで居る。

二　又喰ひ醉つたのであらう。（ト側へ行き引起す、お三の顏は燻ぶつたまゝ眞黑になつて居るゆゑ、兩人びつくりして、）やあ、こりや婆アさんが、ごねてしまつた。

一　こりや又穴を。（ト死骸を放すを、道具替りの知せ。）

兩人　掘らにやあならぬ。

ト呆れたるこなし、此の模樣よろしく雪の音、時の鐘にて道具廻る。

（元の感應院の場）——本舞臺元の感應院の道具、花道より舞臺一面雪布を敷き、合方にて道具留る。

とやはり右の鳴物にて、下手より以前のお民番傘をさし、片手に丼を持つて出來り門口にて、

お民　お霜どん〳〵、ちよつと爰を明けておくれ、お霜どん〳〵。（ト呼べど返事なきゆゑ内を覗き、）まあ、日が暮れたのに明りもつけず、家中どこへ行つたのだ、ほんに氣樂な人達だなあ。

ト お民思入、この時下手より以前の法澤出來り、お民を見て、

法澤　そこに居るのは、お隣りのお民さんではないか。

お民　おゝ法澤さんか、日が暮れて居るに、家中どこへ行つたのだえ。

法澤　わしは最前平澤村の婆アさんの所まで、師匠の使ひに行きましたが、何で家中留守にしたか。何にしろ明しをつけますから、こつちへはひつたがよい。（ト内へはひり、探りながら、下の戸棚へ黑附短刀を隱し、障子屋體より行燈を持ち來り、灯をつけ、）さうして、何ぞ御用でござるか。

お民　いや、別に用といふではなけれど、晝間お前の誕生で、大勢呼ばれて馳走になり、餘り物を入れていつた丼を返しに來たら、内に誰も居ぬゆゑ、それで叩いて居ました、どうぞよろしく言つて

下され。

ト丼を法澤へ渡す。

法澤　それは大きに有難うございました。それは、お蔭で何事もなく、安心いたしました。

お民　ほんにお前が早く歸つてよかつた、まして此頃は物騒といひ、誰も内に居ぬといふは第一不用心な事ぢや。又何ぞ用があつたら、爰から怒鳴つて下され、いつでも來るから。

法澤　どうぞお願ひ申します。

お民　旦那がお歸りになつたら、よく禮を言うて下され。（ト門口へ出て）あんまり一人で喋べつたら、お芋の噯が消えてしまつた。（トお民となしあつて下手へはひる、法澤跡を見送り、思入あつて）

法澤　この大雪に夜る夜中一人も内に居ぬといふは、何でも是れには仔細のあること、合點の行かぬは不斷から、久助お霜が素振りといひ、何でもこりやあ駈落ぢやわえ。

ト早き合方になり、花道より以前の感應院、傘を半つぼめになし、尻端折り、下駄がけにて出來り、花道にて一寸後へ思入あつて、直に舞臺へ來り、法澤を見て、

感應　おゝ法澤か、こなたはいつ戻つた。

法澤　はい、今しがた平澤村から戻りました。

感應　して、久助お霜は、内に居るか。
法澤　はい、二人は私の歸らぬ先から、何處へ行つて居りますか、内には留守でござりまする。
感應　え〻、扨は二人は駈落せしか、道理こそ親仁めも家には居ず、こりや彼奴ら親子の者にうまく一杯喰せられしか、え〻忌々しい。（ト無念の思入あつて息の切れるこなし、）こりや法澤、餘り急いで戻つたゆゑ、息が切れてどうもならぬ、はつたいを一杯こしらへてくりやれ。
法澤　はい〳〵、畏りました。（ト下手へ行きかけ、懷へ思入あつて又戻る。）お師匠様、あのはつたい茶を上りますか。
感應　喉がひツ附くやうだ、早くこしらへてくやれ。
法澤　あい、只今上げまする。
感應　え〻、何をぐづ〳〵、早くくれといふに。
法澤　はい〳〵、只今直に差上げます。

ト是れにてしめたといふこなしにて、下手の火鉢の前へ來て、茶の湯の茶碗を持ち出し、挽物の棗よりはつたいの粉を茶碗へ入れ、此時見物に見えるやうに、懷より以前の鼠取りの包みを出し、茶碗へ入れ、釜の湯をさし、茶筅にてほだてる、此内感應院四邊へ思入あつて、

感應　おゝ、幸ひあいらの雜物が、爰らの戸棚に入れてあつたが、どれ一ツ改めてくれう。(ト上の戸棚のうち、上手障子屋體の内外を改め、)さては二人の衣類のないは、いよ〳〵爰を逃げ居つたな、えゝとんだ事をしたなあ。(ト法澤茶碗を持ち來り、)

法澤　お師匠樣、お待遠でござりました。(ト出す、感應院すぐに呑んで、)

感應　これでやう〳〵人心地になつたやうぢや。

法澤　さうしてあなたは、何の御用で、此大雪に、お出掛けになりました。

感應　さあ雪も厭はず出掛けたは、お霜が親仁を尋ねる爲め。

法澤　そりや、どういふ譯でござりまする。(ト合方替つて、)

感應　そちは留守ゆゑ知るまいが、晝間お霜の親仁が來て、今夜娘を苦界へ沈め、金をこしらへ質入れした、田を取戻さねば皆貸主へ取られると、涙ながらに哀れな話し。見るに見兼ねて大枚の四十兩といふ金をわしが親仁に貸して遣り娘の苦界を助けやつた、其大恩あるわしの目を盜んでお霜は久助と密通をした其上に、親作兵衛と馴合で、此家を駈落いたせしゆゑ。あゝ、思へば〳〵憎い奴ぢやの。

ト無念の思入、此時分より感應院段々腹の痛む思入にて苦しむ、法澤素知らぬ振りにて、

法澤　承はるは今が始めて、大枚四十兩の金を借りて、親仁めと久助お霜は駈落せしとか。お師匠樣こりや此儘にはいたされませぬが、あなた何と思召します。

感應　外に手段も附かないが、是れから諸所を尋ねし上。（ト頻りに差込むこなし、）あいた〻〻〻。

ト胸を掻きむしる。

法澤　もし、どうなされました。

感應　これ法澤、おれはどうも胸が苦しい、あいた〻〻〻。（ト又も胸を掻きむしる。）

法澤　それは最前から、雪に凍えたせゐでございませう。どれ、私がお背中をば少し擦つて上げませう。（ト後へ廻り背中を撫でる、感應院苦しみ、血を吐く、法澤びつくりして、）こりや、どうなされました。

感應　あ〻苦しい、こりやたゞの苦しみではない、何でも毒に當つたのだ。扨は呑だはつたいの粉に、毒を仕込んで置きしか、あ〻苦しい。

法澤　え〻、そんなら今のはつたいに、毒がはひつて居りましたか。（トびつくりしてどうとなる。）

感應　これで樣子が分つたわえ、多分おれを殺さうと久助お霜が巧んだ仕業、え〻殘念な。

ト苦しむ、法澤齒嚙をなし、

法澤　ちえ〻、現在御恩になりながら、御主人樣へ毒藥をば。思へば〳〵憎い奴め。（トきつと思入あつて、

感應院へ取附き、）あゝ、こりやどうしたらよからうなあ。おゝ、幸ひ隣りのお民どのを。（トうろうろしながら門口へ行き、）もし、お隣りのお上さん、どうぞ來て下さい、大變だ〳〵。

ト呼ぶ、是れにてばた〳〵になり、下手よりお民あわてたるこなしにて、目をこすり〳〵出來り、

お民　なに大變だ、たいへん（來年）の事をいふと、鬼が笑ふよ。

法澤　もし、寐惚けてはいけません、氣をしつかり持つて下され、お師匠樣がとんだ事になりました。

お民　なに、感應院樣がどうなされたえ。

法澤　さあ、毒に當つて、苦しんで居るわいの。

お民　えゝ。（トどうとなり、膝行ながら內へはひり、）そりやあ、とんだ事でござります。

感應　あゝ苦しい、久助お霜親子の仕業、どうか敵を取つて下され。

ト血に染みし顏を上げきつと思入、お民おどろき、

お民　はあゝゝゝ。（ト下手へ飛びのく、感應院血を吐き藻搔きながら落入る、お民あわてゝ、）こりや村の衆へ知らせて來よう。（トあわてゝ門口へ行き下駄をはきかけ、）えゝ、いつそ跣足で、さうぢや。（トつか〳〵と花道よき所まで行き、ぱつたり轉び、）あいたゝゝゝゝ。（トやう〳〵起き上り、積りし雪に思入あつて、）えゝ面形どころか、忙しいわえ。

法澤　トやはり合方雪おろし、お民前掛を冠り逸散に花道へはひる、法澤感應院の死骸に取附き、
もしお師匠様、氣をしつかりお持ちなされませ、私が居ります、どうぞお心を慥にお持ちなされませ。（ト搖ぶつても、答へなきゆゑ、法澤思入あつて、）とう〳〵師匠もくたばつた、試しに呑ました鼠取り、斯うも効驗の早いものか、こいつも馬鹿にならぬものだ、幸ひ効驗のいゝ所で、一杯喰した罪科を、久助お霜になすり附け、師匠が溜めた有金を、そつくり盗んで隨徳寺、人の來ぬ間に。

ト思入あつて、門口へ掛金をおろし、戸棚より手箱を出し金包みを取出し、一纏めにする、此時花道より以前の百姓○、△、□、平澤村と記せし弓張りを持ち先に立ち、跡より名主平澤甚右衛門、羽織緣取り袴名主のなり、跡よりお民附添ひ、花道にて甚右衛門お民へ思入、お民入替つて先に立ち、門口へ來て、

お民　法澤どの、名主様がお出でぢや。

百姓二人　早う明けて下され〳〵。（ト門口を叩く、法澤びつくりして金を懐へ入れ、手箱を元の所へしまひ、）

法澤　はい〳〵、只今明けます。（ト門口を明け涙を拭きながら下手へ控へる、是れにて甚右衛門上手へ通る、皆々下手へ住ひ、）これは皆様、よう來て下さりました。（トうつ向く、甚右衛門思入あつて、）

甚右　只今村の者の訴へにより、取るものも取り敢ず檢分に來たが、定めてそちも心配であらう。して感應院には、如何したのぢや。（ト法澤やう〱顔を上げ）

法澤　はい、申し上げますが、今日は私の誕生日で、お師匠様が村の衆をお招き申して、御馳走をなされ、其時私は不斷から厚く世話になつて居りまする、平澤村の婆アの所へ酒肴を持つて參りました跡で家の騷動、久助お霜と申す奉公人が言合せ、何處へ行つたか行方知れず、まだ其上にお師匠様がお上りなされたはつたいの粉の中へ、毒を仕込んでおきましたを、知らずに上つたばつかりに、かういふ譯になりましたが、是れもみんな二人の仕業、誠に殘念でござります。

ト法澤泣きながら話す、始終甚右衞門思入あつて、

甚右　むゝ、して其の事柄は誰に聞きしぞ。

法澤　はい、兩人駈落いたした跡へ、平澤村から戻りまして、びつくりいたして居る所へ、師匠が立歸りまして承はりました。

甚右　して、家内に紛失の品はないか。

法澤　只今あなたのお出で前、方々改め見ましたれば、手文庫の蓋が明き、中のお金がござりませぬ。

甚右　むゝ、して見ると久助お霜申し合せて金子を奪ひ、駈落したと見える。

法澤 左樣にござります、私の身に取りましては、譬に申す木から落ちた猿同然、明日からは何一ツ敎へて下さる便りもなく、斯うならぬ其先に暇をお出しなされたら、斯ういふ事もござりますまい。悔しい事をいたしました。(ト此時甚右衞門、頭を振り、)

甚右 いや〱そちは左樣申すが、兩人共に此方も、不斷の樣子を存じて居るが、なか〱篤實な者であるが。(ト合點の行かぬ思入)む〻、是れが所謂思案の外。

法澤 え〻。

甚右 いや、外の筋へも屆けた上、とくと探索いたしたら知れぬこともあるまい、必ず力を落さぬがよい。

皆々 有難うござりまする。

甚右 灯りを是へ。(ト百姓〇、弓張りを出す、甚右衞門死骸を改め見て、)は〻あ、面體手足悉く、紫色に替りしは、毒の廻りしるし。不便な事をいたした。法澤、嘸力なく思ふであらう。

ト法澤うつ向いたま〻、めそ〱泣いて居る、お民百姓思入あつて、

〇 まだ此上のお願ひには、年若ではござりますれど、法澤どのを跡へ直し、

△ 此家の跡を立てさせましたら、草葉の蔭で師匠の悅び、

□　どうかあなたのお引立で、
お民　法澤どのへ跡目相續、
皆々　お願ひ申し上げまする。
甚右　如何さまお前方の言はるゝ通り、當管轄に修驗者どのもなくてはならぬ事なれば、近邊の者世話いたし、野邊の送りをいたしたら、法澤を直すがよい。
○　有難うござります、早速お聞き濟み下されまして、
△　法澤どのは、申すに及ばず、
□　これで一統、
四人　安心いたしました。
お民　これ〱法澤どのや、不斷お前が實體ゆゑ、平野樣が早速のお聞き濟みぢや、ようお禮を申したがよい。（トこれにて法澤涙を拭きながら、）
法澤　段々の御世話さまに預りまして、有難うござりますが、それに附きましてあなた方へお願ひがござりまする。
甚右　して、其願ひと申すは。

法澤 常々師匠が申しますには、修驗者になるそれまでは、諸國の靈地を廻りまして、修行せねばならぬと不斷申されましたゆゑ、どうか只今より五ケ年の其間、お暇をお願ひ申します。
甚右 そりやもう、望みとあらば修行の事ゆゑ、許しもいたすが、急速出立いたす氣か。
法澤 はい、野邊の送りを濟ましましたら、直に出立いたしまして、諸國を廻る其内に、大恩受けし師匠の敵。
甚右 やあ。
法澤 いえなに、豫て師匠が申せしゆゑ、諸國を參詣いたしながら、修行がいたしたうござります。
ト甚右衛門感心のこなしにて、
甚右 年に似合はぬそちの料簡、嘸や師匠が悅んで居るであらう。
○ まあ何にせよ、名主樣の御檢分濟む上は、
△ 感應院どのを、
四人 片附けませう。(トお民に四人手傳ひ、二枚折にて死骸を隱し、)
○ 平野樣には夜分と申し、いろ〳〵お世話下さりまして、
四人 有難うござりまする。

甚右　いやお前方も御苦勞であつた。わしは是れから委細を認め、當御陣所へ訴へいたす。

四人　御苦勞さまでござります。

甚右　こりや法澤、机があらう、是れへ出しやれ。

法澤　はツ、畏りました。

ト思はず立ち上るとたん、懐より金包みを落す、甚右衛門是れに目を附ける。法澤びつくりして顔を見合せ、其上へべつたり坐る。これを木の頭。法澤坐つたまゝ金包みを懐へ入れる、甚右衛門心得ぬ思入、四人死骸を直す、此模様雪おろしにて、

幕

二幕目　紀州加田の浦の場

〔役名〕＝平野甚右衛門、感應院弟子法澤、同下男久助、百姓田吾作、同久根八、同畑六。感應院下女お霜。

（加田の浦の場）＝本舞臺正面低き浪打際の手摺、後ろ黒幕、上下芦原の粗朶、舞臺眞中に漁船の毀

れたるを陸へ引揚げたる體、上下松の立木、同じく釣枝、總て加田の浦夜明け前の摸樣、浪の音にて幕明く、と浪の音打上げ、直に唄淨瑠璃になる。

〽うき中をかけて祈らん神島や、磯馴の松に風誘ふ音は神樂の山ならぬ、早明け近き鐘の聲。

ト本釣鐘を打込み、東の揚幕より下男久助、好みのこしらへにて、尻を端折り頰冠りをなし、お霜同じく好みのこしらへにて、手を引合ひ出來り、

〽熊野颪の雪風に、千鳥鳴くなる浦傳ひ、岩にせかるゝ瀧川の、碎けて落つる浪がしら。

ト久助はお霜に歸れと言ふ、お霜は歸らぬといふ振りよろしくあつて舞臺へ來り、件の毀れし船に腰を掛け、

久助　これお霜、今も道でいふ通り、美濃の大垣にござるわしが親、大病ぢやによつて迎ひが來て、取る物も取りあへず看病に行くのぢやゆゑ長うは居ぬ、わしとても奉公の身の上、親の病氣が良いにせよ惡いにせよ、直に戻つて來る程に、暫くの間ぢや、待つて居てたも。

お霜　そりやもう、お前がどのやうに言はしやんしても、わたしや家へ歸ることはいやでござんす、お前が一緒に連れてのいて下さんせいなあ。

久助　これは又聞き分のない、親の看病に行く者が、何ぢややらいやらしい女子を連れて、どうして行

かれうぞ、それに又そなたの親御も案じてござらう程に、わしが戻つて來るまで、家へ行つて待つて居てくりやれ。

お霜　いえ、どうあつても、わたしや家へは戻られぬわいなあ。

久助　なに、どうあつても戻られぬとは。

お霜　さあ、その戻られぬ譯といふは、とゝさんが質入なした田地とやら、約束の日も切れたれば先方からは矢の催促、其お金を戻さねば流れると年寄らしやんしたとゝさんの、夜の目も寐ずに苦勞の樣、見るに見兼ねてわたしの身を苦界に沈めて金調へ、濟してしまはうと談合したを感應院樣のお情にて、大枚の其金をお貸しなされて下された、其お禮に何がなと言うたれば、感應院樣のおつしやるには、其禮は外にはないわしが心に從へと、思ひも寄らぬお詞にいやと言はれぬ此身の切羽、お前と深く言交し、如何に義理に迫ればとて、外の男にどう肌が觸れられよう、年寄らしやんしたとゝさまへ不孝の罪は知りながら、お前の跡を慕うて來た、心の内の切なさを、推量して下さんせいなあ。

〽藻に住む虫の啼く音さへ、哀れふた見の浦浪に、揉まるゝ声の朝嵐。

久助　そなたの切ない言譯を、聞けば聞くほど尤もなれど、くどいやうぢやが今もいふ親の看病に行く

者が、煩うてござるお袋はじめ親類衆の思惑、どうも濟まぬことゆゑにどうぞ家へ戻つてたも、その替りには在所へ行つても、奉公中を言ひ立てゝ一日も早う戻つて來て、又よい談合もせう程に、これお霜、わしが頼みぢや、聞いてくりやいなう。

お霜　さあお前が其やうに、事をわけて言はしやんしても、家へ歸れば物堅いとゝさんに親の許さぬ徒らごと、お世話になつた感應院樣への申譯、此身を苦界へ沈めても金調へてお返し申さねば義理が濟まぬと言はしやんせう、お前に別れた其上に、悲しい憂き目を見ようより、いつそ爰へ身を投げて死んでしまはうわいなあ。

久助　あゝこれ、めつさうな事いうてはならぬ、すりや、どのやうに言うても聞き分けてはくれぬかいなう。

お霜　どうでも連れて行つて下さんせにや、お前一人で行かしやんせ、わたしや覺悟を極めて死にます程に、思ひ出した其時は、たゞ一遍の回向をば、お頼み申しますわいなあ。

〽濡るゝ袂をしぼりつゝ、蜑の小船のそれならで、うき身をかこつ水鳥の、立つを止むる磯の風。

ト此うちお霜身を投げようとするを、久助留めることあつて、

久助　爲を思うていろ〳〵と、譯を言つても聞き入れず、死なうとまで覺悟を極めた上からは、どうまあ見捨て行かれうぞ、如何にも一緒に連れて行き、親を始め親類の不興を受けた其時は、二人一緒に死なうわいなう。
お霜　そんなら何と言はしやんす、わたしの願ひを叶へ、在所へ連れていて下さんして、親御の不興を受けたれば一緒に死ぬと言はしやんすか。えゝ、嬉しうござんすわいなう。
久助　濡れぬ先こそ露をも厭へ、今は二人が身の上に、降りかゝりたる雪みぞれ、
お霜　時雨を誘ふ松が枝も、曲れる戀の沖越えて、
久助　燃ゆる篝の火影さへ、きえる色なき朝霧に、
お霜　まゝならぬ身は浮島の、
久助　東は次第に明けれども、
お霜　闇き二人の身の上は、
久助　闇路をたどる、
二人　思ひぢやなあ。
〽憂きをかぞへる藻塩草、浪に漂ふ風情なり。（ト此うち久助上手を見て、）

久助　あれ〳〵、向うに火影の見えるは、もしや追手ではあるまいか、見咎められぬ其内に。（ト又向うを見て、）向うにも又火影が見える。遙あなたの辻堂で、暫し二人が身を忍び。

ト久助お霜にさゝやく事あつて、

お霜　あい。

久助　さあ、おぢや。

お霜　通り過して、

〽曉さゆる星明り、小闇き浦の葭蘆は、風に任せてそよぐ劒葉。

ト唄のあげにて、久助お霜の手を取り、下手へはひる。浪の音合方になり、上手より前幕の百姓田吾作、久根八、畑六百姓なりにて提灯を持ち、法澤笈旅なり、小葛籠を背負ひ、連立ち出來り、

法澤　どなた樣も御親切に、お送り下すつて、何とも御禮の申しやうもござりませぬ、有難うござります。

田吾　いやもう氣遣ひさつしやるな、此頃は物騷ゆゑ、一人旅は誠にけんのんだ。

久根　それゆゑわしらも斯うやつて、一人では氣味が惡いゆゑ、三人連にて送つて來ました。

畑六　もう程もあるまいゆゑ、夜の明ける所まで、皆連立つて、

三人　送つてやりませうわいなあ。

法澤　有難うござります〱。いやもう、どういふ事にか皆さまが、私を可愛がつて下すつて、此間も誕生日にお祝ひ下されました蜘蛛の巣絞りの此の繻絆。(ト見物に繻絆を見せて、)濱松染の風呂敷に江戸染の手拭、また此度は路用までお心附け下さりました御親切、何とお禮を申してよからうやら、私は嬉し涙がこぼれまする。(トちよつと愁ひの思入。)これと申すも師匠のお蔭、少しも早く久助を捜し出し、師匠の恨みが晴らしたうござります。(ト泣く、三人も愁ひの思入あつて、)

田吾　おゝ尤もだ〱、さう禮を言はれては、却つて痛み入ります、外の子供と違つて、こなたは利發な生れゆゑ、村の者が皆感心して居ますわいなう。

久根　それにまた降つて湧いた此の災難、師匠の恨みが晴らしたいと、年端も行かぬ身を以て、あゝ健氣なものぢやと誰一人、褒めぬものはござらぬわいなう。

畑六　ほんにまあ、久助がこんな惡い事をしようとは、實に夢にも知らなんだ。

田吾　實體さうに見えたれど、心の内は外からは、見えぬものでござるわいなう。

久根　これが外から見えたれば、魂消た事であらうなう。

畑六　ほんに〱、人は油斷の、

三人　ならぬものぢやなう。（ト此うち法澤始終愁ひの思入）

法澤　もうそちこち東も白みますれば、氣遣ひござりませぬ。どうぞ皆さん、これからお歸りなされて下さりませ。

田吾　いや〳〵、まだ〳〵もそつと送つてやりませう、もうちつとで夜もすつかり明けよう、爰で別れては、佛作つて魂を入れぬやうなものぢや。

法澤　其の御親切は有難うござりまするが、御覽なさる通りよつぽど白んで參りましたれば、どうぞもう爰から、お歸りなされて下さりませ。

久根　これ〳〵法澤どの、此間もこの先で飛脚が一人殺された事があるによつて、何も遠慮には及ばぬもそつと送つてやりませう。

法澤　その盜賊は捕られましたといふ事ゆゑ、氣遣ひはござりませぬ。どうぞこれで、お歸りなされて下さりませ。

畑六　これ〳〵皆の衆、法澤どのがあのやうに、達て歸つてくれと頼むゆゑ、もう明けるに間もあるまいから、これで別れようではござらぬか。

田吾　おゝ、さういふ事なら、これで別れるとしよう。これ〳〵法澤どの、隨分氣を附けて、煩はぬや

うにさつしやれや。

久根　修業を仕上げた其上では、早く國へ歸つてござらつしやれや。

畑六　兎角物騷ゆゑ、何かに心を附けたがよいぞや。

法澤　そのやうに御親切におつしやつて下さりますと、私は涙がこぼれてなりませぬ、どうぞ村へお歸りになつたら、皆さんへようお禮をおつしやつて下されませ、有難うござりまする。（ト愁ひの思入）

田吾　さうこなたが歎かつしやると、わしらもどうも、去しともなうござるわいなう。

久根　泣いて居ては果しがない、法澤どのもそつと送らうとは思へども、お前がたつて辭退さつしやるゆゑ、爰でお別れ申します。

畑六　隨分無事で、

田吾　早う戻つて、

三人　ござらつしやれ。

法澤　有難うござります。

ト右の合方にて三人上手へはひる。法澤も禮を言ひながら見送る。跡かすめて浪の音、本釣鐘を打込み、千鳥笛をあしらひ、法澤につたり思入あつて、

法澤 あゝ、これでやうやく邪魔を拂つた、然し百をごまかすので、おれも口がすつぱくなつた。涙をこぼして、まるで彼奴等が我が子か何ぞのやうに別れを惜しんで行きやあがつたが、餘程馬鹿な奴等だなあ。我が子と言やあお三婆アを、居爐裡へのめつて死んだと見せ、その時盗んだ鼠取り師匠に呑まして効驗も早く、村の奴等を一杯はめ、是れから師匠の敵討と體よく家を出掛ける時路用の金までごまかしたは、とん〳〵拍子もまんがよく、開く武運も明方の昇る旭と諸共に、おれが爲には優曇華の花の葵の紋散らし、此短刀と墨附を證據にこれから江戸へ行き、將軍樣の御公達、こいつァ運が向いて來たわえ。何にしろ法澤は死んだ積りにこしらへにやあ、後日に知れる此の身の素性、どうか仕樣がありさうなものだ。

ト此時縫包みの犬三疋出來り、頻りに吠えかける、法澤捨ゼリフにて、有合ふ船のこはれの梶棒を取つて追廻しトヾ一疋の犬の鼻面を打つ、これにて犬倒れる。二疋は逃げてはひる。法澤は風呂敷包みの内より小刀を出し、倒れた犬を突き殺し葛籠の内より着物を出し、手早く着替へ、先きに着てゐた着物笈摺の所々小刀にて切り、仕掛けにて犬の血をつけ、犬を海へ打込み手を洗ひ、風呂敷にて手を拭き、其風呂敷もあたりへ捨て、二品の入りし藁苞を背負ひ、柄杓を持ち、伊勢參りのこしらへになり、袂より手紙を出し思入あつて、

師匠を殺した其の後で、思はず拾つた此の手紙は、國から家の久助へ親の病氣に迎ひの便り、こいつを爰へ落しておけば、敵とねらふ久助に爰で出逢つた法澤はかよわいことゆゑ返り討に、逢つたと村で思ふは必定、あゝ斯うも都合よく行くものか。それはさうと明けねえうち、成るたけ早く土地を放れにやあ、知つた者にでも逢つちやあならねえ、折角仕組んだ此の仕事、無駄になつちやあ詰らねえ。

ト言ひながら下手へ來る。此時久助頬冠りお霜吹き流しに冠り出來り、法澤に行き當り忍び三重にて三人ちよつとだんまり模様の立廻りあつて、トヾ鳥笛になり、久助お霜の手を取り、花道へ行く、時の鐘合方になり、花道より前幕の甚右衛門銅の小田原提灯を提げ出來る、法澤上手蘆原へ隠れる。久助お霜は甚右衛門と花道にて出會ひ、顔を隠し摺り抜けて花道へはひる。甚右衛門提灯をあげ、跡を見送り、

甚右　最早東雲近けれど、空も小闇くそれぞとは、確と知れぬが摺れ違ひし、今の二人は駈落せし正しく久助お霜の兩人、未だ爰等にさまよひ居るか。なせる罪とはいひながら、不便な二人が身の上ぢやなあ。

ト舞臺へ來り、以前の衣類に躓きびつくりなし、これをキツカケに黒幕を切つて落す。向う三段浪

手摺、灯入りの日の出の模樣、甚右衞門四邊を見て、

甚右　はて夥しき此の血汐、正しく人の切られし樣子。(ト衣類を見て、)やゝ、こりや感應院の法澤が昨夜までも着て居た衣類、村の者より遣りしとある蜘蛛の巣絞りの繻絆といひ、濱松染の小風呂敷、さては爰にて切られしか。死骸のなきは。(ト合點の行かぬ思入、そばに落ちてゐる手紙を拾ひ取り、)紀州平澤村感應院方にて久助どのへ、美濃大垣久左衞門。こりや下男の久助へ國許より送りし書狀、感應院を殺害なせしも、久助の仕業といひ、今又爰に法澤を殺害せしも、彼れが仕業か。(ト衣類を見て思入、)衣類に數ケ所の疵あつて、血汐の附きしは。(ト合點の行かぬ思入あつて、)如何なる巧みあつての事か。(ト此らち法澤手拭を冠り、甚右衞門の後を廻り花道へ行く。)はて、油斷のならぬ。

法澤　えゝ。(トぎつくり思入。)

甚右　むゝ。(トらなづくを木の頭。)世の中ぢやなあ。

ト浪の音、烏笛にて、正面へ紅絹張りの日の出を引出す、此模樣よろしく　ひやうし　幕

ト幕引附けると、法澤幕外にて振返り、につたり笑ふ。これを驛路の鈴、馬士唄になり、

法澤　伊勢參りに御報謝。
ト言ひながら花道へはひる、跡シヤギリ。

三幕目

美濃國木曾川の場
同長洞常樂院の場

〔役名——感應院弟子法澤後に徳川天一坊、山内伊賀亮、赤川大膳、藤井左京、常樂院天忠日信、同弟子天一、所化雲念、同西念、釣人三人。伊賀亮妻おさみ、洗濯屋娘おきぬ等〕

(美濃木曾川縁の體)——本舞臺高足の二重、草土手の蹴込み、正面在體の遠見、上下樹木の張物、花道附際より右の土手へ上り口を附け、二重の上所々に腰掛けの捨石、よき所に鵜沼木曾川堤といふ榜示杭、柳の立木、日覆より同じく釣枝、平舞臺は川の心にて浪板を並べ、總て美濃國木曾川べりの體、爰に○□△の三人、何れも漁師のこしらへにて、釣道具を携へ、捨石に腰を掛け、釣りをして居る、此模樣在鄕唄、浪の音にて幕明く。

○　ときに、けふはいつもと違つて、何だかさつぱり喰はねえなう。
□　此間の時化續きで、此通りの濁りだから、喰はねえのも無理はねえ。

△何にしろ退屈だ、まあ一服やらかさう。（ト火打にて火を打ち、三人煙草を呑みながら、）

○御の灰汁で指の先が、赤くなる程精を出すが、けふのやうに釣れねえぢやあ、何ぼ好きでも飽きが來るなう。

□鮒ッ子かたなごを釣つて、夜食の菜と思ひの外、これぢやあおかずにあり附けさうもねえぜ。

△然しこんなに釣れねえのは、まだ〳〵修行が足りねえのだ。假令時化の擧句でも、上手なら斯うでもあるめえ。

○その癖おらあ不斷から、釣りにかけちやあ天狗の方だが、けふばかりやあ不思議でならねえ。

□いや〳〵いくら天狗でも、釣れねえのが何より證據だ。

△やつぱりお前も下手といふ、折紙が附いたやうだぜ。

○さう下手々々と言つてくれるな、此の美濃にやあ海がないから、沖へ出る事は知らねえが、子供の時から岡釣りぢやあ、胼胝を切らしたおれだ。

□そんなに味噌を上げるなら、何ぞ目覺しい物を釣つて、ちつと手際を見せたがいゝ。

△昨日も爰で一尺からある、鯉を釣つた人があると、釣師仲間で話しがあつた。

○なに、そんな鯉がこゝ等で釣れるとか、それぢやあこれから一骨折つて、おれが腕を見せにやあ

ならねえ。

□　鯉の所は覺束ねえが、だぼ鯊ぐらゐは釣れるであらう。どれ、餌でも取替へて、おれが一骨折つて見ようか。（ト△川の中へ目を附けて見て、）

△　待て〳〵、何か引くやうだぜ。

○　成程、ちつとばかり喰ふやうだ。

□　そんな無駄口を利かねえで。

三人　これから身にしみて、やらかさう。

ト三人餌を直し、釣りにかゝる。薄く浪の音合方になり、花道より山内伊賀亮、五十日髪着流し一本差し、浪人のこしらへにて、深編笠を冠り、釣竿、畚、その外釣道具を携へ出來り、花道にて思入あつて、

伊賀　いつぞや都を退散なし、當所へ參りし其後は、浪人の身の爲すことなく、その徒然を慰めんと日毎にこれなる木曾川にて、魚釣る業がせめての氣晴らし、けふは思はず手間取つて、常より遲刻いたせしが、見れば堤に釣人が最早竿をおろせし樣子、あれへ參つてそれがしも、共に獲物をいたさうか。（ト右の合方にて伊賀亮舞臺へ來り、土手の上へあがり編笠を取つて、）皆の衆、お早うござん

したの。

ト三人伊賀亮を見て、

○ いや、これはいつもの旦那。

三人 ようお出掛けなされました。

伊賀 どうぢや、けふも釣れまするか。

□ いえ〳〵、雨擧句で濁りのせるか、けふはさつぱり喰ひませぬ。

伊賀 如何さま、此間の強雨にて、扨は川下へ下つたと見える。

△ まあこゝへお出でなすつて、あなたもお始めなされませ。

伊賀 然らば仲間へはひらうかな。

三人 さあ〳〵、こちらへお出でなされませ。

ト伊賀亮三人の側へ來り、捨石へ腰をかけ、捨ゼリフにて釣道具を取出し、餌をつけて、釣竿をおろし、

伊賀 火打ちがあらば貸して下され。

○ さあ〳〵、お附けなされませ。（ト摺火打を出す。伊賀亮火を打ち、煙草を呑み、）

□　かう見た所が旦那さまも、隨分釣りがお好きと見えますな。

伊賀　如何にも身共も釣りが大好き、こなた衆も皆好きと見えるが、いや斯うして居る其のうちは、我人共に餘念なく、心配苦勞を忘るゝゆゑ、是れが即ち極樂世界ぢや。

△　おつしやる通り釣りに出ますと、其の日一日氣が晴れて、實に壽命が延びるやうでございまする。

伊賀　身共などは浪人で、是れといふ用事もなければ、此川筋が遊び所で、明けても暮れても釣りばかり毎日缺かした事はござらぬ。

○　道理こそこゝ等あたりで、常にお目に掛ります、さうしてお宅はどちらでござりまする。

伊賀　都より當所へ參り、未だ宅はござらぬが、長洞の常樂院が知邊でござるゆゑ、愚妻諸共彼の寺に當時寄留の身でござる。

□　左樣なら旦那さまは、常樂院においでなされまするか。

△　あすこの御住持天忠さまも、出家に似合はぬ殺生好き、折々夜釣りでお見掛け申します。

伊賀　和尚もなか〳〵道樂もの、釣に限らず遊ぶことは、何でも好きといふ話しぢや。

○　隨分喰へねえ代物でござりますねえ。（ト□川の中を見て、）

□ 喰へねえといやあ、今のうちさつぱり喰はなくなつた。

△ とてもこゝぢやあ無駄だから、ちつと川下へ巣を替へよう。

○ 成程下へさがつたら、ちつとはどうかなるかも知れねえ。

三人 さあ〳〵、巣を替へよう〳〵。（ト三人手早く竿を上げ、釣道具を持つて立ち上り）

□ 旦那、あなたもおいでなされませぬか。

伊賀 いや〳〵、身共はたつた今、是れへ參つたばかりゆゑ、今少し辛抱いたさう。

△ 左樣なら旦那さま。

三人 明日お目に掛りませう。（ト浪の音、在鄕唄になり、三人は上手へはひる。跡 伊賀亮思入あつて）

伊賀 只今彼等が申せし如く、水に濁りのあるゆゑに、更に獲物もあらざるが、爰等が釣師の辛抱どころ。どりや、これから一人で心靜かに樂しまうか。

ト竿を上げ、餌を附直して又おろし居る。合方浪の音になり、花道より伊賀亮の妻おさみ、やつしなり、浪人の女房のこしらへにて、辨當の包みを持ち出來り、花道にて、

さみ 好きな道とて旦那どのは、毎日朝から釣に出て、戻りはいつも暮合過ぎ、あのやうに釣といふものは面白いものかいなあ。それはさうと、中食の包みを忘れて出やしやんしたゆゑ、跡から斯う

して持つて出て、うか〳〵と尋ねたれど、居所が知れぬは困つたもの、是れから向うの川筋を、まちつと尋ねて見ようわいなあ。（ト右の合方にて、おさみ舞臺へ來り、土手の上へあがり、伊賀亮を見て、）おゝ旦那どの、爰に居やしやんしたかえ。（ト伊賀亮見て、）

伊賀　おゝおさみ、何しに來たのぢや。

さみ　お前辨當をお忘れなさんしたゆゑ、嘸困つてゞあらうと思うて、跡から持て來ましたわいなあ。

伊賀　成程けふは忘れて出たゆゑ、實は當惑いたして居つたが、よく氣が附いて持つて參つた。

さみ　木曾川堤と聞くばかり、慥に居所が知れぬゆゑ、方々と尋ねたわいなあ。

伊賀　それは大きに大儀々々、まだ空腹にもならぬゆゑ、そこらへ置いてくれたがよい。

さみ　そんなら爰に載せておく程に、よい時分に喰べたがよいぞえ。

ト　おさみ辨當包みを捨石の上へ載せる。

伊賀　いや兵粮の用意が出來れば、戰をいたすも心丈夫、魚といふ敵を引受け、陣を張つたる此の手配り、そなたもちとこれへ參つて、合戰の樣子を見やれ。（ト是れにておさみ側へ寄り、畚など覗き、）

さみ　何ぞよいものでも、釣れましたか。

伊賀　いや〳〵、此間の強雨に恐れ、敵は深く隱れて居るゆゑ、まだ一疋も生捕らぬて。

さみ　そんならけふは今までかゝつて、まだ一疋も釣れませぬか、さういふ時にはいつまで居ても、大した事はない程に、けふはもうやめにして、又明日の事にしたがようござんす。

伊賀　兎角釣りの嫌ひなものは、そんな事を言つてならぬ、假令どれ程不漁でも、釣れるか〳〵と、斯うして氣長に待つて居る、その間が樂しみぢや。

さみ　何が樂しみでござんせう、此やうに寒いところで、川風に吹きさらされ是れが世にいふ骨折損、なんで是れが面白いか、わたしや合點が行かぬわいなあ。

伊賀　成程そちは女子の身で、釣の極意を知らぬゆゑ、さう思ふのもこりや尤も、此の樂しみは彼の下戸が醉覺めの水の味をば、知らぬと丁度同じことで、其身にならねば知れぬわえ。

ト是れにておさみ思入あつて、

さみ　さあ、釣の極意も醉覺めの水の樂しみも、わたしにはどういふ物やら知れませぬが、まだそれより日頃から、知れぬといふはお前の心。

伊賀　なに、身共が心が知れぬとは。

さみ　幸ひ四邊に人もなし、わたしのいふ事伊賀亮どの、まあとつくりと聞かしやんせいな。（ト合方になり、おさみ思入あつて、）改めいふには及ばねど、以前は名におふ京家に仕へ、世に時めきしお前

の身の上、餘儀ない事ゆゑ浪人して、都を立ち退きはるゞゝと、この美濃の國長洞の常樂院を心當に、夫婦の者が身を寄せて、しがなく月日を送るうち、人に勝れし其の器量を埋めて置くは惜いものと、所々方々から抱へに來れど、再び仕官の望みはないと來る人毎にすげなく斷り、明けても暮れても此やうに魚釣る業に浮き身をやつし、出世を願はぬお前の片意地、何か仔細があるかは知らねど女房のわたしが心では身の行末が案じられ、寐た間も忘れぬ此苦勞も、夫を大事と思ふゆゑ、然しそれも女子の淺はか、お前の心にもしひよつと、深い望みのある事なら、足らはぬながら連添ふわたし、どういふ譯やら打明けて、樣子を聞かして下さんせいなあ。

トおさみ思入あつていふ、伊賀亮思入あつて、

伊賀　はて改まつた其の尋ね、それ程仔細が聞きたくば、隨分申して聞かさうが、深き所存は少しもない、一旦浪人いたせしより、以前の勤めに引替へて結句此身の心安さ、先は安堵と思ふ所へ、諸國から家臣に抱へんと申して參る鬱陶しさ、勿論世上に並びなき大器量ある主人なら、直に仕官もいたさうが、取るに足らざる族ゆゑ、物によそへてすげなく斷り、主取りいたさぬ伊賀亮、僅な扶持に腰を屈め頭を下げるより、元より好きな殺生の此の樂しみに日を暮すは、世にへつらはぬ我魂、異見いたすは益ない事ぢや。(ト是れを聞きおさみ思入あつて、)

さみ　お前がさういふ心なら、わたし一人が氣をあせり苦勞したとて無駄なこと、善きも惡しきも夫につくが女房の習ひでござんすゆゑ、假令この儘朽ちるとも、皆それまでの約束と、思ひ定めて此後は、もう愚癡な事は言ひませぬ。とはいへ、其身の出世に見替へ、氣儘に釣がしたいとは、思へば是非ないお前の心。

伊賀　これが身共の病にて、惡い事とは思へども此道ばかりは捨てられぬ。然し周の世の太公望が天下を釣りし例もあれば、斯うして時節を待つうちに、運が開いてもしひよつと、よい幸ひが鉤の先へ掛るまいものでもない。

さみ　又しても其の樣なこと、どんな幸ひがあるか知らねど、最前から見て居る所、鮒一つも釣れず、是れで慰みになりますかいなあ。

伊賀　えゝ、くど〱とやかましい、釣りに話しは禁物ぢや。

さみ　口を利くのが邪魔になるなら、もう〱何も言はぬ程に、なるたけ早くやめにして、どうぞ戻つて下さりませ。

伊賀　せめて一疋でも釣れたなら、それを機に歸宅いたさう。

さみ　そんなら爰に待つて居ませう。（トおさみ伊賀亮の側へ寄り川の中を見て居る、此時竿へ何か當る心にて

伊賀亮これに目を附けよろしく思入、おさみも見て、）あれ〳〵、何か引きますぞえ。

伊賀　えゝ、存じて居るわえ。

ト伊賀亮よろしくあつて竿をあげ、玉網にて掬ひあげる、これにて二尺程の鯉釣れる。

さみ　それ〳〵、大きな魚でござんすぞえ。

ト鯉はね廻るを、伊賀亮押へて鉤をぬいて鯉の鰓へ笊の紐を通し、

伊賀　いや、斯ういふ鯉がこゝら邊で、釣れやうとは思はなんだ。

さみ　ほんにまあ、恐ろしい見事な鯉でござんすなあ。

伊賀　最前からあのやうに、釣れぬ〳〵と申すゆゑ、實は殘念と存じたが、これでやう〳〵念が晴れた今日はまあ是れまでとして、又明日の事にいたさうわえ。（ト伊賀亮釣道具を片附ける。）

さみ　そんならもう止めにして、是れから直に戻らしやんすか。

伊賀　辛抱した甲斐があつて、斯ういふ物が手に入つたれば、今日の獲物は澤山ぢや、是れを土産に歸宅いたさう。

さみ　そんなら一緒に戻りませうわいなあ。

ト此内伊賀亮道具を纏め、件の鯉と一緒にさげ、おさみは以前の辨當を持ち、兩人立ち上り、伊賀亮

鯉をつく／＼見て、

伊賀　然し思へば其方が、今も今とて夫の身の上、案じ煩ふその矢先き、不思議に手に入るこの獲物。

さみ　もしや夫婦の行末を、それと知らせの辻占も、よき幸ひを釣鈎に、かける見事な出世鯉。

伊賀　但しは魚の餌に迷ひ、釣り上げられて俎板に、滅ぶる此身の前表なるか。

さみ　何はともあれ善悪を、定め兼ねたる此辻占。

伊賀　善悪邪正木曾川の、

さみ　水の流れと人の身は、

伊賀　浮き沈みある世の習ひ、

さみ　凶事か吉事か知らねども、

伊賀　こゝらが物の。

ト思入、此時鯉はね出す。伊賀亮思はず投り出す、おさみびつくり飛び退く、是を道具替りの知せ、

知らせであらう。

トよろしく思入、此模様合方浪の音にて道具廻る。

（常樂院居間の場）――本舞臺一面の本舞臺正面銀張りの襖、上手一間床の間、掛物活花などよろしく、上手折廻し同じ襖、よき所に經机二つ、服臺に袈裟法衣載せてあり、總て長洞常樂院居間の體、爰に常樂院天忠日信、坊主鬘、鼠無垢の着附、丸ぐけ帶、更けたる住僧のこしらへにて褥の上に住ひ、此側に弟子天一、所化のこしらへ、外に雲念、西念の所化、何れも着附丸ぐけのこしらへにてよろしく住ひ、酒盛り道具、精進物の肴を取散らし、酒を呑み居る。此側に洗濯屋の娘おきぬ、近所の娘前垂掛けのこしらへにて酌をして居る、此の模樣「山寺の鐘つく撞木」の唄にて道具留る。

きぬ　さあ〳〵、お燗のよいのが出來ましたわいなあ。

天忠　そんなら一つ重ねうかな。（トおきぬ酌をして、天忠呑み、）やれ〳〵、けふはよい心持に醉うたぞ醉うたぞ。

天一　性得下戸の私さへ、お師匠樣のお相手で、大きに酩酊いたしました。

雲念　愚僧なども先刻から、お辭儀なしに頂戴したが、兎角おきぬばうの酌だから、一倍酒が旨いやうだ。

きぬ　其の口前のよい所で、もう一つお上りなさりませ。（ト雲念も西念も酒を呑み、）

西念　お袋には洗濯物を頼む、娘は酒の相手をさせる、何かに附けて、こなた衆親子は、寺で重寶しま

すわいなう。

天忠　これから毎日遊びに來て、相手をしてくれたがよい、假令肴は精進でも、酌ばかりは女でなければ、とんと酒がうまくない。

雲念　とてもの事にお肴に、生臭物がほしい、生臭物といつた所が、海が遠く鹽物より外に魚はなし。

西念　掛り人の伊賀亮どのが、けふも釣りに行かれたゆゑ、今に何ぞ川魚でも土産に持つてござるであらう。

きぬ　鮒でも釣つておいでなされたら、雀燒にして差上げませう。

天一　これに附けても思ひ出しますが、佐渡に居つた時分には、毎日魚に喰べ飽きました。

天忠　あすこは又島國で、四方が皆海だから、朝から晩まで魚づくめだ。

きぬ　左樣なら天一さまは、佐渡とやらにおいでなされましたか。

天一　お師匠さまと御一緒に、元は佐州相川郡尾島村の淨學院で、暫く修行いたして居ました。

天忠　それから愚僧が、此長洞の常樂院へ直る時、一緒に連れて參つたが、兎角故郷忘じ難しで、佐渡の事を思ひ出し、折々話しをいたして居るて。

雲念　年は若いが天一どのは、子供の時からさういふ所で、修行をしてござつたから、學問といひ經讀

むことさへ、我々より遙かに上手。

西念　それゆゑ不斷愚僧達は、とんと天窓が上りませぬ。

天忠　如何さま學問では叶ふまいが、其代り貴樣達は酒に掛けたら餘ッ程上手、呑む方では引けは取るまい。

雲念　成程それはおつしやる通り。酒の方では名僧知識。

西念　修行の積んだ行力で、どれ、もう一獻頂戴いたさう。

きぬ　さあ、お酌をいたしませう。

トおきぬ酌して、雲念西念酒を呑む、ばた〳〵になり、花道より所化走り出來り、

○　旦那さまへ申し上げます、赤川大膳と名乘るお武家、御面會を願ふとあつて、只今玄關先へ見えられましてござりまする。

天忠　又に赤川氏が參られしとか、苦しうない、是れへと申せ。

○　畏りました。（ト引き返して花道へはひる。）

天一　もしお師匠さま、お客とあれば酒宴は遠慮、一先づ爰を片附けませうか。

天忠　赤川氏は縁家ゆゑ、さのみ遠慮には及ばぬが、皆が氣詰りであらうから、次へ下げて呑んだがよ

い。

ト言ひながら、天忠袈裟法衣を着る。

きぬ　左様なら、一先づ爰を、

雲念　そつくり此儘、庫裡へ運んで、

西念　ゆつくり、氣儘にやらかさう。

きぬ　どれ、運びませう。

トやはり右の鳴物にて、酒盛り道具を運びながら、四人は下手の襖へはひる。此うち合方になり、花道より以前の所化案内して、赤川大膳ぶつさき羽織、大小浪士のこしらへにて出で、舞臺へ來り、所化下手へはひる。

大膳　天忠どの、暫くお目に掛りませぬな。（ト天忠を見る。）

天忠　これは／＼大膳どの、よくこそお尋ね下された。

大膳　其後は御無沙汰のみいたす。先以て貴僧には御健勝にて、恐悦至極に存じ申す。

天忠　そこ許にも、いつもながら御安泰にて重疊々々、何は然れそこは端近。さゝ、是れへお進み下され。

大膳　然らば、御免下されい。（ト大膳前へ進み、よろしく住ふ。）

天忠　さてお互ひに國を隔て久々面會仕らぬが、何は差おき御親父たる紋太夫どのゝ不慮な御最期、貴殿も長のお暇にて水府を浪人召されしと風の便りに承はり、蔭ながら愚僧にも種々お案じ申せしが、其風聞の趣きは、大膳どの誠でござるか。

大膳　いやもう世上の噂にて、薄々御存じの上からは、改め申すに及ばねど、父紋太夫身に取つて左程の悪事もあらざるに、聊かの越度を言ひ立て、黄門殿のお手討に相成り、家名断絶いたせし上、拙者ことも阿房拂ひ、是非なく國を立ち退きしが、佞人あつて殿へ讒言いたせしゆゑ、父を討たれて剰さへ斯く浪人せし口惜しさ、天忠どの、御推察下されい。

天忠　御心中の程察し入る、さりながら今更悔んで返らぬこと、歎くは益なき事でござる。して本國を離れてより、いづれに住居召されしぞ。

大膳　水府退散の其後は、暫く諸國を遍歴なし、終に伊豫國藤ケ岡に足を止め忍びしが、此度幸ひなる吉事あつて、此大膳が世に出る一つの手蔓を得たるゆゑ、縁家たる貴僧にも、よい幸ひを得させんと、態々お尋ね申してござる。

天忠　なに、此天忠に其許がよき幸ひを得させんとは、合點の行かぬ其の詞、して如何なる仔細なるぞ。

大膳　其の仔細別儀にあらず、此度やんごとなき御方と主従の契約なし、其家來と相なつて、出世を願ふ赤川大膳、既に其君は當院へお伴なひ申したれば、是れへ招待仕らん。（ト大膳下手へ來り、揚幕の方へ思入あつて、）やあ〳〵藤井左京どの、恐れながら我君を、是れへいざなひ奉られよ。

ト花道の揚幕にて

左京　委細心得申してござる。

ト音樂になり、花道より法澤、撫附鬘、白無垢直綴にて中啓を持ち、左京ぶつさき羽織、袴大小、浪士のこしらへにて、墨附と短刀の入りし二つの箱を持ち附添ひ出で、舞臺下手へ來り、法澤ちよつと大膳へ思入。

大膳　先づ〳〵。

ト是れにて法澤靜々と上手へ通る、大膳有合ふ經机を床几に据ゑる。法澤これへ掛ける、左京一つの經机へ二品の箱を載せ側へ据ゑる、大膳もよろしく住ふ。此うち天忠始終合點の行かぬこなしにて、ぢり〳〵と段々に下手へ下り、

天忠　大膳どの、是れへお入りの御方は。

大膳　忝なくも當八代の將軍家吉宗公の御落胤、吉之助樣にて渡らせたまふぞ。

天忠　なに、將軍家の御落胤とな。むゝ、はゝ。（ト天忠恐れて平伏なす。法澤思入あつて、）

法澤　かね〴〵赤川大膳より噂に聞きし、常樂院天忠坊とは、其方なるか。

天忠　はゝ仰せの如く、愚僧ことは當常樂院の住職、未だ俗家にありし頃、此大膳とは一家にて、即ち天忠と申すもの。

左京　その俗緣の貴僧ゆゑ、赤川氏の推擧にて、則ち今日我君の當院へ御越しありしも、疎かならぬ思召し。

大膳　これなる藤井左京どのと、兩人君の御供なし、伊豫の國より遙々と、これまで誘ひ奉りしぞ。

天忠　何は然れ、天忠身に取り思ひ寄らざる今日の仕儀、かゝる尊き御方に計らず拜謁仕つる、愚僧の面目これに過ぎず、大慶至極に存じ奉つる。

法澤　はて神妙なる其の詞、予は將軍家の落胤なれど、今日までも民家に潛み、世に便りなき身の上ゆゑ、心あき者を力となし時節來るを待つばかり、只今より其方も我に力を添へてくりやれ。

天忠　こは冥加なき其仰せ、天下の御落胤とあるからは、御身に隨ひ奉つるは此方より願ふ所、さるにても我君には、何れの地にて御誕生、又これまで何方にて、斯く御成長はましませしぞ。

法澤　何樣來歷を知らざれば、合點行かぬはこりや尤も、此身の生ひ立ち一通り、是れにて具に語り聞

かさん。

天忠　はゝ、はあゝ。(ト誂への合方になり、法澤思入あつて、)

法澤　そも予が父は其昔し徳太郎と名乘りたまひ、其頃紀伊家の家老たる加納將監に養はれ、やゝ人と成りたまひしが、加納が許にわが母は澤の井といふ腰元にて、父と語ひ懐姙なし、其折後の證據に志津三郎の短刀と自筆の墨附を貰ひうけ、直さま紀州和歌山の平澤村へ立ち歸り、程なく月滿ち出産なせし其の幼子は即ち此身、母は産後に世を去りて乳母の乳房に成長なし、時節を待つて忍びしが、其後父は紀州家を相續、間もなく天下の主人となり、當時八代將軍職と仰がれたまふ上からは、我が運命の開くる時節と、心の内に飛び立つ思ひ、證據の二品持參なし此身の素性を名乘り出で、父のお顔を拜したく、少しも早く江戸表へ發足いたす所存なるぞよ。

ト法澤思入あつていふ。

天忠　逐一仔細を承はれば、實に明白なる御身の素性、假令民家にお育ちあるとも、正しく徳川家の若君なれば、これ御血統の御嫡男。して御證據の品々は、何れへ差置きたまひしぞ。

左京　その二品は我君が暫時も御身を離したまはず、則ちそれがし守護なして、是れまで持參仕づる。

法澤　それ大膳、天忠に拜見させよ。

大膳　はツ。〔ト件の二品の箱を經机へ載せしまゝよき所へ持出し、〕君の上意、天忠どの、證據の二品拜見召され。

天忠　はゝツ。

ト天忠平伏なす。大膳箱の内より墨附を出し、押し開き見せる、天忠顏を上げ拜見する事あつて、大膳元の如く卷き納め、又葵の紋散らしの短刀を出し見せる、天忠これを拜見なしよろしくあつて、

はゝはツ、御證據の二品、篤と拜見仕つてござりまする。

大膳　斯かる正しき品なれば、是れぞ證據に江戸表へ、御身の來歷訴へ出でなば、天下の世繼ぎにならせたまふか、又御三家同樣の御家門となりたまふか、何れの道にも我君の御開運は目の當り、さるに依つて貴僧をも、御家臣の列に加へ、共に榮華を得させんと、それゆゑ推擧いたせしも、此大膳が一つの寸志。

左京　今より幕下に屬し奉り、長く忠勤盡されなば、主君の御爲二つには、臣等が悅び此上なし。

法澤　我世に出でし其上は、其方にも所領を與へ、必ず取立て遣はす程に、予に仕へる心あらば、行末長く奉公いたせ。

天忠　仰せにや及ぶべき、此身の出世は扨おきて、君を世に出し奉るは、天下へ盡す則ち忠節、無智

法澤 短才の愚僧なれど、今より御家臣とめさるゝ上は、及ばずながら力を盡し、君に隨ひ奉らん。

天忠 すりや、隨身なす所存とな。

大膳 何卒御譜代同樣に、御召使ひ下さるやう、偏に願ひ上げ奉つる。ト(天忠平伏して言ふ。)

左京 これにて我々も一つの安堵、博學多才の天忠老が御家臣の列に加はる上は、君にも嘸かし御滿足

天忠 此上は主從の因みを結ぶ御杯、御用意あつて然るべし。

大膳 委細承知仕つる。さりながら爰は端近、穢れを厭へば本堂にて。

左京 なにさま、御身の開運、佛陀の力を御祈念の爲。

天忠 御堂の内へ御座を移さん。

法澤 左樣ござらば、我君樣。

大膳 然らば案内。

三人 先づ御越し。

遊ばしませう。

ト音樂になり、法澤先に三人附添ひて、左京以前の二品を持ち、上手襖のうちへはひる。やはり音樂にて道具廻る。

（常樂院本堂の場）＝本舞臺四間通し常足の二重、塗り框の蹴込み、二重前面の所より朱塗りの柱を建て、繧繝彩色の大欄間、これより御簾をおろし、内陣を隱し後に卷上げること、上下蓮をゑがきし杉戸、平舞臺一面高麗緣の薄緣を敷き、總て常樂院本堂の模樣、やはり音樂にて道具留る。と下手より以前の天一、袈裟法衣になり、三方土器を持ち、續いて雲念西念の所化やはり袈裟法衣にて長柄の銚子、昆布を載せし三方を持ち出で、眞中へ置き、三人とも奥へはひる。上手より大膳左京出で、上の方へ住ひ、下手より天忠出で、下の所へ控へる。

左京　天忠老、お進みなされい。

天忠　はツ。（ト前へ出る。大膳御簾の内へ思入あつて、）

大膳　我君へ申し上げます、御杯の用意仕つてござりまする。

ト又これにて音樂になり、二重の御簾をぢり〳〵と卷きあげる、正面奥深に尊像の飾り附、須彌壇三ツ具足、箔置き蓮の造り花、其外佛具一式、旗天蓋などよろしく、此前の所讀經座の二疊臺、左右に銅羅鐃鈸經机などよろしく、件の二疊臺の上に法澤住ひ、以前の二品經机に載せてあり、大膳左京シイと聲をかけ、天忠はつと平伏なす、大膳件の土器を法澤の前へ持ち行く、左京酌をして法澤一ツ呑み、

法澤　天忠へ杯取らせい。

大膳　はッ。（ト天忠の前へ杯を持ち行く、）我君よりの御杯、幾久しく頂戴召されい。

天忠　仰せに任せ。（ト天忠杯を取上げる、左京酌をなし天忠呑んで、）はゝはツ、君のお流れ、有難く頂戴仕つてござりまする。（ト平伏なす、法澤思入あつて、）

法澤　これにて主従三世なるぞ。

天忠　御懇の上意、大慶至極に存じ奉りまする。（ト大膳思入あつて、）

大膳　先以て天忠どの、斯く御家臣と事極らば、此三人は則ち御譜代、思へば今まで我々が、浪人の寄邊なく生計に迫り盜賊なせど、生涯これにて朽ちんこと殘念なりと思ひしに。

左京　藤ケ岡にて計らずも、一旦敵たひ奉りしが、御身の素性承り、降參なして其後は主君と仰ぐ我我ども。

天忠　愚僧も實は其昔、此身に積る舊惡に行末如何と思ひしが、今日只今御落胤の幕下に屬せし身の本懷。

大膳　是れより三人心を合せ、君を守護なし奉り。

左京　將軍家の御膝許へ、やがて御供仕つれば、

天忠　恐れながら我君にも、必ず御安堵。
三人　遊ばされませう。（ト此内法澤三人へ目を附け、思入あつて、）
法澤　赤川大膳。
大膳　はツ。
法澤　藤井左京。
左京　はツ。
法澤　常樂院天忠。
天忠　はツ。（ト三人頭を下げる。）
法澤　八代將軍吉宗公の、御落胤とおれが見えるか。
大膳　なに、御落胤と、
三人　見えるかとは。
法澤　天忠坊はいふに及ばず、赤川藤井の二人さへ、今の今までたばかつたが、御落胤とは僞りだ。
三人　何と。
法澤　實はおらア僞者よ。

三人　えゝゝゝ。（トびつくりなす。）

法澤　然も紀州の平野村で、感應院といふ修驗者に、取り上げられて弟子となり、法澤といつた小坊主だ。

大膳　すりや、證據の品も。

三人　僞物なるか。（ト三人きつとなる。）

法澤　いや、證據の二品は僞物ぢやあねえ、眞物だ。譯を話して聞かさうから、まあ下に居て聞いてくれ。（ト誂への合方になり、法澤尻をまくり胡座をかき思入あつて、）其の落胤と年月も同じ生れのおれが身は、長州毛利の浪人で、紀州城下へ流れて來た原田嘉傳治といふ武士の悴、然も其名も玉之助、七夜の内にお袋が產所で死んでそれからは、親父の手しほで育つたが、七ツの年にこれも死に、便りのねえを感應院が不便と思ひ弟子にして、名も法澤と改めたが、加納の屋敷で將軍の胤を孕んだ澤の井も、平澤村で產み落し、赤子と一緒に死んだゆゑ其お袋のお三婆アが、丁度似寄りの年頃と、おれを見る度わが孫を思ひ出して素性を明かし、うつかり見せた墨附短刀、こいつを種に名乘つて出で、立身仕ようと惡心が、ふつと浮かんで婆アを殺し、手もなく二品盜み取り、其晩師匠の感應院に毒を呑ましてこれも殺し、有金殘らずかツ攫つて、色事ゆゑに駈落した

久助といふ飯炊に、證據を殘して罪を塗り附け、師匠の敵が討ちたいと所の者を體よく騙し、旅へ出掛けた其途中、加田の濱邊で吠えかゝる犬を殺して着物に血を塗り、繻絆と共にづた〳〵に切れて四邊へ久助の、國から來たる手紙を落し、其場でおれが殺されて海へ死骸を捨てたやうにすつかりばかして九州へ船を頼んでそれからは、法澤といふ名を隱し、生れ替つた料簡で時節を待つて熊本に、暫く忍んで隱れて居たのよ。

ト思入あつていふ、三人呆れしこなしにて、

大膳　聞けば聞くほど大膽不敵、さては誠の落胤と、思ひしおのれは眞赤な僞者。

左京　丁度似寄りの年頃ゆゑ、證據の二品盜み取り、

天忠　素性を騙り立身する、深い企みであつたるか。

大膳　してまた、それより伊豫の國、我等の住みし藤ケ岡へは、如何いたして參りしぞ。

法澤　さあ、あすこへ行く氣はなかつたが、よつほど月日もたつたゆゑ、もう法澤の餘熱の冷めた時分と熊本の、加納屋といふ商人で、掠めた金を六百兩、何かの用意と身に附けて、去年の暮に新造の天神丸へ乘込んで、大阪へ出る渡海の船中、しかも四國の沖合で新富士おろしの颶風を喰ひ、岩へ當つてばら〳〵と碎ける船に乘組みて底の藻屑となる中に、運の強きはおれ一人四邊の岩へ

打ち上げられ、命を拾つて火影を便り、藤ケ岡の山中へ一夜の宿を頼んだは、赤川藤井の隠れ家にて、賊徒の集まる地獄谷、金があるゆゑ怖氣立ちそつと夜寒の枕許、軒の氷柱がひいやりと襟に冷たい氷の刃、既に命を取らるゝ所、此の二品で將軍の落胤なりと僞つて、とう〳〵二人を味方に附け、惡事に附いては名僧と噂に聞いた天忠まで、一杯喰はせた上からは、定めて天下の役人もおれを僞とは氣が附くめえ、やがて企みが成就すりやあ、其時こそは三人とも萬石取りの家老職、それ樂しみに味方をするか、それとも一杯喰つたのが、腹が立つならおれを殺せ、どうで一度は死ぬ體、命は惜しまぬ今宵で、生かすか殺すか片を附けやれ。

ト法澤づら〳〵しくいふ、三人顏見合せ思入あつて、

大膳　いや、驚き入つた其の魂、今の今まで落胤と、僞り果せて我々を、降參させて味方に附け、

左京　家來となしたる其上にて、落胤ならぬ僞者と、種を割りしは勝れた器量、

天忠　惡事はすれど我々が、中々及ばぬこなたの大膽、その魂に惚込んで僞を承知で、

三人　一味いたさう。

法澤　むゝ、そんなら僞を合點で、おれが企みに半肩乘るか。

大膳　如何にも事が露顯なさば、命を捨つるも合點で、

左京　その時こそは共々に。

天忠　立派に首を、

三人　並べる覺悟。

法澤　さう聞く上は三人を、是れから力に何かの相談。

天忠　此企てに幸ひなるは、先達てより當院へ、仔細あつて寄留なす、元關白家の家臣にて、山内伊賀亮といふ者、京家の事をよく心得、才智も衆に勝れしゆゑ、彼れを一味に引入れなば、味方の強味此上なし。

法澤　すりや、關白家の浪人が、

大膳　此の院内に居るとあれば、此の企てには最屈竟。

左京　殊に才智の者とあれば、天忠どのゝ取持ちにて、

法澤　どうぞ味方に、附けたいものぢやなあ。（ト法澤初め皆々思入、此時奥にて、）

伊賀　あいや、其の企てには一味いたさぬ。

三人　何と。（ト合方きつぱりとなる、奥より以前の伊賀亮着流し大小にて出來り、よき所へ住ひ、）

天忠　こりや伊賀亮どのには、何時の間に。

伊賀　今日も朝から寺を出て、魚釣る業に現をぬかし、只今戻つて襖越し、此場の様子を立聞きいたした。

法澤　さては貴殿が、山内伊賀亮といふ浪士なるか。

伊賀　以前は京家へ仕へしが、仔細あつて身退き、只今にては天竺浪人。

天忠　貴殿の才智慕はしく、此の企てに頼みたいが。

法澤　して又味方に、

三人　附かれぬとは。（ト伊賀亮思入あつて、）

伊賀　祿を與へて抱へんと、諸家より申し參れども仕官いたさぬ伊賀亮、素性正しき將軍の御落胤なら知らぬこと、賤しき生れの其方が、あざとき巧みの企てに、合體なすこと思ひも寄らぬ。

法澤　すりや、僞者のおれゆゑに。

伊賀　味方に附くこと罷りならぬ。（トきつぱりいふ、大膳左京思入あつて、）

大膳　大事を聞いた其上に、味方に附かぬとあるからは、生けてはおけぬ、

三人　覺悟なせ。

ト大膳左京刀をぬき切つてかゝる、伊賀亮扇子にてあしらひ、兩人の小手を打つ、兩人たぢ〳〵と

なり、又切つて掛るを、法澤直綴をぬぎ捨て、二重よりつか〳〵と下り、兩人を留め、

法澤　いや、二人とも待つてくれ。

二人　それぢやといふて。（ト息込むを、）

法澤　いやさ、さうでもあらうが、待つてくれ。（ト兩人控へる、法澤思入あつて、つか〳〵と行き伊賀亮の下手へどつかと座し、）伊賀亮どの、わしが首を取つて下せえ。

伊賀　何と。

法澤　さあ、賤しい生れの此のおれが、吉宗公の落胤と、是れまで仕組んだ企ても、證據の墨附短刀が僞物でねえばつかりに赤川藤井はいふに及ばず、常樂院まで味方に附け、いよ〳〵江戸へ名乘つて出りやあ十が九つ大丈夫と思ふ矢先へこなたの噂、よしある武士と聞くからは、そいつアおれの片腕と思ひの外に不承知で、味方に附かぬと言はれるのは取りも直さずおれへの異見、すつかり大事を立聞きされ、訴人されりやあ今までの手に手を盡した魂膽も、役に立たぬ骨折り損、おれが運も最う是れまで、物は見切りが肝腎だ、此の企てが無駄になりやあ、有つて益ねえおれが命、初めて逢つた近附きがてら、熨斗を附けて進ぜるから、此首打つて二品添へ、將軍樣へ訴へて、こなたの手柄にして下せえ。

ト法澤首を延して覺悟の思入、伊賀亮これへ目を附けこなしあつて、

伊賀　いや、其の首は所望でござらぬ。

法澤　何と。

伊賀　伊賀亮、味方いたさう。

法澤　なに、味方するとは。

伊賀　一命投げ出し覺悟して、巧みに巧みし企てを、思ひ切つたる魂は、年に似合はぬ大丈夫、左程根強き一心なら、大望成就疑ひなし、惡事と知つて合體なし、今より力を添へ申さん。

法澤　すりや、最前の詞に引替へ。

大膳　この企てに、

三人　荷擔あるとか。

伊賀　如何にも。

法澤　それでやう／＼落着いた。（ト法澤ほつと思入。）

天忠　最前よりの此場の納まり、如何ならんと氣遣ひしが、

大膳　器量勝れし伊賀亮どの。味方に加はりたまふ上は、

左京　龍に翼を得たる如く、大望成就の此の吉瑞。

伊賀　何はともあれ將軍家の、御落胤と崇むる上は、僞物ならぬ我が御主君、御同席は恐れあり、

四人　設けの席へ。

ト誂への羯鼓入りの合方になり、法澤が手を取り、以前の二疊臺の上へ直らせ、皆々平伏なし、二

皆々　はゝ、はゝ。

法澤　萬卒は得易く一將は得難しと、汝を家臣となしたるは、返すぐも予が悅び、京家の武士と聞くからは行儀作法を我々に敎へ、萬事の指圖を賴むぞよ。

伊賀　はゝツ、恐れ多き其の仰せ及ばずながら伊賀亮、君を補佐なし奉れば、必ずお氣遣ひあるべからず、さるにても今改めて拜謁なせば、當將軍吉宗公、御幼年の御面體に何處となく似させられ剩へ御聲までそれと均しく思はるゝは、時に取つての幸ひにて、虛を以て實を傳へ天下を欺く則ち前表、諸事萬端御任せあらば、猶も工夫を廻らして、御身の榮華を計り申さん。

大膳　流石は伊賀亮どのゝ其の一言、賴もしゝゝ。さりながら爰に一つの難儀といふは、やがて江戸表へ出府なし、御身の來歷詮議の折、紀州に於て御誕生のその一埒は仔細なけれど、それより後は何れにて御成長と問はれし時、事明白に答へざれば疑ひ受けんは必定なり、此儀を如何仕らん

ト大膳當惑の思入、

伊賀　如何にも貴殿の言はるゝ如く、御成長の地を何れと定め、まつた法澤の二字を押し隠し、外にお名を設けざれば、必ず事の破れとならん。

左京　こりや、一工夫いたさねば相成りますまい。（ト皆々思案のこなし、天忠思入あつて、）

天忠　おゝ、それにこそ好き手段あり、其儀は愚僧にお任せあれ。

三人　すりや、貴僧が。

天忠　如何にも、一工夫ござる。（ト奥へ向ひ、）やあ、天一は何れに居る、早參れ。（ト奥にて、）

天一　はあゝゝ。（ト下手の杉戸より天一出て、手を突く。）はツ、御用にござりまするか。

天忠　おゝ、用事がある、是れへ參れ。

天一　はツ。

ト天一何心なく側へ來るを、天忠手早く引附け、しきんを取つて首をしめる、天一藻掻いて落入る、皆々びつくりして、

法澤　やゝ、天忠には、

大膳
左京　何ゆゑに。

天忠　出家沙門の身を以て、殺生戒を破りしも、則ち一つの御奉公。
伊賀　はて、惡事に長けたる天忠老、所化天一の名を奪ひ、君へ捧ぐる所存なるか。
天忠　仰せの如く愚僧が計策、元此者は佐渡の國、相川郡尾島村淨覺院の門前にて捨子となりしを我が師匠が、拾ひ取りて養育なし、師匠歿後に天忠が同道なして當所へ來り、外に身寄りとあらざる者、天一の名を其儘に君のお名となしたまひ、佐州に於て御成長と、御身の來歷僞はろとも、誰れ憚ろ所なし。
法澤　流石は天忠天晴妙計、すゝめに隨ひ我が素性、則ち佐州の生立ちにて佛門の身と世上へ流布なし終には天下へ一人の名を輝かす天一坊。
左京　片時も早く江戸表へ。
伊賀　あいや、江戸には老中始め、才智勝れし諸役人、中にも當時名奉行と衆人擧つて噂なす、大岡越前守控へ居れば、迂濶に參るは危ふし〳〵、一先大阪の地へお供なし城代奉行を欺いて、其虛に乘じ京地へ立越え、權威を以て諸司代をたばかり果せ、其上にて折を見合せ、江戸表へ御出府あるが上策なり。
法澤　然らば汝が詞に任せ、先づ大阪へ立越えんが、我が身の出立ち供廻り、其の行列は如何なさんや。

伊賀　其儀は拙者が若年より、關白家に仕へしゆゑ、官職の儀を辨へ居れば、路次の警衞行列は、逐一お指圖仕らん。

法澤　して、又我に相當の官位は。

伊賀　當時將軍吉宗公には、右大臣にて渡らせたまへば、君は宰相の御身なれども、佛門なれば僧官にて、權僧正が相當せり。

大膳　その官位にて、御出府あらば、

左京　供奉の同勢、器物は如何に。

伊賀　その行列の次第を申さば、則ち葵金御紋の飴色塗りの先箱に濃紫の化粧紐をかけ、三箱雁行に歩ませ、續いて、歩行の侍は二行に並び二十人。

天忠　して、其次は。

伊賀　麻上下を着したる、近習侍二十人、是れも二行に列を正し。

大膳　その又次は。

伊賀　則ち證據の墨附短刀、黑蠟色に金葵御紋散しの唐櫃に、紫羅沙の上覆かけ、前後の警固は上下の侍。

左京　扨その次は打物なるか。
伊賀　如何にも金梨地に御紋散らし、是れも紫の雨覆かけ。
法澤　して又我が乘る乘物は。
伊賀　此正忠が所存あつて、一品親王の乘輿に用ふる、飴色網代蹴出しの乘物。
法澤　その折着する衣服は如何に。
伊賀　紗綾形綸子の御召に、白茶錦の丸ぐけ帶、純子の直綴精好の法眼袴。
天忠　して法衣の時は。
伊賀　やはり白衣に、法服は藤色紗の僧護仕立。
大膳　して又袈裟は。
伊賀　古金襴の七條の袈裟。
法澤　用ふる念珠は。
伊賀　水晶にして藤色房。
左京　して〳〵扇は。
伊賀　褄紅の中啓なり。

天忠　して乘物の其次は。
伊賀　茶瓶手桶雨具は更なり、行列人數の增減は、時に取つての次第あり、其時により伊賀亮が一々御傳授仕らん。（ト伊賀亮思入あつていふ、法澤始め皆々感服のこなし。）
法澤　はて、天晴なる答への趣き。
大膳　我々どもが、
三人　及ばぬ事。
法澤　先づこの如き出立に、萬端整ふそれまでは、暫く當所に足を留め、百兩に附き百石の墨附を與へて愚民を惑はし、多くの金子を掠め取らん。
伊賀　それぞ則ち三ケの都へ、御乘出しの御用金。
大膳　やがて我々御供なし、人數美々しく。
三人　御發足。
法澤　その手始めに、今宵は夜と共。
伊賀　萬歲謳ふ祝ひの御酒宴。
左京
大膳　幸ひ以前の御杯。（ト兩人以前の銚子杯を取出し、法澤の前へ直す、天忠思入あつて、）

天忠　かゝる目出度き折なれど、寺院の事ゆゑ魚類もなく、はて何をがな。（ト此時奥にて、）

さみ　そのお肴は、只今それへ。

ト下手の杉戸より、おさみ無地紋附に着替へ、白木の臺へ以前の鯉を載せ、持出てよき所へ置く、

天忠　誰かと思へば、伊賀亮どのゝ御内室。

左京
大膳　して、是れなる魚は。

伊賀　これは今日木曾川にて、拙者の鈎にかゝりし獲物。

さみ　最前よりの一部始終お次に於て承はり、夫伊賀亮が今日より君と崇むる御方の、御身を祝ひし捧げ物。

法澤　すりや其方が欵待なるか。

さみ　心ばかりの品なれど、お受けなされて下さりませ。

法澤　はて過分なる志し、底意も深き谷川にて、漁り得たるその品は、取りも直さず主從の誼を結ぶ魚と水。

伊賀　濁らぬ君を祝したる、鯉龍の故事にあらずして、

さみ　御運も開く幸先に、

大膳　然も出世の魚と聞く、
左京　鯉は則ち鱗の、
天忠　司とあれば御身の吉瑞。
法澤　今時を得て龍門の、
伊賀　瀧へも昇る、
皆々　御勢ひ、
法澤　これを肴に、一獻汲まん。（ト法澤杯を引寄せる。）
雲念
西念　様子は聞いた。（ト行き掛るを、大膳左京兩人を引戻し、）
大膳　こやつ二人は、
左京　此場の血祭り。（ト拔き打ちに浴びせる、是れにて件の鯉跳れ上る、伊賀亮扇にてちよと押へ附ける。）
伊賀　はて、勇しき、
皆々　君の御威勢（ト大膳左京刀を引く、兩人見事にかへる。）
法澤　むゝ、目出度い。（ト杯を出すを、木の頭、）目出度い。
ト法澤笑を含む、おさみ酌をする。伊賀亮平伏なす。大膳左京刀を後へ隠し、天忠共々法澤を敬ふ

こなし、此模樣よろしく、本釣鐘の寺鐘にて、

ひやうし幕

四幕目

大岡屋敷の場
同無常門の場
常磐橋外の場
小石川館の場

〔役名〕――大岡越前守、平石治右衛門、吉田三五郎、池田大助、山野邊主税、土屋六郎右衛門、久保見李四郎、田口千平、足輕運平、同權平、諸士五人、水府綱條公、大岡奥方小澤、腰元四人、大岡嫡子忠右衛門。〕

（大岡邸奥の間の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面白地菊形の襖、上下兩棲とも同じ襖、下の方一間廊下の板羽目、總て大岡邸奥の間の體、爰に一、二、三、四の袴一本ざしの諸士四人、枠火鉢を取卷き居る、此の見得調べにて幕明く。

一　何といづれも、此度老中方へ願ひ出でたる天一坊一件は、容易ならざる事でござる。

二　されば、名に負ふ將軍家の御落胤なりと僞る曲者、證據となるべき御墨附御短刀を所持なし居る

故。
三　是れまで大阪御城代、まつた京都所司代も、煙にまかれて誠と思ひ。
四　彼の地で尊敬いたせしゆゑ、其虚に乗じ道中にて、酒井侯に土下座をさせ。
一　跡より品川八ツ山へ美々しく旅舘をしつらひて、恐れ多くも徳川の御姓を名乗る天一坊、
二　此程より老中出頭たる伊豆守殿の御宅にて、證據の品を検分せしに、御自筆に相違なきゆゑ、
三　何れも誠の御落胤と、又もや江戸でも欺かれ、右の趣き將軍家へ老中方より進達なし、
四　近々御親子の御對顔と申す事なれど、御主人に見所あつて、再吟味を老中方へ願へども、
一　伊豆守殿初めとして、何れも誠と思ふゆゑ、再吟味を願ひ度くば自身に願へとあるゆゑに、
二　止む事を得ず御主人には、今日上へ直々に再吟味を願はんと、今朝早く御出仕ありしが、
三　いまだに御下城ござらぬは、首尾よく御免の御沙汰ありしか、但しは上にも伊豆殿同樣、
四　誠御落胤と思召し、再吟味のお許しなきか、兎にも角にも殿中の、御左右を早く承はり、
一　安心したい、
四人　ものでござる。（トばた／＼になり、花道より諸士、袴大小股立にて出來り、）
侍　何れも、是れにござりましたか。

一　おゝ、兵藏どの歸られしか、御城の樣子は。
四人　如何でござる。
侍　御城の樣子は散々でござる。
二　すりや、御許しは、
四人　ござらぬか。
侍　御許し所か御前には、將軍家の御不興蒙り、只今御下城でござりまする。
三　將軍家の御不興を、蒙りたまふは一大事、
四　奧樣はじめ用人衆へ。
一　少しも早く申し上げん、何れもござれ。
ト調べにて四人先に侍附いて下手へはひる。と花道の揚幕にて、
呼ビ　御歸り。（トこれをキツカケに、床の淨瑠璃になる。）
〽はやお歸りと玄關で、呼びつぐ聲と諸共に、一間の内より出迎ふ用人、邪正を糺す裁判の道に明るき大岡侯も、願ひ叶はず身に暗き、御不興うけてすご〳〵と、物思ひ氣に立歸れば。

ト此うち上手より、平石治右衞門、吉田三五郎、池田大助、いづれも繼上下一本差しにて出來り、下寄りに出迎ふ。花道より大岡越前守、上下一本差しにて出來る、跡より小姓袴なり紫の伏紗にて越前守の刀を持ち、附添ひ出來る、越前守花道にて三人を見る、三人はツと平伏する、越前守思入あつて舞臺へ來り上手へ通る。

治右　御前樣には御機嫌よろしく、只今御下りで。

三人　ござりまするか。

〽主人の樣子伺へど、たゞうなづいて物をも言はず、刀を取つて座に附きて、

ト大岡うなづいて小姓の刀を取り、奥へ行けといふ思入、小姓はつと下手へはひる、大岡下に居て、

越前　平石治右衞門。

治右　はッ。

越前　吉田三五郎。

三五　はッ。

越前　池田大助。

大助　はッ。（ト三人辭儀をする。）

越前　さて、殘念な事ぢやわえ。

〽嘆息なして吐息をつけば、

治右　すりや、再吟味のお願ひは。

三五　上の御許容、

三人　ござりませぬか。

越前　むゝ、伊豆殿はじめ老中方、一旦調べ相濟みしを、よしなき事をと誰あつて取持つものもあらざるゆゑ、餘儀なく今日出仕なし、上へ御願ひ申せしに如何なる詞の間違ひやら、殊の外なる御立腹にて、それがし君の御不興蒙り、賴みの綱も切れ果て、力なく〳〵歸りしぞ。

治右　上の御不興蒙り、御歸りあるからは、

大助　如何なる御沙汰あらんも知れず、

三五　容易ならざる一大事。

越前　科はなけれど御不興を蒙る上は閉門の、今に御沙汰があるであらう。

治右　然しながら御名將と、噂の高き八代樣、

三五　殊には日頃御前をば、一方ならぬ御贔屓ゆゑ。

大助　われ〳〵共は寛大の、御處置あらんと存じまする。

越前　假令君より寛大の御沙汰あるとも老中方、我が再吟味をよしなき事と、邪魔に思ひ居る所へ、是れ幸ひと出仕せぬやう、閉門の御沙汰あるであらう。

〽御閉門に極まるかと、主從溜息つく折柄、（ト皆々ちつと思入、花道の揚幕にて、）

呼ビ　御上使。

越前　待ち設けたる上使の入來、正しく此身の閉門ならん。（トきつと言ふ。）

大助　三五、すりや、御閉門の上使とな。

治右　あゝこれ、善惡知れざる此御上使。

越前　何はともあれ上使とあらば、三人共に出迎へいたせ。

三人　畏つてござりまする。

越前　粗畧なきやう。心を附けい。

三人　はツ。

〽はツとばかりに出迎へば、程なく土屋六郎右衞門。

ト序の舞になり、花道より土屋六郎右衞門、上下大小にて出來り、花道へ留る。

越前　これは〳〵土屋氏には、御上使御苦勞千萬にござる。
六郎　老中方の命を蒙り、土屋六郎右衞門、上使に罷り立つてござる。」
越前　俄の事ゆゑ設けもなけれど、いざ先づ是れへ、
三人　御通り下さりませう。
六郎　役目なれば、御免下され。
〽威儀を正して靜々と、上座へ直れば、一禮終り。
ト土屋舞臺へ來る、越前守會釋し、上手へ通り、床几に掛かる、
越前　土屋氏には上使の趣き、仰せ聞けられ、
三人　下さりませう。
〽いふに土屋は懷中より、御書取出し押し開き、(ト土屋懷中より立文を出して開き、)
六郎「今般將軍家御落胤、天一坊殿御身の上、老中伊豆守役宅に於て、御出產より御成長の今日までの御住所調べ、御墨附御短刀御證據の品相違なく、近きに御對顏あるべき所、越前守遮つて老中の調べ相もどき、再吟味願ふ段、以ての外なる事ゆゑに、既に筋違ひとの御諚に依て、今日より出仕を止め閉門申附くるもの也。」

〽詞すゞしく讀み終れば、扨はと驚く臣下の三士、越前守はかねての覺悟に、

ト土屋は讀み終り、懷中する。三士は顏見合せ思入、越前守は顏を上げ、

越前　御上使の趣き、委細畏り奉りまする。

治右　すりや、再吟味を願ひしが、

大助　越度となつて今日より、

三五　閉門仰せ附けらるゝとな。（ト三人殘念なる思入。）

六郎　申すまでもござらぬが、閉門中謹愼あつて、再度の御沙汰を相待たれよ。

越前　はツ。

〽はツとばかりに差しうつ向けば、土屋は席を改めて、

ト土屋は庄几を下り、上手平舞臺へ住ひ、合方になり、

六郎　上使の役目は最早これまで、扨越前守殿の御心中、六郎右衛門御察し申す。何をいふにも出頭たる伊豆守殿を初めとして、老中一同誠と思へば、上にも御覺えある事ゆゑ御對顏を急がせたまへば、近日御對顏あるでござらう。事の序に承はりたきは、天一坊の御身の上、御直筆の御墨附に我れ人共に誠と思ふを、如何なる事で僞者と、越前守殿には見極められしぞ。

越前　抑々彼等を僞者と越前見極めしは、かねて觀相の術を學び、是れまで人の善惡その相を見て試せしが、十に一つ違ふことなし。されば此程伊豆守殿役宅にて、天一坊並びに赤川大膳が面相篤と見しところ、人を害し、遠からず劍死なすべき彼等が惡相、假令證據の御墨附御短刀あるにもせよ、御名將たる將軍家の御落胤に、かゝる相のあるべき謂れ曾てなし、それゆゑに某が僞者と其折柄見極め置いたるゆゑ、御親子御對顏あらざるうち、再吟味をなし罪に伏させ、御恥辱を雪がんと、再吟味を願ひしが御採用なき上からは、是非に及ばぬ儀でござる。

六郎　かねぐ\噂に聞き及ぶ相學勝れし其許が、斯く見極められし上からは、定めて疑ひなき事ながら御許しなければ御調べならず、嘸殘念にござらうなあ。

越前　御推察下され。（ト思入）

六郎　天下の恥辱を思はれて、家を捨て命を捨て、再吟味を願はるゝも、月に叢雲誰あつて、清き光りの御心中見出すものゝあらざるは、役目に暗きことでござる。（ト思入あつて、）いや閉門の儀申し渡せば、最早用なき六郎右衛門、これにてお暇いたすでござる。

越前　それ、お見送りを。

三人　畏つてござりまする。

六郎　いや〳〵、混雜中それには及ばぬ。

三人　ではござりまするが。

六郎　はてさて、及ばぬと申すに。（トきつと言ふ。）

三人　はゝ。（ト控へる。）

六郎　左樣ござれば、越前殿。

越前　お役目御苦勞に存ずる。

六郎　譬にもいふ月に叢雲、一度は光りを失ふとも、晴れる時節もなき事あらじ、よき風吹くを相待たれよ。

〽それと言はねど忠誠を、感じて使者は靜々と、心殘して立歸る。

ト土屋は花道へ行く、三人立かゝらうとするを、それには及ばぬといふこなしあつて、花道へはひる。

〽跡見送りて一間より、夫の大事に奧方は、若殿伴ひ立ち出でゝ。

ト越前守、三人跡見送り居る。下手より越前守の奧方小澤、打掛奧方のこしらへ、越前守の嫡子忠右衞門一本ざし、若殿のこしらへにて兩人出來り。

小澤　御前樣。

越前　おゝ、奥か。
小澤　御上使の御入りは心得ずと、襖の陰に身を潜め、若諸共に此場の樣子、承はりましてござります。
忠右　父上樣のお願ひ叶はず、御閉門仰せ附けられ、嘸御殘念にござりませう。
越前　此場の樣子聞いたとあれば、改めては申さぬが、我が殘念を推量いたせ。
小澤　はツ、御推量、
二人　申し上げまする。
〽打ちしをるれば三人が、（ト小澤ぢつと思入、三人思入あつて、）
治右　今日御前のお願ひは、天下のお爲を思召し、奉行の名義を失はざる、大忠節を如何して、
大助　御名將たる將軍家が、御採用なきのみならず、筋違ひとの重き御意。
三五　察する所お側衆の、御取次が惡しきと見ゆる。
小澤　心得の爲め私はじめ、
治右　拙者共へ殿中の、御樣子お聞かせ、
皆々　下さりませ。

〽樣子聞かしてたまはれしと、切なる賴みもだし難く、越前守打ちうなづき。

ト越前守思入あつて、床の合方になり、

越前 かねぐ〳〵申し聞けたる通り、當時老中出頭たる伊豆守殿始めとして、天一坊が家老と呼ぶ、才智勝れし山内伊賀亮に惑はされ、まこと御落胤と心得て御對顏を急ぐゆゑ、其前以て調べを遂げたく、老中方出仕のなきうち申し上げんと、今朝未明に出仕なせしに、伊豆守殿早くも先へ登城あつて、御側御用を勤めらるゝ高木伊勢殿と談合最中、折惡しゝと思へども猶豫ならざる大事ゆゑ再吟味を御許容あるやう、取次賴み入れたれど、高木殿には出頭を何か憚かる樣子あつて據なく上樣へ我が願ひを取次がれしが、家を捨て身を捨てゝ天下の爲に再吟味を願ふ趣き申し上げなば御名將たる將軍家の御許容なくては叶はざるに、老中一同吟味を遂げ予が落胤に違ひなき、天一坊が身の上を再度吟味いたしたしとは、老中を蔑ろになし近頃筋違ひなる願ひなりと、以ての外なる御憤りに、願ひ叶はぬのみなるか御不興蒙る越前守、よしなき事を願ひたりと諸役人に後指さゝるゝ無念をぢつと怺へ、すご〳〵歸りし我が心中、奥を始め三人とも、

〽推量せよと拳を握り、忍びかねたる無念の涙、實にもと奥方三士も共に、いとゞ涙に暮れにける。

ト越前守無念の思入、皆々もこなしあつて、

忠右　此儀に附いては此程より、父上樣には水垢離取り、靈驗あらたの豐川稻荷へ御願ひありし甲斐もなく、斯かる御不興蒙りたまふは、神も佛もないことか。

小澤　これといふのも伊豆守殿が御同意なされた事なれば、お取上げもあらうのに、日頃智慧者と御噂ある、伊豆守殿が何故に僞物の天一坊を、斯くまで誠と思召し、お取持ちをなさるとは、心得がたく存じまする。

越前　尤も誠と思ふのは、證據というて持參せし御墨附御短刀二品に共疑ひなく、殊に面ざし上樣によく似て居れば御落胤と、一通りでは思ふ筈、此の越前は相を見て御落胤にあらざる事を存ぜしゆゑに、再吟味を押して願ひ上げしゆゑ、斯く閉門の御沙汰に及べり。是れといふのも今も言ふ家老山内伊賀亮、元九條家に勤めし者にて、有職の事はいふも更なり、萬事の故實をよく心得、大器量ある侍ゆゑその才辯に惑はされ、誠と思ふ老中方、尤も諸役人の其うちには疑ふ者もあらうけれど、伊豆守殿の權威に恐れ、誰一人怪む者もなく、皆樣親子御對顏を片時も早くと諂ふもののみ、賴み少なき世の中なるぞ。

小澤　して御前樣には此儘に、上より御處置の御沙汰をば、お待ち遊ばす御所存か、思召しを憚りなが

越前　ら承はりたうございまする。
越前　忠義一途に天下の御爲思うて願ひし再吟味も、御取上げなく御不興蒙り、斯く閉門となりし越前如何いたしてよからうやら、思案に餘れば是なる三士が、所存を聞いて決する所存。
小澤　すりや、平石始め三人が、所存によつて御前樣には。
越前　譬にもいふ膝とも談合、他の意見をば聞く心。
小澤　おゝ、それはよい思召し、斯かる時には賴みは家來、忠義といひ器量といひ、勝り劣らぬこの三人、必ず御力になりませう。これ三人のもの、今聞く通り御前樣には、其方どもの所存を聞き、御決心遊ばす由、誰も彼れも遠慮なく所存の程を申し上げ、言ふまでもなけれども、よき智慧出してお力に、どうぞなつてくりやいなう。
〽物和らかに奥方の、賴みに三人頭を上げ、（ト此内三人うつ向いて居て、此時顏を上げ）
治右　短才愚昧の拙者どもが、所存を聞いて御決心とは、恐入つたる御前の御意。
三五　斯かる折ゆゑ仰せに任せ、
大助　媚び諂ひなき所存の程を、
三人　申し上ぐるでござりませう。

越前　先づ治右衛門が、所存は如何に。

治右　はッ。

〽はッとばかりににじり寄り。（ト治右衛門少し前へ出る、誂への合方になり、）

先づ拙者めが所存と申すは、人は一代名は末代、死すべき時に死なざれば、死に勝るの恥ありとの古語を守りて御前には、恐れ多き事ながら、今宵御切腹遊ばすが、よろしからうかと存じまする。

〽いふに奧方驚きたまひ、

小澤　これ治右衛門、一の力に思ふそなたが、御前樣へ、御切腹をお勸め申すとは、どういふ譯ぢや。

治右　今宵御切腹遊ばせと、此治右衛門が申すのは、明日上より御切腹の御上使來るは必定なり、さすれば御家の改易、御上使來らぬ其先きに御切腹遊ばせば若殿樣には半地にて必ず御家が立ちませう、御家名大事と思召さば、今宵御切腹遊ばしませ、則ち拙者御前に先立ち、切腹なして黃泉のお先供を仕らん。

三五　治右衛門どのゝ申す通り、御家名大事に思召さば、御殘念にはござりませうが、御生害遊ばしませ。一度御前の御眼力にて見極めありし其者は、百發百中違ふことなし、よしや只今諸役人が後

指をさすにもせよ、天網いかでのがるべき悪事露顯は日の當り、其時御前の美名は殘らん、身不肖ながら拙者めが御介錯仕り、其場を去らず切腹なし、冥土の御供仕つる。

大助　平石吉田の兩人が殉死いたせば拙者めも、共々切腹いたしたけれど、惜しくあらざる命を延はり御前樣御切腹を老中はじめ諸家へ屆け、御葬ひ萬端を及ばずながら取計らひ、上の御處置を相待つて、若殿樣にて半地にても御家の立つをとくと見屆け、其上拙者切腹なし、冥土へ參つて御前樣へ、具に申し上げるでござる。

治右　臣下の身にて御主人へ、御生害をお勸め申すは、恐れ入つたる事なれど、半地たりとも御家名の殘るをわれ〳〵願ふゆゑ。

三五　篤と御勘考遊ばして、御切腹遊ばさば、遲速はあれど三人とも、

大助　主從三世の約を違へず、殉死いたして冥土へ參り、

治右　御奉公を、

三人　奉らん。

ト御家大事と三人が、死を顧みぬ諫言に、忝けなしと忠相が、感涙拭うて頭を下げ。
越前守感心せし思入あつて、

越前　ほゝお、三千石の家來には天晴勝れし其方ども、小祿ゆゑに餘儀なくも僅かの扶持を與へ置きしに、主恩忘れず死を以て、我を諫むる今の詞、持つべきものは家來なり、忘れはおかぬ忝けない。

ト頭を下げる。

治右　然らば臣下三人が、愚昧の御意見お用ゐあつて、
三五　御上使來らぬ其先きに、
大助　御生害、
三人　遊ばしまするか。
越前　いゝや、身共は死なぬ氣ぢや。
三人　えゝ。（ト心得ぬ思入。）
越前　切腹いたす所存はない。

ヘ膠なく言へば奧方が、若殿諸共詰寄つて、

ト越前守きつと思入、三人むゝとためらふ、小澤越前守の側へ詰寄り、

小澤　命惜しまず三人が、御家の大事と御生害をお勸め申せし忠義の諫言、持つべきものは家來なりとお褒めなされし其舌の乾かぬうちに打つて替り、切腹せぬとおつしやりますは、外に御思案あつ

ての事か。

忠右　父上御腹を召すならば、なに存らへて居りませう、私事も共々に切腹なして死出の旅、冥土の
お供いたしまする。

小澤　まだ幼き者でさへ、死ぬる覺悟をいたしまするに。

忠右　死なぬと父上おつしやりまするは、それは卑怯でござりまする。

越前　卑怯未練に生き延はる、所存はなけれど越前が、命を捨つるはまだ早い。（ト合方になり、）

皆々　何とおつしやりまする。

越前　三人共に家を思ひ、命を捨てる眞心を、見て取り竊に頼みがある。

治右　なに、われ〳〵共へ、

三人　お頼みとは。

越前　此儘やみ〳〵切腹なすは、如何にも殘念至極ゆゑ、今一應再吟味の願ひを上げる所存なるぞ。

三五　して又それは、

三人　いづ方へ。

越前　此事願ふは、小石川お館樣より外になし、天下の恥辱となる事を申し上げなば其儘に、御取上げ

なき事あるまじ、それ故我は切腹いたさぬ。

治右　御尤もにはござりまするが、御閉門中でござりまするぞ。

三五　御前には何れの御門より、小石川へお出でなされまする。

越前　假令嚴しき閉門なりとも、無常門には閉門あるまじ。

治右　是れも番の者あれば、如何いたして無常門より。

大助　御前には外出なされまするぞ。

越前　それこそ一策あり、治右衛門老母老年ゆゑ死去せし趣き番士へ屆け、白小袖を我は冠り、古乗物に打乗りて、亡者の體にやつしなば番士も通すに疑ひなし、又其方に頼みといふは、中間に身をこしらへ、大儀ながら其駕籠を、擔ぎ出して貰ひたい。

治右　死人と申さば無常門より、通すに違ひあらざれど、然し御前を死人となし、擔ぎ出すは何とやら。

小澤　治右衛門がいふ通り、僞り事とはいひながら、品もあらうに忌はしい死人などにおなりなされず。

忠右　外に御思案はござりませぬか。

越前　なに忌はしき事があらう、今宵屋敷を脱け出でゝ、小石川のお館へ願ひに出ぬ其時は、天下の大事に及ぶ上、浮世にあるも今宵限り、明日我は切腹なしすぐに死人にならねばならぬ、假令死人

の眞似をなすとも、御許容あれば天下の爲め、我が命も助かれば、此上もなき目出度いことぢや。

小澤　その仰せを承はれば、よき思召しにござりまするが、然し死人の其なりで小石川の御館へ、御前はお出でなされますするか。

越前　いや、常の服をば駕籠の底へ隱し置いて白布を敷き、其上に予が坐り、數寄屋橋の御門を出でなば、服を改め參る氣ぢや。

治右　左樣ござらば拙者共は、紺看板を着用なし、

三五　中間體に身をやつし、駕籠を擔いでお供なさん、

大助　然し中間ばかりでは、不都合もござらう。

越前　おゝ侍分を誰ぞ一人、それには田口千助が物馴れ居れば彼れを一人、駕籠差添へに召連れて、如在はなけれど其方三人、中間共と見ゆるやう詞遣ひに氣を附きやれ。

治右　其儀は三人申合せ、中間共と見ゆるやう、

大助　詞遣ひ萬端に、心を用ひますれど、

三五　もし又番士に見咎められ、露顯に及ぶ其時は、如何御前は、

三人　遊ばします。

〽いかゞ遊ばす御所存と、三士に問はれて忠相が、心の内に覺悟を極め。
ト越前守ぢつと思入あつて、

越前　番士にそれと見咎められなば、越前守が運命も盡くる所と覺悟なし、含み狀を所持なして、駕籠の内にて切腹なせば、其時こそは其方も、我と共に切腹いたせ。

三人　はツ。

小澤　見咎められて其場にて、御生害になる時は三千石の御家もそれまで、所詮再び立たざれば、若を殺して私も、共に自害をいたしまする。

越前　すりや悴を刺殺し、奧も共々自害なすとか。

忠右　いえ、私は母樣が、お手をおろすまでもなく、父上御生害遊ばせば、直に切腹いたしまする。

治右　奧樣といひ若樣といひ、はて天晴なる御覺悟。

三五　われ〳〵共も其場を去らず、

大助　殉死いたして死出三途、御供いたすで、

三人　ござりまする。

〽詞揃へて三人が、誠心面に現はるれば、

越前　斯くまで主従一命かけ、千辛萬苦をいたすのも、奉行の名義失はず、天一坊の吟味を遂げ伏罪させて死刑に行ひ、天下の威光を輝かさんと、役目を思ふ我が赤心、弓矢神の守護あらば、見咎められる事あるまじ、心丈夫に三人共、番人どもを欺きくりやれ。

治右　誠に御門を出るのは、一世の瀬戸にござりますれば。

大助　侍分と見られぬやう、詞遣ひに心を附け、

三五　番士を欺きやす〳〵と、御門を出づるで、

三人　ござりまする。（ト時の鐘。）

大助　最早夕景、暮れざるうちに御乗物、盥の用意をなさん。

越前　成るべく乗物は、汚なき方がよろしいぞ。

大助　心得ましてござりまする。

小澤　左様なれは、御前様には。

忠右　これより服をおめし替へ、

越前　假に亡者となるとても、

治右　諸門を固める悟道の冥官、

三五　前後控へる牛頭馬頭の、
大助　番士鬼の目を忍び。
小澤　業の秤に計りおほすか、
越前　但しは鋭き淨玻璃の、
治右　鏡に掛けて見顯はされ、
三五　八寒奈落の氷の刃に、
大助　主從紅蓮の血に染むか、
越前　思へば呵責の、
皆々　えゝ。（ト皆々顏見合せ、）
越前　浮世ぢやなあ。
〽生死知れざる主從が、愁ひを餘所に。
ト越前守氣を替へ、ずつと立つ、三人もきつとなつて辭儀をなす。此模樣よろしく、三重にて道具廻る。

（大岡屋敷無常門の場）――本舞臺一面の練塀、眞中に無常門、上手九尺の番屋、常足の二重三方板

羽目、捕繩を掛け、此側に六尺棒、番手桶、上手日窓、海鼠壁の張物、下の方後へ下げて柵矢來、日覆より松の釣枝をおろし、總て大岡屋敷無常門の體、番屋の内に久保見杢四郎、黑羽織袴一本差し、後の刀掛けに刀を掛け控へ居る。下手に足輕運平、同 權平、菖蒲革の羽織一本差し。足輕にて縫包の白犬に結飯を遣つて居る、此の見得時の鐘、時廻りの五つの拍子木にて道具留る。

杢四 これ、貴樣達は何をするのだ。

運平 此の白犬がさつきから、尾をふつてねだるから、夜食の炊出しの飯が强くつて喰へないから、此犬に遣りますのさ。

杢四 其白犬は牡か牝か。

權平 どうか孕んで居るやうだから、大方牝でござりませう。

杢四 詰らん事をいふやうだが、人間でも畜生でも、どうして腹があのやうに大きくなつたと、其元を考へて見ると氣が惡いなあ。

運平 眞面目な顏をなされますが、身持の犬を御覽なすつて、氣が惡いとおつしやるからは、

權平 よつぽどお前さんも助平だね。

杢四 なに助平といふ譯ではないが、是れが日本の國風で、そも二柱の御神がみとのまくばひなされて

より、男女妹背の道が開け。
運平　もし〳〵、そんなむづかしい事をおつしやつても、私共にやあ分りませぬ。
權平　鳴子がわつちやあ名物と、思つてばかり居ましたが、水戸もまくわ瓜が名物かね。
李四　まくわ瓜ではない、まくはひだ。
運平　慈姑なら千住から竹の塚がようござりまする。
權平　何だ、話しがこぐらかつて、尨犬の尻尾のやうだ。
李四　犬といへば其犬を、貴樣達はどうする積りだ。
運平　吹きさらしの土手端、夜更けは寒いと思ひますから、こいつを行火に入れます氣さ。
權平　よく宿無しが抱いて寐ますが、冷たい女のおいどより、よつほど温かでござりまする。
李四　往來の人がなくなつたら、おれにも少し貸してくれ。
運平　お前さんは温まるより、助平根性ぢやあござりませぬか。
李四　中々さういふ譯ではない、夜更けになると此邊へ、狸が種々の姿に化け、人を脅してならぬから
　狸除けにしたいのだ。
權平　そりやあ本當の事でござりまするか。

杢四　なに、嘘をつくものだ。
權平　こいつァ氣味の惡い話しだ。
杢四　いや、まだ氣味の惡いといふは、此の無常門の番人だ。
二人　そりやあなぜでござりまする。
杢四　閉門中に屋敷の内に死人があると、御免になるまで假埋めにしてはおかれぬから、死人を爰から擔ぎ出す、其時居合す番の者が、改めて遣らねばならぬ。
運平　さういふ事と知つたなら、裏門へでも行けばよかつた。
權平　今にも屋敷に死人があれば、お改めなさいますか。
杢四　それは役目だから仕方がないが、ほんのそれも大法で、ちよつと明けて見るばかり。
運平　どうぞ爰に居るうちに、死人がなければよいが。
杢四　さては、貴樣達は臆病か。
運平　臆病どころか私共は、白い襦袢がかゝつて居ても、
權平　亡者かとびつくりします。
杢四　それは何より心細い、身共が大の臆病ゆゑ、實は貴樣達兩人を、力と思つて居た所だ。

渾平　所が二人とも大の臆病。
權平　目の寄る所へ玉が寄ると、
李四　斯うも臆病が揃ふものか。（ト此うち門の内にて戸を叩く）
千助　御番士、お賴み申します〳〵。
渾平　そりやこそ門を、
二人　叩きますぜ。
李四　賴みといふは、何事なるぞ。
千助　お賴み申すは、當屋敷内に死人がござりまするゆゑ、今晩菩提所で葬式をいたしたうござります
　から、どうぞお通しなされて下さりませ。
李四　いや噂をすれば影とやら、何だか氣味の惡い所へ、もう屋敷から死人の屆けだ。
千助　どうぞ、早くお賴み申します。
李四　今明けるから、控へて居やれ。
　ト李四郎木札の附きし鍵を出し、門の錠を明ける。内より平石、吉田、池田の三人、紺看板の中間な
　りにて盥と手桶をかつぎ、田口千助袴股立大小侍のこしらへにて、駕籠の脇へ附き、提灯を持ち

出來り、下手へ駕籠を下し中間三人立ちかゝり居る、千助腰を屈め、

千助 へい、人頭をお改め下さりませ。（ト李四郎硯箱と帳を出し、筆を取りて、）

李四 人數は何人だ。

千助 拙者の外に中間三人、亡者一人にござりまする。

李四 死人といふは、何者だ。

千助 則ち當家の家來平石治右衛門と申す者の母で、當年七十歳になりまする、俗に申す年病で久しく煩らつて居りましたが、實は一昨晩なくなりましたが、丁度丑寅へかゝりまして、今日夕方葬式を出します積りで居つた所、俄に閉門になりましたゆゑ、今晩菩提所へ葬ります。

李四 菩提所は何れでござる。

千助 寺は三田の聖坂、功運寺にござりまする。

李四 して、見送りの其許は。

千助 拙者ことは當家の家來、田口千助と申す者。（ト李四郎帳面を附ける。）

李四 こりや中間ども、前へ出やれ。（ト治右衛門小腰を屈め、中間の思入にて前へ出て、）

治右 へい、何ぞ御用でござりまするか。

杢四　其方は國人か、但しは渡り中間か。
治右　へい、わつちア渡り者でござります。
杢四　して、名は何と申す。
治右　名は勘ちやんといふ名と申します。
杢四　勘ちやんといふ名があるものか。
權平　もし、ないとばかりは申されませぬ、飴賣りにござりまする。
杢四　假令飴賣りにあらうとも、勘助とか勘八とかいはねば、人の名にならぬわ。
千助　お咎めなさることは御尤も、勘助とか勘八とか、早く其名を言はないか。
治右　不斷大部屋で友達が、勘ちやん〳〵と言ひますから、つい勘ちやんと申しましたが、實は勘平と申します。
杢四　早く勘平といへばよいに。（ト帳へ附ける。）して其方は當屋敷へ、初めて奉公に參つたのか。
治右　わつちも以前はさるお屋敷で、百五十石の御扶持を貰ひ、御近習勤めをして居ましたがおかると いふ腰元と情事をしたのが身の詰り、よく言ふことだが猪喰つた報いで、久しう山崎の與一兵衛といふ百姓の所に掛つて居ましたが、縞の財布と同じ切れの親仁の布子を質にやり、手めへが殺

した殺さぬと姑婆あといぢり合ひ、自腹を切つて受戻す金に困つて随徳寺、とう〳〵今ぢやあ渡り中間、天窓は少し禿たんでも、まだ三十になるやならず、二十九年と三ヶ月、名は勘平と申します。

杢四　どうやら手前の申すのは、忠臣藏に似て居るやうだ、今申したのは噓ではないか。

治右　いや、獵人はして居りましたが、決して鐵砲は申しませぬ。

運平　これは〳〵、なか〳〵面白い。

杢四　して其次の中間は。

三五　へい、私でござりまするか。（ト吉田三五郎前へ出る。）

杢四　して其方は、何と申す。

三五　へい、わつしやあ鮨權と申しまする。

杢四　こいつも分らぬ事をいふが、鮨屋でもして居たのか。

三五　元わツしの親分は田町の鮨屋でござりますから、それで鮨權と申します。

杢四　それはさうでもあらうけれど、それでは帳へ留らぬ、權助とか權太郎とか、手前が持前の名を申せ。

三五　餓鬼の折から人さまが、權坊々々と申しましたから、何といふか知りませぬが、權助といふも氣が利かない、まあ權太郎とでもしておきませうか。
杢四　はて、置かうとはけんのんな奴だ。
千助　渡り中間などをいたしまするものは、皆かやうな者でござりまする。
杢四　して其方は、何れのものだ。
三五　生れは大和の上市村、彌左衛門といふしみつたれな百姓の子でござりまするが、背の高いのと恰幅がよいので、先度代官所へ何兵とやらに選出され、陣羽織まで貰ひましたが、武士になるとまさかの時腹を切るのが痛いから、金吾といふを身代りに出して、やう／＼御免を願ひ、鮨屋の子分で方々の部屋を渡つて歩きます。
杢四　手めえどうやらわれ／＼を、一杯喰す騙りのやうだ、顔はどこかで見たやうだ。
權平　もし見た筈でござります、子供だましの推の實賣りだ。
三五　えゝ、默つて居てくんなさりやあいゝに、そんな事を言はれるとわつちのお里があらはれます。
權平　藏のおとが千本だが、これから菅原にでもなるか知らぬ。
杢四　して其次は何と申す。

大助　拙者事でござるかな。(ト前へ出る。)

三五　これさ、拙者といふがあるものか。(ト袖を引く。)

大助　成程、拙者ではない身共、某、私、わツちでござりまする。(ト無器用にいふ。)

杢四　何をぐづ〱申すのだ、其方の名は何と申す

大助　拙者が姓名でござるかな。

治右　これさ、新聞の字を見たやうに、四角張つたことをいふな、せいめいといふは玉藻の前を見出した陰陽博士のことだ。

大助　手めえも四角張つたことを、よく知つて居るな。

治右　のん〱の南龍で聞いたのだ。

權平
運平　さあ早く名前を申さぬか。

大助　拙者の名前は、鷲塚金藤治と申す。

杢四　渡り中間にしては、むづかしい名前ぢやな。(ト帳面へ控へる。)

治右　不斷彼奴は義太夫が好きゆゑ、玉藻の前といふ所から、

三五　とんだ所へ持込んだなあ。

大助　いつたい拙者が産れといふは。
治右　これさ、其の拙者をよさねえか。
大助　それぢやあわしが産れは三浦で、上總部屋へはひりますまで、唐天竺は渡りませぬが、奉行屋敷を方々渡り、娘子供が玩具の双六より外賽の目を知らぬ鷲塚金藤治も、是れなる二人に祈り附けられ、狐へ少し手を出したが、一本借り二本借り九本尻尾を出しまして、誠に懲り〳〵いたしました。
杢四　いや、そんな事は聞かずともよい、手前の名さへ聞けばよいのだ。
大助　いや、拙者は鷲塚金藤治さ。
治右　何ぞといふと、拙者々々と。
三五　石を見たやうな堅い男だ。
大助　これも玉藻の前に縁があるのだ。
治右　なに、縁があるとは。
大助　今拙者を石といつたではないか。
治右　えゝ、殺生石のこぢつけか。

三五　上方俄を見るやうだ。

皆々　はゝゝゝ。（ト笑ふ。）

杢四　して手前達は、歸るであらうな。

治右　何でわつちらが歸りますものか、何ぞあつたら飛び出さうと、待つて居る所へこの葬ひ。

三五　何の事はない、しくじつた出入場の其近所に、火事のあつたやうなものだ。

大助　これを幸ひ三人とも、直に人宿へ歸りますゆゑ、御門は出たきりでござります。

千助　屋敷へ歸りますのは、私一人でござります。

杢四　まだ、肝腎の死人を檢分いたさなんだ。

運平
權平　死人はそれなる、駕籠の內にか。

三五　へい、此の駕籠でございますから、御檢分下さりませ。

ト三五郎駕籠の戸を半分程明ける。內に吹替の越前守、白木綿の着附、白の小袖を天窓からすつぽり冠り反つて居る、杢四郎こは〳〵覗き込む。池田大助脇の方へ提灯を出し、

日數が三日經つて居るゆゑ、よつぽど臭うござりまする。

杢四　臭いのは恐れるなあ。（ト鼻を押へて覗く。）

治右　さあ、ずつと明けるから、とつくり御覧なされい。

ト駕籠の戸をひつぱづす、李四郎氣味の惡き思入にて、

李四　あゝ、もうよい／＼、早く戸をしめてくりやれ。

治右　もつと側へ寄つて、御覧なされい。（ト李四郎を引ッ張るを）

李四　見るには及ばぬ、よろしい／＼。

三五　こう見るは法樂、お前方も見ねえか。

逆平　亡者はおいらも眞平だ。

権平　見たも同然しめて下さい。

千助　然らば、御檢分よろしうござるか。

李四　はてさて、しつこい、よいと申すに。（ト千助ほつとせしこなし）

千助　それ、駕籠の戸を早くしめぬか。（ト治右衛門わざと落着き、）

治右　早くしめろと言ひなすつたとて、毀れかゝつたがた／＼駕籠、ろくすつぽうにしまりやあしねえ。

三五　これ後棒は臭くつていけねえ、しつかりしめてくれ。

治右　おれせえ臭くなけりやあいゝ。

三五　それぢやあ手めえ後へ廻れ。
治右　手めえにはいゝが擔けるものか。
大助　これ、二人ともに無駄を言はずに、早く寺へ行かうぢやあないか。
千助　近いやうでも功運寺までは、爰から一里足らずの道。
治右　寺で酒でも呑ませりやあ、急いで行く張合があるが。
大助　茶さへ呑ませる事ぢやあない。
三五　そんなら急ぐに及ばないぜ。

ト時の鐘合方になり、千助提灯を持ち、治右衛門、三五郎駕籠を擔ぎ、大助盥手桶をかつぎ捨ゼリフにて、花道よき所まで行き、

大助　御兩所、
治右
三五　池田氏、
大助　首尾よくまゐつて、
三人　重疊でござる。
治右　さあ急がせうぞ。（ト時の鐘合方早め、皆々早足に花道へはひる。蓮平權平前へ出て、）

運平　今の亡者は行きましたか。
權平　風が出たのでぞく〳〵と、
杢四　何だか後が、見られるやうだ。（ト風の音、後より以前の白犬飛び出す、三人びつくりして、）
運平　いや、何か出た。（ト尻餅をつく、犬わん〳〵と吠える。）
杢四　えゝ白犬か、びつくりした。（ト六尺棒を振りあげる、此見得時の鐘、合方になり、道具廻る。）

（堀端の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、上手高札場、下手戸をしめたる髮結床の張物、正面外堀の石垣錢瓶橋を見たる夜るの遠見、下手に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て一石橋向ら堀端の體、時の鐘、波の音にて道具留る。と夜蕎麥賣り、按摩の仕出し、呼びながら上下へはひる、時の鐘、合方にて、千助先きに提灯を持ち、治右衞門、三五郎駕籠を擔ぎ、大助盥手桶をかつぎ出來り、直に舞臺へ來り、舞臺眞中へ駕籠をおろし、ほつと思入あつて、

治右　何れも、四邊を。
三人　心得ました。（ト時の鐘、誂への合方になり、三人上下へ心を配る、治右衞門駕籠の側へ來り、聲を潜め、）
治右　御前、幸ひ往來の途絶えにござりまする。
ト誂への合方になり、駕籠の戸を明ける、內に越前守小袖を羽おりゐる、千助草履を直す、越前守白

を脱ぎ捨て、下へ黒小袖、一本ざしにて駕籠を出る。

越前　夜陰にしかと見えざるが、治右衛門爰は何れなるぞ。

治右　常磐橋外にござりまする。

越前　長途の間大儀であつた。（ト辭儀をする。大助駕籠の内より上下を取出し、）

大助　いざ御上下をお召し遊ばしませ。

ト右の合方にて、肩衣を後から附ける、三五郎袴を出し、兩人介錯して上下を附ける。千助の差して居る刀を、治右衛門取つて越前守これを差す、駕籠の胴じめを取り、盥手桶を駕籠の後へ附けることよろしくあつて、

皆々　御前様。

越前　皆のもの。

治右　誠に首尾よく、

皆々　參りました。（ト此内千助髮結床の脇にある小さき床几を持つて來て、）

千助　先づ是れへお掛け遊ばしませ。（ト越前守これへかゝり、皆々上下へ別れ下に居る。）

越前　其方どもの働きにて、易々門をのがれ出たは、未だ武運も盡きぬと見える。

治右　番人共が臆病にて、死人と聞いて尻込みなし、ろく／＼中を改めざるは、誠に天の御助け。

三五　只さへ僞に氣臆れなし、半分駕籠の戸を明けしを、治右衛門どのが引ツ外し、あらはに中を見せし時は、はツと胸を突きました。

大助　然しながら何事も、見せぬといへば人が見たがる、見ろと申せば見ぬが人情。

治右　そこを計りて戸を引つぱづし、さあ改めよと申したは、僞を誠に見せる計略。

越前　その圖をはづさず番士ども、ろく／＼中を改めず、早くしめよと申せし時は、死人の眞似せし忠相も、蘇生なしたる心地であつた。

大助　御前様の仰せの如く、私共もあの折は、

三五　ほつと吐息をつきました。

千助　いや、拙者などは及ばぬ所、只今あれにてお三人が、名前を名乘るところなどは、誠に下賤の中間同様、實に感心いたしました。

ト此時後をかすめて「五ッ半でござる」といふ聲、波の音になり、越前守思ひ入あつて、

越前　最早今宵は何時であらうな。

治右　かすかに聞える廻りの聲は、五ツ半でござりまする。

越前　是れより小石川のお館までは、行程何程あるか。
三五　凡そ町数三十丁、一里に近うござります。
越前　四ツを打たざるそれまでに、御前に御意得たいものぢや。
大助　急ぎますれば半時で、小石川まで參られませう。
治右　いざ、お駕籠へお召し遊ばしませ。
越前　いや、大事を願ふ幸先ゆゑ、最早不浄の乗物へは、
治右　なにさま目出度く御閉門、
三五　御免を願ふ時なれば、
大助　御意に任せておひろひで、
千助　拙者は駕籠を出入りの方へ、
治右　御苦勞ながら頼み申す。
越前　我は是れより片時も早く。
三人　御館へ。（ト大きくいふ。）
越前　これ。（ト抑へる、時の鐘、）閉門中ゆゑ。（ト肩衣をくつろげる、三人はツと辭儀をする、是れを道具替り

の知らせ、）ひそかに〳〵。

ト時の鐘にて、三五郎先きに、越前守、治右衛門、大助供をなし、上手へ行きかける思入、千助駕籠へ手桶盥を入れる、此の模樣よろしく、波の音を冠せ、道具廻る。

（水戸家奥殿の場）――本舞臺四間通し常足の二重、塗り框、上段の蹴込み、正面金襖、葵の紋散らし上下折廻し同じく紋散しの襖、日覆より同じく大欄間をおろし、花道の揚幕出はひり、同じく襖、舞臺花道とも一面に薄縁を敷詰め、二重へ御簾屛風を建廻し、上下へ雪洞附きの燭臺を置き、總て水戸家奥殿の體、爰に腰元四人住ひ、上手に金太夫、白髪鬘繼上下一本ざしにて立ち掛り居る、調べにて道具留る。とやはり右の合方にて、

金太　これ腰元衆、最早御前樣には、御寢なり遊ばしましたか。

腰元四人　只今お引けになりました。

金太　さて御前樣には此程より、いつにない御不例にて、御病床にゐらせられ、如何とお案じ申せしに四五日前より御快氣にて、計らずけふは御酒宴の御沙汰があつてお賑かな、此やうな目出度い事はない。

○　金太夫樣のおつしやる通り、御前樣には常々のおしつらいとは事替り、

□ 餘程お重い御容態ゆゑ、御臺樣にも殊の外、おしつらいをお案じ遊ばし、

△ 御年寄を初めとして、お側衆お末まで、長局の御廊下にて、毎夜々々お百度參り、

◎ 神々樣の御驗にて昨日に今日とおよろしく、それゆゑ今日のお賑やか、

○ 數なりませぬ私共まで、

□ 此御酒宴のお席に列なり、

△ 御前樣のお流れを、

◎ 頂戴いたすなどゝいふは、

○ 有難いことで、

四人 ござりますわいなあ。

金太 それはさうと、御意に入りのお側頭の山野邊どのは、最早退出いたされたか。

○ 御前樣の御快氣を、お目出度いとおつしやつて、

□ いつにない大杯で、重ねてお過しなされしせゐか。

△ 大層お醉ひなされまして、今お下りなされましたが、

◎ 千鳥足ゆゑふら／＼なされ、まだ御玄關位でござりませう。

金太　年は行かぬが器量者、文學といひ武藝といひ、當時若手の其うちで、外に續くものはない、それに第一男がよいな。
○　御近習多い其中で、水際の立つ主税さま、
□　それゆゑお奥へおいでの時は、長局は大騷ぎ、
△　七十になるお年寄さへ、
◎　透見をするので、お障子は、
○　いづれも穴が、
四人　明きますわいなあ。
金太　えゝ、若いものは羨しい、身共などはお奥へ出ても、誰一人見手がない。
○　誰がおまへさまを見ませうか。
金太　是れでも若い時は、役者のやうだと言はれた者だ。
□　定九郎と片身替りの輿市兵衛。
金太　いや、乞食芝居とは情ない。（ト大きな聲をする。）
△　あゝもし、お靜かになされませ。

◎ 御前様へ聞えますわいなあ。
金太 なに、御前様へ聞えるものか、おれにさへ聞えぬもの。
○ そりや聾でござりませう。
金太 聾とは誰がことだ。
□ 早耳で聞えましたか。
四人 ほゝゝゝ。
ト笑ふ、中の舞、ばた〳〵になり、花道より山野邊主税、上下一本ざし、刀を持つてつか〳〵と出來り、直に舞臺へ來り、
主税 御前様には、御寢なり遊ばしましたか。
金太 おゝあわだゝしい主税どの、何事でござるな。
主税 只今退出いたせし所、火急に御前へ申し上げねばならぬ大事がござりまして、御玄關より立ち歸りました。
○ 火急な御用とござりますなら、お取次ぎを。
四人 いたしませう。(ト此時御簾屏風の内にて、)

綱條　火急の用とあるからは、主稅に對面せん。
金太　あのお聲は、
四人　御前樣。
主稅　それ腰元衆、お屛風を。
四人　畏りました。

ト管絃になり、正面の屛風を取りのける、鈍子揩込みの夜具、此上に綱條公着流し前帶にて、此後に刀掛け、脇息、煙草盆、褥、朱塗りの短檠などよろしく飾りあり、綱條公思入あつて、

綱條　山野邊主稅、火急の用とは何事なるぞ。
主稅　最早御寢遊ばして恐入り奉るが、只今退出仕り、お玄關へ參りし所取次願ひの者あるゆゑ、何れの使者と存ぜしに、常時南町奉行大岡越前守にて、天下の大事を御前樣へ、取次ぎくれと申すゆゑ、天下の大事とあるからは、拙者如き若年者がお取次ぎいたし難し、暫く控へめされよと、待たせおきましてござりまするが、此儀如何計らひませう。
綱條　當時名奉行と名の高き大岡越前守が直々に、天下の大事を申さんとは聞き捨てならぬ、是へ通せ。
主稅　然らば是れへ召し連れましても、

綱條　苦しうない、同道いたせ。

主稅　はッ、畏つてござりまする。(ト管絃にて、主稅引返して花道へはひる。)

綱條　誰そある、羽織を持て。

○　はッ。

ト合方になり、腰元○服臺にある綿入羽織を綱條に着せる、此うち外の腰元、平舞臺上の方へ褥、脇息、煙草盆を置き、綱條脇差をさし、褥の上へ住ふ、腰元後へ刀を掛けし刀掛けを置く、綱條思入あつて、

綱條　越前守には不興をうけ、今日閉門いたせしと、先刻噂に聞き及びしが、今宵計らず夜陰に及び、忠相自身に參りしとは、はて心得ぬことぢやなあ。

ト思入、やはり合方にて、花道より主稅先に、以前の越前守出來り、花道にて、

主稅　病中ながら大事と承はりて主人綱條、御出でをお待ち申し居れば、御遠慮召れずいざ先づあれえ。

越前　先づ御案內下さりませう。(ト會釋して兩人舞臺へ來り、越前守下手へ住ふ。)

主稅　大岡越前守、これまで同道仕つてござりまする。(ト辭儀をする。)

綱條　珍らしや越前、夜陰に及び予が館へ自身に來るは何用なるか、病中ゆゑに略衣は許せ。

越前　はッ。(ト平伏なし、)越前如きに過分の御意、恐入り奉りまする。

綱條　して、天下の大事とは。
越前　只今申し上げまするが、他聞を憚る密事ゆゑ、お人拂ひを願ひ上げまする。
綱條　おゝ、承知いたした。こりや皆の者、暫く次へ。
皆々　畏つてござりまする。（ト皆々立ち上る。）
綱條　主稅は、これに。
主稅　はツ。（ト主稅殘り、金太夫腰元奧へはひる。）
綱條　病のせゐか此程より、記憶が惡くなつたゆゑ、主稅はこれにて、聞き役いたせ。
主稅　はツ。
綱條　こりや越前、これなる主稅は予が腹心、心置かずと申し聞かせよ。
越前　はツ。
綱條　して、天下の大事とは。（ト綱條褥を下りて住ふ。）
越前　いや、御病中その儘に。
綱條　いや、天下の大事を聞くに、褥に座すは恐入るぞ。
越前　はツ。

綱條　越前進め。

越前　はッ。

綱條　して大事と申すは。（ト是れより笛入りの誂への合方になり、越前守前へ出で、）

越前　天下の大事と申しまするは、定めてお聞き及びもござりませうが、今般江戸表へ願ひ出し當上樣の御落胤天一坊と申すもの、上樣未だ紀州家の家老將監方におあらせられ、お手の附きし腰元澤の井懷姙なし、其砌り證據に下しおかれたる御墨附御短刀、右の二品持參なし、既に昨日老中ども伊豆守役宅へ天一坊を招待なし二品檢分いたせし所、相違あらざる御自筆ゆゑ、近々御親子御對顏あるべきに事極る、其節拙者列座なし、聊か相學を心得居るゆゑ天一坊の相貌を、篤と實見いたせしに、人を害し遠からず劍死なすべき大惡相、御名君と仰がれたまふ當上樣の御胤に、かゝる相のあるべき譯なし、察する所僞者と拙者目串を附けしゆゑ、再吟味を遂げんこと老中方へ談ぜしに、誰一人用ふる者なく、御親子の御對顏あつての後僞者なりと相知れなば、私ならぬ天下の御恥辱、打ち捨て置かれず、則ち今日拙者上樣へ再吟味を願ひしに、老中共の取調べ行屆きしを遮つて、吟味を願ふは筋違ひと以ての外の御意を蒙り、直に閉門仰せ附けられ、明日切腹仕る所存ゆゑに、夜陰に及び御館へ推參せしは、御親子御對顏を三月ほど御日延べ仰せられ、其う

ち再吟味を遂げたまはゞ、不正の身分と知れるは必定、恐れながら御舘より將軍家へ仰せ上げられ、餘人を以て再吟味、仰せ附けられ下さるやう、偏に願ひ奉つる。

ト越前守平伏する、綱條思入あつて、

綱條　容易ならざる天下の大事、予も其事はこの程より承はり居りたるが、斯かる事とは知らざりし、假令老中其の吟味濟むも、越前守が僞者と見拔きしからは相違あるまじ、餘人に及ばず再吟味は其方に申し附くる程に、天下の恥辱にならぬやう、篤と身許を相調べよ。

越前　身不肖なる某へ、再吟味をせよとの御意は、身に取り如何ばかりか大慶至極にござりまするが、前申し上げまする通り、御不興蒙り拙者ことは、閉門中にござりますれば。

綱條　其儀は必ず氣遣ひいたすな、明朝未明に登城なし、越前守が赤心を將軍家に申し上げ、閉門御免の其上に再吟味を申し附けん、假令明日上使參り切腹せよと申されても、水戸より沙汰のなきうちは、御請けは出來ぬと申し切り、切腹いたすには及ばぬぞ。

越前　はッ、有難き御意を蒙り、是れにて拙者が寸忠も上へ顯はれ、再吟味仰せ附け下さらば、家の面目この上なし、冥加至極にござりまする。

主税　すりや御前樣には御病中、明日御登城遊ばしまするか。

綱條 假令病中なればとて、天下の大事が捨て置かれうか、櫛笥の用意申し附けい。

主税 未だ御全快はあらざれば、御長髪にて御登城あつて、然るべきかと存じまする。

綱條 おゝ、予が長髪にて登城なすも、將軍に於て咎めはなけれど、此後病中の大小名予を手本となし長髪にて登城なす者あるは必定、月代なして登城なすは、殿中の法を崩さぬ爲ぢや。

主税 恐れ入つてござりまする。

越前 御家柄でありながら、將軍家を敬ひたまひ、御長髪にて御登城なきは、恐れながら越前感心仕つてござりまする。

綱條 して越前守には閉門中、如何いたして屋敷を脱け、當館へは參りしぞ。

越前 再吟味を申し上ぐるは、御館樣より外にあらじと、死人の體にて駕籠に乘り、用人共は中間の姿にやつし、菩提所へ埋葬いたす體になし、番人共を欺いて不淨門より主從とも、脱け出でましてござりまする。

綱條 おゝ、それは近頃よき策なり、然し明日殿中より閉門御免の上使參らん其節、屋敷に居らねば不都合、死人となつて出し者が再び歸る譯にも行くまい、予が屋敷より使者を遣らん、其供廻りに打交り、用人共も諸共に、是れより屋敷へ歸るがよい。

綱條　残る方なき君の御配慮、有難く存じ奉ります。

綱條　こりや主税、其方予が使ひと申し、越前守主従を供廻りの人數に交へ、今宵屋敷まで送り屆けよ。

主税　委細畏りましてござりまする。

綱條　定めて番の者共が、予の使ひと申しても、容易に開門はいたすまい。(ト側にある刀を取つて、)此一刀を遣はす程に、當家の恥辱にならぬやう、力を盡して取計らへ。(ト主税刀を取つて押戴き、)

主税　はあゝ、思ひがけなき御賜、有難く頂戴仕つりまする。(ト扇を開き是れを載せ、)未だ若年なる拙者めへ、御目鏡を以て此役目、仰せ附けられし上からは、我が身命を抛ちて開門いたさせ、越前殿主従を邸宅へ送り屆けるでござりませう。

綱條　若年なれどもそちが器量、仕遂げる事とは思へども、目附共が故障を申し、開門いたさぬ其時は如何計らふぞ。

主税　當家の恥辱にならぬやう、封印切つて開門なし、慥に送り屆ける所存、萬一理不盡なす者あらば今拜領の御刀にて片ッ端より切つて捨て、後日に御沙汰なきやう、其場で切腹仕つる。

ト綱條公嬉しげなる思入あつて、

綱條　おゝ出來す〱、其心得では安心なるが、左はあらずして目附ども當家の使に開門なし、人數を

主税　調べ通せし後、歸路に人數の不足せしを、咎めし折は如何いたすぞ。

主税　其時こそは虚言を構へ、閉門なせし屋敷内より出る者こそあれ、脇々より用なき所へ入る筈なければ、前に人數を算へる時、かぞへ違へしものならんと當然の理を言ひ曲げて、立ち歸りますでございります。

綱條　予が目鏡に違はずして、其心なれば大丈夫、越前を同道いたせ。

主税　畏りましてござりまする。（ト越前守感心の思入あつて、）

越前　御若年にてありながら、山野邊氏の御答へ、實に名將の下に愚臣なしと、感服いたしてござります。

ト四ツの時計鳴る。

綱條　最早今宵も亥の刻なれば、更けざるうちに片時も早く。

越前　然らば御意に從ひ、お暇申し奉る。（ト辭儀をなす。）

綱條　再吟味の儀は、氣遣ひいたすな、明日其方に申し附けるぞ。

越前　有難う存じ奉りまする。

主税　いざ、御同伴仕らん。

越前　夜中御苦勞千萬にござる。

ト合方きつぱりとなり、靜々と越前守先きに、主税附添ひ花道へ行く、綱條公思ひ入あつて、

綱條　伊豆守始めとして、數多の役人ありながら、調べかねたる天一坊、家を捨て身を捨て再吟味を願ふとは、こりや越前。

越前　はツ。（ト花道下に居る。）

綱條　名奉行の名は、空しからぬぞ。

越前　恐入り奉ります。

綱條　當將軍家は果報者、よき家來をば。

越前　えゝ。（ト兩人顏見合すを木の頭）

綱條　持たれしよなあ。

ト綱條脇息に凭れ、よろしく思入、鳴物なしに、

主税　いざ、越前守殿。

越前　先づ〳〵。

ト合方太撥の時の太鼓を冠せ兩人花道へはひる。留めの木にて、跡シヤギリ。

ひやうし　幕

五幕目

南番所表門の場
同白洲別席の場

〔役名＝＝大岡越前守、德川天一坊、山内伊賀亮、池田大助、赤川大膳、藤井左京、目安方、門番丈之助、駕籠脇侍、與力、同心、徒士侍、草履取、供廻り大勢。〕

（南町奉行所裏門の場）＝＝本舞臺正面三間の間、黑澁塗りの長屋門、眞中鐵物附、兩扉建切りてあり、上手潜り門扉明放してあり、人の出入りあり、此の上手に板庇を出したる門番所の出格子、潜り門の內より表へ見せて、横に門番所の式臺、上下の見切りに表長屋を書割りし張物、白壁に澁塗りの曰窓、鐵網を張り、腰通り黑澁のきゝらこ、總て數寄屋橋南町奉行所表門の模樣よろしく、爰に〇□△◎の同心四人、黑羽織、袴、股立、大小にて十手を腰にさし、町同心のこしらへにて立ち掛り居る。此見得、時の太鼓にて幕明く。

〇同心　いやなに大崎氏、貴殿を始め各々にも御達しの通り、此程德川天一坊と名乘る曲者、高輪八ツ山に旅宿を構へ、重き役人方を欺きしに依て上聞に達し、再吟味願はれし所御取次の惡しきにや、筋違ひとの御諚によつて、

□ 既に御奉行には閉門仰せ附けられ、御切腹にもなるべき所、小石川御館様の御執成しによつて、閉門御免と相成り、其上ならず上様の御名代となつて再吟味いたすべしとの御諚により、

△ 今日公用方平石治右衛門殿、八ツ山旅宿へ御使者に參られ、右の趣き申し入れ、今日大の天一坊並びに附添の者共一同、當役宅へ御召出しあつて御詮議の由。

◎ 時儀によつては、一同召捕りにも相成るやも計られずと、我々が組へ内密の御沙汰に依つて、出張いたしてござる。

○ 御同然に、御苦勞千萬に存ずる。

□ 最早間もなく、御出席の刻限。

△ 詰所へ參つて控へませう。

◎ さゝ、ござりませ。

ト四人よろしく潜り門の内へはひる。此止り時の太鼓を打込み、花道より同心二人、羽織袴股立大小、先徒士にて、續いて中間二人先箱を揃へ持ち出る、同じく一人鳥毛の槍の一本道具を持ち出る。此次に跡より紺看板の陸尺、手替り附き長棒の乗物を舁き出る、此の次に一人袴羽織つまみ股立ち、大小駕籠脇侍のこしらへにて附添ひ、次に一人紺看板一本差し草履取のこしらへ草履を持ち出る、

此跡より、一人合羽籠をかつぎ出る。此の人數殘らず本舞臺へ來り、乘物を下手よき所へ据ゑる。是れにて草履取駕籠の側へ草履を直す、同心乘物の戸を明ける、内より赤川大膳、好みの着附、上下大小にて出て、駕籠脇侍に會釋する。侍門番所の所へ來りて、

侍一　御案內、德川天一坊御先供として赤川大膳殿、罷り越したれば、

供方皆々　開門いたされよ。

ト是れにて門番所の內より池田大助、更けたるこしらへ、袴一本差しにて座睡つて居たる心にて目を擦りながら出來り、

大助　なんだ、天一坊の先供に、赤川大膳が來たから、開門しろとは何の事だ、その天一坊といふのは今日御奉行樣に御吟味を受ける身分ではないか、其家來が來たとて、開門が出來るものか。

ト横柄にいふ、駕籠脇侍これを聞きむつとせし思入あつて、

侍一　こりや開門相成らぬとは、誰が申し附けしぞ、當時老中の出頭たる伊豆守の役宅ですら、御客赤川大膳どのゝ御出でなりと呼び唱へ開門なして通せしに、大岡越前守には何故開門ならざるぞ。

大助　分らねえ事をいふ人だ、越前守屋敷は私の屋敷にあらず、則ち表門は邪正を糺す天下の裁斷所其御門ゆゑ常には開門なし置けども、公事訴訟の不都合にならぬ爲め、今日は外の公事人は休暇

ゆゑ御門を締切りたれば、假令天一坊が上樣のお胤にもせよ、不分明ゆゑ裁斷受ける其身の陪臣ゆゑ、開門は相成らぬ。

侍二　御落胤の天一樣を不分明とは無禮の一言、假令裁斷受けるにもせよ、其方づれの存ぜぬこと、開門いたされよ。

大助　いや善惡分らぬ其うちに、開門いたさば主人の越度。

侍一　すりや、如何やうに申しても。

大助　開門の儀は相成らぬ。

侍二　成らぬとあれば是非に及ばぬ、刀に掛けても罷り通る。

大助　通らるゝなら、通つて見よ。

侍一　さう言や、いつぞ。（ト兩人きつと身構へる。大膳思入あつて、）

大膳　あいや、兩人とも爭ひ無用。（ト前へ出て、）今日これへ招きによつて、上樣御落胤たる天一坊樣御先供として、赤川大膳參りしに、開門いたすなとは、奉行たる大岡越前守が申し附けしか。

大助　いや奉行より御指圖はないが、小祿たりとも假染ならぬ天下の奉行所の御門を預かる、池田大助が一存でござるわ。

大膳　すりや、どうあつても開門はいたさぬな。
大助　えゝ、くどい事をいふ人だ、今日締切つた奉行所の表門、陪臣風情に開門は相成らぬ、潜り門から通らつせえ。
大膳　いよ〳〵以て、相成らぬか。（ト大膳きつと思入、供方皆々きつとなり、）
大助　えゝ、駄目な事を。
侍一　開門ならずば、
皆々　踏み破つて。（ト皆々立ちかゝる、大膳制して、）
大膳　あゝ、これ控へぬか。
皆々　はゝア。（ト皆々よろしく控へる。大膳こなしあつて、）
大膳　ハテ愚な小人と論をいたすは無益の至り、開門なさずばなさぬまで、後日の返報相待ちをれ。
侍二　そんならやつぱり、
皆々　潜り門より。
大助　通らつしやるが本筋だ。
大膳　是非に及ばん、通つてくれう。

ト大膳思入あつて潜り門へはひる。供方皆々一緒にはひらうとする。

大助　あゝこれ〳〵、お前方は溜りへ行つて、待つて居さつせえ。

ト皆々是非なく下手へはひる。引違へて門の内より、門番丈之助出来り、

丈之　もし、大助樣。

大助　御門番丈之助どのか。

丈之　あなた樣の御門番の樣子柄といふものは、なか〳〵感心いたしました。

大助　門番と相見えましたかな。

丈之　誠に本當のやうでござりました、最早赤川大膳どのさへ開門をいたさずば、誰が參らうとも安心でござりまする。

大助　いや〳〵、大膳などは取るに足らん、未だ油斷のならぬ者がござるぞ。

丈之　して其者は、何人でござりまするな。

大助　さあ油斷のならざるといふは、山内伊賀亮といふ奴、なか〳〵一筋繩では行き難し、それゆゑ門内には用意いたしおけば、萬一議論の其上にて、事によつたら。（ト丈之助に囁く。）

丈之　すりや、天一坊諸共に。（ト大きくいふ。）

大助　これ。（ト制するを道具替りの知せ、）穩密々々。

トあたりへ思入。合方風の音にて、此の道具廻る。

（奉行屋敷内廣書院の場）——本舞臺下手へ寄せて三間常足の二重、襷欄間、正面彩色繪の金襖、後に引拔く誂へ、上の方に一間中足の二重を据ゑ、下手に屋體と臺違ひにして、下手の棲黑塗り框の蹴込み、金張りの彩色繪、此の正面金襖、すべて上段の間の摸樣、此の前側に塗骨障子を建切り、後に引拔くことあり、花道の揚幕に杉戸の出はひり口を出し、舞臺花道とも薄緣を敷詰め、總て奉行屋敷廣書院の道具よろしく飾り附け、二重の眞中に越前の守、繼上下一本差し、側に刀を置きて住ひ、平舞臺上手に與力二人、下手に二人、四人とも繼上下與力のこしらへにて左右に控へ居る。下手に一人繼上下一本差し目安方のこしらへにて控へ居る。此の見得調べにて道具留る。と直に九ツの時計鳴る、越前守思入あつて、

越前　今鳴るは午の刻、かねて治右衞門に申し附けおき、退出後午の刻までと呼出しを遣はせしに、未だ天一坊は參らざるや。

目安　はあゝ、仰せによつて平石治右衞門、今朝未明に八ツ山の旅館へ申し達し、則ち出頭の受書を持

ち歸りましたれば、最早間もなく罷り出でまするでござりませう。

與力一　殊に先刻先供と申し、赤川大膳と申す者、

二　同勢引き連れ、罷り出ましたれば、

三　當人は御席へ通し、供の者は、

四　御門内へ入れおき、組の者それ〴〵に、

皆々　警固いたしてござりまする。

越前　よくぞ行き屆いた。此上天一坊來りなば、申し達せし通り、供通りは門内へ差入れ、一人も外出いたさぬやう締りを附けい。

目安　はッ、其儀は吉田三五郎どの指圖いたされ、手當等行き屆き、猶見附々々には非常の張番附置きましてござりまする。

越前　先はそれにて、手落ちはないな。

目安　御意の通りにござりまする。（ト下手より侍一人出來り、下手にて、）

侍　憚りながら、お取次を願ひまする。（ト目安方侍を見て、）

目安　御取次とは、何事でござるな。

侍　只今天一坊、並に家來山内伊賀亮藤井左京と名乘り、罷り出ましてござりまする。

目安　御前、お聞きの通りにござりまする。

越前　おゝ、一同參りなば、直にこれへ通せ。

侍　はツ、畏つてござりまする。（ト引返して下手へはひる、越前守思入あつて、）

越前　かねて申し達する通り、今日の裁斷容易からざる事ゆゑ、詮議の品によつては、附添ひの者共の動靜に、各々きつと心を附けよ。

與力四人　畏つてござりまする。

ト誂へ派手なる、雲上たる鳴物になり、花道より侍一人先に案内に立ち、後より上下の侍兩人締つたる臘色塗り葵の金紋散らし、結構なる唐櫃を手舁きにして出來り、ずつと本舞臺へ來り、上手よき所へ置き、兩人は此儘控へ居ること、續いて天一坊、白綸子の着附、紫綸子の丸絎帶金襴の法眼袴、紗の直綴小さ刀、藤井左京上下大小にて、天一坊の刀を紫帛紗にて持ち、赤川大膳以前のなりにて附添ひ出る、跡より山内伊賀亮上下大小にて出る、是れに續いて同心四人、袋入りの十手、羽織着流しにて警固し出來り、皆々花道よき所に留り、天一坊振返り、四人を見て、

天一　伊賀亮、あの者共は。

伊賀　はツ、君の御身を大切に存じ、警衛の者共にござりまする。

天一　むゝ左様か、今にも予が西丸へ直らば、あの者共にも褒美を取らせ遣はせ。

大膳　はあ、上意の通り西御丸へ直らせたまへば。

左京　皆それ〲に、御恩賞遣はすでござりまする。

伊賀　何かは扨置き、我君には、

大膳　彼處へお越し、

三人　遊ばされませう。

ト鳴物きつぱりとなり、皆々本舞臺へ來り、天一坊上手にて高床几にかゝる。大膳、左京此右左りに住ふ、少し離れてよき所に伊賀亮住ひ、天一坊越前守を見て思入、

天一　こは心得ぬ振舞かな、京都所司代、大阪城代又江戸にて老中伊豆守役宅にても、かゝる非禮はあらざりしが、察する所越前守は、近き頃まで知行とても僅か三百石の小旗本。

大膳　當時は三千石に成り上り、奉行々々と尊敬され、慢心しての不敬であらう、それとも逆上しての發狂ならんか。

伊賀　あいや左様に申されな、狂氣せし者が奉行職勤まらう筈はなけれど、數にも足らぬ平民共が公事

訴訟に頓智が廻る所から、捌きがいゝの名奉行のと、愚人共の風聞せるをいゝ事と、増長されたと見える。（ト嘲りいふ、越前守思入あつて、）

越前　井の内の蛙何事をや申す。ヤア天一、下に居れ。（トきつと言ふ。）

二人　何と。

越前　いやさ贅僭、頭が高いわ。下に居て我が申す事承はれ。（ト誂への合方になり、）今日大岡越前守は御直の上意あつて、予に代り天一坊が素性の眞僞糺せとあつて、則ち將軍家の御名代なるぞ。高座はおろか安座もいたす、台命受けし越前守を慢心狂氣と誹謗いたすは、無禮であらう。

天一　ふむ、こりや成程越前は發狂せしと相見ゆる、其れに取合ふは本意ならねど、父將軍の名代と名乘れば申し聞かさんが、予が身を疑ひ非禮なし、いよ／＼將軍の血統と事極まらば、已と切腹いたさにやなるまい、それを思ふと今日の非禮は、聞き流して遣はさん。大膳よきに取計らひ、越前に下座をいたさせい。

大膳　はゝあ畏り奉りまする。（トこなしあつて前へ出て、越前守に向ひ、）越前殿、只今上樣へ對しての無禮過言何事なるぞ、京都所司代大阪御城代、當江戸表御老中方も、既に御落胤に相違なしと極まりしを、何故あつて越前殿のみ疑念あつて、無禮ある條心得申さぬ。

越前　いや無禮にあらず、今演舌に及びし如く、將軍の御名代を仰せ蒙り、裁斷を遂ぐる越前守、假令京大阪江戸重役の衆中は、皆將軍の御落胤に相違なしと申すとも、此の越前守の眼を以て見る時は紛れ者に相違ない。

左京　こりや越前殿、紛れ者と見極めしは、其の證據あつての事か、よもござるまい。

大膳　斯くある上は某が、御身の上のあらましを申し上ぐるも恐れあれど、將軍未だ紀州家の老臣加納將監方に居らせられしその砌、澤の井といふお腰元にお手を附けさせられ、既に君のお胤を懷胎せしにより、

左京　後日の證據に其砌お墨附に添へられて、御短刀までを拜領し、其後お暇たまはつて、澤の井どのはお下へ戻りしといふ事を、貴殿は未だ御存じなきか。

越前　其儀は越前疾より承知いたして居る、天一坊には十七年の其間、何れに於て成長して、人と成りしや。

天一　おゝ語るも此身の恥辱ながら、今越前が疑ひを解く其爲に、十七年の其間艱苦に養育受けたりし仔細を爰に申し聞けん。（ト雲上なる鳴物になり、）深き様子はまだ當歳の時なれば、如何なる事のありしにや、産毛も剃らぬ其頃に、證據の二品此身に添へ、佐渡の國なる相川郡尾島村なる淨學

院の門前に、捨子となりしを住職天通に拾ひあげられ、養育されて成長なしたり、年經て天通死去して後、弟子たる天忠日信が御供なし、美濃國各務郡長洞なる常樂院へ轉住し、

左京 爰に星霜十餘年、學問手跡に心を入れられ、はや十五歳を越えさせたまへば、我々がお附添ひ申して、

大膳 爰に訴へ出でたるなり。（ト越前守きつと思入あつて、）

越前 やあ佞智あるを以て深く奸計を構へ、人を醉しめんと誠しやかに辯論なし、上を誑かさんとする野干に等しき天一坊、繩打つて糺問なさうか。

トきつとなる。それまで伊賀亮だまつて居て、此時ずつと前へ出て、

伊賀 あいや越前殿、貴殿の詞僻事ならん、いま日の本に於て人皆擧つて御名將と、稱し奉る八代將軍の御目鏡にて、奉行職の仰せを蒙り、仁智の裁斷邪正をたゞすこと明かなりと、名高き大岡越前守、聞くと見るとは大きな違ひ、勿體なくも將軍の御落胤、御血統にまします君を僞り者と申さるゝは、それには確かな證據あつてのことか。

越前 如何にも、僞り者に相違なき證據といふは、此事につき內密將軍家へ伺ひ奉る所、天一坊が落胤といふ事更に御覺えなしとの上意、さある時は今民間に御落胤の漂泊あらう道理なし、恐れ多

くも俗に所謂生きた證據、これに上越す證據があらうや、それゆゑにこそ僞り者と申せしが誤りか。

伊賀　なに將軍家に於て、御覺えなきとの御上意は、此の伊賀亮得心いたさぬ。正しく德太郎信房君の御所持ありし御短刀、まつた御直筆の御墨附まで、添へたまはりし天一坊殿、全く御落胤に相違なし、殊にまた君の御面部は將軍家御幼年の御尊顏と瓜を二つに割りしに其儘、剰へ御音聲の同じきは、誠に御血肉の御親子に相違なきはいふまでもなし、此證據を以て今一應將軍家へ申し上げよ、よく〳〵御勘考遊ばすやう言上あらば、よも御覺えなしとの上意はあるまじ。

越前　黙れ伊賀亮、將軍家御幼年の御尊顏、まつた御音聲まで天一坊に似たと申すが、是れ虚言ならずや。其方が元紀州家の家來ならば、御幼年の御尊顏御音聲まで存じ居るは道理なれども、汝は九條家の浪人なれば、御幼年の御樣子知らう筈はなし、是れによつて僞りと申すこと分明なるぞ。

ト伊賀亮につたり思入あつて、

伊賀　いやなに越前殿、この伊賀亮が將軍家御幼年の、御尊顏御音聲までを、よく存じ居るといふ事、貴殿には御存じないか。

越前　何で越前存じ居らうや。

伊賀　御存じなくば、今是れにてお話し申さん。（ト誂への合方になり、）そも紀州大納言光貞卿の御簾中は、九條關白太政大臣の姫君にて、お高の方と申せしなり、其腹に御誕生ましませしは恐れ多くも當將軍光宗公なり、御幼名を徳太郎信房君と申し上ぐる、其砌某は九條殿下の御家人にて、御使者を蒙むり紀州虎伏山非垣の城へ數度參向なし、憚り多くも徳太郎君へ御手跡の御指南、和學の教授申し上げしゆゑ、御面部は勿論御音聲まで存じ居らいで相成らうや、是れを以て將軍家の御落胤に相違なしと申せしなり、斯くまで存じ居る伊賀亮が申すこと、虚言なりとの仰せは何事か。

ト越前守むッと詰り、氣を替へ、

越前　さあらば問はん伊賀亮、まこと將軍家の御胤なら、何程の位なるや。

伊賀　如何にも、官位は將軍の御猶子たれども、先づ最初の官なれば宰相ならんか。

越前　して宰相と東叡山宮樣と、御位何程の相違あるや。

伊賀　されば東叡山宮樣の御位は一品親王の御位なり、則ち官外の御位にして、元日本に御二方の外なく、仙洞樣を一品法王と稱し、又東宮樣を一品大王と唱へ奉り、東叡山宮樣は一品准后の宮樣なり。

越前　ふむ、其の准后の宮と唱へ申すは。
伊賀　准后と申し奉るは、恐れ多くも天子皇后の御位に准ずるを以て、准后と稱し奉るなり。
越前　して、其宮樣の御沓を取るべき者の位は如何に。
伊賀　則ち左右の大臣ならでは、御沓を取ることならねば、東叡山宮樣御登城の節、御沓を取るものなき爲め、御乘物御玄關横附にして、御沓は用ひたまはぬなり。
越前　ふむ、奉行大岡越前守、いよ／＼以て天一坊に、繩掛けねば相成らぬ。
伊賀　すりや、何故あつて。
越前　今天一坊が用ふる所の乘物は、飴色網代蹴出しの塗棒、これぞ勿體なくも東叡山御門主に限る所それに何ぞや宰相官なれば、宰相の官位といふ天一坊が、宮樣の召す乘輿と同じ乘物に乘るとは、不屆きなり、それ故召捕ると申せしが、それとも申し開きありての事か。
伊賀　流石才ある越前殿、左程に故實知りながら、尋ね問ふにも及ばぬ事を問ふは、則ち是れらの小事を事として、君を罪せん所存よな。
越前　何と。
伊賀　そも神君の遺言によつて、正に三代將軍家光公の御代、寛永年中忝けなくも朝庭御許容あつて

則ち關東へ王城の鬼門を防ぐ京都比叡山にかたどり、下谷なる上野に壯嚴の伽藍を造營して宮樣を招請し奉り、東叡山寛永寺一品准后の宮と稱し奉り、萬一京都に非常の變ある時は、六十餘州の主人とも仰がれたまふ御身なれども、神器あらざれば御綸旨差出したまふことならざるゆゑ、既に三代將軍家光公武運長久祈念の爲と朝庭へ奏聞ありて、御寶劍拜借なして東叡山に鎭護なせど、凡そ寶といふものは只一ケ所にあつては則ち世界の寶にあらざるを以て、慈眼慈惠兩大師の遷座と唱へ、月毎の晦日三十六院を順廻なすも大切なる御寶劍ゆゑ、闇夜ならでは持運ぶことならざれば、晦日は闇夜ゆゑ白晝にても、灯火を照し御遷座あるは此譯なり、されば東叡山宮樣は上なき御位に昇りたまふか、又御生涯宮樣にてお過し遊ばす御事か、定めがたなき御身の上、則ち御乘物の下地を朱に塗り、その上に黑漆を塗りかけ、黑うるみ色なるは、是れ日輪の光に叢雲の覆ひ掛りし姿を表はし、則ち飴色網代蹴出し塗棒の乘物と申すなり、今天一坊樣の御身の上も、御親子御對顏の上、西丸へ直らせ候や、又は御三家順格にならせ候や、將また會津越前兩家同樣にならせたまふか、但し御譜代並の大名の位にならうやら、定めなき御身ゆゑ、朱塗りの上に黑漆をかけ飴色網代を仕立てしは、此伊賀亮が計らひにて、召させ申すは越前殿、拙者が誤りでござるかな。

ト詰りかけるゆゑ、越前守ぎつくり詰り、思入あつて、

越前　むゝ、蘇秦張儀も斯くあらんと思ふなる天晴才辯、流石は山内伊賀亮、事を分けての申し開き、越前ほとんと感心いたした、さりながら無益の事に時刻の移り、證據とある二品、これにて検分いたし申さん。（ト伊賀亮天一坊に向ひ、）

伊賀　奉行越前御證據もの拜見いたしたきよし、如何仕りませうや。（ト天一坊こなしあつて、）

天一　おゝ、越前に拜見許し遣はせ。

伊賀　はゝ、畏まり奉りまする。（ト大膳こなしあつて、）

大膳　君御許容ある上は、左京どの、御證據の二品揃へてそれへ。

左京　心得ました。

ト左京海老錠を出して、上手へ行き唐櫃を明け、中より結構なる黒塗り蒔繪の箱を出して紐を解きて明け、中より錦袋入りの墨附と赤地錦の袋入りの短刀を出し、件の箱の上に蓋を仰向にして二品を載せ、越前守の前に持ち行き、

いざ越前殿、御證據の二品拜見召されい。

ト越前守こなしあつて、件の二品を一々あけて、短刀の中身を篤と見て、トゞ墨附を載き、箱の上

に置き、

越前　越前謹んで拜見いたするに、是れぞ正しく當將軍の御正筆に相違なし、又御短刀は紛ふ方なき志津三郎兼氏の作、御品は正しき物ながら、（トこなしあつて、）いやさ、天晴なる御證據恐入り奉る。

ト平伏していふ、是れにて與力はじめ皆々顏見合せ、平伏する。天一坊につたり思入あつて、

天一　越前、疑ひ晴れつらん。

越前　はゝ恐入り奉りまする、疑念いたせしは拙者が誤り、重々悔み奉りまする。斯く御樣子柄分明たる上は是れなる御席は恐れあり、いざ上樣には、設けの御席へ入らせられませう。

天一　おゝ。

トこなし、是れを誂への鳴物になり、上手屋體正面の障子を引拔く、正面彩色繪の金襖、欄間に御簾を卷きあげ、總て上段の間の模樣、爰に錦の褥を敷き、蒔繪の脇息、刀掛、煙草盆などよろしく並べあること、下手二重正面の金襖を引拔き、向う間毎々々の書割、遠見になる、天一坊立ち上ると、左京上下の侍に指圖して、唐櫃を持上げさせる、此うち天一坊は中足の二重褥の上に住ふ、大膳上手左京下手にて二品の唐櫃を守護する心にて住ふ。常足二重の上手に伊賀亮控へる。下手に越前守住ふ、伊賀亮に向ひ思入あつて、

越前　御取次を以て申上げ奉りまする。

伊賀　して、御取次いたす其次第は。

越前　はゝ、身不肖の越前役儀とは申しながら、短才不眼にして上樣へ對し奉り、無禮の罪恐入り奉りまする、これに依て今日より差控へ、閉居仕りますれば、餘人を以て吉日良辰を選み、御親子御對顔の式禮萬端取り計らひ申すべき間、此段御執達下さるやう、願ひ上げまする。

ト伊賀亮思入あつて、天一坊に向ひ、

伊賀　只今越前が申し上げ奉りましたる儀、上聞に達し奉る如く、差控への儀伺ひ奉りまする。

天一　おゝ越前が詞聞き屆けた、自ら非を知り差控へを願ふは、神妙に思ふぞ。然し敢て差控へには及ばぬ、目通り許す、近う參れ。（ト言へども平伏して、越前守は進み兼ねるこなし。）

大膳　上樣の御許し、進み召され。

越前　御咎めあるべき身を以ては。

天一　いや、苦しうない、進め／＼。

越前　はゝはッ。（ト少し前へ進む、天一坊こなしあつて、）

天一　こりや越前、予に對し非禮の過言申せしも、予が身の上の明らかならざるを以て調べよと、父將

軍の台命受け、御名代たる其詮議に臨み、非禮過言は上意も同然、咎めるに及ばぬこと、是れと申すも越前が父上の御爲を思ふ、誠忠の心厚きゆゑなり。それ故にこそ、差控へには及ばぬぞ。

越前　はゝ、寛大なる御仁慈、有難う存じ奉りまする。

天一　此上は父上に對顏の儀、延期を待たず計らひくれよ。

越前　はゝ、日ならず御親子御對面の儀、取計らひ奉らん、先づそれまでは御機嫌よろしく、八ツ山の御旅館に於て、御休息遊ばすやう、願ひ上げ奉りまする。

天一　其方より沙汰あるまで、相待つ程に、日を過さず計らひくれよ。

越前　畏り奉りまする。

大膳　あゝ恐れ入つたる君の御賢慮、越前殿の無禮の段、定めてお咎めあらんかと、愚臣にも心を痛め居つたるに。

左京　却つて賞譽のお詞にて、寛仁大度の御計ひ、誠に恐入り奉りまする。

伊賀　流石天下を知ろし召す、将軍家の御血統は爭はれぬもの、自然と御器量備はりて萬々歳の御家督を繼がせられなば、萬民御仁慈の御恩澤に鼓腹し、國家繁榮の儀と、

大膳　一同悦ばしう、

伊賀　左京　存じ奉りまする。（ト三人よろしく辭儀をする。）

大膳　斯くなる上は、最早御對面の時を待つのみ、直樣旅館へ立戻らん、用意いたせ。

天一　大膳畏り奉りまする。

越前　それ、御供觸を。（ト同心◎心得て、）

◎　はゝ、畏つてござりまする。（ト◎よろしく下手へはひる。天一坊思入あつて、）

天一　あゝ人として信なくんば、其可なるを知らずと、今越前が忠良厚き心より、詮議も届き、予が身の上の明白たるは皆其方が勳なるぞ。

越前　はゝ、御懇の上意、恐入り奉りまする。

三人　先づ〳〵。（ト平伏する、天一坊伊賀亮へこなしあつて、）

天一　伊賀亮。

伊賀　はゝあ。

天一　予が身は今日まで日月も、照したまはぬ埋れ木の。

伊賀　谷間の水に穢れしを、爰に神明掘りうがち、

大膳　取り得て世にも大君の、仁慈も深き德川の、

左京　清き流れに御舩を、おろして洗ひそゝぎ上げ、
越前　ぬひ仕立てなば正しくも、源氏の長者二位の官服、
天一　はて、悦ばしき、
五人　祝詞ぢやなあ。（ト皆々よろしくあつて、）
伊賀　いざ、御歸舘、
大膳左京　遊ばされませう。
天一　おゝ。（ト立ち上る、大膳向うへ思入あつて、）
大膳　還御。
大勢　はあゝゝ。

ト大勢の聲する、是れにて上下の侍は唐櫃を持ち、先に立ち花道へはひる。天一坊は伊賀亮、左京皆々附添ひ花道へはひる。越前守跡を見送りぢつと思案のこなし。此時下手より、大助繼上下一本ざしにて出來る、越前守心附き、

大助　御前樣。
越前　おゝ、大助か。

大助　委細の樣子はお襖越しに、承はりましてござりまするが、今日の御詮議御見込み違ひと事極り、御挨拶がら心ならざる儀にござりまする。
越前　あいや、一旦事を濟ませしも、予が方寸の內にあること。
大助　すりや、いよ〳〵以て彼のもの共は、僞り者にござりまするか。
越前　おゝさ、紛れ者に相違なしと、此越前が見拔きし眼力、御親子御對顏の日限を、十日の間期を延ばし、平石吉田の兩人を、紀州表へ遣して彼の地を委しく探索し、事の實否を糺すであらう。
大助　左樣ござらば拙者めは、明日八ツ山へ罷り越し、御病氣の由申し入れ、御對顏の期を延ばすやう、計らひまするでござりませう。
越前　返す〴〵も憎きは伊賀亮。多くは彼れが佞智の謀略。
大助　假令如何やう巧むとも、
越前　近きに彼れ等が運命極まり、
大助　おのれを殺す、おのれの罪科、
越前　やがて梟首に。（ト腰にさしたる詩文を書きし扇を開くを木の頭〔〕掛けて見せうわ。ト件の扇を正面へ向け、捨札の心にて高く差出す。是れを見て大助ハアヽヽヽと平伏なす、此模

樣時計の音にて、

ひやうし　幕

六幕目　紀州平野村調の場

〔役名――名主平野甚右衛門、平石治右衛門、吉田三五郎、口入榎本屋三藏、百姓田吾作、同久根八、同畑六、幸德寺祐然、下男杢助、同久助。隣りの後家お民、下女お霜等。〕

（平野村名主宅の場）――本舞臺三間の間中足の二重、本緣附、よき所に白洲階子、上手一間塗骨障子屋體、正面白地中形の襖、上の方一間の床の間、長押よき所に六尺棒、捕繩など掛けあり、いつもの所枝折戸、此外正面黑き冠木門、左右腰羽目のある塗塀、上手よき所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て紀州平野村名主の宅、庭先の體。本舞臺に莚を敷き、爰に三藏町人羽織着流しにて佇ふ、側に後家お民、百姓畑六、久根八、田吾作の三人、やはり序幕の百姓にて、煙草を吞んで居る、此の模樣在鄉唄にて幕明く。

田吾　さて皆の衆、とんだ事がはだかつたなう。

久根　さうとも〳〵、二十年程跡のことで、御家老の加納將監樣のお屋敷へ御奉公に上つて居た、澤の井とかいふ女中の親を、知つて居るかといふお調べ。

畑六　しかもそれを御詮議に、江戸からござつた御役人は、名奉行といふ聞えを取つた、大岡越前守樣の御組方。

三藏　いやもう、此の和歌山の習ひにて、すべて男の奉公人は御城下の口入宿、大黑屋源右衛門が家の株で世話をするし、又女の奉公人は御膳炊きから小間使ひ、おさすり雇ひにお妾の世話まで、この榎本屋三藏が家の株で口入するゆゑ、一番先きに呼び出されて、用暇を潰すとは、こんな迷惑な事はない。

お民　何の迷惑な事があらう、御城下はいふに及ばず、近郷近在引ツくるめて奉公人の口入宿は、二軒きりの其うちでも、女の世話を一軒で取り仕切つて居る榎本屋、月に三歩のおさすりを一兩位に觸れ込んで、二朱一歩づゝかすりを取り、御主人方と當人から又格段の禮を貰ひ、うまい事をおしだから、此位の事はあたりまへさ。

田吾　五郎助後家のいふ通り、口入して年が年中錢儲けをする人は、呼び出されても仕方がないが、一昨年はやつた鬼でさへ、口入をした事のないわしらまでが、名主どんへ呼び上げられて、調べに

逢ふとは、こんな詰らぬ事はない。

久根　何でも是れは知らぬといつて、身のがれをしてしまふのが、上分別であらうぞよ。

畑六　さうぢや／＼、藝もない引合で江戸まで連れて行かれた日には、どんなに名主どんに入費が掛らうかも知れぬ。

三藏　成程それに違ひない、知つた事でも知らぬといつて、のがれてしまふが上分別、わしもそれゆゑ七年跡の類燒の時、奉公人の帳面を燒いた積りで、どこから上つた女中やら、一向當りが知れませぬと言ひ切つてしまふ積りぢや、五郎助後家は口まめゆゑ、餘計なことを喋べるまいぞ。

お民　馬鹿な事をお言ひでない、何ぼわたしが口まめでも、錢儲けにでもなる事なら、人より先きに口を出すが、喋べれば損の行くことを、おせつかいに喋べるものかね。

田吾　それぢやあ一同言ひ合せて、庚申塚の申のやうに、見まい聞くまい話すまいと、何でも一向存じませぬと言ひ切つてしまふのがいゝ。

皆々　それがいゝ／＼。（ト此うちお民枝折戸の所へ來て、向うを見てびつくりなし、）

お民　兎かういふうち向うから、

皆々　どうした／＼、

お民　何でも一向存じませぬ、

山吉　知らぬといふは、まだ早い。

お民　そんなら江戸の、お役人が來る。

三藏　それぢやあそろ〳〵。

皆々　無言々々。

ト口を押へる、やはり在郷唄になり、花道より治右衞門先に、三五郎、何れもぶつさき羽織、大小、脚絆草鞋にて出來り、花道にて、

治右　扨吉田氏、最早今日で三日に相成るが、是れぞと申す手掛りなく、ほとんと當惑いたしてござる。

三五　そりや手前とても同じこと、此方共さへろく〳〵夜の目も合ず心勞いたせば、江戸表の旦那を始め池田氏にも、嘸待佗び居らうと、斯樣にいたして居るうちも、心が急いて相成りませぬ。

治右　それゆゑ手前も三州の、豐川稻荷へ祈誓を掛け、種々探索はいたし居れど、是れぞと申す手掛りなきゆゑ、たゞ當惑いたすのみ。

三五　まだしも頼みは名主方へ、口入宿を始めとして當村にて古き者、呼び寄せくれと頼み置きしが、若し今日の探索が行き屆かざる其時は、生きて再び江戸表へ、手前に於ては歸らぬ心底。

治右　さは言ひながら我々が、假令一命捨てたりとも、此の探索が行き屆かざれば、御名奉行と呼ばれたる譽れを空しくなすのみか、我が主人には御切腹。

三五　やがて冥土で、此のお詫びを。

治右　先々お急きなされずと、今一詮議仕らん。

三五　左樣ござらば平石氏。

治右　さあ、お越しなされい。

ト右の唄にて、兩人舞臺へ來り、三五郎枝折戸を明ける。是れにて舞臺の皆々ぶる／＼としてうづくまる。治右衞門、三五郎内へはひり、奥へ向ひ、

三五　誰そ居らぬか、只今立ち歸つたぞ。（ト是れにて奥より杢助下男のこしらへにて出來り）

杢助　これは／＼旦那樣方、大層御ゆるりでござりました。（ト此内治右衞門三五郎草鞋をぬぎ二重へ上り）

治右　探索に暇取りしゆゑ、存外戻りが遲くなつた。

ト此内三五郎は皆々を見てきつとなる。是れにて皆々ぶる／＼する事よろしく。治右衞門三五郎よき所へ住ひ、

三五　して、申し附けし者共は、差支へなく參つてござるか。

杢助　先刻殘らず揃ひまして、旦那樣方のお歸りを、あの通り待つて居りまする。

治右　おゝ、左樣か。(ト人數を調べることよろしくあつて、懷中より手帳を出し、讀みあげながら。)女奉公人口入渡世、榎本屋三藏。

三藏　へい。(トおづ／＼前へ出る。)

治右　平野村農民、田吾作。

田吾　へい。

治右　同村の農民、久根八。

久根　へい。

治右　同畑六。

畑六　へい。

治右　五郎助後家たみ。

お民　へい。(ト一々名前を渡り。)

治右　一同揃ひ居るか。

皆々　へい。(ト皆々平伏する。治右衞門三藏へ目を附け。)

治右　こりや榎本屋三藏、これへ出ませい。（ト是れにて三藏おづ〳〵と前へ出る。）其方は當紀州家の御國政により、和歌山城下は申すに及ばず、市中在々に至るまで、女奉公人の口入等は、一手を以て世話いたすと申すが左樣か。

三藏　へい〳〵、左樣さうにござりまする。

治右　然らばそちに尋ねるが、二十年程前の事ぢやが、紀州家の老臣加納將監殿方へ、呉服の間を勤むる澤の井と申す女を、口入いたしたることはなきや、覺えがあらば申し上げい。

トこれにて三藏顏を上げ、

三藏　仰せの通り、私方にて此の和歌山の御領分内は、殘らず女の奉公人を一軒にて取り仕切りまして口入をいたしまするが、二十年程以前の事は親父の代にござりますゆゑ、私は一向に存じませぬやうにござりまする。（ト治右衞門思入あつて、）

治右　して其方奉公人の口入いたす時々に、當人は申すに及ばず、親許の住所名前等、控への帳へは留めざるか。

三藏　いや、其儀は委しく帳面へ、書き記しておきまする。

治右　然らば父の代たりとも、二十年前の控へを取出し、調べて見れば知れるであらうが。

三藏　いえ、其の帳面がございますれば、相分かるでございませうが、七年跡の類燒で殘らず燒失いたしましたゆゑ、一向相分りませぬ。（ト治右衛門當惑のこなし、三五郎思入あつて、）

三五　こりや三藏とやら、そちは何歳に相成る。

三藏　當年積つて四十二歳、丁度厄年にございまする。

三五　然らば親の代たりとも、二十年前の儀なれば、そちは二十歳を越したる年齡、帳にても預かるならば、心覺えがないともいへまい、それを篤と考へて見やれ。

三藏　いえ、其頃は放蕩にて、とんと家へ寄附きませぬゆゑ、一向に存じませぬ。

トこれにて當惑の思入あつて、

治右　こりや平野村の百姓共、それへ出ませい。

皆々　へい。

治右　承はれば、其方共は當村にて年古く、農民共のうちでも頭立つて居るとやら、何か徒然の話しに斯ういふ事の噂があつたなど〻、申す事はあらざるか。

皆々　いえ、一向に存じませぬ。

治右　いやさ、一向知らぬとばかりでは、それまでの事なるが、篤とそれにて勘考なさば、誰か一人此

内で心當りがあらうも知れぬ、心靜に考へて見やれ。

皆々　いえ、一向に存じませぬ。

治右　はて、平野村より將監殿へ奉公に上りしと申す、話しなどは聞かざるか。

皆々　いえ、一向に存じませぬ。

治右　よう田舍では出來秋頃には、觸正月などゝ唱へて、月待に寄り集まり。

皆々　いえ、一向に存じませぬ。

治右　世上の善惡、村内の珍說話し、昔の雜話。

四人　いえ、一向に存じませぬ。

治右　世になき人の噂こはさ。

四人　いえ、一向に存じませぬ。

治右　あの時斯うであつた。

四人　いえ、一向に存じませぬ。

治右　その時誰が斯う申した。

四人　いえ、一向に存じませぬ。

治右　鎭守の祭りの話しなごより。

四人　いえ、一向に存じませぬ。（ト是れにて三五郎急き立ちて）

三五　え丶、默り居らぬか。

四人　へい――。（トうづくまる。）

三五　こりやヤイ、そち達の所存にては存ぜぬことさへ申す時は、事が濟まうと心得居らうが、此度我々當國へ探索に罷り越したは、私ならぬ天下の大事、身命にも替へがたき大切なる御用ゆゑ、今日で三日の間寢食も打ち忘れ、心勞いたして詮議いたすに、某これにて承はれば、平石氏がお尋ねの詞の端も終らぬうちに、存ぜぬ知らぬと申すのは、上役人を嘲弄いたすか。

トきつとなるゆゑ、百姓みな〳〵びつくりなし、

四人　それでも、一向に存じませぬ。（トぶる〳〵顫へ居る、治右衞門思入あつて、）

治右　あいや吉田氏、先々お控へ下され。

三五　餘りこ申せばふざけた奴めが。（ト腹の立つことなしにて控へる、治右衞門思入あつて、）

治右　こりや老母、それへ出い。（トいへどもお民默つて居るゆゑ、治右衞門杢助に向ひ、）こりや、杢助とやら。

杢助　へい。
治右　五郎助が後家ぢやと申す老母は、耳が不自由なるか。
杢助　いえ、聾ではござりませぬ、人一倍口まめで、世間のある事ない事を聞き出しては、觸れ歩くお喋べり婆アでござりまする。
お民　えゝ餘計な事を言はつしやるな。（ト是れにて治右衞門よい事を聞いたといふ思入あつて、）
治右　然らば老婆、それへ出ませい。
お民　はい、私は老婆と申す名前ではござりませぬ。
治右　はて分らぬ奴ぢや、年取つて居る女ゆゑ、それで老婆と申すのぢや。
お民　へい、左樣なら、老婆と申すのは、年寄りの符牒でござりまするか。
治右　まあ、左樣なものぢや、こりや老婆、最前より見受けし所四人の內では其方が、一番年嵩の事なれば、加納將監殿方へ奉公に出でし澤の井と申す、腰元の宿許位は存ぜぬといふ事はあるまい、篤とそれにて考へ見やれ。
お民　いえ、一向に存じませぬ。
治右　はて、二十年程前の事ゆゑ、丁度そちが年配盛り、何ぞ世間で承はつた、心覺えはあらざるや。

ト此うちお民思ひ出したるこなしあつて、

お民　はい、それはあの。(ト言ひかけるを、田吾作袂を引くゆゑ、お民心附き、)いえ、一向に存じませぬ。

ト三五郎これを見てきつとなり、

三五　こりや〳〵お民、それへ出い。いやさ、只今それなる民とやらが既に何やら申しかけしを、袂を引きたる土ほぜり、何故あつて止めしぞ、仔細を聞かん、それへ出い。(ト思入あつてお民に向ひ。)

田吾　いえ、一向に存じませぬ。

三五　やあ、知らぬなどゝは、横道者めが。(ト是れにて三五郎當惑の思入にて、)こりや老母、何か只今其方には思ひ出したる樣子であつた、何も恐るゝ事はない、包まずそれにて申し上げよ。

お民　さあ、何やら思ひ出したと思へども、又引込んでしまひました。いや年を取ると、今の事を今忘れてしまひますから、若い時分の事などは、一向に存じませぬ。

ト是れにて三五郎當惑の思入にて、

三五　平石氏、最早調べも是れまでゝござる。(ト治右衞門思入あつて、)

治右　あいや、まだ調べが屆きませぬ。

三五　なに、屆きませぬとはな。

治右　先々、お待ちなされい。（トお民に向ひ、）こりや老婆、爰をよつく承はれ。そち達が料簡にては、存じて居ると申しなば掛り合ひになるかと思ひ、存ぜぬとのみ申すであらうが、假令そちが申したとて、決して迷惑いたすやうな取計らひはいたさぬ程に、天下の御爲を思ふなら、心を落着けとつくりと、心當りを考へ出して、存じて居らば何なりとも、我々どもに聞かせてくりやれ、必ず權威で調べをなす、吟味などゝは違ふゆゑ、高い所に居るゆゑ恐怖して思ひ出せずば、それへ參つて承はらん。こりや、上役人とも言はるゝ者が、兩手を下げて賴むわいやい。

ト治右衛門緣端へ出で、兩手を突いて賴む、是れにてお民思入あつて、

お民　はい、ようござりまする、思ひ出した事を申しませう。

治右　なに、手掛りを申すとな。

お民　いや、外聞の惡い事なれど、若い時から此年まで、隨分人に憎がられ、亭主の外は誰一人構ひ手のない此お民に、お前さんのやうなお役人が、手を突いて賴まつしやるなら、假令跡で難儀にならうとも、何の厭ひはあるものぞ。實はさつき、爰に居る此衆と言ひ合せ。

ト言ひかけるゆゑ、百姓皆々びつくりして、お民の口を留めようとするを、三五郎見て、

三五　やい〳〵、控へ居らぬか。（トきつといふ。是れにて百姓皆々餘儀なく控へる。お民これに搆はず、）

お民　何でも一向に存じませぬと、言つてしまへば厄介拂ひだから、それが一番よかんべいと、何をお尋ねなされても、知らぬ〳〵と申しましたが、知らぬ事はござりませぬ。

ト是れにて治右衛門悦ばしき思入あつて、

治右　さて〳〵、そちはうい奴ぢや、吉田氏如何でござる。

三五　いや平石氏の御說得、實以て感服いたした、是れを思へば手前などは、まだ〳〵調べが未熟でござる。

治右　して〳〵、そちが存じて居る、話しといふはどうぢや〳〵。

お民　はい、斯ういふ譯でござりまする。（ト合方になり、）只今お尋ねなされました、その澤の井と申す女は、此の平野村の村境に鎭守樣がござりまして、其の鎭守さまの神主に山岡伊勢どんといふ人がござりまして、表向は神主さんで大層位がいゝやうだけれど、內證は苦しがりで年中困つて燻つて居りますが、その伊勢どんの女房になつて居りまして、今でこそ子が出來たものだから、えらく居りますが、あれでも嫁に來た時分には、屋敷下りで野暮ではあるが、高髷の島田に結つて、彼岸の牡丹餅を見たやうに、顏へ口紅をさしたり、白粉を塗つたり、めかし込んで居たもんだから、伊勢どんが女房自慢で、鎭守さまの祭りや何かで、神樂の時に巫女に出し、自分は側で

囃子方、太鼓を叩いてテケテツテ、女房が巫女で鈴ガラリン、亭主が太鼓でテケテツテ、テケテツテの鈴ガラリン〳〵。

ト仕方交りにて、乗地になつて喋舌り立てる。

治右　こりや、待て〳〵、待て。（トきつといふ、お民びつくりして、）

お民　はい、一向に存じませぬ。（ト下に居る。）

治右　それは昨日加納殿の指圖によつて、探索なし最早調べをいたせしが、菊の井といふ女にて、澤の井にてはあらざるぞ。

お民　はい、菊の井でござりましたが。

治右　して其外に澤の井と、申す女の手掛が、心當り、何ぞ覺えはあらざるや。

お民　お精靈さまの蓮の飯なら、心當りがござりまするが、澤の井といふ女では一向覺えが。

治右　はてさて、それは困つたものぢや。（ト當惑のこなし、三五郎こなしあつて、）

三五　いや平石氏、こりや我々が不覺でござつた。

治右　なに、不覺であるとは。

三五　されば、斯かる邊土へ參つて、上役人の權威を以て取調べんといたせしゆゑ、如何なる難儀が掛

らうかと、恐れをなして百姓共が、知らぬと申せども、夫の澤の井が身許の探索、少々にても手掛りとなるべき事を申すに於ては、一人に附き十兩宛褒美を取らせ遣しなば、こりや手掛りを得ようも知れませぬ。

治右　何さま、これはよい工風、天下のお爲に相成る儀ゆゑ、十兩位は容易きこと、然らば褒美の十兩金、これへ差出し調べをなさん。（ト胴卷より小判を澤山出し、紙の上へ置く、百姓皆々びつくりなし、）

田吾　そんなら御詮議なされまする、澤の井どのを知つて居れば、

久根　直に十兩、

皆々　下さるとか。

治右　おゝ、誰でも存じ居らば、褒美に直樣遣はすぞ。

三藏　それに相違は、

皆々　ござりませぬか。

三五　はて、武士の詞に二言はないわい。（ト是れを聞き田吾作前へ出て、）

田吾　左樣なら、存じて居ります。（ト久根八掻きのけ前へ出て、）

久根　いや、私が存じて居ります。（ト畑六久根八をかきのけ前へ出て、）

畑六　いえ、私が存じて居ります。（ト三藏百姓三人を掻きのけ、前へ出て、）

三藏　誰より彼れより私が、一番存じて居りまする。

お民　いえ〳〵、誰が知つて居やうとも、褒美はわたしが。

三藏　いや〳〵、わしが。

ト皆々爭ふことよろしくあつて、トヾお民むゝと言つて倒れるゆゑ、皆々びつくりして、

田吾　あゝ、こりや婆アさんが癲癇だ。

三藏　天窓へ草履を乘せなせえ。

久根　何にせよ、呼び生けてやれ。

畑六　それがいゝ〳〵。

皆々　お民婆アやアい〳〵。（ト呼び生ける。是れにてお民心附き、）

お民　あゝ苦しや〳〵、こう〳〵入齒を呑みこんだ。

ト是れにて治右衛門、三五郎顏見合せ、悅ばしき思入にて、

治右　いやなに百姓共、誰が何を申さうとも、是れに居合す者共殘らず褒美を遣るあひだ、片時も早く申し上げい。

お民　それで入齒が、落着きました。

ト是れより合方きつばりとなり、田吾作前へ出て、

田吾　左樣なら私は、一番よく存じて居るゆゑ、惣名代に申しまするが、澤の井どのゝ宿さいふのは、隣村で平澤村といふ所の、一軒家に居ましたお三婆アと申しまする取揚げ婆さんの娘でございまする。

治右　むゝ、して其のお三と申す老婆は、未だ存命いたし居るか。

田吾　いえ、其者は四五年あと、雪の降る日に醉ひ倒れ、居爐裡の中へのめずり込み、死にましてござります。

田吾　むゝ、すりや母親には變死を遂げしか。して〳〵娘澤の井は、存命なるかどうぢや〳〵。

ト是れにて三藏前へ出て、

三藏　御役人樣へ申し上げます、七年跡の類燒で、帳面は燒きまするし、二十年も前の事ゆゑさつぱり忘れて居りましたが、只今よく〳〵考へましたが、その澤の井といふ女中は、丁度加納將監樣へ御館樣のお胤にて、德太郎樣といふ若殿樣がおいでなされて、お世繼ぎにお成りなされた其時分に、私共から口入れをして、呉服の間の御奉公に、差上げましてございます。

ト是れを聞き、治右衞門三五郎思入あつて、

治右　むゝ、それぞ詮議のよき手掛り。して〳〵それより、如何いたした。

三藏　へい、御館樣の御胤にて、德太郎樣といふ若殿樣がお出でなされて。

三五　えゝ、それは只今承はつた。後を申せ〳〵。（ト急き込んでいふゆゑ、）

三藏　あゝ申し、さうお急きなされては、前後いたして申されませぬ。

三五　いや、左樣でもあらうなれど、一跡を爭ふ天下の大事、早く申せ〳〵。

治右　急いては事の仕損じあり、先々氣長にお聞きなされい。

三五　して、其後は如何いたした。

三藏　左樣いたすとその女中が、脹滿といふ病を煩ひ、お暇願つて宿許へ下りましてござりまする。

治右　して、其の後は如何いたした。

三藏　へい、段々樣子を聞きましたら、お屋敷に居て、父なし子を孕んだと申すこと。

三五　して、其後は如何いたした。

三藏　それから先は、存じませぬ。

田吾　おつと、それから知つて居るのは、此の藪際の田吾作ぢや、丁度その年霜月半に、父なし子を産

みましたが、取揚げ婆アが家なれば、世間へ知らさずこつそりと、後始末をしたから、世間で誰も知る者なし。

久根　所が知つて居りますのは、此の久根八でござりまする。丁度家のかゝアが臨月前でござりましてお三婆アが見舞に來て、めそ〳〵泣き出す話しを聞けば、娘が産んだ男の子が、藁の上にて死んだゆゑ、娘も直に血が上り續いて親子諸共に、産所で死んだと申しました。

ト此うち治右衞門、腰の矢立を出して一々手帳へ留めることありて、

治右　して其折に親子とも、何れの寺へ葬むりしぞ。

久根　さあ、其の佛は、皆の衆。

畑六　わしも毎度平澤村の、お三の所へ、話しに行き、娘の愚癡は度々聞いたが、寺は何處だか知らないんだ。

お民　せめて寺でも知つて居れば、わたしが敎へて上げようもの、ごういふ事でかそんな話しを、今まで少しも聞かなんだは、顏の地面が中低くゆゑ、隣の村が知れぬと見える。

治右　然らば是れより近邊の、寺院を殘らず探索なさば、知れざる事はよもあるまじ。

三五　とはいへ、又候一日の、日を費さねばならざる仕儀。

治右　誰か寺をば存じ居る、よい手掛りが、

二人　ありさうなものぢやなあ。（ト歎息の思入、此時奥より、）

甚右　あいや、その寺院は私が、只今申し上げませう。

二人　あの聲は。

皆々　名主樣。

ト合方になり、奥より平野甚右衛門、羽織着流しにて出來り、二重下手によろしく住ふ。

治右　おゝ、其方は當所の主人。

三五　すりや寺院をば、存じ居るとな。

甚右　誠に燈臺元暗しと、お調べなさるゝ澤の井の母なるものが、平澤村のお三婆アと申すこと一向心附かざるゆゑ、御手數を相掛けしが、小前の者が委しく樣子を存じ居つて、甚右衛門めも恐悦にござりまする。

田吾　さういふ事ぢやあ名主樣にも、

久根　褒美の割は、

皆々
百姓　取れますめえ。

甚右　えゝさわがしい、靜かにせぬか。

皆々　へい。（ト控へる。）

治右　して又お三が、娘の澤の井が、

三五　水子で果てし其の死骸は、

治右　いづれの寺院へ、

二人　葬りしぞ。

甚右　一通りお聞き下さりませ。（ト合方きつぱりとなり、）いやもう、名主役を勤めながら、人別の取調べ不穿鑿にはござりますれど、元お三儀は他國より此地へ參り、長旅の千ケ寺詣りにござりまするが、宿緣あつて足を留め平澤村の寺地にて、かすかな暮しをいたして居るゆゑ、女一人の事と申し、最早老年の事なれば、不便と心得人別も、取調べなく差置きしが、二十年程前なるが國から便り參つたる、娘が病死をいたせし所、元より親類緣者もなく、菩提所とてもあらざるゆゑ、當惑いたすと歎きしゆゑ、幸ひ手前の檀那寺、一向宗にて平澤村の幸傳寺と申すのへ、葬らせ遣はしましたが、今々思へば懷胎にて、屋敷を下げし娘ゆゑ、それとあらはに私方へは、屆けぬ事と相見えまする。

ト是れにて治右衛門、三五郎思入あつて、

治右　これにて様子が相分つた、然らば住持を此處へ、

三五　早速ながら人を遣り、何卒お呼び下されい。

甚右　幸ひ今日私方に、忌日の佛があつて、幸傳寺の住持祐然、佛間へ參つて居りますゆゑ、只今呼ぶでござりませう。

治右　それは何より、よき手番ひ。

三五　然らば是れへ、早く〳〵。（ト甚右衛門杢助に向ひ、）

甚右　こりや杢助、祐然どのを、呼んで參れ。

杢助　畏りました。（ト奥へはひる。）

お民　いやまた、御褒美の貰ひ手が、

三藏　あとから一人、

皆々　殖ゑて來たわえ。（ト此時奥にて、）

杢助　さあお住持さま、かうお出でなされませ。（ト合方きつぱりとなり、杢助先きに、奥より祐然坊主螢田舍寺の住僧袈裟法衣にて出來り、）お連れ申してござりまする。

祐然　甚右衞門さん、何御用でござりまする。（トよろしく住ふ、甚右衞門治右衞門三五郎に向ひ、）
甚右　則ち是れが幸傳寺の、住僧祐然どのにござりまする。（ト治右衞門三五郎祐然を見て、）
治右　おゝ、左樣でござるか。
三五　さゝ、是れへ〳〵。
祐然　御免下さりませ。
治右　貴僧をこれへお招き申すは、餘の儀でもござらぬが、今を去ること二十年以前に平澤村に罷り居りし取揚げの老婆三方より、產婦で果てし親子の死人、貴院の墓所へ葬りし覺えがござらうがな。
祐然　今を去ること二十年以前。（ト考へる思入あつて、）如何にも、それぞ是れに居る、甚右衞門どのゝ賴みに任せ、拙寺へ引取りましてござる。
三五　して、葬りし年月は、何年何月何日なるか、お覺えはござらぬかな。
祐然　いやもう、檀家も多き其上に、二昔はご前のことゆゑ、只今是れにて卽答には、御挨拶がなり兼ねまする。
治右　御尤もなるお詞ながら、火急に探索いたさねば相成らぬ儀でござるゆゑ、
三五　自由がましき事ながら、只今御歸院下されて、何卒お調べ下されい。

祐然　委細承知いたしてござりまする。（ト悠々として立ち上るゆゑ、三五郎心の急く思入にて、）
三五　斯くいふうちにも江戸表で、定めて旦那のお待兼ね、
治右　心も心ならざれども、此の探索が行き届かねば、
三五　此儘江戸へ立ち越えんは、平石氏
治右　吉田氏。
兩人　むゝ。（ト兩人當惑の思入、祐然思ひ出したるこなしにて、）
祐然　いや、是れにて委細が分りまする。
治右　なに、此處で。
兩人　分りますとな。（ト祐然元の座に住ひ、）
祐然　いや、何が勿怪の幸ひになるか、此の祐然老衰いたし覺えが惡くなりしゆゑ、檀家へ參つて戒名などを、つい〳〵忘れてならぬゆゑ、佛の過去帳を寫して所持いたし居りまするが、とんとそれをば忘れて居りました。
三五　然らばお早く、お調べ下され。
祐然　只今調べてお上げ申さん。

ト懐中より過去帳を取出し、悠々と目鏡を取出し、掛ける事などよろしく、三五郎心の急く思入にて、

三五　まだお調べが、屆きませぬかな。

祐然「釋秋蓮信女。」是れでもないわえ。（ト頻りに過去帳を繰つて居るゆゑ、三五郎急き込み、）

三五　知れずば手前が、拜見いたさう。

治右　先づ〳〵それに、お控へなされい。（トよろしく制す、祐然段々と過去帳を繰り、開き見て、）

祐然　おゝ、知れました〳〵。

三五　して〳〵、何年何月でござる。

祐然　寛永二年戊の霜月十五日の佛にて、「釋妙幸信女、釋朝霜童子。」

ト是れを聞き、治右衛門は直に手帳へ留める、三五郎指折り算へる事あつて悦ばしき思入。

三五　むゝ、親子諸共同日なるが、産婦で死去せし慥な證據。

治右　貴僧の蔭にて明白に、年月戒名相知れしは。

三五　われ〳〵兩人江戸表へ、此上もなきよき土産。（ト此うち甚右衛門思入あつて、）

甚右　何故あつて御兩所様には、斯く御辛苦をなされまして、死せる後まで澤の井の、身許をお調べな

されまするか。

治右 何をか包まん、當將軍紀州家の老臣將監方に、未だ御座ある其砌に、かの澤の井にお手を附けられ、懷胎なして宿許へ下りし後は不通に打過ぎ、

三五 此度上樣の御尋ねにより、我れ〳〵兩人當國まで、探索いたしに罷り越す。只今是れにて承はりし、朝霜童子といへる者が、當將軍家の、

兩人 御胤でござる。

甚右 えゝゝゝ。(トびつくりしたる思入。)

祐然 さては拙寺へ葬りし、お三が孫の水子といふは、將軍樣の御胤でありしか、知らぬ事とて。(ト言ひかけて氣を替へ、)南無阿彌陀佛々々。(ト治右衞門思入あつて、)

治右 して其墓は只今以て、貴院にござらうな。

祐然 いや、其墓は昨年の秋。(ト言ひかけるゆゑ。)

甚右 あゝこれ。(ト目配せで押へるゆゑ、祐然心附き、)

祐然 取り毀しはいたしませぬ。

三五 然らばやがて江戸表より、御寄附の御沙汰がござらうから、石碑を新たに、いやさ、石碑を改め

大事にめされい。
祐然　委細承知いたしてござりまする。(ト百姓皆々これを聞いて、)
田吾　何と皆の衆、幸傳寺の和尚様は、えらい事をさつしやつたな。
久根　さうとも〳〵、こりやなか〳〵十兩位の、褒美どころぢやござらぬ。
畑六　人の運は天にあり、牡丹餅は棚にありと、
三藏　どこにどういふ福があるか、
お民　ほんに知れない、
皆々　ものだなあ。(ト此うち治右衞門件の金を紙に包み、)
治右　百姓共に用事はない、四人の者へ二十金、褒美の印に遣はす間、よしなに分けて持ち歸れ。
田吾　四人の者とおつしやるは、
お民　もしや私を省くのでは、
治右　いや、其方ども四人に遣はすのぢや。
お民　それは有難うござりまする。(ト件の金を受取り、)
三藏　扨は別段私へは、御褒美を下さりまするか。

三五　口入渡世をしながら、上役人を僞る不埒、咎めの沙汰にも及ぶ奴ぢやが、褒美の代りに許して遣はす。
三藏　そんなら知らぬと申したゆゑ。
治右　叱りおくから、左樣心得い。
三藏　へい。（ト不承々々に下に居る。）
お民　扨々お上は、
皆々　有難いものぢや。
治右　又幸傳寺の住僧には、江戸表への證書にいたせば、其戒名と諸共に檀家の趣き書認め、何卒御渡し下されい。
祐然　然らば暫時、御免を蒙り。
茜右　それ杢助、書物所へ御案内いたせ。（ト唄になり、祐然杢助附いて奥へはひる。）
田吾　そんなら是れにて、お役人樣、
お民　どれ、お暇と、
四人　出かけませう。（ト百姓皆々禮を言つて枝折戸の外へ出る。三藏も跡より附いて出る。）

三藏　何の事だ馬鹿々々しい、皆が褒美を貰ふ中で、わしばかりが貰はぬとは。
お民　それもやつぱり。
四人　嘘の報いだ。
三藏　あゝ嘘から出た、間拔けぢやなあ。
　ト在郷唄になり、お民先きに、百姓三人三藏附いて花道へはひる。甚右衞門思入あつて、
甚右　裕然ごのは、何をしてござる。どれ、急き立てゝ參りませう。（ト立ち上らうとする。）
治右　あいや、甚右衞門どの、暫く〳〵。
甚右　何ぞ御用でござりまするか。（ト是れにて治右衞門思入あつて）
治右　ちよつと是れへ。
甚右　はツ。
　ト是れより合方替つて、甚右衞門二重眞中へ住ひ、治右衞門上手に三五郎下手になり、
三五　一刻一時を爭ふゆゑ、心急きにはござれども、そこ許に密々に承はりたい一儀がござる。
甚右　むゝ、してお尋ねとおつしやる事は。
治右　外でもござらぬ、さいつ頃老婆お三が變死の砌、その近邊にて當地をば、立退きし者はござらぬ

か。

ト これにて甚右衞門考へるこなしあつて、

甚右 如何にも當地を立退きしもの、兩三人ござりまするが、何故お尋ねなされまするな。

治右 只今申せし三が娘澤の井が懷姙の折、後日の證據に將軍家より、御墨附御短刀を形見に下しおかれしに、年限經つて江戸表へ御落胤と名乘る者、右二品を持參なし、御對顏の儀を願ひ出しが、不分明なる事ゆゑ、實はわれ〳〵兩人は、身許調べに參つてござる。

三五 然るに澤の井出產の折に、母子諸共死去なせしこと明白に分りし上は、御落胤と名乘りし奴こそ、主人の目鏡に相違なく、天下を欺く紛れ者、察する所澤の井が死後に老婆が所持せし二品、變死の砌り奪ひ取り、證據となして江戸表へ、名乘り出しに疑ひなし。

ト 甚右衞門是れを聞き思入あつて、

甚右 して其者は江戸表へ、何れよりして參りましたか。

治右 されば天下の落胤と名乘り出しは、佐渡の國相川郡尾島村にて、人と成つたる趣きにて、

三五 天一坊と相名乘り、京地は勿論大阪まで、廻りし由にて江戸表へ、此度下向いたしてござる。

甚右 して年齡は何歲位、如何なる人相骨柄にて。

治右　年は未だ二十を越さず、小作りにして色白く、
三五　眼中涼しく鼻筋通り、美男といふべき相貌なり。（ト甚右衛門思入あつて、）
甚右　もし其者の左りの眼尻に、一つのほくろはござりませぬか。
三五　いかにも彼れが眼尻には、ほくろと思しき一つの黒星。
甚右　さてはいつぞや國遠せし、法澤にてはあらざるか。
治右　して、法澤と申すは、何れの者で、
二人　ござるな。
甚右　それぞ當國平野村にて、二十歳前より住ひせし感應院と申す修驗者の宅に、久しく居つた弟子でござる。
治右　して其者は常の行ひ、如何なる身持でござつたな。
甚右　年に似氣なく惡賢こく、心許せぬ小坊主なりしが、今より丁度四年以前、お三が變死いたせし其夜、感應院儀も毒にて死去なし、其後間なく修驗の道、修行の爲に諸國を廻ると、暇乞して立たんとせし時、ばつたり落す金包、合點行かずと存ぜしが、其儘出立いたせし夜、加田の浦にて人手に掛り死骸はなけれど血に染し、衣類が殘り居つたるゆゑ、皆法澤は横死を遂げしと村方にて

は申せども、此甚右衛門一人は、心得がたく此の年月、不審を打ちし三ヶ條。

治右　して、其の不密の一ヶ條は。

甚右　お三が半身圍爐裡へ落ち、燒け燻りて變死の體、如何に泥醉いたせばとて己の體へ火の附くを知らずに居つて其儘に、圍爐裡で死すべき謂れなし、是れ不審の一ツなり。

三五　して二ヶ條の、不審と申すは。

甚右　感應院儀毒にあたり横死を遂げしを、其同日駈落なせし其家の下男久助が仕業なりと、證據もなきに法澤が、言ひ觸らせしは不審の二ツ。

治右　して、三ヶ條の不審は。

甚右　加田の浦にて後々の、證據となるべき久助の手紙が落ち散り、死骸もなく、血に染む衣類に數ヶ所の疵、襦袢と布子の切口が、違つて居りしが不審の三ツ。

三五　扨は彼れめが謀計なるか。

甚右　慥にそれと申されねど、推量りて是れを申さば、彼の法澤がお三を害し證據の二品奪ひ取り、師匠を失ひ金子を掠め、加田の浦にて死せしと見せ、衣類を脫ぎ捨て血に染めなし、天一坊と變名なし、天下の御胤と江戸表へ、名乘り出しも計り知れず。

ト此うち治右衛門、三五郎顔見合せ、悦ばしきこなしあつて、此時治右衛門はたと膝を打ち、

治右　むゝ、それにて一々的中いたせば、御身の推察疑ひなし。

三五　測らず斯かる人に出遭ひ、事明白に相分るも、

治右　われ〳〵兩人信仰なす、豐川稻荷の加護なるか。

三五　神とも思ふ甚右衛門どの、

治右　禮は詞に盡されず、

三五　御厚志の段、

兩人　ちえゝ、忝ない。（ト兩人手を突き禮をいふ。）

甚右　いや、そのやうに仰せられては、返つて迷惑いたしまする、先々お手を上げ下され。

ト是れにて三五郎きつとなり、

三五　然らば是れより片時も早く。

治右　あいや暫くお待ちなされい。（ト思入あつて、）いやなに甚右衛門どの、とてもの事に今一つ、お頼み申す儀がござるが、其法澤をよく存ぜし、知り人はござらぬか。

ト此以前下手より、久助五十日鬘、御仕着と見ゆる藍縞の着附、お霜さら毛島田、同じく淺黄と見ゆ

る詰附にて、兩人出て、枝折の外に窺ひ居て、
久助 あゝ、もし、其の見知り人には、私共を、
お霜 お連れなされて、
兩人 下さりませ。（ト枝折の內へはひる。甚右衞門二人を見て、）
甚右 扨は二人は、此場の樣子を、
久助 あれにて聞いて、
お霜 居りましてござりまする。
治右
三五 して、あの者は。
甚右 只今申せし感應院に、奉公せし下男の久助、下女のお霜、彼等二人は法澤と朝夕一つに居りしゆゑ、見知り人には、これ屈竟。
治右 して又如何なる仔細にて、
三五 此處へは參りしぞ。
甚右 それにて仔細を申し上げい。
久助 左樣なら、許さつしやりませ。（トよろしく住ひ、是れより合方になり、）何かの事を段々と小蔭で聞い

て見ますると、憎い奴めはあの法澤、あいつのお蔭で二人とも、身に覺えもなき疑ひ受け、駈落ちして國許へ走る途中で召捕られ、足掛二年といふものは、牢へ入れられ日毎の拷問、何でも主人の感應院を毒害なしたに相違ないと、えらい責苦に逢ひまして、兩手は繩がくびれ込み、背中は破れ膝は崩れ、氣を失うて死んだのも幾度か知れませぬ。

お霜　それといふのも法澤どのが、久助どのゝ國許から參つた手紙を、いつか拾つて持て居たのを、加田の浦の衣類の側へ殘せしゆゑ、無實の科に召捕られ、女のことゆゑ私は左程の責めには逢ひませねど、久助どのが責苦に逢ひ死ぬ苦しみを側に居て、見るも悲しく身にこたへお主を毒害した覺えは露いさゝかもなければども、此身に罪を引受けて毒害したと白狀して、死なうと覺悟はいたしても、久助どのがそれゆゑに、共に命をとらるゝかと、死ぬにも死なれぬ憂き思ひ。

久助　所へこちらの旦那樣が、度々のお慈悲願ひに、出て下されたお蔭にて、やう〳〵二人は詮議中名主預けになりまして、

お霜　御庭の隅の雜小屋をお借り申して二人とも、養生なして居りしゆゑ、思ひがけなきお話しを承はつて參りましたは、

久助　此譯ゆゑで、

兩人　ござります。（ト治右衞門思入あつて、）
治右　して又そち逹二人は、何ゆゑ駈落いたせしぞ。（トこれにて久助天窓を掻き、）
久助　これぱつかりは御役人樣の、前ではどうも申されませぬ。
三五　さてはそれなるお霜とやらと、懇にして居つたのぢやな。
久助　まあ、そんな事でござりまする。
甚右　いやもう、あれなる二人は日頃より、正直律義の者なるが、若氣の至り不義を働き、主家を駈落ちいたせしゆゑ、かゝる無實の罪を負ひ今は後悔いたせし樣子、何卒今度の御用に立てば、不義の罪科をお許しあるやう、偏に願ひ上げまする。
治右　其儀はわれ〳〵兩人が、よしなに主人へ申し上げ、取計らひをいたすでござるが、然し天下を欺く程な巧みをいたす法澤なれば、假令證人出づるとも、容易に罪には伏すまじ。
三五　何ぞ彼れめが日頃より、おのれと恥入り、申し出さば、恐るゝ事はなかりしや。
ト是れにて久助よろしく考へる事あつて、
久助　これぞといつて恐るゝことは。（ト考へ出せし思入にて、）おゝ、思ひ出した。（ト大きくいふ。）
お霜　えゝ、もうびつくりするわいなあ。

治右　して〳〵それは、
三五　如何なる儀ぢや。
久助　あの法澤めが恐れましたは、左の腕から肩へかけ、天の字に似て居るやうな一つの痣がございましたが、人に見せる事をいやがつて、風呂へはひるにも手拭で、しつかり押へてはひりましたを、此久助がいつぞや見出して、でつかい痣だといひましたら、顔を赤らめ此事は、世間の人に言つてくれなと、頼んだ事がございました。
治右　むゝ、それぞ一ツの證據ながら、
三五　まだ其外に彼れを伏さす、
治右　證據の品は、
兩人　あらざるか。
久助　さあ、外に證據はございませぬが、加田の浦にて法澤が犬を殺して其血を絞り、おのが着物へなすり附け、又小刀にて襦袢から着物を自身に切り裂きまして、立ち退く所を二人して、
お霜　蘆間の蔭に忍びまして、をかしな事をする子ぢやと、思うて見ては居ましたが、駈落ちをする私共、咎めることもなりませず、立ち退きましたが害になり、

久助　無實の罪で召捕られ、それを一々言ひ上げても、
お霜　御取上げなく此年月、難儀をいたしてござりまする。（ト是れを聞き甚右衛門思入あつて、）
甚右　おゝそれにて思ひ出せし事あり、その着類をば検視の砌り、血潮の色に切口が分明ならずと評議の上、後日の證據にならうかと、濱奉行の闕所藏へ取置きましてござりまする。
治右　それぞ何よりよき證據。
三五　然らば是れより彼處へ立越え。（ト立上らうとするを、）
甚右　あいや其儀は私が、是れより直に參りまして、久助お霜が身分の願ひ、血に染む衣類も奉行より
　つい借り受けて參りまする。
治右　左樣ござらば、御苦勞ながら。
甚右　承知いたしてござりまする。
三五　火急な儀ゆゑ、何分早く。
甚右　つい今の間に、行つて參ります。
　ト甚右衛門立上り、二重より下り、合方にて下手へはひる。是れより段々早き思入、治右衛門三五郎心の急く思入にて、身支度をなし、

治右　こりや〳〵久助、われ〳〵共は江戸表へ、早駕籠にて立歸れば、女を連れては足手纏ひ、そち一人を召連れるぞ。（ト是れを聞きお霜こなしあつて、）

お霜　左樣ならば私は、あの一緒には參られませぬか。

三五　十日の間の探索も、四十里の行程ゆゑに、三日半にて當地へ立ち越し、又候三日の日を費し、出府いたすも手詰の早打。

久助　それでは所詮おぬしをば、連れる譯にはならぬゆゑ、おれの歸るを待つて居れ。

お霜　さういふ譯なら是非もないが、花のお江戸へ行かしやんして、心替りのせぬやうに。

久助　用さへ濟めば戻つて來るから、案じごこをばせぬがよい。

ト此うち治右衞門胴卷より金を出し、紙に包み、

治右　些少なれごも、留守中の手當。（ト投げて遣る、久助手に取り、）

久助　そんなら、是れを、

お霜　御手當に。

三五　やがて目出度く久助が、國へ歸るを待つて居やれ。

お霜　えゝ、有難うござりまする。（ト此時ばた〳〵になり、奥より以前の杢助書附を持ち出て來て、）

杢助　御寺様の書附でござりまする。(ト治右衛門に渡す。)
治右　これもよし〳〵。(ト改め見て懐中する、此うち三五郎心の急く思入にて)
三五　あゝこれ、主人はまだ戻つて來ぬか。(ト久助思入あつて、)
久助　此の久助が一走り。(ト尻を端折り立ち上る。お霜袖を控へ、)
お霜　あゝこれ、お預けの身で門から外へは。(ト久助心附き、)
久助　こいつはおれが早まつた。
杢助　そんなら旦那は、今の間に。
治右　濱奉行まで參つたのぢや。
杢助　それは大變、半道ある。
三五　なに、半道とな。(トびつくりして立ちかゝる。)
治右　はて、最早程なく。(ト三五郎を隔てるを木の頭、)戻るでござらう。

と此模樣時の鐘、早き合方にて、

ひやうし　幕

幕引きつけると、道具蔭廻しにて、直に引返す。

六幕目　大岡邸切腹の場

〔役名｜｜大岡越前守、平石治右衞門、吉田三五郎、池田大助、近習三人、諸士惣出、越前守奥方小澤、同嫡子忠右衞門等。〕

（大岡屋敷奥の間の場）｜｜本舞臺三間の間中足の二重、正面銀襖、前側塗骨障子を建切り、上の方あとへ下げて一間塗骨障子屋體、下の方同じく障子屋體、出はひりあり、正面より下手へ打廻し三尺の本椽附、上手松の立木、日覆より同じく釣枝、總て大岡屋敷奥の間庭先の體、爰に一、二、三の近習三人、股立にて立ちかゝり居る、此の見得早舞にて幕明く。

一　いやなに御兩所、お手前方なり身共なり、斯程心中惑亂いたし、氣の揉める事はござらぬな。

二　そこ許の言はるゝ如く、最早今日で十日になれど、紀州表へござつた、平石吉田の兩名より書狀一封參らぬは、如何いたしたものでござるか。

三　心も心ならざるゆゑ、此間より替り〴〵品川、川崎、神奈川まで、見張りの者を出しまするが。

一　只今以て便宜もなく、先刻品川まで遠見に馬上で參つたれど、影も見えませぬ。

二　翼があらば拙者などは、紀州表へ飛んで行き、彼の地の樣子を聞きたゞし、越前樣へ注進申し上げんに。

三　今日沙汰のなき時は、越前樣には御切腹さ、此程よりの御決心。

一　平石吉田の御兩所も、かねて御承知ある事ゆゑ、御如在とてはござるまい。

二　せめて彼の地の樣子をば、三日限りの書狀でも、お出しなされば安堵いたすに。

三　未だに何の沙汰もなく、

一　紀州の詮議が屆かぬので、

二　それ故便宜が、

三人　ござらぬと見えるわ。（ト此時後の障子の内にて）

忠右　父上樣、御支度はよろしうござりまするか。（ト此聲を聞き三人びつくりなして）

一　やゝ、あの御聲は若殿樣、最早越前樣には御最期の御用意遊ばす御樣子なり。

二　今御兩所もお歸りなければ、六日の菖蒲十日の菊、これより馬に打乘つて、

三　跡の祭りにならぬ先き、今一度高輪まで、

一　遠見をなさん、御兩所ござれ。

兩人　心得ました。（ト早舞にて、三人早足に花道へはひる。鳴物打ちあげ、床の淨瑠璃になり、）

〽如月の時を違へぬ鶯の梅の蕾は開けども、餘寒にこほる池水や、辛苦に閉づる忠相は、淺んの雪の白小袖、あはれ子息も諸共に、覺悟を死出の小四方へ、最期の刃奥方が涙に迫る日數さへ、今日ぞ十日に身の一期。

ト此うち鶯笛をあしらひよき程に障子を引きぬく。内に白布を敷き、此中に越前守、白小袖無紋の上下にて住ひ、上手に子息同じなりにて住ひ、越前守の前に小四方へ九寸五分を載せあり、下手に小澤の奥方、白小袖白の打掛にて、額へ紙をあて住ひ、上手の花活へ白梅活けてあり、越前守これへ目を附け居る、風の音、鶯笛、誂への合方になり、

越前　梅は諸木に魁て、勝色見する勇しさ、武士は殊更賞美なす、其花さへも開く時節に、我は散り行く身の薄命。

小澤　せめて、御心慰む爲と、手折つて活けし梅ケ枝の、花の薫りを炷物に、替へてあの世の手向草。

越前　老木ならねど芳しき、名も朽ち果てる今日となり、世を鶯の囀るも、

小澤　經讀み鳥と聞くからは、あれも冥土の導きなるが、

越前　梅も未だ半咲かぬに、

小澤　蕾のうちに散りて行く、
越前　盛衰榮枯は、
小澤　世の習ひ。（ト時の鐘。）
越前　聲も無常の、
兩人　ひゞきぢやなあ。
〽常に愛する花鳥も、心ありての導きかと、暫し愁ひに沈みしが、忠相心勵まして、
ト越前守愁ひのこなしあつて氣を取り直し、
越前　やあ〳〵、大助早や參れ。
大助　はあゝ。（ト下手障子屋體の内にて。）
〽はつと答へて大助が、是非もなく〳〵お次より、明くる障子も主命に、介錯なさんと立出でゝ。
ト下手障子を明け、大助上下一本ざし、刀を持ち椽側傳ひに下手へ來り、下に居て、
先刻よりの仰せに從ひ、御介錯に參りましたが、いよ〳〵以て越前樣には、御切腹遊ばしまするか。

越前　病氣付けをいたしてより、最早日數も十日なるに、平石吉田の兩人より、今に書狀の到來せぬは、紀州表の探索も行き付かぬと覺えたり、それをば待つて死を延はり、後日の恥辱受けんより、忰忠右衞門を刺殺し、切腹なして相果つる、先刻申し附けし通り、猶豫いたさず介錯いたせ。

大助　すりや、どうあつても御切腹を、遊ばしまする御所存なるか。はて、是非もなき事でござる。

トうつ向き居る。

小澤　今更申して返らねど、そも此度のお調べを、仰せ附かりし初めより、越前樣には三州の豐川稻荷へ水垢離取り、御願を掛けられし甲斐もなく、今に紀州の便りも分らず、お腹を召すとは情ない、世に神佛はない事か。

〽歎きたまへば父の前、取り繕うて若君が。（ト小澤愁ひの思入、忠右衞門こなしあつて、）

忠右　そのお歎きは御道理なれど、神や佛の御力にも。

〽およばぬものか昔より、忠義を盡すものゝふの、武運に盡きて腹切るは、物の本にも記してある。

今父上の御最期も。

〽武運に盡きしと母上樣、もうあきらめてと健氣にも勵ます詞に大助も。

ト此うち忠右衞門よろしくあつて、

大助　はゝ、驚き入つたる今のお詞、御前をはじめ若様まで、斯く御決心遊ばせしを、拙者が申すこと
お取上げはござりますまいが、日數十日の其内に紀州の調べ届かねば、御切腹との御意ながら、
未だ十日の日限も切れしと申す次第でもなく、せめて今日夕景まで御延引これあらば有無の便宜
も相分らん、何卒暫しの御猶豫を偏に願ひ奉る。

越前　いや〳〵それは僻事なり、既に先日再吟味に、伊賀亮に申し詰られ恥辱を取りし其砌に、切腹な
して死すべきを、天下の大事に生き延はり紀州表の探索も、里數隔てし其上に、雲を當なる調べ
物、假令平石吉田の兩人路次を急いで參るとも、四日ならでは彼の地へ着せず、さすれば上下八
日の旅中、僅か二日の調べにて届くべき筈かつてなし、無理とは知れど今日までの恥辱を忍び病
氣と申し、死を延はるさへ不覺なるに、又もや未練に期を延し、上使の沙汰に及びなば、末代ま
での物笑ひ、そちも當家の忠臣なら、留めるな、聞く耳持たぬぞよ。

大助　すりや、如何やうに申しても。

越前　えゝ、くどいわえ。

〽はつたと睨む兩眼に、浮む涙を押し隱す、君の詞に接穗なく。

ト此うち越前守愁ひの思入あつて、兩眼を閉ぢ、顏を背ける。大助思入あつて、小澤に向ひ、

大助　はあゝ、奧樣へ申し上げます、只今お聞き遊ばす通り、如何やうお止め申すとも、拙者風情が詞をば、御取上げなき御氣色ゆゑ、あなた樣より今一應お願ひなされて下さりませ。

小澤　さあ、日頃忠義な其方ゆゑ、左樣思ふは尤もなれど斯くまでお覺悟遊ばす上は、所詮お止め申したとて、御痛辮にかゝはるのみ、お取上げはないゆゑに、止めたいは山々なれど、忠右衞門が事さへも言ひ出し兼ねて居るわいな。

大助　奧樣の思召し御尤もにはござりまするが、御前には御上への申譯に、御切腹遊ばすとも、御家の御世繼ぎ若殿樣をお殘しあらば公儀でも、忠義の爲の切腹ゆゑ、又寛大の御所置にて、三千石は下さらずとも、三百石でも大岡の御家名立て、御武運の開く時節もござりませう。

〽御世繼ぎまでをお手に掛け、御切腹を遊ばすとは。

日頃の御思慮に、似合はざる。

〽御短慮なりと大助が、忠義一途に諫むれば。（ト大助よろしく思入、小澤思入あつて、）

小澤　其の御短慮をお止め申さば、我が子に心引かさるゝ未練者めと殿樣の、お叱り受けるが恥かしく、止めたいことは山々なれど、わしも覺悟をしたわいの。

大助　すりや奥様にも、御最期を。

小澤　御前と共に自害して、冥土のお供するわいなう。

大助　その御詞を聞く上は、最早お止め申しませぬ、何れも様より大助が、先へ切腹仕り、冥土の魁仕らん。

〽刀の柄へ手をかくれば、（ト大助介錯の刀を取り、抜かうとする、越前守見て、）

越前　やあ狼狽しか池田大助、其方冥土の魁なし、此の越前が含状、誰が老中へ持參いたすぞ。

大助　ではござりますれど其儀は餘人へ。

越前　やあ、餘人に勤まる役目なら、そちを頼みにいたしはせぬわえ。

大助　はあゝゝゝ。（ト平伏なす。）

越前　こりや大助、越前切腹いたせし後、萬一調べ屆きなば、平石吉田諸共に、死後の恥辱を雪ぎくれゑが、死するに勝る忠義なるぞ。

大助　すりや切腹は、相成りませぬか。

越前　死するばかりを、忠義と思ふか。

大助　はッ。

〽死ぬに死なれず大助が、はツとばかりに控ゆれば、忠相威儀を改めて、

越前　こりや忠右衞門、それへ出い。

忠右　はツ。

〽父の詞に忠右衞門、席を進みて控ゆれば、我が子の顏を打ち守り、
ト忠右衞門越前守の前へ出る、越前守ぢつと顏を見て、

越前　あゝ、そちは武運拙きものぢやなあ。（ト床の合方に竹笛をあしらひ）父とはいへど某は、三百俵の家に生れ、家督相續なしてより山田奉行を勤めしが、其頃當上樣には未だ紀州にあらせられ、間もなく八代將軍と仰がれたまふ御名君、山田奉行を勤めし折、御存じあつて御召し寄せ、江戸町奉行仰せ附られ、それより立身登用なし今三千石の知行をたまはり、以前に倍せし其家へ生れる果報はありながら、果報拙く家督も繼がず、年齡僅十一歳にて父の刃に死するとは、この世へ出でし甲斐もなく嘸殘念に思はんが、そちを殘しておかれぬは、そも此度の事件につき、伊豆守の意に背き再吟味を願ひしゆゑ、閉門仰せ附けられしを、死人の體に番士を欺き出門なして小石川御館へ歎願なし、閉門御免になるのみか、再吟味のお許し受け、奸賊共を伏罪させんと、思ひの外に恥辱を取り、病氣と號し紀州表を探索させしも行き屆かず、切腹なすも天下の爲め、元よ

り覺悟の事なれば一旦御執成し下されたる、小石川御館へ對し、家を捨てねば某が、申譯に相成らざるゆゑ、そちが命は助け難し、死するは武士の常なれど、そちを殺すは我が死すより、猶百倍の思ひぞよ。これといふのも相學の秘術を習ひ覺えしゆゑ、天一坊の相貌を一目見るより將軍の、御落胤にあらざる事を慥に見拔き、斯くまでに老若諸侯の意に背き、水府公まで御迷惑をお掛け申せし我が不覺、思へば無念口惜しや。

へ拳を握り無念さの、中に彌増す子の恩愛、顏撫で擦れば奥方も、歯を喰締めてむせび居る親を諫むる子の健氣さ。

ト越前無念の思入あつて、子息の頭を撫で、ぢつと思入、小澤これを見て泣いて居る、忠右衞門しやんと居直り、

忠右　今父上の仰せの通り、三千石の此家を相續せぬは口惜しけれど、病で死ぬる者さへあるに、天下の御爲に父上と一緒に死ぬは本望と、覺悟いたして居ります。

越前　おゝ悴出來した、よう言うた、それでこそ誠の武士、此の越前が子なるぞよ。

へ泣かぬ目に泣く武士の、一世の名殘り大助も、それと見るより堪り兼ね。

大助　あゝ健氣なる其のお詞、お十一にてかほどまで、大丈夫なる御氣性ある若殿樣を情なや、奸賊共

の其爲に御生害をおさせ申すは、傾く御運といひながら、助ける人はなきことか。えゝ、殘念に
ござりまする。
〽主人を思ふ大助が、涙瞼に保ちかね、誠表す男泣き、歎きの中に奥方は、心嬉しく顔
を上げ。
ト此うち大助拳を握り、向うをきつと見て無念の思入、小澤こなしあつて顔を上げ。
小澤　おゝ忠右衛門出來しやつた、よう褒められてたもつたなう。上樣はじめ人々に、名奉行ぢやと父
上は呼ばるゝ程の御發明、親に勝るは難けれど少しは氣質を受けついで、器量者ぢやと世の人に
褒められたさに幼きより、經書は元より弓馬の道、丹精をして學ばせし、其の甲斐あつて武士の、
教へを守り父上を、勵ますそちが心の健氣さ、母も嬉しう思ふわいなう。
〽立派にいへど女氣に、不便彌增し差寄つて、
これ忠右衛門、主従は三世、夫婦は二世、親子一世とあるからは、今別れなばいつの世に、逢は
れる事やら知れぬゆゑ、よう顔見せてたもいなう。
〽撫でつ擦りつ取り縋り、又も涙になる鐘も、此世を申の時計の音。
ト小澤忠右衛門の側へ來て、よろしく愁ひの思入あつて、よき程に七つの時計鳴るゆゑ、大助びつ

くりなし、

大助　やあ、あのお時計は、最早七ツ。

越前　これ忠右衛門、覺悟いたせ。

〽腹切刀おッ取つて、我が子の胸に差附くれば、

ト越前守忠右衛門を引附け、小四方の上にある九寸五分を取つて、忠右衛門の胸に差附け、

忠右　父上、お待ち下さりませ。

越前　待てとは、そちやおくれたか。

忠右　いえ〳〵おくれはいたしませぬ、とてもの事なら切腹を、おさせなされて下さりませ。

〽父の諸手を押しひらき、行儀正しく座に直り、肩衣刎ねて我が膝へ挾む様子を父は見て、

ト忠右衛門越前守の手を拂ひ、しやんと座を構へ、心靜かに肩衣を刎ね、膝の下へ打敷き、腹を撫でゝ覺悟の思入、これを越前守見て、

越前　はて、天晴なる共の振舞、誰に左様な法式を教へて貰ひしぞ。

小澤　その法式は私が、教へておきました。（ト小澤咽び泣く。）

大助　すりや、奥様がかねてより。

小澤　さあ、此度紀州の探索が行き屆かざる其時は、悴と共に切腹すると、御前樣のお詞に、所詮お諫め申したとてお聞きずみのないを知り、もし御上使の見る前にて、不覺を取らば家の恥と、我が父上より聞き覺えし式作法をば忠右衛門が、手を取り教へしが、昔覺えし式作法、我が子の役に立たうとは、夢更知らぬ事ぢやわいなう。（トよろしく泣き伏す。）

越前　おゝ、よくぞ疾より教へおいた、式作法を心得居るからは、然らば父と諸共に、

忠右　切腹いたすでござりませう。

〽小四方取つて差出せば、押し戴いて九寸五分、教へを守る子の作法、見る母親は身に寒き氷の刃抜きはなし、ともに覺悟を死出の旅、紀州の知らせ如何やと、側に池田は起ちつ居つ。

ト此うち越前守九寸五分を載せたる小四方を、忠右衛門の前へ差出す、忠右衛門これを押戴き、九寸五分を取り上げる。是れにて小澤懷劍を抜き持ち、覺悟の思入、越前守は肩衣を刎ね、刀掛にある差添を取り、抜きはなしよろしく構へる、大助は下緒を襷にかけながら、是れを見て愁ひの思入にて向うへこなしあつて、

大助　あゝ、これ、平石吉田は如何せしか、今立歸れば御主人方の、御命助かる際なるに、なぜ早狀を、

出さぬのぢや。（ト大助うろ〳〵して居る。）

越前　こりや大助。

大助　はツ。（トやはり向うを見て居る。）

越前　こりや、こりや、大助。（トきつといふ。）

大助　はゝはツ。（ト餘所に聞いて向うへこなし、）

越前　何をうろ〳〵いたし居る、我れと悴の後へ廻り、介錯の用意いたせ。

大助　ではござりますれど、今暫く。

越前　えゝ猶豫はならぬ、早くいたせ。（トきつといふ。）

大助　はツ。

〽はツと是非なく大助が、主人の後へ立ち上れば、今ぞ命も風前の、燈火よりもいと危く、
あれやと思ふ其所へ。

ト此うち大助是非なく越前守の後へ廻り、刀を抜き鼻紙で拭ふ、越前守、小澤、忠右衛門の三人と顔見合せ思入あつて、件の白刃を突き立てにかゝる、此時花道の揚幕にて、

治右
三五　我君、暫く。（ト聲をかすめていふ。）

〽止むる聲に、聞き耳立て、（ト越前守思入あつて向うを見て、）

越前　はて心得ぬ、既に最期の折に臨みて、暫くと聲かけたるは。

大助　正しく平石、吉田の兩人。

小澤　そんならもしや。（ト此時また向うにて、）

兩人　暫く／＼／＼。

〽聲もかれ／＼庭前へ平石、吉田かけ出でし。

トばた／＼になり、花道より治右衛門、三五郎、袴大小白木綿の後鉢卷早打のこしらへ、疲れし思入にて出來り、花道にどうとなり、

〽主人の無事に嬉しやと、長途の疲れに氣の弛み。

ト舞臺を見て兩人嬉しく、心のゆるみし思入、うつとりとなる舞臺の皆々嬉しき思入にて、

はゝはゝ。

越前　おゝ、治右衛門、三五郎か。

ト是れより床二挺の合方になり、大助二重より駈け下り、平舞臺にどうとなり、嬉しさの餘り腰の立たぬ思入。

大助　御兩所、待兼ねた〳〵、さゝ是れへ〳〵。（ト手招きする、やはり兩人うつとりとなり居るゆゑ、）

越前　誰そあるか、藥湯を持て。（ト下手にて、）

近習二人　はあゝ。（ト下手より幕明きの近習一二黒樂の茶椀を紫袱紗に載せ持ち出來る、）

小澤　あれなる二人へ。

近習二人　はあゝゝ。（ト花道へ行き、一人づゝ別に治右衛門、三五郎へ藥湯を呑ませる事ありて、）

一　平石氏。

二　吉田氏。

一　御心慥に、

二人　お持ちなされい。（ト言ひ捨てゝ下手へはひる。）

治右三五　はあゝゝ。（ト治右衛門三五郎立上らうとして、ひよろ〳〵としてどうとなる、越前守きつとなり、）

越前　やあ不覺なり平石、吉田、かばかりの儀に取亂し上の御用に立たうと思ふか。（ト荒々しくいふ。）

治右三五　はゝ、はあゝ。（ト兩人きつとなりて、つか〳〵と舞臺へ來り、下に居て、）

治右　御前樣。

治右三五　御安堵遊ばしませ。

大助　すりや、探索が行き屆き、

小澤　二人は戻つて、

小澤 忠右　參りしか。

治右　委細は跡より申し上げん、詮議の的の天一坊は、紀州和歌山在平野村に住居いたせし、修驗者感應院が弟子にして、名は法澤と申す者、

三五　澤の井が母お三を害し、證據の品を奪ひし事豫め疑ひなく、則ち彼れが見知り人の、久助と申す者同道いたしてござりまする。

越前　して〳〵、證據になるべき品、探索いたし參りしか。

治右　則ち證據は法澤が、死したる體にて僞りし、血に染む笈摺鼠布子、

三五　蜘蛛の巣絞りの襦袢まで、持參いたしてござりまする。（ト是れを開き越前守嬉しき思入あつて）

越前　おゝ、よくぞ探索いたし參つた、遠路の所大儀々々。（ト是れにて治右衞門、三五郎心弛み、又うつとりとなるゆゑ、）こりや大助、奧も共々手當いたせ。

小澤 大助　はあゝゝゝ。

ト大助は治右衞門、小澤は三五郎、双方より介抱する事よろしくあつて、此のうち始終前の合方。

忠右　父上様、もう切腹には及びませぬか。

越前　おゝ平石、吉田兩人が、働きにより死ぬには及ばぬ。

小澤　これといふのも我君が、水垢離取つて御祈願ありし、

大助　豐川稻荷の御加護なるか。

越前　切腹をする期に至り、危ふき命助かりしは、紀州調べの屆きしゆゑ、實に兩人は我家の、守り神とも思ふぞよ。

〽兩手を突いて忠相が、忠義を謝する仁愛の道は正しき名奉行、譽れは世々に殘りける。

ト越前守二重より下り、治右衞門、三五郎に手を突き禮をいふ、兩人其手を上げ、辭儀をなして、

治右　こは勿體なき御主君の、

三五　冥加に餘る其のお詞、

大助　是れといふのも、御家名の、

小澤　絕える所を兩人が、

忠右　探索ゆゑに父上の、

越前　萬死をのがれ一生を、

小澤　計らず、
越前　得しは、
治右三五　御高運。（ト此時下手より三階の諸士、麻上下にて大勢出て、よろしく下に居て、）
諸士　一同恐悦。
皆々　申し上げまする。（ト辭儀をする。）
越前　おゝ。（ト越前守すつくと立つた木の頭）悦べ〱。
トにつたり笑ふ皆々はあゝゝと平伏する。此の模様勇ましく太撥の時の太鼓はげしく打おろし、
ひやうし　幕

大詰

八ッ山旅舘の場
大岡屋敷の場

〔役名〕――大岡越前守、德川天一坊實は法澤、山内伊賀亮、吉田三五郎、下男久助、藤井左京、赤川大膳、常樂院天忠、諸士五人等〔〕

（天一坊旅館の場）‖本舞臺眞中三間の間上段の蹴込み、正面葵紋散らしの金襖、前面一面に緣附の簾をおろし、左右に同じく金襖、日覆より同じく金地、紋散らし大欄間をおろし、花道揚幕の所杉戸の出はひり、舞臺花道とも一面に高麗緣の薄緣を敷詰め、總て八ツ山天一坊旅館の體、爰に○△□◎の諸士四人着流し袴にて居並び、此の見得管絃にて幕明く。

○ 何と何れも、天一坊樣江戸表へ、御乘込みに相成りしに、奉行の大岡越前守、君の御身許調べるなど〻將軍家へ言上なし、御對顏の儀も思はぬ延引。

□ 左樣でござる、それ故にこそ此處へ俄に御殿を造營なし、上樣の御旅館を設け、山内氏先頃より越前守と對決なし、數度の議論に及ばれしが、

△ 當時天下の名奉行と、譽れを取りし越前も、伊賀亮殿の御辯才には及ばぬかして言下に伏せられ、

◎ 瘦我慢にて病氣と言ひ立て、昨日までの日延の願ひ、それ故にこそ上樣にも將軍家との御對顏是れまで延引いたせしが、

○ 最早日延の日限切れ、全快屆けをいたせし上、天一坊樣を今日ツた、我が屋敷へ招待なすは、

□ 察する所上樣の、お袖に縋り是れまでの、粗忽を詫びる歎願ならん。

△ 何は格別將軍家と、上樣と御親子御對顏の相濟む上は、日あらずして西の丸へお乘込み、

◎　さすれば斯くいふわれ〳〵も、立身出世は瞬くうち、
○　こりや一廉の御取立てが、
□　なくて叶はぬ儀でござれば、
◎　われ〳〵共も大慶、
○　悦ばしい儀で、
皆々　ござるわえ。（トやはり音樂にて上手の襖を明け、赤川大膳上下大小にて出來る、四人是れを見て）
○　はい、これは〳〵大膳樣、最早お支度整ひしか。
□　委細の樣子はわれ〳〵も、承はつてござりまするが、
△　今日上の御警衛、
◎　御苦勞千萬に、
四人　存じ奉つる。
大膳　委細の樣子御存じとあれば、改め申すに及ばねど、伊賀亮殿始めとして各々方に至るまで、永の間の心勞も一時に晴るゝ吉瑞なるわ。最早今日越前守の屋敷へ赴き、將軍家と御對顏の日を選び天下の御代を知ろし召さるゝ控となり、西丸へお直り遊ばす上からは、各々方も出世の幸先、後

刻上樣御歸館あつて、吉事の御沙汰を相待たれよ。
○ 有難き其のお詞、
□ 承はるも身の面目、
△ われ〳〵共に至るまで、
◎ 恐悅至極に、
四人 存じ奉つる。（ト四人會釋なし、大膳思入あつて）
大膳 伊賀亮殿には昨夜より御不快の由、上樣にも殊の外御心配、申せば吉事の御成りなるに御不快とあれば是非なけれど、假令御供召されずとも、御見送りいたせよとの上意を手前方より伊賀殿へ申し傳へておくりやれ。
四人 畏つてござりまする。（ト立ちかゝる、此時奧にて）
伊賀 あいや知らせに及ばぬ、伊賀亮、只今出仕仕つる。（トやはり音樂にて正面より伊賀亮上下大小にて、出來り、上手に住ふ、赤川大膳下手へ來る、）これは〳〵大膳どの、此程よりの御勤勞、伊賀亮推察仕つる。
大膳 忝けなき其お詞、近頃以て祝着に存ずる。承はれば御不快の由、して御容體は如何でござるな。

伊賀　昨夜より持病に犯され、甚だ心を苦しめ居りまする。

大膳　さては御持病の、御癪氣でござるか。

伊賀　如何にも病に犯され心に任せず、それ故今日の御供、御免を願つてござりまする。

大膳　御病氣とござれば餘儀なけれど、貴殿が御出仕なき時は、拙者も何とやら便りない儀でござる。

伊賀　あいや、必ずお氣遣ひ御無用、最早調べも再度まで相濟みし上からは、假令越前役宅へ上樣御成り遊ばすとも、別段調べも是れあるまじ。

大膳　愚存ながら某が、推察いたすは、今日ツた越前守が上樣を我が役宅へ御招き申すは、將軍家へ御執成し歎願いたす彼れが心底、疑惑を生じ拒みし儀も、貴殿が詳かなる答により、一時に晴れし上からは、やがて吉左右御知らせ申すでござらう。（ト伊賀亮思入あつて、）

伊賀　その儀に附いて、ちと貴殿へ密々に申し入れ度い儀がござる。いやさ何れもには、詰所へ參られ御供の用意召されてよからう。

四人　委細畏まつてござりまする。（ト諸士四人下手へはひる。大膳摺り寄つて、）

大膳　して密々の、御談じとは。

伊賀　今日越前方へ御成りの儀、心許なく存ずるゆゑ。

大膳　何とお言やる。（ト合方になり）

伊賀　先頃某越前と議論の折、申し詰めしを恥辱と心得、彼れが切腹いたすならば、最早憚る所なく、御親子御對顏に疑ひなしと存ずれども、左はなく病氣と披露なし恥辱を忍び昨日まで、期を延ばせしは心得ず、察する所日延のうち、紀州表へ間者を遣はし、君の御身許を探索なし、慥に證據を得たるゆゑ、全快なせしと覺えたり。

大膳　いや／＼それは呑込めぬ、假令翼があるとても、日數も僅か十日のうち紀州の調べ屆くべきや、殊に星霜二十年隔てし昔の事なれば、一朝一夕に調べる事の相成らうや、日頃の智慮に似合ぬ御詞、こりや下世話に申す、取越し苦勞と申すもの。

伊賀　すりや貴殿には心附れずや、昨日大岡越前守全快屆けをいたせし上、我が役宅へ我君を御招待いたすと、使者の趣き承はつて心得ずと、夜前天文を窺はんと、深更に及び海邊を望みし所、袖ケ浦より鮫洲の沖、或ひは洲崎佃の邊まで、漁る船の篝と見せ、漁船數多遠卷なすは、正しく越前守が手當の固めと見拔きしゆゑ、扨こそ露顯と察せしなり。（ト大膳仰天せし思入。）

大膳　大地を見拔くそこ許が推察なせしとあるからは、扨は露顯に及びしか、然らば是れより御不例と仰せ出され、御成りを止めて間者を入れ實否をたゞし、いよ／＼以て紀州の調べ行き屆き、事の

露顯と極らば、固めを破り夜に紛れ、何れへなりとも落ち延びん。

伊賀　いや〳〵それは卑怯の至り、假令御不例と申し出し、出御あらねば氣取りしかと、越前方より人數を以て徒黨の者を召捕らんと是れへ討手の來るは必定、よしまた此儘逃ぐるとも天網如何で免れんや、名に負ふ天下の勢ひにて、詮議されゝば籠中の鳥、何として免るゝ道のあるべきや。

大膳　然らば是れより越前方へ、御供なして虛實を探り、萬一運强くして將軍職の控へとなるか、又は紀州の調べが屆き露顯の沙汰に及びしか、二ツ一ツは天に任せ、假令繩目の恥辱を受け果てては梟首にかゝるとも、大阪城代始めとして、京都所司代天下の老中、欺き果せし上からは、野末に屍を曝すとも、今更悔む所なし。

伊賀　はて天晴なる御決心、然らば隨分御油斷なく、

大膳　如何にもこれより御供なし、

伊賀　事の露顯に及びなば、

大膳　此世の思ひ出越前が、

伊賀　屋敷にて斬死に召さるか。

大膳　血潮の雨を降らしてくれん。（トきつとなる、伊賀亮制して、）

伊賀　あゝこれ、何事も穩密々々。

トよろしく思入、ばた〳〵になり、花道より侍一人出來り、花道下に居て、

侍　はゝ、申し上げます。

大膳　何事ぢや。

侍　只今大岡越前守殿より、上樣のお迎ひとして、池田大助と申す者、御門前まで參つてございます
る。

大膳　あゝ左樣か、只今上樣成らせらるれば、御供揃ひの用意いたせ。

侍　はツ。（ト引返して花道へはひる。大膳思入あつて、）

大膳　我君始めわれ〳〵も未だ運命盡きずして歸館にならば貴殿にも、亦御對面もいたすであらうが、最早是れが今生の御名殘にならうも知れず、露顯に及ばゞ冥土に於て、御面會のいたすでござら
う。

伊賀　所勞に犯され昨夜より、不快にあらずば我君の、御供なして潔く最期を共にいたさんが、それも心に任せぬゆゑ、御沙汰を待つて切腹なし、あの世のお供仕らん。

大膳　御尤もなる其の仰せ、拙者は是れより御前へ出で、最早出御をおすゝめ申さん。

伊賀　拙者も只今推參なし、御見送りをいたすでござらう。
大膳　然らば御先へ、伺候仕つる。
伊賀　さゝ、お越しなされい。（ト大膳立上り、思入あつて）
大膳　伊賀亮殿、これが此世の。
伊賀　あいや、やがて吉左右相待ち申す。（ト音樂にて、大膳上手へはひる。伊賀亮見送り思入あつて）氏より育ちと世の諺、下賤に生れし君たりしも、我附人となりしより、朝暮丹精いたせしゆゑ、此伊賀亮を賴みとなし、お慕ひあれば我も亦、惡事と知つて今日まで敬ひ仕へし主從も、はや今生のお別れなれば、餘所ながらの御暇乞、御前へ伺候いたすであらう。（ト刀をさげ、立上つて、ほろりと愁ひの思入あつて）思へば愚なるやうなれど、快からぬ。（ト刀を突くを道具替りの知らせ）事共ぢやなあ。

ト愁ひの思入、早舞にて此道具廻る。

（大岡役宅奥殿の場）――本舞臺四間通しの中足の二重、本椽附き、眞中に白洲階子、正面白地へ八ツ七寶の紋散らしの襖、上手に一間の床の間、左右綱代塀、よき所に梅の立木、日覆より同じく釣

枝、總て大岡役宅奥殿の體。二重眞中に以前の天一坊、高床几に掛り、下手に以前の赤川大膳、墨附の箱を持ち、下手に藤井左京、袋入りの短刀を持ちて附添ひ、此の下手に常樂院天忠控へ、近習二人袴なりにて茶、煙草盆を出して居る、此の見得時計の音にて道具留る。と近習二人下手へ下り平伏する。

大膳　御召によりて天一樣、當お屋敷へ成らせられしに、
左京　出迎ひさても家來に任せ、未だ主人の越前殿、
天忠　御挨拶にも出られぬは、近頃以て不敬至極、
大膳　御逢ひがなくば上樣には、此の儘還御にならせらるゝと、
左京　當家の主人へ、
三人　申し傳へよ。
近習二人　委細承知仕る。(ト立上る。此時奥にて)
越前　あいや、參るに及ばぬ、只今それへ。
大膳　すりや、御挨拶を、
三人　いたすとな。

ト是れより本調子の合方になり、敵役三人天一坊と顔見合せ、油斷なせぬ思入よろしく、是れにて近習兩人下手へ行き、襖を左右へ明ける。越前守上下なりにて出て、二重の下へよろしく住ふ。

越前　將軍家の命により、越前守が役宅へ、御招待申し上げしに、早速に成らせられ、恐悦至極に存じ奉りまする、御成りの節取敢ず御出迎ひいたすべきを、役儀の繁多に遲刻の段御許容願ひ奉る。

トこれにて大膳天一坊に向ひ、

大膳　はツ、上樣には越前へ、御詞下し置かれませう。(ト天一坊思入あつて、)

天一　いやとよ越前、承はれば其方には先頃より不快にて、引籠り居るとのこと、予も殊の外心痛せしが、早速の全快滿足なるぞ。

越前　有難き御懇の御意、恐入り奉る。

大膳　すりや今日ツた上樣を、當屋敷へ招かれしは、

左京　御身許の儀をお尋ねの、調べにては、

三人　ござらぬよな。

越前　何しに左樣の事どもを、最早御尋ね申さんや、其儀に附いては先達て、山内伊賀亮殿詳かなる

答に、扨は正しく將軍家の御落胤と知つたる越前、台命とは申しながら、正しき上樣を疑惑いたして、再度まで吟味なしたる不敬の段々、只管に御宥免を偏に願ひ奉る。

ト平伏する、是れにて皆々顔見合せ、案に相違せし思入よろしくあつて、

大膳　扨は千悔なせしゆゑ、不敬を詫びて上樣へ、御宥免の儀を願はるゝとな。

左京　して又何等の仔細にて、今日上樣を御招きありしぞ。

越前　はツ、御招待を申し上げしは、御對顔を取計らはん爲め。

三人　何ごとお言やる。（ト合方きつぱりとなり、）

越前　此程より斯くいふ越前、恐れ多くも台命を蒙り、再度の吟味いたせし所、伊賀亮殿の御返答にて、事明らか、其上に御證據の品拜見なし右の次第を殘りなく將軍家へ言上せしに、殊の外なる御悦び、早速御親子御對顔の儀仰せ出され候へども、越前所勞に惱まされ、數日延引仕つれど最早全快いたせし上は、直樣昨日將軍家へ御對顔の儀を伺ひしに、明日最上吉辰ゆゑ親子の對面致さんとの内命が下りしゆゑ、恐れ多くも役宅へ入御を願ひ斯くの仕合せ、御沙汰次第で此の越前御案内を申し上げたく、左すれば不敬の罪科ものがれ、役儀の規模にも相成る面目、此儀偏に御許容の程願ひ上げ奉りまする。（ト平伏する、敵役皆々顔見合せ、につたり思入あつて、）

天一　扨はそれゆゑ招きしとな、如何にも、案内許してくれるぞ。
越前　はツ、早速の御聞濟み、有難く存じ奉りまする。
大膳　これと申すも越前殿、此程よりの御心勞。
左京　君を守護なすわれ〳〵も、
天忠　一同祝着、
三人　仕つる。（ト越前守思入あって、）
越前　それに附き將軍家の御諚によつて、御證據の御墨附、御短刀、御覽に入れ度く候へば、何卒お渡し下されい。
天一　なに、二品を渡せとな。
越前　はツ、流石は御親子御對顏を待ち詫びたまふ將軍家、お覺えのある品々ゆゑ、早速取寄せ見せいとの、御内命にござりまする。
大膳　あいや、其儀は相成りますまい、明日上樣御入城にて、御對顏ありし上、
左京　將軍家へ差上げても、遲かるまじき御二品、
天忠　其儀ばかりは相成りませぬ。

越前　すりや、各々方には越前を、疑ひたまうて御二品、御渡しの儀は相成りませぬか。
大膳　あいや、何故御身を、
三人　疑ひませうぞ。
越前　然らば、お渡し下さるよな。
三人　さあ、其儀は。
越前　但し手前に御疑念あつてか。
三人　全く以て、
越前　お渡しあるか。
三人　さあ、それは、
越前　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
越前　御返答が承はりたい。（トきつといふ。此うち天一坊思入あつて）
天一　其の二品渡してよからう。
大膳　でも、大切なる、

三人　御證據を。

天一　疑惑を生じ越前が、予を疑ひし折ならば、渡されぬといふ儀もあらんが、此期に及び何厭はん、父上の御諚とあれば、證據の二品渡してよからう。（ト是れにて大膳左京是非なき思入にて、）

大膳　然らばお墨附、お短刀諸共に、それ。（ト左京へ思入、左京二品を持ち前へ出で、）

左京　いざ、改めて受取られよ。（ト二品を出す。）

越前　はツ、慥に預り奉る。（ト越前守取り、二品を改めて見ることよろしくあつて、元の如くに納め、）如何にも、先日拜見いたせし二品に相違なし、此の越前より將軍家へ、早速御覽に入れまをさん。（ト二品を押し戴き、懷中なし、）それに附き將軍家より、天一坊樣へ御對顏の呉服を下しおかれまするぞ。

天一　なに、父上より天一へ。

大膳　呉服を下し、

三人　たまはるとな。

越前　只今取寄せ、御覽に入れん。（ト下手へ向ひ、）やあ吉田三五郎、申し附けたる白臺これへ。
ト下手にて、

三五　はあ。（ト辭して吉田三五郎大小袴にて股立を取り、白木の臺と紫の袱紗を掛けしを持ち出來り、天一坊の前へ直し、）はッ、持參いたしましてござりまする。

ト下手へ控へる、天一坊白臺を見て、

天一　すりや、これなるが、父上の。

越前　御心籠めし下されもの、疾く〳〵御覽遊ばしませう。

ト是れにて天一坊大膳に目配せする、大膳心得て件の白臺へ掛けし袱紗を取りのける、内に血に染みたる笈摺と蜘蛛の巣絞りの繻絆に布子あること、天一坊思はず見てびつくりなし、

天一　やゝ、是れは。

越前　血潮に染みし此の笈摺の、文字はにじめどあり〳〵と、其名に顯はす薄墨は、鼠布子の綻びに、八重に縫目の絲筋も、蜘蛛の巣絞りの古繻袢、何と覺えがござりませうがな。

トきつといふ、天一坊ぎよつとせし思入あつて、態と氣を替へ、

天一　穢らはしき其の品々、この天一坊は覺えない。

越前　すりや、お覺えはござらぬとな。（ト敵役三人きつとなり、）

天一　見苦しき品、取り捨てい。

大膳　はツ。（ト件の品へ手を掛けるゆゑ、三五郎きつとなつて、）

三五　やあ、將軍家よりの下され物、捨てよなどゝは無禮の天一。いで、其儀ならば某が。

ト立ちかゝるを、

越前　吉田控へい。

三五　それぢやと申して。

越前　はてさて、控へ居らう。（トきつといふ、是れにて三五郎控へる。越前守思入あつて、）すりや、此品を天一樣には、あの御存じはござらぬとな。

天一　はて、くどい事を。（トきつといふ。）

越前　いや、お覺えある筈なれど、御存じござらずば、證人を呼び出しませうや。

天一　何と。（ト越前守下手へ向ひ、）

越前　やあ〳〵、久助參れ。（ト下手にて、）

久助　はあゝ。（ト前幕の久助下男にて出來り、天一を見て、）これ、法澤どの、いや、久し振りで逢ひましたなう。（トつか〳〵と、側へ寄らうとするゆゑ、）

天一　やあ、法澤とは誰が事なるぞ。

大膳　君へ對して、無禮な奴。
左京　きり〳〵此の場を、
三人　下り居らうぞ。（トきつといふ、是れにて久助よき所に居て、）
久助　えゝ、そんな脅しできめつけても、めつたに下つていゝものか。これ法澤どの、こぼけさつしやるな、こなた故には此久助、えらい酷い目に逢ひましたぞや。
大膳　やあ、又しても君への雜言。
左京　匹夫下郎の分際で、
天忠　無禮を申さば、
三人　許さぬぞ。
久助　いや、お前方は知るまいが、其やうに目をむき出して此の久助を叱らつしやるが、今でこそ、それ、其やうに立派なりで取りすまし、えらがつて居るけれど、然も紀州の平野村で感應院といふ修驗者の以前は弟子の法澤どの、其の時分には久助も、一ツ鍋の物を喰ひ合つた、朋輩同士でござるわいなう。

ト是れにて敵役皆々南無三寶といふ思入、三五郎前へ出で、

三五　これ〳〵久助、そちが迷惑いたした次第、それにて逐一申し上げよ。

久助　いやもう、御奉行様の前へ出て、色事の話しをするも、こツぱづかしい事ではあるが、言はねば理窟が分りませぬ、まァ一通り聞いてくれさつしやい。（ト是れより在郷唄めいた合方になり、）譯といふのは外でもない、今言うたわしが主人の、感應院といふ修驗者が、女子好きであらつしやつて、下女にしておくは惜しい位のお霜といふ女を召使ひに置かつしやつたが、おつと、爰では申し上げにくいが、不思議な事に此の久助と言交したのでござりまするが、段々と考へて見まする と、主人の目を掠めては、どうも、こりやよくねえ事と、其女子と相談しますと、これ久助どん、わしと一緒に逃げてくれろと言ひますから、どういふ譯だと様子を聞けば、御主人の感應院さまが、妾にすると言はつしやるゆゑ、お前が連れて逃げてくれねば、死んでしまふと泣き附かれ、どうなるものと女子を連れ、駈落をした其後で、あれに居ります法澤どのが、感應院さまを毒害して、此久助が戀の遺恨で殺したやうに言ひ觸らし、まだ其上に御師匠様の敵討に出たいなどゝ、誠しやかに人を欺き、旅へ出がけに紀州の國の加田の浦の濱邊にて、犬を殺して其血をば、衣類へ附けて其場へ脱ぎ捨て、をかしな素振で立退くとき、藪の小蔭で久助がお霜と二人で、見て居たれど、こちらも暗き身の上故、東雲近き明方の鐘に心が急かれるゆゑ、後をも見ずして立退き

ましたが、其折わしの國から來た、手紙をいつか法澤どのが持つて居たのを落しておき、此の久助が返り討に逢はしたやうに見せたのは、年に似合ぬ惡事の功者、無實の科で久助が、迷惑したのも長の年月、然しお江戸の名奉行と聞えを取つた大岡樣の、調べを受けてはもう叶はぬ、お三婆アを締殺し、證據の二品盗み取り、惡事の種にした事を、白狀してしまはつしやれ。

天一　下ざまの其方、この天一は知らぬわい。

久助　えゝまだ〳〵そんなにしらばツくれ、こなたはとぼけさつしやるが、これ、法澤どの、覺えがないと言はつしやるなら、左りの肩に天の字の、形に似たる證據の痣。

天一　や。(トぎつくり思入。)

久助　いつぞやわしと平野村の、感應院に居た時分、風呂場で背中を流し合ひ此久助が知つて居る、誠そなたが佐渡の國、尾島村にて育つたる將軍樣の御胤なら、此久助が知らぬ筈。さあ〳〵、出して見さつしやれ。(ト詰め寄る。)

天一　むゝ。(ト詰る。)

久助　見せぬはやつぱり法澤どのか、但しは痣を見せさつしやるか。さあ〳〵〳〵。消えぬ惡事も見通しの天の字に似たこなたの痣、あるかないかは善惡の、邪正を糺す大岡樣、何と動きが取れまい

がな。

ト きつといふ。是れにて天一むゝと詰る。

越前　さあ、斯かる證人出る上は、最早遁れぬ賣主の法澤。

三五　その身の素性有體に、御前に於て白状いたせ。

天一　はて、淺はかなる其の調べ、斯かる狂氣の下人を語らひ、天一坊を法澤などゝは、此の身に取つて覺えない。

ト 越前守きつとなり。

越前　やあ、天下を僞る憎き法澤、其身の罪は久助が一々問ふに言譯あるまい、まつた赤川大膳は、水府の不興の浪人ながら、伊豫の國藤ヶ岡に於て強盜の曲者、法澤へ荷擔の張本藤井左京が舊惡は、義理ある伯父伯母を殺害なし、これも同じく山寨に立籠りて盜賊の世渡り、就中憎きは常樂院天忠、佐州相川郡尾島村淨覺院日敎といへる現在の師匠を害し、弟子たる天一を締殺し、法澤を以て天一なりと言ひ觸らし、將軍家の落胤と、愚民を欺き金銀を掠め取り、山内伊賀亮を以て企ての棟梁となすとも、法澤始め汝等が積る惡事の顚末は鏡にかけて照すが如く、明白に露顯なす上からは、恐入つて罪に伏すか、卑怯未練に陳じなば、踏附けて繩打たうや。

天一　それは。

越前　罪に伏すか。

天一　さあ、それは。

越前　但し踏附け、繩打たうや。

天一　さあ、

越前　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

越前　淳和奬學兩院の別當、源氏の長者征夷大將軍たる徳川家、いかで汝等があざとき巧みに落入るべきや、言はうやうなき大罪人、えゝ。（ト越前守天一を二重より蹴落す、敵役三人驚き飛下りる、）下り居らう。（ト是れにて天一思入あつて、上着を刎ねのけ、立上つて、）

天一　斯う何もかも調べが届き、おれが素性を知られたら、もう隱してもおツつかねえ、惡事の數も改めて、言はずと知れた身の素性、如何にも紀州平野村感應院の内に居た、法澤といふ、修驗の弟子、生れをいへば武士の種、長州毛利を退散せし、浪人原田嘉傳治が忘れ筐の小坊主だ。

ト此うち皆々肩衣を刎ねて、身支度をする、天忠は法衣を脱ぎ捨て左京の刀を借りうけ、敵役三

人きつとなつて、

大膳　もう此上は赤川が、積る惡事の古疵を、一々語るも面倒なり。

左京　藤井左京も其の如く、どうでのがれぬ此身の錆。

天忠　如何にも罪に、

三人　伏してござる。（トばた／＼になり、下手より侍出來り、）

侍　はツ、申し上げます、今朝八ツ山にて山口伊賀亮には、討手を待たず妻諸共、自害をなして相果てしと、それ故直に其場にて、平石池田の御兩所が介錯いたしてござりまする。

トこれを聞き、天一思入あつて、

天一　そんなら、最早八ツ山にて、伊賀亮には最期を遂げしか。

三人　やゝゝゝ。

越前　さあ法澤、尋常に繩目を受けるか。

三五　但し踏附け、繩打たうか。

越前　のがれぬ所と、覺悟いたせ。（トきつと言ふ、天一思入あつて、）

天一　如何にも、繩目を受けませう。

越前
三五　何と。

天一　さあ、身の大望を起さんと、お三婆アを始めとして、師匠を毒で盛り殺し、己が惡事も犬の血と諸共人に塗附けたが、流石八代將軍の目鏡によつて奉行となり、名譽の聞え大岡の、白洲で露顯に及んだら、じたばたしてももういかねえ、綾や錦でごまかした天一坊の貫祿も、高い位を蹴落され、元の杢阿彌法澤が、手出しはしねえ、御役人、さあ存分にして下せえ。

ト手を後へ廻し、ぢつと思入、越前守思入あつて、

越前　流石は法澤よい覺悟。それ、繩打て。

三五　はツ。（ト法澤に繩をかける、久助是を見て、）

久助　いや、假令如何なる惡人でも、御奉行樣には叶はぬわえ。これで此身の明りも立ち、力んで國へ歸られます。

越前　遠路の所を呼び寄せて、そちにも苦勞を掛けしゆゑ、やがて褒美を取らすであらうぞよ。

久助　そんなら、わしに、御褒美を。

越前　旅宿で御沙汰を、相待ち居らうぞ。

久助　えゝ、有難うござりまする、

大膳　斯くなる上は、一刻も、

左京　早く仕置に、

天一四人　行はれよ。（ト覺悟の思入、久助是れを見て感心の思入。）

久助　いや、生業柄とはいひながら、善惡分りし此のお調べ。

越前　此の山上へ申し上げ、法澤始め一味の者ども、殘らず死刑に行はん。

三五　左樣ござらば、

皆々　御前樣。

越前　罪人殘らず。（ト肩衣の衣紋を直すを木の頭。）引立てい。

トにつたりと思入、此模樣太撥の時の太鼓にてよろしく、

ひやうし　幕

大岡天一坊（終り）

（附錄）主なる興行年表

柳澤騷動

年時	座名	名題	柳澤	井伊	忠五郎	將軍	德兵衛	御臺	おさめ	おりう	五郎藏	權太夫	岡本局
明治八年八月	中村座	裏表柳團畫	市川團十郎	市川團十郎	市川團十郎	市川權十郎	市川權十郎	岩井半四郎	岩井半四郎	岩井半四郎	中村仲藏	中村仲藏	市川門之助
明治十四年四月	中島座	婦女大平記	關三十郎	中村壽三郎	關三十郎	勝川又吉	勝川又吉	市川壽藏	澤村巴枝	澤村巴枝	｜	｜	｜
明治十六年九月	市村座	月宴柳繪合	市川團十郎	市川團十郎	市川團十郎	片岡我童	片岡我童	助高屋高助	助高屋高助	助高屋高助	中村芝翫	中村芝翫	河原崎國太郎
明治三十二年九月	市村座	梅玉千千代松蔦	澤村訥子	片岡市藏	澤村訥子	中村種太郎	中村種太郎	市川女寅	澤村源之助	澤村源之助	片岡市藏	片岡市藏	三桝稲丸
明治三十六年九月	東京座	松訥柳樹寄一株	市川左團次	市川左團次	市川左團次	市川延升	市川延升	中村芝翫	中村芝翫	中村芝翫	市川猿之助	市川猿之助	澤村源之助

重盛諫言

年時	座名	名題	重盛	清盛	西光	宗盛
明治九年五月	中村座	牡丹平家譚	市川團十郎	中村仲藏	中村時藏	片岡我童

年時	座名	名題				
明治十三年四月	中島座	勤王孝日本外史	中村壽三郎	關三十郎	勝川又吉	勝川又吉
明治十七年十一月	新富座	紅葉時平家世盛	市川團十郎	市川左團次	市川團十郎	坂東家橘
明治二十九年四月	歌舞伎座	富貴草平家物語	市川團十郎	市川八百藏	市川團十郎	市川新藏
大正四年十二月	歌舞伎座	重盛諫言	中村歌右衛門	市川八百藏		片岡市藏

髪結新三

年時	座名	名題	新三	源七	長兵衛	おくま	忠七	勝奴	善八	おきく
明治六年五月	中村座	梅雨小袖昔八丈	尾上菊五郎	中村仲藏	中村仲藏	岩井半四郎	坂東家橘	尾上梅五郎	中村壽三郎	瀬川路之丞
明治十年八月	新富座	二度晴着昔八丈	尾上菊五郎	中村仲藏	中村仲藏	岩井半四郎	市川子團次	尾上梅五郎	大谷門藏	岩井てうじ
明治十六年九月	壽座	昔縞織本場八丈	市川九藏	中村仲藏	中村仲藏	尾上多賀之丞	市川八百藏	―	中村銀之助	中村かほ〃
明治廿六年五月	歌舞伎座	梅雨小袖昔八丈	尾上菊五郎	市川左團次	尾上松助	中村福助	尾上菊之助	尾上菊五郎	片岡市藏	尾上榮三郎
明治三十年五月	市村座	梅雨小袖昔八丈	尾上菊五郎	尾上松助	尾上松助	尾上榮三郎	尾上菊三郎	尾上梅助	尾上蟹十郎	尾上菊次
明治四十一年五月	歌舞伎座	梅雨小袖昔八丈	市村羽左衛門	市川八百藏	尾上松助	澤村訥升	尾上菊五郎	中村吉右衛門	市川猿之助	中村又五郎
明治四十四年六月	市村座	曠小袖往昔八丈	六世尾上菊五郎	尾上榮三郎	中村駒助	岩井粂三郎	守田勘彌	尾上伊三郎	坂東三津五郎	尾上菊三郎
大正三年三月	明治座	曠小袖往昔八丈	尾上菊五郎	尾上榮三郎	中村吉右衛門	尾上芙雀	守田勘彌	中村東藏	坂東三津五郎	河原崎國太郎

年時	大正四年八月	大正七年五月	大正十一年七月	大正十四年三月
座名	帝國劇場	歌舞伎座	新富座	邦樂座
名題	梅雨小袖昔八丈	梅雨小袖昔八丈	梅雨小袖昔八丈	梅雨小袖昔八丈
	尾上菊五郎	市村羽左衛門	市村羽左衛門	尾上菊五郎
	中村吉右衛門	市川八百藏	市川中車	中村吉右衛門
	尾上松助	市川段四郎	尾上松助	尾上松助
	尾上菊次郎	中村福助	中村福助	尾上榮三郎
	守田勘彌	市村龜藏	片岡我童	市川男女藏
	中村東藏	市川猿之助	片岡市藏	尾上伊三郎
	坂東彦三郎	片岡市藏	中村傳九郎	坂東彦三郎
	河原崎國太郎	坂東秀調	中村芝鶴	坂東竹三郎

天一坊

年時	明治八年一月	明治十二年十月	明治十九年一月	明治二十五年三月	明治二十五年十月	明治卅二年十一月	明治三十六年一月
座名	新富座	久松座	中島座	深野座	春木座	明治座	歌舞伎座
名題／役割	扇音々大岡政談	大岡調名高本說	大岡調紀路墨附	天一坊大岡政談	天下一大岡政談	大岡政談雪墨附	天一坊大岡政談
大岡	坂東彦三郎	助高屋高助	中村時藏	坂東家橘	中村雀右衛門	市川左團次	市川八百藏
水戸侯	中村翫雀	中村翫雀	中村壽三郎	市川九藏	中村駒之助	市川壽美藏	中村時藏
天一坊	尾上菊五郎	中村時藏	中村壽三郎	市川小團次	中村芝鶴	市川小團次	市村家橘
平石	尾上菊五郎	市川九藏	片岡我童	市川權十郎	中村駒之助	市川壽美藏	片岡市藏
吉田	市川左團次	中村時藏	滕川又吉	市川小團次	中村勘五郎	市川小團次	尾上幸藏
伊賀亮	市川左團次	市川九藏	片岡市藏	市川九藏	中村駒之助	市川權十郎	片岡市藏
久助	中村翫雀	市川姉藏	市川鬼丸	市川喜猿	市川右田作	市川米藏	尾上菊三郎
池田	中村翫雀	坂東彦十郎	中村壽三郎	中村芝翫	中村芝鶴	市川權十郎	市村家橘
小澤	嵐大三郎	尾上多賀之丞	嵐大三郎	岩井小紫	中村富十郎	市川升若	尾上榮三郎

大正六年三月	明治座	天一坊大岡政談	市川八百藏	……	片岡我童	市川小團次	中村又五郎	市川左團次	市川壽美藏	片岡我童	坂東秀調
大正七年十二月	新富座	天一坊大岡政談	中村歌右衛門	……	市村羽左衛門	市川段四郎	市川猿之助	市川左團次	片岡市藏	市村羽左衛門	中村雀右衛門
大正十三年十一月	本郷座	天一坊大岡政談	市川中車	……	市村羽左衛門	中村鶴藏	市川壽美藏	市川左團次	市川壽美藏	市村羽左衛門	市川松蔦

大正十五年二月十八日印刷
大正十五年二月廿一日發行

著作權者印

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。

『默阿彌全集第十一卷』

非賣品

補修　河竹糸女

校訂
編集者　河竹繁俊
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田利彦
東京市神田區松下町七番地

印刷者　佐藤磨
東京市神田區松下町七番地

印刷所　明治印刷株式會社
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所　春陽堂